THE CENTRAL REVIEW

昭和四年十二月一日發行（每月一回一日發行）

中央公論

十二月號

第四十四年　第十二號　第五百三號


頭痛と歯痛に
ブラミン
【主効】
頭痛、歯痛、船車の暈
不眠症、神經痛、感冒
リウマチス、慢性關節炎
本劑特有の鎮靜作用により
二・三錠にて忽ち＝快癒
價 二十錢 三十錢 五十錢 一圓 ●各藥店にあり
大阪 東京
丹平商會

十二月號特輯　私生兒

戀愛が地上のものである限り悉くダンテとベアトリチエのそれでは有り得ない。聖母マリヤの如く父無くして懷姙するの奇蹟――だが、餘りにも現實的な奇蹟は絕えない。愛する人々の爲に一本を購ひ給へ!!

婦人公論

の歎き

—豊葦原瑞穂國に生れきて
米が食へないとは噓のような話—
さて、此の生活苦を前にして如何に闘ふか？

ボーナス悲喜劇
●85圓×3……
●宵のボーナス…

年末買物心得帳……記者

大阪婦人は斯うして買ふ……記者

わが家の闘貧術
●たゞ眠る…
●玩具のない子…

一ケ年間本誌に連載して大好評を博した長篇小説三篇（林氏を除く）、實にあざやかな大團圓を告げました、味讀を乞ふ

花はくれなゐ……池谷信三郎

山の手ハウスの兄妹……水守龜之助

生み捨てられて……沖野岩三郎

木がくれの巣……小島政二郎

江戸巷塵譜……林不忘

懸賞近代美人投票の結果發表

働く婦人と寒さへの用意—移動座談會—

クリスマスのページ……十三大家

●二重生活者の觀た日本女と佛國女・キク・ヤマダ

●關屋敏子のロマンス・水上逸雄

婦人公論主催
手藝展覽會
十一月廿一日—廿五日於丸ビル

婦人野球ファン列傳……室町英二

女給を妻として……岡田三郎

定價七十錢　中央公論社發行

"BEST AND CHEAPEST"

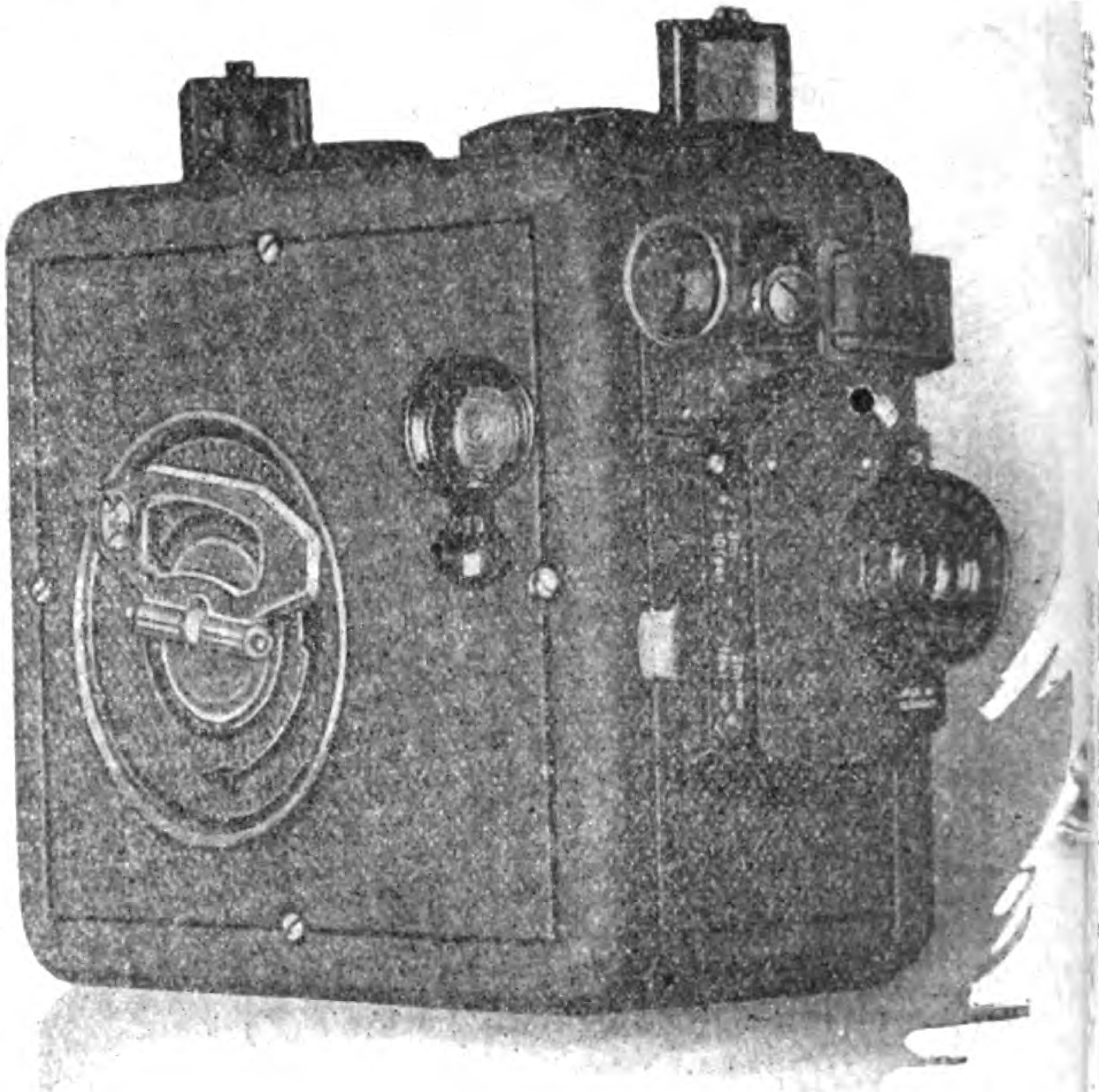
十六ミリ

活動寫眞界の寵兒

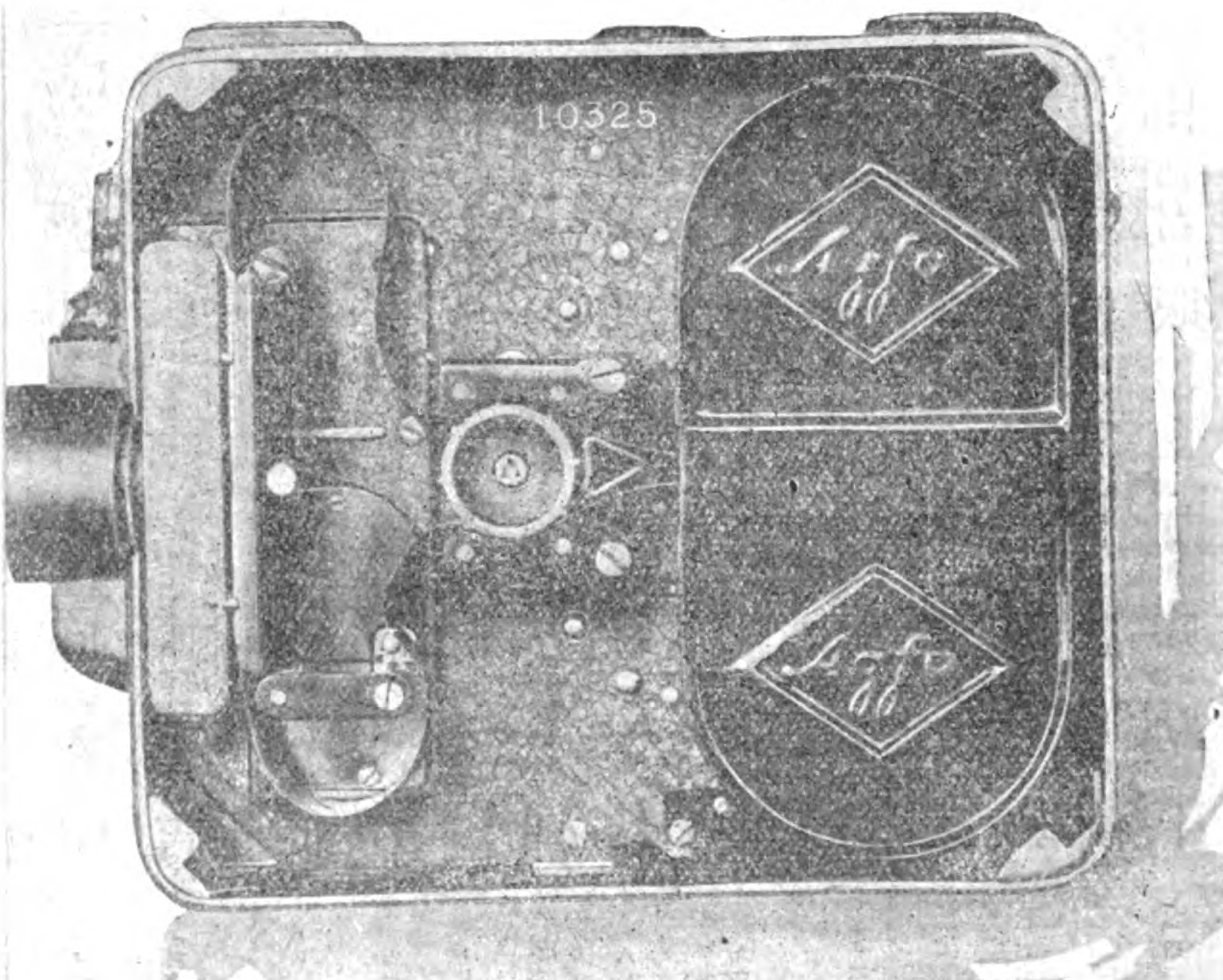
アグファ

モウベックス・カメラ

（四十尺用）



（外觀とその內部）



東京
大阪
アグファ合名會社

帝國主義下の臺灣

最新刊

帝國大學教授
矢内原忠雄著

本書は日本領有以後臺灣の資本主義化を中心としてその經濟政治教育民族運動等諸般の問題に亙り、その發展の事實關係の分析を試み、社會的意味を探り、臺灣統治の性質を明かにせんと欲したるものである。更に、臺灣を具體的の例として帝國主義的植民政策の理論並に日本の植民政策をばその活動形態に於て説明したるものである。されば本書の主題は臺灣であるけれども、同時に日本帝國主義の、更に進んでは帝國主義的植民政策一般の研究である。本書は科學的研究の一勞作にして政論にはあらざるも、もはや警察的專制統治の維持し難き所以を示し、臺灣統治の方針に關して若干の『天氣豫報』を包含するものである。（著者）

菊判三八四頁 定價二圓八十錢
クロース裝函入 送料書留二十七錢

矢内原忠雄著 **人口問題** 定價一圓六十錢 送料書留十八錢

東郷實著 **植民政策と民族心理** 定價二圓 送料書留十八錢

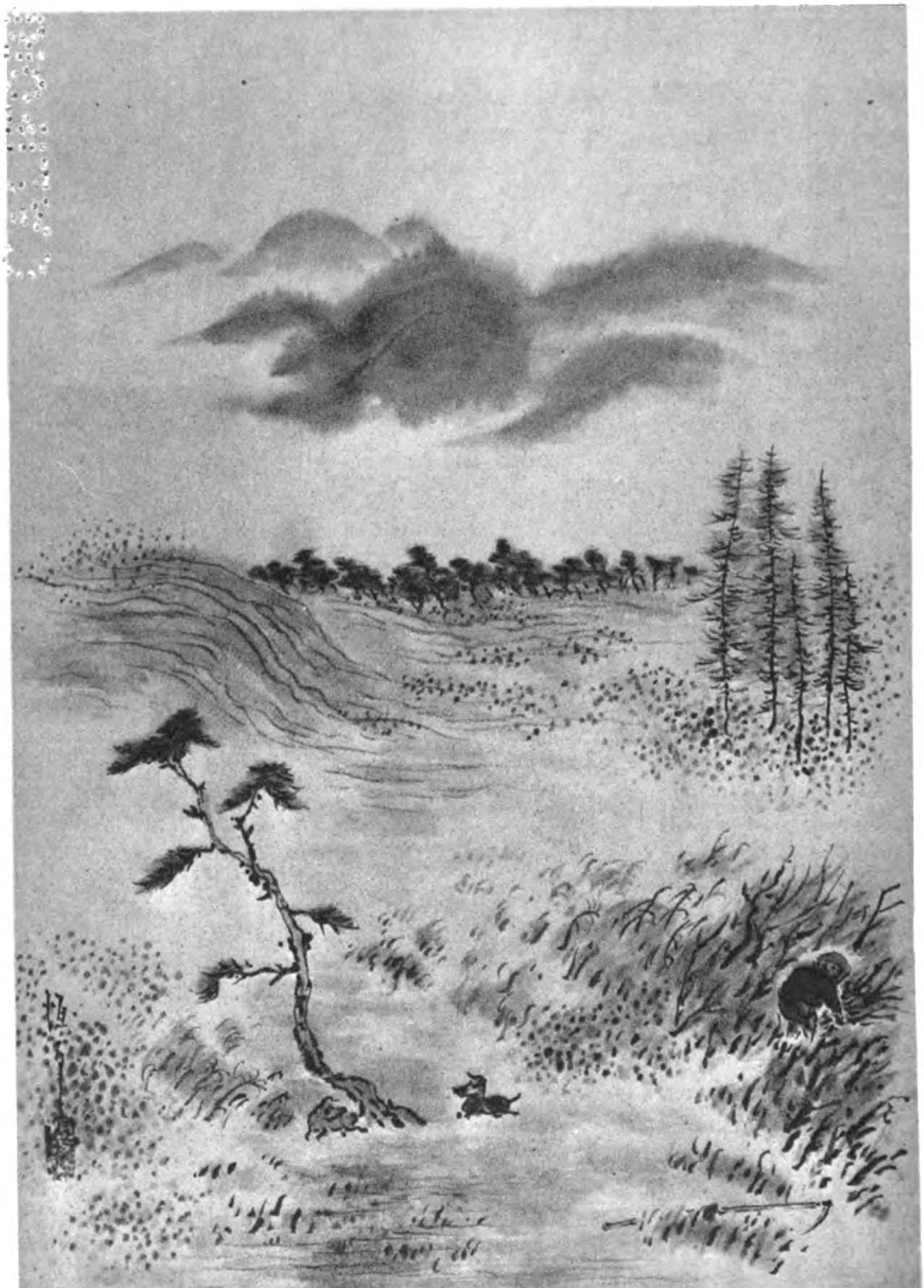
東郷實著 **植民夜話** 定價二圓三十錢 送料書留十八錢

永井亨著 **國民性及び時代思想** 定價二圓 送料書留十八錢

ボーレ著 堀經夫譯 **資本主義と社會主義** 定價一圓八十錢 送料書留十八錢

岩波書店

東京市神田區南神保町
振替東京二六二四〇番
電話九段 三一〇八・二一〇九 二〇二二・二六二六 二八一一



山麓　　森田恒友筆

中間物選集

定價各冊八十錢
郵送料八錢

仰いでみることだ。ほら！ ツエッペリン伯號が流れて行くぢやアないか。飛行機がまるで蜻蛉のやうだ。プロペラアの音に合せて、トン！ とステップを踏み給へ。そして歌ひ給へ。その歌が此の「中間物選集」だ。

近代明色

新居格著

モダン・ガール、ステツキ・ガール、圓タク・ガール――銀座を流れて行く數限りないガールスに此の名稱を奉つたのは新居氏である、といふと氏は、いや吾輩ではないのである、と抗辯してゐる。だが、その如く時代の動きに鋭敏であり且つ辛辣である氏の言葉には、また大いに傾聽すべきものがあらう。

或る斷層

さゝき・ふさ著

「いゝ氣な一面、輕佻浮薄な一面、ひねくれた一面、マリシアスな一面――さういつた嫌惡に價する面々が此處では面々相接して羞しげもなく露出されてゐる」と女史は自ら序してゐる。だが此の飾らない言葉の中にこそ新時代の教養あり氣品あり、洗錬された婦人の姿を窺ふことが出來る。

月寒の女

下村千秋著

熱烈な戀、果敢ない戀、狂暴な戀、出鱈目な戀――戀も亦時代と共に移り變つて行く。だが結局は人生は戀の巡禮であるとでもいふのだらうか、移り行く戀の種々相を描き盡して世の子女に贈らうといふ著者切々の聲である。

單一無産黨論と軍備縮少の提唱

——(巻頭言)——

新勞農黨結成の噂に刺戟せられてか、無産黨界の一角に早くも復た其の單一結成合同論が鹿爪らしく唱へられかけて居る。合同論も久しいものだ。この叫びを聞く毎に、私は軍備縮少乃至世界平和の提唱に苦笑する時と同じ樣な感を覺へさせられる、之を唱ふる者に眞摯の誠意がなく從て聲の高い割合に本當の成功の見込みのないに決まつて居るからである。

無産政黨の單一結成、諸國軍備の縮少。何處から觀ても當節の最大急務たるに疑ひない。前者は少くも我國に在ては國民全衆の例外なき熱望であり、後者に至ても亦全世界の熱し切つた輿論と見做して間違ひはない。軍縮の方は謂はば劍を拔いて討ち合つて居る者が腹の中で馬鹿な喧嘩を廢めようと云ふ樣なもので、此方が刄を藏めても對手がどう出るか分らず、一旦双方劍を棄てても今後どんな機會にどんな武器を以て襲ひ掛るか分らぬとすれば、絶對安全の平和境を急造し得ざるは致方がない。而して彼と我との間に完全な信頼を見難きは國際關係の現狀に於てまた已むを得ざる事實であらう。轉じて無産各政黨間の關係を見るに、之と同じ樣な素因が本質的に在ると云へるだらうか。所謂左右兩翼の指導者達の理論的對立の尖鋭なるより觀れば然りとも云へる樣だが、現實の客觀的情勢に立脚する國民大衆の切實なる内面の要求より云へば、全然否と云はざるを得ない。國民は全體として既成政黨の腐敗せる政治より一刻も早く自分達を救ひ出して貰ひたいのである。どんな理窟があるにしろ、蝸牛角上の内部爭鬪に精力を浪費して本舞臺の戰陣に於ける無産階級の威力を滅茶々々にされることは到底忍び得る所ではない。

要するに罪は今の無産政黨の謬れる立脚地に在る、或は此點に關する指導者達の反省の欠缺に在ると云つた方がいゝかも知れぬ。何をか謬れる立脚地と云ふ、存立の根據を無産大衆への奉仕におかず大衆の部分的獲得に由る勢力の擴張におくこと即ち是れだ。從て無産大衆への奉仕の爲めの協働關係にあるべき筈の各無産黨間の交渉は轉じて地盤爭奪の悽慘なる戰時狀態を現出する。軍縮の場合の如く彼我の間に存する嫉視猜疑が虚心相懐にして協働の問題に誠意を披かしめざる所以である。

同じく誠意を缺くにしても、軍縮の方は現狀の維持に因る目前の苦痛を輕減せんとの熱望があり又其の必要もあるので、銘々腹に一物を藏し乍らも從來屢々相集りて相當の協定を成し遂げた。近く開かるべき倫敦會議に對しても此限りの成功は期待してもよからうと思ふ。各國政府も亦現にこの限りに於て一定の成績を擧げんことに誠意を示して居るらしい。之を考へると私は今更ながら無産黨の人達の無爲無策に驚かざるを得ぬ。どうせ理想的合同結成は急には出來まい。併し彼等は背後に強力なる無産大衆の輿望を負うて今や現に共同の勁敵既成政黨と花々しく輸贏を爭ふの目前の急務に迫られて居るのではないか。其の限りの共同戰線を張る位の協働は、多少の忍容と多少の雅懐とを吝まぬ限り出來そうなものではないか。總選擧も目前に迫つて居る、この選擧に對してすら軍縮會議が暫定的に到達した程度の境地にも達し得ぬとしたら、國民大衆は益々政治勢力としての無産黨の前途を悲觀するに至るだらう。

無産黨の一つ々々に付ては其活動に大に敬服する點もある、併し全無産黨の統一ある活動としては今日の政界に於て殆んど言ふに足るものはない。同情がないから斯んな事を云ふのではない、眞に彼等の眞摯なる活動を恃み彼等に由る我が政界の根本的廓清を冀ふ者だけに私は彼等の無眞劍に憤慨せざるを得ないのである。

中央公論



第四十四年第十二號
十二月號
五百〇三號

マルクスの價値論に於ける平均觀察と限界原理との矛盾

二木保幾

マルクスが「資本論」第一卷の劈頭に於て說いた價値論は平均觀察を基礎としてゐる。彼に據れば、商品は必ず財或は使用價値でなければならないけれども、其は同時に價値を或は交換價値を有するから、商品の分析に於ては後者即ち商品價値が重要な問題となる。此の點は確かに彼れの言ふ通りである。然らば彼は商品の價値を如何に說明したか。彼れの此

の説明は今では殆ど周知の事に屬するかも知れないが、議論を進めて行く必要上次に其の要點だけを述べよう。

商品の價値の最も簡單な表現狀態は、xA商品＝yB商品 なる方程式で示される。此の方程式ではＡＢは夫れぐ異なる使用價値或は財を示し、x yはＡＢなる二種類の財の各々の數量を示す。ＡＢは質の相違を、而してx yは量を示し、此の質の相違卽ち使用價値の相違こそは實に交換を成立せしめる動機である。等量のＡとＡ、或はＢとＢとの交換は無意義だからである。斯くの如くマルクスが商品の一要素としてゐる使用價値は客觀的な意味、アダム・スミスの其れと大體同樣の意味に於ける其れであるから、限界效用學派の説く效用遞減の法則に於て見るやうな限界原理はマルクスが此の場合に全く顧みなかつた所である。尙彼によれば前記の方程式に於けるx對yといふやうな量的割合、卽ち交換價値を説明するには、前記の方程式を其の數量的一面（卽ちxとy）とは全然無關係に考察して、Ａ商品＝Ｂ商品 の關係、換言すれば、ＡＢ兩商品に共通の性質を明かにしなければならぬ。何となれば凡そ相異なる事物は共通の單位に還元されて後初めて量的に比較計量され得るものだからである。斯くしてマルクスは此の共通性卽ち『商品の交換價値の内に潛在する價値を探求する』（「資本論」――エンゲルス版――第一卷一四頁）。

二つの異なれる品物に等量の共通なものは此の二つ（ＡＢ）の孰れとも異なる第三者でなければならぬ。『商品は使用價値としては種々異なれる性質のものである、交換價値としては商品は單に分量を異にし得るのみ、從つて使用價値の片鱗だも包含しない』（同書四頁）。そこで商品體から使用價値を抽象し去れば、凡べての商品體には唯だ人間の勞働の生産物と云ふ一性質が殘るだけである。然かも斯くの如く使用價値を抽象し去ると同時に、此の生産物を使用價値たらしめる爲の凡べての具體的な勞働或は勞働形態も亦抽象し去られて、結局『同樣なる人間勞働、抽象的な人間勞働』『無差別なる人間勞働の單なる凝結、卽ち人間の勞働力の、其の行使形態を顧みざる、單なる行使の凝結と云ふ幻影の如き對象性の外には勞働生産物に何物も殘留しない。』『此の共通な社會的な實體の結晶』として勞働の生産物は價値である（同書四頁）。然

し價値と價値を造るものとは異なる。『人間の勞働或は流動的狀態に於ける人間の勞働力』は價値を造るけれども、其れ自身が直に價値ではない、價値は抽象的な人間勞働の凝で結ある（同書一八頁）。

次に斯くの如き價値の量の大小は勞働時間に依つて計量される。斯くして計量される勞働は個々の具體的勞働ではなく、抽象的な人間勞働の凝結であるから、個々の具體的な勞働者が怠け者とか未熟者とかであればある程、彼れの生產物は益々大なる價値を有するに至りはしないかと云ふ樣な疑問は起り得ない。商品世界の價値を造る勞働力の總體即ち社會の全勞働力が一體の人間勞働力として觀られる。從つて個々の商品の價値を造る個々の勞働力は社會的平均勞働力である。斯くして商品の生產に必要な勞働とは社會的に平均的に必要なる勞働であり、其の量は社會的に平均的に必要なる勞働時間に依存する。『從つて使用價値（二木註、商品）の價値量を決定するものは社會的に必要なる勞働の量、或は其の使用價値の生產に社會的に必要なる勞働時間のみである』（同書六頁）。而して『社會的に必要なる勞働時間とは當時の、社會的に普通なる生產諸條件と社會的平均程度の勞働の熟練及び能率とを以て何等かの使用價値を生產するに必要なる勞働時間である』（五頁）。『價値としては總べての商品は一定量の固く凝結した勞働時間に過ぎない』（六頁）。

以上は價値の實體と量に關するマルクスの說明の大要に過ぎないが、之に對して私は次の如き疑問を有つ。第一にはマルクスが交換される二種類の商品は價値に於て相等しいものだと云ふことを前提し、然かも此の前提を勿論證明してゐないことに就てゞある。彼は交換される二種類の商品は『固く凝結した勞働時間』即ち價値に於て必然的に相等しいと云ふことを證明したのではなく、交換が等價物の交換である以上は、其の價値は相等しき量の『固く凝結した勞働時間』でなければならないと說いたに過ぎない。また此の等價の前提が許容されるとしても、彼れの價値論が之から來たる唯一の正しい歸結であるかは疑問である。マルクスは「資本論」の第三卷で各自が器具や原料等所謂『生產用具』を所有して其の生產物を商品として相互に交換してゐる勞働者等の社會を想定し、此の場合に等價物が交換されるけれども利潤率は問題

にならないことを述べて、而して『商品の其の價値に於ける或は其の價値に近き交換は、一定の程度の資本主義的進化を必要とする所の生產價格に於ける交換よりも遙かに幼稚な時代に於てしか行はれない』(「資本論」第三卷第一部一五四——一五六頁)と言つてゐるが、茲でも等價物の交換が單に前提されてゐるに過ぎない。剩餘價値の成立過程を說明する際に彼は『如何なる場合にも商品市場に於ては單に商品所有者と商品所有者とが對立してゐるのみである。而して之等の人々が相互に行使する力は單に彼等の有する商品の力のみである』(第一卷一二三頁)とか、または商品の流通場裡に於て『支配する所のものは自由、平等、財產及び功利(Bentham)である』(同書一三八頁)とか云ふ樣なことを假定してゐるが、之に依つて等價の前提が多少說明され得たとしても畢竟其は此の假定に終る。

第二に、價値を以て交換される二種類の商品の共通性と爲し、此の共通性を探求することに依つて價値の實體を闡明し得べしと信じたマルクスは辯證法とは全く異なる方法に立脚してゐたと言へないだらうか。交換されるＡＢ二商品に於ける共通性と、ＡＢ二商品の交換、ＣＤ二商品の交換、ＥＦ二商品の交換等々に於ける共通性とは全く相異なる。マルクスは兩者の意味に於ける共通性を探求した。辯證法は觀念的であると唯物的であるとを問はず、事象を關係に於て卽ち相對的に考察するものである。從つて價値を辯證法的に考察する場合には、價値を全體として他の事象との關係に於て觀んとするのみならず、價値其のものをも內部的に關係化し相對化して觀んとする。卽ち價値の內部的關係が適應對立或は矛盾の關係として觀察される。斯く事象を關係化することは對他的には綜合であり對自的には分析である。然るにマルクスは商品を使用價値と價値とに分析したけれども價値を分析しなかつたのである。彼は分析を行ふ代りに共通性、然かも交換されるＡＢ二商品に於ける共通性を追求して、謂はゞ一の類概念としての價値を規定した。『一定量の固く凝結した勞働時間』なるものは辯證法的な關係概念ではない。なる程其れは使用價値と一定の關係に置かれてゐるから、對他的には關係概念とも見えるが、然し對自的には關係概念ではない。「資本論」に於ては價値は商品の單なる一要素として止まらな

いで、直に價値法則に轉化して最も重大な役割を演じてゐる。辯證法の立場からすれば、其れは當然對自的にも關係化されねばならないものである。

マルクスは言ふ、『商品の其の價値に於ける交換或は賣却は合理的なもの (das Rationelle)、商品の平衡の自然的法則である。之から出發して、之との相違を說明すべきであつて、逆に此の相違から此の法則其のものを說明すべきではない』と、而して『需要と供給とが一致すれば、需要供給は作用を止める。……相反する方向にある二つの力が同樣に働けば、其れ等は相互に止揚し、外部に對しては少しも作用しない、そして此の條件の下に於て起る諸現象は此の二つの力の干涉以外のものに依つて說明されなければならぬ。需要と供給とが互に止揚すれば、此の二つのものは何事かを說明することが出來なくなる、其れ等は市場價値の上に作用しない。……資本主義的生產の現實的中心的諸法則は需要と供給との交互作用からは說明出來ない、……何となれば之等の諸法則は、需要と供給とが作用することを止め、即ち一致する時にのみ、純粹に實現されるからである』と（『資本論』第三卷第一部一六七頁、一六九頁）。彼れの價値は斯うした平衡狀態に於ける其れである。彼れの等價の前提は此の平衡狀態に於て純粹に實現されるものゝ如くであるが、然らば此の平衡狀態は如何にして成立するか。其れが需要と供給との交互作用に依ることを承認してゐる彼が、需要と供給とが完全に一致して平衡を得れば、需要供給の作用は止揚されるから此の二つのものは最早價値の上に作用しないと言つてゐるのは、辯證法では到底判らない。私は寧ろマルクスの言に反して二つの力の平均と云ふ條件の下に於て起る諸現象は此の二つの力の干涉を無視しては十分に說明され得ないと思ふ。二つの力の平均に依つて起つた現象が單なる力の平均以外の特質を有することは云ふまでもないが、然し此の特質はどこまでも此の力の平均を條件とするものであるから、此の特質に此の二つの力が全く作用してゐないとは云へない。是は價値に就ても亦同樣でなければならぬ。需要供給の平衡狀態にある價値は需要供給の關係のみでは說明され得ないが、然しまた此の關係から離れても說明され得ない。然るにマルクスは事實此

の關係から全く引き離して價値を說明せんとした。此の點は彼が經濟學を理解するに當つての出發點なりとして重要視した所の、且つ彼が始めて『批判的に證明』したと云つてゐる所の（『資本論』第一卷八頁）、勞働の二面的性質に關する彼れの說明に於て明かにせられる。

彼に據れば、『凡べての勞働は一面に於て生理的意味に於ける人間勞働力の行使であり、而して同樣なる人間勞働或は抽象的なる人間勞働と云ふ此の性質に於て凡べての勞働は商品價値を構成する。凡べての勞働は他面に於て一定の目的に從ふ特殊の形態に於ける人間勞働力の行使であり、而して具體的有用勞働（仕事）と云ふ此の性質に於て凡べての勞働は使用價値を生產する』（同書一三頁）。然し玆に謂ふ抽象的勞働と具體的有用勞働とは同一の勞働の二面に過ぎないものであつて、例へば同一の紡績職工の勞働は一面に於ては具體的な勞働として絲と云ふ使用價値を生產してゐると同時に、他面に於ては抽象的な勞働として其の絲の商品としての價値を生產してゐるのだと云ふのである。勞働の斯くの如き二面性は價値に對應するものであることは云ふまでもない。千態萬樣の具體的な有用勞働の社會的全體は社會的分業であるが、マルクスの謂ふ『社會的に必要なる勞働』は此の社會的分業を、卽ち個々の有用勞働をでなく有用勞働の社會的全體を、其の內部の具體的形態から抽象して『無差別な』ものとして得た結果に外ならない。彼に據れば如何なる有用勞働も、『人間の腦髓、筋肉、神經、手、感官等の生產的行使にして、此の意味に於て何れも人間の勞働である』（同書一〇――一一頁、三八頁）。斯かる抽象的勞働が價値を構成するものだとせられる。然し人間の腦髓、筋肉等々の生產的行使は總べての形態の有用勞働に共通したことではあるが、此の共通性には社會的性質を認めることが出來ない。其れは生理的關係であつて社會的關係ではない。其れは總べての商品に『共通な……實體の結晶』たるべき何物かを生產し得るとしても、『共通な社會的な實體の結晶たる』價値を生產することは出來ない。斯くの如きことは社會的分業から有用勞働の具體的形態を、從つて社會的分業其れ自身を抽象し去つたことの結果である。要するにマルクスが抽象し去つた方面にこそ、却つて彼れ

の探し求めたものが潜在してゐる樣に思はれる。彼も承認してゐる樣に、生産物が商品となるには社會的分業のみならず、また各々の生産者が相互に獨立して生産することをも――私有財産制度をも――必要の條件とする。然るに社會的分業は必ずしも商品交換を伴はないに反して、商品交換は必然的に社會的分業を伴ふ。そこで此の商品交換の關係――交換されるAB二商品に於ける共通性ではなく、AB二商品の交換、CD二商品の交換等々に共通の本質――其のもの、內にこそ商品の特質が潜んでゐると私は思ふ。而して此の交換の關係は一面に於て需要と供給との關係である。

マルクスに於ては價値が上述の如き性質を有する結果として、價値實體の現象形態である交換價値も亦從つて彼れ特有の意味を有することは論理上當然である。彼は xA商品＝yB商品 に於てはA商品は其の價値をB商品に於て能動的に積極的に表現し、B商品はA商品の價値を受動的に消極的に表現する用具となつてゐると云ふこと、即ち此の方程式はA商品の價値表現關係を示すと云ふことを前提として『單純な價値形態』から『貨幣形態』從つて價格形態に進む過程を說明してゐるが、彼れの價値形態論は價値の表現關係を說いたものに外ならないから、其れは普通の經濟學に於ける交換價値論とは其の課題を全く異にしてゐる。其處ではA商品の價値と云ふ抽象的なものがB商品の具體的形態（使用價値）に於て具體的に表現されると說かれる。即ち具體的な使用價値が商品として交換されると共に價値が現實的に抽象化される過程がではなく、反對に抽象的な價値が交換に際して交換價値として具體化される過程が問題とされる。之を勞働に就て言へば、『裁縫勞働と云ふ具體的勞働が、無差別な（抽象的な）人間勞働の單なる表現なるが故に、裁縫勞働は他の勞働、麻布に含まれる勞働と平等の形態を有し、而してそれ故に…直接に社會的形態に在る勞働である』と云ふのであつて、此の場合にも抽象的勞働が先行する（同書二五頁）。裁縫勞働と云ふ具體的勞働と機織勞働と云ふ他の具體的勞働とが社會的分業の關係に於て其の儘の姿で相互に直接に社會的形態に在る勞働であるから、相互に平等の形態を有し、而して無差別な人間勞働の單なる表現なるかの如くに見られるのではなく、之とは反對に、裁縫勞働が無差別な人間勞働の單なる表現

であるから、裁縫勞働は機織勞働と平等の形態を有し、而して其れ故に社會的形態に在る勞働だとせられる。

第三に、商品の價値量を決定するものは社會的に必要なる勞働の量だと云ふ點に就てゞある。私が此の一文で特に論究して見たいと思ふのは此の點を中心とする問題である。マルクスに據れば、彼れの價値形態論に於て明かであるやうに、A商品の價値は其れが『相對的價値』として等價形態たるB商品の使用價値即ち『自然形態』に於て表現されることを待たないで既に成立してゐるものであるから、價値の量は異種の商品例へばＡＢ二商品の相對的價値關係に依つて初めて決定されるものではなく、從つてまた商品の流通過程に於て成立したり決定されたりするものではなく、其れ以前に於て即ち生產過程に於て成立し決定されてゐるものである。『勞働力の價値は、他の凡べての商品の價値と同じく、勞働力が流通過程に入り來たりし以前に決定されてゐる、何となれば一定量の社會的勞働が勞働力の生產に費やされたからである。』（第一卷一三六頁）。此の點はまた實に彼れの剩餘價値論の一前提でもある。即ち勞働者の勞働力の價値は資本家が之を買ふ以前に既に決定されて居る。『勞働力の價値は、凡べての他の商品と同じく、此の特殊の商品の生產に、それ故にまた其の再生產に必要なる勞働時間に依つて決定される』（同書一三三頁）。然るに勞働力の價値即ち『勞働力の內に潛める過去の勞働と其の勞働力が爲し得る生產的勞働とは、即ち勞働力の日々の維持費と勞働力の日々の行使とは二つの全く異なれる量である。……勞働者の生活を二十四時間維持するには六勞働時間が必要だと云ふ事は、勞働者が完全に十二勞働時間を勞働することを妨げない。それ故に勞働力の價値と勞働力が勞働過程に於て構成する價値とは二つの異なれる量である』（同書一五六頁）。此の價値の差が剩餘價値を構成する。其れ自身の生產過程に於て其の價値が既に決定されてゐる勞働力が、其の價値に於て資本家に賣られても、之を買つた資本家の支配下にある商品生產過程に於て剩餘勞働を餘儀なくせられ、然かも此の勞働力の生產的勞働に依つて生產せられる商品の價値も亦其れが流通過程に入る以前即ち其れの生產過程に於て決定せられるから、其の勞働力も其の商品も共に流通過程に於ては其の價値に於て交換されるにも拘らず、即ち

等價物が交換されるにも拘らず、剩餘價値が成立すると云ふのである。

從つて價値量即ち社會的に必要なる勞働量は其れの價格としての表現以前に決定されてゐなければならないが、然し如何なる種類の商品の價値量も單獨に決定され得るものではなく、總べての種類の商品との相對的關係に於てのみ決定せられる。例へば一社會に於てA商品を生産する總べての生産者等の勞働は勞働力の價値に相等する『必要勞働』と其れを超過する『剩餘勞働』とに分れるけれども、此の總勞働は社會との關係に於ては單にA商品の生産に社會的に必要なる勞働に過ぎない。社會的分業の行はれる場合には此の事はB商品或は其の他如何なる商品にも同樣にあてはまる。『其れは特殊の物品（Artikel）の生産に——特殊の物品に對する社會の特殊の欲望の滿足に必要なる勞働である。此の分配が均衡を得て居れば、種々なる生産物は其の價値に於て（其れ以上の展開に於ては其の生産價格に於て）賣られる、然らざれば此の價値または生産價格が一般的諸法則に依り決定せられて制限を受けたものである所の價格で賣られる。實際に價値法則は、個々の商品或は物品に關してゞはなく、寧ろ分業に依つて獨立した別々の社會的な生産分野の其の時々の總生産物に對して妥當する。それ故に單に各個の商品に必要勞働だけが投ぜられると云ふのではなく、社會的總勞働時間の内の單に必要なる比例的（均衡を得るが如き、二木註）分量が種々なる分野に於て投ぜられると云ふことである。何となれば使用價値が常に條件である。然し使用價値は、個々の商品に於ては其の商品が其れ自身一の欲望を滿足させると云ふことに依存するならば、社會的な生産物の集團に於ては其の集團が各種の生産物に對する分量上一定の社會的欲望に恰當し、從つて勞働が……之等の社會的諸欲望の割合に從つて種々なる生産分野に比例的に分配されると云ふことに依存する。……社會的欲望……は此の場合に種々異なる諸生産分野に向けられる所の社會的總勞働時間の割り當て量を決定するものとして現れる。……此の割合が侵害されると商品の價値それ故にまた其れに含まれる剩餘價値は實現され得ない。』（第三卷第二部一七五——一七六頁）。

斯くの如くマルクスの價値法則は個々の商品に關してゞはなく、社會的分業に依つて獨立した別々の社會的な生產部門の、例へば紡績業ならば社會に於ける紡績業全體の、其の時々の總生產物に對して妥當するものであり、而して斯くの如く價値法則が妥當するには社會的總勞働量が社會の種々なる生產分野に亘つて社會的諸欲望の相互間の割合と均衡を得る樣に比例的に分配されることを必要とし、從つて社會的欲望が斯かる分配を決定し、若し此の分配が適當な割合と一致しない時は商品の價値從つて剩餘價値は實現され得ないのである。そこで商品の生產に社會的に必要な勞働量と云ふのは社會的總勞働時間の內で、其の特定類の商品に對する社會的欲望の他の社會的諸欲望に對する割合と均衡を保つ樣に、其の商品を生產する社會的全生產部門に割り當てられる勞働時間、即ち『必要なる比例的分量』の勞働であつて、而かも之は他面技術的には『當時の、社會的に普通なる生產諸條件と社會的平均程度の勞働の熟練及び能率とを以て何等かの使用價値を生產するに必要なる勞働時間である』（第一卷五頁）。斯かる意味に於て社會的に必要なる勞働量が商品の價値量を決定するものである以上は、現實の具體的な個々の商品の價値量は嚴密に云へば之を價値量と呼ぶことすらも不適當であるかも知れない。然しマルクスは屢々個々の商品の價値といふことを言つてゐる。然らば彼が價値抽象を行つた時に前提としたxA商品＝yB商品なる方程式に於けるA商品やB商品は如何なる意味の商品であるか。之等は夫れ〴〵の商品類の標本或は代表物としての個々の商品でなければならぬ。從つて斯かる商品は必ずしも現實には存在しない。即ち其れは商品の類概念である。斯かる商品の價値量は其れを生產するに社會的平均的に必要なる勞働量、換言すれば其の商品の社會的全集團を生產するに社會的に必要なる勞働時間を此の全集團の數で除して得た商としての勞働時間、即ち平均勞働時間に依つて決定される。それ故にまた斯かる標本的商品に關する限りは剩餘價値も、可變資本（勞働者の勞働力を買ふ爲の資本）と不變資本（總資本中の可變資本以外の部分、例へば機械、器具、原料等の所謂『生產用具』を買ふ爲の資本）との組み合せの割合、即ち資本の有機的構成も、剩餘價値率（可變資本に對する剩餘價値の割合）も利潤率（總資本に對する剩餘

價値の割合）も皆一の生産部門に於ける平均的な其れであることが、マルクスの經濟理論の樞軸でなければならぬ。斯くして彼れの價値論は社會的に必要なる勞働量に關しては社會的分業を其の一前提とする社會的全體的考察に依り、個々の商品の價値量に關しては平均考察に依つてゐる。

マルクスが斯くの如く一面に於て商品の價値量を決定する勞働量を社會的に必要なる勞働量と爲して社會的全體的考察に依つたのは彼れの方法論より來たる。彼は「經濟學批判」の序説に於て、交換價値の如き最も單純な經濟的範疇も複雜な現象を基礎とするから、『一の既に存在する具體的な生活的な全體現象の抽象的、一面的關係として以外には決して存在し得ない』、然かも理論的態度を執る限りは現實的全體は依然として思惟的頭腦の外部に其の獨立を保持してゐるから、經濟學の理論的方法に於ても社會なる主體は常に念頭になければならぬと述べてゐる（「經濟學批判」—原書—序説三六—三七頁）。此の見解は勿論正當である。然し商品の價値は社會的分業の『抽象的、一面的關係』であるとしても、マルクスの價値抽象は前に述べた如く價値の社會的性質をすらも抽象し去つたのであるから、社會的に必要なる勞働に關する社會的全體的考察すらも似而非なるものとならざるを得ない。彼が商品其のもの、内に使用價値或は財と其の歷史的社會的特殊性を示すべき他の一面との辯證法的關係を、從つて商品を生産する勞働にも此の關係に對應する二面的性質を把握せんとした其の意圖は斷じて正當であつたが、然し此の意圖は適當に實現されなかつた。

次にA商品のx量とB商品のy量とが之等を生産するに必要なる平均勞働時間に於て相等しいと云ふことも、社會的諸欲望に依る社會的總勞働時間の分配を前提として一應說明され得る樣に見えるけれども、然し其の實は證明を得てゐない。如何にして斯かる平均化が行はれるか。社會的諸欲望は單に種々なる生産部門の間に社會的に必要なる勞働量を分配することは出來ても、其れは必然的に此の社會的に必要なる勞働量の平均をも決定し得るものではない。此の平均を決定するものは競爭だとすれば、價値と生産價格との區別は曖昧なものとならざるを得ない。價値法則に於ける此の平均は單

竟一の單なる發見手段か又はマックス・ウエーバーの謂ふ觀念型の如きものとしか私には思はれない。と云ふのは彼が「價格や價格運動が價値法則に支配せられることを別とすれば、商品の價値は理論的にも亦歷史的にも生產價格に先行するものとして考察するのが其れ故に極めて適切である」と言ひ、『商品の其の價値に於ける、または其の價値に近き、交換は生產價格に於ける交換よりも遙かに幼稚な時代に於てしか行はれない』と爲してゐる所の價値は（第三卷第一部一五六頁）、理論的に先行するものとしては上述した樣に觀念的に平均化された其れであり、歷史的に先行するものとしては何等十分なる史實の證明を得てゐないからである。後に述べる如く、マルクスも亦平均化された價値が「觀念的」なものに過ぎないことを自ら認めてゐた（第三卷第一部一五二頁）。

商品の價値量を決定すべき社會的平均的に必要なる勞働量を上記の如く解釋することに誤りなしとすれば、剩餘價値は初めから一面に於ては社會に於ける剩餘價値總量を意味し、他面に於ては標本的商品の平均的剩餘價値量を意味してゐなければならぬ。其れは平均的な個々の資本家に於ては少なくとも同一生產部門即ち同一種類の生產業に關する限りは平均的剩餘價値率、平均的利潤率に於ける其れを意味する。從つて「資本論」第三卷第一部に於て說かれてゐる所の、剩餘價値の利潤への轉化、利潤の平均利潤への轉化、價値の生產價格への轉化等は孰れも皆「資本論」第一卷で說明せられた價値の現象形態への、卽ち交換價値或は價格への轉化に外ならない。而して第一卷と第三卷との間に於ける著しい相違は競爭が第三卷に於ては重大な役割を演じ、利潤平均化を生ぜしめる立役者となつてゐる點である。卽ち社會的欲望が社會的に必要なる勞働量を決定するのに對して、今や競爭が社會總資本を種々なる生產部門の間に適當に分配するから、「費用價格」に平均利潤率と『費用價格』との積を加へたもの卽ち $k+kp'$ である所の生產價格が構成される。『費用價格』とは資本家が負擔する費用であつて、商品の生產に費された總資本額卽ち不變資本と可變資本とを合したものを云ふ。平均利潤の總和は剩餘價値の總和と一致する。利潤率は總ての生產部門に亙つて資本の平均的な有機的構成の支配してゐる樣

な中位的或は平均的生産部門の利潤率の程度に平均する。『それ故に總べての異なれる生産諸部門の利潤の和は剩餘價値の和に等しく、そして社會的總生産物の生産價格の和は此の總生産物の價値の和に等しくなければならぬ。』此の平均化の傾向は『觀念的な(ideal)、即ち現實には存在しない中位』即ち平均的位置を極限として之に歸着せんとし、之を中心として落ち付かんとする。總べての資本は『競爭の壓力の下に』此の中位に向はんとする。斯くして剩餘價値の代りに平均利潤が、價値の代りに生産價格が『實現』される(第三卷第一部一五一――一五二頁)。然し剩餘價値と平均利潤、價値と生産價格とは勿論常に一致するとは限らない、寧ろ一致しないことの方が多いであらう。第三卷に於て生産價格と一致しない價値、即ち生産價格の以上或は以下である樣な個々の商品の價値は、第一卷に於ける社會的平均的に必要なる勞働量に依つて決定される價値でなければならぬ。勿論是れは矛盾を意味する關係ではない。

第三卷の生産價格が、資本の有機的構成、剩餘價値率及び其の他の諸條件にして總べて現實に於ても平均一樣でない限りは、第一卷の價値とは到底一致し得ないことは、マルクスの初めから豫期してゐたことである。斯かる場合には生産價格はA商品及びB商品の各々の生産に社會的平均的に必要なる勞働量に、換言すれば價値に夫れ〴〵一致するのではなく、其れは寧ろ交換される種々なる商品の各々の價値の平均されたものに一致する。從つて生産價格に依る交換は此の場合には等價物の交換ではあり得ない。此の點が第三卷で、資本の有機的構成を異にする五種類の生産部門に就ての假定的な例に依つて説明せられ、生産價格の成立と共に、此の五種類の生産物の内で三種類のものが夫れ〴〵二、七、一七、從つて合計二六だけ『價値以上に』賣られる時は、他の二種類のものは夫れ〴〵八、一八、從つて合計二六だけ『價値以下に』賣られるから、價値との開きは結局相殺して生産價格の總額は價値の總量と一致すると説かれてゐる(第三卷第一部一三三――一三五頁)。茲で『價値以上』或は『價値以下』と云ふ場合の其の價値は第一卷に於ける價値であり、而して其れは第三卷の前半では『市場價値』と呼ばれてゐる。從つて生産價格は市場價値を中心として其の上下に變動するものとな

る。種々なる商品が其の價値に於て交換されると云ふ『假定』(Annahme) は、其の價値が中心點 (Gravitationspunkt) であり、此の上下に其の價格が變動し且つ之に引き付けられると云ふ事を意味するに過ぎないとせられる。而して此の價値は玆では市場價値として個々の商品の個別的價値とは區別せられ、『市場價値は一面に於ては一生產部門に於て生產された商品の平均價値として、他面に於ては其の生產部門の平均的諸條件の下に於て生產せられ而して其の部門の生產物の大部分を占めるが如き商品の個所的價値として觀らるべきであらう』と述べられてゐる (同所一五七頁)。後の意味に於ける市場價値はマーシャルに於ける代表的會社の平常生產費と酷似したものであるが、然し其れは純理論的には畢竟前の意味に於ける其れに歸着する。市場價格は市場價値を、而してまた生產價格を中心として其の上下に變動するものとせられる (同所一五七——一五八頁)。

此の市場價値——或はまた『社會的價値』とも呼ばれるもの——が成立するには競爭が必要だと云ふ (同所一五九頁)。即ちA商品の市場價値或は價値がA商品の生產に必要な平均勞働量に依つて決定されるのは、A商品を生產する人々の間に競爭が行はれるからであり、『競爭が先づ一生產部門に於て成就することは……市場價値……の構成である。然し種々なる生產部門の間に於ける資本の競爭は初めて生產價格を成立させる……。生產價格の成立には、市場價値の其れよりも、資本主義的生產方法のより高き發達を必要とする』(同所同頁)。斯くして一方に於ては、若し價値と市場價値とを全く同一のものだとすれば、第一卷に於ける價値は競爭に依つて構成されるものでなければならないと同時に、他方に於ては、價値が理論的にも亦歷史的にも生產價格に先行するかの如き觀を呈する。然るに較差地代論に於て農業なる一生產部門の生產物の價値或は市場價値には同業者間の競爭に依る平均化無しとすることに依つて、若し第一卷に於ける價値が農業にも一般的に妥當すべき價値法則上の價値なりとすれば、其れは到底競爭に依つて構成され得ないものとなると同時に、斯かる意味の價値が歷史上生產價格に先行すると云ふことも亦解し難き問題とならざるを得ない。此の點を一層明か

ならしめる爲に次にマルクスの較差地代論を見よう。

彼れの地代論には次の如きことが前提される。農業も製造工業と同樣に資本主義的生産方法に支配されてゐること、卽ち資本家が地代を支拂つて地主から土地を借り、勞働者を雇つて農業を經營してゐること、從つて農業と他の生産部門との間に資本の競爭、資本の移動が十分に行はれ農業資本にも一般的利潤率が妥當してゐること是れである（第三卷第二部一五三頁、一五七頁、一六五頁）。而して此の小作資本家が此の場合に借地契約に基いて例へば一年と云ふが如き一定期間の土地の使用に對して地主に支拂ふ所の一定の貨幣額が地代と呼ばれる（同所一五七頁）。此の地代は『剩餘利潤』或は剩餘價値の轉化したものだとされる（同所一五三頁、一七四頁等々）。然し斯くの如き謂はゞ地代の現象形態よりも地代の實體とも云ふべきものを見極めることがマルクスの價値論を主題とする本文に於ては特に重要である。

マルクスは一方に於て農産物の價値或は市場價値も亦其の農産物を生産するに社會的に必要なる勞働時間に依つて決定されることを認める（同所一七五――一七六頁）。彼は尙ほ較差地代の說明に當つては前記の前提の外、更に、地代を支拂ふ生産物は『總べての他の商品と同じく、其の生産價格で賣られる』ことを前提する（同所一七九――一八〇頁）。然し農産物の市場價値或は價値は競爭に依ると否とを問はず平均價値でなければならぬ。然るにマルクスは較差地代論に於ては農産物の生産價格は地代――『絕對地代』とは異なる較差地代――を支拂はない土地の生産物の個別的價値に支配せられると說くから、農産物の生産價格は多くの場合に於て個々の農産物の個別的價値以上の價格であるのみならず、また常に市場價値、價値、社會的價値、或は平均價値以上の價格でなければならぬ。從つて此の較差地代の社會的總計額は此の生産部門に於ける剩餘價値の社會的總合量を超過する部分となり、唯だ絕對地代のみが剩餘價値の社會的總合量の中に入り來たることとなるであらう。

マルクスの較差地代論はリカードの地代論と大體に於て同一の基礎の上に立ち、然かも後者の地代論を訂正し更に發展

させたものであつて、其れは地代論としては實に精密を極めてゐるものであるが、玆では單に其れと價値論との交渉のみが問題である。マルクスに於ても、リカードに於けると同じく、最劣等の耕作地にあつては其の生産物の價格は生産價格に等しいから較差地代は生じない。其れ以上の耕作地には較差地代が生ずる（同所一九二頁）。そこで『最劣等の……耕作地の生産價格が常に統制的市場價格』卽ち『市場生産價格』或は『平均的市場價格』（二木註、之は言葉の上では明かに矛盾だが實質上も後に述べる如く矛盾に歸する）であつて、然かも此の市場生産價格に於て『商品の價値の性質』卽ち價値が個々の商品の生産に必要な勞働時間に依つてゞはなく、寧ろ社會的に必要な勞働時間に依つて決定されると云ふことが示されると云ふのである（同所一九七頁、一八〇頁）。『最劣等の……耕作地の生産價格』と云ふのは其の耕作地の生産物の個別的な生産價格のことであつて決して農業部門に於ける『平均的市場價格』ではない。從つて其れはまた斷じて前に述べた意味の『市場價値』ではあり得ない。果して較差地代を論じてゐる或る場所では『市場價値』が全然違つた意味のものとなつてゐる。『較差地代の場合には一般に、市場價値は常に總生産價格よりも大であることを注意すべきである』と言ふ。玆に謂ふ『市場價値』は最劣等耕作地の個別的な生産價格に總生産物の數を乘じた積であり、玆に謂ふ『總生産價格』は『現實的生産價格』と呼ばれるものである。『現實的生産價格』とは、例へば次表の如く相等しい面積の然かも異なれるABCDの土地に等額の資本を投じて小麥を耕作した場合の總生産物の價格二百四十志の如きを云ふ。

A	1クオーター＝60志	1クオーター＝60志
B	2 〃 ＝60〃	1 〃 ＝30〃
C	3 〃 ＝60〃	1 〃 ＝20〃
D	4 〃 ＝60〃	1 〃 ＝15〃
	10 〃 ＝240〃	平均 1 〃 ＝24〃

然るに此の十クォーターの小麥は六百志で賣られる、一クォーター六十志だからである。此の六百志が『市場價値』で右の表に於ける二百四十志が『總生產價格』だと云ふのである。而して斯樣に六百志で賣れるのは『市場價値に依る決定である、市場價値は……競爭の仲介に依つて成立する、競爭は虛僞の社會的價値を生ずる』と說かれる（同所二〇〇頁）。

六百志から二百四十志を差し引いた殘額三百六十志はマルクスの勞働價値論からすれば確かに虛僞の社會的價値である。何となれば其れは彼れの價値論に於て商品の價値量を決定するものとされてゐた社會的に必要な勞働量とは全く關係がないからである。然かも此の虛僞の社會的價値が生ずるのは、マルクスが言ふ樣に競爭や資本主義的社會形態や土地私有制度の爲であるのみならず（同所同頁）、又彼が先きに第一卷に於ける價値と殆ど同一物なるかの如くに取扱つてゐた市場價値を、玆では却つて『現實的生產價格』或は『現實的平均價格』と呼び、而して本來市場價値でないものを市場價値と呼んだことの結果でもある。斯くして少なくとも較差地代は剩餘價値の一部分の轉化したものではなく、全く虛僞の社會的價値の轉化したものに外ならない事が、マルクスの言ふ意味に於ても亦私の言ふ意味に於ても、明瞭になつた。彼は曰ふ『較差地代は商品の一般的な生產價格に決定的に入り行くものではなく、寧ろ此の生產價格を前提とする』と（同所一八六頁）。然かも一般的な生產價格の社會的總額は價値の社會的總量と等しくなければならないから、『一般的な生產價格に決定的に入り行くものではなく、寧ろ此の生產價格を前提とする』樣な較差地代は當然に價値の社會的總量以外の量でなければならぬ。斯くして較差地代を剩餘價値から導かんとする論據が撤去せられる。再びリカードに歸るべきか。

以上は單にマルクスが較差地代の第一形態と呼ぶ所のものに關する論評に過ぎないが、然し第二形態に關しても、否要するに彼れの較差地代論の全部を通じて原則的には同樣の論評を繰り返すことが出來るから、玆では是れ以上論ずる必要を認めない。また『絕對地代』に就ても玆では論評を省く。そして本文が旣に豫定よりも餘らか長くなり過ぎたと思はれ

るから、玆に簡單に結びの言葉を附け加へて置きたく思ふ。要するに「資本論」第一卷から第三卷の前半に至るまで平均觀察を一貫させて來たマルクスの價値論は、第三卷の後半に於ける較差地代論に於て、『市場價値』は最劣等耕作地即ち限界耕作地の個別的な生產價格或は個別的な價値即ち限界生產價格或は限界價値に統制されると說かれるに至つて、竟に較差地代を剩餘價値の分野以外に押しやらざるを得ないと云ふ一の矛盾に陷つた。此の矛盾は畢竟平均觀察と限界原理との矛盾に外ならない。然かも此の矛盾を生ぜしめてゐる一の條件は較差地代を剩餘價値から導かんとすること其れである。較差地代をリカードの如く取り扱へば此の矛盾は除去されるが、然し之と同時に較差地代をも勞働者階級のみからの掠奪と觀ようとする立場も亦撤去されざるを得ない。是れより溯つてマルクスの價値法則其のものに既に初めから勞働者階級の被掠奪、被搾取を理論づけようとする動機が潛在してゐたか否かを問ふことも出來よう。何れにしても平均觀察に於ては『剩餘利潤と負の利潤とは相殺する。』(同所二六五頁)。之に反して較差地代を成立させようとすれば、商品の價値量は其の商品の生產に社會的平均的に必要なる勞働量に依つて決定されると云ふ價値法則を否定し去らなければならない。(昭四・十一・三)

太平洋問題の核心

危機避く可きか、避く可からざるか

米田實

一

地中海時代から大西洋時代へ、大西洋時代から太平洋時代へと、我等は世界列强角逐の波瀾が、時と共に、一層大きく、一層物凄くなりまさるを見るのである。而して之が深刻さの一面は、十月末から十一月上旬にかけて我京都に開かれた太平洋會議並びに將に來年一月から英京ロンドンに開かる可き海軍々備制限會議に反映してゐると言へる。何ぞや、先づ太平洋會議は太平洋關係のイギリス、其屬領オーストラリア、ニユジーランド、米國、日本、支那等の有識者が互ひに胸襟を開いて、双互關係の問題の眞相を研究し、双互の立場を十分に諒遞し、以て國際理解を增進して太平洋の平和を圖らうとするものなるは言ふまでも無からう。だが大正十四年七月ホノルルの第一會議以來、幾多の名流が陽に或は陰に官邊及民間の支持をも受けつゝ、引續きかう言ふ努力をなさねばならぬところに、太平洋問題の困難さの一端が曝露されてゐるのでは無からうか。又來る可きロンドン軍縮會議を產み出したものは、一昨年ジユネーヴ日英米三國軍縮會議がイギリスの小巡洋艦主張と米國の大巡洋艦說との衝突の爲め失敗に歸したことであつた。而して此米國の大巡洋艦主張こそは、專ら太平洋の爲めであつたことを知らねばならぬ。パナマ運河とハワイ島眞珠港の距離が四千六百八十三マイルを數へ、布哇と西太平洋のグアム島(我が橫須賀の南一千三百六十マイル)との距離が三千三百三十マイルを數へ、フイリツピンと米大陸の總距離遙かに六千マイルを超ふるを思へ、將た大正十三年米國海軍大演習の敎訓として同司令官が所謂第四問題(プロブレム・フオア)即ち太平洋長距離の戰備に大巡洋艦

の必要を說き、その結果同年十二月米國議會は八吋砲一萬トン級大巡洋艦八隻建造を定めたことを考へよ、否な今春二月米國議會通過の八吋砲一萬トン級巡洋艦建造計畫も、同じ源泉の產物なることを回顧せよ。予が縷々說明するまでも無く、事態は自から判明し來るであらう。

だが太平洋問題の困難さを表示するものは、獨り以上の兩會議のみでは無い。最近の日支關係殊に滿洲に關する軋轢など、同じく困難な他の一方面を現はしたものである。此外、實例を數ふれば、殆んど枚擧の遑無い程である。

然らば此困難な太平洋問題は、遂に救ふ可からざる難關に逢着せねばならぬのであらうか、關係列强は遂に此東西一萬マイル、南北九千三百マイル、面積五千五百萬方マイルの巨洋の孰れかの部分に於て、人類が曾つて見たる以上の政治的、軍事的、若くは經濟的大慘劇を演出せねばならぬであらうか。

單刀直入的に言ふと、予は激甚な競爭狀態の發生を肯定するけれども、それが必らずしも行詰つて人類の大不祥事を誘致せねばならぬとは考へぬのである。それは日本の關する點に於て同じく然るを思ふものだ。乞ふ之から日本の關係ある都面につきて、少しく所思を述べて見たい。

二

然らば今の太平洋問題とはどんなものであるかと言ふと、之は之を見る國々の異るに從ひ、その立場の異るに從ひ異るのである。蓋し身贔屓、身勝手は人類の常だ。個人もさうであるやうに國家もさうである。假りに同じやうに認識しても、或はその或部面を大きく見すぎ、或は小さく見すぎる、評價振りやら注意の焦點が違ふのである。

たとへば、我日本から（若くは或程度に於てはイギリス等から）見るときは、今の太平洋問題の主要な點は、東岸の富邦米國が將に行はんとする西太平洋進出である。世界大戰の恩惠で國富八千億圓となり、海外投資も戰前の債務國的地位（一九一三年には海外に五十億圓を貸して百十億圓を借り、差引六十億圓の借金國であつた）から、戰後五百億圓の債權國と早變りした米國、工業急激に發達し、昭和二年の米國輸出に於て精製品が四割二分に增加したが、之を自身工業國たるヨーロッパには左迄賣り難く、どうしても未だ工業國と言ひ難いアジア其他太平洋方面にその新らしい得意先きを開拓せねばならぬ米國、然かも其太平洋方面こそは過去十四年間に於ける米貨吸收增加率に於て、ヨーロッパの五割增に對し三倍半增を示してゐるを知る

米國、況んやゴム等熱帶産物の必要と東洋活躍の根據地の要とからフイリツピン不放棄に決した米國、最近對支顧問政策、飛行利權策に成功を示してゐる米國、太平洋防備として八吋砲巡洋艦充實に躍進して來た米國——それが日本若くはイギリスの安眠を惱ますとは、どうしても自然の勢ひだと言はねばならない。

だが翻つて米國から見るときは、それは或る程度に於ては太平洋上に於けるイギリスとの角逐の問題でもあるが、特に神經を刺戟する點になると、どうしても日本との關係であらねばならぬ。

米國人の頭に浮ぶ日本及日本人は、東洋モンロー主義の信者である。口頭では如何に辯ずるにしても、内心、其地理的立場を理由として、恰かもアメリカ洲に於ける米國のやうに、アジヤで獨占政策、排他政策を行はうと日夜苦慮してゐるやうに見られてゐる。だから此日本人に米國が自分に近い中南米では他の强國に對して承認せず、唯だ遠いアフリカ、アジア等（近東極東を含んで）に限り唱導するところの門戸開放、機會均等主義を、十分に日本人に押し附けて、遂に之に低頭隨喜せしめ得るか否かが、太平洋問題の殆んど一半をも構成するものと見られてゐるのである。之れ我が一部軍閥が曾つて國論以上に突進して不合理な侵略的態度に落ちた罪にも依らう。又日露戰爭後、日本が滿洲で日本煙草商人に便宜を與へて米國煙草商人に同じ便宜を與へ無かつたとの聲があり、明治三十九年米國等から抗議された事件、或は大正三年日本が日本大阪より奉天等滿洲内地に送らるゝ貨物の南滿鐵道に於ける運賃を、大連營口等から積まれて内地に送らるゝ貨物（卽ち米國等外國貨物）のそれより低廉にし、爲めに大正四年、五年に亘り日米交渉案件となつた事實等の經驗にも關係があらう。だが原因の如何、根據の正否、厚薄、强弱はどうでも善い、實際米國人に依つてかくの如く見られてゐる事實を、我等はどうしても否認することが出來ぬのである。

だが更らに之を支那人、印度人、フイリツピン人などから見ると、また變つて來るのである。彼等にとりての問題はヨーロツパ、アメリカ及び日本の帝國主義であり、如何にして之を打破し以て國權の囘復若くは民族權の發揚を圖り得るかに存するのである。支那が法權囘復を叫び、イギリスの九龍、威海衛租借、フランスの廣州灣租借、日本の旅順大連租借の放棄を要求し、且つ内地租界の廢止、國内河川通航權の囘收を高調し、其鋒尖をロシアの東支、我が南滿鐵道に向けつゝあるのも、皆な此潮流に棹して浪を揚ぐるものである。印度がイギリスに對して自治を叫び、フイリツピンが米國に向つて獨立を求め、蘭領東印度

――民は知らしむ可からずと言ふ老子流の政治で久しく平穩を保ち得たと言ふ此蘭領東印度さへも、近年覺醒運動高まつたなど、形を異にした同じ流れの現はれである。又た一轉之をイギリス、オランダ、米國等から見ると、殖民地統治の問題、若くは後進民族の扱ひ方の問題でもあると言はねばならぬ。

以上述べたやうに、見方、立場に依つて重點が異る太平洋の動きを廻つて、種々な特殊問題が提起せられねばならぬのである。だとへば人口問題、食料問題、文化問題、政權問題などがそれである。蓋し太平洋ばかりでは無く、何處にあつても深刻な人類の軋轢、衝突あるところ、そこには多く經濟的原因を見るのである。人口問題、食料問題がそこに伏在若くは公在するのである。而して之が公正な處分若くはその難局の緩和が如何ばかり太平洋若くは他の方面の國際紛爭の緩和となるか分らぬのである。又人はパンのみに生きず、思想を持ち權力を慾求する、そこに文化と政權とが問題とならねばならない。

かく檢して來ると、所謂太平洋問題は極めて複雜な内容を曝露し來らねばならぬのである。

だが他は姑らく之を措き、我日本の關する部面に於て太平洋問題は、世間で思ふ程危險化せねばならぬであらうか。オーストリア社會學者グムプロウイチの團體軋轢說の最極端的說明を玆に演出する可く運命づけられてゐるものであらうか。

予はさうとは考へぬのである。

三

米國の或る部面では、日本は心中東洋モンロー主義を抱藏し、極東で排他獨占政策を執り以てその困難な經濟的地位を改善し又政治的優勢を持す可く企てゝゐる、之が將來大紛爭をもたらすものだと考へられてゐる。是れ非常な誤想である。勿論日本は自己の經濟的地位の改善、向上を熱求する。だがそれは東洋モンロー主義やら排他獨占策によらねば出來ぬものでは無い。のみならず、日本人の法律條約尊重癖、日本が德川幕府の三百年鎖國で極東活動上英佛米等に立ち遲れた歷史事情、若くは國力程度の自覺、一部識者がモンロー主義を時代後れとする傾向等は相俟つて日本をしてさう言ふ軍閥的政策を採用せしめないことを、予は斷言して憚らぬのである。

先づ日本人の法律條約尊重癖とは何か、日本人の特性として漠然たる理窟丈けには低頭せぬが、一旦四角な文字に現はされた法律條約になると、一も二も無く尊重するのである。

ところで東洋モンロー主義の問題はどうかと言ふと、日本は今日まで數へ切れぬほどの條約やら文書やらで、極東の門戶

放、機會均等主義支持を約束し終つたのである。それは明治三十二年（一八九九年）十二月二十六日日本の對米門戸開放機會均等通牒回答に現はれてゐるのは勿論だが、其後明治三十五年一月三十日第一回日英同盟協約、三十八年八月十二日第二回日英同盟條約、同年九月五日ポーツマス日露講和條約、明治四十年七月三十日第一回日露協約、同年六月十日日佛協約、明治四十三年七月四日第二日露協約、明治四十四年七月十三日第三回日英同盟條約に規定せられ、更らに我國と米國との間に成つた明治四十一年十一月三十日ルート、高平太平洋協定、大正六年十一月二日石井ランシング協定、竝びに大正十一年二月六日ワシントン會議九國極東協約にも十分に言ひ現はされてゐるのである。法律攻めで養成せられた日本人が、今更らにどうして之に叛旗を翻へすことが出來やうぞ。

中南米でモンロー主義を振り回はす米國はどうかと言ふと、幸ひに（世界及び中南米にとりては不幸にも）、かう言ふ條約をヨーロッパ列強と造つてゐないのである。日本は極東につき常に列國と、「協同」主義、若くは「協同宣言」政策を執り、散々に他國と同じやうに自己の自由活動をも束縛したのであつたが、米國は全然正反對の徑路を執つたのである、今から百六年以前、イギリス外相キャニングが米國に向ひ中南米につき「英米協同宣言」を提議すると、米國々務卿アダムスは決然一蹴した。は大統領モンロー始め多數內閣員が米國の國力微弱なる折柄、イギリスと提携してヨーロッパ大陸に當るの說に傾ひてゐたのを論破し、協同宣言がイギリスに米大陸に對する發言權を與へ、長き將來に亘り米國を束縛することになるを說き、飜然政府をして單獨宣言策を執らしめたのであつた。大統領モンローはアダムスに說得されて、最初自分が反對してゐた單獨宣言に依り「アメリカ洲のことは、アメリカでやつて行く、ヨーロッパ諸國の干渉を許さぬ」と言ふこと即ちモンロー主義を聲明し、以てその名は「モンロー主義」の名と共に竹帛に垂るゝと言ふ意外な幸運を擔つたのであつた。爾後米國は米洲に關して毫も機會均等などの條約をヨーロッパとの間に造つたことが無いのである。

と言つて、予は米國が之に乘じ目下中央アメリカ、カリビヤン海などで、露骨なる門戸閉鎖、機會不均等主義を採つてゐるのを是認するのでは無い。米國が、ハイチ共和國でフランス、ドイツ資本の銀行投下を排斥し、更らに內政干渉をさへ行ふて同國々民銀行をニユヨルク・ナショナル・シテー銀行に所有せしめた如き、ニカラグア國でエセルブルカ借款に現はれたイギリスの投資等を排斥し、ニユヨルク銀行家セリグマン及ブラウオ

ンに無理に之に代らしめたが如き、其他ヨーロッパ資本のキューバ、パナマに入るを阻止してゐる如き遣り口を正當とするのでは無い。東洋等で機會均等、門戸開放を説く米國がその近き地境に於て門戸閉鎖、機會不均等政策を採用する矛盾は、或は唾棄す可く、或は憫笑す可きものであらねばならぬ。殊に航海の大發達に加へ飛行術進歩顯著であり、千里も比隣となつた今日、又今後驚く可き發達を豫期せらるゝ今日、なほ古き地方的獨占權を維持しやうとし、それも昔年政治的であつたものを經濟的に押し進めんとする米國の遣り口は、進歩的な同國にも似合はしからぬ行動と言はねばならぬ。だが唯だ此行動に關して米國が日本のやうに自ら拘束する條約を造つてゐぬ點丈けは認めねばならず、同時にかういふ條約、協定を盛んに造つて自ら束縛してゐる日本が、東洋モンロー主義を叫び難き立場に在るはどうしても承認せねばならぬところである。

右の外、日本は徳川三百年の鎖國政策に累されて、イギリス、フランス、オランダ若くは或る程度に於て米國が太平洋西部に動く間に、桃源の夢を樂み、それが漸く覺醒したときには、列國の政治的地盤成つても、最早東洋モンロー主義などは實現し難くなつてゐた。イギリスは一六三九年今のマドラスを開き、一六三五年ウエッテルを支那に送り、一六八〇年から東印度會社に依つて支那貿易に活躍し次で阿片戰爭に勝ちて一八四二年に支那と南京條約を造り、香港を獲得し、上海、廣東、福州、寧波、を開港せしめこゝに租界を造つたのであつた。フランスは二年後れて支那と條約を締結し、更らに一八六〇年代に已に今の印度支那に交趾支那、カムボチャを收めてゐた。此外十八世紀末から支那との茶、獸皮の貿易に船を廻はしてゐた米國も、フランスと同じ年に支那と條約締結を終へ、それから九年後ペリーを日本に派してその門戸を叩いたのであつた。イギリスよりも早く東洋に出た古き海商國オランダが夙に、ジャワ等に地盤を持つてゐたのは、指摘する迄もあるまい。安政年間頃から漸く外界との交通を認めた日本が維新革命の洗禮を經て、始めて國船を太平洋の國際政治界に乘り出したるとき、イギリス、フランスは已に兵を天津、北京に進めて屈辱的條約（一八五八年天津條約、一八六〇年北京條約）を支那に結ばしめ、列強共にあらゆる特權を獲得した後であつた。最惠的待遇も、片務的關稅權若くは治外法權も、英米佛が先づ支那を脅かして獲得したもので、それに半世紀後れて日本が均霑したと言ふ可きであつた。（日本が支那で今のやうな最惠的待遇、片務的治外法權を得たのは日清戰爭後なる明治二十九年の日清通商航海條約であつた）。思ふに日本今日の國力で東洋モンロー主義を確立し得るかも問題である

が、右のやうな歴史的背景なるに於ては、それは如何に望ましくも、最早や困難だと言はねばならぬ。殊に前述のやうな條約關係なるを思ふと、予はそれが到底不可能なるを認めぬわけにはいかぬのである。

四

しかし予の所見に依ると、此東洋モンロー主義の不可能は米國等の對日疑惧心を無用ならしむるが、同時にそれは日本自身にとりても決して悲む可きことではない。

何故であるか、第一に我等が考へねばならぬのは、支那を始め極東太平洋の開發は頗る廣大な事業で、獨り日本丈で背負ひ切れるものでは無い、列强の協力を待つを便宜とすることである。ヨーロッパと異りアジア太平洋の發達は、非常に遜れて居り、富源多きも奈何せん猶ほ地下に埋れ若くは未だ人類に利用せられて居らぬのである。日本は土地こそ近いが、その資本的能力は到底獨力で我が四隣開拓の事業を仕遂ぐることは出來ぬ。それだからと言つて、日本が假りに所謂東洋モンロー主義を振り廻はし得るとして、かくして東洋の發達を遲らかすことは出來ぬ。富邦米國でさへ、北米、狹き中米でこそ優勢なれ、南米では百億圓のイギリス投資に一歩を讓してゐる位ゐで、經濟的獨占はどうしても六ケしいことを知らねばならぬ。第二に、列强の力を藉りても急激にアジア、太平洋の發達を促進することは日本自身の利益にも必要にも合致することを思はねばならぬ。外でも無い。日本は自己の工業大發達を期する爲めにも、支那其他資源の至急開發を便とするのである。かくて原料供給が豐富となることは、日本人の生活と職業にとりての福音である。更らにかく資源を開拓し行く隣邦若くは隣地はそれ丈け富力增進するので、國民生活の向上を來し、日本品の消化力も激增し我貿易伸張の機會となるのである。卽ち我れには物資政策からも、生產品得意先の開拓からも、外資と提携して共々に太平洋の開發を圖るの賢明なる雅量があらねばならない。

殊に今日は最早や帝國主義の時代では無い。昔年のやうに列强資本投下が領土侵略の前提であつた時代ならば、我之が排除に力めねばならぬが、世界輿論の下に、最早や侵略が困難となつた今日、我等はそれ丈け警戒を緩めて善いのではあるまいか。

だから、予は我國の眞の利益から見ても、排他主義、獨占政策を放棄し、列强資本に機會均等を許すの愚策にあらざるを信ずるのである。

と言つても、それ丈け日本は又此競爭が自由となり、激甚と

なる太平洋に於て、大に黽勉努力す可きは勿論であつて、決して「春の田を人に任かせて、我は唯だ花に心を寄する頃かな」となつてはならない、否な日本が列強活躍の間に在つて列強に劣らず、寧ろ之に優る活躍をなすことこそ、實に太平洋上國際角逐の均勢を維持し、米國若くはイギリス等の增長若くは得手勝手化を防止する所以なるを忘れてはならない。

かく說くと、人或は言はう、「西太平洋に自由競爭を許さば、資本豐富な米國及イギリスが最有利ではあるまいか」と。だが武器は唯だ資本丈けでは無い、日本が自ら東洋に位ひすると言ふ地理的利益、それは貨物等運輸及旅行の迅速さと其運輸及旅行費用が比較的に僅少であり得ること、日本人が支那人心理、其他各種事情に通じ易きこと、在留商人としての費用も白人より低廉なることなどに現れてゐる通りである。日本人は努力さへ吝まぬかぎり、門戶開放、機會均等主義の上に立つ公開壇場に於て、決して歩をアングロサクソン民族に讓らねばならぬものでは無い。論より證據、對支貿易上、日本の發展は遙かに英米以下列國を凌駕してゐるでは無いか、(最近一兩年の排日運動期は幾分阻害せられたけれども)。否な支那ばかりでは無い、印度、南洋等の綿布等諸貿易に於て、日本はイギリスなどの心膽を寒からしてゐるではないか。

以上檢して來ると、日本はその西太平洋に於ける其發展の爲め、何も排他獨占策を執るの必要はない。從つて日本を以て太平洋の憂とする米國以下の推想は、全く謬想ではあるまいか、故に予は言ふ、此點はイギリス、アメリカより見ても、日本より見ても、決して太平洋問題の癌たる可きものでは無いと。

五

だが之に比して、一層困難で然かも危險多き問題は日支關係であらねばならぬ。

蓋し世界大戰後トルコ、シヤム、ペルシア等にも勃興した東洋民族覺醒の流れと國權囘復の熱とは我が隣邦中華民國に及ばねば止まなかつた。それは所謂關稅自主權の囘復、治外法權の撤廢、租界の廢止等諸要求にも現はれてゐるが、他面我が旅順大連租借、南滿鐵道事業に對する抗爭ともなつてゐる。同時に燕趙慷慨悲歌の士の血液を殘してゐる我隣國人は、各方面で排日運動を起し、それは小學校敎科書等にも反映して居れば、一部私慾商人若くは職業的煽動家の小刀細工と相俟つて日貨排斥ともなつてゐる。尤も支那人の國權囘復主張は獨り日本に對するばかりでは無く、イギリス、フランス、ロシア等にも關係があるが、日本には滿洲問題等がある丈け、それは一層深刻化し

てゐることを否認することが出來無い。

而して此紛爭が極端化するとき、一寸した機會から如何なる重大事態を發生せぬとも限ら無いのである。かく說いて來ると、一見こゝに太平洋問題の危險な部分が存在するを我等は淡白に承認せねばならぬのである。

しかし予を以て之を見ると、此等の點も必らずしも局面行詰を生ぜねばならぬとば考へられぬのである。

六

勿論現在のところでは多大の困難を發見する。だが世界各方面の史實の敎ふるところでは、生きた國民の關係は時と共に變ずるのである。今の如き日支惡關係は必らずしも永續せねばならぬものでは無い。殊にそこに適當な人爲が加はるに於て、爭鬪が緩和し、やがて提携と化することも決して六ケ敷いわけではないのである。打ち明けて言ふと、支那人は本來「體面論者」であるところに、今や國權回復期に遭會し勢ひに驅られ適當以上な希望に流れてゐる。同時に日本人も規則づくめに敎育されて、爲めに外交上でも、やれ條約權、やれ特殊利益と必要でないときにさへ、無暗に之を高調して、支那人の最も嫌がるところに刺戟を向け、問題を大きくする感がある。之ではいけない。目下滿洲に於ける日本の事業投資十四億圓であり、文化的施設のそれを加へて十六億圓を超ゆと言はるゝ、之を今日の支那がどうとも出來るものでは無い。又た支那の滿洲を憂ふるのは日本の侵略野心だが、大戰後世界形勢も一變し、日本、支那共に加はれる國際聯盟の不侵略保障もあり、又日本國民も昔年の空虛な政治的進出の愚を知り專ら、經濟的境遇の改善に留意せんとしてゐるのである。此趨勢を見るとき、予は日本人の立場が結局支那人に了解せらるゝときが來るに違ひ無いと考ふるのである。故に予は差當り我邦人に對して、彼等の對支活動策若くは日支經濟提携策として、差當り一方に於ては、新しき日本の非膨脹主義、單なる經濟活動の志を支那人に了解せしむると共に、他方に於て無暗に特殊利益若くは特殊權利の論議を振り廻はし、隣國人の神經を刺戟する從來の遣り口を改む可きだと警言したいのである。

予試みに世界諸國に於ける外國資本に依る鐵道其他事業經營が圓滑に運ばれ、支那に於けるやうに極端な排外心を挑發せない實例を檢して見ると、それは南米に於けるイギリス資本に見ることが出來るのである。

南アメリカに於ける投資では、イギリスは第一位を占めてゐる。貿易になると、米國が近頃非常に進出し、一昨年の如きイギ

リスの輸出額六億六千九百萬圓に對し、十億四千萬圓を占めてゐるけれども、投資では米國のそれは四十三億圓に過ぎず、イギリスのそれは八十二億圓即ち米國に二倍してゐる。之は統計に現はれたところだが實際は百億圓とさへ言はれてゐる。而して注意せねばならぬのは米國の投資が公債、地方債であるのに對し、イギリスのそれは鐵道最も多く、其他諸事業に投ぜられてゐることだ。たとへばアルゼンチンのイギリス投資は四十億圓だが其内三十二三億圓は鐵道事業である。又たブラジルに於ける投資二十七億圓の大部分も鐵道に入つてゐる。かくてブラジルの諸鐵道でリオジャネイロ・サンパウロ其他都市間の重要な鐵道はイギリス資本であり、ブラジル人の資本に成る鐵道は田舍向き、邊陬地域の儲らぬ鐵道に過ぎぬのである。かくの如くイギリス資本でブラジルの鐵道が占領せらるゝと、支那の實例のやうに、排外熱やら鐵道自主論やら起るのが自然である、だがブラジルではそれが無い、何故かと調べて見ると、ブラジルのイギリス投資家は、日本人のやうに特殊權益とか、何とか矢釜しい理窟を言つて、ブラジル人の神經を刺戟し、其敵愾心を喚起することをしない。イギリス人が鐵道會社々長となるとき、豫めブラジルに歸化する位ひである。ロンドンでは一英人の有する鐵道（ブリチツシユ・オーンド・レールウエイ）」の文字を用ゐることもあるが、日本人のやうに先方の癪に障る權利論を振り廻はさず、實利實益を收め行くところ、流石に商事に通ずる常識的大國民なるを思はしむるのである。だが之はアルゼンチンでも同樣に行はれてゐる。爲めに最近米國の資本が同國事業投資方面（電話、電力等）に侵入せんとすると、同國ラ・プランサ新聞の如き、イギリス資本がアルゼンチンに對し禮儀を失はざりしことを指摘し、イギリス資本的勢力の優勢持續を望んだ位ひである。予は思ふ「かう言ふ實例は、日本の對支投資に好教訓を與ふるものではあるまいか」と。

否な々々、必らずしも遠い南米の例を引用するまでも無い。現に支那そのものに於て、日本は或程度に於て自ら同樣な好教訓を發見してゐるではなからうか、何ぞや、南潯鐵道實例之れである。

南潯鐵道は、誰も知るやうに、揚子江流域に於ける唯一の日本利權鐵道である。これは日本臺灣の對岸で我と關係深き福建省の奥である江西省中、南昌から九江に達する七十九マイルの短距離の鐵道である。日本資本家は曾つて之では短いので、之を萍鄕まで延長せんとすると、イギリス系は「日本は滿洲、イギリスは揚子江だ」と勢力圈論を振り廻して、之が延長を阻止したことは、多分猶世人の記憶するところであらう。而して此鐵道は支那の國權囘復熱盛んであり、排日論も高き南京國民政府の支

配地域に在るのだから、排日の犠牲となり易きわけである、が實際は之に反して鐵道位ひ安全で、商賣も圓滑に行はれ、收益を得つゝあるものは、今日の支那鐵道中希有な例となつてゐるのである。而して我日本側は曾つて利子延滯などにも苦しんだこともあつたが、現在は之から年に三十萬圓位ゐの收入を受けてゐるのである。在支日本人の投資事業で、これ位ゐに排日を受けず圓滑に行つてゐる例は殆んどあるまい。之れ何故ぞ、外でも無い、同鐵道は形に於て江西省民の鐵道となつて居る點もあるが、亦日本人は資金關係丈けの立場を執つてゐるのである。かくて此處では特殊利益論もなければ、國權囘復論も無いからである。

斯く述べ來ると、讀者は自ら思ひ半ばにすぐるものがあらうと思ふ。

勿論、滿洲問題の如きになると、南米のイギリスとも異れば、支那本部の南潯鐵道問題とも違ふ、それは條約文やら、外交々涉史やら其他種々行懸もあるのである、しかし如何なる場合、如何なる國を問はず、國民の自尊心を傷くる外交は、それが道理あるものにしても、決して國交の妙諦を解するものでは無い、況んや經濟的提携を進むる所以では無い。從つてよしやそれが急激に成功を見難しとしても、日支の滿洲策は、大體として寧ろ共に漸次理窟つぽからぬ南米のイギリス事業の例に依りて、今日の双互の激昂狀態を緩和しつゝ、空氣と環境を改善し行くところに、此局面に於ける太平洋の難問の處理策があるのではあるまい乎。而してその間に時代は進んで行くのである。我等は南米のイギリス事業のやうな親善なる日支事業的提携も圓滑に行はるゝ時期の到來も決して空想にあらざるを確信するのである。

七

之を詮ずるに、困難な太平洋の局面も、一點の光明が無いわけでもなければ、行詰つたわけでも無い。要は、正しく巧みな解決の方途を採用し、然かも今後相應の年月に亘つて、隱忍努力しつゝ、その效果の來るを待つにあらう。日本及び關係諸邦民、果して此太平洋の平和保持と穩健なる發達を圖るの徑路に共鳴し、之が支持者たらんとするや否や、予は之を將來に徵したいと思ふ。

共産黨事件とその批評

山川均

□

一年と六ヶ月の間、某重大事件といふ覆面の後ろに隱されてゐた共産黨檢擧事件の眞相が、或る程度まで明るみに持ち出された。しかし今朝の諸新聞の記事を一と渡り見たところでは、事實の輪廓はほゞ明らかにされてゐるが、尙ほいろ〳〵の疑問が殘されてゐる。ことにこの問題を、無産者運動の內部的な問題として見ようとするならば、必ず知らなければならぬ多くの必要な點が、なほ明らかにせられてゐない。例へば、數次の檢擧によつて徹底的に掃蕩されたといふ日本共産黨の存在と行動とが、わが國の無産階級運動の發展史のうちに、いかなる意義といかなる地位とを占むべきものであるか、またその存在中の行動と、その根本的な彈壓とが、わが國の無産階級運動の今後の發達の上に、いかなる影響を與へるであらうか、等々といふやうな問題としてこの事件を取り扱ふためには、廣汎な讀者の興味を對象とする新聞の報導によつては當然に閑却せられてゐるような方面の、多くの事實を知ることが絕對に必要であるが、これは今日のところでは、尙ほ吾々に與へられてゐない資料である。

從つて、かういふ見地からこの事件を批判することは、今日は尙ほその時期でない。わが國の無産運動は、今後相當に長い日月を掛けて、この事件の與へてゐる敎訓を咀嚼し消化しなければならぬ。

そこでこの事件の覆面の取り去られた今の瞬間においては、かういふ最も重大な點はしばらくおき、この事件が廣く一般世間に與へた印象を吟味することにも、相當の意義がある。

□

共産黨事件に對する諸新聞の評論やその他の批評を讀むと、大體に一致したところがある。まづこの事件が、吾が國の歴史に未曾有な不祥事であることに目を張つた後、苟も國體の變革を企てる不逞の陰謀に對しては、假借なき斷罪を下してこれを掃蕩する必要を力說することは大多數の批評が忘れなかつたところである。

が、然しながら――この然しながらが、私はこの事件に對する多くの批評に共通した特徴的なものだと思ふ。が、然しながら『かゝる不逞の徒輩を出したことは、またわれ／＼國民の責任であることをも痛感し‥‥なければならぬ』。安達内相の聲明には、かう書いてある。渡邊法相の談話には、『今や黨員の殆んど全部を檢擧し盡し、最早や黨としての存在は一應潰滅に歸したのであるが、内外の情勢から察するに、まだ斷じて晏如たることを許さない』と云はれてゐる。斷じて安心が出來ないとは、不安が××だといふことであつて、取りも直ほさず、『不逞の陰謀』が『斷じて』今後も××返へされるといふ意味に受取られる。かういふ豫想をしなければならぬ『内外の情勢』ことに國内的情勢とは、そも／＼何を指すのだらうか？　そしてこれが又、『彼ら一味の不逞な計畫を惡む』ことをもつて足れりとしないで、國民がそれに對して責任を痛感しなければならぬと云ふところのものであらうと思ふ。

『それにしても、何が斯くも多數の思想的不具者を生むに至つたのであらうか。國民の深慮しなければならぬ重大事は、寧ろこの點にある。事件そのものに對して騷然たる批判を下す代りに、國民はこの思想犯罪のよつて來るところを、冷靜に檢討しなければならぬ‥‥病菌は日陰において繁殖する。さう惠まれない生活のドン底からのぞく人生は暗く險しい。さうしたところに、思想的病菌が發生するといふことは、危險思想發生の方程式である‥‥政府と政黨と資本家との間に、この掃蕩策が眞劍に考慮され、徹底的に實行されぬ限り、誰かかゝる不祥事が再發せぬと斷言し得やうぞ‥‥』（『日々』）

こゝには疑問と共に、答の一半が提出せられてゐる。『共産黨の惡魔の手引の前に、彼等純眞なるべき青年を魔道に追ひやるやうな社會的原因があるのである。民衆の日常生活のすべての不安と不滿をとらへてこれに點火せんとする彼等の運動に對して、從來の政治は餘りに民衆の日常生活の不安と不滿を顧みることをしなかつた。既成政黨による議會政治は、何等の光明を民衆に約束しないで、却つて賣勳事件以下の

多くの疑獄が示すやうな政治の腐敗、政治と金力の結び付を自ら暴露したのでは、共產主義運動に協力すると同樣の結果をもたらすものと云はなければならぬ……』（『東朝』）

『現在わが國の社會狀態は、危險思想の醞釀にはお誂へ向きの苗床である。最近世上に傳へられた疑獄だけでも十指に餘りあり、しかもその悉くは政府大官と大資本家との結託である……』（『國民』）

『今次の共產黨事件の如き重大なる現象の背後に、之が發生の酵母たりし原因の潛まぬ筈はあり得ない。……我國の政治は今や完全に一部資本閥の傀儡であり、我國の經濟は富の一部的集中により、大多數國民の飢餓線への陷落を示す。權門、上に威を張つて無產の民は告ぐる所なく、ブルジョア秋馬と共に肥えて貧乏人はたゞ飢に泣くのみである。斯の如くして共產主義運動發生の條件は、既に十分に熟したりといはねばならぬ……』（『やまと』）

熟したものは收穫しなければならぬ。日本の國民は、共產黨運動の勃興において、この收穫をしたわけである。かように今度の共產黨事件を、謂ゆる外來思想の感染とか、外國思想の摸倣といふような偶然事として片附けないで、吾が國の社會狀態から××的に生じた事象と見ることは、多くの批評に共通する特徵であつて、安達內相が『われ〳〵國民の責任』であるといふ見解も、かういふ意味に解してこそ初めて意義がある。と同時に、共產黨は一と先づ掃蕩したが、しかしそれでも安心はなり難いといふ心理は、共產黨は掃蕩したが共產黨を必然的に生み出した社會的條件は、何ら××はしなかつたといふことに對する、內心の不安を表白したものにほかならぬ。

共產黨のような前代未聞の不祥な產物——これらの批評の一致した見解によれば——を、必ずしも外國製の舶來輸入品とは見ないで、吾が國の土壤に原料を仰いだ××品であることが承認せられるようになつたことは、世論の大なる進步である。それと同時に、この種の社會的事象が、人々の頭に、直ちに社會的な原因について何ものかを暗示するようになつたことは、吾が國の社會狀態そのものゝ上に起つた著しい××を反映してゐるものに違ひない。

□

かように共產黨事件に社會的根據がある以上は、單なる嚴罰主義や彈壓政策をもつて根絕することのできないことは自明であつて、この點についても、大多數の批評は一致する。そして治安維持法の改正によつて、懲役十年を死刑にしたことが、四・

一六事件を防止し得なかつたことは、これを裏書きするものと見做される。

しかし嚴罰や彈壓に、何ら效果がなかつたとは云はれない。少くともこの運動に『陰謀』的な相貌を與へる××があつた。日本共産黨の綱領として報導せられてゐる十三項目のうち、抹消されてゐる二つの項目は別として、その他の諸項目の大部分は、現に無産政黨によつて合法的に主張せられてゐるものであつて、必ずしも不合法的に主張する必要がないように思はれる。共産黨が合法的に存在を許されてゐる國々では――そして大多數の文明國では許されてゐる――どこの國の共産黨の運動を見ても、それは大衆的な運動であつて、大衆的な運動ほど、その性質は『陰謀』の性質からは遠ざかる。共産黨の運動に陰謀的な性質を與へたものは、これを地下的運動に追ひ込んだことだ、といふ事實は爭ふことができぬ。

『現在社會の傾向は、貧者を多數にし、貧困の害毒を強くするにつれ、私有財産制度を否認しないまでも、これに對する疑惑を深くしてゐるのである。これを天壤無窮の國體と一緒に竝べて同一法規同一刑罰をもつて規定することは、過誤であるばかりでなく危險である。私有財産制の保護は、憲法以下多くの法令によつて十分であるから、宜しく治安維持法から除いて…國體の尊嚴が私有財産制と密接なる關係あるかの如き共産主義者の宣傳に乘ぜしむるの隙を與へないやうにしなければならぬ』(『東朝』)

これは慥かに、わが國の支配者の耳を傾くべき警告であつて、この二つのものに密接不可分の關係があるかの如く宣傳したものは何者よりも治安維持法そのものであつたとは、疑ひがない。

□

共産黨の被檢擧者のうちに、學生または學生生活を漸く終つたばかりの青年や女學生が一大部分を占めてゐることも、すべての批評者の注意を惹いてゐる。この事實はいろ〳〵の意味で、慥かに注意に値ひするものだと思ふ。例へば世界のいづれの國を見ても、かういふ構成をもつた共産黨は、恐らく類例がないだらう。共産黨の構成に見る著しい相異は、これを生み出した『社會的原因』ないしは社會的條件にも、また運動そのもの、性質にも、それだけの相異のあることを思はせる。日本の共産黨運動のうちに活躍するこれらの感激に滿ちた大學出の『秀才』と女學校の『才媛』とは、ヨーロパ諸國における散文的な現代の共産黨の運動よりも、十九世紀の×××のロマンチックな××運動を聯想させる。

新聞を見ると、共産黨の指導者たちが、料理屋待合方面の運動に、數千圓とか數萬圓とかを費やし、數十名の藝者大衆を動員したことなどが、賑やかに報道せられてゐる。私は固より、それが事實であるか否かを知らぬ。多分は何かの間違ひであることを希望するが、萬一事實であつたとしたら、それも恐らくは唯だの遊興のためではなく、警察の嚴重な追跡を免かれる苦心の餘りであるか、それとも大石内藏之助の聰明を學んだものであらう（東京朝日）。しかし大石内藏之助とプロレタリア前衛の運動とが抱合してゐるところに、吾が國の共産黨運動の特殊性が象徴されてゐるのかも知れぬ。

□

『某國から支給せられた數十萬圓の運動費』云々といふことも、多くの人々の眼に、共産黨の不逞性を一そう大きく映ぜしめてゐるらしい。この點についても、私はそれが事實であるかどうかを保證せぬ。しかし何人の手によつてにせよ、無産者運動の間に多くの運動費がばら撒かれるといふことは、その金が赤色の金であると黄色の金であるとに拘らず、私は全く別個の意味で好ましからぬことだと思ふ。現に吾が國の無産者運動が、近來は著しく金の掛る運動となつたといふ事實を、しばしば聞いてゐる。これは選擧運動のやうな、金の掛かる運動の領域が新たに開かれた爲めでもあるが、必ずしもそれのみではない。近頃開かれた或る無産政黨の大會にしても、全國から代表者を招集するためには二千圓の經費を要したと傳へられてゐる。政黨にしても組合にしても、運動者は當然に、運動によつて生活を保障さるべきであるといふ思想は、かなりに一般的になつてゐる。かういふ傾向を馴致した者は、官憲の彈壓以上に、無産者運動の上に深刻な打撃を與へるものだと云はなければならぬ。

□

高等の學校が、共産黨に多數の鬪士を供給したといふ點から、多くの批評は教育の無能を責めてゐる。この問責に對して最も恭順の意を表したのは、早稻田大學總長高田早苗氏であつた。

『早大では一人でも共産運動に感染する者がないやうに、嚴重監視し、若し右の如き學生を發見した場合には、情狀に依つて譴責、停學、重い者に對しては除名、諭旨退學等の處置を以て取締つてゐる爲め、最近は感染學生も非常に少くなり、將來は一人もなくする積りだ……』（『時事』）

さすがに名案である。健康な者だけを入院させ、病菌に冒されたものは見當り次第治療する、症狀の重いものは退院させる。

この病院からは一人の死亡者も出ないに極まつてゐる。けれども、共産黨事件を生んだものは、一定の社會的原因であるといふ思想から、敎育家の責任といふことが、どのようにして結論されるだらうか。この點では、敎育者は『全部の責任を引受ける理由がない』といふ河合榮治郎氏の抗議には、充分の理由がある。

「今日の大學の組織から考へて、私共は凡ての責任を引受ける理由はありませんが、それでも尙、窮極までつきつめれば、理論的に共産主義を克服し得ない所に、私共の無力を責められても、たゞ承服するより外仕方がありませんと同時に、これが爲に左翼的思想の硏究を抑壓することは、角をためて牛を殺さんとするもので、私共は首肯できません、たゞ共産主義を克服し得べき理論の建設に一路邁進するの外ないと思ひます……」(『時事』)。

この見解は、自由主義の立場に立つ代表的な意見であつて、要するに『思想に對しては思想を以つて』といふことになる。若しかような自由主義が徹底的に追求せられたなら、日本の社會はよし×××の運動からは免かれることが出來ないとしても、少くとも×××の「陰謀」からは免かれることができるだらう。なぜならば、×××は合法的な存在を認められるであらうから。

しかし『思想に對するには思想を以つて』など、云つたなら、今日の聰明な政黨政治家などは、國民敎化總動員など、いふ旗さし物を押し立て、、國内の反動分子を動員し、反動思想を鼓吹することだと早や合點をせぬとも限らない。そこで同じく自由主義の立場から、『時事新報』は次の如く警告する――

『思想に對抗するには思想を以てすべしなど考へ、急に反動思想を鼓吹するに至ることもあらんか、左傾の極端に對するに右傾の極端を以てせんとするものであつて、左傾の病的であると同樣に、右傾も亦不健全極まるものと云はねばならぬ。否な反動右傾思想こそ、徒に左傾思想に挑戰し、却つてその流行を激成する危險明白なりと信ずる……』。

けれども思想の後ろには何時でも生活がある。思想の決鬪は生活の××にほかならぬ。そこで問題は、自由主義の立場に立つ人々が、その尊敬すべき意圖にも拘らず、思想と思想との鬪爭の發展において、果して何時までその自由主義の立場に立ち通ほせるかといふことである。とは云へ私は、これらの自由主義者によつて、その立場が徹底的に貫徹せられることを歡迎する。

資本王國の財産調べ

——安田王國及淺野論——

高橋龜吉

安田王國論

一、安田王國の産業支配網

安田王國の支配及關係會社は總計八十九社ある。そのうち、安田の支配下に立つ會社は合計四十六社にて、直系會社が十二、傍系會社が十八、直系會社の子會社中支配的なものが十二、準支配的なものが一、及び傍系會社の支配的子會社が三の內譯である。この他、安田の支配力の或る程度迄及ぶもの、即ち準支配的なものとして、淺野系諸會社がある。併し、淺野に就ては後に詳述するから、こゝでは特に安田と因緣深きもの、みを抽出したが、それが二十社ある。されば安田の支配下に立つ會社は總計六十六社あるわけだ。此の外、所謂關係會社が四十三社を數え、保善社の直接關係二十四、直系會社のそれが十九の內譯である。かくて、安田の支配及關係事業會社は、全部で百九社あり、その公稱資本金は二十六億三百萬圓を超え、拂込資本は十八億四千四百萬圓を超える勘定になる。而してこれら諸會社の保善社に對する被支配關係は、上記の如く樣々であるが、いま、その資本系統を明瞭にする爲、例に依つて圖解すると次の如くである。(三十九頁)

所謂安田王國は、これらの諸支配會社及び關係會社への投資に由つて形成せられるが、その中軸をなすものは安田保善社である。安田保善社の支配會社に對する統制法は、從前の事務理事結城豐太郎を追出すと共に、最近著しく變り、これ迄の中央

集權的統制法を廢して、自主分權主義の制度を採用した。斯くて保善社は、これ迄その支配下の銀行會社に對して行ひ來つた檢査制度を廢する一方、從來の稟議規定も改廢して、業務上極めて重要な事項乃至一定額以上の銀行貸付の外は、凡て各銀行會社の自由裁量に委し、單に事後承認を求めしむるの方針にした。尤も、安田銀行は、重役が保善社のそれと重複してゐる關係上、これ等の制限や事後承認の必要もない特別扱である。而して新統制方法に於ては、從前の如く保善社から常務取締役を推薦する外新に保善社在職者より各銀行會社の監査役を推薦する。かくて、各銀行會社の常務重役の業務執行に關しては、原則として制肘を加へず、唯その推薦したる常務取締役、監査役を通じて統制することになつたのである。されば今後安田王國の各銀行會社は、三井王國のそれの如く、漸次分權的に獨立した經營と財政とを保持することになる譯だ。

斯く、保善社の支配會社に對する統制方法は著變したが、一方保善社自體の組織も變つた。保善社は有價證券及び不動產の所有と各種事業に對する投資を目的とし、安田一族に依つて組成されて居る。資本金は表面上三千萬圓で、二代目善次郎が社長である。この保善社の實際の仕事は、これ迄結城が專務理事として一切を支配して來たが、過般結城を放逐して、前臺銀總裁森廣藏と前商工次官四條隆英を理事として、高橋是清を顧問として迎へてからは、專務理事制を廢して理事會を以て之に代へることになつた。つまり、專務理事の獨斷專行が、理事會の會議制になつたのだ。理事には前記二人の他に、子飼の竹内悌三郎と安田一族から善五郎、善四郎、善兵衛、善助の四人が出て居る。この七理事と社長が、毎日午後保善社に集まつて所謂理事會を開催し、他に毎週一回先の内閣總理大臣高橋翁の出社を煩はすことになつて居る。而して、理事會の下には庶務部と業務部の二つがあり、これが保善社の事務を執行して居る。

二、安田王國の人的支配網

安田王國の人的支配の陣立が、三井や三菱のそれと著しく異る點は、安田王國には未だ三井や三菱の如く、番頭政治が、完全に確立せられて居ないことだ。三井や三菱でも、その一族が、矢張り支配會社の首腦者になつて居るが、それは名ばかりで(尤も、三菱では尚ほ少しは發言專斷の場合があると云はれるが)、實權はその下に配置されて居る大番頭の手に握られて居る。所が安田はさうでない。安田の支配下に立つ、夫々の銀行會社の首腦者としての安田善何々と稱する一族の面々は、三井や三菱のそれと違つて決して大殿樣で納まつて居ない。命令

安田系諸會社系統圖

（備考）表中＊印は安田の支配力が大體に決定的なもの。無印は同じく準支配的なもの。△印は安田の支配力未だ以上の如くならざる關係會社である。括弧内のものは安田一族のみの投資によるものなり

安田保善社

直系會社

- 安田貯蓄銀行
- 安田銀行 ― ＊日本醸業。＊日本精工。淺野系諸會社。△若松築港。△明治製糖。△帝國製糖。△橫濱取引所。△北海道電燈。△阪神電氣鐵道。△王子電氣軌道。△玉川電氣鐵道。△豐川鐵道。△日本郵船。△日本銀行。△橫濱正金銀行。△日本勸業銀行。△昭和銀行。
- 日本晝夜銀行
- 第三銀行
- 安田信託 ― ＊大興電氣。△攝津製油。△朝鮮郵船。△日本棉花。△日清汽船。
- 安田生命保險 ― ＊東京灣電氣。＊帝國海上火災 ― △東京報知機。
- 東京火災保險 ― ＊第一火災海上保險。＊東洋火災保險。
- 安田商事 ― ＊山崎商店。
- 帝國製麻 ― ＊大正製麻。＊奉天製麻。＊臺灣製麻。滿洲製麻。
- 東京建物 ― ＊滿洲興業。
- 安田ビルディング。日本紙業。

傍系會社

- 四國銀行 ― ＊南海水力電氣。
- 大垣共立銀行 ― ＊大垣貯蓄銀行。
- 富山銀行 ― ＊釧路土地倉庫。
- 正隆銀行。
- 肥後銀行。
- 博多灣鐵道汽船。

第三十六銀行。太平洋火災海上保險。阿波鐵道。十七銀行。熊本電氣。興亞起業。第九十八銀行。中國鐵道。橫濱棧橋倉庫。栃木農商銀行。小湊鐵道。大森機械製作所。

淺野系諸會社（特に安田と因緣深きもの）

- 淺野セメント ― 日本セメント。日本コンクリート。日本スレート。鐵筋コンクリート。淺野スレート。南武鐵道。日本ヒユームコンクリート。五日市鐵道。
- 東京灣埋立 ― 鶴見臨港鐵道。東洋汽船。淺野石材工業。東洋製鐵。吾妻川電力。日本無線電信。帝國ホテル。（日英釀造）。尼ヶ崎埋立。淺野造船所。淺野ブロック製造。東京電燈。東京發電。大日本人肥。日本電氣證券。（東亞產業）。淺野小倉製鋼所。東信電氣。南滿洲鐵道。富士製鋼。日本信託銀行。（吾妻商事）。沖電氣。新潟水力電氣。水戸電氣鐵道。理化學興業。橫濱貯蓄銀行。
- 京濱運河。
- 淺野物產。

關係會社

- 日本石油。
- 上毛電力。
- 日本航空輸送。
- 東亞興業。
- （三井信託）。

安田一族出資額及重役名表

氏名	出資額（千円）	同上割合（%）	重役名
安田善次郎	六,〇〇〇	二〇・〇〇	保善社社長、安田銀行取締役頭取。安田貯蓄銀行取締役頭取。安田信託取締役社長。東京灣埋立取締役。淺野セメント取締役。
安田新	四,二〇〇	一四・〇〇	
安田善四郎	四,二〇〇	一四・〇〇	保善社理事。安田銀行取締役。日本晝夜銀行取締役頭取。栃木農商銀行取締役頭取。第三十六銀行取締役頭取、富山銀行取締役頭取。正隆銀行取締役頭取。安田生命保險取締役。安田貯蓄銀行取締役、安田商事取締役。博多灣鐵道汽船取締役。安田信託監査役。
安田善五郎	三,〇〇〇	一〇・〇〇	保善社理事。帝國海上火災保險取締役社長。東京火災保險取締役社長。安田生命保險取締役社長。東洋火災保險取締役社長。東京灣電氣取締役社長。安田銀行取締役。安田貯蓄銀行監査役。太平火災海上保險取締役。東京建物取締役。帝國製麻取締役。沖電氣取締役。安田商事監査役。淺野セメント監査役。理化學興業監査役。
安田柳子	三,〇〇〇	一〇・〇〇	
安田善衛	二,四〇〇	八・〇〇	帝國海上火災保險取締役。十七銀行取締役。
安田善助	二,四〇〇	八・〇〇	保善社理事。安田商事取締役社長。帝國製麻取締役社長。小湊鐵道取締役社長。奉天製麻取締役社長。肥後銀行取締役頭取。東京火災保險取締役。東洋火災保險取締役。大垣共立銀行取締役。熊本電氣取締役。正隆銀行監査役。興亞起業監査役。安田銀行監査役。富山銀行監査役。中國鐵道取締役。太平火災海上保險監査役。
安田信太郎	二,四〇〇	八・〇〇	
安田善兵衛	一,八〇〇	六・〇〇	保善社理事。第三銀行取締役會長。大垣共立銀行取締役頭取。第九十八銀行取締役頭取。十七銀行取締役頭取。四國銀行取締役頭取。日本晝夜銀行取締役。安田生命保險監査役。熊本電氣取締役、興亞起業取締役。
安田次郎	六〇〇	二・〇〇	
安田善彦	—	—	安田貯蓄銀行取締役、栃木農商銀行監査役。第三十六銀行取締役
合計	三〇,〇〇〇	一〇〇・〇〇	

もすれば、種々細かな所迄口出しをして番頭任せにして置かない。安田生命の善五郎など、その代表的なものだ。そこで先づ安田一族の肩書と保善社に對する出資額を見るであらう。

併し乍ら、安田善何々と稱する一族が、如何に出娑張らんとしても、一身に十數會社の事務を一々指揮することは到底出來ない。況んや、坊ちゃん育ちの御曹子に、その實力があらう筈がない。何うしても優秀な番頭が要る。然るに、最近、安田王國に對し色々の流言蜚語が起り、（此の流言蜚語については後に關說する。本文第五節末尾参照）此の難局打開のため、人材を他に求めて、陣容を新にしたことは、宛かも、かつて三井が難局に立つて、人材を他に求め、中上川などを入れて、陣容を立て替え、以て番頭政治を確立し、今日に於ける盛大の基礎を築いたとよく似てゐる。若し、之を機緣にして、安田王國が人材登用の新組織を確立し得るならば、最近、安田王國を襲つた流言蜚語は、安田王國の基礎を更に鞏固にした極めて安價な費用であつたわけだ。而して、いま安田王國に於て、かつての三井の中上川の大役を背負つて立つものは森廣藏だ。

扨て、安田王國に於ける番頭政治の現狀であるが、安田一族に睨を利かすものは顧問の高橋と云ふ陣立である。しかし、事實、安田王國の總理大臣格の仕事は主席理事の森が司る。而し

て、次の理事の四條は內部掛りを專掌し、殘る理事竹內は關係會社掛りの大臣だ。この外銀行の兵須だの、信託の濱崎だの、東京火災の長松、南だのと云ふ大臣級や次官級の番頭が居る。だが總じて安田王國には、未だ、三井のやうに優秀な番頭や手代が揃つてゐない。これが安田王國從來の缺點だつた。かくて、最近、高橋、森、四條等の人材輸入を見たのであるが、今後、これ等新人の指導に由つて、どれだけ、此の缺點が補はれるに至るかゞ見ものだ。

安田王國の人的方面に於ける今一つの缺點は、所謂學校出と子飼ひの爭ひだ。結城放逐もその一現象だと見る者がある。兎に角安田は、陣容を新にして間がないだけに、子飼上りの譜代と輸入人材の外樣の二派があつて、兩者の間に於ける人的融和が未だ出來てゐない。しかし、結城放逐事件に對し、安田王國が如何に高價を支拂はざるを得なかつたかの體驗（本文第五節末尾參照）が生々しいだけに、今度は、ドチラも愼重にやるだらう。次にこれら安田王國の番頭手代を、その重なる配置について見れば、次の如くである。

安田保善社		安田銀行	兵須久
社長	安田善次郎	日本晝夜銀行	齋藤恂
顧問	高橋是清	安田貯蓄銀行	菅原大太郎
理事	森廣藏	安田信託	濱崎定吉
同	四條隆英		戸澤芳樹
同	竹內悌三郎	安田生命	柳谷己之吉
庶務部長	丹治經三	東京火災	長松篤棐
業務部長	川崎淸男		南莞爾
		東京建物	宮本繁次郎
		安田商事	池田茂
		帝國製麻	阪本治郎

これらの番頭手代は安田の一族と共に、安田王國の中樞的要位を占める外、他面安田系事業の多くに重役として君臨して居る。啻に安田系事業に重役たるばかりでなく、安田の金融資本的勢力の及ぶ所には大抵重役となり、或は更にその部下を以て重役とし、斯くて保善社の少數幹部はよく安田王國を統制して居るのである。今、安田王國の重なる番頭手代が如何に多くの會社に重役として配置されて居るか、その一班を示すと左の如くである。

森廣藏（合名會社安田保善社理事）安田銀行取締役副頭取、安田信託取締役、日本無線電信監査役、安田ビルデイング取締役會長。

竹內悌三郎（安田保善社理事）安田銀行取締役、日本酸素取締役、淺野セメント取締役。

戸澤芳樹（安田信託常務取締役）沖電氣監査役、安田ビルデイング監査役。

川崎　清男（安田保善社業務部長）中國鐵道取締役、大日本人造肥料取締役、安田ビルディング取締役、日本紙業常務取締役。

兵須　久（安田銀行常務取締役）第三銀行取締役、安田ビルディング取締役。

齋藤　恂（日本晝夜銀行副頭取）日本精工監査役、大森機械製作所取締役。

古井　由之（十七銀行取締役副頭取）大垣共立銀行取締役、四國銀行取締役、博多灣鐵道汽船監査役。

伊澤　竹衞（四國銀行常務取締役）南海水力電氣取締役。

池田　謙稻（四國銀行常務取締役）阿波鐵道取締役（代表）、南海水力電氣監査役。

戸田鉦之助（大垣共立銀行取締役副頭取）大垣貯蓄銀行取締役頭取。

濱崎　定吉（安田信託專務取締役）大興電氣常務取締役。

管原大太郎（安田貯蓄銀行副頭取）安田銀行常務取締役、昭和銀行取締役、江井ヶ島酒造取締役。

長松　篤棐（東京火災保險副社長）帝國海上火災保險副社長、東京報知機取締役會長、太平火災海上保險取締役、第三銀行監査役、東洋火災海上再保險取締役。

小松　林藏（東京火災保險常務取締役）東洋火災保險取締役、太平火災海上保險取締役、東京建物取締役、滿洲興業取締役。

南　兼一（東京火災保險常務取締役）帝國海上火災保險監査役、太平火災海上保險取締役、第一火災海上保險取締役、安田ビルディング取締役。

岩崎恒二郎（帝國海上火災保險常務取締役）太平火災海上保險監査役、東洋火災保險取締役、安田ビルディング取締役。

三宅鹿三郎（帝國海上火災保險常務取締役）東京火災保險監査役、第一火災海上保險取締役。

河路　寅三（日本紙業常務取締役）北海道土地取締役、帝國製麻取締役、合資會社必成社代表社員。

前田　一（安田商事取締役）橫濱棧橋倉庫取締役、富士製鋼監査役。

阪本　治郎（帝國製麻常務取締役）東洋製麻取締役、奉天製麻取締役。

守屋　此助（興亞起業取締役會長）平沼製材取締役社長、神中鐵道取締役社長、日本火藥製造監査役、滿洲製麻取締役、火藥工業監査役、橫濱棧橋倉庫取締役、青島電氣取締役、山東起業取締役。

丹治　經三（安田保善社庶務部長）阿波鐵道取締役、小湊鐵道常務取締役。

三、安田王國の資本網

安田王國の巨大な資本を形成するものは、第一に安田保善社の資本である。併し保善社の資本は、上記せる如く表面三千萬圓に過ぎない。然るに後述する如く、安田の支配下に在る會社だけでもその拂込資本は二億四千八百萬圓を超え、而して保善社の投資額は七千四百萬圓を超過して居る。若しそれ、安田の勢力の未だ支配的ならざる會社への保善社の投資額、一千九百萬圓を加へるならば、保善社の會社銀行に對する投資額は九千三百萬圓となる。この他保善社は山林、農園、市街地等にも投

資して居る。消息通の間には、東京市内で約十萬坪、横須賀、神戸、八幡等で約十七萬坪、岡山縣には農地が約百三十萬坪あつて、優秀の位地にあるもの少からず、その總價格は一千萬圓を超えるだらうと云はれて居る。

すると、保善社は、九千三百萬圓の有價證券投資と一千萬圓の不動産投資を行つてゐるわけになる。この中、有價證券投資は、拂込資本についての計算であるが、安田系事業は、後述の如く、三井の如く優秀なるものに乏しいが、しかし又、ボロで仕方がないと云ふものも、帝國製麻外一二を除けばない。從つて、辛く見なければ、大體に、平均拂込資本の額面だけの價値はあるであらうが、念のため、拂込額面の一割五分減と見ても約八千萬圓ある。土地價格も亦地價著落の傾向の此際、大切をとつてその半額としても五百萬圓だ。斯く、大丈夫に見て、安田保善社の所有資産は合計八千五百萬圓はあるであらう。

ところで、確かなる筋から聞くところに由ると、保善社の投資の中には、自己支配下の銀行から借入れて運用したものが約二千五百萬圓あると云ふ。之れを前記の資産から差引くと、六千萬圓になる。卽ち、安田王國の資産は、可なり大丈夫に見ても六千萬圓はあり、普通の評價に從へば大約七八千萬圓だと云ふことになる。さうすると、簿記學上から云へば、保善社所有資産から、資本金の三千萬圓、借入金の二千五百萬圓を差引いた、三千萬圓乃至四五千百萬圓は、如何なる見合ひ勘定に由つて賄はれてゐるかゞ問題になるが、確かなる筋に據つて取調べたところに由ると、その一部分は積立金、一部分は安田一族の自由資産(保善社にプールせる以外の)の運用、一部分は記帳評價上の含み(實際より安く見積る)から成り立つものである。

安田王國の自己資産は、かく、三井三菱に比して遙かに小である。にも拘らず、筆者が、安田を遇するに、三井、三菱に次ぐ大資本王國となしたわけは、その金融資本の大なる點にある。もと〱、安田は俗に金融王國と謂はれるもので、その特色は金融王たる點に在る。それだけに、その支配下に在る銀行、信託、保險會社は極めて多い。銀行が十三行、信託が一社、保險會社が六社の多きに及ぶ。從つて、これらの銀行、信託、保險會社を通じて、その支配下に掌握せる預金及び責任準備金の額も亦極めて多く、その合計は十四億二千七百萬圓を超える。それにこれら銀行、信託、保險會社の株主勘定を加算すると、全部で十六億六千二百萬圓となる。然るに、この内保善社の出資額は僅々四千六百萬圓に過ぎないから、(しかもその或る部分は、それ等銀行その他よりの借入金に依賴してゐるのであるが此の點は姑く置く。)安田はその銀行、信託、及び保險事業によ

つて、投下資本の實に三十六倍近くを、その支配下に置いて居る譯である。その詳細は次表に由つて承知せられたい。

（一）安田支配の金融資本高表（昭和三年末現在）

	安田系諸銀行十三行計	安田信託	安田系諸保險六社計	合計
株主勘定	千円 二〇四、〇六二	千円 九、一六六	千円 二、四一八	千円 二一五、六四六
預金又は責任準備金	一、一三七、二三九	二二四、一五八	八五、一九一	一、四四六、五八八
（A）合計	一、三四一、三〇一	二三三、三二四	八七、六〇九	一、六六二、二三四
（B）安田系所有資本	六五、九四三	二、五八一	三、六六五	七二、一八九
（A）に對する（B）の率	四%九二	一%一一	四%一八	四%三四
（B）に對する（A）の率	二〇三%四	九〇四%〇	二三九%〇	二三〇%三
（C）保善社所有資本	四三、三二四	二、二六八	七九五	四六、三八七
（A）に對する（C）の率	三%二三	〇%九七	〇%九一	二%七九
（C）に對する（A）の率	三〇九%七	一〇二八%七	一一〇二%〇	三五八%四

（備考）安田系所有資本の算出の仕方については第二表備考を見よ。

安田王國の資本力は大體この金融資本（預金、準備金及安田持株以外の株主資産）と、保善社の資産が源泉である。他に安田一族の資産、安田系重役の資産、及び支配的事業會社株主勘定中の若干があるが、最も活動力に富んだものは保善社の資産とこの金融資本である。而して保善社の資産を、前述せる如く六千萬圓とすると、安田はその資産の約二十八倍、八千萬圓とすると、約二十一倍の金融資本を掌握してゐることになる。即ち、安田の資本力は大摑みに云へば、その支配下に立つ金融資本だと云ふことになる。

然らば安田王國は、この豐富なる金融資本を以て、幾何の事業資本を支配して居るか。例に依つて、これを直系會社とその子會社、傍系會社とその子會社、及び關係會社に分類して、その資本の分布狀態を點檢するであらう。

直系會社には保善社の資力が最も集注して投資せられて居る。にも拘はらず、その總拂込資本金一億五千九百萬圓に對する保善社の出資額は、僅かに五千一百萬圓足らずで、割合にして三割二分に過ぎず、安田系全體の出資額でさへも、七千六百萬圓餘、四割八分に過ぎない。併し株式會社の議決權は拂込金に依つて左右されない。株數に依つて左右される。そこで十二の直系銀行會社に於ける、夫々の保善社の所有株式數の總株式數に對する割合を求めるに、五割以上のもの四社、五割以下のもの八社、と云ふ有樣である。更に安田系合計の所有株式數が總株式數に對する割合を求めると、五割以上のもの七社、五割以下のもの五社と云ふ狀態である。三井、三菱系直系會社の株式が、その大部分（例へば八九割迄）夫々の財閥の手中にあるのと比較すると、色々な意味に於て面白い對照を成してゐる。詳しくは第二表を見よ。

（二）直系會社資本支配表（昭和三年末）

會社名	拂込資本金	安田保善社所有株式數割合	同上拂込金額	安田系所有株式數割合	同上拂込金額
安田銀行	千円 九二、七五〇	三六%	千円 二九、一二二	五四%	千円 四八、五八七
安田貯蓄	二、〇七三	一〇〇	二、〇七三	一〇〇	二、〇七三
日本晝夜	六、二五〇	一〇〇	六、二五〇	一〇〇	六、二五〇
第三銀行	四、〇〇〇	四四	一、一三八	四四	一、一三八
安田信託	七、五〇〇	三〇	二、三六八	三四	二、五八一
安田生命保險	七五	一〇〇	七五	一〇〇	七五
東京火災保險	二、五〇〇	二九	七一四	三九	九五三
安田商事	五、八四四	一〇〇	五、八四三	一〇〇	五、八四三
帝國製麻	二〇、二五〇	一〇	八七四	八	一、八〇六
安田ビルディング	二、五〇〇	五	一二五	一〇〇	二、五〇〇
東京建物	六、二五〇	一〇	五三〇	二八	一、七五四
日本紙業	九、四九六	四五	一、六六九	一七	三、二〇九
合計	一五九、四八八	＊三三	五〇、六三〇	＊四八	七六、六六八

（備考）本表の安田所有拂込資本額は保善社調べの現實拂込額である。以下諸表亦同じ。但し＊印は總拂込資本金に對する保善社乃至安田系拂込金の割合を筆者の計算せるものである。

これらの直系會社は、前掲系統圖に明かなる如く、又少からぬ子會社と孫會社を持つて居る。この內、安田の支配力の決定的な子會社が、十二ある。この直系會社の支配的子會社に於ける安田系の拂込資本が、各會社の拂込資本金に對する割合は、第三表の如く、夫々の會社によつて可成り異るが、分明の分のみの平均は四五%三一である。

（三）安田直系會社の支配的子會社（大體昭和三年末）

會社名	公稱資本	拂込資本	安田系所有株式 金額	安田系所有株式 割合
日本精工	千円 七〇〇	千円 六四八	千円 ＊八八	一三・七%
帝國海上火災	一〇、〇〇〇	二、五〇〇	＊九四〇	三七・〇〇
東京瓦斯電氣	五、〇〇〇	二、〇〇〇	＊九八六	四九・三〇
第一火災海上保險	五、〇〇〇	一、二五〇	＊四六九	三七・四九
東洋火災保險	五、〇〇〇	一、二五〇	七五三	六〇・〇〇
大正製麻	三、〇〇〇	二、三〇〇	七六七	三三・三
本天製麻	一、五〇〇	七五〇	三一一	四一・〇〇
臺灣製麻	一、四〇〇	七〇〇	三五〇	五〇・〇〇
滿洲興業	五、〇〇〇	二、五〇〇	一、六七三	六六・〇〇
小計	三六、六〇〇	一三、八九八	六、二九七	四五・三一
日本酸素	一、五〇〇	一、一一五	—	—
大興電氣	二、〇〇〇	一、〇〇五	—	—
山崎商店	二、〇〇〇	二、〇〇〇	—	—
合計	四三、一〇〇	一八、〇四八	△八、二七四	△四五・三一

（備考）＊印は安田所有株式の總株數に對する割合を拂込資本に乘じて推算したものである。以下諸表同じ。又△印は安田系拂込資本不明の爲、判明せる部分と同じ割合を持てるものとして、筆者の推算せるものである。以下諸表同じ。尚ほ割合は安田系所有株數の總株數に對する割合を示せるものである。以下諸表同じ。

安田の直系會社には、支配的な子會社の外に、準支配的な子會社と孫會社がある。それが全部で廿一社あり、その總拂込資本金は不明の小會社三社を除き、一億一千四百萬圓足らずである。この內、安田系拂込資本が分明せるものは五社であるが、その總拂込資本に對する割合は僅かに六%七四である。第四表の示す通りである。

直系及び傍系の子會社中には、以上述べた支配的及び準支配的子會社の外に、安田の勢力の未だ支配的でないものが、前掲系統圖の如く、全部で十八社ある。これらの諸會社は、安田と大した關係もないから、紙面の制限上、その一々の資本や安田の出資額は省略するが、その合計は公稱資本金六億四千萬圓、拂込資本金四億四千九百萬圓餘である。

次に傍系會社である。その詳細は第五表に讓るが、今簡單に說明すると、傍系會社は全部で十八社、その合計拂込資本は六千七百萬圓近くになる。この內、安田保善社及び安田系所有株式の判明せるものは十四社であるが、それによると保善社所有の株式は三六%にして、安田系全體の所有せる株式は三九%である。卽ち傍系諸會社に於ては、安田王國は自己の資本の約二倍六割の資本を支配して居ることになる。

（四）安田直系會社の準支配的子及孫會社（大正昭和十三年末）

會社名	資本金（千圓）	拂込資本（千圓）	安田系株式 金額（千圓）	安田系株式 割合（%）
淺野セメント	一〇六、三三〇	四五、〇二三	＊二一七	四・八一
東京灣埋立	三二、五〇〇	一二、五〇〇	＊二、六六七	二一・三五
沖電氣	五、〇〇〇	三、一二五	＊一、三九五	四四・六五
南武鐵道	六、〇〇〇	三、八七六	＊一〇三	二・六七
鶴見臨港鐵道	二三、〇〇〇	一、八〇〇	＊九〇	五・〇〇
小計	一七二、八三〇	六六、三三三	＊四、四七二	六・七四
京濱運河	五、〇〇〇	五〇〇	―	―
東洋汽船	八、一二五	五、六六八	―	―
淺野造船所	三〇、〇〇〇	一六、四九八	―	―
淺野小倉製鋼所	一五、〇〇〇	六、一九九	―	―
淺野物產	一、〇〇〇	一、〇〇〇	―	―
淺野石材工業	一、〇〇〇	四六〇	―	―
淺野ブロック製造	一五〇	一五〇	―	―
日本セメント	四、一二五	四、一二五	―	―
日本スレート	一、〇〇〇	四〇〇	―	―
淺野スレート	五〇〇	一二五	―	―
日本ヒュムコンクリート	一、〇〇〇	五〇〇	―	―
五日市鐵道	二、〇〇〇	一、四五〇	―	―
満洲製麻	一、〇〇〇	二五〇	―	―
日本コンクリート	―	―	―	―
鐵筋コンクリート	―	―	―	―
尼ケ崎埋立	―	―	―	―
合計	二三三、八〇〇	一一三、九八五	△七、六八三	△六・七一

（五）傍系會社資本支配表（昭和三年末）

會社名	拂込資本金（千圓）	安田保善社所有株式割合（%）	同上金額（千圓）	安田系所有株式割合（%）	同上金額（千圓）
正隆銀行	五、六三四	三七	二、〇三九	五二	二、九四七
第三十六銀行	一、五〇〇	一九	二八〇	一九	二八〇
十七銀行	四、六八八	六〇	二、一〇三	六〇	二、一〇三
第九十八銀行	五〇八	三九	一一八	三九	一一八
栃木農商銀行	六六五	一〇〇	六六五	一〇〇	六六五
四國銀行	六、七五〇	一三	八八六	一三	八八六
大垣共立銀行	三、二二九	八	三二九	八	三二九
富山銀行	二、二七八	八	二二一	八	二二一
太平火災海上保險	一、一五〇	六	七六	三六	四七六
中國鐵道	四、三二〇	一〇	八〇七	二一	九〇三
小湊鐵道	一、八〇七	七三	一、九一一	七三	一、九一一
興亞起業	五、〇〇〇	八〇	四、三七三	八〇	四、三七三
横濱棧橋倉庫	二、五〇〇	六〇	五四三	六〇	五九三
大森機械製作所	四〇〇	※二七	一一七	二七	一一七
小計	四一、六二一	三六	一四、八〇七	三九	一六、〇三一
肥後銀行	五〇〇	―	―	四〇	二二六
阿波鐵道	一、一二三	―	―	二一	二七一
熊本電氣	一八、九〇〇	―	―	―	―
博多灣鐵道	四、七四八	―	―	―	―
合計	九六、九九一	△三六	△一四、一一七	△三九	△一六、一二七

傍系會社には亦支配的小會社がある。併し乍ら、安田王國のそれは僅々三社に過ぎず、その拂込資本又四百萬圓强に過ぎない。而して遺憾なことには、安田系親會社がどれだけの資本を以て、これらの子會社を支配して居るか、今、筆者の手許の資料ではこれを知ることが出來ない。

（六）傍系會社の支配的子會社表（大體昭和三年末）

會社名	資本金（千圓）	拂込資本（千圓）	安田系株式 拂込資本（千圓）	安田系株式 同上割合（%）
南海水力電氣	六〇〇	六〇〇	―	―
大垣貯蓄銀行	四、五〇〇	三、三三九	―	―
釧路土地倉庫	三〇〇	三〇〇	―	―
合計	五、四〇〇	四、二三九	―	―

これで安田王國の直系會社、傍系會社、及びそれ等の子會社に關する資本網に就て、一通りの說明をしたことになる。併し、安田も亦三井、三菱と同じく、保善社自ら各種の事業に投資して居る。又保善社とは別に、僅かではあるが、安田一族の投資して居るものもある。併し、これらの會社に對しては、安田は重役を出すとか、單に大株主の位置を擁するとかに止まり、未だ支配的でなく、筆者の所謂關係會社と稱し來つたものである。而して、その關係會社は東京電燈外二十三社で、その拂込資本金は實に十億三千二百萬圓に上る。その內、保善社の投資せるものは、判明の分十一社平均に於て、僅かに一%八五を占むるに過ぎない。詳しくは第七表を參照せられよ。

（七）安田保善社の直接關係せる諸會社表（昭和三年末）

會社名	資本金	拂込資本	保善社持株 金額	保善社持株 割合
日本石油	千円 八〇、〇〇〇	千円 五六、〇〇〇	丰 千円 六五五	一・一七%
東洋製鐵	三六、〇〇〇	三〇、六〇〇	丰 五二〇	一・七〇
東京電燈	四〇七、一四九	四〇七、一四九	丰 一三、三九五	三・二九
新潟水力電氣	一二、〇〇〇	九、三三〇	丰 三五〇	三・三七
上毛電力	一五、〇〇〇	五、二五〇	丰 三五〇	六・六七
南滿洲鐵道	四四〇、〇〇〇	三五五、一五六	丰 九五九	〇・二七
日本航空輸送	一〇、〇〇〇	二、五〇〇	丰 四四	一・七五
日本無線電信	二〇、〇〇〇	六、七二五	丰 八七	一・二九
東亞興業	二〇、〇〇〇	三、〇二三	丰 三八一	三・〇〇
帝國ホテル	六、〇〇〇	五、七〇〇	丰 一三	二・三〇
日本信託銀行	一七、五〇〇	一七、五〇〇	丰 八八	〇・五〇
小計	一、〇六三、六四九	九〇八、九三三	丰 一六、八五二	一・八五
東・信電氣	四一、七九〇	三三、八三八	—	—
吾妻川電力	八、六二五	八、六二五	—	—
東京發電	六八、三〇〇	四四、八三〇	—	—
水戸電氣鐵道	一一、〇〇〇	三、三三三	—	—
大日本人肥	三五、〇〇〇	二五、五五〇	—	—
富士製鋼	三、一〇〇	三、一〇〇	—	—
理化學興業	三、〇〇〇	九〇〇	—	—
日本電氣證券	一〇、〇〇〇	五、〇〇〇	—	—
横濱貯蓄銀行	五〇〇	四七二	—	—
（三井信託）	三〇、〇〇〇	七、五〇〇	—	—
（日英釀造）	二、四〇〇	一、九〇〇	—	—
（東亞產業）	一、二五〇	一、二五〇	—	—
（吾妻商事）	五、〇〇〇	一、二五〇	—	—
合計	一、二七〇、五七四	一、〇三三、四七九	△一九、一〇一	△一・八五

（備考）括弧を附したるは、安田一族の所有せるものである。

四、安田王國の資本的支配力

安田王國の掌握する金融資本が、各種產業に對して如何に浸潤して行つて居るかは、若干の調査漏れはあるであらうが、前節に於て可成り具體的にこれを明かにした。いま、更に安田王國の支配的諸會社を、前節說述の分類に從つて總括すると、その合計資本は、公稱六億八千八百萬圓餘、拂込三億六千二百萬圓餘となる。この內、安田の支配が決定的なものの拂込資本は二億四千八百萬圓、準支配的なものは一億一千四百萬圓である。詳細は第一表に示す通りである。

（一）安田支配の諸會社資本表

	(A)安田の支配下に在るもの 公稱資本	(A)安田の支配下に在るもの 拂込資本	(B)同上準支配下のもの 公稱資本	(B)同上準支配下のもの 拂込資本	以上合計 公稱資本	以上合計 拂込資本
直系十二社	千円 三〇三、五八五	千円 一五九、四八八	千円 —	千円 —	千円 三〇三、五八五	千円 一五九、四八八
傍系十八社	一二四、七五三	六六、九九二	—	—	一二四、七五三	六六、九九二
直系子會社	四二、一〇〇	一八、〇四八	二二二、八三五	一一三、九八五	二六四、九三五	一三二、〇三三
傍系子會社	五、四〇〇	四、一一九	—	—	五、四〇〇	四、一一九
合計	四六五、八三八	二四八、六四七	二二二、八三五	一一三、九八五	六八八、六七三	三六二、六三二

第一表に示せるもの、外、安田の勢力が未だ支配的ではないが、兎に角その金融資本の若干浸透せるものには、保善社の關係會社に（安田一族の投資會社を含む）公稱十二億七千四百萬

圓、拂込十億三千二百萬圓と、直系及び傍系會社の關係會社に公稱六億四千萬圓、拂込四億四千九百萬圓とがある。斯くて、安田の金融資本の波及して居るもの丶合計は、公稱が二十六億三百萬圓、拂込が十八億四千四百萬圓となる。然るに安田支配の銀行會社には、二三の保險會社は特別であるが、その他にはズバ抜けて良いものはない。それかと云つて二三のものを除くと、又非常に惡いと云ふものもない。從つて、その實際價値も大體拂込程度と押へて、大過ない見込である。

この他、一口に安田王國關係の會社資本と云ふ場合には、安

(二) 安田支配及關係諸會社資本高表

	公稱資本 千圓	拂込資本 千圓
安田支配諸會社	六六八、六七三	三六三、六三三
安田保善社關係會社	一、二七四、五七四	一、〇三二、四七九
直系及傍系關係會社	六四〇、三〇九	四四九、二七一
合計	二、六〇三、五五六	一、八四四、三八三
安田保善社	三〇、〇〇〇	三〇、〇〇〇
總計	二、六三三、五五六	一、八七四、三八三

田保善社の三千萬圓をも加算しなければならぬ。さうすると、安田王國の總關係會社拂込資本——資本實價は、別掲第二表の如く、十八億七千四百萬圓となる。併し、保善社を加算することは、明かに資本の二重計算となる。直系又は傍系會社の相互投資及び子會社への投下資本だけ二重計算になる。併し、この程度の二重計算は、その金高が左程大でないばかりか、他に調査漏れの分もあるであらうから、彼此相殺されるものとして、この儘計算しても大過ないであらう。

(三) 安田系會社資本と安田の投下資本

諸會社の位置	公稱資本 千圓	拂込資本 千圓	安田系所有 千圓	同上割合 %	保善社所有 千圓	同上割合 %
安田保善社	三〇、〇〇〇	三〇、〇〇〇	三〇、〇〇〇	一〇〇・〇〇	三〇、〇〇〇	一〇〇・〇〇
直系十二社	三〇三、五八五	一五八、四八八	七六、六六八	四八・〇〇	五〇、六三〇	三二・〇〇
傍系十八社	一二四、七五三	六六、九九二	二六、一二七	三九・〇〇	二四、一一七	三六・〇〇
支配的直系子會社	四三、一〇〇	一八、〇四八	八、一七四	四五・三二	—	—
支配的傍系子會社	九、四〇〇	四、一一九	?	?	—	—
以上小計	四八〇、八三八	二四七、六四七	一一〇、九六九	四四・六三	七四、七四七	三〇・〇六
準支配的直系子會社	一八七、八三五	一一三、九八五	七、六八三	六・七四	—	—
準支配的傍系子會社	—	—	—	—	—	—
以上合計	六六八、六七三	三六一、六三二	一一八、六五二	三二・七一	七四、七四七	二〇・六七
保善社關係會社	一、二七四、五七四	一、〇三二、四七九	一九、一〇一	一・八五	一九、一〇一	一・八五

そこで問題となるのは、この巨多な資本の中、安田王國それ自らの投下資本が、どれだけあるかと云ふ點である。先づ各種

系統の會社資本中、安田系、又は安田保善社の投下資本の割合を一表に纏めると、次の如くになる。（一三三頁）

右に依ると、安田系の資本は、直系十二社に於ては四八%であり、傍系十八社に於ては三九%である。而して直系會社がその支配的子會社に投下して居る資本は、その子會社全資本の四五%三一である。斯くてこの表面的平均は、合計約四億六千六百萬圓の拂込資本中、その四四%六三を安田系資本が占めて居ることになる。即ち、安田の直系會社、傍系會社、及びそれらの子會社中支配的關係にあるものの投資額は、頗る高率であつて、平均して四割四分に上る有樣である。これらの銀行會社に於ける安田の支配力が如何に決定的であるかは、これに依つて容易に窺知し得るのである。

之に反し、直系會社の投資して居る準支配的子會社のそれは、僅かに六%七四に過ぎない。だが、これらのものに就ては、單なる資本關係以外に、金融關係その他に依つて、準支配權が確立されて居る譯である。更に、安田保善社の支配權不及權の所謂關係會社に對するそれを見るに、その率は僅々一%八五に過ぎない。

安田王國が、その投下資本の何倍に相當する資本を支配して居るかと云ふ問題に關する以上の説明は、しかし、未だその本質を突きとめない皮相の見方である。何故かと云ふに、子會社に對する安田系所有資本は、安田王國それ自身の投資ではなくて、安田王國がその幾割かを占めて居るに過ぎぬ直系又は傍系會社の投下資本に外ならないからである。從つて安田王國が、その投下資本に比較して、眞實何倍の會社資本を支配して居るかを見るには、右の點を考慮しなければならぬ。そこでこの點を考慮して作成したのが、次に掲ぐる第四表である。これによると直系會社及びその子會社に於て、安田王國はその投下資本七千六百餘萬圓に對し、三億一千五百萬圓餘の資本を支配して居る。即ち四倍強の資本を統制して居る。次に傍系會社に就て見ると、安田は二千六百萬圓の投下資本で、七千百萬圓の資本を支配して居る。三倍近くの資本を統制して居ることになる。詳細は第四表に讓る。（尚ほ、安田王國が、その自己資産の幾倍を支配してゐるかの眞相を知るには、安田保善社が、已述の如く二千五百萬圓の借入金に由つて投資してゐることをも考慮せねばならぬが、こゝには、それがいかなる割合まで株式投資に利用せられてゐるか資料不十分につき之を略し、以上の注意を促すに止めておく。）

第四表を見て讀者の看取せられることは、直系及びその子會社關係に於て、その投下資本に對し四倍強の資本を支配して居

(四) 安田の支配會社資本と安田の投下資本との割合

	直系會社	傍系會社	合計
(イ)親會社拂込資本	千円 一五九、四八八	千円 六六、九九二	千円 二二六、四八〇
(ロ)支配的子會社同上	四二、一〇〇	四、一二九	四六、二二九
(ハ)以上小計	二〇一、五八八	七一、一一一	二七二、六九九
(ニ)準支配的子會社同上	一一三、九八五	—	一一三、九八五
(ホ)總計	三一五、五七三	七一、一一一	三八六、六八四
(ヘ)親會社に於ける安田系所有高	七六、六六八	二六、一二七	一〇二、七九五
(ト)同上安田保善社所有	五〇、六三〇	二四、一一七	七四、七四七
(ヘ)に對する(ハ)の%	二六二%九	二七二%二	二六五%三
(ト)に對する(ハ)の%	三九八%二	二九四%八	三六四%八
(ヘ)に對する(ホ)の%	四一一%六	二七二%二	三七六%二
(ト)に對する(ホ)の%	六二三%三	二九四%九	五一七%三
(イ)に對する(ホ)の%	一九七%九	一〇六%一	一七〇%七

る安田王國が、傍系及びその子會社に於ては、その投下資本に對し、僅か三倍弱の資本より支配して居ないことである。財閥の資本統制法としては、直系から傍系、支配的から準支配的と移るに從ひ、段々僅かの資本を以て、段々多くの資本を支配してゆくやうになるが普通である。三井の如きは典型的にさうであつた。所が、安田はさうでない。これは直系會社たる安田銀行の子會社中に、寧ろ傍系會社と目すべき淺野系の澎大なる會社が含まれて居ることや、安田王國の本據、安田銀行の資本構成そのものが、合同合併に由るものなるの結果、三井三菱と異り、安田以外の分子が半分近い資本を有して居るなどの事情にも由るが、又、金融業を中心として膨脹して來た安田王國が、先代以來銀行一點張主義を振翳して他業の兼營を避け、世人の信用を博すべく自分で、多くの事業に關係しなかつたが爲、その支配會社の多くは銀行、保險等の金融業か、鐵道その他の獨占事業に限られ、從つて、之を支配する方法は投下資本以外に途なく（三井、三菱に於ては、或は販賣關係で、或は原料供給關係で、又は金融關係等、投下資本以外の力で支配し得るが）、勢ひ一旦關係するとなると相當深入して行つたから、その資本統制が斯く歪められた形になつて現はれたのではあるまいか。

五、安田系事業の特性

安田系事業の特性は金融業中心と云ふ點にある。今、安田の支配下にあるものに就て見るに、その總拂込資本二億四千八百萬圓中、銀行、保險、信託の如き金融業に投ぜられたものは實に一億五千萬圓を超え、全體の六〇%五二を占めて居る。支配關係にあるもの以外、更に準支配關係にあるものを加へると、その總拂込資本は三億六千二百萬圓となるが、それに對しても、

尙ほ四一%四八を占めて居ることになる。次表の如し。

（一）安田王國の事業に於ける金融業の優位

	安田の支配下に在るもの 公稱資本	安田の支配下に在るもの 拂込資本	安田の支配及準支配下に在るものゝ合計 公稱資本	安田の支配及準支配下に在るものゝ合計 拂込資本
(A)直系傍系諸會社合計	千円 三〇七、〇六八	千円 二四八、六四七	千円 六八八、六五三	千円 三六二、六三三
(B)安田系銀行、保險、信託合計	一九三、三四五	一五〇、四二七	一九三、三四五	一五〇、四二七
(A)に對する(B)の割合	六二%九六	六〇%五〇	二八%〇八	四一%四八

財閥が金融業を營むのは、獨り安田ばかりでない。三井も三菱も共に有力なる銀行、信託、保險會社を經營して居る。併し、三井三菱のこれら金融業經營は、その發生した歷史的理由は兎に角として、現に、その財閥內に於て營みつゝある職能から見れば、單に一個の金融業のために金融業を營むでゐるものでない。意識せると意識せざるとに拘らず目的は他にある。卽ち、その統制する各種事業に豐富な資金を直接關接供給すべく、資金を掻き集めるのが主目的だ。繰返して云へば、掻き集めた資金を以て支配下の產業資本を强力化し、更に廣範圍な產業を支配せんとするにある。所が、安田の金融業經營には、先代善次郞以來さうした意味が少なかつた。少くとも意識的には金融業を金融業として營む意向が強く、銀行單一主義に膠着して、他業經營を極度に警戒して來た。

斯く安田は銀行業一本槍主義を守つて、他業の兼營を極度に警戒したが、銀行に對してだけは、機會あれば、遠慮なく安田王國中に之を併吞した。蓋しその方面ならば人間があつた關係だ。現に安田系の銀行だけでも現在十二行あるが、安田の創立に成るものは、安田銀行と安田貯蓄の二行より無い。他は王國內に併存したものだ。更にこの安田系十二行なるものが又多數銀行を併吞し買收して成つたものである。例へば、安田銀行は安田、第三、百三十、明治商業、肥後、日本商業、二十二、信濃、京都、根室、及び神奈川の十一行が合併したものであり、安田貯蓄銀行（舊稱金城貯蓄銀行）は、中加、八王子、神奈川、淺野晝夜、福岡の諸貯蓄銀行、及び小石川貯藏銀行、横濱中央銀行の七行を合併したものである。かくて安田系の銀行は、現在十二の本店と、百四十三の支店出張所を擁して、全國に銀行網を張つて居る。

金融一本槍で進んだ安田は、軈て銀行以外の金融事業たる保險、信託の領域に迄進出した。安田信託は開業以來順調な發展をして、その信託勘定は三井信託に次ぎ、我が國信託事業の第二位を占めてゐる。斯く信託の成績は宜いが、保險も亦惡くない。安田系保險會社には安田生命、東京火災等仲々良いものが

ある。例へば、安田系普通銀行が約十億の預金を有して、全國普通銀行の預金合計額九十二億一千六百萬圓に對し、一割以上の預金を持つて居るのに比較すれば少からず劣るが、それでも安田系保險會社は六千七百萬圓餘の準備金を擁して、全國保險會社の準備金十億五千三百萬圓に對し、六%四二を占めて居る。次表の如し。

	拂込資本金（千圓）	預金又は準備金（千圓）	合計（千圓）
(A)安田系普通銀行	一二八、八二〇	九九九、八二五	一、一二八、六四五
(B)全國普通銀行	一、三八〇、三九五	九、二一五、九四八	一〇、五九六、三四三
(A)の(B)に對する割合	九%三三	一〇%八五	一〇%六五
(A)安田系保險會社	八、八二五	六七、六三一	七六、四五六
(B)全國保險會社	＊一二三、四〇四	＊一、〇五三、〇九四	＊一、一七六、四九八
(A)の(B)に對する割合	七%一五	六%四二	六%五〇

（備考）＊印以外は保善社調で本年六月末現在。＊印は昨年十二月末現在。又保險會社の準備金中には責任準備金以外支拂備金を含む。

併し、安田王國程の大金融資本を掌握するに至れば、如何に金融業一本槍で押通さうとしても、それは事實不可能だ。現に、安田銀行の本年六月末の預金中、六大都市以外のものは三億一千三百萬圓だが、同じく貸出は僅かに一億二千四百萬圓だ。之れを六大都市のそれが預金三億九千萬圓、貸出三億七千四百萬圓なるに對比すれば明かなる如く、地方で集めた資金を地方で消化することは到底困難だ。そこで、之を大都市に持つて來るが、こゝも貸出より預金が多い。勢ひ餘力の大部分を有價證券に放資するが、利廻りの關係上、益々、社債及株券投資が増大する傾向にあること、啻に安田銀行のみならず、他の大銀行共通の現象だ。かくて、これ等社債又は株券所有を通じて、當該事業會社との關係が漸次密になる。しかし、それは、社債所有であらうが、株式投資であらうが、貸出の形式を取らうが、何れにしても可成りの危險が伴う。從つて干渉となり、制肘となり、最後には管理となる。安田は本來の銀行一本槍主義からこれを警戒したもの丶如くだが、しかし、後述の如き金融資本の必然的な流れを阻止することは到底出來なかつた。又、將來も出來るものでない。斯くて、安田自らが創立した東京建物、安田商事の二社以外、現に、中國鐵道、小湊鐵道、滿洲興業、興亞起業、日本紙器、帝國製麻等を併呑することになつたのだ。卽ち、銀行一本槍的行き方はこゝに行詰を示してゐるのである。

顧るに、我が普通銀行の預金は、英米のそれと異り、高い利子を支拂ふ定期預金が過半を占め、その資金源そのものが、已に、低利の商業金融のみに利用しては引合はず、嫌でも之を産

業資本に利用せねばならぬ性質のものである。加ふるに、他方商業金融の需要方面を見ても、日本現在の如き小規模の商工業では、優秀なる商業手形の量は極めて僅少である。勢ひ、銀行預金(信託預金及び保險會社の準備金も亦然り)の集中愈々增大すると共に、必然に、その少からぬ部分を、産業資本として利用せねばならない。

然るに、安田王國は、先代善次郎以來、原則として、銀行單一主義を固守して、他の産業に自ら直接關係することを極力避け、銀行預金の利用は、專ら、他の産業資本家に對する貸出の形式で、之を運用する方法を採つたのである。ところで、問題は、第一にその貸付先の信用調査であり、第二は萬一貸付が固定して、その債權確保上自らその事業を引受けざるを得ざる場合に立至つた際、之を如何に處理するかである。三井及三菱財閥に於ては、貸付先の信用調査には、その方面の實際に通じてゐる「物産」乃至「商事」等々の事業專門家を利用することが出來る。又、萬一の場合には、それ等の手に由つて之を引取り經營して、債權を確保することが出來る。例へば、ダイヤモンド社長石山賢吉氏は他の記事の中に次の如く述べてゐる。「私は三井銀行の池田成彬氏に會つた。話の序に東洋モスリンの事が出たから、私は工場を見た感想を語り、三井銀行が同社へ二百萬圓の金融をする事の危險を述べた。處が、池田氏は……三井物産が入念に調査して大丈夫と云ふのだから心配はないと云つて居た」云々、之に由つて、大財閥の銀行が、如何に、同一系統の産業家と協力してゐるかの一班を伺ひ得る。

扨て、安田王國であるが、已述の如く、原則として金融業一本槍で、他の産業兼營を廻避して來た。こゝに、われ等は日本に於ける最も代表的な金融王國を見出すのであるが、しかし、その當然の結果として、已述三井三菱の如き、産業經營(金融以外の)に對するスタッフを持つてゐない。しかも、金融資本は三井三菱以上を擁してゐるのだ。なる程、安田王國は調査部を持つてゐる。だが、調査部の知り得ることは專ら表面的のことで事業會社の機微などは分るものでない。更に又、萬一、その貸付先の債權確保のため、好むと好まざるとに拘らず、自ら之を經營監督せざるを得ざるに至つた場合、安田王國には之を引受けるスタッフがない。それだけに、債權確保に當つても、三井、三菱の如く腰の強いことが出來ない。後述の如き、安田と淺野との關係が出來上るに至つた根因は茲に在ると思ふ。

右は、安田王國の最大弱點であると共に、又、見方に由つては、金融王國としての最も望ましい行方であるとも云へる。蓋し、金融業が、他の産業を兼營することは、極めて危險のこと

だ、と云ふが如き信條が、由來、少からず我が國の學者及び財界人を支配してゐるからだ。恐らく、安田王國は、此の立場に於て、寧ろ、右の點を弱點と見ずに強點だと云ふであらう。然り、商業銀行主義から云へば、安田は、我が大金融業者中、殆んど唯一の「他業不兼營」の信條を守つて來た品行方正の金融王だ。しかし、筆者を以てすれば、已述の如き我國預金の性質と、商業手形の供給小量なる關係上、併も、滔々たる產業獨占化の傾向等より見て、安田の程度にまで金融資本を集中しながら、依然、英國流の銀行家的信條に固着することは極めて不便であり困難だと思ふ。このことは、現に、安田が幾つかの產業を自ら經營せざるを得ざるに至つた已述の經路から見ても、又淺野との關係(之れは後述する)から見ても、明かなことである。之れ筆者が、安田に、金融事業以外に、之と云ふ產業のないことを以て、安田王國の一缺點なりと云ふ所以だ。

尤も、現在の安田王國は、後述の如き、淺野關係より、ツマラヌ風評を立てられて手を燒いた關係上、それ等貸金の回收と、資金の流動化に努力しつゝある。世間の信用を氣にせねばならぬ銀行家としては、それは當然だらう。だが、その故に、今後とも、銀行業一本槍で進むのだ、と云ふならば、それは要するに、濠に懲りて膾を吹くものだ。

安田系事業の特色の一つは又、その多くが所謂ボロ銀行、乃至會社を修繕したものであると云ふことだ。先にも一寸記した通り、安田が自身で創立したものは、銀行では安田銀行と安田貯蓄、保險會社としては安田生命、帝國海上火災、及び東洋火災、事業會社としては安田商事と東京建物位なものである。他はみな經營困難に陷つたものを、專ら金融關係から安田が安く手に入れて修繕したものである。修繕が甘く行つて頗る立派になつたものも可なりあるが、修繕が甘く行かないで依然經營困難なものもある。加之、安田の直系傍系會社としてさうしたものが含まれて居ることは、必然に又、事業の統制に介在物の混入を來たし、既述の如き人事的缺陷と共に、內に融和を缺く結果となる。從來、安田の統制が、三井三菱程圓滑に整然と行はれない根本原因の一つは玆に在る。

かうした譯で現在の安田王國は內容の整備に汲々として居る。內容が整備した時は、恐らく、安田王國の一大轉機を起す時であらう。そして、意識的であるとさうでないとに拘らず、直接產業を支配することに全力を擧げざるを得ざるに至るであらう。しかし、今日わが國で有利な事業の殘されたものは極めて稀だ。その時、安田は、依然、淺野に對して、單なる一個の金貸で滿足して居るであらうか。

最後に、安田系事業の特色は、我が大財閥中政商としての色彩が最も乏しいと云ふ點だ。安田が、從來、金融業一本槍の方針を續けて來た當然の歸結だ。否、先代安田善次郞が、政商として惡因緣を結び、色々と金をせびられるのを恐れて、そのために、銀行業一本槍の殼を守つたのだ、と云ふ方が寧ろ眞相に近いであらう。

安田の政商關係の現狀及び將來について考へるに方つて、此際注目に値する出來事は、最近、安田銀行に放たれた流言蜚語の出所だ。顧るに、民政黨の若槻內閣は、周知の如く、金融大恐慌で倒れたが、その裏には政友會の政治的野心を祕めた煽動があつた。少くとも當時專らさう噂せられた。然るに政友內閣末期に於て、金解禁問題の行惱に絡んで、財界動搖するや、今度は、安田銀行に對する流言蜚語が飛んだ。之に由つて、財界を攪亂し、若槻內閣の江戶の仇を長崎で討たうとした政治的陰謀が、多分に祕せられてゐたのだつた。一體、安田銀行が、斯くの如き反政友的政爭の傍杖を喰つた理由は何か。前政友會總裁高橋是淸が顧問として入社したことが一つ、いま一つは、安田の內部が、結城追放に引搦んで少からず動搖してゐた上に、安田銀行は全國各地は百四十數行の支店が散在してゐて、全國的に財界を攪亂さすに最も効果的であつたことだ。ところへ、某新聞が、安田は金融恐慌當時の鈴木商店の手形を少からず持つてゐると誤報したので弱氣筋の相場師が之を利用して市價の下落を策するに至り、それが遂に職業政治家に由つて政爭に惡用せられたのだつた。

銀行家が政治と關係し、政爭の道具となることの如何に危險なるかは、福島縣下の銀行騷動に由つて最も典型的に示されたことであるが、安田も此の流言蜚語に由つて、政爭の道具になつた最も苦い經驗を嘗させられた一つだ。その上に、首席理事の森廣藏が、政商關係で紊亂し切つた臺銀の尻拭ひ役で、散々の目に會はされた體驗者だと來てゐる。斯樣にして安田は、政商色をつけることをいま最も警戒する環境に置かれてゐる。思ふに、安田は、今後も、我が財閥中、最も政商色の薄いものとして存在を續けるのではあるまいか。少くとも、安田が現在の如く主として金融業に專念する限り、安田の前途は、政商たる色彩を濃くするか否かに由つて、その運命の大半をトし得る。問題は、我國の如く、財界に對する政府救濟や保護の多い現狀に於て、斯く政商關係薄くして、安田の如き大財閥の活動が果して圓滑に行はれ得るか否かだ。思ふに、安田は此の側面からも、金融業以外の產業に進出して、政商關係を銀行以外に於て結び、之を有利に展開(銀行業のみでは政商となるも有利の點

は少いが、その他の事業に於ては、却つて之を、有利に展開し得る)すべき事情に置かれてゐる。

繰返し云ふ。安田金融王が、今後金融以外の產業に如何に進出するかは、實に、我が金融資本今後の發展方向を卜知する最も興味あるバロメーターだ。

淺野系事業論

(一) 淺野系の事業

安田王國を論ずるに當つて、どうしても看過することの出來ない、そして又最も興味ある點が、尙ほ一つある。他でもない。安田と淺野の關係である。兩者の關係を記述するに先だち、記述の便宜上、淺野系事業を概觀する。

事業狂と云はれる淺野總一郎だけに、淺野系の事業は頗る多い。その數多い事業の中樞となつて、これを統率するものは淺野同族である。併し淺野セメントだけは、同族の重役がその儘セメントの重役だから、事實上同族の統制外に立つが、他の淺野系事業は擧げて淺野同族の支配下に立つ。淺野同族は不動產及有價證券の取得利用・鑛業權及各種特許權の獲得、輸出入業、及び物品販賣を目的とし、大正七年設立されたもので、資本金は三千五百萬圓全額拂込濟である。今、淺野同族の組織を見るに、社長には淺野總一郎、取締役には淺野泰治郎、淺野良三、白石元治郎、鈴木紋次郎の四人、監査役には淺野八郎と淺野義夫の二人が居るが、これらはみな淺野の一族である。而してその下に支配人として藤堂大藏が居り、その更に下が庶務、經理、鑛山、浚渫、保險、及び石炭の五部に分れて、淺野系の事業を總攬することになつて居る。然らば淺野系事業としては如何なるものがあるか、これを表示するに別揭圖表の如くである。

圖表に依ると、淺野の關係せる事業會社は總計七十五を數へ、內、直系會社が七、傍系會社が二十六、關係會社が二十六、直系及び傍系會社の支配的子會社が十、直系會社の準支配的子會社が二、直系會社の關係的子會社が四ある。而して、その資本金は次の如くである。

	公稱資本金 (千円)	拂込資本金 (千円)
直系會社	一七八,四四〇	八二,二四七
傍系會社	九一,三二五	七〇,一八〇
關係會社	一七〇,〇〇〇	一三三,〇九四
直系及傍系會社の支配的子會社	一七,七五〇	一三,四〇一
直系會社の準支配的子會社	一五,八〇〇	一二,六六〇
直系會社の關係的子會社	四一,一六七	一八,九九六
合計	五一四,六〇二	三三九,五〇八

即ち、淺野の直系、傍系、及び關係諸會社とそれの子會社を通算すると、その公稱資本金は五億一千四百萬圓を超え、拂込資本金亦三億三千萬圓に垂んとする。然るに淺野同族の資本金は三千五百萬圓に過ぎない。諸積立金百四十八萬圓を加ふるも、淺野の自己資金は三千六百四十八萬圓に過ぎない。所が、淺野同族には二千四百二十一萬圓の繰越損金がある。差引すると、淺野同族の眞の自己資金は一千二百二十七萬圓になる。これ位の資金は、淺野同族の地所建物什器や、その各部勘定、乃至立替金等として是非必要である。從つて淺野の各事業に投資して居る資金は、全部借金と云ふことになる。詰り淺野は人の褌で相撲を取つて居る譯である。

(二) 安田と淺野との關係

淺野が借金して居る先は、安田銀行、第一銀行、興業銀行、及び臺灣銀行の諸行である。この内、最も多額に借金して居るのが、云ふ迄もなく安田銀行である。こゝに安田と淺野の密接な關係がある。所で、淺野は安田から何の位借金して居るか。これは外部から容易に判らぬ問題であるが、それかと云つて凡その見當がつかないものでもない。「帝國銀行會社要錄」に依ると、淺野同族が債務勘定として發表して居る金額は、六千二百二十六萬七千圓である。而してこれは單に淺野同族の借金だけである。淺野の借金としては、この他淺野系諸會社の借金をも加へなければならぬ。これが又可なりの額に上るであらう。が、しかし、この後者の意味の借金は、普通、事業會社の流動負債に屬するものが大部分を占めると見て大過ないであらう。兎に角、之に由つて、淺野が、安田から、可成り巨額な借金をして居ることだけは想像される。筆者が、確かなる筋から調べたところに由ると、淺野が安田から借金してゐる額は、現在約五千萬圓だと云ふ。巷間の噂に由れば、安田の淺野に對する貸付は一時八千萬圓に及んだと云はれる。果して然らば、三千萬圓の回收があつたわけになるが、しかし、多少の回收はあつたとしても、此の不景氣續きの際、回收高三千萬圓は餘りに多い。恐らく、右の八千萬圓とは淺野系事業の流動的借入までも含んだものか。兎に角、淺野一個に對し安田は五千萬圓を貸付けてゐる。それも、淺野系事業が概して優秀だと云ふのであれば、金融王安田のことだ、この位ひ貸付けたところで問題はない。所が、前記、數十に上る淺野の直系、傍系、關係諸會社、乃至それらの子會社中、現在相當の成績を擧げて居るものは僅かに淺野セメント、淺野物產、日本セメント、東京灣埋立、神奈川コークス、五日市鐵道、青梅電鐵、臺灣地所建物、關東運

淺野系事業系統圖

（備考）安田系事業系統圖備考參照。

淺野同族

直系會社

- 淺野セメント
  - *日本セメント
  - *日本コンクリート
  - 武藏野鐵道
  - △豐國セメント
  - *日本スレート
  - *鐵筋コンクリート
  - 青梅電鐵
  - △大分セメント
  - *淺野スレート
  - *南武鐵道
  - △秩父セメント
  - *日本ヒユームコンクリート
  - *五日市鐵道
  - △磐城セメント
- 淺野造船所。
- 淺野ブロック製造
- 沖電氣。
- 淺野小倉製鋼所。
- 淺野石材工業。
- 淺野物産。

傍系會社

- 東京灣埋立
  - *鶴見臨港鐵道
  - *尼ヶ崎埋立
- 日本鑄造。
- 朝鮮鐵山。
- 日本石膏。
- 臺灣地所建物。
- 伏木板紙。
- 盤城炭礦。
- 內外石油。
- 地下工業。
- 北秋木材。
- 東洋汽船。
- 大日本礦業。
- 千代田石油。
- 關東水力。
- 信越木材。
- 日之出汽船。
- 雨龍炭鑛。
- 神奈川コークス。
- 庄川水力。
- 鶴見木工。
- 關東運輸。
- 芳野浦鑛業。
- 關東燃料。
- 京濱運河。
- 東北淺野製材。
- 橘樹水道。

關係會社

- 日本鋼管。
- 日支炭礦汽船。
- 大阪石綿工業。
- 日本加工製紙。
- 帝國ホテル。
- 鈴木洋酒店。
- 富士製鋼。
- 北樺太鑛業。
- 帝國人造肥料。
- 山元オブラート。
- 辛酉商工。
- 大島製鋼所。
- 大日本石油鑛業。
- 日本エナメル。
- 足利紡績。
- 瓦斯管販賣。
- 中央製鐵。
- 帝國電池。
- 國際汽船。
- 横濱共立倉庫。
- 太平洋貿易。
- 東海鋼業。
- 東京シャリング。
- 樺太汽船。
- 昭和火災保險。
- 原安商會。

倫、及び關東水力の諸社に過ぎない。他は大體採算的價値の乏しいものばかりである。斯く淺野系の事業には餘り良いものがない一方、前述の如く、淺野自體の資本が極めて僅かである。世間では淺野の資産は借金を差引くとマイナスだと云ふ者すらある。假令マイナスでないにしても、淺野の如く手廣く各種の事業に關係して居るものは、時々マイナスになることがある。例へば淺野は淺野セメントの株式を七十萬株持つて居る。從つて、最近の如く淺野セメントの株價が二十圓近く下ると、それだけで一千萬圓以上の損をしたことになる。だから淺野の如く、借金で事業を遣繰つて居るものは、一朝不景氣になると忽ち行詰る。銀行家にとつては最も厄介な貸付先である。

こゝに於て、安田の淺野貸付が問題となつて、一時、兎角の風評を立てられたのである。これには、安田も隨分參つたと見えて、その債權の確保と回收とに全力を擧げたらしい。例へば、淺野所有の株券の殆んど全部が安田の擔保に這入つてゐるのは勿論、淺野の財産と云ふ財産は、一切、擔保として安田が取つてゐると云ふ。かくて、安田はその債權の殆んど全部を確保した。その上に、元利の回收には、淺野系の重なる事業に安田から人を入れて、這入つた金が、事業狂の總一郎氏に由つて再びまき散らされない樣にして、事業の財政基礎を堅固にすると共に出來るだけ多くを安田に回收してゐる。之れ、世間に於て、淺野系事業の重なるものが、いまや已に、安田系重役に由つて左右されてゐると云はれる所以だ。又、淺野のお爺いさんが、カン〳〵になつて現安田保善社當局を呪つてゐると云はれるわけだ。

顧るに、大正十一年八月、淺野晝夜銀行は遂に安田の手中に歸し、それと共に行名を改めて、日本晝夜銀行と稱するに至つた。又同年九月には、淺野晝夜貯蓄銀行は遂に安田貯蓄銀行に合併されて了つた。明治二十九年の創立以來、數十年間の長きに亘り、淺野が、惡戰苦鬪して守り育てた東洋汽船も、社長淺野總一郎、專務淺野良三と、今日も尚ほ表面的には、如何にも淺野がその經營權を把握して居るが如く見へるが、その實權は既に安田の手中に歸し、嘗て郵船會社に勤務し、後安田保善社に入つて、滿洲駐在員をやつて居た高橋某が、安田を代表して同社に常務として入社し、社内一切の切盛りをやつて居る。それればかりでない。淺野系事業の本據淺野セメントへすら、安田の巨腕は延びて居る。即ち淺野セメントには、安田から安田善次郎及び安田善五郎の二人が、重役として入つて居る。そして重役會を始め事ある毎に、兩者の代表として保善社理事竹内悌三郎が出馬して常に安田の利益を主張し、淺野を制肘してその

獨斷專行を許さない。而してこれは單に淺野セメントに限つたことでない。淺野造船、東京灣埋立、京濱運河等淺野系の主要事業は、必ず保善社の代表者に依つてその經營を監督されて居る。然も安田を離れては、淺野の事業は金融的に成立し得ない。そこでこれら保善社代表者の發言は非常な權威と千鈞の重さを持つことになる。

斯く、淺野に對する安田の貸付は、二重にも三重にも武裝されて保證が出來てゐる。にも拘らず、世間尙ほ、安田の淺野貸付を問題にするものあるは何故だ。要するに、その貸付は急に囘收せんとしても囘收し得られざる固定的性質のものだと云ふ一點だ。此の非難は、商業銀行主義を信條とする銀行經營の立場からは尤もだ。しかし、前述の如く、我が預金の性質から云つても、商業手形の供給少き點から見ても、我が銀行業は、到底、商業銀行主義で以て、その預金を利用することは出來ず、好むと好まざるとに拘らず、之を產業資本として利用せざるを得ない事情に在るものだ。果して然らば、此の立場から云へば、前記の如き安田の淺野貸付の如きは、問題ではない筈だ。

一體、安田が淺野との關係を色々に風評せられて、疑惑の目を向けられたことは、安田銀行自らが、銀行の產業投資を何か惡いことかの如く考へて、或は之を極力秘密にせんとし、或はその囘收に全力を擧げたことに負ふところが多大だ。堂々とその事業投資を發表して、之を銀行業當然のことだと何故にしないのだ。現に三井銀行にせよ、三菱銀行にせよ、その他我が一流の大銀行皆、產業資本を供給してゐないものはない。たゞ、表面上、多くは、手形貸付で商業貸出の形式をとるか、乃至は社債所有の形をとつてゐるに過ぎないのである。

世間には、安田が淺野系事業を併合するに至ることあれば、之れを以て、安田王國の前途に對する一つの赤玉シグナルだと見る者が少くない。いかにも、從來の安田式銀行一本槍主義から見れば、さうした見方がなる程と肯かれる。何となれば、かゝる場合には、淺野系事業がいよ〳〵二進も三進も出來なく行詰り、詮方なくして、安田が文字通り之を背負込むことを意味するからだ。しかし乍ら、安田が淺野系事業を併合する必要を認める場合は、右の場合に限らぬ。淺野系事業の有望なるものがあり、そのスタッフが優秀であればあるだけ、安田王國は、大財閥として、金融王として、今後の一大發展をなすために斯種優秀な淺野系事業と合同する必要があるのである。この後者の意味に於ける安田——淺野系事業の戰線統一は、安田王國の前途に一大強點を加へるものだ。かくなれば、安田が現在淺野に投下してゐるが如き資本は、何等の問題とはならなくなるわ

けだ。

現に、總一郎氏が瞑目すれば、淺野系の事業の内、有利なものは擧げて安田の手中に歸する。だから淺野は、今日出來るだけ高率配當をせんとするのだ、と一部消息通は云つてゐる。併し乍ら、安田には現在その方面の經營に當り得る人材が居ない。從つて淺野系事業を併呑せんとしても併呑することが出來ない。又從來、銀行單一主義を高唱し來つた安田保善社當局者には、さうした經綸を持ち合はさぬ。だが、安田王國が今後愈々鞏固に、益々大をなすには金融業以外に、優秀なる事業を持ち、そのスタッフを備へることが必要だ。又、淺野系事業が今後延びるためには豐富なる資力が要る。かく安田の資本と淺野のスタッフが握手することは、兩者の何れにも利益だ。安田が大金融資本王國として飛躍せんとする限り、右は必至の勢ひである。

筆者は以上に於て、安田と淺野との關係の前途に對し、餘りに多くの紙數を費やした。蓋し、安田が淺野系事業を今後ドウするか、と云ふことは、我が國金融資本の發達上（銀行の産業支配の傾向上）最も注目に値する一大轉機を劃するものだと考へるからである。

減俸悲喜劇の奥なる最大事實

杉森孝次郎

一　執筆の動機

減俸悲喜劇は幕を閉ぢた。それは忽ち現はれて忽ち消えた。しかし、消えたものはその現象だ。その現象の原則は依然として光り、輝き、熱し、動力として現代を、現日本をすくなくとも、統制しつつある。その意味に於いて問題は全然未解決だ。原則の清算が殘つて、手つかずに保存されてゐるあひだ、減俸悲喜劇の幕はおいてゐる。それを議してみやう。編輯者から、減俸問題が觸發した社會的諸問題の批判といつたやうなものをとの口談を受け、その節、しかしほんの瞬間前、取り敢す應諾したが、ペンを取つて紙に臨めば、それをば右のやうな原則考察に積極的に限ることによつて果たすべきものだといふ思想がいよ〳〵明確化したことをみづから覺える。編輯者の旨意もまた勿論そこにあつたのだ。

二　農村者に對する批判

減俸案は農村に於いては受けがよかつた。これは皮肉な現象だつたといへばさうもいへるが、それよりも先きに、また最後に、悲慘な現象であつた。いな、現になほある。

農村はなぜ減俸案をむしろ歡迎したか。その一つの理由はすくなくとも、地方在住の俸給生活者がその地方の農村者に比して、後者自身から見ればすくなくとも確實に、勞すくなくして利益多き、樂な生活をしてゐるからだ。その地方在住の俸給生活者のなかには小、中、實業、農學校等の教員もあれば、鐵道吏員もあれば、軍人もある。その他なほ勿論多種ある。

その農村者は勿論勤勞者だ。つとめ人としてのそれではないが正直に、實質的にはたらいて稼ぐ者だ。その意味に於いて彼等は俸給生活者と共通だ。彼等は要するに經濟的、事務的諸形

式に於ける生産勞働者の範疇内に、此等と共に屬する。

然るにだ、その農村者が、勤勞所得に生きる俸給生活者がいささか自分達より得な、樂な生活をやつてゐると見て、今回の減俸案の如きものにむしろ贊成せんと傾けるが如きは、悲しむべき現象だといはねばならん。なぜか。現在の日本を見よ。いな現在の日本でさへもを、またすらもを見よ。そこには勤勞を唯一の收入源としない人口があるではないか。そしてその人口の收入額は概して比較的に、勤勞衣食者との比較に於いて、甚だ大でないか。大會社の重役のボーナスを見よ。大なる株主達の受くる、即ち取る配當を見よ。都會土地の賣買が生む暴利、不勞暴利を見よ。財産相續の世界を見よ。利子、地代、家賃を見よ。要するに不在地主的なる所有を見よ。更にまた金融資本主義、いな一層適切には信用資本主義の天下支配的現實を見よ。それをさし措いてだ、即ちそれを放任してだ、いはば默認的に肯定してだ、そして今回の減俸案の如きものに直ちにむしろ贊成せんと傾くが如きは、短見、淺識、無原則意識以外のなにものでありえやうか。

勤勞を唯一の生計とする人口は、農村者も、町、市、都會者も、いな、農人も、工人も、俸給取りも、ことごとく合して一大共通を意識すべきではないか。その點に於いては、いはば階級意識を尖鋭に、いな健全に保育すべきではないか。

政治家でも、いはゆる大臣級、また大臣候補級あたりは、必ずしも勤勞唯一收入者ではないことは世間が知り過ぎてゐるほど著明な事實だ。

農村に於ける搾取的地主以外の生産的人口は、その他の方面に於ける搾取的、または不勞暴利的人口以外のすべての生産的人口に對しては、その見地からして同情あるを至當とする。そして、社會改良のためには、事が、問題がその搾取、被搾取に關する限り、協力することを大局に開眼せる賢明なる行動とする。農村者の今回の心的態度には、小異を見て大異を見ざる悲哀があつた。それが、小異のためにさまたげられて、大異を見えなかつた、また見ざらんとした性質のものであつたとは考へられない。單純に、小異は見えるが、大異は見えない、大異をば見えないといふ形のものでそれはあつたと觀察し、考察する。そして、ここに、すくなくともわが日本人の一般的根本弊が、根本惡が存するものであることを何人もつひに否定しえない。小異、小同を見て、大異、大同を見ざる現象は他にも無數に算へられる。要するにそれは小を見えて、大を見えないことであり、最も悲しむべきことだ。私は農村者の純情をば信じそして敬する。しかし、時代を材料として原則

眼のなほ潤開される餘地あることを今回の減俸案贊成的態度に於いても認めるものである。

三　政府者に對する批判

詳しい用語等は記憶にないが、進んで範を示すといふやうな語氣はたしかにあつたやうであつた。進んで範を示すといふことは、政府者に限らず、社會内のいかなる個人、團體としても至極結構な心懸けである。問題は、その範として當の團體または個人によつて意識されたものが客觀的に、眞正社會的觀點から考察して果たして模範的、規範的價値あるものであるか、どうかにある。

濱口氏の一部からの、または一般的信望からしては殊に、そして井上氏のそれからしても或程度までは、今回の示範は運命的なものであつた。

人格者として期待される濱口氏としては、勤務唯一收入的人口以外の人口に、純眞なる國民的、社會的善の見地からして相當の斧鉞を施す確實なる用意もなしに、いな實に意思すらなしと結論されうる仕方に於いて、あの減俸案を示範意識に於いて提出したことは、一面から言うてまことに氣の毒に感ぜられることであつたが、しかし、もつと重要なる他面から考察すれば、要するに必然の現象であつた。現在の民政黨としては、よほどの、それは奇蹟的といつた方が適當かも知れないほど根本的なる、改頭易面か、改心易識かが生じない限り、極度に樂觀したところで成功しない限り、現象として減俸案のやうなものを出さなかつたとしても、原則に於いては常にそれを出してゐるやうなものであるし、また、そのほかの自由を持たないものだ。

減俸案提出は現在の民政黨としては、拙技であつた、愚であつた、無知であつたといふ批評をば正確に値ひするが、決して目的、方針、本格または本領を逸脫した、忘却した行動ではなかつた。それはやりそこなひであり、下手であり、へまであつたとはいへるが、脫線ではなかつた。それは決して民政黨の柄にないことではなかつた。それはむしろしつくりと柄にそつたことであつた。

いやしくも當代に於いて濱口氏ほどの輿望を人格的に、道德的にかちえた人としては、やせ我慢にも、大會社の重役のボーナス、大株主の配當、大財產の單なる相續、大地主、營利的土地賣買及び所有、利子主義、これらの世界に丸山氏が風紀の世界に示した(それの内容的、各部的價値批判は別の問題として)以上の、いなせめてあれに近寄る位のもの、斧鉞、淨化主義的斧鉞、とにかく部分的にたりとも倫理的意義ある斧鉞を施すこと

を先著的、あるひはすくなくとも同時的、最も譲歩しても豫定的、計畫的、腹案的に具備してこそ、減俸案も罪がいくらかは減ずるのであつた。しかし、事實は、そんな用意などは最初から決して持ちあはされてゐなかつたことを造作もなく證明し盡したやうだ。濱口氏及び民政黨に對する多少過度のファンとしては、これには失望させられたのであつた。しかし、それは、文字通りに「過度」であつて、恐らくはそのやうな人は全世界に一人もなかつたであらう。

現代は機械を規定力とする社會になつてゐる。「個人」としてどんなに「有徳」であらうとも、それは、それだけでは、公人としての資格から見られてはまことに意味をなさぬものだ。機械は個人に拘らず運動する。その如くに、現代は個人に拘らず行動する。政治は社會統制以外のもの、いな以下のものであつてはならんから、政治家としてはこの點を明認する必要がある。

首相濱口氏としては、卽ち政治家濱口氏としては、現在の社會的パースペクチヴの把握を失してはならない。信用資本主義、金融資本主義、大ボーナス、大配當、大遺産、大地主、これらに制度的改廢を施すことなしに、その誠意だになしに、ただ「個人」的清廉潔白、自ら奉ずること薄し主義に甘んずるが如きことは、決して現在の日本の爲政治家たる、名宰相たるものにありうることでない。その正反對が事實だ。

もし單に道德、モラルの見地から言うならば、かりに現在の不勞所得的事實は經濟的に格別問題とするに足りない性質のものだと――然り單にかりに――しても、道德主義者たる濱口氏の如き人の立ち場からしては、道德的理由によつてそれに相當の改正を施さないならば不統一だ。勤勞唯一的收入者を減俸してまで天下に範を垂れんと志す者が、現在の大配當、大ボーナス、大遺産等に對してすくなくとも道德的不安、不幸を深烈に感じないことは、どうしても樂觀出來ない。

無産黨方面から逸早く批難の聲が蜂起した通り、あれでは、濱口氏の減俸案の下心は俸給を支拂ふ階級全體に御用的に奉仕するものだと直覺され、推斷されても、何人もそれを疑ひ、否定する材料を持たないことになる。しかし、それでは道德宰相の立ち場は成り立たない。道德は正を最低限必要物とするものであるが故にだ。然るに正は分配の規範を第一に含意するものであるが故にだ。政治家の責任は一身の不德なきに盡きるものではない。その關する社會に正を造ることを最低限必要事の一とする。

四　減俸を許さぬ勤勞唯一的收入者の社會的根柢事情

一體、現代の資本主義社會に於ける、あるひは必ずしも資本主義社會といはず、現代の産業發達的社會に於ける勤勞唯一的收入者は物を買ひえない人口だ（ダグラス氏の觀察に參照すべき多くのものがある）。見よ、最後の消費品、完成されたる生産品の値段は生産費プラス利潤だ。俸給は、サラリー・メンのも賃銀勞働者のも、その生産費に屬する。されば、俸給を唯一の收入とし、財源とする人口にあつては、現代の品物なり、サーギセスなりは、すくなくとも利潤だけ超購買力的なものであるわけだ。事實はこれを明證してゐる。勤勞を唯一の收入とする、財源とする人口は、買ひたくも買へない、錢が足らない、無い故に買へない事情を極めて多くの特徴と形式に於いて示す。

現代に於いて買ひうる人口は決して勤勞唯一的收入者ではない。上記の關係からのみ見てもそれは明白だ。現代に於いて購買力ある人口は配當、ボーナス、利子、地代、遺産、家賃等に惠まれる人口、また土地賣買の如き投機的及び他の營利的商人に限られてゐる。配當は生産費ではない。配當は賣れた後の現象だ。遺産は生産費ではない。これは先驗的、いな先勞的、無勞的所得だ。かういふ、どの途勤勞に關係のない、勤勞を時間的には後にか、前にか超絶した收入を持つ者でない限り、即ち勤勞收入以外の財源を有する者でない限り、買ふ力はないのだ。大臣中の或者の如きはすくなくとも、この種の收入が主要收入であつて、俸給の如きは物の數にもあらぬ人々だ。かうした人々が、どんなに高率減俸を敢行し、敢行したところで、それがなんの道德でもなければ、殊勝な心術、行動でもなければ、善なるなんらの意味ある事でもない。そんな事を條件として、勤勞唯一的收入者を、たとひいかなる低率に於いてであらうとも減俸などされては、あまりに聰明が無視されたことになる。

勞働者及び農民を完全に含めての勤勞唯一的收入者は、現在の事實として、決して減俸を許容しうる合理的關係を持たない。配當その他しばしば列擧せるが如き收入に削減を先づ施すことこそ正しき政治の所爲、當爲に屬する。政府者は、削除、減却すべき大なる項目を見ず、道德的にはすくなくとも、さうすべからざる、あるひはすべきだとしても最後に保留され、廻はされべき、そして經濟的には小なる項目を見たる點に於いて、原則心の缺乏を示す。

五　制限主義の責任

減俸案は緊縮政策の一延長であつた。それは皆な、要するに制限主義だ。濱口内閣の一特徴はすくなくとも、制限主義にあると客觀される。

その制限の原則が、前機械時代の小個人主義の道徳と方法によつて現在の日本を律する性質のものであるならばそれは失敗だが、その性質が減俸案系統の緊縮政策に多少一貫して看取される。制限の原則が封建時代の支配、服從、示範的性質のものであるならばそれも現在の日本にあつては失敗に終はるほかないものだが、それも今次の現象が反映した一性質だ。

先刻も言うた通り、制限するならば機械産業時代の疾病、幼弱と見るべきものをこそ、それのみを、それを第一に、制限すべきであるのだ。それをしないところに濱口内閣の現代盲がある。またその手順が、示範的でなく、デモクラシ的であらねば時代錯誤であつたのだ。制限すべきものを制限せず、制限すべからざるものを制限したのだから、第一歩に於いて失敗があつた。それ故、その制限しかたの問題は具體的には成り立つ條件を缺くが、制限すべきものを制限せんとしたのだと假定するならば、方法が封建的、官僚的、獨斷的、「敎育」的、相手を衆愚視した賢者、哲人氣取りであつたといふ批難がまぬかれない。

機械は勞働を不用にする。勞働不用が失業だといふならば、機械は失業の原因だ。現代に於ける失業對策は、發明を保護し、機械を興こし、勞働を人員的に削減しないならば時間的に削減し、いな皆除し、その機械の成果たる財物をばその不勞者に給與することを根本方針とするものであらねばならん。さういならばそれはセンチメントであつて經綸ではない。それがセンチメントであることは、それが無經綸であることであつて、卽ち習性的に、前機械時代の原則と方法が依然としてそこに支配權を許與されてゐることだ。進化史觀の認識にもとづいて日本の現在を位置づける創造的態度が善政には必要だが、その態度は、例へば失業に對しては右に述べたやうな積極政策を必ず取る。

濱口内閣は比較的に善政を自任するものの如くであり、また比較的にそれを期待されるものの如くでもある。しかし、善政のテストは、一つにはすくなくとも、そして實は最も主なるものとして、その積極政策、積極的方針に存せねばならん。それなき時、それは、その假定されたる善政で善政でないと證認される。

緊縮の延長として減俸に想着せる現内閣は、一切の材料を歸納するに、機械時代相當の制限を必ずしも心得ざるものの如くであり、そして、機械時代相當の解放と創造を不十分に理解するものの如くである。いな明きらかにさうだ。現内閣のために計るならばすくなくとも、また民政黨のファンの立ち場にある者のために圖るならばすくなくとも、濱口氏をシムボルとする現内閣及びその黨は、時代の進化史的位置を、勿論第一に日本

のそれを、もつと十分に科學的に把握する必要が急々先務であることに彼等自身識徹せねばならん。

六　階級意識の批判的把持

減俸案は、濱口、井上氏あたりの階級意識に對する批判的把持なき一立證であつた。階級意識が固定して常在するのでは必ずしも決してない。現に檢事諸君はそれであつた。しかし、現代にあつては、階級意識は容易にかき起こされうる事情が熟してゐる。やはり機械産業を規定力としてだ。檢事諸君といへども、勤勞所得と不勞所得の大體をば知つてゐる。いな彼等はかへつて最もその內實的、裏面的、急所的現實を知る者でさへある。最近ならば疑獄がこれを説明する。

要するに、行動に於いて勤勞を唯一的收入源とする人口と、その反對の、即ち然らざる人口との間の一線は、問題が一たび前者自身の生存線を切らんとするに及べば、名儀上の官吏的一團ぐるゐをば容易に二分しうる實情にあるのだ。そして、事實が示した通り、その場合には、論理的勢援者が全きプロレタリアートを內容とする形勢がすぐ成り立つ。

階級及び階級意識は政治の最始最終的要諦では元よりない。しかし、階級及び階級意識を、それが在るだけに存在視し、それの價値だけに評價することは善政にとつての最も必要なる一つのものだ。現在の內閣及びその黨は、この點に於いてまた、猛省を要するものであることはいふまでもないが、それこそ奇蹟的なる改頭易面や、改心易識が生じない限り、そこにその黨の致命的弱點がある。

減俸案は決して民政黨が民政黨らしくない事をやつたのではなかつたのだ。それはただ技術に於ける拙劣であつたのだ。しかし、國民的、社會的觀點からして最も問題とされる關心物はその技術ではなく、たとひ拙劣であらうとも原則が社會的なものであつてほしいことだ。原則に、動機に、傾向に、態度に、階級及び階級意識が十分に位置と實現と認識と評價とを與へられてゐることが、ミニマムの一要件であるのだ。

既政政黨には古るくさき、その意味に於いて有害なる傳統がある。けれども時代は進歩してやまない。民政黨の如きものがパワーを持續するためには、その時代の進歩に對するミニマムの追隨をば缺くわけにゆかん。若返る必要をそれは不斷に持つしかし、特に若返る努力をしないでも自然に若かい政黨、無産黨がすでにある。これが容易にパワーに座することのできないわけは、またまさしくその傳統缺乏にある。國內の傳統的分子によつてそれは反撥されるのだ。斯くして、老い行く無産黨と若か返り行く既成黨と、しばらくは日本の政治を爭ふことになるが、現瞬の內閣の黨たる民政黨についていふならば、減俸

案が今頃試用するやうなことでは、その若か返りの速度は、無產黨の老い行く速度に及ばない。即ち天下は遠からず無產黨の方へ移る。

しかしまた、變亂と革命は常に弱き統制の瞬間を選ぶ。ルイ第十六、ニコラス第二、ケレンスキ、ファクタ、古來一つの例外もない。民政黨が要するものは進步ではあるが薄弱ではない。減俸案の試用は、いはゆる最も抵抗力薄き層を選んだところに勇氣の缺乏なしとせず、それを引き込めた手際にすらその影はある。勇敢に進步せざる證據は減俸案の知識的內容にある。されば、勇敢に進步せず、勇敢に保守せず、勇敢に左右を鬪ひ取りつつ正中を覇成するでもないとすれば、民政黨の存在理由は政友會と無產黨の律動的中間期に限られることになる。いな、無產黨の育つのを待つまだけのものとなる。政友會の建てなほしによつて存在理由なきものとすらなる。民政黨としてはその認識を早く持つにしかず。減俸案の生產者であり、現にパワーにあるものにむかつて、先づその案の客觀的性質を知らしめる事は、その事件と問題が最も相當に扱はれることであらねばならん。

減俸事件は、最もすくなくとも、近頃に珍らしい悲喜劇の新種であつた。しかし、劇の奧に笑つてばかりはすまされないまじめなる人心と社會と時代の動きが、その案否定の形に於いて看取される。

官吏と團結

近代國家の官吏は奴隷ではない

長谷川如是閑

一

濱口內閣の減俸の聲明に對して司法省が團結して反對意見を發表し且つ反對運動ともいふべき行動をとつたので、官吏に團結權があるかないかといふやうなことが問題にされてゐるやうだが然し、現在の日本で、官吏の團結權だとか罷業權だとかいふやうなことを問題とするのは、まるで封建時代に、言論集會、結社の自由等を問題とするやうなもので、それに對してどんな結論を得たところで、聊か痴人夢を語るに類する話である。

日本では、現在、官吏どころか、勞働者さへ、まだ充分の――或は不充分の――團結權や罷業權を得てはゐないのみか、一般人民の言論、集會、結社、其他の所謂民主國家に於ける當然の自由さへも、與へられず、更らに信仰の自由、學問の自由、時には交通の自由までが、無遠慮に阻止されてゐる有樣である。これらの自由は、團結權や罷業權といつて、流石の日本に於ても法律上は立派に保障されてゐるのだが、實際に於ては、法律上の保障を得てゐるものは、その法律を作つた階級だけで、それと對立する階級に對しては此の保障も殆んど意味を爲さない程度である。日本の演說會に於ける『中止』『檢束』等の『合法的』又は『非合法的』壓迫を見ただけでも、日本の法律が言論、集會、結社、交通等の自由を保障してゐるとはとても思はれないのである。

然し、勞働者の團結權及び罷業權は、積極的に法律に保障されてはゐないが、消極的には次第に認められるに至り、それを禁壓する法律は漸次削減されてゐる。勞働者の此等の權利が比較的認められるやうになつたのは、此階級がブルジョア政治に於て次第に投票權を獲るに至つたお陰である。組合組織の幼稚な日本では、ブルジョア諸政黨は勞働者の投票を、小市民のそれと共に分け取りする必要と可能性とをもつてゐるので、彼等の對勞働階級政策は勢ひ『改良』的ならざるを得ないのである。

されば、勞働階級ほどの攻擊力も牽制力も持たない官吏などの團結權が問題にされるほど『進步』的の形勢は日本の何處にも存在してはゐないのである。官吏の國法上の權利義務を研究してゐる法學者

の誰れ一人も、官吏の團結權や罷業權など問題にするところかオクビにも出すものはない。西洋の勞働法學者などのうちには、官吏もその社會的性質に於て勞働者と同樣であることを理由として、官吏の團結權や罷業權を法理上認めねばならぬとするものもあるが、日本の『官吏服務規律』は、そんな權利を立派な免職の理由としてゐると、日本の法學者は説明してゐるのである。

日本の、官吏に對する法律のうちには特に團結を禁ずる條項はないが、團結權とは單に學術研究や親睦のために會合する權利をいふのではなく、生活條件に對して集合的勢力をもつて主張するために團結する權利をいふものだから、さういふ集合力によつて主張することの可能でない團結などは團結でも何でもない。されば團結權は當然同時に罷業權を伴ふものであらねばならぬ。然るに日本の官吏に對する法規には、『忠實に職務を執行する義務』なるものが服務規律の第一條によつて規定されてゐるので、それを解釋する專門家の説によれば官吏は休日、賜暇、缺勤、忌服、法律上の義務履行、法律上職務執行を拒み得る又は拒まれる場合、長官の許可を得た場合等の外は、絕對に職務を離れることは出來ない。それ以外に職務を離れゝば免職されるといふのが日本の法律である。從つて罷業も所屬の長官の許可を得てやれば免職されずにやれる理屈で、長官が一緒に罷業して呉れゝば、『法律上』官吏も亦罷業權があるやうだが、その長官には更にまた長官があるのだから、その長官の長官も一緒に罷業して呉れなければ駄目である。すると結局內閣總理大臣をも加へての罷業でなければ、確かに『法律上』免職される危險がある。然し、內閣總理大臣が全日本官吏のストライキのリーダーになるやうな場合の起り得る筈もないから、結局官吏には罷業權はなく、從つて事實上團結權もないわけである。

二

元來勞働者の團結權といふやうなものは、上の方から下し×つたものではなく、勞働者自から團結したといふ事實によつて×ひ取つたものだから、團結權の法律上の成立には、必ず團結の事實が先驅せねばならないのである。しかもこの團結の事實たるや、いかなる××も、いかなる××もそれを如何ともすべからざる事實として成立せねばならぬのである。勞働者の團結權の法律上認められたのは、法理學者の頭の變化によつたのではなく、その頭のネヂの捻ぢ方を變へさせる團結の事實――××の力もいかんともすべからざる事實、法理などでは崩されぬ事實――の成立したゝめである。

その意味では、過日の減俸聲言に對する判檢事の團結はやゝ、法理學者の頭のネヂに影響する處のある事實であつたともいへる。それは團結權に於ける『團結』といひ得る程のものではなかつたが、とにかく堂々と判事團、檢事團としての意志を發表し、しかも一致の行動をとり、そこに個人以上の集團形式による生活條件の主張、即ち團結の事實の存することを立派に表明してゐたのである。その上、新聞紙の傳ふる所によれば、檢事團の如きは、その團體的行動期間は、召喚した證人の取調等を遲延せしめ、又職務上取扱つてゐた事件の進行などをも遲くらせたといふことである。こゝで事實上

罷業の低度のものであつた。

この事實は、程度こそ低いが、『團結』と『罷業』との事實であつた。それは確かに法理に先驅する『事實』であつた。官吏に對する日本の現在の法律からいへば、その事實は服務規律の第一條に反するもので、立派に免職の理由となるものである。（尤も新聞紙の傳ふるやうな職務の曠廢がなかつたとすれば、別問題だが、然し、あの當時に於ける一般の狀勢から察すれば、官吏諸君がさういふ團體的行動を、全く職務時間以外に、即ち職務を妨げることなしに、やつてゐたとは思はれない。嚴酷に解釋すれば、確かに『忠實に執務する』義務を破つたことゝ思はれる。）それにも拘らず、國家は、これらの官吏に對しては、一切の責任を問はないことゝし、二三辭表を出したものに對しても、それを受理しなかつたといふことである。されば、この事實こそ、法理もこれを如何ともすることの出來ない『事實』である。法理學者の頭のネヂを逆に捻ぢる力のある『事實』である。言ひ換れば、それによつて、官吏の團結を法律上の權利たらしめる力の籠つてゐる『事實』である。

國家はもしかゝる『事實』の成立を恐れるならば、斷然この事實を成立せしめない手段をとつた害である。責任者が辭表を提出したのは、寧ろ國家にさういふ意志のあることを推定してのことであつたらうから、國家はそれを受理するは無論のこと、辭表を出さぬ官吏等に對しても、斷然免官を申渡したならば、『法理に先驅する事實』はつひに成立せずにしまつたわけで、從つて官吏の團結權を法律上成立させる前驅的事實も成立たなかつたわけである。

然るに國家がその方法に出でなかつたのは、即ち『爲さゞるにあらず能はざるなり』で、つひに官吏の團結をして、恰も勞働者の團結のやうに de facto として成立せしめたのである。

無論、たゞ一だけの『事實』が直ちに法理のゼンマイを捻ぢ代へる力をもち得るわけではない。勞働者の團結權も、唯一回のストライキによつて獲得されはしなかつたのである。けれどもたゞ一回の事實も、一葉落ちて天下の秋を知らしめるものに相違ない。それは論理によつて官吏の團結權を法理上に成立せしめることに成功した法學者の論文などよりは、遙か有力に、官吏團結權の法理に影響する力をもつ事實である。

三

一體、今の法學者は現代の近代國家の官吏に特有の性質を、舊國家の官吏に固有の性質から區別することをせず、所謂糞味噌を混同して、味噌にも糞の性質があるやうに論じてゐるのである。

官吏なるものはつひ近代までは、即ち舊國家に於ては、生殺與奪の權を主人に握られてゐる奴隷だつたのである。これは歷史上、古代國家に於て、官吏は多く奴隷から採用され、又奴隷と同じやうな社會上の地位に在つた外國人から採用されたといふことに起源したものらしく考へられるが、そのことはなほ攷究を要するにしても、舊國家の官吏は、特殊の職務の機關ではなく、全人格的の隷屬者だつたのである。舊國家の官吏は行政機關の道具ではなく、國家階級に全人格をもつて所屬する人間で、その關係は、古代の奴隷が國家に所屬

する關係と同じやうなものだつたのである。

舊國家の官吏は、それ故に奴隷と同じやうに、征服によつて從られ、又財物をもつて購はれ又讓られ、勝手に殺され、殉死し又はさせられ、何かといへば切腹仰付けられたものである。ただそれが奴隷と異る所は、つひに解放されることが無かつたことである。その代り遺棄されることはあり、又自から逃亡することはあつた。今日の言葉にも殘つてゐる『浪人』が即ちその結果である。

封建國家の即ち大名の官吏のうちにはやゝそれと異り、今日の官吏に似た雇傭關係のものもあつた。『召抱』なる形式によるのがそれで、所謂奴隷的の譜代の家來とは區別されたものである。然しそれでもこの『召抱』は雇傭關係よりは遙か奴隷的で、一旦主人と仰いだ以上は、譜代同樣、その『忠勤』の義務は全人格的で、決して今日の官吏のやうに『職務』的ではなかつたのである。

かゝる舊國家の官吏の法律上の性質などをこゝに詳論することは出來ないが、然し、それが今日の官吏の法律上の性質といかに異るものであるかは、上に述べたゞけでも明かであらう。

然るに、今日の法律學者は、この舊國家の官吏の傳統を繼承し、近代國家の官吏も全人格的の隷屬と殆んど同じやうな『忠勤』關係にあるものと解釋したがるのである。たゞそれがいかにも近代國家の性質と矛盾するので、その論理の統一に困難してゐるのである。國家と官吏との關係は契約による雇傭關係なりや否やといふやうな問題でも、何とかして舊國家の官吏式に解釋して、契約關係ではないといはうと苦心してゐるのである。

官吏が契約による雇傭關係とした所で、實際上何の差支ないのみか、近代國家の諸機關の組織は、その社會の組織――殊にその產業組織――と共に、舊社會の血族團體的特徵を離れ、利益團體の性質を有し、鐵道省の官吏と鐵道會社の役員と、遞信の官吏と大北電信會社の役員と何等實質上の差別のないやうに、官吏の身分上の性質、職務上の性質は、國家以外の諸組織に於ける成員のそれと毫も實質上の區別はないのである。たゞ國家の諸機關は私的の組織よりは公共的利益を目標するといふ點に於て組織そのものにやゝ特殊の性質を帶びるといふが、それも程度の問題で、特に現在のやうに、階級的利益の分裂の截然たるに至つた時代に於ては、國家の諸機關も、私の組織と同じやうに、事實上、公共的利益よりは、階級的利益に重點を置く傾向のあることを脫れない。然し、國家機關と私的組織との目的の相違如何にかゝわらず、國家機關の手足たる官吏と私的組織の手足たる社員や使用人とは、實質上何の差別もないのである。

これらの事情は、近代國家の構成をもつと詳しく說明すれば一層明白となるのであるが、今はその遑がないから、たゞ官吏の權利義務を攻究する學者が、近代國家の構成とそれを基礎づける近代的社會組織とを攻究することなしに、國家といふものを舊國家的傳統の光線に於て見、從つて近代國家の官吏を奴隷から發達した、舊國家の人間隷屬者としての官吏と同質に見やうとする傾きのあることを指摘するに止める。彼等が、官吏の團結權、罷業權の如きを頭から問題にしたい理由はそこにある。

官吏と同盟強要

近松秋江

先達ての減俸問題に際して、一部の官吏が、團結して、時の内閣の施政意向に反抗の意思を仄めかしたといふことは、此處にも、まざ〳〵と、唯物史觀的觀察がされるのであるが、近年の帝國議會にあつても、屢々議員の歲費增加案が、一部の議員の間に唱へられるのが見る。尤も、それは、歲費を下げようとする案が、先づあつて、それに對して苦情を唱へるのではなく、又、代議士と、官吏との場合は、いろ〳〵の、職務上の條件が異つてゐるのであるが、しかし、どちらにしても、唯物史觀的觀方のせらるゝ點に於いては、共通の意味もある。

今回の同盟強要の動機が、專ら、此の唯物史觀的の立場にあつたから、第三者の吾々からは、聊か、官吏——司法官諸君ともある人達の行動としては、愼みの足りない、さもしい、取り亂した行爲として、社會の他方面では隨分苦々しく思つてゐるものも少からず、有るやうである。その事は、後で語る。

假りに、もし、官吏の同盟團結の理由、原因が、月給を下げてもらつては困るといふ、臺處向きの事でなく、全く異つた、他の事由であつた場合は、どうかと考へてみるに、そんな場合が、全然起らないとも限らない。卽ち抽象的に考へてみて、ある、何等かの目的に向つて、官吏が同盟團結することが、或は必ず無いとも限らない。これは、決して奬勵すべきことでもなく、又、贊成すべきことでもないか知らぬが、さういふことが、今後も、あるかも知れぬと豫想して、前以て用心して置くのは、無用のことではない。

今度の事も、小火(ぼや)くらゐで自然鎭火したから、いゝやうなものゝ、又、司法官の一寸した、どよめきくらゐであつたから、よかつたやうなものゝ、あれが、警官とか、國家の干城である（軍人を國家といふのは、今日の場合當然である。）軍人にまで波及していつたならば、實に寒心すべき事である。

勿論、敢て、思想惡化とか、士氣廢頽とか、忌はしい傾向でなくとも、今日の一般國民生活の考へ方は、これを、明治初年から、藩閥政治家が、國を我が物顏に振舞つた時代、つゞいて官僚政治時代に、國民の思想を、爲政者の都合の好いやうな鑄型に入れようとした時代とは、非常な變化を來してゐるので、必要に臨んでは、官吏——その中には、いふまでもなく、警官も軍人も錯雜して——官吏が、少數の藩閥政治家や官僚政治家の手先になつて、動もすれば、蒼生を敵にしかねまじき氣勢を示したやうなことが、いつまでも續くものとは思はれない。官吏は、少數政治家の手先ではない。

しかし、同盟強要を、必ずしも是認するのでは、ない。さういふことが、萬に一度でもあつたら困る。たゞ、官祿を食んで生活してゐるからといつて、何事も、御無理御尤で、上官の命に、これ服從するといふことは、昔と違つて、期待する譯にはまゐらぬ。官吏は官吏であると同時に、一般國民であり、人間である半面があるから。

しかし、今の場合猶も、愼重に考へなければならぬことは、いかなる社會組織にも、又、いかなる國家組織にも、各〻それ相應の秩序があり、統制がなければならぬことである。前にいつた、明治初年の藩閥政治にも、官僚政治にも、その時代には、その時代が必然に要求した、特別の、カラクテリスチックの統制や支配方法が必要であつたのだ。現實を無視した、無責任な、空想的暴評を加へるならば、それは、別問題だが、日清戰爭や日露戰爭は、王政維新、明治政府が成立し、國内の政權が一ケ處に統一され、國民の間に、上下一致して、國家意識が最も旺盛に達してゐた、その花が咲いたのである。日清戰爭と日露戰爭とは、實に、日本の國運を世界の舞臺に乘り出さしめた、最大緣因であつた。もし、あの時分に、國家主義だの、帝國主義だのが惡いなど〻、馬鹿にハイカラのことをいつてゐたら、日本は疾うに、支那かロシヤかの屬國に甘んじてゐなければならなかつたらう。古今東西を問はず、歷史の發展（デベロプ）の跡は、客觀的に見て、凡てが自然である。無理がない。

故に、日本の、明治初、中期時代の藩閥政治にも、又、それに次ぐ官僚政治にも、その當時としては、止むべからざる理由があつて、然るのであつた。當時の民權論者や立憲政治論者は、專ら、藩閥政治家、官僚政治家を非難攻擊したが、よし、その非難攻擊の連發が、後の時運を打開したにしても、その當時に在つては、藩閥政治、官僚政治は、日本歷史上客觀的に見て、必要であつたのである。

さうして、その時代には、官吏が同盟が結んで、政府に反抗するといふやうなことは無かつた。むしろ、民權論者や、書生をして、官吏を、時の政府の手先の如く誤想せしめたくらゐである。

日清、日露兩度の征戰には、個人的、家庭的に觀て慘鼻を極むる悲劇が到る處にあつたとしても、一國家の存立と統制との爲には、多くの個人の悲壯なる犧牲的精神を必要とした。それについて不平を言ふことが出來なかつた。或は甘んじて、しなかつた。又は、言ふことを制した。

死んだ池邊吉太郎氏の「伊藤博文公論」（先年本誌に掲載されたもの）を讀むと、藩閥政治家は、毎時、國内に、手の着けられない紛爭が起ると、國民の注意を外に向けしめんが爲に外國と戰爭を構へたといふ意味のことを、いつてゐるが、まさか、開戰の動機は、それればかりではなかつたにちがひない。上下心を一つにして、國運の幸先（さいさき）に向つて緊張してゐた。その時に當つては、官吏が團結して政府の命に抗するなどといふ、箍のゆるんだことは、なかつた。

繰返していふが、伊藤、山縣、桂などの時代を、當時の世論は、常に藩閥政治、官僚政治といつて攻擊してゐたが、つい昨日も、伊藤公の遺墨展覽會を觀覽して、つく〴〵と思つたことである。公の志は實に國家濟世に在つたのである。決して少數政治家の間に天下の政權を私しようとする考はなかつた。

さうだとして見ると、伊藤、山縣時代の政治家すらも、もう既に、決して、德川時代以前の政治家の如く、主從の考を以て、下僚に臨んではゐなかつたことは認められるのである。ルイ十四世や、德川將軍の何代目かならば、とにかく。伊藤、山縣の政治施設にしたところが、私欲を營んだのではなく、專ら國家蒼生の事を念としたの

であつてみれば、その伊藤、山縣の政治施設の根本に反抗する者がありとすれば、其等は取りも直さず、國民を敵とするものであつたと、いはざるを得ぬ。しかし、一旦緩急あるごとに、上下は忽ち一致した。だから、池邊氏の如き皮肉な批評をする人もある。

吾々は、是に於て、大いに考慮を要するのである。過日來、官吏の減俸問題が、世論を動搖せしめた時に際して、新聞といふ新聞は悉く、これを天下の輿論なりとして、一聲に、同案に反對したのであつたが、中にも「東京朝日」などは、平素自他の認めて天下の大新聞紙を以つて任ずるにも、かゝはらず、近頃その社說をはじめ、全體の紙面から與へる印象が、とかく輕佻浮薄の譏を免かれてゐないのであるから、同紙の見解などは、頃日の論調、さもあるべきこととしても、眞に天下の事を擔當すべき大新聞の態度としては、遺憾千萬と、いはねばならぬ。更に、私共、平常、比較的、穩健中正の意見を持してゐるとして、信用を置いてゐる「時事新報」の說論ですら、今回の減俸案を極力非難し、そして、その非難の理由にいふに、「官吏減俸案の背景をなせる思想」として、現內閣が、官吏の減俸を、暗打ち的に決定聲明したなどゝいふことは、由來民政黨の官僚式政治家の傳統的思想であつて、產業革命の洗禮を受けざる以前の保守舊弊の考である。今日の官吏は、封建時代の主從の關係にあるものではない。彼等は單に雇用關係に在るものであると、さもさも自說な新らしい見解の如く吹聽してゐたが、焉ぞ知らん、今更、今日の時世に當つて、そんなことをいふのが、自身の頭の舊いことを要證してゐるものである。

前にいつたとほり、官吏は、官吏である半面に、一個の人間であり、人民であるのだから、時事紙などが、その立場を強調するのは可なりとして、官吏が、一個の人間であり、人民である半面に、又國家の公祿に養はるる官吏であることを、十分に思はねばならぬ。既に官祿に衣食する以上は、否な、民間會社の俸給に衣食する者といへども、既に決心と覺悟とをもつて、各自相應の責任と義務と、統制とに服すべき地に置かれてゐる以上は、爲政者なり、雇用者の統制に服從するのが當然である。官吏の場合に於て最も然りである。道理ある節度に服從することは、自他共同存榮の利益である。

私の見解に從へば、伊藤、山縣にしても、前述のとほり、私欲を營むために、專ら天下の政權を行使したとは思はれない。況んや濱口雄幸氏、井上準之助氏等が、「時事紙」の所謂民政黨の傳統思想とやらの、官僚思想を背景として減俸案を閣議で決定したものとは、どうしても考へられない。又、全然脫線的の批評を加へた、無產派の批評家が猜察したやうに、官吏の減俸案はやがて民間勞働賃銀の低下を豫想して、先づその範を垂れたもので、取りも直さず、資本家に味方する政策であるといふのも當らない。――或は、かういふ私の見解を、甘いといつて嘲笑する者があるかも知れぬが――それは偏狹の見である。

どちらにしても、濱口氏や井上氏等に專制政治家の度胸がある筈もないし、又、官僚政治家の專斷行爲もある筈はない。

本誌が、私に徵した意見は、「官吏の團結」といふ問題についての評論であつたから、既に撤廢された減俸案について言及するのは係

計なことのやうだが、事實問題としては、勢ひ、その事に言及しなければならぬ。

政府は、あの決定をするに當り、相當科學的に精確な計量、研究をした結果にちがひないと、吾々は想像する。閣議に於て是なりと認めて決定した方針に對して、人もあらうに、服務規律の最も嚴正なるべき官吏が同盟して異議を唱へ、怠業行爲をなすといふは、是れ取りも直さず、政府を敵とすると同時に、國民全般を敵とするものである。少數の爲政者が、國家を私してゐる場合ならば、とにかく、度々繰返したとほり、伊藤、山縣の時代を經て、殊に今日の濱口内閣などが、生意氣に、國家を私するやうな太々しい眞似をする氣づかひのあらう筈はない。いくら三菱王國と因縁が深いからとて、そんな露骨な、見え透いた私が營めるものでもあるまい。即ち、科學的考慮計量の結果決定した減俸案に反抗同盟するといふことは、又、同時に、國民を敵とするものである。

私をして、忌憚なく言はしむれば、官吏は、減俸問題に於いて、正しく天下の新聞紙とゝもに、國民の多數を敵としたものである。

經濟國難は或は、日清、日露の兩役以上の國難であるかも知れぬ。その國難に直面して、官吏が爲政者の政策に不從順であるといふのは、決して、官吏以外——或は俸給生活者以外、——天下の蒼生萬民の同意を得べき筈がない。

更めていふまでもなく、官吏には、國家が夙に退職手當、恩給制度等によつて、種々生活の保證を與へてゐるではないか。司法官は行政官に比べて待遇が薄いかはりに終身官たることを國家が認めてゐるではないか。其等無數の、退職官吏の生活の保證に要する財源は、一體誰れが受持つてゐるんだ。吾々蒼生萬民が負擔してゐるではないか。

實に、新聞紙などゝいふものは、怪しからん輕佻浮薄を極めたものだ。新聞の輿論などゝいふもののくらゐ、信用の出來ないものはない。

官吏の生活が苦しいなどゝいふが、苦しいのは、ひとり官吏ばかりではない。凡ての人間が銘々に責めに應ぜねばならぬ經濟受難の時である。本所、深川あたりの自由勞働者ばかりを指していふのではない。勞銀に生活しない、一般の民間自由生業者——即ち小商工業者、地方農民、各種の職人、藝人の比から、高等職業になつて、例へば開業醫等々々、といつたやうな者が、一旦職を廢すればとて、何處から、誰れが生活を保證してくれるぞ。私自身は文筆生業者であるが、此の際文筆生業者などは、問題ではない。その以外の民間自由生業者にして、先日來、私と意見を交換した人間の殆ど悉くが、官吏減俸案を可としてゐる。それが本當の民の聲である。官吏の減俸は當然である。又、微かに聞くところによれば先日の司法官の同盟反抗の裏面には、現内閣を窮地に陷れる爲に、平沼騏一郎、鈴木喜三郎氏などが、自家系統の法官連に黑い手を伸ばして、反抗を煽揚したものであるとか。若し此の風說にして眞實なりとすれば、彼等こそ、實に國家を誤り、天下を私せんとするしれ者である。

だから、最後に重ねていふ。官吏——就中司法官と、新聞紙で作つた所謂輿論と、司法官の古い親方と、是等の三者が蒼生を敵にしたのが、過般の減俸問題の結論であると。（十月卅一日）

生活權擁護のために

龜井貫一郎

安達内務大臣が無産黨から反對され様と豫期しなかつたと云つた處の、又官の範を以て民間に學ばしむることは、世上の賛成を贏ち得るものであらうと考へて濱口首相が大に提唱した處の減俸問題は、民政黨内閣の大きな躓きになつてしまつた。官吏が團結して上司に反抗した例はとぼしくない。

外務省では、嘗つて、パリ會議出席の若手が樞軸になり現拓務次官小村侯爵等が音頭をとつて、或る意味の上司糾彈を加味して外務省革新同志會なるものが出來上つた。軍閥外交の具體的事實調査委員であるとか、判任官の待遇改善に關する調査委員とかが任命されて、一頃いはゆる上司を鞭撻したものである。尤も之は其後何が何だか分らなくなつて仕舞つた。

又、紐育總領事館では私が居た時に、館員が時の總領事熊崎恭氏のやり方に憤慨して同盟休業をやつた事がある。田中都吉氏が次官の時にはやつた連中に大したたゝりも來なかつたが、出淵と云ふ人が次官になつてる間に、一人づゝ馘首された。此の間もストライキ記念會を催したが、其の連中も辯護士になつたり珈琲店の主人になつたりして居た。しかも之等は生活權擁護の爲めに團結して立つた譯ではない。檢事が減俸問題に對して憤起したと思つたら、司法官が立つた、裁判所の書記が立つた。社會民衆黨の本部には公然と裁判所名を明にして書記の人々から電報が舞ひ込んで來た。官吏が、殊に司法關係の官吏が、生活權の爲めに立つたのは、近來に於ては確に今回の事を以て最初とする。之れ全プロレタリアと智識階級の共同戰線の橋をなすものである、と云つて中島彌團次氏は死を以て諫止する決心でピストルを以て首相に迫つたのである。彼の心掛は誠實だつた。しかし燃燒物をピストルにこめないで胃の腑にこめて仕舞つたから、ピストルが空砲で、身體に少々醉が來ただけだつたのは未だしもの事であつた。檢事や司法官に言はせると、之は生活權擁護の運動ではないと云ふ。行政官に對する水平運動に過ぎないと云ふ。しかし、官等では水平に先づなつて居る。事は俸給實額の問題である丈けは確實であり、そして生活權といはざる迄も生活に關係して居る丈けは確實である。生活に權をつけ樣がつけまいが、夫れは我々にとつては不二一如であつて、強いて區別をつけたがるのは、日本法制が直流して居る獨逸の舊式法典の影響であるに過ぎない。

官吏は俸給生活者であり、いはゆる智識階級の一部門である。歐洲には英獨佛等智識階級の團結は相當進展して居る。從つて下級官公吏の生活權擁護の爲めの團結には運動も、之に比例して相當の進展を遂げて居る。但しある國ではある種の官吏に於て一定の制限が

認められて居る。罷業權は認められて居らない處がある。後者は組背在勤の當時警官のボーナス增加要求の示威運動を見た。示威運動は樂隊附きの隊伍整然たるもので、輿論も大體之を承認して居つた樣であるし、從つて相當の効果を收めた樣であつた。處が他の場所で、警官の同種の要求が容れられないで罷業に出づるに至つて、輿論は反つて反對し出した。前大統領クーリッヂが賢出したのは州知事の時であつたと思ふが、この警官ストライキを鎭壓したことによつてである。最も資本主義全盛の米國のことではあつたのだが。兎に角獨佛英米には下級官公吏の永續的組合と認められ得可きものを擧げることが出來る。其の運動は一般に云つて公然許されて居ると言つてい〻。然るに我國では智識階級否一般下級官公吏の團結や運動が左程進展せざる時に當つて、相當上級の官吏が加つて減俸反對に立つたのである。

智識階級運動の全班は之を叙述して居る余裕がない。職業と上下級とによつて種々相を現出して居る。又官公吏の團結や運動に就ても之を叙述する頁數がない。前と同じ樣に概括的に述べられない點がある。其處で端的に今回の減俸問題に關して三四の點に觸れて見る丈けのことゝする。

第一には此の問題が果して一般無産運動と同一の範疇に屬す可きものであるか否かである。之は當然然るものであると云つてい〻。一般無產運動に就て一部の理論家は云ふ。最も貧窮化せる勞働者と最も貧窮化せる農民が最も果敢なる前衛的鬪士である。資本主義的生產はプロレタリアートをして經濟的共通利害を感ぜしむる處の一の狀態に陷れる。か〻るプロレタリアートは階級團結を以て必要なりと感ずるに至る。かくて共產黨宣言は××××。「先づ勞働者は個人的に鬪爭する。次に一工場内の勞働者が××する。次に一產業別の勞働者が一地域を標準として××する。」かうして勞働者農民は××をとり階級搾取を絕滅する。而してこの階級的團結は一の社會的團結に擴大する、と云ふ。だが一番貧窮化した勞働者が一番戰鬪的な團結を維持して居るだらうか？此の當否は世界勞働運動史を顧みれば直に判明する。一番貧窮化した小作人が一番戰鬪的な分子であるだらうか、必ずしも左樣でない。

のみならず、左樣であつた處でも、多少有利に小作爭議が解決して仕舞ふと、後は何等の鬪爭目標を持たない處のものになつて仕舞つた處に、左翼農民運動の行き詰りがあつたのではなかつたらうか？ 資本主義下に於ける經濟的不利の程度が大なれば大なる程反抗の主體力が大きくなり、其の經濟的不利の同一境遇自體が直ちに鬪爭の力としての團結力を生んだと云ふのは、アダム・スミスを批難し得ざる處の經濟的快樂說であつて、イデオロギイの分析不足であり、同時に心理學前期の論理主義であるといはねばならない。簡單に言へば、吾人の心理的存在は、先資本主義期の遺產として、封建

に於ける權力と責任の平衡感・近代初期に於ける權利不等感・宗教に於ける魂の平等感・勞働に於ける勞働全收感・勞働に於ける勞働興味感・生活一般に於ける生活權利感を內包して居るのである。個人的獲得本能が進化し分化したる處の總括して言へば自個の價値感(Auto-valuation)を中心として存在し、之が現代を批判する處に、社會的運命の不平等感・經濟的被搾取感・勞働無興味感は生活否定感を生む。そしてこの批判が夫々、政治的權利、社會的機會及び社會的扶助等の平等要求となり、勞働全收權・勞働權の要求となり、產業民主主義的要求となり又生活權の擁護となるのである。之が社會批判の心理的因子である。同樣に、先資本主義期の遺產として吾人に存する處の、卽ち集團的獲得本能が進化した自個の進長感(Auto extension)、具體的には人類社會生活史に於ける協同感は現代批判としての利を生み、之から團結に對する欲求を生ずるのだ。之が團結行動の心理的因子である。更に、集團的獲得本能が進化した處の自個の昂揚感(Auto-elevation)、具體的に言へば人類の科學生活に於ける可能感(之も先資本主義期の遺產でないと誰が斷定出來よう。)の現代批判が變革感となる。古くから人類に存する處の象徵本能、具體的に云へば人類宗敎生活史に於ける來世感は現代批判に於て無理想感を生む。この變革感と無理想感が一緒になつて將來の理想社會への信念を與へる。かくして多くの運動は社會主義運動となるのだ。この信念は科學的內容を有すると共に又宗敎的道德的倫理的、換言すれば情緒的象徵的內容を有する。

其の然る場合に於てのみ、方法としての團結力、階級團結力が社會團結力に解消し得るものなのである。極めて簡單である爲に所論を盡し得ざる點は宥恕を乞はねばならないが、かくの如しとすれば吾人は茲に二個の結論を引出すことが出來る。卽ち今回の減俸反對も社會運動も其の本質に於て同質の因子から出て居るものであること、及びそれが一の眞の社會運動の階梯たる爲めには其の意識が其の科學的及び情緒的內容に於てどれ程深く現代社會を批判したものであるかの點にかゝわる丈けだと言ふことである。そして日本社會史は官吏をして比較的早く且つ深く、資本主義機構に其の行掛りを認識せしむる主體的條件を備へて居る、と私は言ひたい。

第二の論點は官吏の團結運動は社會運動たり得可きや又は團結力の方向形式如何の問題である。一體私は日本經濟史の分析に於て官吏の演ずべき進步的役目に就て一の觀察を持つ。日本に於ける進步官僚と經濟少數權力者との力の交錯は、今より具體的に分析規定されねばならないと思つて居る。だが夫れは余白がないからこゝに論じない。一般的に官吏に永續的な組合的團結と其の社會運動への進化は、下級官吏及び特定の專門に於ては存外早く見得ることであらう。此點は問題はない。だが、一般に、殊に上級官吏に於ては、別の見方をする必要がある。彼等の團結は幾多の實現困難な事情、制度上及其のイデオロギの上)が存することを知ることが出來る。乍然私は問題ある毎に隨所隨時斷絕的なる團結力の現出は將來益々其の

多きを加ふるの傾向にありと見るものである。上級官吏も一般に云つて無産階級である。だが所謂プロレタリアと對比した場合の一特質は其の支配的イデオロギイにある。之は封建國家、官僚國家、資本主義國家に於ける傳統から來る。然るに近代經濟の推移と思想的變遷は、官吏中警察行政の上局の如きものを除く他の部門に於ては、其の支配的イデオロギイが急速に指導的イデオロギイに置換へられつゝあるを見る。之は必然の過程である。かうなれば其の團結運動は社會運動の要素を備へて居るものと斷定していゝ。心理的分析に於て勞働組合幹部の組合員大衆に對する立場と彼等上級官吏の大衆に對する立場は本質上相違はなくなつてくる。詳論の隙がないから此點も省筆する。しかし、かくなれば、唯一の相違は、勞働幹部と組合員大衆の間に存する處の、嘗つて蠟山教授が本誌で分析せられたるが如き、行動的小數者と批判的多數者の二者對立の條件の下に於ける有機的代表關係の有無と云ふ事丈けになるのである。處が之も一般に云つて稀薄ではあるが多くの場合に於て存在し得るものなのである。官吏と云ふ行動的小數者に對する批判的大衆の批判は輿論の形に於て表れる事が多い。殊に減俸問題に就て左樣であつた。新聞輿論は素朴な理論に於て資本家階級の作り出すものであると云ふけれ共、其の論說は資本家階級の直接利害とならざる場合は殊に筆者の所屬する智識階級層の意思の表白たることが多い。かゝる輿論の掩護射擊の下に於て、官吏の指導的意識に進化した部分、職業上團結し得る範圍に置かれたものは、勞働大衆の行動に出ることが多い。そして司法官は正にかゝるものであつたのである。かゝる輿論は將來益々盛になるであらう。其の限りに於て官吏の團結的示威は將來其の多きを加ふるであらう。下級官吏は自體として團結する。上級官吏は團結せざる迄も團結的行動に出る場合は多くなる。いづれにしても社會運動の範疇に加つて差支はない。

第三の問題は減俸問題の社會的意義である。

簡單に言へば、前述の如く減俸問題に於ける官吏の行動は、本質上、社會問題の發生と其の契機を同じくするが故に、之は勞働者小作人の爭議其のものが一般に否認せらる可きものでないと云ふ官吏一般の表白と社會は受取つていゝのである。そんな事は從來之に當つて來た當事者としてはどうでもいゝ事であるが、中立した大衆の批判の上には重大な影響があると云つていゝ。

無産政治運動の當面した第一次的問題は勞農提携論であつた。今や一切の合法的議會承認無産政黨には、いはゆるプロレタリアといはゆる智識階級（この用語は私としては多少の說明なくして使ひ得ぬのであるが）の提携論が第二次的に當面の問題として存在する。智識階級の分析には最早從來の如き左翼理論のインテリ概念では不滿足であること丈けは確實である。

憲法と憲政の矛盾

吉野作造

故伊藤公の憲法起草基本綱領

十月下旬國民新聞社主催で、伊藤公の遭難二十週年を紀念する爲めの遺墨展覽會が東京上野自治館に於て開かれた。多大の骨董的價値を有するらしい書幅類も澤山あつたが、主として私の興味を惹いたのは書翰其他の草稿類であつた。就中公が憲法制定の詔命を奉じいよ／＼其の起案に取掛らうと云ふ際その補助員たる井上、伊東、金子の諸氏に書き示したと云ふ所謂基本綱領の草稿は、最も私の感興を唆つたものであつた。之は最近伊藤公爵家に於て故公の遺物整理の際不圖反故類の中から發見されたものらしく、憲法の起案に直接の關係ありしと云ふ所から、伊藤家の當主博邦公より特に金子子爵に贈られたものである。子爵は本草稿と博邦公の手翰とを併せ更に自ら詳細なる跋文を添へて之を立派な一ト巻きに仕立て上げられて居るが、本草稿が憲法起草上の基本綱領としてあの當時示されたものだと云ふ事も實はこの金子子爵の跋文に依て知り得たのである。

この一巻が特に私の注目を惹いた點は二つある。(一)は伊藤公が最も強く英國式の所謂「君主は君臨すれども統治せず」の政治原則を排撃し、天皇親政を以て國體の基本とすべきを力說せることで、(二)は金子子爵が之を以て帝國憲法制定の根本精神となし、先年來よく唱へらるる所謂議會中心主義に付ては之を右の根本精神と相容れざるものと認めらるるらしく切に其流行を慨嘆せられて居ることである。最近の我國に於ける憲政の運用が何と謂ても所謂議會中心主義にかたまりつゝあるは疑を容れない、而して憲法制定者たる伊藤公の起草當時の精神が前記基本綱領の示す如きものとすれば、今日の運用が憲法本來の

精神と全然相容れぬことも亦明白である。金子子爵の跋文を添へて示されたる伊藤公の基本綱領は、右の事實を一層鮮明にして呉れる點に於て大に我々の興味を惹くものである。

因に云ふ、學友平塚篤君の編纂にかゝる『伊藤博文祕錄』(本年三月刊)の「六一 帝國憲法と英國主義」(同書二二七頁)の條下に出て居る故公の手記は、右の基本綱領の初めの一部分ではないかと想像される。さうでないとしても、伊藤公の思想は亦この文字に依ても十分に窺ふことが出來る。而して之に對して加へられた金子子爵の註釋に至ては、所謂伊藤公の精神なるものの最も鮮明なる敷衍として亦頗る注目に値するものである。子爵自身は流石に今日の憲政運用の實況をばその所謂憲法の精神と相容れざるものとはッきり斷言されては居ない。併し或は憲政運用の實狀を說明する世上流行の諸議論の中に許すべからざる「牽強附會の說」あることを遺憾とされ、又或は憲法の精神はその制定の沿革に遡つて之を探求すべきであると主張される所などから觀れば、言辭は婉曲であるけれども、矢張り伊藤公の流れを汲み、今日の憲政を以て憲法の本旨に反すとする立場を執るものと謂はなければならない。

問題の輪廓

この問題に關して平素我々の考へて居る所の大要を摘記すれば次の如くである。

(一) 憲法制定者たる故伊藤公の執て以て帝國憲法の基本精神とせるものが今日謂ふ所の議會中心主義と全然相容れぬものたることは疑ない。

(二) 併し乍ら實際上に於ける憲法の運用は必ずしも伊藤公の豫期せるが如き方向を取らなかつた、憲法の運用に由て作り上げらるる我國の憲政は、公の解する憲法の原則に反して益々所謂議會中心主義の色彩を濃厚ならしめんとする。官僚の一派が頻りに伊藤公の解釋を金科玉條として其の趨勢を阻止せんとし、之に對しては亦政黨側の猛烈なる反抗のあつたことも、普ねく人の知る所である。

(三) 憲法の運用に關する實際政界に於ける爭鬪は、やがて學界にも反映した。學問上に於ける論點は主として左の三項に在つたと謂てい丶。

(イ) 憲法の解釋は其制定者の意思に依て拘束せらるるを要するや。伊藤公は斯く〳〵の考で之れ〳〵の條目を定めたといふ。伊藤公の考なるものは當該條目の意味を定めるに就て肝要な參考材料たるべきは言を俟たない。併し作り上げられた憲法そのものは最早制定者の意思とは全く[illegible]

だ、制定者の意思に依て膠柱的に制約さるべき性質のものではない。そは須らく別に一般の理義に依て解釋せらるるを要する。斯う云ふと反對論者は直に抗辯する、その所謂一般の理義とは西洋に於ける經驗が生んだ諸原則を謂ふのだらう、日本の憲法は西洋慣行の飜譯ではない、その運用には日本獨特の國情に基きて全く新しい原則の樹立を期待すべきであると。乃ち立憲政治の普遍性を無視し國體の特異を力說高調することに依て、憲法解釋上の通說を抑へんとするのである。而して之に關連して伊藤公はいつも憲法の制定起草に當り特に日本の國體を精察し之に基く獨特の方針を建てた人として引合に出される。

（ロ） 議會中心主義は帝國憲法の條章に反するや。反すると云つたのは伊藤公一流の解釋である。之を離れて虛心に帝國憲法の條文を逐讀して見るに、何處にも議會中心主義を排斥する意味の個條はない。尤も議會中心主義を徹底するに都合の好くないと云ふ樣な個條が二三無いではない、さうかと云て議會中心主義を排斥する意味の皇室中心主義の憲法とも認むべからざるは、這の皇室中心主義を徹底するに不便な個條が亦同じく二三あることに依て明かである。要するに憲法制定に關する主權者本來の意思は、議會中心主義と對立反撥する意味での皇室中心主義に據るつもりでなかつたのであらう。果して然らば議會中心主義は伊藤公の素志とは相容れぬが、本來我が憲法その物と相背くものではないのである。

（ハ） 議會中心主義は憲法上君主の大權と相悖ることなきや。既に憲法の條章と反せずと云へば、其の憲法上の大權と相悖ることなきは言ふまでもない。して見れば議會中心主義を排斥する意味の皇室中心主義といふが如きは、本來憲法上の觀念ではないのである。議會中心主義の排斥は謂はば人民參政の排斥である、人民參政の排斥は天皇統治權の絕對不可侵の極限的標徵である。この意味での皇室中心主義は日本の國體の基本的說明としては當つて居る、此點に就ては何人も疑を挿むものはあるまい。而して這の絕對不可侵の統治權を有し給ふ君主が、特に憲法を賜うてその統治權の行使を一定の法則に依らしむべきを宣明されたのである。憲法そのものを君主がお廢めになると云ふのであれば皇室中心主義の國體上如何ともすることは出來ぬのであるけれども、苟くも憲法を前に置いての話であれば、些少でも君主の地位を拘束するといふの故を以て議會中心主義を非議するは當らない。拘束が惡いのではない、その拘束が君主自ら宣示し給へる憲法上の拘束の範圍內のものなりや否やが問題となるのである。若

しそれが所謂憲法的拘束の範圍内のものであれば、其は決して君主を以て統治權の總攬者とする憲法上の重要原則と反するものではない。憲法の範圍内に於ける皇室中心主義は斷じて議會中心主義と相牒るものではないのである。憲法の運用に關しての議會中心主義を論ずるに當り、憲法を超越した國體論上の皇室中心主義を對立せしめるのは、土臺間違つて居る。この意味の皇室中心主義を持て來るなら、之と兩立せざるものは獨り議會中心主義ばかりではない、何よりも先に憲法そのものが徹頭徹尾之と相容れずと謂はなければなるまい。

以上の説明は、簡單ながら學問上の爭點を明にしたと同時に略ぼ今日に於ける學界の歸趨をも語り得たと考へる。而して説いて見れば簡單だが、然うした解決に落付くまでには實は相當の長い時間を要したのであつた。論爭の先端に立つた主なる人を尋ぬれば、古くは穗積八束對有賀長雄、中頃は穗積先生に對して美濃部博士が戰を挑まれ、前者に代つて上杉愼吉博士が起つに至つて論爭は白熱化した。而して大正年代の始めに及んで這の憲法上の議論は漸く略ぼ定まる所を見たのである。斯んな分り切つた問題が其の解決に斯くも長い時間を要した所に、所謂獨特の國情の看過すべからざる所以が存し、その同じ理由がまた憲法解釋の闘士美濃部博士をして時に種々の意味の身邊の危險を感ぜしめたことであらうと察する。孰れにしても當[illegible]解釋の學理上に於ける紛爭の論定に就ては、外にも澤山の關係者はあるが、先づ第一に美濃部達吉博士の功勞を推さなければならない。

（四）　學界に於ける解決が實際政界に於ける在來の動きを幾分助長促進したるべきは是亦想像に難くない。併し乍ら學界に於て最早疑がないとされて居ることがすべて實際政界に於ても同樣に疑ないと容されて居るかといへば、我々は今更乍ら大に幻滅の感を抱かざるを得ない。即ち實際政界に於ては今仍ほ議會中心主義に對する確信が十分ならず、從て之れが徹底の爲めにする必要な努力が等閑に附せられ、甚しきは謬つた皇室中心主義の横行に對する闘志をすら鈍らすものがあるのを見る。それ丈け我々は、實際政界に在ては學界の風潮よりの影響にもかゝわらず所謂皇室中心主義の勢力の依然として容易に拔くべからざるものあるを認めないわけには行かないのである。尤も考へて見れば實は之にも由て來る所の頗る遠いものがあるやうだ。

伊藤公自身が熱心なる皇室中心主義の信奉者であつたこと、此の考に基いて彼れが其の制定せる憲法を運用せんと試みたこと、同時に彼れが又その獨特の憲法理論を有識階級の間に普及せしめんが爲めに非常に骨折つたこと、並に當時の[illegible]所

謂元勳諸公の大多數が實に彼れに輪をかけた程の該主義の盲目的信徒であつたこと等も、看過すべからざる原因に算へねばならぬが、何よりも大事なのは、右の考が幾分憲法成文の上に制度的具現を見て居ると云ふことであらう。其事は後に詳述するが、兎に角我國現在の憲政の運用は、右等の事實に依りて、今日現に理路の徹底した安定を得兼ねて居る樣な狀態にある。固より憲法理論の方面の問題としては、多くの疑問は疾うの昔に解決されて居るといへる。從つて今頃斯んな提案をする私の態度を評して或は陳腐の議論を蒸し返すと難ずる人があるかも知れぬ。併し現在の憲政が事實如何の基礎の上に運用されて居るかを明にする立場から云へば、この論題を紹述するは寧ろ焦眉の急と謂ふべきであらう。民衆政治を確立すべき基礎的地盤の構成を知らずしては、何等の具體的改革案も立て得ざるべきを以てである。

（五）以上の説明は自ら私をして次の結論に到達せしめる。

（イ）故伊藤公の解するが如きが帝國憲法の眞髓だとすれば、我國今日の憲政の運用は全然右の眞髓と相容れない、即ち憲法と憲政の矛盾を叫ばざるべからざる所以である。

（ロ）伊藤公の解するが如きを帝國憲法の正しき解釋と信ずる者は、我國憲政の現狀をば絶對に容認し得ぬ筈である。從て之等の人達に向つては、如何なるが正しい憲政の運用なるかの詳細なる宣明提示が需められなければならぬ。

（ハ）憲政運用の現狀に對し敢て排擊の熱意を示すに非ず、議會中心主義の徹底を目的とする各種の政治改革に對し偶發的に伊藤公の制定の精神などを云々して毎時その阻止を謀るが如き事程、政界を毒するものはない。右か左か態度を何れかに決めて、憲政進展の途を坦々たる大道たらしむることは我々國民の切なる願である。

皇室中心主義と議會中心主義

日本の國體を説明する主義として、皇室中心主義以外の何物をも認むべからざることは前にも述べた通りである。之と議會中心主義との對立の論ぜらるるは實は憲法の埒内に於ての事である。而して憲法の埒内に於ても本來この二つの主義は理論上相反撥すべきものではないのであるが、從來我國に於て之が相轢るものとして取扱はれたのには、亦由て來る所の淵源があると思ふ。私の考では、名を皇室中心主義と議會中心主義との爭に藉るも、本當の所は全く異つた二つの政治主義が斯うした變裝の下に烈しく鎬を削つたものと認むるのである。それは何かと云ふに官僚主義と民衆主義との對抗が即ち是れである。

（一）議會中心主義とは何か。形から云へば議會に於て國民を代表する優秀の勢力に專ら君主輔翼の大任を託することである、精神から云へば君主が二三側近の臣僚とのみ事を諮らず國民全衆と共に社稷の大計を籌劃することである。君民一體の理想はこの主義を徹底することに依てのみ達成せらるるとされる。

（二）議會中心主義の確立は大政親裁の君主の權能を拘束するが故に非なりとする議論がある。この議論を徹底すれば、君主は絶對に御相談相手を有つべきでないと云ふ結論に到達せざるを得ない。維新當時、國政と云ふものを極めて小規模に考へ須らく神武天皇の初政に倣ふべしなどと文字通りの御親政を主張した者もあつたが、それでも左右輔翼の臣僚を全然認めぬ程の趣旨であつたかどうか判らない。國務の複雜を極むる今日、何人を擧げて君主の御相談相手たらしむべきかの一つの制度として組織立てらるることは最早絶對の必要である。故に議會中心主義の排斥は、他に之に代るべき君主輔翼の機關を豫想せずしては全く意義を爲さぬのである。

（三）君主裁政の輔翼に關し議會主義（即ち民衆主義）と對立するものは官僚主義である。即ち議會主義に取て爭ひの相手は本來官僚主義の外にはない。議會主義は之れまで世の鬪はざるべからざる戰に於て屢々君主の大權に弓引くものとして呵責された、而も結果に於ては、その進出に出て追ひ詰められたものは常に官僚主義であり、君主の大權は之に依て益々輝きを增して居るではないか。

（四）故に私は曰ふ、日本の政界に於て皇室中心主義と議會中心主義との對立といふものはあり得ない。若し對立抗爭がありとすれば、そは唯民衆主義と官僚主義とのせり合ひのみである。

さう云つて了へば問題は極めて簡單に見へる。皇室中心主義など云へば談自ら宮中の事にも亙るので輕々に論じ去り得ぬ樣の感もするが、民衆主義の對手が官僚主義だとなれば、斯んなものに一向遠慮する必要はないと云ふことになる。所謂鎧袖一觸忽ち之を粉粹し得べきのみと考ふるだらうが、併し事實はなかなか然うは行かないのである。往來自在一切關門は撤廢したと聞いて驅け出して見ると、到る處で矢張り意外の障碍に遭逢すると云ふ風の事が今なほ頗る多いのだ。振り揚げて見た拳の收めようがなく今更困つて居るらしい政黨政治家の態度を意氣地がないなどと罵るのは情機に通ぜざる局外者の放言に過ぎず、多少でも元老幷に之に準ずべき幾多官僚の政界に占むる現

實の立場を知る者は、寧ろ簡單である筈の問題の實際決して簡く簡單でないことに驚くであらう。

傳統としての皇室中心主義

日本人に取て實は皇室中心主義といふ文字は、假令それが謬つた意味に用ひられても、一應は無批判に受容され易い。從て政治上の論爭に此文字を引援するは一面甚だ卑怯な仕打であるが、他面亦頗る有效な戰術と謂はねばならぬ。而して之は深い思慮を缺く俗人に輕々しく受容れらるゝ樣に、憲法上の理論の攻明の精密ならざる又政治上の論究の未だ幼稚なりし時代に於て、相當の識者から亦成る程と迎へられたことに不思議はあるまい。私は先きに皇室中心主義なる言葉は官僚主義の政治家がその專制的立場の擁護の爲めに之を利用したと述べた。固より此事實に間違はないが、それは專制的立場を擁護し民衆的干與の風潮を阻まんが爲めに意識的に按出されたと云ふ意味ではない。誤解より起つたにしろ何にしろ、皇室中心主義の思想と之を政治上の重要原則たらしむべしとの決意は實は早くからあつたと思ふのである。既に在つたものを意識的に利用したと觀てもいゝが、少くとも既に在つたものが自ら專制擁護の具となつた事實は掩ひ難い。之を要するに、所謂皇室中心主義は夙くから既に政界に在ては一種の傳統として一部識者の精神を支配して居つたのである。この事實を前提せなければ、それが專制主義の擁護の爲めに長い間異常の働きを示した理由が解せられない。

日本人に對つて米飯をやめてパンを常食とさせることは非常に六かしい、パンを食べるな米食で結構といふ主意を貫くことは一擧手一投足の勞に過ぎぬ。專制政治家が皇室中心主義を楯に取て民衆主義の侵蝕を防いだのは、パンを食べるなと云つた程の單純な仕事であつたかどうかは問題だが、少くとも專制主義を向ふに廻しての民衆主義者の仕事に至ては、米を棄ててパンに就かしむる底の難事業たることは疑ない。流石に昭和の今日はそれ程の事はあるまいが、夫れでも去年の春政友會內閣の有力なる高官の口から議會中心主義排擊の堂々と宣明せられた事實などを思ひ合すれば、民間に於ける過去の傳統の遺る所なき潛勢力を今更ながら驚視せざるを得ない。專制主義が理に於て民衆の利害と結局相容れぬものたるは勿論である。不幸にして官僚政治家の我々に課した長い間の劃一的教育方針は、この點に於て民衆の良心を手際よく擁抑して了つた。若し夫れ一般官吏の階級に至ては、近頃政黨的勢力の侵入の結果として、幾分の變調を示して居るとは云へ、思想的に之を概觀すれば、純粹なる民衆主義をよろこばざる點に於て夫の故參官僚と全然其類

を同うするものではないか。

以上の事實は何を語るか。謂ふ所の皇室中心主義なる觀念は、その內容の深く吟味せられずして、漠然官界竝に一般民間に一種の傳統として殘つて居ることを證するものではないか。而して現に在るものを除去するは、全く新しいものを植え付ける以上に困難なることが多い。傳統として殘されたる皇室中心主義は、今日の時勢から觀て若干の訂正を要すべきものとしても、事頗る微妙の機に觸るゝものある所から、迂濶に手を染めると往々にして飛んでもない誤解を惹起すことなきに非ず、現に私も之が爲めに屢々奇禍を買はんとした經驗を有つて居るが、孰れにしても然うした危險を冒すことなしに明白適切なる論究を鋭し難き問題なるだけ、漠然たる觀念は漠然たる儘に放置さるると云ふ傾がないでない。是に於て官僚主義は得たり賢しと乘ずべき間隙を見出して、頻りに自家の立場を之に由て擁護せんとはかる。理論上の問題としては疾くの昔に解決された事であり乍ら、實際政治家に取て憲政の正しい確立を期する前途にはまだなかなかの苦勞の種は多いのである。從て憲政の眞正なる確立を期するには、今日仍ほ政界の一隅に蟠居して相當の勢力を占むる專制主義を始末することに依りて民衆主義を徹底することを必要とし、此の仕事を順調に進むる爲めには先づ專制主義者の動もすれば藉りて以て對抗の武器とする所の皇室中心主義そのものに精密なる檢討を加へなければならぬ。而して是の如きは亦同時に眞乎の皇室中心主義の意義を發揚する所以でもあると私は考へる。

所謂皇室中心主義の由來

「明治聖上と臣高行」と云ふ本がある（昭和三年一月刊）。佐々木高行侯の遺せる日記等に據りて編める侯の傳記であるが、侯は明治天皇御在世中殊も多く至尊に近侍した關係から聖上の御內行に關する記事も多いので、前記の如く題したものであらう。さて此書中、明治十一年五月大久保利通暗殺當時の事を叙した部分に次の樣な事が書いてある。當時侯は一等侍補であつた。侍補とは君德培養の爲めに置かれた官職で、一等が四人、二等侍補が二人、三等侍補が四人あつた。さて侍補一同會合の席に於て侯は左の如き提議をしたといふ。曰く「大久保を殺せる島田一郎等の斬姦狀中に、今日の日本の政治は上は　聖旨に出づるにあらず下は人民の公論に由るにあらず獨り要路の官吏數人の臆斷專決する所にありとあり。是れ方今天下一般の論ずる所にして事實果して然り。故に今日は最早眞に御親政の御實行なくては不可なり。歐洲の如く上下兩院の設けられたる國にても

國王が政治に力を入れざれば行はれ難きに、況んや我帝國に於ては猶更の事なり。維新の大業より郡縣の制度に運び又西鄕の如き人望ある英傑が事を起すも朝敵の名を得て滅亡せり、皆是れ大義名分より成れる事なれば、萬機御親政の御實行こそ肝要なれ。故に侍補一同身命を顧みず　聖上へ十分意見を言上し、屹度御責め申上ぐる事が臣子の職分ならん」。他の侍補はみな之に同意する。依て直に　聖上の御前に出で、拜謁を賜り、最初に候は次の意味を奏上した。「今日御親政の體裁なれども事實は內閣大臣へ御委任なれば、自然天下一般も二三大臣の政治と認め居れり。既に彼の島田一郎等が斬姦狀も天覽あらせられたる如く此の點を指摘痛論せり。就ては今日より屹度御憤發あり、眞に御親政の御實行を擧げさせ、內外の事情にも十分御通じなくては、維新の御大業も恐れながら水泡畫餅に歸すべし云々」。次で吉井友實、土方久元、高崎正風もそれ〴〵進言する所あつたが、米田虎雄の如きは「平素御馬術を好ませ給ふほどに政治上に叡慮を注がせ給はば、今日の如く世上より二三大臣の政治などと言はるる事はあるまじくと常に苦慮仕り居れり」とまで言上したそうだ。聖上には之等の直諫に聊かも怒り給ふ御氣色なく、却て龍顏うるはしく「一同が申出でたる事は至極尤もなり、是より屹度注意致すべし、猶氣付きたる事あらば遠慮なく申出で見れよ」との辱けなき御言葉をさへ賜つた。斯くて侍補一同はこの顚末を逆めて大臣參議に報告したが、四五日を經て三條太政大臣より、「御親政の御實行とて先づ差當り內閣に日々臨御、大臣參議等萬機の事務を議するを親しく聞かせらるるやう今日御座席を設くる事となれり、時々各省へも親臨あり政務を御閲覽あらせらるる事に內決せり云々」との通牒に接したと云ふことである(同書四〇七――四一一頁)。

以上は唯一例を擧げたに過ぎぬ、同じ樣な例を探せば外に幾らもあるが煩はしいから略する。要は之に依りて、當時時勢の必要が一面に於て一種の天皇親政論を爲政階級の間に勃發と醞釀せしめつゝあつたことを知れば足りる。二三大臣の專權と云ふことは、板垣退助等の民選議院建白中の「臣等伏シテ方今政權ノ歸スル所ヲ察スルニ上ミ帝室ニ在ラス下モ人民ニ在ラス而獨有司ニ歸ス」の文字以來、政府反對派の常に口癖に云ふ所である。殊に西鄕の亂以來は此點に關する民間狂熱の志士の悲憤は甚しく、遂に君側の佞姦を除くと云ふ名義の下に大久保の暗殺を見るにまで至つたのである。この事實に直面して、宮中に奉侍せる人々の間に「他人委かせだから斯んな不平も起る、至尊親ら政を執らせ給ふのであつたら決して面倒は起らなかつたらう」と考ふるに至るは亦怪むに足らない。至尊を直接責任の

衡に當らしめ奉るが恐れ多いと云ふ様な思想は、當時の政治家には未だ思ひ及ばれては居なかつたのである。

天皇の政治上の地位に關しては、當時民間の議者階級に餘りはつきりした考は無かつた様に思ふ。日本が萬世一系の天皇を戴く世界に比類なき帝國であること、従て天皇は日本を治むる唯一の主であり、國の内外に對するすべての權力の源が天皇御一人に存することに就ては、何人も疑ふものはない。唯政權の實際の運用と云ふ問題になると、現に至尊の幼冲に在す事實を承知して居るから、その專ら所謂廟堂諸公の方針に出づるものなることは初めから世間の豫定して掛る所である。是れ一面に於て有司專制の叫ばれ寡人政治の弊の說かるる所以であつた。故に民間の問題としては、政權を一部官僚の擅有に委すべきか又は廣く一般の公議輿論に分散すべきかの利害得失の論あるのみであつて、之に對する天皇の地位と云ふが如きは殆んど全く考へ及ばなかつたのである。國體論の範圍に於ては固より絕へず天皇の事が第一に說かれる。政治論の範圍に於て天皇に論及せるは、私の知る限りに於ては其頃僅に福地源一郎あるを數へ得るに過ぎぬやうだ。尤も之は少し年代が後になる、明治十四年春の事だ。彼れは東京日日新聞に連載せる「國憲意見」なる長論文の中に於て「夫レ權ノ歸スル所ハ責ノ歸スル所タリ、其權アリテ其責ナクハ國民ハ何ニ由テ其身ヲ安シ其自由ヲ享クルヲ得ンヤ、若シ叡慮ノマニ〳〵萬機ヲシロシ召サハ恐ナカラ其責ハ帝位ニ歸シ、其激迫スルニ際シテハ帝統神種天皇神聖ノ大義モ國民コレヲ顧ルノ遑ナキニ至ランモ計リ難シ、吾曹カ夙夜憂懼シテ措ク能ハサルハ實ニ此事ニ候ナリ、……是故ニ君民同治ノ政體ヲ建ルニ當リテハ、國民ニ對シテハ大臣都テ政治ノ責ニ任スヘシト制定シ、聖天子ハ人望ノ歸スル者ヲ選ヒテ大臣ニ任シ、人望ニ背クノ大臣ハ之ヲ退ケ、一ニ輿論ノ由ル所ニ從テ社稷ノ重臣ヲ定メ以テ國民ノ責任ニ當ラシメ給フヘシ、然ル時ハ國民ハ政治ノ得喪ニ責任ノ人アルヲ知リ、帝位ハ國民ノ休戚ニ怨府タルコトナク、萬世一系ノ帝統ハ天壤ト倶ニ不窮ニ繼承セラレ給ハンコト疑ヲ容レサル也」と喝破したのである。實際の施政に對しては何時如何なる場合でも一部の不平は絕へぬ、この不平に對する責任の衝に至尊を當らしめ奉つては相成らぬと云ふは、今日でこそ一點の異議を容さざる政治的格言と見做さるれ、明治十年代に在ては實は一種の飜譯思想以外の何物でもなかつたのである。一般の人達は至尊と政治との關係を頓と看却して居つたことは前にも述べた通り、若し之を念頭に置いた者があるとすれば、そは寧ろ至尊が直接に表面に乘り出し給ふたら不平も起り易くなるだらうと云ふ考であつたのだ。福地

の立言は、一讀書子の卓見と聽くべく、當時の輿論を代表するの論說とは認め難い。

加之一種の天皇親政論は維新以來の元勳諸公の主たる目標の一つでもあつた。大勢とは云ひ乍ら多少無理押しで樹てた明治政府を、一日も早く內外に對する強力な組織たらしむるには、名實共に皇室を國民渴仰の中心とすることが緊急の必要であつた。斯くして天皇の敎育といふことは早くから元勳諸公の熱心せる所であり、中にも大久保利通は此點に就て最も大なる獻替の功をいたしたのである。且つこの方針は彼等の精神的薰育の基礎たる封建イデオロギーに合致するものであることも一寸注意を要する。國家の興隆すると否とは上に立つ者その人を得ると否とに倚る。民をして知らしめず唯依らしむるのみの時代に在て此事の大切なるは云ふを待たないが、這の政治思想が時勢を離れた獨立の主義として其後永く彼等の精神をも支配したるべきは疑なく、秩序の未だ十分に整はざりし當時に在ては亦實に大に其の必要もあつたのであらう。大久保の推擧に依り明治天皇の師傅として召された元田永孚の書き遺したものなどを見ると、彼れを始め當時の元勳諸公が、如何に至尊をして一日も早く萬機を親裁し國威を內外に擴張するの英主たらしめんことに苦心したかが能く分る。

そこで私は考へる、天皇と政治との關係に考へ及ぶ限り、天皇親政論は當時の爲政階級間の常識であつた、かの福地の所論の如きは、僅に西洋の文物制度に通ずる少數先覺の士の信奉せるものに過ぎなかつたのであらうと。

天皇親政論と專制主義との協合

天皇親政論が君德を培養して名實共に萬世に輝く英明の君を拜したいと云ふ趣旨に根ざすまではいゝ。天皇は大政を親裁する、大政親裁の自由を妨げ奉つてはならぬからとて、民情の上達を阻まうと云ふ事になつて問題は紛糾する。天皇親政論は專制主義の政治的武器として取上げられてより著しく歪められたことを認めざるを得ぬ。

政治史上の問題として明治初年に於ける民衆主義と專制主義との消長は特に精密なる考察を加ふるの必要があると思ふ。私は從來の考へ方を惜氣なく一擲し、具體的事實の査察の上に全く研究を仕直すの必要があらうとさへ考へて居る。日本の國民性等から考へれば、既に五條の御誓文にも現れて居るが如く、民衆主義者の要求する公議政體が帝國の當に執るべき體制たるに疑はない。併し乍ら明治政府成立の具體的事實と、直前の過去に三百年の長きに亙る封建時代を有せし現實の關係とに想到

すれば、一般人民の側に必要なる根本的訓練を缺くの點を姑く度外に措くも、直に萬機を公論に決し難きの事情なるは火を睹るよりも明白だ。薩長閥族をして所謂集權主義の無遠慮なる實行者たらしめ、他藩出身者の自ら分權主義を以て之に對抗するに至りしは、理義の爭ひと云ふよりは寧ろ多分に史的趨勢に驅られた結果たるを認めざるを得ない。孰れにしても私は公平に觀て、當時の日本にはまだ〳〵集權主義卽ち專制主義が必要とされたのではなかつたかと考へる。西南戰爭以後民權運動の急激なる進展に狼狽して不當に專制主義の鋒先を鋭からしめたるの過失はあるも、兎に角我國が民權論者の要求に聽き早きに過ぎて議會を開設せざりしは寧ろ之を幸福とすべきであると考ふるものである。

斯くして私は明治時代の初期に於ける民衆主義と專制主義との對立を認め、而して其兩者にそれ〴〵存在の理由あつたことをも認めるものである。そこで私は問題を一轉する、彼等は其の戰に於て何を攻防の武器としたか。民衆主義の方は問題外だから姑く議論の外に置く、專制主義は維新の當初五條の御誓文を提督した責任があり、且つ早くから明治新政を施くに[illegible]言し來れる手前、無下に民間の要求を斥けることは出來ない。封建時代賤い身分であつた所謂維新の功臣達が、動もすれば設け掛けられる舊藩時代の主公又は上官よりの批議に對し、自分達は公議輿論を代表するものだと抗辯して僅に安じ得たとの話も此際看過してはならぬ。その爲めに絶へず妥協緩讓を餘儀なくされたことは西南戰役前二三年の歴史の上にも明白だが、遂に漸く擡頭し來れる天皇親政論を引援することに依て彼等は百萬の援兵にも勝る堅壘を築き上ぐるに成功したのである。此事に就ては先づ主として伊藤公其人の當時に於ける政治的體驗を觀察し、其體驗に基いて自ら彼れの腦中に發達せる政治思想を精細に剖判するの必要あり。次では之等の思想方面に於て彼れの帷幄に參した井上毅並に井上を通して可なりの影響を與へた内閣顧問御雇獨逸人ロエスレル等の事なども攻究せねばならぬと思ふが、之等は皆別の機會に讓ることにする。こゝには唯天皇親政論が專制主義者の利用する所となりて如何に其の内容を變化したかを呑み込んで貰へばいゝ。

天皇の御親政、それは誠構に結なことだ。併し專制主義者は民衆主義と相容れぬものとして天皇親政論を振りかざしたのである。

天皇御親政と聞いて民衆主義者も一時は喜んで之を迎へたが、だからお前方の言ひ分は聽かれぬぞと宣告されては、呆然として羊頭狗肉の感に打たれざるを得なかつた。專制主義者は頻りに英國の憲法を引いて議會中心主義の我が國體と相容れし

ぬことを云々する。英國と我國と其建國の體制を同うせざるは固より論するまでもない。唯その憲政の運用を說くに方つて、元來成文の憲法法典を缺き且つ物事を卒直に言ひ去る癖のある英國士人の憲法論の文句を引いて、之を我國の成典と機械的に對照するが如きは、果して親切なる研究法と云ひ得るだらうか。現に英國に在ても種々の事例を引いて實際政治に及ぼす皇室の勢力の意外に大なるを說くの著述は早くからあつた。伊藤公の英國憲法觀の如きは今日より判じて固より正當の見解とは云へ得ぬが、兎に角彼れは之を痛烈に排擊することに依て我國天皇の政治的地位は始めて安全に保護し得ると考へたのだから仕方がない。焉んぞ知らん、之に依て保護せらるるは實は天皇の地位ではなくして官僚の專制的立場であつたのだ。尤も當時の形勢に於て官僚の立場の擁護が天皇の地位の安固と共に兩々必要とさるべき理由のあつたことは事實である。

伊藤公などが官僚の利害と皇室の利害とを混同して考へたといふ事に付ても一應は之を諒とすべき理由もある。一體萬機公論に決するの上下心を一にして盛に經綸を行ふの庶民に至るまで各其志を遂けしむるのと云ふても、當年の政治家が腹の底まで斯うした新しい思想に浸透され切つてゐたと見るのは間違である。現に五條の誓文の宣揚と相前後して、新政府は舊幕時代の法則を其儘踏襲して全然封建的な徒黨・强訴・逃散の禁を發令して居るではないか。開明の新政に從來の面目を一變せんとするの意氣込みは盛であるから、然うと氣づけば一應は何でも新しきに就くの態度は失はない、併し乍ら長い間に養はれた傳統や因襲やは一朝一夕にして之を取去り得るものではないのだ。斯う云ふ所から、彼等は口では安價に君民一體の理想を說けど、腹では如何しても支配者被支配者の階級的對立を當然の事實として前提せざるを得なかつたのである。百姓町人は治められる階級、皇室を中心とする自分達の一團は治める階級。新しい政治とは治めらるる階級の意向をも聞いてやることだとまでは知つてゐるが、併し之に由て彼等爲政者の期待する所は、斯くして百姓町人も自分達の誠意を知つて呉れ、昔しの樣に公事に無關心な態度は棄てて之からは進んで政府の施設に賛成するだらうといふ位の事であつた、卽ち民に知らしむるは民の協贊を待つ所以。斯くて始めて君民一體となつて國基を振興するの本源は立つと考へたのだ。されば維新當初時の政府者は、いろ〳〵の手段を講じては民情開發に熱中したものであつた。幸にして當時の百姓町人は未だ全く封建時代の遺風を脫せず、公事に對しては勝手の批評を愼むべきものと心得てゐたから、腹に如何なる不平不滿があつても容易に之を口に出さず、口にするもの

はたゞ紋切型の政府禮讃に過ぎなかつたので、政府者に取ても暫くは這の民情開發方針の繼續を以て自家に不便なものとは氣付かなかつた。併し乍ら斯の如きはさう永く續くものではない。一旦口輪を解かれた百姓町人は何時までも僞善的從順の德を守らうとせぬ。況んや外の諸種の事情は更に一層自由批判の風潮を彼等の間に激迫せるものありしに於てをや。斯くして明治十年代の形勢になると、事實に於て民間と廟堂の對立は避け難きものとなつた。眞に心ある者は、この對立抗爭を餘儀なきものと見做し而して寧ろ皇室をば速にこの爭から超然たらしむる樣工夫すべきであつたのに、當時の政治家は殘念ながら思ひ此處に及ばず、民間の勢力を以て一圖に皇室と利害相反するものなるかに看得し、前者の進出に對して、後者を保護せんが爲めに特別の施設を必要なりとさへ考ふるに至つた。所謂皇室の藩屛なる言葉の如きは最も適確にこの觀念を現はすものである。百姓町人を飽くまで領主と相對立する固定階級と見、所謂仁政と云ふが如きも畢竟は前者の利福の爲めに後者が自發的に多少の犧牲を忍ぶことだと觀じ、治める者治めらるる者の利害の渾一と云ふ事に就て更に說く所のなかつた封建時代の敎養に培はれた當時の政治家達に取て、右の如き思想があらゆる政治方針の前提となるのは亦已むを得ないことでもあらう。

伊藤公の憲法起草の精神

伊藤公がその專制的立場を擁護せんが爲めに意識的に天皇親政論を引援したと云ふのは恐らく誣言であらう。けれども彼れは一團の政友閣僚を率ゐて至尊に側近し、高く障壁を築いて容易に局外者をして近づき窺ふを得しめず、獨り自ら至尊に訴へ又其の詔命を奉じて天下に號令し、之を以て日本國體の眞髓たる天皇親政の實を擧げ得たと信ぜしことは疑ない。之等の事實は『伊藤博文秘錄』を見てもよく分る。併し何よりも明に伊藤公のこの思想を示すものは、彼れがその自ら起草せる帝國憲法に與へたる註解である。私は其の一つの例として樞密院に關する部分を引いて見よう。

伊藤公はその著『憲法義解』第四章の解說に於て次の樣に述べて居る。「國務大臣ハ輔弼ノ任ニ居リ詔命ヲ宣奉シ政務ヲ施行ス、而シテ樞密顧問ハ重要ノ諮詢ニ應ヘ樞密ノ謀議ヲ展ブ、皆天皇最高ノ輔翼タルモノナリ」と。即ち公は施政最高の實權は至尊儼として之を握り給ひ、而して右には樞密顧問を率ひて事を諮り左には國務大臣に命を傳へて萬機を行はしむるの制度を眼中に置いてあつたのである。是れ取りも直さず天皇親政を以て帝國憲法の根幹となすの見解ではないか。

世間には樞密院を以てもと憲法審議の爲めに設けられた臨時の機關であるかに說くものがある。憲法の草案が出來た突然公布するよりも一應相當の機關に諮つた方がいゝと云ふので、急に樞密院を作つたと云ふ歷史はある。併し單にそれ丈けの目的で出來たものだから、當てがはれた仕事が濟んだら直に廢さるべきであつたと考ふるのは大なる誤りである。尤も樞密院存續の可否と云ふ根本論なら又別問題だ。憲法上の制度としての樞密院は、旣に憲法草案にも豫定されてあつたので、憲法に依て作らるべきものが便宜上憲法に先立つて作られたといふに過ぎぬのである。憲法に先立つて作られたことは、固より憲法審議の爲めに相違ないが、旣に作られた樞密院は、憲法の確定と共に之に基いて種々重要の職務を有つことになつたのである。而して制定者たる伊藤公の解する所に依れば、國務大臣は單に君主の詔命を奉じて大政の施行に當るものに過ぎず、從てその所謂輔弼は詔命の執行に限らるるのであるから、外に詔命そのものの構成に付て君主を輔翼するものがなくてはならぬ、それが樞密院だといふのである。『憲法義解』は更にこの點を一層明白に說いて居る。曰く「蓋內閣大臣ハ內外ノ局ニ當リ敏急捷活以テ事機ニ應ス、而シテ優裕靜暇思ヲ潛メ慮ヲ凝シ之ヲ今古ニ考ヘ之ヲ學理ニ照シ永圖ヲ籌畫シ制作ニ從事スルニ至テハ別ニ專局ヲ設ケ練達學識其ノ人ヲ得テ之ニ倚任セサルヘカラス、此レ乃チ他ノ人事ト均シク一般ノ常則ニ從ヒ二種要素各其ノ業ヲ分ツナリ。蓋君主ハ其ノ天職ヲ行フニ當リ、謀リテ而シテ後之ヲ斷セムトス。卽チ樞密顧問ノ設置ニ內閣ト倶ニ憲法上至高ノ輔翼タラサルコトヲ得ス」と。

以上も一例に過ぎぬが、之れだけに依ても伊藤公が如何なる主義に基いて我が帝國憲法を起草されたかが分るだらう。伊藤公自身は本來頗る淡懷の人柄であり、客に接するにも城府を設けず、用ふるに足るの人材と見れば門地鄕貫を問はずどん／＼拔擢したと云ふから、彼れに依て率ゐらるる爲政階級は、年を經るに從て大に其の內包を民衆化するの可能性はある。現に、是れ一つにはまた時勢の影響でもあつたが、所謂藩閥の內容の憲法發布前後に至て初期のそれに比し著しく改鑄せられて居つたことも爭へない。併し乍らそれでも天皇親政を伊藤公の解するが儘に執つて旗幟とする限り、結局の實權は至尊側近の二三者に歸し、そが果して帝國將來の政治の爲めに得策なりや否やが永く疑問たらざるを得なのである。いづれにしても私共は、伊藤公の解する所の憲法の何物たりやに付ては十分明白なる認識を把持することを必要とする、而してこの種の憲法觀が多くの先輩政治家間に安價に承認され、又は少くとも無遠慮に之を

批判するを憚られて居る所以に付ても、一應の理解を有つは極めて必要の事と考へる。

附記、樞密院の政治的地位に就ては昭和二年六月の本誌に於て多少綿密なる研究を公にしたことがある。近く公刊さるべき小著「憲政の運用」中にも收めるつもりだが、就て御參照下さらば幸甚とする。

結論

始めからことわつて置いた通り私はこの小論文に於て憲法並に憲政に關する學問上の理論を説かうとするのではない。學問上では疾うの昔に解決がついたのであるけれども、所謂伊藤公の憲法精神なるものが不思議に政界の一角に居然たる勢力を占め、現に運用されて居る憲政の活用に對して一種異常の牽制力を發揮するの事實をば、實際政治上の一重要問題として國民の眼前に展開せんと欲するに過ぎぬのである。例へば世間の一部には漫然として樞密院の廢止を叫ぶものがある。政治學上の議論として樞密院の如きの之を存置すべき根據なきは或は自明の理なりとしよう。けれども之を如何にして廢するを得るか、又は少くとも之を如何にして無力なものと爲し了うることが出來るか、實際政治の問題としては寧ろこの方が喫緊の重要研究項目であらう。伊藤公の憲法精神又は皇室中心主義の憲法觀なるものの解剖と、其の發生成育の史的過程に關する私の説明は、不完全ながら幾分這の實際問題の解決に心を向くる人達の參考になるかと考へる。更に進んで之を如何に解決すべきかに付ては、固より私に一個の成案が無いではないが、餘りに長文に亘るを恐れて之は他日の論究に讓りたい。唯吳々も注意したきは

(1)所謂伊藤公の憲法精神を奉ずる限り、今日の憲政運用の實況は斷じてその憲法精神と相容れぬものであること。

(2)謂ふ所の憲法精神を確守してあらためて憲政實際の運用に方向轉換を劃するは事實に於て不可能であること。

(3)このヂレンマに當面して一時姑息の妥協彌縫を事とするは政界腐敗の重大原因でなくてはならぬこと。

の三點である。かくて結論は當然に議會中心主義を一層徹底して君民一體の大理想を實現するの外はないことになる。議會中心主義の名を聞いて直に皇室中心主義を之に對立させるのは不明も亦甚しい。議會中心主義の對手は唯一つの官僚主義の外にはないのである。而して議會中心主義のチャムピオンたる各政黨は、元來その朝に在ると野に在るとを問はず、共同の問題として大にその確立に盡力すべきではなかつたか。今までの樣に甲黨が乙黨を失脚せしめる爲に密かに款を官僚主義に通ずると云ふ樣なことでは困る。各政黨が徒らなる政權爭奪の惡夢より醒め、問題に依て互に爭ふべきものと倶に協力すべきものとの甄別をあやまらず、以てする憲政の大局を玉成の誠意なくんば、所謂明るい政治は何時まで經つても我々に惠まれぬであらう。

萬葉以後の新興運動

——敢て世の歌人俳人短詩人に質す——

河東碧梧桐

○

私はこの問題を、つゝましやかに、いたづらな昂奮なしに、むしろ冷やかに落着いた虚心坦懐で論議したいと思ふ。考察してほしいと思ふ。それは私一個の、又た私達一派の問題でなく、弘く且つおしなべて、定型律に安住、不安住の如何に關らず、現代短詩の上に降りかゝつてゐる問題であると信ずるからである。で、なるべく無用の虚辭文勢を省いて、核心の條理に觸れて行きたいと思ふ。私には甚だ不得手な事ではあるが……。

○

先づ考察の前提として正岡子規の事業に就て一言したい。

他の事は姑らく措く。和歌俳句の革新をして、詩的批判を明らかにし、萬葉を蘇らしめ、芭蕉、蕪村を喚び起した、たゞそれだけが、子規の事業の總決算であつたのであらうか。

萬葉は既成歌集であり、芭蕉、蕪村は既成作家であつた。若し假りに、萬葉以後の作者、芭蕉、蕪村の繼承者が、詩の正道を歩みつゞけてゐたとしたら、子規の存在は同時に消滅するものなのだらうか。

詩に似て非なる雜草に覆はれた、正しき道を指示するだけなら、それは埃及にツタンカアメンの墓をあばき、燉煌に漢の遺物を見出すのと、略ぼ同程度の發見にとゞまる。子規はたゞその發見者に過ぎないのだらうか。

試みに、子規は萬葉以後、歷代の歌集が、次を追うて詩の圈外に墮落してゐると絕叫したのであるが、其の墮落は、偶然なのであるか、又た必然なのであるか、若し必然であるなら、何處に、何に、其の因由を求むべきかの、明らかな、深い考察を

見せてゐないのである。

更に卑近な例を言へば、なぜ和歌が三十一字であり、俳句が十七字でなければならないかの疑問に遭遇して、合理的な答へをも用意してはゐなかつたのである。

まして、萬葉以前の古歌古謠が、何故に雜ばくな自由型式であるのか、それが萬葉によつて、略ぼ七五調三十一字形に整理された所以は何に理由づけられてゐるのか。それらすら何らの考察は發表されてゐないのである。

要するに、短詩の成立根據、定型律の存在價値、それはやがて自己の創作、自己の詩的管見に影響する問題についても、其の造詣は洩らされてゐないのである。

子規の事業は其の端緒であつた。横に據けられたまゝで、縦には深くなかつた。子規は死期の近づいたのを知つて、此頃の頭の明敏さは、今日までの多くの疑問が悉く氷解した思ひである、が、之を組織立て、發表する氣力がない、眞に寶の持ち腐されである、と歎じた。病的錯覺が絶無でないにしても、終に發表の機會を失した、沈潜的考察は胸中に祕められてゐたのだ。尚ほ十年二十年の餘命を保たしめ得たら、端緒は結成に伸展し、間口は奥行きに深められて往つたとも想像すべきである。

一方から言へば、子規も時代の人であつたのだ。江戸時代の因襲打破を目標にした子規も、尚ほ其の因襲に引きずられる惰性を餘儀なくしてゐた。作り來つた和歌俳句の成立根據にも、其の詩形の存在價値にも、何らの疑問なしに通過したのだ。だから、社會的進出を意味する、現實當面の問題に忙殺されもしたのだ。詩成立の第一義、形式完成の傳統過程、それらに一指を染めることなしに、單に既成觀念の範圍内に於て、發見程度の論議を試みた、と言つても、それは時代人子規を累ひすることにはならないのである。

子規逝いて三十年、時代は正さに一轉してゐる。既成觀念以上、考察の一歩も踏み出し得ないことが、果して後人の先人に對する道德なのであらうか。

○

總ての藝術には、平等差別觀を問はず、時代及び人を超越して、共通する成立根據がある。藝術の一分派としての短詩には、又た短詩成立の根據がある筈である。

若し現代短詩の成立根據に就ての考察が、其の成立を合理化するものであるなら、それは同時に、萬葉時代人の、其の先人の所産にも適用さるゝものでなければならない。或る限られた時代、又は或る限られた個人にのみ合理化さるゝとも、他に設

及しない考察は、單なるイゴイズムに過ぎない。和歌の三鳥傳俳句の語呂合せ、それらが和歌俳句の成立根據と没交渉であると同じである。

さらば、時代及び人を超越して合理化する短詩成立の根據とは何か。

其の抽象的議論に入るに便する爲め、先づ定型律七五調の本山とも目さるゝ萬葉の考察、及び萬葉以前の原始的自由律の比較觀から始めたい。

古事記、日本書紀等に散見する古歌古謠——尤も右古記錄も後世度々改ざんされたといふことであるから、眞の考證には聊か不滿足であるが——の大部分が、まだ長短とも和歌の形式を具備してゐないに關らず、殊に歷然とした七五調といふ標準の不定であるにも關らず、それまで耳から耳、口から口へ傳へられた古歌古謠を蒐集したと言はれる萬葉集が、劃然として七五調に統一され、長短歌の形式を具備するに至つた因由は何にあるか。これを單に時代的自然の推移とのみ看過し得るであらうか。

多くは感情のクライマックスに迸發した、先人感又は因襲的拘束の稀薄な、美感に訴へようとする自己表現の製作心理に伴ば無意識であつた、古事記時代人は、どうして長短區々、諷詠形式の自由道をたどるのであるか、先づそれから一考察に入る必要がある。でなければ、次ぎの萬葉時代人の整理統一——古事記編著時代と萬葉編著時代は、さまで時間的間隔はないと思ふが——の消息も說明は出來難いのである。

プリミチーブな文化人の情操が、其の文化に比例してプリミチーブであるとは容易に斷ぜられないであらう。が、其の情操の發露、言葉となり詠歌となる徑路は、複雜な文化人に比して卒直であり、無邪氣無技巧であるとは想像され得る。

今日の動物學者が考へるやうに、動物の感情表示の單聲さへが、或るリズムを持つのは、其の單聲を發する感情內容のウエーヴの直寫である、といふのに準ずれば、プリミチーヴな文化人の、直接な無垢な感情表示の諷詠も亦た其の感情內容のウエーヴに基づくと見なければならない。言ひ換れば、動物により近いプリミチーヴな人間ほど、感情のウエーヴに卽するリズミカルな感情表示を持つといふことになる。

感情內容のウエーヴとは？　私の考ふるところでは、それがどれほど刹那の「驚き」「怒り」「悅び」であらうとも、其の內在性は、細かな又た複雜な或る波動的顫へを持つといふことなのである。たとへば、琴絲や三味線の絃が音を發する時、それは我々の肉眼には見ることの出來ない微妙な波動的顫へを持つ

のと同じである。

激越な感情のウエーヴ、平和な感情のウエーヴ、愉悦、悲哀、憤怒、冷笑等々のウエーヴは、それ〲に別々な波動的内容を持つこと、高音低音、緩調破調の紘の波動的顫への相違であるのと、亦た同じである。

プリミチーブな文化人の感情のウエーヴに即する謳詠が、長短區々一定の形式に則らない所以は、こゝに於て明白である。彼等は詩を作る製作心理の稀薄な、感情のウエーヴの迸發のままに、自然の叫びに隨順するからである。

○

萬葉時代人が、古事記時代人よりも、謳詠に對する考察を進めて、感情の迸發に即する自然の叫びを、より美しき言葉に盛らんとする製作心理を生んだことは、當然の成行きであつた。それは、感情内容のウエーヴを統制して、より普遍な、より簡易な表現形式を生む素地であつた。

併しながら、さういふ感情表示の詩の進化も、生物の進化のそれのやうに、或る年代を追うての徐々として遲々たる自然の推移であるべきが普通である。古事記時代人の謳詠と萬葉時代人の詩には、餘りに劃然たる、斷ち切つた表現形式の差を見る。これをどう解釋すべきなのであるか。

段階なしの跳躍には、そこに何らか異常な力が働いてゐると見なければならない。私の考ふるところでは、萬葉の編著にあたつた詩人の、言葉及びリズムに對する特異な敏感性によつて左右せられてゐないかと思ふ。萬葉の著者は、口碑に傳はる先人の謳詠を蒐集するを眼目としたかも知れぬが、彼の詩的敏感性は、むしろ鈍感なたゞの蒐集者にはしておかなかつた。其の感受性にそぐはないものは捨て、其の舌にさはるリズムは削り大膽にして尖鋭な斧鉞が加へられた。即ち蒐集者としてゞなく一個の藝術批判者としての整理が行はれた。

或は政治體系、社會體系、經濟體系の一段階的完成に誘發されたと見ることも出來る。

或は土着文化と外來文化の生硬な搗きまぜが、成熟渾融を見た副産物であつたとも見ることが出來る。

それら外面的事相に背景づけられるものも、萬葉著者の藝術的敏感性の統制裁斷がなければ、古事記時代と萬葉時代の詩歌の激轉を見ることは出來なかつたであらう。

それ故に、私は萬葉を一部の古代謳詠の記錄——學者の仕事——と見ず、著者の敏感に彩られる、それはクラシックの古畫を、表現派の手法で臨寫するやうな、一種の創作——詩人の仕

事——であると見ようとするのである。若し疑惑の目を以てすれば、萬葉著者の切り捨てた、又た改ざんしなかつたものに、却つて古代歌謠の價値を見出したかも知れぬ。が、一個の藝術品としての萬葉は、それに對して何らの痛痒を感じないのである。

萬葉の七五調統一も、三十一字形も、やがては著者の創造なのである。言葉及びリズムに對する敏感性が、著者その人に最も快感を喚び、完成を感ぜしめる表現形式に到達せしめたのである。萬葉著者の感情内容のウエーヴを表現する形式として、明澄な唯一の大道である目覺めを喚んだのである。

理論として、弛張緩急區々なるべき感情内容のウエーヴを表現する形式として、或る局限された一律を選ぶことは、大なる不合理性を持つ。が、一詩歌として價値づけらるべき感情内容のウエーヴを直感して、そを一律に局限する必然性を發見した、それは萬葉著者に限つて、自己信頼の英斷であつた。理論的不合理性を、自己に合理ならしめる詩人的飛躍であつた。

尤も、國語の先天性、呼吸及び舌の運動の肉體的條件、山川草木等の環境の影響、それらを等閑視することは出來ない。それらの背景的自然力も、こゝに詩人的攝取の感應がなければ、たゞさういふ事實の堆積に過ぎないのである。

であるから、私は萬葉の用語についても、其の感情内容のウエーヴを直現するが爲めに、且又其の三十一字形及び七五調を生かすが爲めに、自然に迸發する自家用語、即ち多くの詩語を生み出してゐることをも肯定したいのである。一首を生命づける詩語は、詩を解しない科學者にはたゞの譌語である。そを理由づけようとした、古來の萬葉學者に、滑稽な錯誤の生ずる所以である。萬葉時代人の口語及び文語、それがどういふものであるかの研究が進展すれば、このことは更らに一層明白にされるであらうことを信ずる。

○

私は、七五調を神代ながらのリズムであるとか、三十一字形式をやまと言葉の最善最美の形であるとかいふ無根據な概念的迷信を一掃したいと考へるのである。萬葉を詩人的創作であるとし、七五調を萬葉人の創造と見なければ、子規の所謂、歷代和歌集が逐次詩的價値を遞減して行く理由の合理的說明も出來ないのである。

歷代和歌集は、萬葉の創造の模倣なのである。其の踏襲なのである。詩は全的自己の創作でなければならない一半の先天性を缺くのである。萬葉人の三十一字形の發見も、總ての藝術の

徑路の物語つてゐるやうに、左樣に簡單な容易な發見ではなかつた、そこに到達するまで、定めて深刻を創造苦を嘗めてゐると想像される。他の創造の模倣と踏襲は、既に詩を價値づける主なる要素としての創造苦體驗の程度の淺さを物語つてゐる。多少の除外例はあらうとも、創造苦體驗の稀薄な安易な道をたどる詩の生命は、何らの論議を費さずして明らかである。

萬葉を詩の創作と見るにしても、萬葉の歌悉くが詩的價値を持つとは言ひ難い。相應に低劣な作の混入する所以は、他に種々な因由もあるが、其の大發見であつた詩形統一の桎梏であることを、萬葉人も一應反省しなければならないのである。個性、環境、體驗の相違による感情内容のウエーヴ、それが千狀萬態であるべき自然性を、時には強ひて一律に、燃燒しようとする詩的昂奮を餘儀なくするからである。其の感情内容のウエーヴに順從すべき表現形式を求めない、根本的不合理性を、偉大な創造力も遂に曲庇し得なかつたのである。外的形式及ひリズムを固定して、内的感情のウエーヴを律しようとするのが、模倣と踏襲の大なる缺陷である。萬葉人は其の創造の犧牲として、又た當然の餘剩として、形式至上の不合理性突破も、或は認容されないにも限らない。始めから形式妄信に安住する模倣者は、或る偶然の力が、詩の創造に誘引する機會を與へられてゐるに過ぎないのである。

形式至上主義者は、能樂の型などを引いて、和歌俳句の形式踏襲を辯護しようとする。私も能樂愛好者として、其の形式尊重を肯定する一人である。が、本來全的自己表現に自由であり、解放さるべき詩歌を、局限された形式文學に我れから蟄居しようといふなら何らの論議はない。たゞ詩歌の廣大な翱翔世界を見捨てゝ、井の底の蛙と安住する愚を憐むのみである。且つ能樂の型といふものも、それが音樂舞踊の綜合藝術であるが故に、其の形式の生存條件は詩歌の形式と多く別趣であることを注意せねばならぬ。即ち、其の固定的意味に於て、より多面的な、より自由な形式内容を持つのである。形式は、其の形式運用の自由裁量の許される範圍の廣狹が、同時に其の生存條件に影響するのである。殊に我々の知る能樂は、先人の創造を模倣する形式運用の成果にとゞまつてゐる。それすらが一個の藝術的價値を持つと言つても、其の創造者たる先人が、始めて能樂完成を告げた當時の、創造苦體驗の光明に輝く、驚異的な演出を想ふ時、我々の知る能樂が、どれほど弛緩した末期的な緊張であるかを省みねばならないのである。

所詮形式の固定は内容の限定を意味するのである。既に「盆」といふ形式を固定すれば、そこに盛らるべき内容は自ら限定さ

れるのである。正岡子規も、和歌革新に志した當初、俳句的叉は漢詩的叙事叙景及び用語を活用すべき多少の自信を持つてゐた。が、約拾年ならずして、其の幼稚と無謀を悔いたのである。さうして三十一字形に盛らるべき内容の限定を肯定せねばならなかつた。内容の限定は人間の多角面を平面にする。生活游離の假想世界を現出する。風流と言ひ、俳味といふのも、詩歌内容の限定に因する當然の概念化なのである。かくて滔々として、詩的價値の減殺に急ぐのである。

○

俳句の場合に於ける考察は稍〻異なる。宗鑑が「犬筑波」に始めて獨立の發句を掲げた時代は、芭蕉の萬葉時代に對する古事記時代にはあたらない。

和歌の爛熟頽發の餘、詩的精神を缺いた文字の遊戲化した連歌の分派は、何らの進化も更生をも意味しない、細胞の分裂に過ぎなかつた。

貞德も宗因も、十七字形式の獨立的存在を確認せしめる過程には役立つたであらう。文字の遊戲化を大衆的ならしめた效果は沒却されないであらう。見樣によつては、俳句が詩的存在に到達する、當然の犧牲であつたかも知れなかつた。

芭蕉出でて始めて、空虛な存在としての十七字形に、詩の内容を充實せしめた。感情内容のウエーヴと交感する言靈に立脚して、十七字形の外殼罷脫と、其の更生に邁進した。詩的批判の上で俳句の歴史が芭蕉に始まるといふのは、芭蕉によつて十七字の詩形の存在を有意義ならしめたが爲めである。

芭蕉の俳句創造を時代的に見て、全く暗夜の光明であつた點を偉とせねばならない。彼が和歌に行かずして俳句に據つた、自己の往くべき道の選擇も、詩的根據のあるものと肯定しなければならない。併しながら、一方に其の十七字形に於ける彼の先入感も、亦た相應に濃厚であつたことを否定出來ない。彼の感情内容のウエーヴに卽する唯一の詩形として、十七字形を選んだのであるか、それとも在り來つたマンネリズムを其のまゝ享容したのであるか、疑ひなきを得ない。

在り來つたマンネリズムの無意識な享容であるなら、其の創造の片脚は、模倣蹈襲に汚れてゐる。詩的發見の偉業も、或は偶然であつたかの疑惑を抱かしめないに限らない。芭蕉に敬意を表する上から言つて、若し一層熾烈な創造氣に燃ゆるものがあつたとしたら、其のマンネリズムに對して、更らに思ひを潛めねばならなかつた、さういふ批判をも餘儀なくするのである。

芭蕉は詩的内容の不易流行を說いて、むしろよく移りよく轉

じた。彼の詩人性は、どう流行を轉廻するかに、可なりに焦燥であつたとも見られる。生活的孤獨と閑寂を欲したのも、詩的希求の混濁を避けんとする方便であつたかに思へる。然るにも關らず、遂に一指を十七字形に染めようとしなかつた。のみならず、晩年十七字形の正統觀を固守して、其の初期の作——十七字形に則らない——をも改ざんする意があつたと傳へられてゐる。私はこゝにも、創造に勞れた、形式中毒患者を見出すのである。

されば、芭蕉が瞑目すると同時に、空虛な形式マンネリズムの外殼を殘して、元祿俳句は崩壞の運命に歸した。蕪村の起つまで約百年、俳句は詩の水準以下を彷徨する中間存在に過ぎなかつた。

私の言葉に從へば、形式マンネリズムの中に、よし多少の時代は相違するとも、蕪村の輩出は全然不可能でなければならない疑問が起る。が、形式の存在は、或る一面の合理性と必然性を持つ以上、其の要諦を體得したものにとつて、自己の感情内容と同時に生存可能なのである。まして時代心理が、先人の規範を肯信する、先人繼承を無碍に享け容るゝに於てをや。

蕪村は芭蕉よりも高踏的詩人氣質であつた。繪畫に於ても、俳句に於ても、多くの獨創味を持つてゐた。十七字形式も、尙ほかやうな内容を盛り得るかの、卽ち元祿時代人に對して、天明時代人の別な往き方を明らかにしたのも、彼あるが爲めであつた。然るにも關らず、彼が俳諧に示したやうな、破格な筆法——形式の突破的自己表現を俳句に試みる勇氣はなかつた。

蕪村歿して後、天明俳句も亦た消滅に歸した。それは元祿俳句の芭蕉歿後崩壞したよりも、更に一層迅速であつた。

元來藝術は個人的存在である。師弟繼承するといふが如きは傳統的誤謬想であると言つていゝ。元祿俳句、天明俳句が芭蕉、蕪村の個人的藝術の存在であるなら、其の個人歿後と同時に消滅すべき運命である。殊に、單なる詩形の形骸を蹈襲して、何の藝術の繼承ぞや。時代心理と言つても亦た悲むべき滑稽事である。

正岡子規出でゝ、三度十七字形が復活した觀がある。子規自らは、芭蕉、蕪村を兼ね併せて、尙ほ明治の時代心理に立つ優越感を抱いてゐたかも知れない。が、其の創作が果して其の優越感を裏書きするや否や。そはともかく、さほどに犀利な聰明な批評眼にも、遂に形式マンネリズムに向つて一顧をだに與へなかつたのである。子規に於ては、むしろそれが不可解な存在であつた。

○

私は尚ほこゝに和歌俳句を通しての一考察を餘儀なくする。

子規が古今の名歌と稱せらるゝものを理屈の所産とし、貫之を理屈屋の親玉と罵倒したのは、當面の價値判定問題であるが、さらばなぜ左様に、古今集以後理智の潜入を將來したかの、和歌墮落の過程に向つては、殆んど何ら言ふ所はなかつた。歴代和歌集の萬葉に劣る所以は、情緒表現の詩に、理智的解釋を與へ、理智的說明を加へた、理智潜入に墮したからだ。それは爭ふべからざる事實であるとしても、其の所因は何にあるのか。

私の考ふるところでは、形式至上、形式萬能に膠著すればする程、詩的昂奮と心的飛躍を鈍らすが常である。しかも、尚ほ何らかの自己存在を裏づけようとする欲求を制止し得ない。先師の筆法繼承に沒頭する畫家も、尚ほ自己の個性を包藏し得ないのと同じである。この形式マンネリズムの中に生きようとする努力、そが詩線を離れて圏外に逸脱する時、先づ自己の滿足と快感を買ふ、より容易な手段に訴へようとする、そこに擡頭するのが理智の影であると思ふ。

又た、情緒の表現も、自然の草木を諷ひ、戀を叙する在り來つた道は、詩的昂奮を減殺すれば、どれ程鈍感な者でも、形式マンネリズム化した行き詰まりを感ずるのである。そを打開する新たな手段として、理智の岐路を生むのであると思ふ。詩の邪道といふより、非詩的根蔕としての理智の潜入は、作者にとつては、自己の生き、作の伸びる已むない道であつたのだ。

殊に藝術心理に味到し得ない、詩歌成立の神祕を體得し得ない、藝術の周圍に蝟集する傍觀的大衆に向つて、この理智の潜入は、藝術享樂の何らかのヒントを與へる鍵として享け容れられる。理智は、直感味了の藝術の神祕を開く何物でも有り得ない。たゞ傍觀大衆は、始めて神祕の堂奧を覗くよすがとして、其の理智をたどりつゝ、解けざる謎を解かうとするのである。理智の潜入は、詩歌を大衆化する好個の楔である。さうして、滔々として似て非なる諷詠に走るのである。詩歌の理智化は、同時に非藝術化である重大な痛心事にも、敢て無關心であり得るのである。

詩歌の理智化と稍々方向を異にして、多くの詩歌人の陷つてゐる宿弊は、詩歌の理解化である。

詩歌の理解化とは、詩歌の生命である情緒の機微に味到する一種の媒介者として、理智の裁量を加味するの謂ひである。情緒の機微 感情内容のウエーヴは、全的にたゞ直感すべきである。我々の視覺が物を見、聽覺が音を聞く底の直接感受である。色

盲者のやうに、半聾者のやうに、其の直接感受の間に、理智的解析の介在する、そを理解化といふのである。

で、作者としての理解化は、自己の情緒の生動を摑むより、そを他に訴へしめよう解析が先きに立つ。表現的整備の手段は却つて生き〳〵した情緒の呼吸をとめる。順序正しい理解はあるが、情緒に直面する感受は失はれてゐる。

讀者としての理解化は、言葉及びリズムの表現する味ひを閑却して、先づ其の意味を問はうとする。結果は、言葉及びリズムの一首全體の融合を別に、個々の言葉を切り放しての穿鑿に沒頭する。詩歌の一首の有機的存在を、無機的解剖に附する。

芭蕉の、最も平易な言葉によつて、最も深長な意味を諷はうとした希求の那邊に在るかを究めず、そを速了した驅け出しの解釋が、どれほど俳句の理解化に勢ひづけてゐることか。理智化を低劣視する自稱詩歌人も、理解化の鐵鎖に其の足を繋がれてゐようとは？

○

詩歌の理解化も、其の因由するところ、主として表現形式の固定にあると思ふ。形式の固定は、感情内容のウエーヴに隨順する自由形式に比して、リズムは内容と共に生ずる、詩歌生存の第一次的要諦を拋擲してゐる。勢ひ、諷詠としての考察は、常に固定形式の第二次的運用に向けられねばならなくなる。そこに固定形式の認容する範圍内の音律及び用語論が、其の存在主題となる當然の歸結を生む。狹範圍内の音律及び用語の考察は、其の理解化に走る大なるパトロンである。卽ち、一首成立のリズム又は詩語を個々に切り放して、抽象的な音律又は用語論を生み易いからである。考察が一度び抽象化した時、それは最早や詩歌の生命に觸れない理解への硬化である。

言葉及び文字が、意思の疏通を謀る概念的響き若くは記號であるが故に、リズム及び詩語と雖も、理解あつて後の感受である、と多くの人は考へてゐる。固より全然理解のない狂人の言葉に詩味は感ぜられない。けれども、詩美に對する感受は理解と同時に湧くか、或は一歩を先んずるか、其の機微な消息は容易に斷定されない。なぜなら、我々の經驗は、理智の介在を許さない、繪畫音樂の鑑賞に於て、殆んど理解を超越した感受を攝取し得るからである。さうして、其の反對に、明らかな理解を持ちながら、何らの詩美を感受しない、餘りに多くの事例を持つからである。

或は、文化の進展につれて、複雜化して行く我々の生活を考察に入れなければならないかも知れない。生活の複雜化は、我々に理智的思索を餘儀なくする。單一純情の詩美の感受、それは無垢な童心に還元した時の心的歡喜、さういふ透徹した心境

の混淆し汎碍される可能率が多くなるものかも知れない。で、或る者は理知の鍬を添へ、然らざるも理解の橋を渡す、經驗的辨證であるとも見られる。月並俳句が、文盲人に文字を敎へるに役立つた社會政策のやうに、詩の門外漢に共存共感の或る衆響を與へたかも知れぬが、それが爲めに、藝術としての詩は何らの恩典をも受けてはゐない。否却つて、詩美開展の道を擁塞する仇敵的存在に過ぎなかつた。

繰返していふ、萬葉以後の歷代歌集が、それほど理知の堆積であるか、元祿以後の俳句が、どれほど理解に魅毒されてゐるか、思ひ半ばに過ぐるものがある。私をして言はしむれば、我々の祖先は、餘りに永く理解機能をのみ刺戟し發達せしめて來た。其の代償として、感受機能を不感性にまで減衰せしめるに無關心であつたと。さうして、其の理解機能の可働性は、現に我らの頭上にも、因襲の重荷としてノシか、つてゐるのである。

「わかる」「わからない」、この合ひ言葉は、何を意味するか。詩の「わかる」とは、作者の感情內容のウエーヴが、其の機微な生き〳〵しさが、我等の胸を打つ、感受の湧く謂ひである。其の作の響き、彈力性、それら內在的生命と一つになるの謂ひである。「わからない」とは、平易に流暢に、普通語、一般用字、在り來つた形式を追うてゐようとも、其の內在的響き、彈力性の何ら感受さるゝもののない場合である。感情のウエーヴを傳達しない不感性文字の羅列をいふのである。若し內在的生命は「わからない」でも、外在的言葉及び文字が「わかる」程度の詩歌で足るなら、我々の行動の一般的記錄は、常にそれ自身詩歌であり得る。「わかる」「わからない」合ひ言葉さへが、普通に外在的言葉及び文字に限られてゐる程、理解機能に災ひされてゐる、悲慘な詩歌の現狀である。

○

私はまだ言ふべく多くのものを持ち過ぎてゐる。が、枝葉に派生する總てを捨てゝ結論に急ぐ。

私は敢て誇大なことを言ひたくはない。が、事實詩歌の理知化と理解化は、萬葉以後約千年、左程の疑問もなしに因襲化してゐる情勢を否めない。約千年の因襲、其の根源さを思ふと、この私一個の考察の如きが、何らの反撥力を持たない、沙上の偶語視さるゝは、餘りに明らかな當然である。

併しながら詩歌の固定形式に對する疑惑と惱みは、それが世界的に交流する、現代人の共通共感の世界と言つてもいゝ。それが既に事實となつて、社會面に生動してゐるもあり、裏面に沈潜して瀰漫しつゝあるとも見られる。手近い例が、和歌と言ひ俳句といふ、固定形式の蹈襲に何らの合理的根據を持たない、因襲盲從の大衆ですら、果してそこに自己の眞の詩歌があ

るや否や、既に昏迷に陥りつゝある。固定形式の遊戯化的腐臭に倦怠を感じつゝある。しかも、一方には固定形式に何らの知識も感興も持たない新時代人が、恐るべき情勢に於て擡頭しつゝある。固定形式の危機であるといふよりも、正さに我邦詩歌の一大過渡期でなければならない。

固と詩歌の存在は、科學が理念の欲求を充たすと等しく、情操の希求に資する生活要素である。情操の淨化を俟たなければ生き得ない生活への糧である。我ら祖先の詩歌が、曾てそれら生活要素としての希求に應へるものであつたやうに、現代及び未來の時代人に向つて、どういふ新たな道を拓くべきか、この大過渡期に際して、恐らく將に崩壊せんとする因襲の臺座に安住し得る者はないであらう。

現代詩歌人は、嘗て我ら祖先の經驗し得なかつた大苦惱の渦中に立つと考へる。と同時に其の苦惱を打開すべき新たな希望に邁往し得るとも言ひ得る。機智的興味としてゞなく、眞に詩歌人として生きがひのある時代でなければならない。

これら諸考察を解決する鍵は、先づ總ての因襲と人爲を擺脱して、出來得るだけ原始に還元する、大旋廻運動である。古事記時代人まで溯源して、詩歌の理知化、理解化、及び形式化のマンネリズムから、感情内容のウエーヴに卽する自由律の直感に轉廻すべき大なる目覺めである。それは、詩歌の第二次的既成觀念の爛熟頽廢を救ふ、第一次的成立根據への生れかはりを意味する。彌縫的一時的末技的革新でなく、根本的永久的自然的然かあるべき大道の提唱である。

それは老若男女を問はない、古今東西を問はない、思想、體驗、主義、階級、智、愚、それら時代と人間とを問はない、感情内容のウエーヴはいつ何處にも動いてゐる。これを横斷的に見れば、感情内容のウエーヴを直感し得る何人にも、其のウエーヴに隨順する詩歌のあるべきである。詩歌を、或る天稟をもつた詩歌人の專らにする特權である如く思意するが大なる誤謬である。たゞ縱斷的に見て、高低淺深、評價の區別を生ずるのみである。

若し感情内容のウエーヴ表現の詩歌が發成するなら、始めて詩歌の感受化時代を生むのである。理知化、理解化の横暴によつて閉塞してゐた感受機能を更生せしめ、直感味了の神祕に突入して、漸く詩歌本來の面目を囘復し得るのである。

詩歌の感受化が實現すれば、先づ固定形式の破壞による自由律が擡頭する。感情内容のウエーヴ本位に、長短區々、眞に言靈を傳へる詩語が活躍する。理解機能の中毒患者には、一見亂曲雜詞の觀をなすが、詩歌の第一次要訣から見れば、内には理路の整然たる情緒の流れがある。我等が世界人に誇る、短詩創

作の機能はこゝに光輝燦然たるものがあり、現代及び未來の時代人に、情操淨化の生活歡喜を味はしめると信ずるのである。

我等は必ずしも固定形式を否定する者ではない。感情內容のウエーヴが固定形式をとるべき必然性を持つなら、そこに固定形式としてゞなく、詩歌の表現形式としての生命を享容するのである。若し、感情內容のウエーヴ表現の自由律が、感情の純化と洗錬により、表現技巧の正しい琢磨を俟つて、さうして、言葉及びリズム敏感性を働かせるなら、古事記時代から萬葉時代を創造したやうに、新たな形式統一の時代を現出しないにも限らないと考へるのである。長短區々の自由律から、形式統一への飛躍、現代詩歌人としての我等は、そこに愉悅に充ちた希望の一端を掴むのである。

○

私はこの小論文に於て、總て獨斷的な言ひ方をして來た。其の獨斷を例證する引例は、態とこゝに省いた。若し、前提、本論、細節に涉つて、一々其の例證を擧げるなら、恐らく浩澣な一冊子を成すに到るであらう。私の持ち合せてゐるやうな引例は、恐らく現代詩歌人の坐右に山と積まれてゐる筈である。敢て、自己の淺劣に厚顏の勇氣を用うて、藝術眞心の旺盛な詩歌人に訴へるのである。

—了—

若槻禮次郎論

馬場恒吾

若槻禮次郎氏が初め軍縮會議の首席全權たる事を求められたときは、彼れはそれを承諾する氣色もなかつた。自分は英語が下手だ、海軍の事には素人だと、それは申譯けでなく、事實ありの儘の事情を述べて、拒絶の決心を示したのである。處ろで、濱口首相は彼れを訪ねて、政府の事情を述べ、無理にも全權になる事を頼んだ。それを斷るのは、若槻としては友人の情誼に反するやうに思つたのであらう。彼れは其場で引き受けた。こゝ迄は新聞に出て、誰れでも知つてゐる事である。

彼れが全權になる事は本意でなかつた。然るに、それを引受けた後の彼れは、毎日海相官邸に行つて、海軍の事を勉强する。家では客を斷はつて考へを錬る。或海軍武官は私に云つた。

『若槻さんの呑み込みの早いのには皆んなが驚いた。一を聞いて十を知るとはあの人の事だ』

『今に日本一の海軍通が出來るぞ』

『海軍通の出來る事は海軍の望む所だ』

かうして若槻は世界の檜舞臺に押出して行く。彼れは内政の若槻でなく、世界の若槻にならんとする。彼れがどんな人物であるかは今の中に研究しておく必要がある。

私はかなり良く若槻を知つてゐる積りでゐた。然るに彼れを主題とする人物評を書かうとすると、扨どう書いてよいか判らなくなつた。私は今迄も屢々事に觸れ、折りに觸れて彼れの事を書いた。彼れに對する批評は聞き倦きる程聞いた。然るに彼れに對する評價はまだ決定してゐない所がある。

例へば濱口首相に對する世評、卽ち彼れは正直、論戰で頼りになる政治家と云ふ評價は最後迄變らないであらう。それに比

較して若槻に對する世評は今後どうなるか。まだ何んとも決定的な事は云へない。若槻は濱口に比して四年の年長者であり、大學卒業は三年の先輩であり、濱口の前に黨の總裁、一國の總理大臣であつたのであるが、若槻の方が水々して見え、身體に柔軟性があり、何處となく若い所がある。政治家としても、濱口が完成品たるに對して、若槻が未成品であつて、これからまた生長するのではないかと云ふ感じを與へる。それ故にこそ彼れの人物に斷定的な評價が下されぬのであらう。

彼れに對する惡評が集中したのは三黨首妥協を機會としてゞあつた。昭和二年一月二十日、彼れが憲政會內閣の總理大臣であつたとき、政友會と政友本黨が共同して、朴烈事件に關しての內閣不信任案を衆議院に提出した。其日の晝飯に內閣諸大臣が大臣室に集つたとき、若槻は閣僚に向つて此事件の處置は自分に一任して貰ひ度いと云つた。閣僚は無論異論はなかつた。彼等も議會解散を豫期して、憲政會が絕對多數になる夢を見てゐた。憲政會は永く政權に離れてゐた爲めに大正四年大隈內閣の總選擧以來、我黨內閣の手で總選擧を行ふ機會がなかつた。朴烈事件の如き、愚劣な問題で在野黨が肉迫して來た時こそ、最上の機會だ。之れを外づして何日憲政會の大をなす時があらうぞ。我から求めても議會を解散すべきだ。野黨が不信任案を提出したのは勿怪の幸ひだとこれが政府及び與黨內の空氣であつた。世間の輿論も亦解散を歡迎してゐた。普選法が其二年前に制定されてゐるに關らず、それがまだ實行されてゐない。だから解散は已に遲すぎる位に思つた。それに、輿論は政友會にも政友本黨にも好意を有たなかつた。田中義一男を總裁に迎へた後の政友會は何んとなく陰謀味と惡辣味が加つて、まだ世間の信賴を博してゐなかつた。政友本黨の總裁床次竹二郎氏が、政友會と憲政會の間に立つて、今日は右、明日は左と、代る〳〵秋波を送る態度は、全く世間から唾棄されたと云つてよい。だから政界の空氣を一新する爲めに、政友會に打擊を與へ、本黨をば政界から一掃する。その意味に於ても解散が必要だと思はれた。

然るに若槻は議會を解散する代りに、三黨首妥協を行つた。不信任案が衆議院に上程される時を見計つて、議會に停會の詔勅を下し、其後で、田中政友會總裁、床次本黨總裁と會見して昭和新政の初めに、豫算を不成立にするは望ましくないから、政爭を熄めると云ふ申合せを作つた。それで不信任案は撤回され、解散はなくなつた。そのとき與黨の中からは若槻の意久地なさに向つて猛烈な反對の空氣が起つた。世間も三黨首妥協と云ふ如き譯けの判らぬ政治は怪しからんと叫んだ。後に若槻內

閣が臺灣銀行問題で樞密院に容められたとき、新聞は却つて樞密院を煽動する形を採つて、終に若槻をして辭職せしめた。憲政會內部に於ける彼れの不評は、民政黨成立の曉に、彼れの代りに濱口を總裁として、若槻を樂隱居の形ちにした。すべて其根元は直接間接に三黨首妥協の結果と見られる。

若槻は何故三黨首妥協を爲したか。それは彼れの性情が大部分の原因になつてゐる。

前にも若槻はかうした政治の內迫戰に遭遇した事がある。それは明治天皇崩御の後の、第三次桂內閣に彼れが大藏大臣であつたときである。桂太郎公は後藤新平、若槻などを伴つて歐洲旅行に出掛けた。そして明治天皇御不例の電報を莫斯科で受取つて、急遽歸朝の途に上つた。歸朝すると彼れは直ちに內大臣として宮中に封じ込められ、そして西園寺內閣が二ヶ師團問題で潰れると、彼れは引出されて、總理大臣になつた。それが宮中、府中の別を紊るものであるとして政友會の尾崎行雄氏國民黨の犬養毅氏一派が護憲運動を起した。彼等が憲政の神となつたのは其時である。此運動が熱して來て、議會は民衆に包圍される。殺氣立つた民衆は國民黨から桂公の傘下に走つた五領袖を脅威してゐた。桂內閣は幾度か議會を停會して野黨の氣勢を殺がんとした。然るに民衆は只激昂するのみであつた。

二度目の停會が開けて衆議院が開かれんとする二月十日のは例に依つて桂內閣の閣僚は議院內の大臣室で食事をした。桂は愈々衆議院を解散する決心で、それを閣僚に話し、閣僚も贊成した。解散理由書も出來上つてゐた。食事が濟んで、議會の開けるのを待つてゐる時に、衆議院議長であつた大岡育造が大臣室に顏を出して總理大臣に話し度いと云ふ。桂は總理大臣室に大岡を引見した。若槻は其席に呼ばれて立會つたのである。

大岡は桂に向つて、此帝都の形勢を何と見る。あなたは血の雨を降らす積りであるか。今議會を解散して、內閣が飽くまで民衆と戰はんとするときは天下大亂になる。これは總理の心一つで無事に治まるのだ。此場合、總理は飜然心を改めて、身を退くべき時だと勸めた。桂は初めは何を云ふかと云ふ顏をして取り合はなかつた。然るに段々大岡に說かれて、大岡の話しが終る頃になると顏を和げて

「では解散は止めにしやう」

「そして內閣は」

「內閣は辭職する」

と云ひ切つた。大岡は凱旋將軍のやうな顏をして大臣室から出て行つた。桂は大臣室に出て來て、其所に集つてゐる各大臣に向つて、解散を止めて、內閣が總辭職する事に決心した事を

告げた。今の先き食事の時、話し會つた事が根柢から覆つたので、みんな呆然として顔を見合はす許りであつた。併し總理が其決心で居るとき、閣僚が異議を挿むべき餘地はなかつたので衆議院は解散の代りに停會になり、桂内閣は翌日の紀元節に辭表を捧呈した。

若槻は桂、大岡の會見に立會つた只一人の大臣であつた。其會見の始めより終まで默つて聞いてゐた。若しこれが桂が初めて内閣を取つた時ならば、かう容易に折れる事はないだらう。併し、此時は桂としては三度目の内閣組織であつた。だから最初の時ほど闘志滿腹でない。それが彼れをして大岡に說得された所以であらうと思つた。

桂の退却と、若槻の三黨首妥協とに似通つた所がある。桂の時は明治天皇崩御の直後であつた。若槻のは大正天皇崩御の後であつた。そして兩方共、首相の退却が閣僚や與黨を失望せしめた。若槻が三頭首妥協をした時、桂を眞似る意志は毫もなかつたやうである。併し潛在意識的に、桂が最後の五分間の處に到つて、戰ひを熄めた心持ちと、同じ心持ちが若槻の胸に動いた事は爭はれない。

其心持ちと云ふのは政爭を苛烈にし度くないと云ふ心理狀態である。桂の場合でも、それ迄の桂の行動を論理的に押し進めて行けば、議會を解散して、野黨と徹底的に戰ふと云ふ外はなかつた。併し一步退いて考へれば鬪つて得る所何ぞや、血を流すやうな政戰をして、それが果して立憲政治の發達にどれ丈けの效果があるかと云ふ疑問が起る。若槻の時に政友會と本黨が連合して不信任案を出して來たのは朴烈事件を基礎としてゞあつた。問題が如何に愚劣であつても、政府に採つてはそれを議會解散の理由にするに何の不足もなかつた。問題が愚劣なれば愚劣なる丈け、政府に採つては有利であつた。鬪爭の爲めの鬪爭をするものは只解散に向つて驀進したであらう。若槻内閣の閣僚は大抵さうした心持ちでゐた。然るに若槻は憲政の前途は永い。内閣の壽命は一時のものだと觀念して、戰を熄めて了つた。若槻は平生弓を稽古してゐる。弓の確言に滿を曳いて放たずと云ふのがある。力一杯に滿月の如く弓を曳いて矢を放てば的に中らない。少しく緩めて、力に餘裕を殘して放てと云ふ敎へである。政戰を極端まで押し進めて、果して何の得る所ぞと云ふ性情が彼れの行動を規定した。三黨首妥協に關聯して種々の說明が試みられたけれど、窮極の處は此潛在意識的の心持ちが動いたと見られる。

昭和元年の春、加藤高明伯が急に病死した爲めに、若槻が總理大臣になつた。その時分、私は彼れが原敬に匹敵する首相に

なるだらうと思つた。そのやうに或雜誌に書いた。原の頭の良さと若槻の頭の良さが匹敵すると思つたからである。どちらも議會の討論が巧い。原は相手を怒らす、若槻は怒らせない。だけれども、答辯の鮮かさは好一對であつた。原も若槻も共に大いした財産を有つてゐない。これぞと云ふ財閥の背景もない。共に只頭腦の力に依つて政黨を支配しなければならぬ。原は其の爲めに彼れが首相時代に疑獄の種を蒔いた。若槻はどうするかと云ふ疑問を殘して置いた。

然るに一年餘りの首相時代を經過した後の若槻を見れば、彼れが原に似てゐる所は頭がよいとか、財産がないとか云ふ枝葉末節に止つて、政治家の本質としては、正反對の傾向を示した。原は力で押し通すと云ふ力の信者であつた。若槻は力で押し通さない、忍苦の政治家であつた。だから黨爭を生命とする政黨人は直ちに彼れに慊なく思つた。

尤も彼れが三黨首妥協に決心する迄はかなり煩悶したらしい彼れも憲政會總裁であつて見れば、自分の黨を大きくする事を好まない譯けはなかつた。そして總選擧を行へば勝つと云ふ自信があつた。それ丈け彼れが解散を回避すれば、自分の黨員から攻撃される事を豫期しなければならなかつた。然るに彼れは其攻撃される途を選んだのである。

今一つ、三黨首妥協をした爲めに、彼れは其與黨から恨まれる理由があつた。それは三黨首妥協の爲めに、助かつたのは政友本黨であつたからである。本黨が朴烈問題を取り上げて政友會と共同戰線を張つたのは、それを議會迄持つて行かうと云ふのではなく、これで脅かしたら、政府が辭職し、政權が床次に來ると思つたからである。だから、其前年の秋に、一度は床次自身若槻を訪問し、次ぎは貴族院の研究會幹部を通じて、若槻に辭職を勸告した。若槻はそれを取り合はなかつた。世間では若槻が辭職を約束したと信じてゐるものもあるが、若槻は只深甚の考慮をすると云ふ外に辭職の言質を與へてゐない。そして朴烈問題が議會に持越されて不信任案となつて現はれた。茲で議會が解散にならば、本黨は心にもない朴烈問題で總選擧に臨まなければならず、其時は九十名の代議士があつたが、それが憲政會と政友會から挾み打ちにされて、果して幾名の代議士が殘るか疑問であつた。本黨は極度に解散を恐れ、何とか局面轉回をしやうと焦り、そして研究會をして若槻の心を動かすべく策動せしめた。

其研究會の進言に對しては、若槻は木に鼻を括る挨拶が出來なかつた。現に研究會の頭目の水野直子が政務官となつて居り、研究會出身の大臣が内閣に居つた。若槻の首班たる内閣が加藤

高明の遺産である如く、研究會との關係も加藤の遺産であつた。初めの加藤高明内閣は政友會、革新俱樂部が憲政會を含む三派連立内閣であつた。其内に政友會と革新俱樂部が憲政會の税整案に反對して脱退した。だから加藤單獨内閣は政友會、革新俱樂部に對する意地張りの上からでも、此税整案を物にせねばならぬ立場に置かれた。そして憲政會は衆議院の三分一しか占めない黨派であるが故に、税整案を物にする爲めには、政府は本黨の力を借りなければならず、本黨を動かすには研究會の力を借らなければならなかつた。それで加藤は研究會から四名の政務官を採用した。それは大正十四年の夏であつて、翌年春の議會が初まつて間もなく加藤は死んだ。若槻は加藤の方針を踏襲して、研究會及本黨の力を借りて税整案を通過せしめた。其所に研究會及び本黨に對する義理が生じた。議會が終つた後、彼れは本黨に向つて聯立内閣を提議して、其義理を果たさうと思つたが、それは本黨の拒絶に遇つて果せなかつた。だから形の上で見れば、三黨首妥協は、本黨と研究會に義理を立てる爲めに行はれたかの如く見えた。

事實は果して何うであつたか。本黨が解散を恐れてる事は研究會に依つて彼れに通ぜられた。解散を避けさへすれば、政府が行はんとする政策は行へると云ふ情報がもたらされた。政府の政策としては震災手形の處理と海軍補助艦補充の重要なる案件があつた。若槻は議會を解散して、若槻内閣の基礎を固めやうか、それとも解散を避けて國の政策を行はうかと、それが彼れの煩悶であつた。其所に彼れの性情が働いた。十分の勝が得られる時、八分の處ろで踏み止まる。今議會を解散して與黨の多數を作つた所ろで、内閣がさう何日迄も續くものでもなし、次ぎの反對黨の内閣は又直ちに議會を解散して、憲政會の多數を打破する。一時の功名に焦つて、國の政策を捨てるほどの事はないと、此政爭白熱の眞最中に、彼れは哲學的な態度を採つた。それが三黨首妥協になつて、彼れは與黨内外の惡評に包まれ、間もなく首相と共に總裁の地位を去るに到つた。形の上では彼れは政治家として失敗したのである。だが、彼れは其失敗の宣告を甘んじて受けるかの如く、何をも辯明しなかつた。恰かも失敗の境遇が自分の住み心地のよい所であるかの如く莞爾としてゐる。

さうした性情は彼れの議會に於ける應酬にも現はれる。貴族院などで相手が愚劣極まる議論を吹き掛けて來る。普通ならば一喝して相手をヘコますべき所だ。それを若槻は丁寧懇切に應對して、噛んでくゝめるやうに答辯する。見事に自分が勝つてゐても、其勝つてる點は忘れた如く裝つて、相手に花を持た

せる事を忘れない。それを原敬の如く、何んでも彼でも、凱歌を擧げなければ承知しないと云ふ態度に比較すると、若槻は如何にも勝を貪らな過ぎる。勝利と成功以外に眼中何物もない現代政治家の中では、彼れは聊か異端視せられる素質を有つてゐる。

何故に彼れは十分の勝ちを得られるときに、八分で踏み止まる乎。それは彼れが政治家になる準備時代の訓練の結果とも見られる。彼れは明治廿五年に大學を出て、直ちに大藏省に入り、四十四年大藏次官を罷める迄大藏省の飯を食つてゐた。初め二三年は下ッ端の役人やら、田舍の收税長であつたが、松隈内閣の時本省に呼び戻されて以來、約十年間日本の税制に關係してゐた。其間の税に關する法律は大抵彼れの手に依つて起草された。日清戰爭以來、日本の國費が急激に増加するのに對し、其財源を見出すのが彼れの役目であつた。如何にして國民を苦しめないで、國庫の收入を増すか、戰爭に勝つても、金がなければ何にも出來ない狀況が其の當時の政府を壓迫した。若槻は地租増徴案を起草した。政府委員として議會で說明した。地租増徴には政黨と民間の反對が強く、それが重なる暗礁となつて、松隈内閣、伊藤（第三次）内閣、隈板内閣が潰れ、山縣内閣が自由黨と妥協して初めて成立した。其内に日露戰爭が勃發して又金の入用が始まる。戰費は重に公債に依つたが、租税に依る收入も出來る丈け増加せねばならなかつた。大藏大臣の曾禰荒助は汎べての税を殘りなく増徴せよと命令した。國内は擧國一致の氣分に充たされて政爭は一時中止された。明治卅七年の議會は解散後に集まつたものであるが、全會一致で政府案を支持せんとする方針で進んだ。其全會一致を得る爲めに、豫算は豫め各派代表者に示すと云ふ趣旨に依つて、豫算内示會なるものが始めて開かれた。その最初の内示會が桂内閣の首相官邸の二階で開かれたとき、若槻等二三人は階下の控室に待つてゐた。其時も夜半過ぎになつても會議が終らぬ。何に引か〻つてゐるかと聞くと、若槻が立案した織物税に關して犬養毅氏が議論してゐる。其要點は織物税を課するなら、税を拂つた反物には悉く印紙を貼らせよ。それから吳服屋にある織物も一々檢査してそれに印紙を貼れと云ふのである。若槻はそれは駄目だと云ふ。女が反物買うのに品物を見ずして買うものはない、反物を賣藥みたやうに袋に入れて印紙を貼つた日には商賣は出來ないと云つた。大臣が二階と下を數回往復したけれども、犬養も若槻も頑として聞かなかつた。最後に若槻は云つた。

『それなら印紙を貼る事を承諾しやう。但し一つ但し書きを付け加へて欲しい、即ち命令に依つて倉庫で納税したものは印紙

を貼るを要せずと云ふ一ヶ條が付け加へられたい。」

これで議が纏つた。若槻は三十幾ヶ條の條文を悉く印紙貼用の趣旨に書き直して、最後の但書きを付けた。所ろで此法律が出ると、印紙を貼つては商賣が出來ぬと云つて、商人が陳情に來る。そして一體幾くら税を取らうと云ふのですかと若槻に聞く。若槻は千五百萬圓も取ればよいと答へた。商人は千五百萬圓ならば印紙を貼らなくても、吾々が振り當てゝ出しますと云ふ。そして法文の但書を働かして、織物税は悉く工場の倉庫と商店の藏で收められた。印紙は不用になつた。織物税の法律は最後の但書一ヶ條のみで働いた。そして租税の目的は達せられた。

若槻は常に部下を戒めた。税は十分のものが八分取れゝば良いとしなければならぬ。十分のものを十分取らうとして苛斂誅求をすれば、税法其物に對して反對が起り、元老や議會を通して税法自身が廢止せられる。だから税法を極端迄行ふのは却つて税法を殺ろす事になると。これが十數年間、國の財政に關係した彼れの結論であつた。それを移して彼れの政治的信念になし、彼れの人生觀の一部にしてゐる。

彼れの人生觀の根柢は忍苦の一言に盡きてゐる如く見える。それが澁い顏をして苦しみを忍ぶと云ふのでなく、平氣で苦しみを耐へると云ふ性格である。三黨首妥協のときも今一歩で勝を制すと云ふ場合に、好んで非難攻撃される立場に身を置いた。そして首相を罷め、總裁を罷めて、敢て悲しむ顏をしない。それは少年時代の習慣が第二の性となつて、苦難は人生の常だと思つてゐるからであらう。

尼子止氏の若槻傳に彼れが母親に別れた時の光景を記してある。明治元年四月二十二日、若槻の父親は京都に勤番に呼び出された留守のとき、若槻の家から子供の泣聲が聞える。何時迄經つても止まない。近所の人が行つて見ると、三歳になる若槻と十一になる姉のイワが、母親の死顏に取りすがつて泣いてゐる。母親は何かの急病で死んだのである。近所の人が急を母方の里に傳へて、其所から祖母が來て世話をしたとある。

そして彼れは貧苦の中に小學を卒へ、中學二年の時、家計を助ける爲めに學校を止めて、小學の補助教員になつた、一圓五十錢の月給を貰つたのである。後に他の小學校に代つて五圓五十錢の給料になつた。其金は悉く家に送つて自分には一文の貯へもなかつた。明治十七年、若槻が十九の時、彼れは郡長をしてゐた叔父に上京する丈けの金を借りて、司法省法律學校の入學試驗を受けた。試驗の成績が惡かつた爲めに官費生になれなかつた。それ故に叔父の養子になつて、毎月四圓づゝの仕送りを

受け、それで學生生活を濟ましたのである。

かうした境遇の中に人となつた彼れは、苦るしい事は人生の常だと思ふやうになつた。だから、苦痛を忍耐する無限の力を有つ、或は寧ろ、勞は我之れに當る、功は君之れを取れと云ふ事を趣味にしてゐるかの如く見える。少くとも鬪つて勝ちを貪らず、勝つて勝つた顔をせず、出來得べくんば實際は勝つても形ちは負けたやうに仕度いと思つてゐるのではないかと疑はれる。

若し政治が鬪爭であり鬪爭は勝つ事以外に目的はないとすれば若槻の性格は政治には不向きだ。併し現代の政黨政治家の多くが鬪爭を唯一の信條となしてゐるにも關らず、現實の人生は鬪爭のみでは動いてゐない。元より政治の指導原理が鬪爭であつた時代もある。併し國内の人々が鬪爭する事のみを知つて、協同する事を知らなかつたならば、其國は一日も存在しなかつたであらう。國際生活の指導原理が鬪爭以外に何物もなかつた時代もあり、今日でもさう信じてゐる人々もある。併し事實は各國は鬪爭するよりはより多く協同してゐる。政治は國内的にも、國際的にも、鬪爭から協同に變化する事に依つて改善されつゝある。若槻が派遣せられる軍縮會議も、若しそれが成功するならば、鬪爭の國際生活を協同の國際生活に變化せしめんとする劃時代的の意味を有する。

今回の軍縮會議を計畫するとき、英國首相マクドナルドは先年の軍縮會議は專門家の會議であつたが爲めに失敗した。今回は政治家の會議にすると云つた。專門家と云へば軍人である。軍人の目的は鬪爭である。鬪爭を目的とする者に國際平和の道を開かさうとする所に目的意識の矛盾が含まれてゐた。專門家から政治家への方向轉換は鬪爭から協同への方向轉換である。

鬪爭の勝利に醉ふと云ふ事は、人生の貧濘な半面である。他の半面には敗北の悲惱が存在する。マクドナルドは若槻と同じく貧苦の中に生長し、勞働黨を築き上げる時代の、勞多くして功少なき努力をして來た。大戰當初に非戰論を唱へた爲めに、彼れは一時勞働黨からも捨てられた。彼れは人生の貧濘なる半面に顔を背けて、惱める半面を凝視する。戰爭して勝つと云ふ事よりは、戰爭の慘禍をなくしやうと云ふ事により多くの興味を有つ。若槻が行けば話しが合うと思はれる。勝ちを貪らぬ彼れ、忍苦を信條とする彼れの性格がさう思はしめる。

軍縮會議が成功するか否か、若槻が成功するか否か。そんな事は問題でない。マクドナルド、若槻、この二人の性情と氣分がピッタリ會つて、この世界を、鬪爭の世界から、協同の世界へ一歩でも進ましめるか否か。それが吾々のみならず、人類全體の關心が係つてゐる所である。

佐野學が捕まるまで

天野宏

去る八月廿三日、上海の邦字新聞「上海毎日」は、突如、上海總領事館から向ふ十五日間の發行停止を命ぜられた。

上海には「上海毎日」の外、「上海日日」「上海日報」の二新聞があるが、何しろ海外のことではあり、どれもこれも平凡な田舍新聞で、殊に官憲萬能の上海のことであるから、その報道でも論説でも、まことにお座なりなもので、未だ曾つて發行停止のやうな官憲の制裁が加へられたことなどはなかつた。だから「上毎」が發行停止を喰つたといふことは、上海在留民を非常に驚かして、何故こんな制裁が加へられたかと異常なセンセーシヨンを惹き起し、人々の注意を惹いたのであつた。而してこんな場合、誰れでもがする通りわざ／＼其日の新聞を取り出して、どの記事が當局の忌諱に觸れたかを穿鑿して見た者が多かつた。果然、同紙の社會面の頭初に四段拔きで次のやうな記事が見出された。

中國官憲の手で抑留中の
某重大事件の主魁某氏
昨日總領事館に引渡さる
本日出港の長崎丸で日本へ押送

本年六月頃當地中國官憲と日本官憲が協力して苦心慘膽の後、漸く逮捕した某重大事件の主魁某氏は中國官憲に於て政治犯人と認めて日本側の官憲に該犯人引渡しを拒絶したため爾來二ヶ月餘も上海特別市公安局に抑留されたままになつてゐた、然るに日本官憲は該犯人の引渡し方を數回に亘りて中國官憲に要求した結果、昨廿二日に至り俄に中國官憲は某氏を總領事館に引渡したので總領事館の小島、田島、遠藤、湯淺の四巡査が護送し本日當地出港の聯絡船長崎丸にて内地に押送することになつた、上陸地は多分神戸であらう。

しかし、此の記事では、單に「某重大事件の主魁某氏」とだけで、何のことだか一向に判らない。さなきだに事件の少い海外のことであり、在留民の誰れかゞ泥棒に傷づけられた事件でも、三段拔きの大見出しをつけるやうな上海の新聞のことだから、この記事とて格別耳目を聳動するやうな事件でもないらしく、結局何のことだかさつぱり判らない。かうなると、どうかしてその眞相を突き止め度いと餘計なオセッカイをやつて詮議をはじめるのは人情で、在留民は寄ると觸ると此の話

で持ち切つて居た。すると誰れ言ふとなく、あの記事は掲載禁止中の日本共産黨に關する素ッぱ抜きで、所謂佐野學のことだといふ噂が、それからそれと狹い上海人の口の端に傳へられて行つた。

もつとも佐野學が、上海で日本官憲及び中國官憲の爲に逮捕せられたといふ事件は、當時、日本の新聞にこそ掲載禁止で發表はされなかつたが、支那新聞にはそんなことにはおかまひなく直ちにそれが報導せられた。七月七日の支那新聞「申報」には堂々と斯う出して居る。

○日本共産黨佐野學昨日被捕

△解交日領事館研訊

日本共産黨重要份子佐野學氏、銜日本共産黨幹部之命、今春來滬、有所活動、上月中旬事畢、擬赴海參崴轉道回國、爲日總領事館探悉其行踪、協同公安局、在南市某處捕獲、旋交日本領事館研訊、聞佐野氏係早稻田大學教授云。

そんな譯で、上海在留邦人のごく小數の一部の人は、その成行を少からぬ興味を持つて見てゐた矢先であつたから、八月廿三日「上每」が前記の記事を掲載したのを見て、それ等の人々は直ちにそれが佐野學氏のことであることは直感された。しかし、大部分の人は素より風馬牛で、あの日「上每」が發停を喰つてはじめて此の事實を知つたのだつた。なんのことはない、總領事館警察は新聞の掲載禁止を命じた事件をわざ〳〵廣告したやうなヘマをやつて、つまらぬ結果を招いた形ちとなつた。

◇　◇

三・一五事件後、日本共産黨の猛者連は、次から次と檢擧せられたが、その巨魁と目された佐野だけは、何處をどう逃げたものか全然その踪跡をくらまして、その筋の嚴重な捜索の眼をのがれてゐたことは、當時內地では誰知らぬ者のない事實であつた。

もと〳〵、上海は中國共産黨の巢窟であ〔る〕關係上、日本共産黨との關係が頗る密接で、露國第三インターナショナル本部との連絡も主として上海で聯繫されてゐた。だから內地を逃れた佐野が上海に潜伏して居るだらうとの疑ひは充分濃厚だつたので、佐野の逮捕手配が當時直ちに上海領事館警察へ來たことは言ふまでもないことだつたが、上海警察では、更に佐野の行衛を發見することが出來ず、そのまゝ手を拱ねて放任してゐた模樣であつた。

ところが本年五月頃、當地三井物產支店の池田重雄氏が、偶然フランス租界で佐野氏の姿を瞥見したといふ噂さが傳はつた。佐野氏と池田氏とは大學時代の同窓なので、よく顏も見覺えてゐる。首實見としては、これ程確かな松王丸はないわけだつた。

此の噂さが傳はり傳はつて總領事館警察の耳に入つた。喜んだのは警察當局で、さては佐野はフランス租界に潜んでゐるものだとの見當をつけ、爾來一層捜査の手配りを嚴重にした。しかし、何しろ相手は昭聯に妙を得た

佐野のことであるから、上海あたりの時代遲れの岡ッ引の手にひッ掛るやうなヘマはやらう筈はなく、依然としてその所在は判らなかつた。たづねあぐんだ總領事館警察では、またく\放りぱなしにしてゐたやうだつた。

◇　◇

お話しかはつて、本年五月末、フランス租界の街路樹も濃綠の度を一入增した頃、これはまた物騷な第三インターナショナルの汎太平洋勞働豫備會議が、上海で催された。それには日本共產黨の猛者が三四名列席するといふ情報があつて、上海警察ではあらゆる方法を講じて搜索した結果、その一味である北山某が當地支那街の某支那人方に潜伏してゐるといふ事實を突き止めた。雀躍して喜んだ上海警察では、早速同人を檢擧しやうとしたが何しろ淫賣や浮浪人の退去命令ぐらゐの仕事が精一杯の田舍警察だから、智能犯や思想上の事件などは迚もお齒に合はない。尾行すれば撒かれ、見張りをすれば穴をあけられ、どうにもかうにも手に負へられず、全く途方に暮れてゐた。ところが恰もよし、當時警視廳で檢擧した一味の所持品の中から、偶然にも共產黨の暗號が發見せられ、それが參考として上海領事館警察へ送られて來たので、北山の逮捕には萬策が盡きてゐた上海警察では、窮余の一策として試みに此の暗號を利用して北山を釣り出さうと考へつき、頭を絞つて作り上げたのが一つの手紙であつた。それには日本共產黨の同志が七月六日某支那宿で面會し度いといふ意味を書き送つたものであつた。上海警察では、此の僞手紙で北山がうまく誘き出されるかどうか極めて心許ないものであつたが、兎に角手配をすることゝし、當日支那官憲の諒解と應援を求めた上、十數人の官憲が各々變裝して右の支那宿に張り込み、北山の現はれて來るのを今か今かと待つて居た。

約束の時間から約十分程遲れた時刻だつた、該旅館の第十六號室へ足音高く入つて來た一日本人があつた。張り込んでゐた官憲はスワとばかり該日本人を取卷いて『貴樣は北山だらう、おれ達は領事館警察のものだ』と威丈高になつて脅かした。相手はその刹那、サッと顏色を變へ如何にも悲痛な面持ちであつたが、次の瞬間にはすつかり態度を立て直し、悠揚迫らない口吻で『おれは北山なんて者ではない今日此の宿屋で或日本人と會見の約束があつたので來たのだが、部屋を間ちがへて此處へ入つたのだ』と言つた。官憲は、即座に携へてゐた北山の寫眞を取り出しながら『何と言つたつて駄目だ、此の寫眞がものを言ふのだ』と言ひながら寫眞と本人とを見較べて見ると、これはまた意外、北山の寫眞とは全く似てもつかぬ男だつた。驚いたのは警察官憲で、或は本人の言ふ通り人ちがひではないかと狼狽したが、しかし兎に角、うさん臭い來訪者には相違ないので、取り敢へず五六名の巡査で同人を嚴重に見張りをし、一方急遽一巡査を本署に馳らせて手配中の共產一味の寫眞を全部持ち來らせた。それから一枚々々寫眞と本人との首實見をやつて見ると、これはどうだ！　下ッ端の北山某どころではなく、搜しあぐねてゐた巨魁佐野學と寸分違はぬ男ではないか！　餘りの大ものなので、

官憲はすつかり面喰つたが、其處は職掌柄色にも出さず『お前は佐野だな、兎に角檢束する』と宣告した。これをきいた右の男は、もうこれまでと思つたのか、悪びれもしないで『如何にも私は佐野だ、君達はどうしやうといふのだ』

かうなると、警官連は急に威張り出して、兎に角本署へ連行しやうとしたが、逮捕の場所が支那街なので、手續上一應支那側の公安局へ送る必要があつたゝめ、取りあへず佐野を自動車で支那公安局へ連れ行き身柄を同所へあづけ、後刻引渡しを受けることゝして引揚げた。

雑魚を釣るさへ荷が勝ちすぎる下手な魚釣りが、計らずも目の下一尺程の大鯛を釣り上げたやうなもので、時代後れの上海警察が下ッ端の北山を追つかけてゐる中に、全く豫期しない大もの佐野を捉まへたことは、恐らく空前絶後の掘りものなので、その晩署長花里某は關係した署員一同を料理屋へ連れて行つて、底抜け騒ぎをしたといふのも無理のない話。

◇　◇

翌七月七日早朝、上海總領事館では、愈ゝ佐野を引取るべく三臺の自動車に署員數名が分乘して、得意滿面で公安局へ乘り着け、『昨日逮捕した日本人佐野を引渡して呉れ』と申し込んだ。

ところが意外なことには、同公安局長は『佐野の引渡しは絶對に出來ぬ』と峻拒した。案外な返答に、鳩が豆鐵砲を喰つたやうに驚いた領事館員は、その理由を詰つたところ、佐野は中國共産黨と結んで國民政府に對する陰謀を劃策した嫌疑もあるし、尚ほ日本に於ける佐野一味の犯罪は、日本の國體の變革又は政府を顛覆せんとするものであつて、純然たる政治犯である、從つて支那は政治犯人を引渡す義務はない、佐野は支那官憲に於て取調べをする』と劍もホロホロの挨拶である。かうなると頭の鈍い領事館員などは、到底支那官憲と太刀打ちが出來ず、鳶に油揚げをさらはれたやうな格構よろしくスゴ〳〵引揚げて來たといふみぢめさだつた。

それから此の問題は、日本總領事館と江蘇交渉員徐謨との間に、渡せ渡さぬの掛け合ひとなつて、總領事館からは副領事田中某が、毎日のやうに公安局と交渉公署へ日參して嚴重談判をしたが、支那側は頑として應じない元來、田中副領事は、官費同文書院出かなんかで多少支那語が話せるといふだけで、腹も頭もない男なものだから、掛け合へば掛け合ふ程支那官憲から腹の底を見透かされ、しまひには『貴方ではわからないから總領事をお寄越しなさい』とまで愚弄せられたといふ逸話までつくつてしまつた。

困つたのは總領事館で、佐野逮捕と同時に逸早く内地各關係筋へ其旨報告してあるので、今更支那官憲の抗議によつて引渡し不能であるとも言へず、さればといつて支那側は挺子でも動きさうもなく、其間隨分苦心をして引續き毎日のやうに掛け合ひを續けてゐた。しかし、もと〳〵支那側としては、佐野學に就いては何等の利害關係も興味もなく、本來なら日本側へ即座に引渡しても差支へないのであるが、そこは老猾支那の役人で、何

かの場合に利用してやらうといふ肚があるので、領事館員が理窟を言へば理窟で押し返し、泣きつけば鼻であしらひ、さんざん焦らした揚句、兎に角國府主席蔣介石が北平から歸つたら何分の返事をするから、それ迄は毎日々々御日参には及ばぬ、と突ッ放してしまつた。

その後約二十日して、蔣介石は南京へ歸つて來た。領事官憲は早速出掛けて行つて、先約通り引渡しを求めたところ、飽くまでも領事官憲などを頭から嘗めてかゝつてゐる支那側では、尙ほ目下取調中を口實にして依然として引渡しを肯じない。弱つたのは總領事館で、內地の關係筋からは矢の催促を受けるが、肝腎の支那側が此の調子なので如何ともすることが出來ない。その上妙な噂さがあつて、支那公安局の佐野を收容した監房には佐野のトランクが置いてあるきりで、本人の佐野は何處へ行つたか見當らぬといふ說などもあり、總領事館では、さては支那側で佐野を逃したのではないかと、全く他所の見る目も氣の毒な程シヨゲ返つてゐたものであつた。

◇　◇

かうして逮捕後約一箇月半は空しく經過した。恰も當時東支鐵道問題が勃發して、支那は日本の同情を得るために、日貨ボイコットをも禁止したなど風向きが俄かに變つて來た。それかあらぬか、今の今まで言を左右にして佐野の引渡しに應じなかつた支那官憲は、去る八月廿一日突然日本總領事館へ佐野學を引渡すから受け取られ度いと申し出て來た。喜んだ總領事館では、早速同夜、物々しく武裝した巡査十數名を派遣して夜陰に乘じてヤッと佐野を引取つて來たのだつた。

先づ、これでさしもの大問題も片づいて、上海警察ではやれやれと一息ついたが、何しろ相手が相手なので、總領事館警察の手で佐野を取調べることはトテも出來ない。こんなお荷物は一日も早く東京へ護送してしまふのが賢明なので、恰度廿三日に出帆する連絡船長崎丸で押送することに決めたのであつた。

しかし、當人の護送に就いては極端に祕密にして、その任に當る岡田警部以下四名の巡査に對しては、廿二日の夜に入つて突然出張命令を下し、絕對祕密を守るやうに嚴命したのであつた。これは共產一味の佐野奪回を恐れたこと言ふまでもない。

◇　◇

然るに「上每」の記者は、何處から嗅ぎ付けたものか、佐野氏の押送さるゝ事實をすつかり探知してしまつた。もとより此の事實は、警察以外の者は全然知る筈もなく、此の話は警察官自身が洩らしたことは言ふまでもないことだが、「上每」の記者があれ程嚴重に祕密に附せられてゐた事實をお早く探知したことは、殊勳だといはねばならない。

小人玉を抱いて罪あり。──此の大々的特種を握つた「上每」では、かねて共產黨事件に就いての記事差止めはあるがされぱとて此の大々的特種を握りつぶすのも殘念だと思つたものか、何でも編輯局總出で記事を練り、その筋の忌諱に觸れないやうに作り上げたのがあの記事で『某重大事件の主魁某氏云々』として掲載したのであつた。

面喰つたのは總領事館警察で、此の記事の爲に佐野を拾つた前後の事情や、支那官憲に飜弄せられた事實などが、明るみへ出される恐れもあり、一方此の記事によつて佐野一味の者の奪回をも恐れて、さてこそ發行停止十五日といふ極刑が課せられたのであつた。

◇　◇

佐野學が捕まるまでのいきさつは、右の通りである。

此の事件に就いては、上海有識階級間には、兎角の非難をする者が多い。第一あの記事が果して掲載禁止の共産黨事件に該當するか否かゞ問題であるが（それは厄介な法律問題だが）それはそれとしても領事官憲が周章狼狽の極、「上毎」を發行停止したことは、却つて佐野事件を知らない人にまで知らしめたやうなもので、警察當局の處置は全く蛇足の誹を免れない。何故、罰金刑か何かで飽くまで事件を隱しておかなかつたか。それにあの事實は警察官の誰れかゞ機密を漏洩したことを證據立てるものではないか。――といふのが一般輿論である。（完）

ソヴエート・ロシア風土記（豫告）

――出版部だより――

「自分の方では三十萬部印刷した。最近英國出版界での驚異である」――と『西部戰線異狀なし』の英國出版元プリナムから、十月八日附の手紙で云つてきた――「貴版もこのくらゐの成功を克ち得らるゝであらうと信ずる。」公論社日本版は一ヶ月五十版の記錄を作つた。このくらゐ以上である事を確信する。

ところで、十二月刊行の『ソヴエート・ロシア風土記』を本社は、『西部戰線』にまさるとも劣らぬ自信をもつて、諸君に提供すべく鋭意準備中です。

原著者A・R・ウヰリアムスは、ジョン・リードとならぶ有名なアメリカのリポーターで、名著『ロシア革命をくゞつて』以後の十年間をサヴエート・ロシアに送り、その半ば以上の日子を特に農村の觀察に捧げた。本書はこの、ばうばくたるサヴエート・ロシアの飽くまで邊鄙な農村の、それでゐて日々に偉大な未來を孕みつゝある農村の、新風土記です。

しかも本書は、その內容に劣らぬ紀行文學上の新形式を提示してゐる。

と、以上はアメリカ版（昨年發行）についても云ひうるところだが、特に原著者が本社日本版のために三章を新たに追稿して、全體の面目が改まつた點は譯者前田河廣一郎氏の譯筆と相俟つて、我社日本版の價値をインタナショナルなものとする所以である。乞ふ期待されんことを！

總選擧と無產黨の人々

來間泰

この秋になつてから無產政黨の本部は目に見えて活氣づいた。そこに働いてゐる誰彼の口から「堺さんはいよ／＼起つさうだ」とか「安部さんが選擧區を變へるといふのは本當かナア」とか「本所で賀川氏を推してる人がある」などいろ／＼の噂が散らばつた。

來議會解散の豫想がだん／＼確信と變つてゆくに從ひ、無產黨の幹部たちの顏が一樣に緊張の度合を增した。

前の總選擧に大衆黨の加藤勘十君が善戰した東京第五區から、この次ぎに總同盟の松岡駒吉君が出るだらうといふ噂は春の市町村會選擧の時からあつたが、果して松岡君は九月、ジユネーヴから歸ると直ぐ民衆黨の東京第五區支部長になつた——名乘りをあげたと同然——といふことを聞き付けたのは、早耳を商賣にしてゐる僕よりも加藤君が先だつた。それほど加藤君の聽覺は鋭敏になつてゐた。

遊說隊の派遣を賴んで來る支部からの手紙がメッキリ殖えて、中にはもう自區の候補者を勝手に決めて選擧運動に取りかゝりさうなのや、「本部は一體何をしてゐるか」といふ調子のもあつた。本部も落付いてはゐられず、民衆黨でも大衆黨でも本部の役員が地方廻はりをして支部の實情を確めて來た上で各地候補者の選定を執行委員會の議題にした。が、二度や三度の會合では決めかねてゐる所へ、意外な人——既成政黨でかなり知名の人から入黨の申込が來て面喰つたりした。或る人の如きは自分を公認候補者にして吳れゝば五千圓だけ寄附してもよいといふ餌をぶら下げて來たが委員會で「うまく無產黨の足許を見やがつた」と哄笑の中へ葬られた事實もある。

さうかと思へばこんなのもある。

ある黨——むろん無產黨——の或る地方支部から本部執行委員のA君を名指しで輸入候補者に推したいと言つて來た。本部は勿論大喜び、當のA君は感激的な氣持になり早速次のやうな意味の手紙を書いて向ふの支部長B君宛に投函した。

「御推擧に預かつて光榮の至りです、首尾よく戰ひ拔いて諸兄の御好意に報いたいものと戰意に燃えてゐます、餘財とては持たぬ私ながら供託金の外に三千圓位の軍資金は調達するつもりですから何分よろしく願ひます。」

するとB君から返事の代りに使ひの者が上京して來てA君に

「冗談ぢやありません、私の方の選擧區では最少限度これだけは持つて來て頂かんと話になりません」

と指を二本、鋏のやうに出して見せたのにはA君しばらく二の句がつげなかつた。二萬圓といへば運動費制限額のほゞ倍に當る、初めから違反を覺悟で掛かるわけだ。それでは無

産黨の旗が泣く。そこで此の話はアッサリ片付いて仕舞つたといふのである。

○

銓衡評定あつて、民衆黨は候補者二十六人の顔觸れを第一回分として十月初旬の機關紙に發表した。大衆黨は十月十九日の委員會でいよ／＼四十二名の候補者とその選擧區を決めてその日に公表した。その公表振りに目をさらして或る皮肉屋が「恐ろしく竝べたてたもんだなア、これは次の府縣會議員選擧の分も一緒にしてゐるわい」と笑つたが、書記長河野君は血眼の體で「供託金をせめて十人分は本部で用意せねばならん」と二萬圓のクリデット設定に奔走し出した。

　選擧イコール金、の公式には例外がないから、無產黨候補者でも金策に腦味噌を搾る必要がある。候補者と決まるとすぐ田舍の父の家へ孝行顔をして行つた人、親類緣者の所へ足を運ぶ人、貯金の有りさうな友達を歷訪する人等々、揃てんでに忙しい、その中で涼しい顔をしてゐるのは「父が一萬圓までは出してくれることになつた」と自白してゐる民衆黨の某君と安部黨首くらゐなものである。

　民衆黨では、黨に財政的基礎のない今の場合は、田舍の金持ちで早稻田あたりを出た進步分子を歡迎して候補者に押し立て當選第一主義で行かうぢやないかといふ說を唱へる人もある。

　その反對に、かういふ不平もある。

「總選擧に立つ人は無產だとか貧乏だとか言つたつて六七千圓以上の大枚な金を工面することの出來る人ばかりではないか、それなら無產運動でなくて有產運動だ。本當のプロレタリアが議會へ出る時はいつ來るんだ」

　たしかに圖星である。英國流に勞働組合が相當な政治基金を持つやうになれば、さう悲觀したものではないにしても今のところ無產黨の惱みがそこにある。だから黨ではなるべく多く勞働者や農民の中から候補を選ぶやうに苦心もするし、一面には供託金の廢止と選擧運動のより嚴しい制限も主張するが、選擧に直面するとさういふ議論や不平で足踏みをしてはゐられない。選擧といふ大きな魔物の怪力に引きづられるやうに無產黨も騷がしい行進曲に捲き込まれて仕舞ふ。

　日本大衆黨分裂反對派（舊無產大衆派）も數名の候補者を立てる。合法主義の新裝を纏うた勞農黨が旗揚げを急いだのも解散――議會の解散を見越してのことである。

　若し解散が無かつたら……、無產黨は總がゝりで飛んだ悲喜劇を演じてゐるわけであるが、政局がレールを外れぬ限り來春の選擧には無產黨の候補者すべて百二十名を下るまいと想はれる。

○

　堺利彥氏が次の總選擧に立つ、東京第一區から、といふ噂は春の市議戰以來、根が生えてゐる。堺さんの所屬黨派は日本大衆黨、といつてもその分裂反對派であるが、前から大左翼主義――無條件合同論の家元である上に老來おひ／＼と丸る味の出てゐる堺さんにして見れば今さら除名だの分裂反對だのと喧嘩ごつこをするのはバカ／＼しいには違ひない。けれども騎虎の勢と言ふのか分裂問題の堺さんは薩摩隼人に擔ぎ出された時の西鄕に島渡似てゐる。

若し大衆黨に分裂を生じてゐなかつたら堺さんの足許は大盤石であつたらうに、今となれば大衆黨（本部側）は堺さんの向ふへ三輪壽壯君を押し立て、斬り込ませるといふ。三輪君は一高時代に中堅會長とか全寮委員長とかに推されたといふことでも判るやうに「安部さん型」の德望家で勞働農民黨と日本勞農黨と兩方の初代書記長を勤めた時に「おとなし過ぎていかん」といふ評を受けた位だから本人は長老に刃向ふことを嫌がつてゐる。若し三輪君がどうしても尻込みして起たないとあれば大衆黨は今の書記長河野密君を立て、怨みある分裂反對派に一と泡ふかせやうといふ。

ところへまだ强敵がある。民衆黨である。

民衆黨は前の總選擧に菊池寛氏を突如としてこの區で擁立した。當時「唇の發生」中の菊池氏を公認したことに對して黨内にも多少ブツ〳〵言ふ者があつた。選擧にまた菊池氏の黨に對する態度があまり冷淡だと非難を加へる者が出た。併し黨本部の役員でない菊池氏は黨の會合に出しやばつて行くわけに行かず、自然、積極的な氣持をかき立てられる機會もなかつたのであらう、文藝家らしい控へ目が冷淡と見えるのかも知れない。最近には氏の競馬々々を問題にしてゐる向もあるが、一方には「菊池氏を立てなければ自分等は脱黨する」といふほど强い支持者もある。

菊池氏自身は次の總選擧に再起する考は殆ど無いやうだ、その代り、菊池氏は馬場恒吾氏をこの第一區から出さうとしてゐる。

ところが馬場さんは一風變つてゐる、國民新聞の編輯局長時代に德富さんからでもかういふものを書いて貰ひたいと言はれると、そのことを書くつもりで握つてゐた鉛筆が動かなくなるといふ位に註文、干渉、拘束を反撥する自由人である。議員になつて黨の拘束を受けるのが苦しい、選擧地盤を守るために御世辭を振りまくやうな藝當は死ぬよりつらいと言ふ、が、自由人馬場さんはアナーキストでもニヒリストでもないから政治には興味がある。「代議士は自分が運動してなるべきものではない」といふのが馬場さんの信條であり、よく言ふ科白である。その裏を言へば他人がすつかり膳立をして吳れるなら箸を取る、といふことになる、と民衆黨の連中は解釋してゐる。菊池氏も恐らく同樣の解釋からであらう、熱心に馬場さんへ立候補をすゝめてゐる。馬場さんは逆に「菊池君、君出てくれ給へ」とこれも熱心である。民衆黨の本部はそのどちらかに立つて貰ひたいと言つてゐる。どちらが立つにしても堺さんには强敵である。

萬一、馬場菊池兩氏が互に押し合つた擧句に兩方とも尻餅をついて起たないとなつても民衆黨はその儘にこの區を棄てるほど氣前がよくはない。きつと誰かを立てるだらう。

問題がまだある。勞農黨が黨首大山郁夫氏をこの區に立てはしないか。早稻田界隈を足場にして東京隨一の知識階級區たるこの區へ大山さんを立てるのが一番策を得たものだ、といふ聲が事實勞農黨内でなか〳〵有力である。「われらの委員長！」といふ掛け聲に狂熱味が薄れて來たとはいふものゝ、尚ほインテリゲンチアの燃えたがる血にアピールする力にかけては堺、馬場、菊池諸氏は大山氏の敵ではない。一個のアヂテーターとしても大山氏がかなり大きな票をさらふものと見込んでよからう。

大山さんを向ふに廻はしては堺さんも「當

なし行脚」の氣樂さではゐられまい、それに馬場さんか菊池氏が加はつて三つ巴になればそれこそ天下の壯觀であり醜態である。

○

安部さんの人氣はそれこそ宗派的とも言へやう。既成政黨へ流れ込む筈の投票がどれだけ多く無產黨へ、安部さんあるが爲に逆流してゐることか、全國的には大したものだらう。牛込區で市會議員に當選した堺さんの得票の半分は確かに安部さんの應援演說と推薦狀に依るものと觀測される位で、當時、安部さんが堺さんの演說會へ應援に行つて壇へ上ると割れるやうな拍手、「脫帽々々」の叫び、拍手また拍手でその人氣は斷然候補者堺さんの人氣を壓倒してゐた。

そこで、民衆黨に慾念が湧く。安部さんを第一區に廻はして第二區（小石川、本郷、神田、下谷）へ島中雄三氏を立てゝ一擧兩得しやうといふのである。島中氏は春の市議戰に小石川區内だけで四千餘票取つた、總選擧にはそこへ本郷外二區が加はるから前回の當選圏七千五百票に達するのはあと一投足の勞だといふわけで、この說は大分有力になつたけれども、當の島中氏が「安部さんは元の所で出したい」とキッパリ反對したのでオヂヤンになつた。

で東京第二區から無產黨は安部さん一人で張合ひがないから今度は最高點を目標にするだらう。軍資金は前回の殘りが三千圓あまり殘つてあるし、運動員としては早大野球部のオールド及びヤングボイスがまた輕快に立ち廻るさうだから安心だが、たゞ先生は「私の方の運動者から一人でも選擧違反が出たら私は立候補を辭します。ビラ一枚の違反でもいけません」と嚴命する、それもおどかしでなく本當に辭めさうなんだから運動員の諸君はビク／＼ものだといふ話である。フエアプレイの元祖だけある。

安部さんはこの夏アメリカから歸るとすぐ民衆黨本部へ出かけて片山書記長の手へ札たばを渡し、「これは向ふでやつた演說會の入場料です。久しく留守にして濟みませんでしたがこれを埋め合はせに使つて下さい」に一同感激の體。その一千百五十圓を總選擧の際の本部費に充てることになつて書記長が保管してゐるが、これに千圓も足せば本部の選擧費用は充分だから一同ホク／＼するわけである。

○

第三區（日本橋、京橋、淺草）は無產派の食ひつきにくい地盤だが民衆黨の阿部温智君（市議）が起つ。同君は「地盤開拓にやるだけです」と謙遜してゐるものゝ、岡直彦氏門下時代から蓄へた潜勢力で番狂はせを見せないとも限らない。

第四區（本所、深川）は江戶つ兒の本場だけあつて選擧區として昔から面白い。佐々木蒙古君が大受けに受けたこともある。善く言へば勇み肌、裏を言へばオダテの利く處だ。

この前の總選擧には民衆黨の宮崎龍介君が名乘りをあげたが運動なかばにして病床へ引きあげた。夫君の代りに演壇へ進出した白蓮さん、どうも少し厚化粧すぎて……などと運動員の心配にも拘らず、聽衆からはヤンヤの喝采を浴びて當選圏へたつた五百票といふ處まで漕ぎつけた。その後も宮崎君はとかく病氣の塒に籠りがちで地盤の手入れが十分でな

いやうだけれども雪辱の念は強い、

民衆黨の一部には宮崎君をやめて馬島僩君（市議戰に本所で最高點）を立てやうとしてゐる者もある。ドクトル馬島君は仁術で根強く細民區域へ食ひ込んでゐるが宮崎君の優先權を無視してまで起たうとはしないので押す方が弱つてゐる。こゝで民衆黨から賀川豐彦氏を出さうといふ運動も一時はあつたけれども引き留めの手も大ぶん動いた結果沙汰やみになつた。賀川氏の出馬を引留めるのに「あなたがこゝで當選されるとしても議員は一人ふえるだけですがあなたが阪神地方へ應援に行つて下されば杉山さん初め三四人は確實に當選するのですから……」と誰だか巧いことを言つたさうだ、いづれ賀川氏の財布を當にしてる一人だらう。

第四區ではなほ大衆黨からは淺沼稻次郎君が起つ。やつと今年あたり被選資格の年齡に達したが、三宅島でノンビリ育つて、圖體も人物のスケールも大きい淺沼君、「晝行燈」といふ綽名に似合はず壯烈な煽動演說がうまいからこゝの肌合に合ふかも知れない。

○

東京第五區における松岡駒吉君（民衆黨）と加藤勘十君（大衆黨）の對立戰は今から無產黨各方面で話題の中心になつてゐる。

松岡君は鼻つ張りの強さを以て職工の身から大組合の專制的執權者になつたほど押しの名人、加藤君といへば唐辛しを飮んだ荒馬のやうに「階級戰の先頭を切る男だから兩者が相寄ればいつでも火花が散る。加藤君がまだ總同盟にゐた時から松岡君の悲境時代に加藤君が主事を勤め、加藤君が退いた後へ松岡君が乘り出すといふ工合でとかく火花が出がちであつた上に加藤君が總同盟を脫退して間もなく起つた岡部電機爭議の際、松岡君は加藤派から毆られて負傷したこともあつて兩者の敵對感情は極めて深刻だ。だからこの選擧は單純な紅白試合と違つて殺氣に滿ちた遺恨試合である。

現に十月十二日から始まつた品川製作所爭議を繞る松岡派（總同盟）と加藤派（組合同盟）の抗爭ぶりは、警察でさへその深刻さと醜惡なことには呆れてゐる有樣で、双方から重傷者が出るほど亂鬪して双方から相手方を告訴するやら、一方がダラ幹呼ばはりをすれば他方はドロ幹（組合費の使ひ込み）とやり返すやら、一方が相手方の遊興ぶりを寫眞入りのビラであばき立てれば他方は野田爭議の裏面に醜取引ありと待合の名まで書いたビラを撒きちらす。資本家との喧嘩はそつちのけで內輪同志が血まみれの泥合戰を展開してゐる。その珍型で鼻つまみなること蓋し未曾有の爭議である。

この爭議を前哨戰とする松岡、加藤兩派の選擧爭ひは血を見るところまで行かねばいゝが、と氣遣はれてゐる位である。

そこへ、この第五區から勞農黨首大山氏を立てやうと目論でゐる者もある。氏はこの區內に住んでゐることだし、この區は勞働者と無產知識階級の數では全國屈指だから大丈夫だといふのであるが、併し大山、加藤、松岡の三人が起てば三人共倒れになることは請合ひと見る人が多い。

○

第六區も混戰を免れぬ形勢である。大衆黨

の松谷與二郎氏は前回の一萬二千五百票を基礎にして起つ。前に惜敗して以來ずつと地盤の手入れに怠りないから今度は間違ないと戰はぬ先から勝つてる意氣込みである。これに對し民衆黨の爲藤五郎氏も再起する。爲藤氏は現に府會議員であるが警視廳に對して幅の利くことは府會議員が、(警視廳豫算を議するから)代議士より遙かに上だから唯一の府議爲藤氏が國會へ出ては後が困る、といふ引留說も黨內にあるがやはり爲藤氏は雪辱を望んで起つだらう。大衆黨分裂反對派の中西伊之助君は市電三の輪車庫の一隊から推され、もはや應援者たちによつて供託金の積み立が始められてゐると聞く。

そこへ、今一人、勞農黨の細迫兼光君が立たないとも限らぬ。細迫君は大正十五年以來波風荒い左翼陣營の尖頭に立ち通してゐるが會つて見れば誰でも「これが細迫か」と意外に思ふ位もの柔かで、綺麗なお坊つちやんである。

[redacted]るまいが細迫君は帝大時代にあの顔へおしろいを塗つて舞台へ立つたことがある。黒[illegible]社とか[illegible]か學生劇團の公演で、役は「或る日の一休」の野武士と、併劇「千本櫻鮨屋の段」の梶原に付いて出る侍と二た役だつた。そんなことはどうでもいゝが細迫君はこの前の選擧の時に奈良縣の勞農黨支部から立候補を勸められたが自分では「奈良に土着の實際運動者を立てる方がいゝ」と考へて清原一隆君を推し、郷里の父に自分が立つから金を下さいと父をだまして數千圓送つて貰つたのをソックリ清原君の手へ渡した。後でだまされたと知つた親爺さんは、カン／＼におこつたが、それでも毎月の生活費を兼光君へ送ることは絶やさないといふ結構な親爺さんである。ところが最近細迫君のお父さんが送金をやめると言つて來たので驚いたのは細迫君、今糧道を斷たれては折角乘りかゝつた新勞農黨の計畫が頓挫するので大山さんの家へ身の上相談に行つた。大山さんも驚いて早速京都の河上博士へ相談の手紙を出した。するとあの出無精の河上さんがまた早速京都から細迫君の郷里山口の片田舍へ飛んで行つて細迫君のお父さんを訪れた。社會民主々義者を克服することには慣れてゐる博士も田舍の地主で政友會の長老である老人を說き伏せるにはかなり骨が折れたことだらう。芝居になり相な場面があつて結局河上さんの斡旋が功を奏し、老人の御機嫌が直つて送金は繼續されることゝなり、細迫君は安心して新勞農黨の旗揚げに沒頭してゐる次第である。今度いよ／＼細迫君が立候補することになれば親爺さんは又だまされるのではないかと心配しながら軍用金を貢ぐだらう。

○

大阪はこの間、新市會へ無産黨議員を十三名も送り込んだ勢から見て、次の總選擧には民衆黨の鈴木、西尾兩代議士の再選は疑なし、田萬清臣君も大丈夫、郡部の杉山元治郎は當選確實その外にもう一人位は可能性があり、都合五名の當選を豫想されるほどであつたのに、あゝ好事魔多しとはこの事か、總同盟の大分裂から形勢混沌、旗色立ち迷ふといふ雲行きになつてしまつた。

第四區の鈴木さんだけはたとへ除名派の山内鐡吉君が向ふへ立つてゑげつない攻撃を浴びせても大丈夫だらう。この前にだつて鈴木さんに對しては日勞黨や勞農黨が隨分ひどいデマをうんと飛ばせたんだから、そしてこの

前の半分の得票でも當選し得る鈴木さんだから。

郡部（第五區）の杉山さんも今度は間違ひないらしい。最近に大阪から來た人の話によると選擧區の人氣は前より增してる上に杉山さんは秋の初めから今までに區內の各村を一と廻り演說して步いた位に手廻しもいゝさうだ。杉山さんの兵站部を受持つ賀川さんは「兄弟の杉山を今度は必ず當選させて見せる」と言つてるし。

分裂の打擊で再選は覺束ないと傳へられる西尾君は例のネチネチした調子で細心に緻密に粘り強く形勢の挽回を計つてゐるから却つて案外な高點で當選して「諸君どうやね」と言ひさうに思へる。

田万君は市會に全市最高點で出たが今度は總同盟の除名組に加擔してゐるから幾分の不利を免れまい。それに大衆黨の山名義鶴君と對立だから骨が折れる。

大衆黨本部では大阪第二區で高野岩三郎氏を擁立しやうとして目下頻りにその蹶起をすゝめてゐるが、博士は先に大衆黨首の据ゑ膳を向けられても到頭箸を取らなんだ位の用心家だから果して起つかどうか。第四區で立つ大衆黨の阪本孝三郎君と勞農黨の小岩井淨君はどちらも關西無產運動界の輝くチャムピオン、殊に小岩井君の人格的な光りは全國的にも異色である。

京都はこの前無名の二青年に榮冠を授けて世間をアッと言はせたが、今度は無產黨議員を倍にしてもう一度アッと言はせるのではないか。山本宣治君の最期は確かに血の閃光を人々に刻みつけてゐるもの丶、その弔ひ合戰は勞農派の勝ちと決めかねる情勢だ。第一區の水谷君は勞農黨から脫退したので極左派から「裏切り者水長」の一齊射擊を食つて意氣揚がらない。「大山はんが合法黨を作らはるんやつたら僕出るんやなかつたに」と正直に愚痴るところが坊ちやん議員の本領であるが、地盤關係はこの名物議員の再選を許さない。そこで水谷君は勞農黨とよりを戻して京都市から恩師河上博士を擔ぎ出さうと試みてゐるけれども水谷派と勞農黨の合同はなかなか甘く運ばない。水谷君の考とは別に勞農黨では河上さんの蹶起を切望して大山さんからも再三すゝめてゐるが河上さんは「一切の非難に耳を閉ぢて起ち、そして當選しても僕には議會鬪爭の能力がない、しかも萬一僕が勞農黨唯一の議員になつた場合の慘めな姿を想像して貰ひたい」と哀切な尻込みをしてゐる。それなら京都から大山氏を立てやうといふ意見もある。前記の通り大山氏を立てやうといふ地盤が方々に澤山あるといふことは一面から言へば大山氏の當選を確實なものにする地盤が一つもないといふことにもなる。勞農黨としては數名の議員に代へても大山氏だけは今度議會に出して置かねばならぬ場合だから苦しい。

神戶市の河上代議士は今ごろからあまり演說をやり過ぎると肝腎な場合に效き目が薄くなるからといふので、昨今は少しも演壇に立たず選擧前になつてからウンと馬力をかける策戰を取つてゐる。再選疑なしといふ話だ。

兵庫縣第二區の米窪滿亮君（民衆黨）は頗る好望といはれるが大衆黨の棚橋小虎君との對立になると少々苦しいだらう。

○

北九州の勞働王國八幡市はどうなるか。こ

の前は製鐵所側が淺原君を叩き落したいばかりに當選の見込なき龜井君へ肩を入れたところが兩君ともボカリとしかも素晴らしい高點で躍り出したには製鐵所長官以下目を白黑、福岡縣知事は腕の喜三郎内相に目玉が飛び出るほど叱られた。この次には既成政黨も無產派のどちらか一方だけは打ち落とす策戰おさ〳〵怠りないと聞く。が龜井君の高速度出世振りはテムポ時代の先最端を往くと謳はれただけあつて同君も拔け目はない。暇さへあれば始終選擧區へ行つて區民の言ひなり放題に引きづり廻されてペコ〳〵ペコ〳〵頭を下げて步いてる。宿――といつても一黨員のむさくるしい家へ歸ると疲れ切つてとても書物なんか讀めやしないとて寢轉んで講談俱樂部や朝日を讀んでる龜井君の哀れな姿を見て來た赤松克麿君がつく〴〵感心してゐた。片や淺原君は八幡界隈十數年といふもの文字通り血みどろの闘爭をした男、膽と智と策と辯、一騎討ちとなれば日本中の無產闘士を探しても淺原君の向ふへ[illegible]る者はいくらもない。この前に取つた一萬二千[illegible]七票がこの次に一票缺けても同氏の不利[illegible]にかゝる、とて彼一流の斬り込みに今から餘念がない。

福岡縣第三區の古市春彥君、同第四區の小池四郎君も善戰するだらう。

足尾銅山を死守して栃木から立つ大衆黨首麻生久君の意氣には鳥渡泣かせる物がある。

横濱市の岡崎憲君（民衆黨）は確實視されてゐる。神奈川縣第二區では民衆黨の川島不二郎君が忍び難きを忍んで退き、書記長片山哲君を推せば横須賀、川崎の二勞働市の票で片山君の當選は確實と見られる。甲斐は昔幕府の天領、今は無產黨の天領で二縣議と約五百の町村議を持つ、そこで民衆黨から北澤新次郎敎授が推されてゐるが、北澤氏の嚴父は「わしの財產はわしの一代で造つたものだからお前が使ひたければみんな使つてもよろしい」といふ判つた話であるに拘らず親戚一同が引留めてゐるので起否未定とは惜しい。今は勞農黨よりもつと左にゐる藤森成吉氏が今一度鄕里長野（第三區）で起つたら面白からう。この前の強敵であつた小川平吉氏はシヤア〳〵と立つにしても樋口秀雄氏はまさか地獄から立候補も出來ないから。「森恪」に社會思想を吹き込んだやうな赤松克麿君に近ごろ「代議士稼業と理論的運動は兩立しない」とを發見してやゝ二の足を踏んでゐるが鈴木代議士が赤松君の選擧區（宮城第一區）で演說に廻はつて見て「景氣よし當選確實」と折紙つきで惱みの赤松君を激勵中である。

右の外にも有望と見られる諸君が澤山あるが、この紙上舞臺は全部の顏見せを行ふには少し狹い。書き漏らした諸君の中から凱歌を怒鳴り出す人もあらう。例へば北海道の菅舜英君は――といつても恐らく大ていの無產運動者も知るまいが――室蘭あたりでは一種の生佛くらゐに思ふ者さへ多いといふ念佛僧、精神改造を志して五十年の生涯を打込んだが今にして社會改造が先決問題だと悟りを開いた。その住寺に行つて見ると本堂は數年前に燒け落ちたまゝで庫裡が一つ、居間の隅に小さい佛壇があつてそのぐるりには資本論、マルクス全集その他その種類の書物が山のやうに積み上げてある。この夏北海道へ遊說に行つた安部さんがその寺を訪れて菅氏と社會改造論を闘はせた光景は全く見ものであつたさうな。その歸り途に安部さんは同行者に向つて「田舍にはえらい人が隱れてゐるものです

なァ、菅さんは傑物です」と讃嘆したともいふ。その菅氏はこの前の選擧に土地の信者から推されて碌々演說もせずに四千票ばかり取つた。今度は自分から本山へ還俗の手續をして民衆黨公認で出る決心でゐるだけに一部からは非常に囑目されてゐる。

○

最後に一言無きを得ないのは、候補者の濫立についてだ。對立の苦杯はこの前の總選擧だけで滿喫した筈なのに性懲りもない又苦杯を重ねやうとしてゐることは上記の如し。この有樣ではまるで死票を集めに戰ふやうなものだ。安部さんは曾つて「選擧毎に無產黨議員は倍になる」と言はれた。その勘定で行くと次には無產標は十六名の當選者を持つわけであるが、果してその通りに鼠算で行けるかどうか？

來るべき總選擧はその點で安部さんの目の視力試驗であると同時に無產各派の迷妄を醒まして戰線統一の第一標となるかも知れない。（稿了したとき大衆黨分裂反對派の解體が報ぜられたが堺氏のことその他の形勢に變りはない。）

暴力考

ジョルジュ・ソレル著・西川勉譯

完譯出づ

本書はサンヂカリズムに初めて哲學的、社會學的基礎付けを與へたものとして名高い。我國に於て本書の名の喧傳せらるゝや久しい。だが、未だ曾てその完全なる飜刻を見なかつたが、茲に初めてその完譯を出版し得たことを悦ぶ。廣く社會運動の關心者にとつて、何等かの意味に於て得るところ多きを信ずる。

目次

最新刊 ■菊判四五〇頁 函入極上製■ 定價貳圓參拾錢 送料内地十八錢 其他二十二錢

東京市麹町區 丸ビル五階 中央公論社 振替口座東京三四番

人間としての共産黨巨頭

渡邊政之輔君の印象

馬島僩

震災の翌年の晩春に、私が本所横川の小さなバラックの診療所に立籠つて居る頃、初めて彼は一患者としてカラ無しのワイシヤツを脱いで私の前に現はれた、と記憶する。何でもその頃山本懸藏君が暫く通つて痔の治療をした後であつたから彼は山本の紹介に由つて來たものと想ふ。

靑黒い顴骨の高い、稍瘦ぎすではあるが頑丈な勞働を表象する樣な格好が慓悍で、言葉は黃色味を帶びて强く明瞭であつた。會話は何時も恐ろしく簡明で、一通り病氣の本質に就て私が說明すると、判つた、では治療は委せます、但し錢は是丈けしか無い、と云つた風で、自分の病氣をまるで一つの事務を處理するかの樣に想はれる調子であつた。

其頃の私は（尤も今日でもであるが、）特に社會運動の線の外に居たのみならず、業務が多忙なのでとても天下の情勢などを觀測したり、勉强したりする暇もなかつたが、只多勢の勞働者諸君がハダカで私の對談者となる爲めに、それ等の人と言葉とを通じて、ちぎれ〳〵の社會情勢、特に勞働運動の傾向が目に映じて居た。彼が第一次共産黨事件中の人であつた事は知つて居るが、果してどんな役割を演じたかを、知らなかつたのみならず、第一次共産事件そのものの本態をさへ疑つて居た私には、彼の行動を其の延長だとか、再興の爲めであるとかと云ふ觀點から考へる譯には行かなかつたが、彼は馬鹿に忙がしい相であつた。何でもその頃は勞働總同盟に加はつて、南葛勞働から關東合同―を經て東京合同と云ふ名前になつて動いて居た時であつたらう。其頃本所にはアナ系の自由勞働組合に屬する人も非常に多かつたと考へる、自然それ等のアナ系の人々が診察場で特に目立つて多かつたのでボル系の影は薄かつたが、ガヤガヤしたアナの動きに對してシンミリとコチコチとボルが動いて居るのではあるまいかと想像をして居た。アナともボルともクリスチヤンともつかぬ唐牛などと云ふ靑年が東京合同から來るし、藤沼老と云ひ度い樣な落ち着いた古强者が默々としてやつて來るし、書き立てると限もない、闘士達、今度の事件に連坐した多くの人々、或は後にアナからボルに變

つた人、死んだ男、などの中で、一きは目立つて底力のある好闘士と云ふ印象を與へたのは常に彼であつた。と云つてそんなに度々やつて來たのではなく、彗星の樣に其の變はらぬ彫刻流の顔を現はした。其頃飛び〳〵に聞いたのは、總同盟の中で、内田藤七君との論爭、或は土井直作君との確執等々から神戸の大會での除名、分裂―其等の騷ぎの中心になつて猛烈に働いたらしいと云ふ事等であつた。その後間もなく彼は日本からか私共からか兎に角姿を消してしまつた。あまり長くなつて忘れる位であつたが、其の後に彼が、尚昔のまゝの格好で現はれても、昔のまゝの動き方ではないと觀測するの外はなかつた。何かしら密かなる謀みを持つ決死の男と云ひ度い風貌であつた。第二回目かの行衞不明中、愛妻丹野セツ子史が私の診療所に看護婦として働かねば食へぬ時があつた。彼と彼女との交渉の想出てをセツ子史から聞いて初めて彼の人と爲りを想像する事も出來る樣になつたのであるが、若し運動の線外に居た私が一言に彼を評するならば、彼は猪武者の近代型であつた」と云ひ。十四五歳の頃から酒屋の小僧であつた彼は仲間を語つて酒代をチとふ、稼んで馬賊点願をしてまんまと金の下附も貯へ、出奔の途中で捕まつた事がある。一つのものを見つめると挺でも動かぬ執着をもつて猛進する、今にして想へば彼はK・Pの外に生命がなかつたのであらう。セツ子史に云はせれば彼には初めから少しも文學的な半面がなかつた、彼の女が彼との共同生活も、だから、闘爭の連帶であつたに過ぎぬ、と。では何故、その昔鐵中の花であつた彼の女に西尾末廣君を筆頭に鍋山、河田、横井、等々の面々がモーションをかけた其の眞中で人もあらうに、彼の如き冷鐵漢にひかれて行つた譯か、それは複雜にした處で彼女自身にもわかり兼れるのである相だ。が、結婚行進曲も彼にとつては運動の一事務ででもあるかの樣に單調無味なものであつたに相異ない。滅多に酒を飲まないが、飲めば三升飲んでもケロリとして居る豪酒と云ふよりは酒殺してある。それだから惡醉いをする、暴れる、彼が第一回の戀愛對照であつた長峯セルロイド工場の女工さんに花見の後で一遍に愛想をつかされたのは、その爲めであつたとか。けれどもセツ子史とはたつた一度位喧嘩をしたきりであると云ふから事務的行進を、露骨の文學少女に強制し通した處には何か、ひきつける力そのものがあつたに違ない。その一度の喧嘩と云ふのは、何でも彼女が工場で働いて、彼は運動ばかりして彼の母に食はせて貰つて居た頃、藤沼老に六十錢貸してあつたのを其の晩の彼女の指導する組合の會へ出席する爲めに、取つて置いて呉れ、と頼んで、工場から歸ると、知らぬ顔をして、あれは、今日金の無いのが來たからやつた、とばかり、彼女は一錢もなくては會合にも行けぬ、と云つて喰つてかかつてなぐられた、一幕。

彼の猪突式マルキスト行動は山本懸藏君の潤達自在的行動と共に日本に於けるインテリゲンチヤに非ざる左翼の双璧であつたらう。

彼は腹の上に乘つかつても組織運動の事を忘れない奴だ、とまで評せられる程のシツコさがあつた。議論をはじめると例の黄色い聲を張り上げて眞赤になつて一歩も退かぬ、どんな會合でも彼が居ると居ないとでは、その空氣の緊張さに大した異があつたと云ふ事である。が一生を通して柔い物語りの少い男であつた。土から生れて鐵に還つた、K・Pの理論は私にはわからない、彼の所說も從つて知らない、けれども彗星の飛び去つたと

印象に殘る三田村君の眼

加藤勘十

共產黨事件に關する記事が解禁されて、各新聞紙に一齊に其の內容が報道されたとき、私は吸ひつけられるやうに被告人の氏名に見いつた。共產黨の諸君とは資本主義の現實相に對する認識を異にし、從つて戰術を異にして來た關係上、時には、ストライキの場面などに於て烈しい對立をして來たこともある。然しながら、是等の諸君が階級的純一性に進まんとせる努力に對しては敬意を表するに躊躇するものではない。世人の眼にはどう映るか知らないが私共の眼には——認識不足の憾みはあるが——殉教者の姿として映るのである。

その被告人の一人三田村四郎君についての描寫を求められた。私は求められる儘に三田村君について今でも殘る印象を語りたい。三田村君とは大正九年社會主義同盟創立前後からの知り合ひであるが、別に深い交際があつたと云ふ譯でないし、殊に大正十四年の總同盟第一次分裂當時に會つたきり、全く會はないので最近の三田村君については全然知る處がない。私が語らうとするのはその分裂當時の三田村君についてゞある。

福本君によつて分裂が合理化され、其後再三の分裂騷ぎで、近頃では分裂問題もさほど強い刺戟を與へないが、總同盟第一次分裂問題發生當時は、何れもが眞劍な態度であつた。

大正十四年三月の總同盟の神戶に於ける大會は、關東の山本、杉浦、渡邊等の諸君の除名問題を中心として關西に於ける鍋山、中村、三田村君等を中心とせる一團によつて本部殊に赤松君攻擊の矢が集中せられた。赤松君等は必然的に關西の一團をも除名せんと强硬なる態度を持し、大會は極度に陰鬱な暗雲に閉されて分裂は避け難い形勢となつて進んだ。が、私等の所屬せる總同盟組合はあくまでも除名反對を持して讓らなかつたために、大會はともかくも險惡なる風雲をはらんだまゝ終了した。大會の空氣を其の儘承した翌日の中央委員會は是非とも問題解決の決定を與へなければならぬことになつた。

中央委員會では關東同盟側の提案である地方評議會の解散——これには五組合の連絡事務所並に連絡委員を認める——を決定した。

當時、私と淺原健三君とはこの中央委員會の決定に基いて、評議會側の諸君が集合してゐる電氣勞働組合の事務所を訪問して、評議會側の最高幹部數十名の諸君と會つて、具さに事情を述べ、勞働組合と云ふ大衆的組織體の本質から說いて、諸君が中央委員會の決定に服することの有利なるを約二時間半に亙つて說いた。當時の形式上の形勢は評議會側に有利に展開してゐた。其の形式上の形勢を直ちに實質上の形勢であるかの如くに見過つた點もあつたらうが、是等の諸君は頑强に私等の申出を拒否した。中にも一入强く反對したのが誰あらう鍋山、三田村の兩君であつた。

三田村君は社會主義同盟當時は著しく拗ね者の風があつた。それが大阪に移つて總同盟の印刷勞働組合に入つてからは、拗ね者の風

もなくなり、人好きのする愛嬌をさへ湛へて仲間での人氣者であつたが、この時はまるで別人のやうに蒼白な顔色をして眼には涙をさへ宿して私等に詰め寄つて私等の説を論難した。私等は三田村君等のあまりにも思ひつめた眞劍な態度に、分裂の到底避け難きを知つて訣れたが、私は五十餘名の是等の諸君の中から、唯一人、三田村君の燃ゆるが如き眼を心の奥底に強く深く刻みつけられた。

其後、濱松爭議の指導者としての三田村君淺草馬道での巡査狙撃事件、未決獨房に於いての孤獨生活、それを聞く毎に私の眼には何時でも、あの時の三田村君の光つた眼が浮んでくる。今、あの眼は何を凝視してゐるだらう。希くば健在なれ(一一、九)

佐野學外面観

細迫兼光

◇

主義思想を拔きにした佐野學氏――それは殆んど生命を拔いた佐野學氏といふに等しい。佐野學はその主義思想の中に住ませて始めて佐野學であり得る。だが人の外面的行動は結局に於て內在する主義思想の表現であるから、彼の外觀もやはり彼の主義思想を內包した彼以外のものではあり得ない。

中學は知らず、高等學校は鹿兒島の第七高等學校造士館、東京帝大の卒業は確か大正六年。今年とつて三十八歳の働き盛り。體軀偉丈ならずして小兵なれど、ガツチリとして色淺黒く、はえ上りにて廣額尖頭、いささか出齒にて延せば鰓にもなりなん醜髭、と云へば風采甚だあがらざる如しと雖も流石に眼光は烱々、冷徹の智才と燃ゆる情熱を示して餘りなし。

頭腦すこぶる明晰、高等學校時代は成績甚だ振はざるものありしとか聞き及ぶけれど、實際の彼を知るものはそれを信じ得ない程ある。

◇

帝大卒業後は迎へられて早稻田大學に入り大正十二年の第一次共產黨事件まで新進氣鋭の少壯學者として早稻田の誇りをなしてゐたことは人のあまねく知るところ。

その間、つとにマルクス主義の研究に精進して『日本社會史』『百姓一揆の研究』等の極めて有益な獨創的業蹟を殘してゐる。一方、實際運動にも關係し、かの早稻田の軍敎反對運動に大山郁夫氏と共に學生の稻村隆一君や淺沼稻次郎君等の先頭になつて軍閥と強硬なる抗爭をしたことも人のよく知るところ。又勞働運動にも頭を突込み、麻生久君等と共に坑夫組合の運動に參加し、その方面に貢獻したことも少くない。軍敎事件の時など氏の住宅は多くの足尾の猛者によつて護られてゐた。

◇

後進の敎導にも氏は喜こんでその任についた。早稻田の學生に對しては勿論のこと、帝大の後輩のためにもよくその求めに應じて快

く足を運んで呉れた『共産黨宣言』を一冊の塗本からプリントにして分ち、新人會の合宿で佐野氏の口から『一言一句悉く金玉の文字である』とその講義を聞いた光景はいまだに忘れ難いものである。

　當時の大正十年の頃といへば未だ一般には、アナーキズムもコムミユニズムも區別のつかぬ頃であつたが、佐野氏に於ては既にハツキリとコムミユニズムを把握してゐたように信じられる（勿論當時のことであるから組織的な具體性に於てではなかつたであらうけれど）。その頃賣り出してゐた高畠素之氏の篤學には佐野氏も可なりの尊敬を拂つて居たが、高畠氏の當時からの排外思想と遂に相容れず袂を分つてしまつた。筆者も兩人の對座の席に連なつたことがあるが、高畠氏が『萬國の勞働者團結せよ！といふ萬國はヨーロッパのみを指すものだ』といつた調子の論を進めるに對して佐野氏は徹底的に爭つてゐたことを覺えてゐる。親友ではあつたが麻生久君等ともハツキリ區別せられてゐた。

◇

　大正十二年の共産黨事件の大立物として佐野氏が潜んでゐたことは世人をアツと驚かした。同事件は同氏の最も信頼する同志の裏切りによつて發覺し、早大の同氏の研究室の捜査となり、學園の神聖を犯すものとして、かなりな問題を起し、今でも早稲田の學生はその日を紀念日としてゐる。同氏の研究室からは黨創立大會の議事錄その他の重要書類が出て來たそうだが、それに對しては學者氣質の資料聚集癖が災したものではないかと非難する者もあつた。然し信ずる同志がスパイであつては助りつこない。

　あの時も彼は巧みにズラかつた。三・一五のときも脱出した。彼も亦山本懸藏と共にズラカリの名人ではある。當時初ての子供が生れたばかりで多分奥さんはいまだ産褥にあつた位ではないかと思ふが、迫る危險に追はれて故國を去り行く氏の心中を思ふ時は涙なしに居られない。

◇

　刑の確定後、歸國して服罪。出獄した頃は例の福本イズムの全盛期。佐野氏はひそかにその誤りであることを確信し、すんでのことに古き同志堺、山川、猪俣、荒畑の諸氏と共に對立的態度に出ようとしたそうであるが、然し間違つてゐるにせよ最も勇敢にして、最も多くの大衆を摑んでゐる陣營——總ての運動の原動力になる陣營——を離れることはウソだと踏み止まり、爾來無産者新聞主筆として名は出しては居たが鳴かず飛ばずの日を送つて居たといふべきだらう。

　然るに、かの有名なコミンテルンの日本に關するテーゼが發表せられてから、佐野氏の猛然たる進出が始まり、福本イズムの淸算と、テーゼを故意に曲解して自己を正當化さんとする勞農一派との論戰に於て目覺ましきばかりの奮闘振りを示した。

　かくして佐野氏と渡邊政之輔君との相たづさへての指導の下に、かのテーゼの具體化——概して云へば共産黨のプロレタリアートの黨としての大衆化——に着々として歩が進められかけた其の出鼻を、かの三・一五の嵐に見舞はれたのである。

福本和夫氏の記憶

林　房　雄

福本和夫氏には前後合せて僅かに二回、しかも非常に短い時間會つたことがあるだけだ。大正十三年の秋だつたと思ふが、當時神田西紅梅町にあつた、雜誌「マルクス主義」の編輯所で見たのが一度、それから同じ頃に、本郷森川町の氏の下宿を、是枝恭二君と一しよに訪れたのが一度、——だから氏の記憶を今こゝで筆にするのには、あまりに淡い個人的な關係である。黨に入つてからの生活についても、無論知る由もなく、たゞ最近、大阪檢事局に於ける氏の調書を讀んで、僅かにその輪廓を知り得たに止まる。人間としての福本和夫を描くのには、外に適任者があることと思ふのだが、「緊急に」といふ記者の請にまかせて、淡い記憶をたどることにする。

福本氏の出現は、大正十二年の終りから十三年にかけてであつたが、氏の原稿を「マルクス主義」に紹介（この言葉はやゝ妥當をかくが）したのは、たしか書店白楊社の主人であつた。福本氏は、山口の學校から、白楊社に出版してもらふ目的で、原稿を持つて上京したらしいのだが、それを白楊社の主人が、恐らく商賣的な見地からであらう、無名の人の原稿をいきなり出すよりも、先づどこかの雜誌に出してから、とでも思つたのか、かれて出版の緣故から知り合ひである、「マルクス主義」の編輯者西雅雄君に見せた。それを機緣として氏の原稿は續々「マルクス主義」に現れ始めたのだ。

「一世を風靡した」とでも形容したい例の福本調の論文については、改めて書くまでもなく、すでに讀者の知るところであらう。當時「マルクス主義」の編輯を手傳つてゐた關係から、僕の手許にも氏の原稿が二三枚殘つてるが、罫を無視した思ひきり細い字で、とてつもない行の變へ方をし、無暗に活字の號數を變へ、AとかBとか、線だとか符號だとかをやたらにつかひ、種々な本からの書きぬきを明からに組合せたらしく一枚に二三行しか文字がなく、他の餘白は簡單に一本の線で消してあるといふやうな風變りな原稿は、何よりも先づ編輯子を面喰はせ、困らせたものだつた。

原稿の書きつぷりだけでなく、論文の內容そのものにも一同は面喰つた。上はプラトン、アリストテレスから、下はマッハ、アベナリウス、第三インタナショナルの議事錄に至るがいはくな引用、それに全く說明といふものを缺いだ大膽な論斷、神祕的にまで尖銳な唯物辨證法の「活用」——當時雜誌「マルクス主義」に集つてゐた日本育ちのマルキストの一群は、このドイツ直輸入品の前でちよつと「象を探る五人の盲人」といつたていたらくであつたのだ。

と、こんな風に書くと、問題を茶化してゐるやうに聞こへるが、どうして、その當時はみな大まじめであつた。新しい尖銳な理論家が味方の陣營に生れたことに心からの同志的苦汁を嘗めながら、しかも、相手の[illegible]——

理論的にも人間的にも――のわからぬことから來る漠然たる不安に、支配されることを免れ得なかつたといふ意味である。

編輯者の西雅雄君はある時こんなことをいつた。――「理論的に充分正しいか、どうかはなほ疑問だが、しかし、隨所にすばらしい天才的なひらめきとでもいふべきものを示してゐる。」

この意見などが、當時の代表的なものであつたであらう。北條一雄の名で最初に發表した時事的論文のなかから、堺利彦氏や山川均氏を鋭く論難した部分が編輯局の手によつて一應削除されて發表されたのも、かうした正體のわからなさから來た當事者の政治的考慮からだつたのであらう。

ある同志は、「福本和夫は單なる理論家で、政治的能力のない人だ。だから時事論文ではあんな無茶な斷定を下すのだ。」といつた。さうかと思ふと、是枝恭二君のやうな、當時福本氏といくらか對立的な傾きをしめしてゐたらしい人は「彼は理論家としては恐るるに足りない。が、政治家として非常な實際家的手腕をもつてゐるらしい」といつたりした。

何れにしろ、出現當時の福本氏は、同志の間に神祕に滿ちたスフインクス的な印象を與へたのであつた。

共產黨に入黨してからの福本氏は、世間及び新聞の傳へるところによると、謂ゆる「巨頭」的な重要な役割を演じたらしく眼にうつる。が、事實はおそらくさうでなかつたらう。私の見た檢事調書によると、なるほど彼は黨の創立委員會で、綱領起草者にあげられたりしてゐるが、いはゆる「福本イズム」の批判と清算は――少くとも黨の内部に於ては――案外早く現れてゐる。入露してコンミンテルンの批判を承認して以來の氏は、氏自身の言葉によれば「閑職」につき、專ら理論的、著述的な方面に仕事を限らうとしてゐたらしい。自分が黨の内部に於いて決して重要な役割を演じてはゐなかつたといふことは、調書の中で、氏自らが屢々――讀むものにある種の淋しさを感ぜしめるほどに屢々――くりかへしてゐることであるが、これはおそらく事實であらう。日本共產黨の根本的な推進力は、何んといつても長い經驗をもち、勞働者階級の鬪爭そのものの中に自分をきたへあげた老將達の活動の中にあつたのだ。だからこそ、黨はあれだけの仕事をし、あれだけの影響を今日に至るまで殘してゐるのだ。日本共產黨は、ある種の惡意あるデマゴークの中傷するやうな「インテリゲンチヤ出の理論家」の集團では決してなかつた。

最後に、福本氏に關する今一つの巷間的流言――この流言は、おそらく現在のジアーナリストの低級な眼から見て、もつとも高い報導價値と煽情價値をもつてゐるものらしいが――それは、讀者も知るが如く、福本氏の「艷福」についての盛んな噂である。

黨の内外の女性の半神的尊崇につゝまれて、福本氏が「ラスプーチン的な」(これはある新聞の表現である)勢力をふるひ、行動をなしたといふのであるが、これはおそらく嘘である。全くの嘘だと斷言していゝ位ひのたよりない流言である。

氏が追跡の手をのがれつゝ轉々として居をかへ、氏を尊崇する若い女性の世話をうけてゐる間に、その中の二三のものと交渉をもつたといふのは事實であらう。しかし、これは人目をさけて、小さな家に若い異性と二人きりで暮らしてゐる場合に男女を問はず誰れし

も陷る關係で、何んら怪しむに足りない。護送の途中の汽車の中から、十數名の女性に手紙を書いたと見て來たやうに公言してゐた新聞記者があつたが、しかし、今度の發表によれば、氏の手紙をもらつたのは、中村恒子さん一人であつた。——氏は調書の中で、この中村恒子さんと結婚したと明言してゐる。おそらくそのつもりであつたのであらう。

ある同志のいふところによれば——それを筆者にいつたのは是枝恭二君だつたと思ふが——氏に關するかような流言を傳へしめるに至つた原因の半ばは、氏のまわりに集つた女性そのものの中にあつたらしい。女性の悲しむべき特性としてのロマンテイクな英雄崇拜と、虛榮心から、福本氏と論爭を交したとか、一しよに歩いたとか、同じ部屋でくらしたとか、更に進んで愛の言葉を交したとかいふことをまことしやかに、そして多くの誇張をもつて仲間に公言することが、一時左翼的女性の間に流行したことがあつた。——それがあんな噂を生んだ大きな原因だつたのだ。

福本氏のみに限らず、今度の事件の特に男女關係の部分は、新聞面で必要以上に誇大に報導されてゐる。幹部の遊興とか、同志間の戀愛とか、二三の人々の性病とか、そんなものが惡意ある誇張をもつて報導されてゐる。

これは支配階級の利益にそふ巧妙な惡煽動だ。大衆の間には、今尙ブルジョア的の貞操觀、結婚觀、戀愛道德が支配してゐる。そこにつけこんで、如何にも共產黨員が破廉恥漢であつたが如き印象を與へやうとするのだ。正しくものを見る眼をもつてゐるものにとつては、かゝる煽動は嘲笑にしか價しない。

（十一月七日）

丹野せつ子氏の事ども

市川房枝

丹野氏と私とは、立場も違ふし、境遇も異つてゐたので、非常に懇意だといふ程ではない。

たゞ私自身で勞働問題に興味を持ち、これに關係ある仕事をしてゐたので、時々會ひもしたし、講演に一所に行つた事もあるといふ位の關係である。

從つて同氏について深いことは知らないが、婦人闘士の少い婦人勞働運動及無產婦人運動に得がたい指導者として相當の尊敬を持つてゐた。

此度の事件で夫君の不幸について、氏自身も病氣で入院中ときいて同情にたへない。

私が初めて丹野氏と知り合ひになつたのは、大正十三年の秋に、足尾へ一緒に講演に行つた時であつた。——尤もそれ以前から南葛勞働組合に新らしい婦人の闘士がゐるとて氏の名は聞いてはゐた。

この講演は總同盟の鑛夫組合の主催で、同氏と私の他に今一名の婦人が加はり、三人といふ同勢で、足尾に一泊し二ヶ所で講演をしたのであつた。その間私共は一緒にお湯にも

這入つたし、床を並べて寐たりして、色々な話をした。その話の内容等はすつかり忘れてしまつたが、女らしい中にも毅然とした所を持つてゐる人だといふ印象を受けたのであつた。演説も若いながら、仲々上手だと思つた。

氏についての今一つの私の思ひ出は、私が同氏の自宅を最初に訪問した時の事である。それは大正十五年の暮れ頃であつたと思ふが、私は前から氏と協議してゐた婦人の深夜業禁止運動について打合はせるために、本所の東京合同組合の事務所に、同氏を訪ねたのであつた。當時氏は夫君渡邊政之輔氏とその母堂と共にこの事務所に住んでゐられた。

此時氏はあいにく醫者へ行かれた留守中で會へなかつたが、玄關に取次を待つてゐる間に私の眼に這入つたのは、足をふむ場所もない程に散らばつた下駄、破れてボロボロになつた障子、玄關の横に塵にまみれてゐるお勝手道具等であつた。かうした事でいつも世話を燒かれてゐる私自身ではあるが、女の人が一人でもゐたら、もう少し奇麗にならないものかなと、少なからず眉をひそめしめられたのであつた。

丹野氏が無産運動に參加したのは、大正十一年頃高津正道氏等が組織してゐた曉民會合宿所の飯たきが第一歩であつたらしい。

さうして已にこの當時、氏は野田醬油爭議の應援に、堺眞柄さん等と出掛けてゐる。

後、河合義虎、渡邊政之輔氏等が南葛で勞働組合を組織するや、氏もこれに參加し、御飯たきや運動の手傳ひをしてゐたらしい。所が大正十二年のあの大震災に際し、河合氏初め同志數名が警官のために××されるといつた大事件が突發したが、丹野氏は危くその難を免れる事が出來た。

然しこの事件は、氏には可成の刺戟を與へたらしく、震災後の十三年三月に同志渡邊政之輔氏と結婚した後、一女工となつて東京モスリンへ約一ヶ年半も通勤して勞働してゐた。これは他の婦人指導者の爲し得ない所で、氏にとつては尊い體驗とはなつたが、然し此間に氏はすつかり健康を害してしまつた。これは勞働だけでなく、運動や、勉強をも一時にしたので、それ等から來た過勞の結果であるらしい。

運動に於ては、丹野氏は、常に渡邊氏の後についてといふか、或は並んでといふか、何時も影の形に添ふやうに從つてゐた。大正十三年、南葛勞働組合初め四組合が、總同盟の關東同盟から脫會した時も、續いて、日本組合評議會が創立された時も、或は、勞農黨が組織された際も、近くは此度の共產黨事件に於てもさうであつた。殊に此度の事件に於ては渡邊氏が首領として重要な役割にあたつてゐただけに、「渡政」の妻君としての丹野氏も婦人黨員中での幹部として重要な任務につき、活躍してゐた。

尤もこの關係は見方によれば、或一部の人達のいふやうに、夫の影武者として、夫の代辯者として存在してゐたに過ぎないかも知れない。然しそれにしても氏が立派にその役目を果し得てゐるのは、氏の強い、果敢な性格以上に可成の努力が手傳つてゐる筈で、その眞正の氏の偉さを認めねばなるまい。

氏と渡邊氏との結婚については詳しくは知

らないが、勿論普通の形式的な結婚ではあるまい。從つて兩氏の結婚生活が普通と異つてゐるのは當然であらうが、丹野氏自身、所謂良妻ではなかつたらしい。然し渡邊氏も強いてそれを求めず、むしろ妻を立派な運動者、否自己の補助者とするために、可成の努力を拂つたらしい。氏自身が、毎晩、工場から歸つて來る丹野氏をつかまえては、一生懸命に敎へてゐたといふ事は有名な話である。

渡邊氏の母堂もこの點には理解があつて、いゝ嫁として、家庭的な仕事を全部引受けてゐたとの事である。

丹野氏が渡邊氏と結婚する前、今一つ二つローマンスがあつたらしい。それを語ることは、結局丹野氏がどうして無產運動に參加したかといふなぞを解くことにもなるから、私の聞いてゐるだけの事を書いてみやう。

氏は福島縣の人で、鄕里で高等小學を卒業した後、家事の手傳ひをしてゐたらしいが、十七、八歳の頃、——今から十年程前、氏の愛人といふか許婚の人といふかが入院をした。氏はその看護の任にあたつたが、努力の甲斐もなく病人は死んでしまつた。

この事が氏をして看護婦として立つべく發心せしめたとの事である。さうして看護婦となつて上京したのか、或は上京してから看護婦となつたのか、はつきりしないが、兎に角、大正十年に、同鄕人である河合義虎氏を賴つて上京し、京橋の實費診療所の看護婦となつたのであつた。

曉民會の合宿所へ行つたのは、この後らしい。氏が曉民會に行くことになつた動機即ち氏が無產運動に參加するやうになつた原因は、當時無產運動に參加してゐた前記河合氏の影響によるもので、診療所にゐる時に已にその傾向がみえてゐたやうである。

尤も氏が鄕里で愛人の看護をしてゐた當時、新聞で勞働婦人大會の記事をみて、いたく感憤したと氏自身で友人に語つたこともある。この勞働婦人大會といふのは、大正八年の十月に總同盟婦人部主催で、第一回のワシントン勞働會議に對し、婦人勞働者の要求を知らしむるために、本所の業平小學校で開催されたものをさしてゐるらしい。若しそれだとすればその司會者は私がしたので、少々奇異な感じに打たれる。

この河合義虎氏と丹野氏との間には、可成交涉があつたらしく、一時は同棲までしてゐた。然し河合氏は、例の事件で××されたので、震災後、同じグループの中にゐた渡邊政之輔氏との交涉が初まつたらしい。氏が相手として選んだ河合氏といひ、渡邊氏といひ、何れも錚々たる闘士なので、その點での丹野氏の眼は高い等といつてゐるものがある。

これ等以外にも、氏にはさうした問題がなくもなかつたらしく、可成の熱情家、純情家でもあるらしい。

この熱情は氏が最近獄中から母堂にあてた書面にもよくあらはれてゐる。

これは少々熱情とは違ふが、最近の氏には病氣のせいか、可成感情的な言動が少くなかつたといつてゐるものがある。

最近不良少年少女物語

中原啓造

一

人間と云ふものは妙なものである。善いものと味のあるものとは大抵逆に感ぜられる。ヴェートヴェンのソナタなどをもどかし氣に聞いてゐるよりはジャズの狂躁に踊り出したくなり、枯淡な墨繪に無限の崇敬を持するより漫畫の戯れに一層の親しみを持つ、「古池や蛙飛込む」侘びしさよりも「變る新宿」の方が遙かに大衆の心を捕へる。それは大衆の趣味が俗悪からとけなしつければそれまでゝあるが、さう云ふ人でも侘びや淋びばかりで滿足の出來ぬ何物かがありはしないか、人間は獸の本能に縛られ乍ら神の心を追ふものであると云はれるが、此獸の本能こそは實に味の世界である。一寸周圍の人に就いて考へても分る。交はりの淡きこと水の如く喜怒哀樂苟くも色に現はさゞる君子人には却つて頼りがなく、怒りもすれば喜びもするし羨み悲しみ人並に働く人間にはより親しみが增す。否もう一步進んで其性質が突兀として何等かの特異性を示す時、妙に人間に味がつく。殘忍ではあるが、敢行力があるとか、薄志弱行だが人情味に富むと云つた類である。因業親父だとか奸物だとか云つて嫌はれる人々に何か其意志力に於て、或は其知力に於て、新鮮味のあるピリッとしたものを感ずる、平凡なケチ〳〵した生活者よりも不具者低能兒、犯罪人と云ふ異常な種類の人間には何等かの刺戟を感ずる。之は私のやうに絕へず、やれ窮民だとか、やれ釋放者だとか、發狂者、孤兒、棄兒などと云ふ世の中のジメ〳〵した方面ばかりを事務的に取扱つてゐる者でさへもが常に新しく感ずる所であるから一般に感應力の明敏な人達が彼等に接するとき彼等に何等かの味を感ぜずには居られないと思ふ。

不良少年は何處かしら親しめるものである。親しめると云ふ言葉が惡ければ何等かの味を、含蓄を持つてゐるものであると云ふのが私の結論である。

二

不良少年はどうして現はれて來るか。斯うした社會事象に對する科學的考察と云ふものは餘りにも平凡で知れ渡つてゐるから多くを云ひ度くないが、普通に稱へらるゝ所を紹介すれば二つの原因、即ち先天的と後天的の原因に據ると云はれる。先天的原因の重なるものは遺傳である。刑事學に於ける伊太利派の大家チエザレ・ロムブローゾが犯罪人の頭蓋三百八十三個を解剖し、且五千九百七人の犯罪人の體格を調べて見た所、犯罪人には種々共通の肉體的缺陷あること、又狂人、野蠻人、犯罪人の間には種々類似の點があることを發見し、一定の體型を以て生れた者は宿命的に犯罪人となることを主張したのは人の知る如くである。彼の所謂生來的犯罪人型と云ふのは、額が著しく凹曲して、耳が突立ち、顎骨や顴骨が太く、上唇薄く、頭の形が不揃で小さく、顏付の獰猛なものである。此型に生れ付いたが最後、どんなに環境をよくし教育を完全にしても絶へず惡事に傾から、犯罪を作らうと動いてゐるのであると云ふから怖ない。斯うした生れの少年こそは憫なる哉である。又之もよく遺傳説の引合ひに出されるのであるが米國のカリカック族の家系が雄辯に惡性遺傳の事實を物語る。カリカック家の始祖マルチン・カリカックが低能な茶屋女と關係を結んで出來た子孫五代の後には低能者百四十三人、醜業婦三十三人、大酒呑二十四人、不良稼業者、私生兒、癲癇人、犯罪人等多數に現はれ、先づ普通の人間と目される者が四十八人しか無かつたと云ふ。若し子供が生れ乍らにして斯うした極端な不良種として此世に出て來たならば、もうどうにも仕方がない、生來的の不良少年、總ては救ふことの出來ない犯罪人である。斯く遺傳の力の恐しいことを知つた時優生學等の働に多大の期待をかける。

不良兒發生の先天的原因としては遺傳の外に受胎當時に於ける兩親の不節制、花柳病、アルコール中毒、出産當時の異常等が擧げられるが詳細な説明は略することゝする。

次に不良少年發生の後天的原因と云ふのはつまり少年の生ひ立ち境遇である。其最たるものは何と云つても家庭生活の變則と云ふ事であらう。嘗て川越少年刑務所に於て千二百九十三人の少年受刑者に就いて犯罪當時に於ける兩親の存否を調べた所

父母共存者	五四〇人	四一・八%
兩親共ニ無キ者	二一四人	一六・五%

父母ノ一方ナキ者　五三九人　四一・七%

と云ふ數字を示した。卽ち、之等少年の約六割は完全な兩親の無いものである。滿十四歲から二十歲迄の子供であるから兩親の共存してゐるのが常態であらう。それに此顯著な數字は何を意味してゐるか、其冷い表示の內に無限の劇的事實を含んでゐる。家庭生活に於ける愛の缺乏、それから生ずる樣々の人生劇は不良少年の發生となつて幕を引く。兎に角家庭の溫みと云ふものを知らずに育つ子供程慘めなものはない。然し物事は何でも極端に逆を行くと又行詰るものと見える、親の盲愛が少年を不良化すると云ふ事實は數としてはさう多いものではないが、私は實に恐入つた事實を經驗したことがある。それは或る下町の豪商の一人子息である。其父親と云ふのが結婚十年位してやつと一粒種の男の子を得た。さあ父親が可愛くて堪らず、自分が待合や料理屋に遊びに行く時でも必ず此赤ん坊を抱いて出かけ、藝者や酌婦に「どうだ可愛い子供だらう」と抱かしたりするのが父親の誇りであつた。母親や召使の者が少しでも子供の氣に逆ふことをすると「子供に蟲が起る」と云つて父親は眞赤になつて叱りつけた。子供が我儘の仕放題をやり、店の者や女中を毆つたり、建具や家具を打毀はすのを見て、父親は「子供は元氣に育てなければいけない」と云つて喜んでゐた。此邊迄はまだ宜しい。父親の人の好さと子供の惡君振りが微笑まれる許りの人情話である。所が子供は何時までもいゝ子にはなつて居らぬ。早くから父親に連れられて脂粉の薰や若い女の肉の匂を吸つてゐた子供は既に十三四歲頃から性に目醒め出した。始めの內はやはり從僕の父親に「遊びに行かうよ」とねだる位であつたが、性の遊びに親爺なんか面倒臭くなりかけた。母親の紙入を持出したり、店の者共に軍用金を用命したりして御微行でカフェーや惡所に通ひ始めた。父親も「これはいかぬ」とは云ひ出したが彼はどう云ふ處置をしたか、「やつぱり年頃なんだから口を塞いじや毒だ。押へつけると惡いことを覺えるからに」と云ふので有難い親馬鹿は或る藝者屋から十四ばかりの美しい半玉を根引させて山の手の別宅に二人を同棲させたものだ。そして若夫婦の新世帶を訪ねる樂隱居の氣樂さで、此お雛樣達のまゝごとを時々見舞ふのが父の樂しみであつた。此狀態が暫く續いた。落着かない青春時代の少年がどうしてこんなことで納まつてゐられるか、少年は間もなく此の生溫い幸福に飽きてしまつた。十六七から一人で待合や料理屋に大盡遊びを始め、多くの女達からチヤホヤされるのが無上に面白くなつて來た。段々智慧がつくに從つて、親の小切手を切る、手形を振出す、印形を持出すと云ふ始末。月に二千や三千の金は平氣で使へるやうになつた。

親族の者や親しい知人達迄が心配を始めて親爺を責めたので流石の好々爺も何とかしなければならぬと思ひ出した。或る社會事業家に頼んで北海道のさる少年保護施設に保護方を依頼したのであるがこんな取扱ひを一度も受けたことのない少年は非常に怒つて北海道を逃げ出して歸宅し親父を叩き殺してやると云ふ騒である。浪費は一層募る許りである。父親も弱り切つてしまつて何とか方法は無いものかとの相談を持掛けて來たのであつたが、之等は親の盲愛が子供を不良化した極端な例と云へよう。

三

不良少年と云ふとすぐ軟派と硬派と云ふ言葉が云ひ古されてゐる。軟派と云つても性的不良行爲の少年ばかりを指すのでなく、家財の持出しとか、詐僞賭博などと云ふ文化的の不良少年を包括してゐる。之に反し硬派と云ふのは恐喝、暴行、喧嘩、殺傷など野蠻的行爲の不良少年を云ふ。明治から大正の初期にかけての不良少年と云へば、直ぐ此種硬派の不良少年を連想した。彼等はそれぞれ徒黨を組んで何々組何々團と稱し、一種の俠客氣取りでゐた。現在の不良少年等が性的享樂を樂しむやうに彼等は喧嘩其者を樂むだのである。で、弱い少年等を脅して金錢をせびつたり、他人に態と突當つて言ひ掛りをつけたりすることもするが、時々彼等團體間の縄張り爭から物凄い大喧嘩をすることがあつた。喧嘩に勝つことが無上に嬉しいのである。英雄崇拜の少年時代としては誰しも多少共通な心理である。之等硬派の連中が英雄色を好むなどと云つて遊廓に上つたり、一種の軟派的行爲を兼ね行つたのであるが、それはまあ云はゞ無邪氣なものであつた。然るに近來は漸次之等硬派の少年は影を潜めて來た。今日でも血櫻團、インディアン、白梅團、ホワイトジャックなどと云ふ名稱は殘つてゐるが、其團員の範圍も不明瞭になり、又昔のやうな團體的不良行爲は少くなつて來た。

之に反し所謂軟派の不良少年は著しく其數を増して來たやうである。之が不良少年の近代的傾向と云へよう。軟派に就いては後段に説くこととして、唯此軟派硬派と云ふ分類法である。之は確かに實質的な分け方には相違ないが偖て實際にどれ迄が軟派でどれ迄が硬派かと云ふことになると甚だ漠然たるものである。例へば板の間稼や空巣狙の常習となつてゐる少年は軟派に入れても硬派に入れても除りピンと來ない。要するに軟派硬派と云ふも唯觀念上の問題である。で警察署や其他の少年保護施設の事務的分類法としては年齡の標準によるのである。それは未成年の間を十四歳未滿十八歳未滿二十歳未滿に三分類する。

此分類の實益は主として法律上の取扱ひの差に依るものである。感化法と云ふ法律は八歳以上で不良行爲を爲し又は爲す虞のある者を感化院に收容して感化遷善することになつてゐる。所が茲に所謂不良行爲と云ふ言葉であるが、之は決して常識的に云はる丶「惡い行ひ」と云ふやうな意味ではない。よく「小供の惡いことをするのは元氣のある證據だ。それを彼是云つてはいかぬ」などと云ふことを聞かされるが、「さうですか、子供なら人を殺したり、放火したり、泥棒しても構ひませぬか」と反問したらそれまで宜しいと徹底出來る人は少いだらう。「そりや殺人や放火は犯罪ぢやないか。そんなことまでは許せぬさ」と來るに違ひない。其處である。感化法の不良行爲と云ふのは實質的には犯罪と同一の內容を持つた行爲である。然るに現在の刑法の立前では十四歳未滿の者は犯罪能力が無いと云ふことになつてゐるから十四歳未滿の者の行爲は同じ泥棒でも人殺しでも犯罪でなく不良行爲であると云ふのが法律の理屈である。斯樣に現在の感化法の不良行爲と云ふ用語を適用して取扱つてゐる少年は單に亂暴だとか惡戲が激しいとか云ふ程度の單純な惡太郎でないことに注意しなければならぬ。然し十四歳未滿の者の行爲は刑法では犯罪でないからお構ひなしと云ふことになると若し刑法の外に何等かの制度がないとすれば警察や檢事局は盜癖や放火癖のある子供が居ても片唾を呑んで其十四歳になるのを待構へ、十四歳になると、それッと許りに之等の少年を縛らねばならぬことになる。此斷然たる犯罪年齡で思出すが白洲に据ゑられた八百屋お七の哀れにも婀娜なる姿に心を引かれた奉行の中山解勘由が「お七、そちは十五であらうがな」と水を向けたのにお七はそれと氣付かず「い丶え私は十七でござんす」と言ひ放つたのでどうしても許されず江戸中引廻しの上火刑に處せられたと云ふ江戸巷談がある。其眞僞の程は別として若しあの場合お七が「左樣でございます、十五で御座います」と云へば所謂不良少女で犯罪人でないから「感化院に入院申付く可き處目下感化院の設備無之間お上の御慈悲を以て特に歸宅差許」され、あんなに江戸中を騷がさぬでも濟んだであらうが、やつと犯罪年齡に達してゐたばかりに引廻しの上火焙に逢されてしまつた。斯く一定の犯罪年齡を設けてそれ以上の者は斷々乎として斷罪するし、それ以下の者は絕對にお構ひなしとする制度の不合理なるは云ふ迄もない。現在の刑事學の思潮から云ふならば犯罪者と云ふ者は普通の人間が一寸した出來心で惡事を働くと云つたやうな偶發的犯罪者は比較的少く、大部分は先天的若くは後天的の性格犯罪者である。我國に於ける感化事業の權威者留岡幸助氏が嘗て北海道空知の集治監に勤めて居られ

た頃八百餘の囚人に就いて其犯罪の原因を調査して見た處、其大部分が、少年時代からの不良性格者であつた。之が氏の感化事業に着目した抑々の動機であると云はれてゐる。斯樣に一律な犯罪能力發生年齡の以前に於て何等かの對策が講ぜられなければならぬ。その對策の重なるものが卽ち感化制度である。不良少年の年齡による分類法に於て十四歳未滿を一段としたのはつまり感化院入院に適する年齡階級と云ふ譯である。

次に十八歳未滿を一段とした譯は、刑法は十四歳未滿は木戸御免だが苟くも十四歳を超えたならば何人も法の前には平等なりとして其思慮分別其他の事情にお構ひなく斷罪するのが立前となつてゐるが、其不合理なるは依然として殘る譯である。八百屋お七の場合にしても十五ならばお許しある者を一つか二つ年が違つたからと云つて江戸中引廻の上火焙、そりやお上の胴慾と云ふものぢやと喘いた頭のよい人もあつたことであらう。此樣に假令犯罪年齡には達してゐても斷然刑罰に處すると云ふことをせず或程度の緩衝地帶が必要である。少年法は此必要に應じて生れたもので其第一條に於て十八歳に滿たざる者を少年と呼ぶことにし、第二條に於て少年の刑事處分に就いては特別の取扱ひを爲す旨が規定されてゐる。少年審判所、矯正院と云ふものも少年法必然の結果として出來た制度で共に十八歳未滿の少年を對象とする。

十八歳以上二十歳未滿は特別な法律上の取扱ひはないが前二者に對して其他と云ふ意味合で事務上の分類を受ける。

今、昭和三年中に於ける警視廳管下の不良少年の數字を見るに、男七千四百人女八百十九人計八千二百十九人となつてゐる。で其年齡の分類をすれば、

	十四歳未滿	十八歳未滿	二十歳未滿
少年	六二二人	三二八二人	三一八人
少女	一〇三人	三九八人	三四九六人
計	七二五人	三六八〇人	三八一四人

と云ふことになつてゐる。

因に不良少年院内保護の段階は、

一、各種の民間保護團體
二、府縣立感化院（若くは代用感化院）
三、國立感化院（武藏野學院）
四、矯正院（多摩少年院、浪花少年院）
五、少年刑務所（全國八ヶ所）

と云ふ順序で不良性の濃度に應ずる仕組みとなつてゐる。

尙專門家には知れ切つてゐて、素人に一寸知られないことがある。これは感化院と云ふ名稱であるが之には決して[illegible]に對し

てはならぬと云ふことになつてゐる。例へば東京感化院などと云ふ名稱は用ひてはならぬ。曾て素人の社會事業視察團が巣鴨の家庭學校を訪ねて色々其内容を聽取した後其一人が「それでは此處は感化院のやうな所ですね」と云つたことがある。成程家庭學校の如きあれ程有名であり乍ら、尙斯う云ふ質問が出る程其本體がぼかされてゐるかと感心したことであつた。

四

不良少年の世界には彼等特有の文化と認むべきものがある。其最も興味あるものは彼等の間に取交はされる隱語であらう。

今其例を擧げるならば、

パクリ　恐喝
タカリ　一種の脅迫であるが極めてやんわりと薄氣味惡くやる奴
渡りをつける　喧嘩を吹きかける
タタム　毆る　殺す意味をも含む
ノス　右同
ハンベル　單に毆る
ハンドル　女の手を握る
キツパライ　無錢遊興
ズラカル　逃る
ノビ　こそ泥
ジミ　地上の落し物を搜し歩く商賣
ジグ　乞食
ホリ　火葬場や屠畜場等で金物等を拾ひ歩く商賣
タイガラ　紙屑拾ひ
サプリ　野宿者
フリカン　二十錢
カチカン　三十錢
ニブ　五十錢
ハイチヤワ　一圓
ズカリヨウ　十圓
チンピラ　不良少年
ズベ　不良少女
テカ　刑事
ポリ　巡査
パンコ　交番
エンコ　公園
ハクイ　良い
セコ　惡い
タレ　女

等々である。

「あのタキ(馬鹿)俺に十日も前から約束してゐやがつて、まだ持つて來やがらねえ、エンコで出會したからハシタタンちやふぞつてパクツタもんだから今日ニブ二丁よこしたよ。鴨にして置いてズカリヨウはせしめてやらあ」

之等は彼等の隱語を成可く澤山使つた例だが普通にはこんな冗長な口を利かぬ。「ガツチリ　シケちやつてシャリも食はねえ」とか「手前いつからグレちやたんだ」「あの米搗バツタ　めつぽうハクいぜ」と云ふ類である。不思議に彼等の言葉はぐつとしまる感が來る。近代の高速度テンポの感覺は夙くに彼等の社會に發達してゐるやうだ。

硬派不良少年の持つ兇器の中特徴のある物は鎖帶や目つぶし鐵であらう。鎖帶はズボンのバンドとして幅一寸ばかりの鎖で編んだ帶を忍ばせて置いて喧嘩の際に之を振つて戰ふのである。善良な家庭に育つてどんなに大人しく見える少年でも之を持つてゐたらばもう油斷がならぬさうである。目つぶし鐵と稱する物は丁度拳骨形の金物で喧嘩の際相手の眉間に最初の一擊を食はせるものである。

彼等の服裝はだらしないこと、風變りなこと、兎に角、几張面と云ふ要素を全然抜きにすることである。グレやヅケと稱せらる、下層の仲間では髮を蓬々させ着物は懷中をふくらませ前や裾を合はさず如何にも監督者の無いことを表はしてゐる。又稍々上級のモダン型の連中はオールバツクやオカツパの頭に濃厚な色合の青、紅等の洋服をつけ、上着はボタンで下を細く締め、セラーパンツにスパツ靴と云ふ取り合はせ、少女は例の思切つた斷髮にケバ〳〵しい着物又は洋服にとつつきの惡いオペラバツクやヴァニテーケースを提げてゐる。彼等の流行は商店の廣告やショウウインドウの色や形から思ひ付きの取合はせを持つて來るのである。其雜然として調和が惡く恰も種々な商品の寄せ集めに似てゐるのも故ある哉である。彼等の身のこなしと云ふものが又此廣告的服裝に似つかはしくしやなりと不安定なものだ。それは決して西洋流の上品なになびやかさでなくだらしなさの一語に盡きるのである。

之は警察等で不良少年を取扱つてゐる人々の觀察であるが硬派の不良少年から喧嘩を賣られるのは大抵同樣のだらしない服裝をしてゐる連中であると云ふ。不良少年の二三人連と善良な少年の二三人連が行逢つた。善良な方の一人が帽子を横つちよにかぶつてゐた所から不良組の一人が「おい其帽子を直せ」ときつかけた。「よけいなお世話だ」[illegible]一戰だ

開かれた。之は偶然の云ひがゝりのやうに思はれるがさうばかりでもなく一體に服裝のだらしないと云ふことは彼等の目のつい所であるらしい。敢て自分等世界の領分を冒されたと云ふ氣持でもあるまいが妙な現象である。

五

近代の傾向として硬派が漸次影を潜め軟派が擡頭して來たことは前段で述べたが最後に之等軟派の概況を觀察して見よう。

軟派と云つても色々あつて必ずしも性的不良行爲を爲す者許りを云ふもので無い。彼等の内實につまらない生活をしてゐる者は東京ならば淺草、大阪で中ノ島邊をうろついてゐる浮浪少年の群である。彼等は性來の放浪癖者、又は田舍から逃げ出して來た者、或は眞に天涯の孤兒共である。飲食店の食ひ殘しやゴミ溜の棄てたものを拾つて食べてゐる。不良行爲と云つてもモサリ(掻拂ひ)や寐轉がし(ベンチに眠つてゐる人の物を盜むこと)位のものである。いつぞや淺草で大人のグレが倒れた石塔に醉ひ伏してゐた時、之等の少年グレが蟻のやうにたかつて來て、その懐中物は勿論のこと着物迄剝がして持つて行つてしまひ、翌朝目をさましたグレは素裸になつて前のものまで外されて往來近くに轉つてゐたので流石世俗を超越したグレ先生も大いにマゴ〳〵したことがある。兎角、之等少年共の行爲はユーモアに富んでゐる。

軟派不良少年の純粹な者は性的享樂兒である。銀座新宿等を徘徊する所謂モボ、モガと稱する類には得て之等の者が多い。尤も所謂モガ、モボ連の全部が軟派不良少年であるかと云ふに決してさうでない。あのモボ、モガの正體は畫家、彫刻家、文士、活動俳優、文學青年、學生、ダンサー、モデル、女給、女學生等であるが、其他一寸した氣取屋で乙に澄ました服裝をしたがる者、常に流行を追つてゐる者、何かエキゾティックな趣味に溺れてゐる者があり、之等全部が不良青少年でないことは勿論である。

性的不良行爲に耽る青少年と云へばすぐ性的享樂に耽るばかりでなく良家の娘達を誘惑して金品を捲き上げることを業としてやつてゐる者を連想する。固よりそれも多い。或る大學の學生、或る活動俳優の如き其容貌其名聲等によつて多数の婦女を誘惑し、山積みになつた戀文の中に蹲まり乍ら、捲上げた金品で衣食してゐる冥利の盡きた者も居る。又不思議に此種の者には誘惑の技術若くは魔力があつて自然と婦女を引きつける。普通の勤人等でいくらも之等より上品な容貌の人がゐるが、却つて斯うした隙のない人品の紳士には婦女の方からも寄り付かない彼

等何處か間の拔けたハイカラ連が散歩でもしてゐると忽ち銀座雀のさゞめきとなる。此種の氣分がなくならぬ以上此連中は永久に色と慾との兩方を滿たせ得る譯だ。然し軟派不良青少年は文化史眼を以て見るならば近代の享樂主義文化の極左翼を代表する物である。それが現代の社會からは不良と云ふ極印をつけられてゐるだけである。一般的な享樂主義が軟派不良に於て其急先鋒を顯はしてゐる譯である。物質的には惠まれて、色や慾の手段とする必要がない者迄も此性的不良行爲と云ふ高濃度の享樂を追求することに異常の興味を持つ者が多くなつて來た。例へばダンスホールで之ぞと思ふダンサーの前で「僕今晩はおそくなつたから青山の邸へ歸るのは止めようか知ら」と大層なことを云ふ――卽ち青山のさるお邸の若樣であるらしく見せかけ今晩は自由であることを仄かす。忽ちダンサーが氣を取られる。此處等が興味の始まりである。銀座のモガ中のクヰーンなる一少女の如き父は相當な會社の重役を勤め自らは某女子專門學校を卒業し容色調ひ其敎養と云ひ家庭の社會的地位と云ひ何等不足はない筈の者であるが折々銀座街道に現はれて氣に入つた紳士を喰はへ込み、散々買物をせびつた後待合に連れ込み、急に假病を云ひ立てゝ逃げるのを手としてゐる。又欺かれることを承知で此女に會ひ度がつてゐる甘い紳士も居るやうである。

性的享樂の最高濃度に達した結晶と見るべき者が諸々に現はれる。先づダンスホールである。大正十年の末頃京橋常盤町に舞踏研究所として設けられたダンスホールが今や三十餘個所になつてゐる。それからカフエー、寧ろバーの繁昌して來たことである。不景氣不景氣と云ふが其不景氣は全部バーに取られる感がある。それから不良少女團の發生である。彼等は重に女學校中途退學等で一團となつて異性の誘惑萬引等を行ふ。今まで檢擧された團體で黑薔薇團紫團などと云ふものがあるが少女だけに陰性で明瞭な存在が摑みにくいやうである。其他ステツキガール說が一時評判であつたが之は實在しない、文藝家達の幻であつたらしい。然しストリートバードの出さうな雰圍氣になつて來たことは確かである。

現代の日本は一面陰慘深刻な社會改造的氣分の鬱積と反面プチブルの頽癈的氣分の橫溢に押され眞面目な若人は益々狹く、不良な少年は愈々荒み、次の時代を待つてゐる。維新前に於ける志士の潛行と江戸武士の頽廢とがちらりと頭に浮ぶ。

革命十二年間のソヴエート文學

茂森唯士

一

十月革命後、革命前における露西亞作家の壓倒的多數は、反革命の陣營に下つた。これは何等怪しむに足らぬ。即ち一九一七年に至る最後の十年間の露西亞文學は、先づ第一に、貴族――ブルジョアジーの文學として、支配階級と密接に結びついてゐたのである。たゞ作家中の或者達が小つぽけな反專制主義(ツァーリズム)を以て任じてゐたに過ぎぬ。アンドレーフ、メレジユコフスキイ、クープリン、ブーニン、ザイツエフ、バリモント等は、國外の「白」の陣地に下つたのである。ソログーブ、アンドレイ・ベールイ、アフマートワ、セルゲエフ・ツエンスキイ等は、國内亡命者の内部に遁れ、革命から隔つた平凡な生活の一隅に蟄居し、耳を蔽ひ目を閉ぢた。ロシヤ文學は社會的變動の外に立ち、階級關係から超越するとした文士や學者連のお喋べりは、しやぼんの泡たるに過ぎなかつた。

たゞ舊ロシヤ文學の僅かな一部分だがプロレタリア革命と結びついた。セラヒモーウイッチ、プリユーソフ、ゴーリキイ其他がそれである。アレクサンドル・ブロックは有名な詩「十二」を書いた。それは十月革命の勝利に捧げられた讃歌ではあつた。しかしそれは革命を百姓一揆の如き原始的反亂として理解するにとどまつた。ウラヂミル・マヤコフスキイを闘將とするロシヤ未來派のグループがプロレタリアの仕事に奉仕した。民族主義的農民のイデオロギイを持つた詩人の一團、エセーニン、オレーシン、クルイチコフ等が革命の初期の段階に向つて叫びを上げた。プロレタリア詩の旗を眞先に掲げたのは、勞働詩人の團體「鍛冶屋(クズニツア)」で、ゲラシーモフ、キリーロフ、フイルプチエンコ等の顔振れがその中に見出された。戰線及後方陣地に在つては、古くからのボリシエヴイキ黨員で、天才的な煽動詩人デミヤーン・ベードヌイとその一派が、高らかに行進曲を奏でた。ベードヌイは現實の闘爭の必要に立つ凡ゆる題目を詩にした。國内戰時代のソヴエート文學から、もしも彼をマイナスしたら、それはどんなにか貧しいものになつたらう。ソヴエート國家の他の民族、例へばウクライナ、白ロシヤ其他にあつても、

革命の初期の文學は大體大ロシヤと同樣な狀態に置かれ、舊支配によつて遇されることの厚かつた知名作家の殆んど全部は、民族的反革命の走狗となり終つた。

ソヴエート文學が急激に擡頭し出したのは、國内戰爭（一九一七—二〇年）の終熄後であり、即ち、文學の舞臺を目ざして、所謂革命の同伴者と呼ばれる、小ブルジョアの若い作家群が登場して後のことであり、また他方に於てはプロレタリア文學が、すべての新しい地歩乃至新しい世界を獲得しながら、從來の宣言的文學から價値高き藝術的創作に移行して後のことである。

二

藝術的文學は、大衆に對する働きかけの、强力なる手段の一つとなつた。作家は彼を圍繞する實生活の中から、材料を汲み取り、その材料を自らの意識及び自らの世界觀によつて濾過しながら、讀者の意識に向つて働きかけつゝある。

「同伴者」の名稱を持つ作家群は、反革命とは嚴格に區別されてゐる。彼等は云ふまでもなくソヴエート政權の味方に立つてゐるからである。だが彼等は十月革命の本質を十分に眼を開いて見得ず、その中に「民族」的動亂、「民族觀念」の勝利を見た。即ち彼等は、革命の指導的役割がプロレタリアートに屬するものであることを、十分に理解し得ないか、又は全然理解し得なかつたのである。小ブルジョア・インテリゲンチヤとして限界づけられてゐる彼等は、自らの主要なる注意を、農民的本性、パルチザン、農民の自由等々の表現に向つて集中したのである。彼等は西歐文化の壞敗を嘲笑した。彼等は舊ロシヤ・インテリゲンチヤの「民主々義的理想」の破産を暴露した。彼等は革命前までつゞいたロシヤ人の生活の墓場に、墓標を打ち込んだ。すべてこれらのことは、フセヲロード・イワーノフ、ピリニヤーク、フエージン、バーベリ、エレンブルグ等の作品の中に明瞭に觀ることが出來る。それ故にも亦「同伴者」はソヴエート文學の初期の段階において、決定的役割を演ずることが出來たのである。併しながら彼等の曖昧な、二重人格的な、中途半端な立場は、革命の全線的進行につれ、彼等の間に分化作用を呼び起さざるを得なかつた。戰前の水準への復興が段落を告げ、文化革命が開始されたことによつて、階級鬪爭は一層尖銳化した。新經濟政策の地盤の上に發生した新ブルジョアジーは、文學を通じて反動的な戰ひを開始した。このことが同伴者の分化と、その一部の病的過程とを益々激化せしむるに役立つたことは無視しがたい。

革命過程のソヴエート聯邦においては、藝術的方面をも含めてブルジョアジーには言論の自由が與へられてゐない。それ故に彼等は假面をかぶり、自己を隱蔽しつゝ文學的表現を取らなければならなくなる。さうした新ブルジョアジーの本質を内包せるものには、ザミヤーチンの革命を嘲笑せる凡ての短篇、白色運動を理想しつゝあるブルガーコフの作品、イリヤ・エレンブルグの數種の作品等を例に上げることが出來る。新ブルジョアジーのイデオロギイは、眞實なる凡ての同伴者に對して（また個々のプロレタリア作家にさへも）壓迫を加へ、これ等

を無理に嵌め込んだ不具なものたらしめやうとしてゐる。例へばフエジンはその中篇小説「トランスヴーリ」において、新經濟政策の地盤の上に富農の成長しつゝある形相を與へてゐる。著者の描寫によれば、富農がソヴエート聯邦國民經濟工業化運動の唯一の誘導者となつてゐるのである。かくの如くして、左翼的な同伴者の創作においてすら、文化的・社會主義鬪士の形相が個人的企業の主人公であり、資本主義的蓄積の代表者の形相を取り代へられてゐるのである。

一聯の同伴者群の創作は、或種の反動氣分の復活として特質づけられ得るところの、危機の時代を今通過しつゝある。レオノフの「超階級」的人間に關する小説、ロマノフの性問題に對する有害なる見解を盛つた諸作品は、その特色的なものである。此種同伴者の描く作の主要人物は、革命における無用な人間になつてゐる。そして又同伴者連は勞働者社會の描寫に無力であること、彼等の描かんとするコムムニストの形相は、その殆んど凡てが失敗に終つてゐること等は、その特色である。

同伴者の左翼は益々力を得つゝある。彼等はプロレタリアートに接近し、積極的に社會主義建設事業に參加せんと努力してゐるのである。その中にはチホーノフ、ラウレーネフ、スロニムスキイ、オレシ、構成主義者の一團（エヌ・アグネフ、エー・バグリツキイ、エス・セリヴインスキイ）並にマヤコフスキイ等「レフ」（左翼戰線）の名前を上げることが出來る。

左翼同伴者と一言に云つても、彼等は凡ゆる點で一致してゐるのではない。否彼等はソヴエート國家に生成しつゝある政治的・經濟的・社會的過程に對して、各々異つた度合の理解と並にプロレタリアートに對する各々異つた度合の接近とによつて相互に相違してゐるのである。曾ては同質であつた「同伴者」群が、次第に分化し來り、其分裂は最近に至つて益々熾烈を加へてきたことは少しも異とするに足らぬ。それはソヴエート國家に於ける經濟・文化の全線にわたる階級鬪爭の激化が、文學の世界にその反映を見出したものであり、一面同伴者の屬する小ブルジヨア・インテリゲンチヤ層の階級的特質に因由するものである。

三

國内戰爭の時代においては、プロレタリア文學は極めて貧弱なものであつた。此時代には最も端的な形式としての詩が絕對的に君臨してゐた。所謂「プロレトクリト」に於ても「鍛冶屋」のグループにおいても、詩は高らかな叫喚として、だが非現實的な、遠大な尺度のものとして、「宇宙主義」的なものとして認められてゐた。そこには生きた人間は彼等の視野から洩れてゐた。

一九二一年「鍛冶屋」のグループから「十月」の一派が分離した。この分離派は「若き親衛隊」の一派と提携して、全聯邦プロレタリア作家同盟（略稱「ワップ」）結成の基礎をつくつた。「十月」派は何等粉飾することのない、生きた人間の表現に努力した。

新經濟政策實施（一九二一年）後の二、三年間に十月革命後最初ともいふべきプロレタリア的散文が誕生した。リベジンスキイの「一週間」（ネデーリヤ）、セラヒモーウイツチの「鐵の流れ」（ゼレーズヌイ・ポトーク）、フルマーノフの「チャパアエフ」等がそれである。

若きプロレタリアの詩も亦擡頭した。その主なるものにはベズイメンスキイ、ジヤーロフの作がある。

ソヴエート聯邦のプロレタリア文學は、現在においては偉大なる藝術的作品を持つてゐるが、しかし當時にあつては全體としてみて同件者のそれに比し遙かに貧弱であつた。同伴者は言語の技巧的驅使において優れてゐた。この言語の技巧はプロレタリア作家にとつては尙今後においても殘された問題である。

今日ではソヴエートのプロレタリア文學は、量的に著しく擴大し、質的に著しく優秀となつた。そしてそれと同伴者一派の文學との特異點は、作品の中心人物が革命に用の無い人間ではなくて、社會主義の積極的建設者であることである。又プロレタリア・レアリズムをもつて、その根本的傾向とすることが益々鮮明化しつゝある點や、作品と時代との積極的な結びつきが、他の如何なる作品におけるよりも濃厚である點など、その著しい特徴である。

プロレタリア文學の中には、國内戰爭の時代を描寫することについて大なる注意が拂はれてきた。例へばセラヒモーウイツチの「鐵の流れ」、ファヂエフの「壞滅」（ラズグローム）、フルマーノフの「叛亂」（ミャーチェジ）劇文學ではトレネフの「リユボフイ・ヤロワーヤ」等はその代表的なものである。國内戰爭を主題とする小説乃至短篇は、新經濟政策實施の當初二、三年間において最も優勢であつた。現在に於ては、その主題が、建設の時代、建設の方面に轉移してきたことが看取される。

プロレタリア作家中の一部は、農村を描寫することに活動しつゝある。卽ちコロボフ（一九二八年に死去した）の「デマ・パユーノフ」及び「カーチヤ・ドールガ」、ア・ドロゴイチエンコの「ボーリツシヤヤ・カーメンカ」、カラワーエフの「メツドウエジヤツノエ」「木村工場」及び「外庭」、エム・ルーズキンの「農夫」、ロギノワ・レスニヤクの「荒野」「曠野の馬群」パンフエロフの「茜草」等がこれである。昨一九二八年リベヂンスキイ等のプロレタリア作家團が、現在のロシヤに急テンポをもつて發達しつゝある社會主義的協同農場（コルハズ）及國營農場（ソウハズ）を作品に表現するため、高架索に視察旅行を行つたことは、ソヴエート政府の標語たる「農村に面を向けよ」に應じたものとして興味がある。

プロレタリア作家中の大多數が、勞働者の生活、プロレタリア都市の描寫に努力しつゝあることは云ふまでもない。これが例としては、エム・チユウマンドリンの「ラブレ工場」、グラドコフの「セメント」、エヌ・リヤシコの「溶鑛爐」、セメヨーノフの「ナターリヤ・タルボワ」、イ・ジーガの「新しい勞働者」等をかぞへることが出來る。劇作家としては昨年から一九二九年のモスクワ劇壇に大評判を呼んだキルションの「軌道は轟く」（ドン炭坑の實生活に取材したもの）がある。多少毛色の變つたものとしては、主として黨の黨内生活を描いたリベヂンスキ

イの「執行委員」、「反轉」、海上生活作家たるノーヴイコフ・プリボイの「凹所」、共產主義の自覺者及び反自覺者に關する問題を扱つたウエ・パフメチエフの「マルチンの犯罪」、廣汎にわたるドン・コザックの生活を展開したエム・ショロオフの「靜かなるドン」等がある。

近年プロレタリア作家にして、從前に於ける事件の一面的描寫の傾向を克服して、階級的及び個人的生活要素の複雜なる交錯を分析せんとする傾向が目立つて現れてきた。それ故に、例へば、フアヂエフの「壞滅」は、極東に於けるパルチザン戰を描くことによつて、革命の火の中に如何に新人が創られつゝあるか、またそこに於て如何に新しいものが舊いものと結合してゐるかを、示現してゐる。

プロレタリア文學の基本的スローガンは、階級の代表者としての社會主義建設者たる、生ける人間の心理的表現であると見られるやうになつた。

プロレタリア文學は最近著しい進捗をかち取つた。そのテーマの取扱ひは擴張され、また深められた。作品の藝術的技巧は一層完成の域に近づいた。この結果プロレタリア文學に對する需要も增大したのである。

サラリーマンである讀者、インテリゲント、「其他」の間にあつては、同伴者一派の作品に對する需要が優勢であることは事實である。しかし勞働者の讀者は、斷然、プロレタリア作家の作品を支持し、益々根強くそれを要求しつゝある。勿論プロレタリア作家は、今日までのところ尙すべてにわたつてその支配的地位を完全に確保してはゐないかも知れない。しかも既に今日では同伴者一派の文學がプロレタリアのそれに優つてゐるとは、如何にしても云ひ得ないところとなつた。

四

廣大にわたる舊ロシヤ帝國内の諸民族に對する抑壓を撤廢した十月革命は、專制政治によつて抑へつけられてゐたそれら民族の文學的創造と發展に對しても、力强い刺戟となつた。

ウクライナ及びジヨルジヤの如き地方に於ては、帝政時代に於ても文學は存在してゐたのであるが、それは政治的な理由によつて、常に不具にされ、その正常なる伸張を沮まれてゐた。

だが革命當時に於ける舊ロシヤ諸民族の文學上の狀態は、ロシヤ文學のそれと酷似してゐた。卽ち凡ての舊作家は自からの運命を民族的反革命の運命と結びつけてゐた。これが例としてはウクライナに於ける文學者ウイニンチエンコをあげれば十分である。彼が國內戰にあたつて、ウクライナ反革命軍の首領ペトリユーロ將軍の陣營にあつて、ソヴエートに敵對したことは、よく知られてゐるところである。併しながらプロレタリア革命の勝利が確保されるに至つて、舊作家中の多數のものは、幾多の動搖の後にソヴエート政權に歸服したのである。その中にはジヨルジヤ及びアルメニヤの作家の多數が見出され、又白ロシヤではヤコブ・コーラス、ヤンカ・クーパラ等の顏振れがあつた。

地方的なインテリゲンチヤ指導者の出現と、解放されたる大衆の文化的擡頭とは、多數のソヴエート聯邦民族作家を輩出した。革命前に

於ては文學を持たず、而かも部分的には文字の自由すら持たなかつたチユワシ、中央アジヤ、北部コーカサス、東部諸地方の小民族も、今日ではそれ自身の文學を持ち、作家を持つてゐる。

專制政治によつて抑壓されてゐた民族文學には、小ブルジョア的傾向が多分にあつたが、同時に又革命的傾向も强まりつゝあり、プロレタリア作家が漸次彼等の間から相當の水準に達した藝術的文學をもつて出現しつつある。マキシム・ゴーリキイは一九二九年六月六日モスクワに開催の全ソヴエート聯邦農民作家大會にて一場の演說をなし「人類の全史を通じてソヴエート聯邦が十年間に示したほど廣汎なる大衆を藝術に向つて呼びさました時代はない。藝術にその代表者を送り込まないやうな如何なる職業の唯一つでもがあるか！」と云つてゐるが、この藝術といふ言葉を文學に、職業といふ言葉を民族にそのまゝ置きかえることが出來る。

ソヴエート聯邦內には、また白色テラーの國家から逃れて來た多數の革命的作家がゐる。ヘンガリーの作家ベーラ・イレッシ、マーテエ・ザルカ、ギダッシユを始め、ラトウイヤ、エストニヤ等の作家がこれである。モスクワには「革命文學國際局」が置かれてある。

五

現在に於ては次の如き、ソヴエート作家の大きな合同體が存在してゐる。

一、ソヴエート作家同盟——プロレタリア作家、農民作家、小ブルジョア作家等、現ソヴエート聯邦の凡ゆる階層に屬する作家の團體を統一して一九二七年政府の肝煎により組織されたる一大聯合體で、政府の融資によりそれ自身に所屬する出版部を持ち、活動をつゞけてゐる。云はゞソヴエート作家の全體としての利益擁護機關とも見ることが出來る。

二、全露作家組合——この組合には同伴者に屬する作家の大群が結成されてゐる。それと共に、新ブルジョア・イデオロギイによつて浸透されたる作家も亦加盟してゐる。

三、「レフ」（左翼戰線）派——この團體にはマヤコフスキイ、トレチヤコフ、アセエフ等の、無條件的革命主義・同伴者作家と並んで、シユクロフスキイ等の反動的理論家が加はつてゐる。「レフ」の代表者は、藝術の役割を否定し、それを新聞の小品欄、事實の記錄にまで變更することを要求してゐる。

四、構成派——セリヴインスキイ等少數より成る團體で、同伴者の左翼が參加してゐる。

五、「ペレワール」派——この一團には同伴者の一部とプロレタリア及び農民作家の僅かの人數が參加して居り、その思想的構成は甚だ散漫である。

六、鍛冶屋（クズニツァ）派——この一派は現在、主として初代プロレタリア作家、（グラドコフ、リヤシコ、ノヴイコフ・プリボイ、ベレゾフスキイ其他）によつて結成されてゐる。

七、全露農民作家協會——これにはボドヤチエフスキイ、ザモイスキイ

其他によつて組織され、主として青年農民作家を網羅してゐる。

八、全聯邦プロレタリア作家協會總聯合（ワオップ）一九二八年五月第一回全ソ聯邦プロレタリア作家協會大會後、プロレタリア作家協會の全聯邦的統一の基礎を確立した。（これについては更に説明するであらう）

最後に如何なる組織にも屬しない作家の數も尙少くない。

作家團體の著しい雜色、同伴者一派の思想的動搖及びそれらに對して黨（ソヴエート共産黨）の影響を與ふることの必要は、久しき以前より文學に對する黨の政策發表を要求しつゝあつた。黨の政策を決定することの必要に對して特に頑强に鬪爭したのはプロレタリア作家、批評家及び黨の勞働者であつた。これと提携したものに雜誌「ナ・ポストウ」（「哨所にて」の意——現在「ナ・リテラトウールノム・ポストウ」と改題）の一派があり、「ナポストフッイ」なる名稱はこれから出てゐるのである。ナポストウ派は、特に同伴者一派の有害なる思想的影響と決定的に鬪爭し、あらゆる方法をもつてプロレタリア文學を支持することを要求した。この一派はプロレタリアートが政治を支配してゐるやうに、文學からも中間派を追ひ出して直ちにプロレタリアートの手に之を支配すべしと主張して政治と文學との相互の特異性を混同し、同伴者乃至農民作家の中間層に對する政策的見解において、階級的宗派意識からくる誤謬に充たされてゐたが、後に至つてこの小ブルジョア的極左的立場は完全に淸算され、今日ではマルクス主義的批評を武器としてプロレタリア文學の發展のために大なる役割を果しつゝある。一派の中心となつてゐるものは「ナ・リテラトウールノム・ポストウ」誌の責任編輯者たるアウエルバッフを始めリベヂンスキイ、ウオリミ、オリミンスキイ、ラスコーリコフ等である。

トロツキイ、ウオロンスキイ（文學雜誌「赤い處女地」の前主幹で文學評論家）の一派は、プロレタリア獨裁並にそれのヘゲモニー獲得への過渡時代に於けるプロレタリア文學の存在の可能性を否定し、文學に對する黨の指導能力に對し懷疑的態度を固持した。そしてそこから黨の文藝、就中同伴者一派に對する異なる政策の樹立を主張した。しかしこの派の主張はこれが所謂百パーセントのトロキーズムであるだけに、トロツキイやウオロンスキイの沒落と共に殆んど影を消した。

一九二五年六月全聯邦共産黨中央委員會は、この問題——文藝に對する黨の政策の問題——について愼重なる討議の後、決議を發した。

『我國に於て全般的に階級鬪爭が終熄されてゐない如く、文學の分野に於ても階級鬪爭は終熄されてゐない……………文學の分野に於ける、プロレタリアートによる位置の獲得は、早かれ遲かれ、事實となつて現れなければならぬ』

決議は、同伴者に對する戰術的な且つ愼重なる態度、農民作家への友誼的待遇、プロレタリア作家との同志的協力、新ブルジョア作家の出現に對する鬪爭の必要を高調し要求してゐる。

又この決議は、プロレタリア作家の前に、ヘゲモニイに對する彼等の權利を獲得することの任務を課してゐる——あらゆる手段をもつて彼等の成長を援け、又あらゆる手段をもつて彼等及び彼等の組織を支持

しながらも、黨は彼等の間に於ける最も破滅的な現象たる黨を笠に着た傲慢の示現を、あらゆる方法を盡して警戒しなければならない。一方に於ては無條件的降服との、他方に於ては黨を笠に着た傲慢との闘爭――かくの如きが黨のスローガンであらねばならぬ』

全聯邦共產黨中央委員會の決議は、遠く將來に向つての文學分野に於ける重要なる任務を決定した。この決議中にもたらされた、同伴者一派との共働勞作、社會的活動への彼等の誘引、又彼等に對する系統的・思想的働きかけは、具體的な形を取つて現れた。それはこの目的のために組織された前記ソヴエート作家同盟の誕生である。この同盟は一九二七年六月に成立し一九二八年に入つて益々活潑な活動を展開するに至つた。

當時全聯邦プロレタリア作家協會（ワップ）は、プロレタリア文學の成長が大衆的性質を帶んでゐること、特に「勞働通信員、農村通信員は豫備軍と見做すべきであり、そこから新なる勞働作家及び農民作家が輩出されるであらう」（第十三回全ソヴエート共產黨大會決議より引用）ことを考慮し、その陣列を啻に熟練作家に對してのみならず、新進作家竝に、文化的に成長しつゝある勞働讀者にまで伸張するに至つたのである。これに加ふるに一九二八年の初めに於て「ワップ」の陣列内に三十を以て數へる諸民族の、プロレタリア作家部隊が參加した。

ワップの組織外に殘されたものに「鍛冶屋（クズニツァ）」一團がある。「鍛冶屋」はその組織人員は少いが、强力な創作的核心を持つてゐる。「鍛冶屋」派がワップに加盟しなかつたのは、主として、初歩的作家を組織内に包含することに關し意見が對立したからである。併しながら右翼的危險に對する共同防衛の必要は、ワップと「鍛冶屋」とを合同に向つて導いた。この合同によつて第一回ソヴエート聯邦プロレタリア作家協會大會が開催された。大會に於ては凡てを滿足せしめたる合同體の形式が發見された。ワップはワオップ（全ソヴエート聯邦プロレタリア作家協會總聯合）に改造され、その中には平等の原則に基きラップ（ロシヤ・プロレタリア作家協會）、「鍛冶屋」、竝にウクライナ、白ロシヤ、後コオカサス、ウズベクスタン、トウルクメンスタンの各プロレタリア作家協會が參加した。かくの如くしてプロレタリア文學組織の單一體は決定的に確立され、鞏固づけられた。

これを要するにプロレタリア革命の十二周年を迎へたソヴエート聯邦に於て、文學は時と共に偉大なる社會的、敎化的役割を演ずるやうになつた。そしてそこにはプロレタリア文學の大きな勝利が輝やいてゐることを認めぬわけにはゆかない。（終）

プロレタリヤ文藝批評界の展望

藏原惟人

一

プロレタリヤ文藝理論は、わが國に於いても亦、他のすべての國のすべてのプロレタリアートの理論と同樣に、一、與へられたる段階に於けるプロレタリアートの實踐的課題との密接な聯繫の下に、二、反プロレタリヤ的及び似而非プロレタリア的理論との鬪爭の中に、强化され、發展して行つた。

その昔わが國に初めて多少とも意識的なプロレタリヤ藝術運動が勃興した一九二一――二三年の頃、わが國の文壇と社會とを支配してゐたのは、菊池、芥川、久米、里見等によつて代表されてゐた純粹のブルジヨア藝術とその「藝術の永遠性」の理論であつた。その代表的なものは菊池寛の書いた「藝術本體(プロパー)に階級なし」と云ふ論文の中に表れてゐる。

「自分は藝術といふものが、階級といふことに關係があるものだとは思はない。……その中に描かれてゐる題材、描かれてゐる人物、さういふ點では、ブルジヨアが旺盛な時にはブルジヨア的色彩を帶び、プロレタリアが天下を取れば、プロレタリア的色彩を帶びるのは已むを得ないことである。たとへば、現在の文藝には、人物も、その中の思想も、感情もブルジヨア的であるが、プロレタリアの文藝が興るとすれば、その中の題材なり、思想なり、感情なりはプロレタリア的色彩を帶びるだらう。しかし描かれる題材なり、思想なり、感情なりは藝術の本體(プロパー)ではない。これを如何に觀、如何に感じ、如何に描くかが藝術の本體である。それが藝術的部分である。

「さういふ意味に於いて、文藝の藝術的部分は、階級と關係なしに、一定不變である。丁度、音樂や繪畫が階級に煩はされなく生めるのと同じである。」(「わが文藝陣」一九二二年)

これは既に彼等としては多少プロレタリヤ文學に讓步した云ひ方であつた。しかしその中に隱されてゐるのは依然として、「藝術プロパア」の名に隱れたブルジヨア藝術の永遠性の辯護に他ならない。當時新しくプロレタリヤ文學の旗を掲げた批評家及び藝術家達はこの「藝術の

永遠性」の觀念を破壞して、藝術の歷史性及び階級性を强調しなければならなかつた。そしてそこに當時の理論的勢力が集中されたのである。平林初之輔、青野季吉、前田河廣一郎、やゝ後に到つて林房雄は夫々の方面からこの「藝術の永遠性」の牙城に向つて突進して行つた。

今でこそ時代を超越した「藝術的價値」の思想を宣傳してゐるが、平林は當時この運動の先頭に立つて、藝術の歷史性、時代性を特に主張した一人である。

「文學は法律、道德、宗教、哲學と共に、社會意識の一形態、一要素である。そこで一時代の文學は多かれ少かれ支配階級の階級的偏見に感染するは些の疑ひもない。而してこの階級的偏見のよつて來るところは階級的對立を生ぜしめる社會的生產關係に他ならぬことも疑問の餘地がない。……此等の觀念、これ等の範疇は、それによりて表現されてゐる社會關係以上に永遠ではない。これ等は歷史的、一時代の產物なのだ。……如何に藝術の永遠を信ずるものも、德川時代の文學と明治時代の文學とに變化がなかつたと主張する勇氣はないであらう。」

彼は實に藝術の歷史性、時代性を主張したのみではない、彼は早くも「階級の武器としての藝術」の思想を宣傳し、もつてプロレタリヤ文藝理論の發展に多くの寄與を爲した。

「第四階級の藝術は、……今日の社會から必然に決定される。今日の支配階級が被支配階級をもつてゐるといふ事實から必然に被支配階級、反抗階級の思想的武器として生れるのだ。……階級の對立といふ事實が必然に文學の階級的對立を來すのである。」

これ等の思想はいづれも後に發展させられたマルクス主義藝術理論の基礎に置かれたものだが、實を云ふとそれ等はまだ當時のブルジヨア文壇に於ける「藝術のプロパア」「藝術の永遠性」の思想を完全に打破ることは出來なかつた。それはこの時代の左翼の文藝理論がまだ極めて粗雜であつて、藝術に於ける內容と形式との關係、表現の問題、藝術性の問題等を、眞にマルクス主義的に解決するまでに、到つてゐなかつたからである。彼等はブルジヨア作家達の「藝術プロパア」を否定し、藝術の歷史性、階級性を强調するの餘り、遂に藝術性の存在そのものをも否定してしまひ、以つて藝術と他の社會的現象との境界を事實に於いて抹殺してしまつた。この誤つた觀念は現在でも多少その姿を變へて殘されてゐる。

それはとも角、當時克服され盡さなかつたこの「藝術の永遠性」の思想は、その後種々な形態で生きながらへてゐたが、最近に到つてそれは「藝術的價値」と云ふ新しい衣裳の下に再びプロレタリヤ藝術理論に對立するものとして進出し初めた。そして皮肉なことには當時「藝術の永遠性」に對する鬪爭の先頭に立つた平林初之輔が、この「藝術的價値」の思想の最も熱心な宣傳者となつたことである。しかしこれについては後に述べることにする。

二

一九二三年の日本共產黨の檢擧、それに續く關東大震災によつて、

一時その力を弱められたわが國の無産階級運動は、一九二五年の末に於ける「無産者新聞」の發刊、農民勞働黨の結黨・禁止の頃から、次第にその陣營を立直して來たが、それと同時にこれまで一概に「無産階級運動」と云ふ名稱の下に總括されてゐた無政府主義、改良主義、共産主義の對立が益々明瞭となつて來た。そしてそれは文藝運動の領域にも反映せざるを得なかつたのである。

文藝運動における「アナーキスト」と「ボルシエヴイキー」との抗爭は、この運動の始まつた「種蒔く人」の時代から既にその萌芽を有してゐたのであるが、「種蒔く人」もそれに續いた「文藝戰線」も一つの所謂「共同戰線機關誌」としてその存在を續けて來た。しかしわが國無産階級運動のその後の進展は遂にこのやうな狀勢を許さなくなり、一九二六年十一月に到つて遂にプロレタリヤ藝術聯盟は分裂し、同時に雜誌「文藝戰線」はアナーキストと自稱してゐた村松正俊、中西伊之助、松本弘二を除名した。

これはわが國プロレタリヤ文藝運動史に於ける一つの大きな事件であるが、この分裂を指導し、それに理論的基礎を與へたのは靑野季吉の有名な「目的意識論」であつた。

彼は一九二六年九月の「文藝戰線」誌上に發表した論文「自然成長と目的意識」の中で左の如く主張してゐる。

「目的意識とは何であるか？

「プロレタリヤの生活を描き、プロレタリヤが表現を求めることは、それだけでは個人的な滿足であつて、プロレタリヤ階級の鬪爭目的を自覺した、完全に階級的な行爲ではない。プロレタリヤ階級の鬪爭目的を自覺して始めて、それは、階級のための藝術となる。卽ち社會主義思想によつて導かれて始めてそれは階級のための藝術となるのである。そしてこゝに始めて、プロレタリヤ文學運動が起るのである。

「プロレタリヤ文學運動は、それであるから自然發生的なプロレタリヤの文學にたいして、目的意識を植ゑつける運動であり、それによつて、プロレタリヤ階級の全階級的運動に參加する運動である。」

プロレタリヤ文學運動の領域に所謂目的意識を導入してそれをして眞に無産階級運動の一翼たらしめようとした靑野季吉の實踐的及び理論的效績は大きい。それはわが國のプロレタリヤ文學及びプロレタリヤ文藝理論の發達に於いて大きな意義をもつてゐる。

しかしこの「目的意識論」なるものが、レーニンの政治理論の文藝運動への機械的適用に終つたと云ふことが、それに續く幾多の混亂の原因ともなつたのである。先づ第一に筆者は、藝術運動の目的意識については語つたが、藝術作品そのものゝ目的意識、及びそれとこれとの相互關係については殆んど觸れてゐない。だからそれは單なる政治理論であつて、まだ藝術理論とも、從つて本當の意味に於ける藝術運動理論ともなり得なかつた。藝術に於ける眞の目的意識論は、單に運動全體の方向のみをでなく、更に夫々の作家が具體的に何を如何に描くべきかと云ふことを明かにしてのみ、初めて完成されるのである。それは次の時代にプロレタリヤ・レアリズムが問題になつた時に初めて爲された。

だがこの時代はまだそこまで進んでゐなかつた。この時代はまだ政治理論の藝術運動への機械的な適用で滿足しなければならなかつた。しかもこの政治理論を眞實な藝術理論として、また藝術運動理論として受入れた所にすべての混亂の原因があつたのである。事實この青野の論文は、それが如何に奇異に聞えやうとも、續いて「文藝戰線」「プロレタリヤ藝術」に發表された谷一、中野重治、鹿地亘、久板榮二郎等の論文を準備したと云ふことが出來る。實際これ等一聯の論文は、唯青野の政治理論を福本の政治理論によつて擦り代へたものに過ぎなかつたのである。

だから「目的意識」がこれ等の人々によつて藝術作品に應用されるや、それは所謂「政治的暴露」や「進軍ラッパ」の理論となり、そして遂には藝術の條件とその機能とを無視することによつて、事實上藝術の否定にまで到達したのである。

しかしその過誤は如何なるものであらうとも、青野によつて提唱され、幾多のプロレタリヤ文藝理論家によつて論議された「目的意識」の理論は、わが國のプロレタリヤ作家に共產主義的イデオロギーと政治鬪爭への積極的な關心を喚び起したと云ふことによつて、實に忘るべからざる歴史的役割を果したのである。

三

さてかやうにして誤つた「目的意識」の文學への適用は、文學をして單なるヒステリカルな叫び、單なる概念的な政治的結論の作品への導入とならしめる危險をもつてゐたし、また事實一九二七年のわが國プロレタリヤ文學の一部は滔々としてこの傾向を辿つて行つたのである。これ一九二八年に到つて再び現實への復歸が問題となり、プロレタリヤ・レアリズムが提唱された所以であるのだ。そしてこの運動の先頭に立つたのが、「文藝戰線」から分裂した雜誌「前衞」、續いてこの「前衞」と「プロレタリヤ藝術」と合同して出來た「戰旗」である。當時私はこれ等の雜誌に掲載した論文「生活組織としての藝術と無產階級」「プロレタリア・レアリズムへの道」等に於いて、この運動を理論づけようと努めた。

これ等の論文に於いて私は、先づ第一にプロレタリヤ作家が、嚴正なレアリズムの上に立たなければならないこと、作者が現代生活の客觀的な正確な描寫に立脚しなければならないことを主張した。

「現在わが國のプロレタリヤ作家、藝術家は、現代生活の隅々にまで沈潜して、そこからその生活の正確なる、客觀的、具體的記錄を取つて來なければならない。……わが國のプロレタリヤ藝術家は、これまで餘りに多く、直接的な「煽動」「宣傳」にその藝術的關心を向けてゐた。成程「煽動」も「宣傳」も必要である。だが、これ等はパンフレット或は演說會等に於いても爲し得る所であるに對して、この現代生活の客觀的「叙事詩的」展開こそは、何物によつても代へることの出來ない藝術の重要なる任務である。」

「我々に取つて重要なのは、現實を我々の主觀によつて、歪めまた紛飾することではなくて、我々の主觀——プロレタリアートの階級的

主觀――に相應するものを現實の中に發見することにあるのだ。」

それと共に私はプロレタリヤ文學の觀點と云ふことを強調して、「目的意識論」をより具體的に押進めようとした。

「プロレタリヤ作家は何よりも先づ明確なる階級的觀點を獲得しなければならない。明確なる階級的觀點を獲得するとは畢竟戰鬪的プロレタリアートの立場に立つことである。ワップ（全聯邦プロレタリヤ作家同盟）の有名な言葉をもつて云ふならば、彼は「プロレタリヤ前衛の眼をもつて」この世界を見、それを描かなければならない。プロレタリヤ作家はこの觀點を獲得し、それを強調することによつてのみ眞のレアリストたり得る。何となれば現在に於いて、この世界を眞實に、その全體性に於いて、その發展の中に於いて見得るものは、戰鬪的プロレタリアート――プロレタリア前衛をおいて他にないのだから。」

これは藝術運動自體としては、當時に於けるプロレタリヤ文學の一部の主觀的觀念的傾向に對する批判であると共に、「文藝戰線」に多く殘つてゐた自然主義的日常主義的レアリズムへの挑戰であつたのであるが、一般無產階級運動から見れば當時既にやうやく初められてた福本主義の淸算とその步調を合せたものである。

わがプロレタリヤ文學界に於いて現實の客觀的描寫と云ふことが提唱されたのは、決してこれが初めてゞはない。既に一九二五年に靑野季吉は「調べた藝術」を主張した。これはそれまでの日本のプロレタリヤ作家達が單なる「印象のつゞり合せ」や「單なる興奮と感傷」とに滿足してゐるのに不滿を感じて、もつと社會の諸現象を解剖し研究し大きな文學を作り出すことを提唱したものであつて、その限りに於いてわが國プロレタリヤ文學の發達に貢獻したものである。しかし當時のわがプロレタリヤ文學の未發達の故に、この提唱は理論的にも實踐的にも現在我々の云ふプロレタリヤ・レアリズムにまで發展され得なかつたのである。

プロレタリヤ・レアリズムは、丁度わが文學が、此の如き方向への轉向を必要とし、また轉向し得る段階に到達した時に唱へられた。そしてその故にそれは歷史的に一つの役割を果し得たのである。

四

一九二八年三月雜誌「前衛」による前衛藝術家同盟と、雜誌「プロレタリヤ藝術」による日本プロレタリヤ藝術聯盟とが合同して、こゝに現在の全日本無產者藝術團體協議會（ナップ）の基礎が置かれ、五月にはその機關誌「戰旗」が發刊された。こゝに到つてわが國プロレタリヤ藝術運動の主體が事實上形成されたわけであるが、そこにはまだ理論上にも實踐上にも完全な統一は存在しなかつた。この意見の相違を揚棄して、より高い統一へと進んでゆく爲には、激烈な「理論鬪爭」が必要であつた。

わが國左翼文藝陣營内に於ける「理論鬪爭」は、同年八月「戰旗」誌上に發表した私の論文「藝術運動當面の緊急問題」によつて初められた。これは同誌六月號及び七月號に於ける中野重治の論文「いはゆる藝術の大衆化論の誤りについて」及び鹿地亘の論文「小市民性の跳梁について」

の二つを批評して私自身の立場を明かにしたものである。

この論爭は更に中野の「問題の捩じ戻しとそれに就いての意見」（同九月）となり、私の「藝術運動に於ける『左翼』淸算主義」、林房雄の「藝術の大衆化について」（同十月）となり、遂に中野の「解決された問題と新しい仕事」（同十一月）によつて一先づ終結した。

この論爭は他の種々な基本的な問題の解決を促しつゝ、次の二つの方向に向つて展開された。卽ち一は、プロレタリヤ藝術の確立と直接的アヂ・プロ（煽動・宣傳）運動との關係に關する問題であり、他は所謂藝術の大衆化の問題である。

第一の問題に關して私は左の如く主張した。

「この二つの運動（プロ藝術確立の爲の運動と藝術形式を利用しての大衆の直接的アヂ・プロの運動）は全然切離して考へることは出來ないとは云へ、明かに異つた範疇に屬してゐる。……藝術を利用しての大衆の直接的アヂ・プロの運動はプロレタリヤ藝術の確立と云ふことを直接の目的としない。こゝに於いては我々は我々の見地からゆるされる限りに於ての過去のあらゆる藝術形式と樣式とを利用し得るし、また利用しなければならない。それはそれが必要な場合には浪花節や都々逸や或は封建的な大衆文學ですらの形式をも利用しなければならない。だがそこから直ちにプロレタリヤ藝術の形式が生れると考へるならば愚の到りである。」

「そしてこれと異つて狹い意味の藝術運動は、プロレタリヤ藝術を確立する爲の意識的な運動であつて、この爲には我々は嘗に「大衆の意欲を知る」のみでは不足であつて、更に藝術的技術を學んで、新しい内容に決定された新しい形式を獲得すべく、その爲に特別な努力がなされなければならない。」

これに對して中野は藝術の仕事は、「全體としてプロレタリアートの政治鬪爭の中にある。前者の全體を構成するそれの樣々の現れ、後者の全體を構成するそれの樣々の現れは、卽ち「大衆の直接的アヂ」（藏原は「大衆の直接的アヂ」といふ言葉を全く曖昧に使つて居るが、これは嚴格に政治的なものとして使はれねばならないだらう）の中にある」と云つて、プロレタリヤ藝術獨自の運動を否定して、それを狹い意味に於ける政治的アヂ・プロの中にそれを解消してしまつた。

藝術の大衆化の問題についても、我々は中野その他と意見を異にした。中野の意見を要約すると結局「最も藝術的なものが最も大衆的であり、最も大衆的なものが最も藝術的である」と云ふことになる。しかし私と林房雄とは、それは抽象的議論として正しいが、現代の現實に於いてはそれは必ずしも適用しない、と主張した。現代の大衆は實にその環境とその敎養とに於いて樣々であり、それ故にその最も後れたる部分に向けられた獨自の「大衆文學」の存在が許さるべきである。

この場合少くとも私はこの「大衆文學」と云ふものを所謂、藝術文學」と區別して考へてゐた。そこでこの「大衆文學」をも藝術であるとする林と私との意見の相違が生じた。私のこれに對する問題の提起は左の如くであつた。

「私はこれまで一口に「藝術の大衆化」と呼ばれて來た問題を、次の二

つの意味において理解してゐる。即ち

一、藝術として、社會的價値を持つてゐる所の作品の大衆化、

二、藝術性は持つてゐないが、あるひは極めて僅かしか持つてゐないが、大衆の教化および宣傳の意味において價値をもつてゐる所の大衆的作品の制作。」(十一月東朝「理論的な三四の問題」)

後に中野は林の意見に賛成したが、私は未だに當時の主張を固持してゐる。

この大衆化の問題はその後勝本淸一郎その他をも加へて一般プロレタリヤ文學界の大きな問題となつたが、それはそれ獨自の問題の解決を促したと共に、他のもつと基本的な問題のマルクス主義的な解決を促したと云ふ點に大きな意義をもつてゐる。それは藝術に於ける內容と形式の問題、及び所謂「藝術價値」に關する問題である。

五

藝術に於ける內容と形式との關係に關する問題は、前に書いたやうに、プロレタリヤ藝術理論の發展に於いてその論理的必然として提起された問題であるが、その直接の動機となつたものは、「形式主義者」と呼ばれる一團の文學者のマルクス主義藝術理論に對する挑戰である。

わが國に於けるブルジョア藝術理論は、機會ある毎に我々の藝術理論に對して攻擊して來た。かつて菊池寛その他のブルジョア作家達が初期のプロレタリヤ文學及び文藝理論に對して、その「藝術本體」の論をもつて對立したことはこの小論の初めに於いて述べて置いた。その後ブルジョア作家達はしばらく攻勢に出ることを控へてゐたやうであるが、昨年末に到つて所謂形式主義者達がこの形式論をもつて積極的に進出して來た。此處で興味があるのは、この派の代表者である所の橫光利一、川端康成、池谷信三郎、中河與一等が、菊池寛の門下から出て來た所謂「新感覺派」の連中であること、及びかつて菊池寛が「文藝作品の內容的價値」と云ふことを力說したに反して、彼等が專ら「形式的價値」のみを認めてゐると云ふことである。

それはわが國ブルジョア乃至小ブルジョア文學の發展を物語つてゐる。日本のブルジョア文學は谷崎・菊池・芥川の時代に到つてその全盛に到達した。そしてその時からブルジョア文學の急速な廢頽が始まる、のである。そしてマルクス主義藝術理論が發見した一般法則に從つてその上向の時代には文學の內容が重んぜられ、その下向の時代には形式が專ら尊重せられる。で若しも谷崎・菊池・芥川時代にまだ文藝作品の內容と云ふことが重んぜられてゐたとするならば、所謂「新感覺派」の時代には、この內容が全然無視されて形式が藝術の中心に乘り出して來た。それはブルジョア作家が描くべき何物をも持たなくなつたことを證明するものである。――形式主義は實にこの無內容の藝術の理論的辯明に他ならない。

だから所謂形式主義はブルジョア文學の云はゞ最後の理論的牙城であり、我々はこれを破ることによつてブルジョア末期文學の理論的根據を打碎くことが出來るのである。そして果して昨年の末から今年の初めにかけて、わが國マルクス主義及びそれに近い文藝批評の中心勢力

はこゝに集中された。それは勝本清一郎、平林初之輔、大宅壯一、小宮山明敏、林房雄、藏原惟人等である。

形式主義の理論は、末期的なすべての理論の常として、混亂し、矛盾して捕捉し難いのをその特徴としてゐる。しかし彼等の云ふことを綜合して見れば、結局次のことに盡きるやうである。

——藝術に於いては形式がすべてゞある。そして世に藝術の内容と云はれてゐるものも、形式を通じて見たる讀者（或は觀者）の幻想に他ならない。だから藝術の内容が形式を決定するとするマルクス主義藝術理論は誤つてゐる。——

これに對して我々マルクス主義の立場に立つものは次の如く答へた。——

藝術の内容とはその終局の形に於いては、政治、哲學、科學、等の内容と一般なものであり、それはその與へられたる時代、與へられたる階級の必要——課題である。一方藝術の形式は社會の勞働の形式を終局に於いて規定する所の生産力（技術）の發達によつて決定される。これは複雜な社會關係、諸階級關係、及びこれによつて規定される所の種々な社會階級的心理によつて複雜にされるが、その終局にあるものは生産力の發達である。つまり生産力が發達するにつれて、藝術の形式が變化してゆき、それと共にその形式的可能の範圍が擴まつてゆく。この無限に廣い形式的可能の中から一定の形式を撰び出すものは、取りも直さず藝術の内容——その階級の必要であるのだ。

「藝術に於ける形式は、生産勞働過程によつて豫め作られたる形式的可能と、その藝術の内容を爲す所の社會的及び階級的必要との辯證法的交互作用の中に決定される。」（「戰旗」二月號、藏原「プロレタリヤ藝術の内容と形式」）

マルクス主義藝術論は、かくして、形式主義文藝理論が解決することの出來なかつた問題——卽ち藝術形式の發生、及びその發達の問題の解決へと向つて行つた。——この方向に於いて我々が更に多くの具體的な加工を爲さなければならないことは事實であるが。

形式主義文藝理論はその後殆んど影をひそめてしまつた。しかし我々はブルジョア文學が更に何等かの形で我々に迫つて來るであらうことは豫想しなければならない。

六

所謂「藝術價値」の問題は、初めマルクス主義藝術理論の陣營内の問題であるかの如く提起された。しかしこれはプロレタリヤ的假面をかぶつたブルジョア藝術理論の再生に他ならない。この意味に於いて形式主義をもつて明らかなブルジョア的傾向であるとするならば、これは社會民主主義的傾向であり、從つてプロレタリヤ文藝理論にとつて一層危險なものである。

所謂「藝術價値」の問題は、それまでマルクス主義批評家であると一般に考へられてゐた平林初之輔によつて投げ出された。彼は昨年の「新潮」九月號及び十月號に發表した「文藝批評論」、「批評家の任務について——ルナチャルスキイの所論を讀みて」に於いて藝術のマ

クス主義文藝理論に對してその「懷疑論」を投げかけ、本年三月の同誌に於いては更にこれを押し進めて「政治的價値と藝術的價値――マルクス主義文學理論の再吟味」と云ふ挑戰的な論文を書いた。

平林の見解は要するに、マルクス主義文藝批評に於いて一般に承認された評價の基準――「プロレタリヤの仕事の發達と勝利とに助力するものは良く、それを害するものは惡い」が、藝術作品に對しては妥當でない、それは「政治的價値」であつて、藝術作品にはこの他に、これ等のものと拘はりのない「藝術的價値」があると云ふのである。

「たとへば、ボオドレエル若しくはエドガア・アラン・ポオの作品を例にとらう。これ等の人々の作品は、プロレタリアの勝利に貢獻するやうな何物をももつてゐないことは誰しも異存のないところである。それどころか、これ等の人々の作品には、一般に人類の幸福をおしすゝめる拍車となるやうなものすら何一つ見當らぬ。それにも拘らず、これ等の作家は、藝術的に何等價値のない作家であるといはれるだらうか？ これ等の作家によりて描かれた頽廢性、不健康性は、プロレタリアの鬪爭のためには無論のこと、一般に人類の向上進歩のためにすら反效果をもつものであるのに、私たちが、それ等の作品に、多かれ少なかれ藝術的價値を認めるのは何故であらうか？」

これに對して勝本淸一郎は早くも昨年十一月の「三田文學」に「藝術的價値――社會的價値」なる論文を發表して、藝術的價値とは社會的價値の一部に過ぎないと云ふことを明かにした。更に私は十一月末の「朝日新聞」紙上その他でこれを押し進めて、今まで「藝術的價値」と云はれて來た言葉は實は「藝術性」のことであつて、それは價値でもなんでもない、それは云はゞ「價値以前」のものである、でボードレエルやポオの作品には「藝術性」があるのであつて、「藝術的價値」があるのではない、何となれば社會に何等かの積極的な役割を果たさない所には價値はあり得ないから、と主張し、今までの曖昧な「藝術價値」なる言葉に代へるに「藝術性」なる言葉をもつてするを提議した。しかし問題は言葉そのものにあつたのではなくて、「藝術價値」なる言葉に關聯した概念の混亂をなくす爲めである。

その後この「藝術價値」の問題は左翼文藝理論界の殆んどすべてに擴がり、以上の他に、更に大宅壯一、川口浩、小宮山明敏、靑木壯一郎等が立つて、夫々の方面から平林に反對して、今日にまで及んでゐる。

その後の我々の主張の要點は「プロレタリアの勝利に助力する」とは、決して平林の云ふやうな狹い意味の政治的意味のみでなく、一般に廣くプロレタリアの社會的勝利――その中にはプロレタリア文化、プロレタリア藝術の確立をも含む所の勝利を意味するのである。更に我々が、例へばボードレエルやポオの作品に價値を見出さないと云ふことは嘘で、我々はそこに直接的な政治的意義をこそ見ないが、歷史的文化的資料としての、また藝術的形式としての相當の價値を見てゐるのである。唯、この場合とてその價値はそれ等がプロレタリアの科學、プロレタリアの藝術、廣くプロレタリアの文化の爲に役立つ限りに於いてゞあつて、決して平林の「藝術的價値」に見るやうな、絕對的、超歷史的なものではない。

これは我々の陣營内に於いて既に殆んど確認された見解である。所が此處に「藝術性」問題について私と勝本との意見の相違が起つて來た。それは私が「人間の思想や感情を形象の中に表現する」と云ふことが藝術性の基本的要求であると云つたのに對して、勝本はそれは歴史的な要求であつて、將來藝術そのものがその姿を變へた場合には適用されない、即ち藝術性の條件は固定したものでなくて、可變的なものである、と主張したにある。

私は勿論具體的な藝術性の條件は、啻に將來に於いて變るのみでなく、過去に於いても變つて來たと云ふことを認めるものである。しかしその基本的な要求は變らない。「形象の中に表現する」と云ふことは過去の藝術のすべてに共通したものであり、また將來の藝術にも適用されるものである。で若しも將來に於いて藝術が全然その姿を變へたとするならば、例へば文學作品の中に於ける形象的部分に對して論證的部分が絶對的な優位を占めるやうになつたとするならば、それは寧ろ文學が哲學或は科學に轉化したことを、それが藝術であることをやめたことを意味するものであつて、それをもつて藝術性の根本的要求を撤回することは出來ないのである。

わが國のマルクス主義文藝批評はあらゆる反對論の中に耐えて今日まで成長して來た。しかしそれに對する反對は今尚やまず、それが爲すべき仕事は益々多い。我々はあらゆる困難に打勝つてその完成への道を進んでゆくであらう。

大阪カフエー彈壓史

村島歸之

藝者文化より女給文化へ

大阪第一流の靑樓として知られた「新大和屋」では今秋、新座敷の普請を機會に特に一室を割いてモダンな椅子席の高級酒場を作つた。客に聘ばれた藝者は、裾なが〳〵と引きずり乍ら、カクテルやウヰスキーのコップを、目七分に運んで來やうといふのだ。これが遊廓文化の大阪の、しかも、昔に聞こえた宗右衞門町第一流の茶屋での出來事である。

又茨木幸齋で有名な新町廓の茶屋「茨木」でも、客の御感にあづかるため、わづか數日間ではあつたが、その儀式な座敷の一部に酒場を開きダンスや西洋音樂を取入れて、キヤバレーを催した。これもまた、吉田屋の夕霧伊左衞門以來、上方の代表的遊里として聞こえた新町の眞中での出來事である。

また同じ大阪の北新地（付根崎新地）の二三の靑樓では、萬事手輕に安値にと志して、「(A)藝者一人一時間、酒三本、つき出し、以上五圓(B)藝者二人、二時間、酒五本、つき出し、以上十圓」といふ遊興費の標準値段を發表した。何の事はない、藝者遊びの「定食」である。

かうした事實を、單なる、一部茶屋營業者の「新しがり」とのみ見てよいのだらうか。それは疑ひもなく、早くも「時代の足音」を耳にした廓の新人が、時勢の進運と步調を合せるために、古き傳統の殼を破つて行つた新らしき試みの一つに相違ない。しかし、それだけだらうか。私をして忌憚なくいはせれば、それは遊廓の板塀の外まで、ひた〳〵と押し迫りつゝある「カフエー時代」の餘波である。

遊廓の組見一つない役者は道頓堀の大舞臺が踏めない——これが大阪劇壇の不文憲法であつた。それほど、大阪における遊廓の勢力は偉大であつた。それがどうだ。けふ日では、さきの見える俳優は、藝妓置屋や靑樓へ挨拶廻りに行く前にまづ、カフエーへ來て「何分御贔屓に」と、頭を下げる時勢である。

大阪は變つた。遊女文化——若しそういふ事が出來るなら——藝者文化の大阪は、女給文化の大阪へ、移行しつゝあるのだともいえやう。

大阪のカフエーの特質

まづ數から行かう。

大阪府下の十遊廓に賣られてゐる娼妓は約七千、これが約五百軒の貸座敷で夜毎、性的奴隷の苦しみを嘗めてゐる。これまた拘束された境涯に、日毎夜毎を過してゐる六千の藝妓がゐて、これに對し、女給の數は無慮一萬二千餘と註されてゐる。まさに娼妓と藝妓を合算した數に均しい。そして藝娼妓の數は殆んど停止してゐるのに反し、女給の數は無限に增して行つてゐる。數學的の推論で行けば、大阪が女給で埋つて了ふ日も來さうだ。

では女給の質はどうか。

女はローカルカラーの繪の具である。近代大阪の尖端に立つ女給には、また他の都市の女給に見られない獨特のカラーが存する。

谷崎潤一郞氏は、或る時、筆者に語つていつた事がある。

「東京の女給は、妙に取り澄ましてゐるところがあつて親しめない。だが大阪の女給は、親切で、情味があつて、口說いて見たいやうな親しみを覺えさせる」

事實、その通りだ。これは大阪の女と、東京の女のカラーの相違でもあるが同時に、カフエー及び女給が、意識的にさうしてゐるともいへばいへる。

大阪の女給は、第一、客との間に距離を置かない。心持の距離ばかりではない。幾何學的の距離も。

彼女たちはペッタリと客の隣りへ座つて、着物をへだて、肉を透して、柔い觸感と體溫と、脈搏とをさへ傳へてくれる。それは、元來情に厚い大阪女のせいでもあるが、また營業者の方針でもある。

營業者の見解に從へば、女給は單なる皿の運搬者であつてはならない。何故なれば、客がカフエーへ來るのは、皿を重ねるのが目的ではなく、女性と、そして女性によつて釀し出される雰圍氣――カフエー氣分に浸るのが目的だからだ。

女給は機械であつてはならない。女給は、あくまで人間でなければならぬ。柔しい女性でなければならぬ。客が來れば、その白い双手を擴げて迎へよ。そして、やはらかいその手で愛撫してあげろ、チップの多かるべきは火を睹るよりも明らかであり、店の上りもまた從つて多かるべし、これが大阪のカフエー營業者の施政方針である。

第二に、大阪の女給は女給の象徵とも見るべきエプロンを着けずに、單に、一個の「女」として客に對する。これとても、女給がエプロンを嫌つて脫いだのではない。營業者がさうさせたのだ。

エプロンをつけぬ女給に對する時、客は彼女が職業のために働いてゐる女である事を忘れて、素人の處女であるやうに、親しみを持つてこれと談笑する。或時は戀人のやうに、また或時は友人のやうに。

女給からエプロンを剝いだのは、確かに大阪のカフエー業者の英斷だつた。彼等――私の聞いてゐるところが誤りでなければ、その最初の「彼」は、ユニオンの社長小堀勝藏君である。そして時は大正十一年であつた。

その最初の日の事を記して見やう。

道頓堀の某食堂が日々收支が償はないで、賣物に出てゐるのを聞き知つた小堀君は、若干の捨金でその權利を買つた。そして即日、從前の女工服のやうな黑の洋服に白のエプ ロンを掛けた女給の中から、美貌の何人かを拔いて、彼女から白いエプロンと女工服とを剝ぎ、同時に、御召のシャンとした服裝に着替へさせた。頭髮も、ぐる〱卷を改めて、本人の嗜好及び顏の輪廓に應じ、或は高島田に、或は耳かくしに或は七三に結はせた。化粧も念入りにさせた。女たちは見違へるやうな美しさを見せた。

エプロンもつけない美裝の、そして美給の存在を瞥見したトンボリ(道頓堀)人種は、物珍らしさうに、その食堂に這入つて來た。

食べものはまづくはなかつたが、高かつた。でも、美しいキモノの美しい女給に愛嬌を振りまかれては、勘定の少々高いぐらひは、問題でなかつたのみならず、その美給は、さながら良人につかへる家妻のやうに、愛情の濃やかさを見せてくれた。これが新營業者の接客方針であつたのだ。

果然、この方針は當つた。營業者は賣上高の中から可成り多分の利潤を大きなガマ口に納めることが出來たし、女給はチップなし固定給時代の十日分にも當るやうなチップを獲得した。——

このやり方が、つひに全大阪を風靡し、今もそれが繼續してゐる。そして、大阪のカフエーは、次第にエロチック味の濃度を加へて行つた。勿論、營業時間も制限がない。大阪の電車の幹線は可成り以前から終夜運轉をやつてゐる。電車さへそれだ。十一時頃から漸く夜らしい夜になる歡樂地帶のカフエーが、何で十二時か一時にヤマに出來やう。大阪の盛り場のカフエーは殆ど徹夜營業であつた。

そこへ這入つて來たのが、ジヤズである。ダンスである。その時だ、今まで我慢に我慢してゐた當局の神經が、ピリリッと動き出したのは。

明治・大正時代の彈壓

しかし、警察はその以前と雖も、カフエーに對して無干渉でゐたといふのではない。

大阪におけるカフエーの發達は比較的新らしく、明治四十三年頃、川口居留地に近く開かれた「カフエー・キサラギ」といふのが草分けで、翌年、新世界に「カフエー・ミカド」、ついで戎橋筋に「カフエー・ナンバ」が出來たが、いづれも小規模なもので、客筋も多くは大阪在住の美術家——鍋井克之氏等、文學者——若き日の宇野浩二氏等もその一人であつた、——等であつた。つづいてカフエーは道頓堀の檜舞臺に乘出して「カフエー・パウリスタ」「旗の酒場」「サンライズ」が出來たが、前二者は、おとなしい知識階級の人々の占據するところであつた。パウリスタでは國枝史郎、石丸梧平、矢澤孝子氏等を中心とする文藝同攷會が開かれて、若い文學者たちがそのマーブル白きテーブルに頰杖ついて、いつまでも文藝論を戰はせ、旗の酒場では美術家達が言葉少く美を論じ合つてゐた。

これ等の處では、藝術家と女給とのローマンスはあつた、殊に「ナ

ンパ」における青木宏峰氏と某女給は髪を切つて心中を圖るまでの情熱を見せ、「旗の」では宇崎純一氏はそこのピカ一女給と共同生活を營むまでに進んだ。　しかし、こうしたカフエーの雰圍氣に當局の干渉すべき餘地はあり得なかつた。

只だカフエー・サンライスは、他のカフエーと違つて、大衆向となつてゐた關係上、道頓堀の地廻りの不良少年の出入するところとなり、わけても同界隈の不良團長Kは、そこの一女給と戀に陥ち、熱心に押掛けて行つた結果、他の不良團長との戀愛合戰と勢力爭ひとがつひに暴力爭鬪を惹起し、つひにKは一夜、ピストルを亂射して、道頓堀を引つくり返すやうな騒ぎを演じた。

當局ではここで始めてカフエーに干渉の手を延ばした。　しかしそれは干渉といふよりは不良少年團をして、カフエーを荒さしめまいとする保護といつた方が適當であつた。

大正も八九年となると、工業の都大阪では、勞働運動が恐ろしい勢で發展して來た。　工業地帶、わけても西大阪のカフエーでは、毎夜のやうにここに集つて、革命歌を高唱したり、資本主義を痛罵する若い勞働者の姿を見た。　若い女給たちがこれに影響されずにゐる筈がなかつた。

社會主義的女給同盟

大正十年四月西九條朝日屋食堂を中心とした大阪女給同盟が生れた。同盟は早くもチップ制度の排斥を高唱し、「これ故にこそ女給は女性としての矜りをすてゝ、男に媚を賣らねばならぬのだ。よろしくこれを撤廢して賃銀制度を確立せよ。」とし、また深夜に至るまでの營業や下番と稱して主人の家の洗濯や便所の掃除までしなければならぬ制度に反對した。

この同盟の陰には、數人の男子の勞働組合員がゐた。その中の一人Yは、女給同盟のリーダーKと情熱の高調から、いつしか戀に落ちた。その内、大阪鐵工所の爭議が起つて、女給同盟では、これが爭議費寄附の目的で應援演說會を開いた。　女給たちはエプロン姿（その頃はまだエプロンをつけてゐた）で壇上に現れた。朱唇をもれて出る短刀のやうな鋭い叫びは聽衆を呻らせた。　そして一夜にして千圓以上の淨財を爭議團に送る事が出來た。　その夜、昂奮した前記Yは、激越な演說をしたために、つひに其場から拉致されて若松分監に投ぜられた。その時の面白いエピソードがある。

兄と賴み先達と賴んだYを奪はれた女給同盟は、一時舵手を失つた船のやうに途方に暮れた。　女給Kは前後策を講じやうとして、先づ監獄にYを訪うた。「その時監獄の看守は「君はYの妻かね」と訊いた。「イイエ」「それぢや何だね」Kは何と答へてよいか迷つてゐると「ぢや内緣の妻だな」看守は一人ぎめにきめてさう登錄して面會させた。その翌日又別な女給さんがYの面會に行つたが、前日と同樣の問答があつて之亦内緣の妻として登錄された。

かくして數日の後、Yは看守長に呼ばれた。　Yは何事かと恐る〳〵行つて見ると、「Y、お前は一體何人内緣の妻があるんだね」二人の女房も情婦も持合さぬYにとつては寢耳

に水だつた。そして、Yは、勞働運動家は、家に妻がなくとも、監獄へ行けば數人の内縁の妻を看守から授けられるものだ、といふことを學んだ。こんな插話のあつた一方、一度、社會思想の洗禮を受けた女給さん達は、一廉の社會運動家を以て任ずるやうになり、その後は毎夜のやうに數人が隊を組んで、勞働者街に進出し、路傍演説を始めた。それが素晴らしい人氣を呼んで、聽衆が黒山のやうに集つた。しかも、女給さんの叫びは、生一本、單刀直入の革命論だつた。

忽ち警察官はそれを嗅ぎつけた。Kを始め數名の女給さんは、荒くれた警官の手によつて、所轄警察署に拉致されて行つた。

それでも屈する女給たちではなかつた。翌十一年のメーデーには、女給を滿載した花輪のやうな數臺の自動車が、示威行列のあとさきを馳驅して、士氣を鼓舞してゐたが、勢ひ餘つてつひに、電車の進行を妨げてまたもや警察の御厄介となつた。

かうした女給さんの熱心な運動振りに、カフエー營業者も動かされて來た。女給同盟の本部のあつた西九條朝日屋では、女給同盟の激越な宣言綱領を壁間に掲示する外、「カフエーは勞働運動の自由監獄です」などと大書し、更らに、ナフキンに國禁の「革命歌」を印刷して客に配布した。勞働者達は有頂天になつて喜こんだが、警察では、吃驚仰天した。そして即日、同食堂に對し、營業禁止を命じて了つた。

これをカフエー彈壓史の一節として見るも、そこに時代の色が窺はれてゐて興が深い。

その後のカフエーは大した波瀾もなく發展して行つた。その筋でもカフエーの建築に干渉して法規通り廊下は三尺なければならぬ、客席の前には必ず通路を作れ、階段はかうあれ——などと命令したり、賭博をあげたり、淫賣女給を檢擧する程度であつた。そこへ俄然としてダンスがカフエーに賑々しく這入つて來た。

ダンスホール彈壓

カフエーでダンスをやつたのは、大正十二年頃、千日前のコテーヂが始めであつた。しかしそこでは、わづか十坪の空間を利用して、二三人の客が女給を相手に踊るに過ぎなかつた。それが公然ダンスホールとして營業するやうになつたのは、ユニオンが始めであつた。

最初ユニオン食堂では、コテーヂと同樣、食堂の隅で蓄音機に合はせて踊つてゐたが、所轄署から「飲食を營業とする食堂でダンスをやるのは範圍を越えてゐて許されない。やりたいのなら、別に營業として屆出てやれ」と命じて來た。そこでユニオンでは、大正十四年一月、食堂の二階の半分を改造し、リノリユームを敷いてホールとし、活動寫眞館から樂隊をつれて來てダンスを始めた。ダンスの料金は一回十錢とし、テケツ制度を採つた。一回十錢の内四錢はダンサーの收入になつた。ここに營業としてのダンサーが創始された譯である。

半年後になつてテケツは十五錢となつた。その頃、ユニオンの外に北新地のパリジヤン、戎橋のパウリスタ、パリジヤンその他のダンスホールも出來てゐて、昭和二年頃には既に十ケ所に達した。ダンスホールは殆ど滿員の盛況であつた。見物客も殺倒した。そこで入場料と

して（五十錢後一圓に改む）を徴收したが、依然として客が立てこんだ。ダンスのテケツも一回廿錢に値上した。ダンサーの割前も殖えた。

ヂヤズ音樂も取入れられた。ヂヤズが日本に取り入れられたのは大正十五年、神戸オリエンタル・ホテルの凋落で歸國の運命に遭遇したとリツピンのジヤズバンドを大阪道頓堀のダンスホール、パウリスターに留まらせる事になり、それと相前後してユニオンダンスホールが、斯界サキソホンの一人者前野氏に松竹座ジヤズバンドの若手連を拔擢し、所謂ユニオン・ジヤズバンドを組織した頃が大阪ジヤズの草分けである。ジヤズの急テンポと情緒的な狂はしげな拍子は、忽ち人々の心を囚へた。人々はこれを聞いて胸の動悸を增し、呼吸を昂めた。

ダンスはまさに大阪を風靡するに至つたのである。そしてその餘波は、時と所とをわきまへない客が、カフエーにおいて、女給を捕へて踊り出し、そのため營業禁止を命ぜられたカフエーさへ出た。

當局の目はいよ／＼その光度を增して來た。そして昭和二年三月にはきびしい取締規則が出た。それは

第四條　ダンスホール營業者はその營業場と同一家屋構內において左記各營業の一つを兼れ又は他人をしてなさしむることを得す。貸座敷營業、紹介業、席貸營業、芝居茶屋、待合營業、料理營業、飮食店營業、湯屋營業、

第五條　遊技場は建築物法令によるの外なほ左の構造設備をなすことを要す

一、ダンスホール

（イ）第一階以上に設くること

（ロ）直接外氣に面し適當の窓を設くること、但採光換氣設備相當なりと認め得る特殊の構造にありてはこの限りにあらず。

（ハ）舞踏に供する面積は八十平方メートル以上とすること

（ニ）天井の高さは室內面積二百平方メートル未滿までは三メートル以上、室內面積は二百平方メートル以上のものにあつては三、五メートル以上たること

（ホ）客用に供する階段は二ヶ所以上、內一ヶ所主要階段は幅內法一、二メートル以上とし道路に面する出入口に近接すること

（ヘ）客用に供する廊下の幅は內法九十センチメートル以上とし、屋外出入口非常口に階段及び便所等に連絡すること、但し主要階段に連絡する廊下にありては幅員內法一、二メートル以上となすこと

（ト）適當なる避難道路に連絡する非常口を設くること

一、營業時間は午後十一時限り

二、高聲の樂器を使用して近隣に迷惑をかけぬこと

三、泥醉者學生未成年者傳染病患者を入れぬこと、

四、遊技場內で飮食を禁ずること、但し酒類ならぬ飮料は此の限りでない。

またダンサーを藝妓と同樣免許鑑札制とし

（一）傳染病を持つもの（二）身許素行等が公安又は風俗を害する虞れあるものはこれを許さず、

又ダンサーは常に鑑札を携帶することとし、猥褻な行爲をすれば鑑札を

取り消さるることになつた。練習生、仕込み等がダンサーと紛らはしき所爲をした場合は科料に處せられた。

ダンスホールの禁止

右の規則は、ダンスホールにとつて殆んど致命的のものであつたが、パウリスタ、ユニオンでは二萬圓近くの金を投じて法規通りにホールを改築した。パウリスタの如きは、二ケ所の出入口を作る場所に困つて、一箇所は道頓堀に面して作るといふ窮策さへ講じた。

その後の當局の彈壓振りは言語に絶した。まづ客の名簿を備付けさせ、ダンスを了えて歸つて行く客を警官が尾行し誰何した。若し客の答が名簿記載のものと違つてゐたり、未成年者であつた場合は、早速告發の手續をとつた。富田屋藝妓ちゑ子及び伊丹幸藝妓金龍の二人は二十歳と名簿に記入してゐたが、鑑札には十九歳とあつたので化の皮がはげて早速罰金を徴收された。

又、女給が客から何物をも貰つてはならぬ定めなのに、何か貰つた者があるので直ぐ調べると、それは一箇のキヤラメルだつたといふ事もあつた。ダンスの切符は一回一枚をダンサーに與へる規定なのを、二枚渡した客があると直ぐに處分した。ダンスの最中、鑑札の有無を調べるのだといつて、警官がホールに割つて這入つて來た事もあつた。

かうして彈壓は日に〳〵加つて行つた。しかも一方、大阪府知事は政黨筋の運動で藝妓地指定を新に増加しやうとして計畫を進めてゐた。一説によると、その筋ではダンスホールを殺すか、活すかについて研究してゐたが結局ダンスホールの存續が、何等政黨筋に利權の種を提供せぬといふ事が判明すると共に、斷然、禁止といふことに方針の確定を見たといはれる(眞僞のほどは知らぬ)。そして昭和二年十二月廿五日、折角、巨費を投じて改築までしたダンスホールに禁止命令を發した。その廿五日夜客もダンサーも、今宵限りと踊り狂つたが、期限の十一時がなると共にパウリスタなどでは、ホールを包圍して警官隊がドヤ〳〵と入場して解散を命じた。又何も知らず、もう一遍〳〵と切上げ時を失つてゐたユニオンでは、忽ち科料に處せられた。

かうして大阪のダンスホールは禁止された。しかも皮肉な事には、その翌廿六日、ダンスホールを禁じた同じ大阪府知事の名で、片江、田中の兩地に對し、新に藝妓指定地許可の指令が發した。この事によつて、兩地の地價は一坪八圓から一躍に百圓に暴騰し、政黨筋の人々は巨萬の利益を收めたといはれる。利權の伴はなかつたダンスホールは、あはれ寂滅の運命を辿つて、それ以後今日に至るまで一二社交ダンス倶樂部以外、營業としてのダンスホールは許されない。大阪のダンスフアンは、ダンスホールを公認してゐる隣縣の兵庫縣下へ自動車を飛して、わづかに鬱を散じてゐる有樣だ。

ダンスホールの彈壓はカフエーそのものに對する彈壓ではない。しかし、一度カフエーの附屬事業だつたダンスに加へられた彈壓はカフエーにも及ばずにはゐなかつた。三年夏、戎橋美人座が、女給を載せた「美人座號」を道頓堀に浮べて、水上カフエーと洒落れると直ぐお目玉が來た。四年夏、大阪電鐵の直營食堂で、女給を載せた「カフエー電

車しを運轉しやうとして、これまた禁止を命ぜられた。カフエーが營業地を移動する事は罷りならぬといふのである。しかしこれ等の彈壓は未だ前衛戰に過ぎなかつた。

商工會議所の建議

カフエー彈壓の本舞臺がいよ〳〵到來した。問題の發端は、いふまでもなく、昭和四年七月十九日、大阪商工會議所總會において、左記の如き府知事並に警察部長に對する建議案を決定したのに始まる。

『近來市內において歐米各國に類例少き醜猥なるカフエーの濫設せらるるもの夥しく、市民の衛生風紀上に與ふる弊害少なからざるは周知の事實なり、よつて府當局においては今後カフエーの營業に對し、女給の風紀紊亂を一層嚴密に取締り、含有酒精十六度以上の強烈なる酒類の販賣を禁止し、營業時間を制限し、特に商工業區域における增設を抑制せられんことを望む。右本所の決議により建議仕候也』

卽ち建議の內容は

一、商工業區域における醜惡なるカフエーの濫設を防止すること
二、カフエーの營業時間を制限し、女給の風紀紊亂を取締ること
三、含有酒精十六度以上の酒類の販賣を禁止すること

の三箇條に限られてゐた。で、これは世間に喧傳されたやうな「カフエー撲滅論」でもなければ、また罰金、規則の廢止の如き女給の勞働條件の改善問題にさへ直接觸れてはゐなかつた。それは主として商工業區域だけの問題であつた。

一說によると、商工會議所が、かうした建議――商工會議所としては權限外の――をするに至つた動機には、ロマンチックな物語がひそんでゐるといふ。それはかうだ。

大阪の商店地區、船場の眞ん中にFカフエーといふのがあつた。そこには多くの女給がゐたが、中でもA子といふのは、小股の切れた垢拔けのした美人であつた。それに思ひをこがして通ふて來る若者の數多かつたが、中にも附近のT綿布商の番頭は最も熱心であつた。そこへ、忽然として大競爭相手が現れた。それは意外にも、その番頭の仕へる主人T氏の令息であつた。しかし勤めは勤め、戀は戀――さういつて番頭はこの戀から手を引かうとはしなかつた。令息はなほ更らだ。彼は船場のぼんちらしく、「番頭風情に敗けてたまるかい」といきまいた。戀愛合戰は始まつた。この事が、店內の評判となつた。そして、つひに店主の耳に這入らずにはゐなかつた。店主Tは大いに驚いた。大事な子息の身の安全を圖り、番頭の放蕩をやめさせるのには、まづカフエーを驅逐するにしくはない。さう考へついたTは、昵懇の稻畑商工會頭を訪れて、懇談をとげた。

その頃、堂島の米穀仲買店でも、店員二名が、南地Uカフエーで遊びに身がいつてつひに店の金三千圓の穴をあけたといふ事件もあつた。會議所の各議員は、これはひとごとではない。いつ自分の家に飛火せぬとも限らぬとあつて、カフエー取締建議案は「異議なし〳〵」で通過したといふ。

この物語の眞僞のほどは保證の限りではないが、かうした事實はあり得た事と思はれる。當時、筆者が稻畑會頭に會つた時にも、さう云つた口吻をもらしてゐたのを聞いた。

また更に皮肉な一説がある。それは、女給の進出に怖れをなした遊廓當事者が、商工會議所の議員たちの毎夜のやうに茶屋へ自家用自動車を乘りつけるを幸ひ、何事にも控へ目といふ事を知らぬ老妓や仲居をして、「會議所の議員やいふて、えらさうにしてゐやはつてもカフエーをのさばらしてゐやはるやうでは、どだい話になりまへんな。」とたきつけさせたといふのだ。これは警察側の人々の口の端にのぼつてゐた風評であつた點に、興味がある。

その動機の那邊にあるにもせよ、會議所の建議は、その目的が商業從事員の素行維持の範圍を出でなかつたのは、爭へない事實であつた。從つて、建議者たる會議所議員自身もさうした大なる反響及び效果を豫期してはゐなかつたのである。それが、意外にも天下のセンセーションを捲き起こすに至つたのは、一つは新聞紙がジヤーナリズムの立場から、センセーショナルに、誇大に、興味深く報道したのと、二つにはこれに驚いたカフエー當業者が、周章狼狽し、自衞と宣傳とを兼ねて種々の策動をしたことに起因すると思ふ。後者は確かに結果において藪蛇の感があつた。

カフエー業者の狼狽

カフエー業者の策動は數回に亙つて現れた。その最初は建議書が提出されて三日目の廿九日、道頓堀の一、二流カフエー業者二十一名が左記の如く自發的取締をその筋に申出たことに始まる。

一、ジヤズダンスその他の餘興を當分休止すること
一、營業時間は遊廓盛場は午前二時その他は午前一時迄とすること
一、テーブルは一坪一脚となすこと
一、女給はテーブルに一脚一名とし外に三割の豫備員を置くこと
一、未成年者の入店は絶對に斷る事、但し保護者ある場合は此限りでない
一、女給を店頭に立たせないこと、店の外部を示威的に徘徊せしめないこと、客の誘引をしないこと、早引外出を禁止すること、淫蕩氣分を挑發するやうな服裝は嚴禁すること
一、從業員の雇入の際は五日以内に組合の事務所に届出ること
一、組合では風紀係りをおき各店ともその人數に從ひ風紀係りをおくこと
一、女給雇入の場合は身元素行の調査をなすこと
一、カフエー内の光度は一坪十六燭光以上のものを用ひること
一、新開業に際し學校教會の附近の地は組合に於て制限すること
一、定價表は一テーブルに一枚をおき其他見易い處に之を掲出すること
一、あまりケバ〳〵しい宣傳をしないこと、開店の宣傳は組合の承認を受けること

尤もこの申出は全市カフエーの意志ではなく、現に道頓堀の一流カフエーであるユニオン食堂の如きは、當局に對して右申出に同意するものでないことを陳情したほどであつた。

また右の改善案の中でも、ヂヤズ音樂の休止の如きは、各カフエーが競爭上、やつてはゐるものゝ、費用のかさむ一方で、實は困つてゐる最中だつた。それで、これを機會に、一齊にやめたら――といふ打

算的な考へもあつて、これを第一項に加へたのであつた。そうとも知らずに、後日、これを鵜呑にして、禁止令を出した當局の正直さには、カフエー當事者も驚いてゐる始末だ。

カフエーの自發的改善案は、カフエー自身よりも女給に影響するところがより大であつた。そこで、一部の女給は、右の改善案を以て内部的には責任を女給に轉嫁するものであり、また外部的には表面を糊塗するものだとして、商工會議所宛、意見書を提出したものさへあつた。飛田某食堂の一女給の如きは、女給の立場から、堂々左の如き要求を會議所に提出して來たといふ。

一、經營者の作つた規則の全廢
二、備品破損料負擔の廢止
三、年末中元の金品贈答の廢止
四、客に對し飲食の强要をせざること
五、衣服は本人の自由とすること
六、家庭的要件による缺勤の罰金制度廢止、
七、閉店時間を午後十二時限とする

また道頓堀、松島、新町の各ユニオン食堂女給五百名は、この問題は結局、女給の素行問題に起因するのだとして、人格の向上、地位の改善、相互の扶助の三綱領を掲げて八月十七日、大阪女給組合を組織しやうとしたが、これが將來大成して、往年の女給同盟のやうに社會主義的傾向を生じては事面倒と、所轄警察署では、發會式の前夜、幹部女給を招致し、「豚箱へ入れられてもかまわぬならやるがよい」と脅し、「組合を作るより、淫賣をせぬやうに注意した方がよからう」と揶揄した。幹部女給は多くは亭主持の女性だつた。この警察の彈壓に怖氣を震はせてつひに組合の創立を思ひ止まるに至つた。

女給組合の流産は、カフエー問題進行中の一エピソードとして終つたが、カフエー側の運動は更らに引續いて行はれた、カフエー側の第二次の策動は、波瀾を捲起した會議所議員に對するものであつた。まづ三十一日、道頓堀フランス・バーがその入口に、「大阪商工會議員の入場お斷り」との制札を掲げたのを最初として、難萬バーその他もこれに倣ふに至つた。そして同日カフエー側の實行委員赤玉、美人座、フランスバー、日輪、すゞめ、高橋食堂、芦邊の七經營者は協議會を開いて商工會議所議員に公開對決を申出た。

八月一日、戎橋北詰日輪では「大阪商工會議所議員さんの艶聞を秘密にお知らせ願ひます。粗品進呈」と記した六間餘の白布を道頓堀川べりに釣つた。しかしこれには警察でも見兼ねたと見えて同三日、右の白布撤去の命を下した。

六日、會議所からは「既に意思表示が濟んでゐるから、公會對決の必要なし」とて對決を拒絕して來た。會議所に向つての追究は暖簾に腕押しで全く反響がなかつた。そこで、營業者はつひに八月七日、會議所議員追究戰を休止する事となつた。

カフエー取締規則の發布

カフエー側が、會議所議員への復讐に腐心してゐる間に、警察の準備は着々進んで行つた。そして十月十日に至つて、大阪府警察部では府令の「芝居茶屋、貸席、料理屋、飲食店營業取締規則」の第十一條

「營業上に關し警察署より絶對命令あつたる時はこれを遵守すべし」との條項に基き、大阪市内各署長及び堺市の署長を召集し、各所轄のカフエー營業者に向つて現行取締規則實行に關する臨時警察命令を出さしめることを命じた。

取締事項の第一項は地域的制限であつた。即ち官公署、學校、病院等の附近および住宅商店の連檐する場所では歌舞音曲その他喧噪にわたる行爲を禁ずるといふのだ。江戸堀の商店街で營業してゐた赤玉では、評判のステージダンスは勿論、ジャズも鳴らす事が出來なくなつた。そして營業時間も十二時限りといふ事になつた。「これでは商賣があがつたりだ」として、廢業したカフエーの數も甚だ多い。

第二項は構造設備に關する制限で、從來は極めて暗かつた照明を新聞を讀み得る程度に明るくすること、別室若しくは隔壁、カーテンの類で區劃して、風紀を紊してゐたのを撤廢することである。これがため多くの小間を仕切つてゐたカフエーでは遽かにこれを取り壞し、ローマンスカー式に隔壁を作つてゐた處では、顏から上が見える程度に壁を切らしめられた。

第三は營業上の制限で、女給雇入解雇の場合の屆出、飲食物の定價表の明示及び從來女給より徴收してゐた罰金その他を禁ずる事がその重なるものであつた。右の中でも罰金その他の徴收禁止は、群少カフエーへの痛棒であつた。彼等はこの徴收金を以て家賃その他の雜費に當てゝゐたからである。徴收金には大體三種類あつた。その一は「規則」(東京の出錢)で一人一日七十錢内外を徴した。二は罰金で遲刻の場合一圓、無斷缺勤二圓、外出十圓を徴してゐた。三は消耗品代で、マッチ一個二錢、傳票百枚廿錢、ラスター二圓等を强制的に買はせてゐた。これ等の徴收金が撤廢された結果、收入の激減を來したカフエーは廢業する者を續出してゐる有樣である。しかし、賢い營業者は、巧みに法網をくゞつた。規則をやめた代りに、ほゞ同額の食費を徴收した。罰金も賣上に對する賞與などからこれを控除する方法をとつた。賣上賞與の支給は、營業者の收入減を招來する順序だが、賢い彼等は飲食物の價格を引上げて、損害を客の上に轉嫁した。

結局、彈壓を受けて打擊を受けたのは、小資本の、そして商店街その他の小カフエーで、大資本を以て經營する歡樂地帶の大カフエーは小カフエーの減少に伴つて來客數を增し、却つて收入を增してゐる現狀である。殊に歡樂地帶のカフエーに對しては、營業時間も二時までは默認し、ジヤズやステージダンスも許可してゐるのだから、今回の彈壓は結局歡樂地帶のカフエーの爲めに、小カフエーを驅逐した結果となつた。

今後大阪のカフエーはどこへ行くか。小カフエーは漸次淘汰されて大カフエーだけが殘るであらう。そして、歡樂地帶外の小カフエーは一部はソーダフアウンテン若くはキヤンデーストアーになつて女子供をあいてとするか、さなくば昔に歸つて純粹のレストラントになるかであらう。そして、あくまで女を貨物として生きて行かうとする場末のカフエーは、明かにその本體を見せて、チヤブ屋式の私娼カフエーとなるであらう。

彈壓も引續き行れるだらう。しかし、それは結局、カンニングな大資本カフエー營業者を有利の地位に導き、小資本カフエー營業者を、より「惡」の方へ追ひやる結果となるに違ひない。

自殺考

高田義一郎

一　日本は自殺の一等國

五ケ年間の統計から得た世界各國の自殺率として、一九二八年のニユージーランド年鑑に、次の如き表が出て居るといふ。（スペクテーター誌）

國名	年度	對一萬人比率
ジヤマイカ	一九二一―二五	〇・一五
アイルランド	一九二一―二五	〇・二七
チリー	一九一九―二三	〇・三三
スペイン	一九一九―二三	〇・三九
セイロン	一九二一―二五	〇・四九
ノールウエー	一九一八―二二	〇・五〇
北部アイルランド	一九二一―二五	〇・五五
オランダ	一九二一―二五	〇・六二
スコツトランド	一九二一―二五	〇・六六
カナダ	一九二一―二五	〇・七八
イタリー	一九二〇―二四	〇・八二
イングランド	一九二一―二五	一・〇一
オーストラリア	一九二二―二六	一・〇九
フインランド	一九二〇―二四	一・一四
北米合衆國	一九二〇―二四	一・一七
ニユージーランド	一九二二―二六	一・二〇
ウルガイ	一九一九―二三	一・二九
ベルギー	一九一九―二三	一・三二
スエーデン	一九二一―二五	一・三九
デンマーク	一九二〇―二四	一・四〇
日本	一九二一―二五	一・九七
オーストリー	一九一八―二二	二・一二
ドイツ	一九一九―二三	二・一四
スキツツル	一九一九―二三	二・二六
ブルガリア	一九一八―二二	二・二八

又比較的新しい統計だとして、世界の自殺率は下の如し、日本は自殺の數に於て世界の第二位を占めると云つた人がある。但

しその數字は、人口十萬人に對する自殺者の割合であるといふ。

日本	一九	ベルギー	一三	スエーデン	一〇
イギリス	一〇	スペイン	四	ノールウエー	五
フランス	一七	オランダ	六	北米合衆國	一二
ドイツ	二一	デンマーク	一四		

又スヰツツル國の統計局が發表した所によれば、一九二七年中のヨーロッパ各國の自殺者總數は五萬人に上つて、國別にその比率を示せば次の如くであるといふ。但し、表の數字は人口十萬人に對する自殺者の割合である。

ハンガリー	二六	スエーデン	一一	ノールウエー	五
ドイツ	二三	デンマーク	一一	スペイン	四
オーストリー	二二	イギリス	一〇	スキツツル	二
フランス	一七	オランダ	六		

統計といふものは麗爪らしく見えて、信頼すべきものではあらうが、資料の選擇等に依つて少からず消長が來る。しかし以上を見ても、多い所が多く、少い所が少いだけは確實であつて日本もその數に於て一流か二流かの地位を占める資格を見出すにはそれで十分である。

二　自殺は人類の特技

自殺の數に於て世界に有數の地位を占めたのでは、寧ろ國辱であると憤慨する人があるかも知れない。しかし又考へ樣に依つては反て樂觀すべきものかも知れない。卽ち自殺は文化の進む程增加して行くもので、未開人の間には絶無ではないが極めて少く、動物には絶無で、萬物の靈長たる人類のみがよく之をするものであるとすれば、自殺者の多數である國家は、寧ろ文化が進んで居る國、特に思想的に進んだ國といふことも出來る譯だからである。

動物に自殺は絶無だといふことに就ては、或は異論が出るかも知れない。例へば「猿は縊死をする」と云ふ人がある。動物園の猿等が往々、ブランコの紐で首を釣つたりするといふけれども、縊死といふ現象は頸部をしめることに依つて單に呼吸が止るばかりでなく、同時に頸動脈その他の血液が頭腦に行く途を絶たれて、重大なる腦の作用を止め、且つ腦髓から出て胸部にある内臓で生存上に暫くも缺くべからざる心臓その他に分布して居る神經を強く壓迫する。それ等の關係が一所になつて忽ちの内に死亡させてしまうものであるから、猿と雖も過失に依つて頸をしめられて、偶然死ぬことが無いとは云へない。少くとも、自殺と考へるよりも、過失死と考へる方が遙に眞相に近からうと考へられる。

動物園の動物の過失死ならば、何も猿に限つたことは無い。雉子、ホロ〳〵鳥、白鷺等が、水に溺れて死んで居ることもあ

り、鴨や鵜の如き鳥類が、餌を捕へそこなつてか排水口に首を突込んで死んで居ることもあり、稀には鶴の類が金網に長い頸を突込んで死んで居ることもあるといふ。而してその死に方が溺死や頸のねぢられる事等、形式こそかはれ、要するに皆窒息死といふ點に於て一致することも、亦前の猿の死が自殺でなくつて、寧ろ過失死であるのを證據立てゝ居るかの如く見えるのである。

一、二の動物學者は、サソリを火攻めにする時に、彼等が毒を持つた自分の鋏で、自分の背をはさんで死ぬのを、自殺であらうといふのであるが、それもサソリが瀕死の苦悶の際にとる形であると云へないこともない。弄り殺しにされた人間が、舌の先を嚙切つて居たとしても、舌を嚙切つて自殺したといふべきか、痛苦を忍ぶ場合に偶然に舌を嚙んだのであるか、遂に判斷を下し得ないのと同一の關係にありはしないか。

人類ではあるが、未だ發音が不十分な點に於て、精神的に動物に近い人の子供は、昔はあまり自殺をしなかつた、否な殆ど絕無といふ位であつた。然るに近年になつて、世間がせゝこましくなつた爲か、幼少な子供の自殺が著しく增加して來たのは、矢張り文化の賜として喜ぶべきものか、それとも亦悲まなければならない現象であらうか。

三　新發明の親子心中

日本は自殺者の數の多い國である上に、近年に於ける兒童の自殺の增加、或は男が多數に自殺して女性が少いこと、自殺者の年齡が一定の時期、例へば戀愛の煩悶、或は生活難、事業の失敗等を起し易い年輩に於て、著明であること等、すべて世界の自殺傾向と同一の關係にある。少くともドイツ或はオースタリー、ハンガリー等、自殺者の數の多い國に比肩することが出來るのであるから、特に外國の自殺者を語らずとも、日本の話だけでも、決して世界の自殺の趨勢に遲れをとる心配はない。

加之、日本には世界に類を見ない程、情死をする者が多い。尤も男女の情死は、寧ろ著しく減少して居るかとも思はれるが、一方には又近年の不景氣と生活難の致す處なのであらうか、男女二人の情死よりも、數に於て遙に優勢なる親子心中が盛大になつて來た。此の父母兄弟姉妹合計五六人といふが如き、複數自殺の壯觀こそは、正に日本の特產物であつて、世界に比類のない偉大なる存在であらう。

此の親子兄弟心中は、人員に於て他に比類がないと共に、その中心人物の大半が女性である點に於ても、亦他の自殺と異つて居る。卽ち普通の自殺に男性が多くて女性の少いことは已に云つた如くであるし、普通の情死は云ふ迄もなく男一人女一人で、男女の數が相等しい。同性心中、卽ち男二人、或は女二人の情死のみは、男性のみのものが少數で、女性同志のものが

多いのであるが、此の同性心中なるものは、その數が極めて少いから特に問題とする程のこともないのである。然るに此の親子兄弟心中に於ては、父或は夫が中心人物として之を行ふものが比較的少くて、母或は妻が中心となつて行はれる場合が最も多いのである。詳言すれば、夫妻一所に子弟を道づれとして死ぬ場合も少く、又父のみが子供をつれて心中を企てることは更に少いけれども、母が子供を數人伴つて、夫の不行跡や不親切を恨むあまりに、「いやな浮世に暮すより、樂しい淨土へ行きませう」といふ考から、珠數つなぎとなつて水に投ずる場合が就中多いからである。而して之が日本獨特の現象であるのは、歐米人が夫婦本位であるのと異つて、日本が家族主義であるが爲である。之は「小さい子供を殺すのは可哀そうであるけれども、親としての自分の手はをなれて、慈悲のない他人の手に苦しませるよりは、一つそ一と思ひに殺す方がましだ」といふ心に由來するのである。その可否に就てはいろ〱の議論もあらうが、當事者の考にも亦確に一理があるのみならず、不良少年少女、或は犯罪者の發生を未然に防ぐ上にも役に立たないとは云へない。その數が大正十四年四月から昭和二年六月までの二年足らずに、約二百五十餘件で、幼弱な子供の數のみが五百餘人であるといふことを附記して置く。

四　日本名物、切腹、舌切、睾丸切

親子心中の他に、日本の自殺界に獨特なものは、切腹と舌切りと睾丸をむしり取ることとであつて、之が三つ共、悉く自殺の目的を達しにくい方法であるのは一考に値するであらう。即ちこれ等の方法に依つて自殺を企てた者は、恐く自殺未遂に終つてしまふか、或は血に染りながら更に第二第三の他の方法、例へば、投水、絞頸、鐵道往生等を追加して、はじめて死に得ることになつて居る。

切腹は日本の古武士が、自分の最後の雄々しさを見せると共に、をめ〱と他人の辱しめを受けぬ爲に創作したもので、戰國時代の殺伐な武人には中々鮮かに實演することが出來たのであらう。しかし武士でも泰平が續けばそう易々と切腹して死ねない樣になる、それは腹の皮を切り皮下脂肪から筋肉、更に腹膜を破つて刀の先が腹腔の中に入つても、傷け得るものは大腸や小腸であるから、出血も少く、痛いばかりで急には死なゝいのが本當である。

若し更に深く刀を入れて背骨の前にある大動脈を破れば、勿論大出血を起して急死するが、それでは殆ど胴體を貫通させる程度に切らなければならないので、凡人の企て及ぶ所ではあるまい。又刀を左の脇腹に突立てゝ、キリ〱と右の方まで引廻すといふ方式では、漸く腸管を破つて人工的に急性腹膜炎を起させる程度に止まる。刀を腹の眞ん中に突差して、椎も通れと

押し込んだり」と書いてある切腹を見ないから、切腹は死ねない方が本當で、最も元氣のいゝ武士でも、腸の裂け目から迸出する糞汁だらけになつて、鼻持ちのならぬ苦悶をした位のものでなければならぬ。しかも之を「有難く切腹を賜はつた」君侯或はその代表としての檢使の役人の前で實行されたのでは、君侯も役人も臭くつてやり切れなかつた場合があつたに違ひない。それかあらぬかは別として、兎に角此の苦痛を輕減させんが爲に、介錯といふことが始められた。二人以上が討死して切腹の場合には、最も勇壯なものが後に殘つて、切腹をした同志の首級を切取つたものであるが、之が徳川時代にはもう無くてはならないものとなり、しかもそれが正副二人まで切腹の時には必ず任命されることになつた。

介錯の役人の定つた爲に切腹をしないでも死ねる樣になつたので、切腹の方式として徳川時代には三寶の上に刀を置かず、その代りに扇子の如き切れないものを置いて、それを取る爲に手をのばして、首の延びる所を打ち落すことに定められてしまつた。それは「凶禮式」や「類聚名物考」等に明記する所であるから確實な話であつて、名は切腹であるけれども、事實上には腹の皮に蚯蚓ばれ一つ作らずに、身首所を異にして死んだのである。つまり腹を切るといふのは名のみで、事實は斬罪と毫も選ぶ所が無かつたのである。

然るに世間の人はそんなことを考へずに、忠臣藏の芝居で見る鹽谷判官や勘平の切腹を眞にうけて、ついうか／＼とやつて見るらしい。是に於てや豫定が狂つて、改めて天井にぶら下つたり、猫いらずを飲んだりしなければ納まらないことになつてしまうのはあたり前の話である。

舌の先を嚙み切つて自殺することも、矢張り切腹同樣に、稗史小説の類から教へられたものである。その證據には之を企てるのが女ばかりで、女がするといふことは切檻されて手を縛された美女等が、他に死ぬ手段もなく、さりとて生きてこれ以上の辱しめを受けたくないといふ場合に、舌を嚙み切つて死ぬ話が相當あるからである。

しかし舌の尖端を嚙み切れば、舌がクル／＼と中に捲込んで窒息して死ぬといふ巷説は嘘である。無論出血はするけれどもそれも少量で死因となる程のこともない。痛みや精神的のショック等の爲に死ねないことはないとしても、之は必ずしも然りと云ひ兼ねるから、稗史小説等に出る美女等は、雪中での寒さの爲に、或は弓の折れや破れ竹等の打擲の痛み等の爲に死んだりしたのを、同時に嚙み切つて居た舌のせいに附會したものではあるまいか。理論上、死にそうに見えないばかりでなく、近年之を實行した者が、皆その目的を達し得なかつたのが、その何よりの證據でなければならぬ。

それにも增して滑稽なのは、自殺の爲に睾丸を切ることである。之は恐らく睾丸が男子の急所として、あて身を食はされたりする事を誤認したのであらうが、小刀で陰嚢を切つて睾丸を抉り出しても、得る所は去勢、或は產兒制限のみで、勿論生命には別狀がない。無論、消毒をせずにする手術であるから、化膿その他の病氣の爲に死なゝいことは無いとしても、それは中々急には行かないから、ベツトの上の病死となつて、人の知らぬ間に遂げる自殺とは云へない。

總括的に見る時、歐米人の自殺の方が合理的で、日本の自殺方法には不合理なものが多い。例へば歐米人はピストルを使へば、頭を打つか心臓を打つかするし、刄物を使へば××か×の內側の部分、卽ち撓骨××が搏動して、指端に依つて容易に脈搏の數へられる程淺く走つて居る×××××。從つて腦髓を破壞するか、大出血を起すかして卽死するが、日本人はピストルを持つても時々頸部を打つたりするし、刄物を持つても心臓を突いたりするのは、餘程物事のわかつた人に限る。刄物で頸部を切るのは、頸動脈が切れて良いけれども、ピストルで頸部を打つ場合には、往々にして不具者として生殘することになる。其の方法は、何が故に死ぬかを考へることなしに、無暗に傳說や口碑のまゝに摸倣するのが日本人の癖であるらしい。未だそんな統計は無いけれども、若し自殺を企てた者の數と、自殺未遂で生殘する者との比率表を作れば、之も亦日本が歐米よりも優勢を占めることになるであらう。

五　舶來自殺の墜落死

とは云へ、日本人にも傳統を離れて近代的自殺へと精進して居る跡がある。その中でも最も著しいのは、新しい「身投げ」であらう。

從來は「身投げ」といへば河海或は湖沼等に飛込んで、溺死を遂げることを意味したのであつたが、今日ではもうその言葉の定義を改める必要がある。それは都市の街上に頻々として「身投げ」をして、目もあてられぬつぶれ死をする人がある。中にも、大都會のデパートメントストアーが、その目標とされてしまひ、やがては百貨店に屋上庭園を作らせないといふ禁令も、近い將來に出かねまじく想像せられる勢だからである。試に各地の百貨店の屋上からの身投げ表を掲げて、その普及の一般を示せば左の如くである。

一、東京新宿三越分店屋上・昭和四年十一月三日・小野理學士、二十六歲
二、東京白木屋屋上・同年十月二十六日・氏名不詳男、二十二、三歲。
三、東京上野松坂屋々上・同年七月二十一日丸山某男、二十一歲。
四、大阪、阪急ビル屋上・同年七月十四日・眞野某男、四十四歲。
五、大阪、大丸吳服店屋上・同年八月一日・長井某男、二十四歲。
六、名古屋、松坂屋々上・同年八月・岩月某男、十八歲。

七、東京松屋々上・大正十五年五月九日・池田某男、二十八歳。
八、東京三越屋上・同年十二月十八日・鈴木某男、三十五歳。
九、東京銀座松坂屋々上・氏名不詳男・同年十二月二十三日。
十、大阪三越七階・昭和二年七月二十七日・柿本某男、二十二歳。

近年の産物ではあるが、高樓からの墜落自殺も、そろ〲板について來た樣に見える。

轢死は今こそ珍しくないけれども、あれも矢張り外國から輸入された自殺である。轢死の元祖は詳でないが、あれが汽車無くして出來ない藝當であつて見れば、明治五年に汽車が始めて出來た事實から、それが明治五年以前には絶無であつたことが明白である。

「轢死」といふ稱呼に就て一言したいのは、此の稱呼が自殺方法として特殊に扱はれて居ることである。溺死といへば溺れて死ぬ事、「縊死といへば縊れて死ぬ事」で、何れも自殺者を主體として居るから、轢死をその流儀で見れば「轢過して死ぬ事」となるが、轢過するのは自殺者でなくて汽車である。之では汽車が死ぬ意味になつて、自殺者と主客轉倒になるので、正確には「被轢死」といふべきであるが、今日「被轢死」と云つては反つて奇異に感ずる人が多いであらう。平氣で居ればそれまでいも、考へて見るとおかしい事である。

六　自殺は最も贅澤な死に方

自然の死はいつ來るかわからない。從つて何處で、何時、如何なる姿で死なゝければならないか、豫想するに由もないが、それに引きかへて自殺は有難いものである。但しその自殺の有難さのわからない人々の爲に、一言の説明を加へる必要があらう。

自殺は、本人の意志のまゝに死ぬのであるから、自己の好む場所に於て、自分に好都合の時期を選んで、思ふがまゝの姿をして死ぬことが出來る至極便利な人生の終焉である。

願はくは花の下にて我れ死なむ
　そのきさらぎの望月の頃

と詠じて、豫定の如く二月十六日に梅花の香の馥郁たる中に長逝した法師の死の如きは、自殺者に於ては朝飯前の仕事に過ぎない。正月元旦に靈山の頂上で死ぬことも出來れば、羽織袴でも、シルクハット・燕尾服でも、浴衣がけでも法被姿でも、自由に裝を凝らすことが出來る。華厳の瀧や淺間山等の流行するのも、死出の晴着を飾るのも皆之が爲である。自殺こそ死ぬ方法として最も趣味的に取扱ひ得る贅澤なものであるから、自殺の多い日本人は矢張り趣味の豊富な、贅澤な國民であるとも云へやう。意に滿たない死を厭ふて、趣味のまゝに冥途の旅に上るのは奥床しい所がある。贅澤な死に方をする日本人には、緊縮政策で臨むのが本當かも知れない。

明日の女性

女工を語る

織本貞代

「龜戸と云ふ所は人間の住む所ぢあないですぜ、第一雀だつて龜戸の雀となりやあ眞黒でさあ」

彼自身龜戸にある××モスリンの職工でありながら、せめて小松川に間借りして通ふ事によつて辛じてい、空氣に惠まれ、人間としての意識を持ち續けようとしてゐるTさんは、餘り强さうでない私達が龜戸に住むことに反對して何遍か「黑い雀」を繰返すのだつた。町民の中でも「龜戸に住む樣なのは人間の仲間には這入れぬ」と自嘲する。事實龜戸の空氣はそれ程にも穢いのである。私は田舍から出て來て一年間東京市內の空氣の重さに隨分惱んだ、そして時々廣い野に出て自由な綺麗な空氣に浸り度いと云ふ狂的な衝動を感じたものだつた。が龜戸に住む樣になつて見ると、今度は稀に市內に出るのが樂しみである、城東電車を乘り捨てると何となし明るく感じられて來るのだから……。

併し私が玆に書かうとしてゐるのは空氣の講釋ではない。工場地帶に行けば必ず煤煙が空を覆ふのだ。私の言ひ度いところは左程までに心ある人から嫌忌されてゐる處の龜戸の空氣よりなほ一層重い汚い空氣の中で全く人間離れのした生活に甘んじながら極度の搾取を受けつ、働く勞働婦人についてである。

せめて小松川——小松川だつてそんなに綺麗な所でもない——に間借りして、工場から解放された僅かの時間を人間らしく振舞ふと云ふ男工のTさんが——龜戸は人間の住む所ぢあない——と威張つてゐるとき、女工さん達は龜戸も汚い會社の寄宿舍に閉ぢ込められて豚の樣な生活に甘んじてゐる。事實賄の人達は女工さん達が食堂に押しかけて來ると「ソラ豚が來た」といふ。女工さん達は何時も脛を長く出して炊事場に働いてゐる賄達を

「おひる」と呼び返す。工場を視察に行つた多くの人は獻立表を見て「そうひどい御菜でもないぢあないか」といふ。併し一週間も居て御覧なさいだ。今朝の汁は天下一品の鼠汁だ。味噌汁の中に鼠の仔が浮んで居た――特菜の鯖の煮付にウジが湧いてゐた――と云ふ樣な女工さん達の不平がきこへて來るから……第一御飯は日本米が一粒も這入らぬ。外米と麥が七分三分だと云ふのだが時に依ると四分六分にも五分五分にもなる。御肴といへばせい／＼鮭か秋刀魚か目刺し位だが、それも燒いて食はせるのではなくて蒸して食はす、だから油がギラ／＼浮いてゐて馴れてゐても大抵の人は見ただけでウンザリすると云ふのだ。『今晩は銀色（しろがね）の兵隊さんだよ』の知らせは女工さん達一同をスツカリ失望させる。それは目刺しの蒸した御菜だからである。目刺しは行儀よく一列にならんでゐるから。漬物だけで空腹を滿たそうとすればナメクジの樣にブヨ／＼な漬物だ、嫌になつて工場内賣店に飛び込めば一日の給料は忽ちフイになつて了ふ。

夜業禁止後の女工さんの食事時間は一週間交替に變更される先づ一週間は朝食午前四時半、晝食十一時、夜食は午後の五時半、次の一週間は朝食八時、晝十二時半、夜七時半と云つた工合である。別けて特記すべきは攝食のおそるべき速度だ、彼女達は自分達の食事は急行列車だと告白してゐる。夜業禁止後休憩時間が極度に短縮されて來たことは彼女達の最も苦痛としてゐる處であるが朝五時から十一時までの六時間、午後二時から午後七時半までの五時間半は立ち通しである――此の立ち通しが産業の合理化による勞働の强化によつて如何に堪え難いものであるかは後に記さう――その後に辛じて機械から離れ得る三十分の休憩時間、それが一日の勞働に與へられた全部だ、が十五分は機械掃除に、食堂への往復に五分以上かゝるから食事時間はせい／＼十分である。更にその中から便所へ行く時間を引くとなると御話にならない、女工さんで如何に遲くとも七分以上食事にかゝる人は先づない。そして箸を置けば直ちに機械の側に馳けつけなければならない、女工病の最高位は消化器病だと統計が語つてゐるのはこれだけでうなづけよう。

慢性消化器病患者である女工さんは一日何時間働かされるのか？夜業禁止前までは晝夜二交替で各十一時間今日では朝の五時から夜の十一時まで二交替で各九時間だ、がそれも割合に待遇の良い工場であつて、甲番が朝の五時から午後二時、乙番が午後の一時から十一時までの各十時間勞働の所も少くない、また非道い工場になると織布部の如き從前通り十一時間と云ふ所もないではない。夜業禁止は十一時間勞働を九時間勞働に、即ち二時間の時間減少を結果し、女工さん達の勞働搾取を輕くし

だ樣に見へる。がそれは表面的なことであつて、飽くなき利潤の追求者である資本家は決して女工の搾取に慈悲を垂れたのではない。深夜業禁止は巧妙に產業の合理化を糊塗してゐる。

先づ深夜業禁止前の十一時間勞働日にあつては、工場法規定の一時間の休憩時間が含まれてゐたから一日の實勞働時間は十時間であつたが、夜業禁止後の今日休憩時間は一日三十分でよいことになつたので實勞働時間は八時間半である。十一時間から九時間勞働へ―二時間の勞働時間の減少は、實勞働時間に於ては十時間から八時間半へ、即ち一時間半の減少に過ぎない、そして前述の樣に前古未曾有の六時間ブッ通し勞働が現はれて來た。紡績工場の內部を一覽した人は誰れでも直覺する樣に一列の機械の間に勞働者が介在して機械の生產するものを見守つてゐるに過ぎない、言ひ換へれば勞働者が機械を動かすのではなく、アベコベに機械が勞働者を使つてゐるのである。だから機械の運轉が止まらない以上女工さん達は一瞬も休むことが出來ない。

ミール精紡機の規則正しい美しい前進後退！參觀者を見とれさせるこの機械の運動も傍らに働らく女工さんに取つて見れば決して美しいものでも何でもない、絲が切れはしないかと盤の橫步きその儘八九時間も步き續ける十七八才の女工さん達には堪え切れない殘酷な勞働である、日本の若き年代の女性の脚がいよ〳〵細く長く美しく發達して行くとき、女工さん達だけはコンクリートや板張りの寒い工場に立ち續けの激勞をさせられる結果むくんだ樣に太い短い脚を笑はれなければならなくなつて行く、榮養不良と過激な勞働で眞青になつた病軀を支へるものは偉大な脚だ！何といふ皮肉だ！

夜業禁止を機會に行はれた資本家的產業合理化は勞働の强度化の點に强く表はれる。七月一日以前の龜戶にある××モスリン織布部女工の平均織機受持臺數は二臺で稀に四臺持ちがあるに過ぎなかつたが夜業禁止後に於ては平均四臺となり六臺持ちさへ現はれるに至つた。一人の女工が同時に六臺の織機を運轉するには殆んど超人的な注意力と勞働とが必要である、併も賃銀は從前通りだ。否夫れ以下に降ることさへある。

粗食で長い時間働かされる紡績女工の賃銀は信ずべからざる程に安い。紡績工場の從業員の八割は女工で、男工は機械の修繕等のために極く僅か存在するに過ぎない、機械が動いてゐる間女工さん達には休む暇なく立ち働かなければならないが、男工は地下室や倉庫の綿の中で居寢りをすることが出來る、にも拘らず賃銀となると男女の間には素晴らしい相違がある。本年二月日本紡織勞働組合龜戶支部が二千餘名の全支部員に就いて

調査した賃銀表は左の様に物語つてゐる。

紡績男女工賃銀一覽表

女工の部

勤續年數	定給(錢)	率給(錢)	日額(錢)	出勤日數(日)	一ケ月收入(圓)
一	三〇	四〇	七〇	二六	一八・二〇
二	三七	四〇	七七	二六	二〇・〇二
三	四五	四五	九〇	二六	二三・四〇
四	五〇	五〇	一・〇〇	二六	二六・〇〇
五	五七	六〇	一・一七	二六	三〇・四〇
六	五九	六〇	一・一九	二六	三〇・九四
七	六一	六〇	一・二一	二六	三一・四六
八	六五	六〇	一・二五	二六	三二・五〇
九	六七	七〇	一・三七	二六	三五・六二
一〇	七五	七〇	一・四五	二六	三七・七〇
一一	八一	八〇	一・六一	二六	四一・八六
一二	八三	八〇	一・六三	二六	四二・三八

男工の部

勤續年數	定給	率給	日額	出勤日數	一ケ月收入
一	五八	六〇	一・一八	二六	三〇・六八
六	七四	七〇	一・四四	二六	三七・四四
七	七七	八〇	一・五七	二六	四〇・八二
一八	一・三〇	一・二〇	二・五〇	二六	六五・〇〇

(備考)定給と率給の合計が日給となる

若き盛りを十年間も工場と寄宿舍の監獄の中に生活してゐる女工の一日の賃銀は僅かに一圓四十五錢に過ぎないが男工は六年勤めれば一圓四十四錢の日給者となる、女性よ從順貞淑なれと說いてゐると同じことだ！男工女工には賃銀上の相違がある許りではない、南葛吾嬬町にある某モスリン工場では通勤男工に限り月四圓乃至二圓の宅料補助を與へてゐたが通勤女工にはこの特點がない。通勤女工の中には彼女の細い腕で一家を支へて行かなければならない者が相當あるであらうが「女なるが故に」資本家は都合よくも之れを忘却して利潤率を高めて行く。

夜業禁止に依る勞働時間の短縮はこの些少な賃銀をさへ切りさげるであらうとの不安はすべての女工達を呼び醒まし勞働組合の旗の下に隱然または公然の戰鬪を戰はせ賃銀低下を阻止した所も少なくないが、團結の威力を知らなかつた工場に於ては無慘な切下げが行はれた。日本毛織系の××會社從業員は、夜業禁止と共に資本家が一割五分の勞働時間の減少をするのだからその損失を勞資に於て折半しようとの口車に乘つて遂に賃銀の七分五厘引下げを甘受しなければならなくなつた。勞働のインテンシチーに觸れば只時間上の減少を口實に賃銀の引下げを行ふ巧妙な欺瞞！これが多くの中小紡績工場に於て行はれた深夜業禁止なのである。大工場ですら今まで女工さんの賃銀の一部であつた夜勤手當もなくなつて、出勤賞與が半減された例は

少ない、更にいろ〳〵の口實を設けて賃銀切下げの魔手が昨今ドシ〳〵と忍び寄つて來た。夜業禁止當時に於て會社が保證した所は從業員の一日の實收入を低下せずと言ふにあつたのではない只月收入を低下せずと聲明しただけであると公言し、秋になつて溫度の關係から絲の切れ方が少なくなり且勞働力の緊張の結果生產高が增加して行くや忽ち請負單價の切り下げを行ふ。夜業禁止前にあつた月四日の休日は禁止後二日に半減されたから結局一日の賃銀は以前よりも低下することになる。この狀態で進んで行つたら、冬になつたら一體どうなることだらう？工場設備の不完全なため保溫裝置が殆んどなつてゐないから寒い冬の夜を凍へた空氣に一晩中さらされた絲は、運轉をかけると共にボロ衣の樣に切れて行くであらう、そして曉天五時六時可憐な女工さん達は絲繋ぎのためドンナにか泣くことであらう！想へば深夜業の廢止！それは決して今日に於ては勞働者別けて女工さん達の苦痛を解放したものではない。

明治五年度鹿島萬平氏が市外瀧の川に近代的紡績工場を樹てて近代的女工を生み、或は明治十七年頃に澁澤榮一子の大阪三軒家に於ける工場が深夜業を我國に於て最初に始めて以來約半世紀の間弱い女工達は奴隷以上の搾取を受けて來た、女工生活の悲慘は時々人の心を驚かした、消化器病と結核の根原であると見られて居た深夜業の廢止はドンナにか女工さん達に待ち望まれたことであらう。が深夜業の廢止された今日彼女達の生活が『哀史』でなくなつたであらうか？否々千度も否だ！絲は切れる賃銀は減る、監督が嚴重になると共に受持臺數は增す許りだ、寄宿舍は相變らず外出の自由すらない監獄の寄宿舍で冬の寒い夜二十疊敷きの一部屋を溫める暖房裝置は昔ながら瀬戸の小さな火鉢一つ限りである。

半世紀以上も資本家の飽くところを知らない搾取の笞の下に泣いて來た可憐な女工さん達にも遂に起ちあがるべき秋は來た。從順なれと說かれて來た女工がその教育に反逆する時代は生れて來た。彼女達の生活を切り拓く者は彼女達自身であるのを確信し出して來たのである。

紡績產業に於ける勞働爭議は昨年六月以來特異な一轉機を劃するに至つた。從來の紡績勞働者の爭議の戰術は千遍一律男工が女工を寄宿舍外に引ぱり出してその監視の下に女工を爭議團事務所に閉ぢ込めて漸やく結束を維持して行くだけであつた。卽ち女工は男工の指導なくては到底爭議をなし得ないものだと考へられて居た。それがどうだ、昨年六月府下金町の東京モスリン工場の爭議の際は寄宿女工と男工とは資本家側の巧妙な策戰のために完全に分離され、女工さん達は寄宿舍深く幽閉され

て了つた。男工の指導が女工に及ばなくなつた時爭議團幹部は慘敗を覺悟した、然るに寄宿舍女工は彼女達自身の結束を完全に保つて立派に勝利した。勿論この爭議は僅か二三日で解決された短時日の爭議だ、ストライキの際爆發する女工さん達の一時的な昂憤から結束が維持されたと見られる點もないではなかつたが本年四月東京モスリン吾嬬工場のストライキになると女工さん達だけの完全な統制と立派な組織とが目立つて來る。聞けば工場閉鎖と共に男工は一歩も工場內に這入られなくなり、寄宿舍の外側には高いトタン塀が張り廻されて女工さん達と外部との連絡は途絕された。すると女工寄宿の各部屋からは統制委員が互選され統制委員會は委員長を選擧し、別に統制委員長直屬の傳令としてスズメと云ふ一群の女工を設け、統制委員長の指令を全寄宿女工に徹底させる組織を持つた。かくて男工の指揮を受け得られなくなつた女工は寄宿舍に籠城する立派な軍隊と變つた。四列縱隊を作つて行進する女工達だけの示威運動、女委員長の下に勞働歌を高唱して進む二千の女工、或は食事時間の時部屋の廊下に二列橫隊に整列する女工、これこそ從順を敎へられて來た女工さん達の明日の姿である、『女工哀史』を拔け出て進んで行く女工さん達である。この組織と統制を持つてゐたからこそ二十日間の鬪爭に一人の裏切り者をださず、男工と資本家側との爭議が解決した後も、その解決條件に不滿を唱へ尙三日間のストライキ――女工さん達だけのストライキが續けられた譯である。感情のみの所有者であると言はれて來た婦人、感情にのみ生きると言はれて來た婦人の最下底部に、組織を自製し統制の下に行動する卽ち理性の指揮下に動く一隊の婦人が現はれて來たのである、併もそれは敎養を誇るブルジョア婦人の間から生れて來たのではない、豚小屋の樣な寄宿舍に搾取と無智のドン底に蠢いてゐる勞働婦人の間からである。『人間の住む所ぢやないですぜ』と言はれる龜戶――工場の煤煙で雀まで眞黑になつてゐると言はれる工場地帶を母胎として新らしい時代の婦人は生れつゝある。女工さん！彼女達こそ堅實に『明日の婦人』を孕みつゝあるのだ。

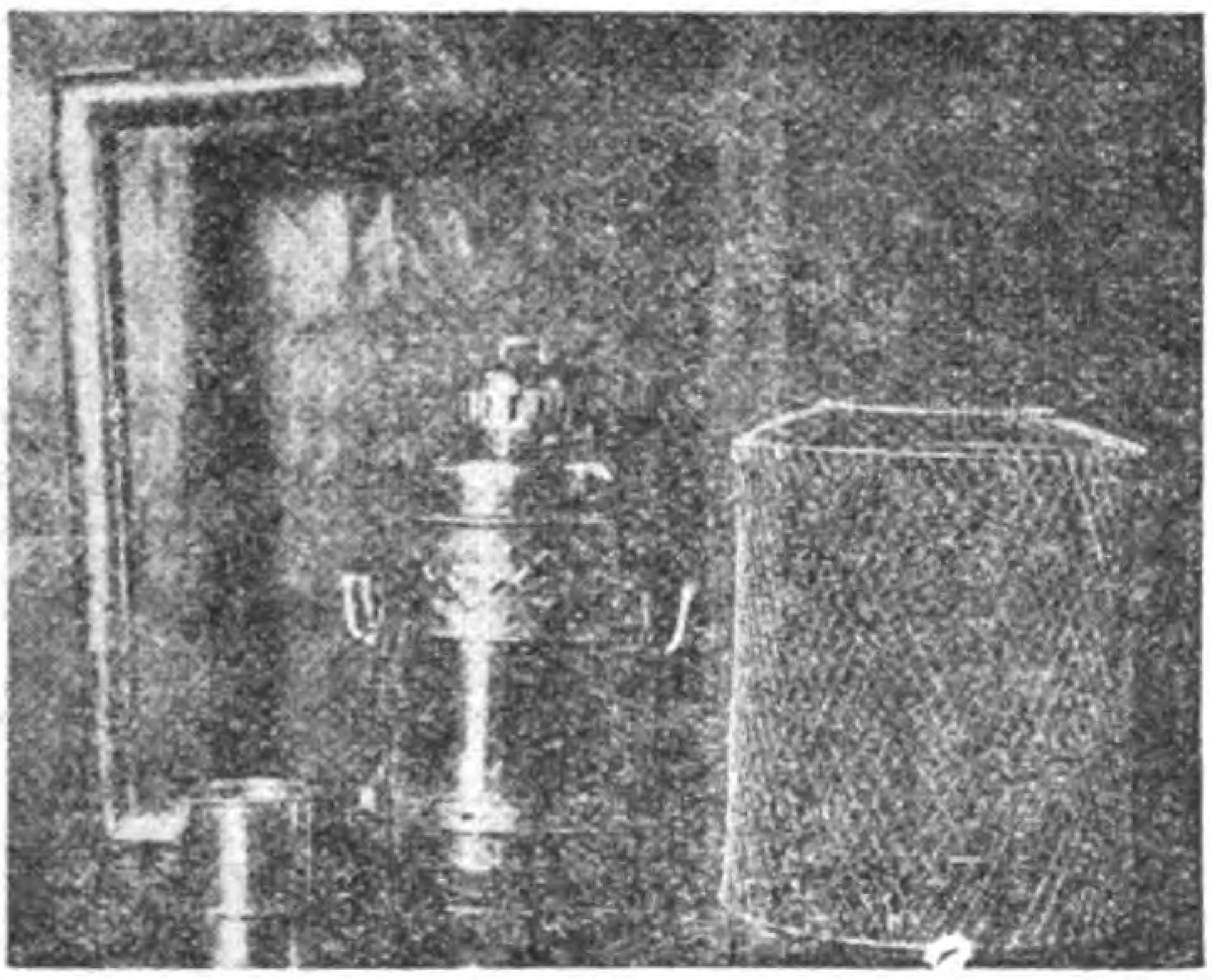
中央公論社代理部案内

東京市丸の内ビルディング五八八區
中央公論社代理部
振替東京七八四七五番
電話丸の内(23)二〇六番

◇代理部への御註文はすべて前金に限ります。御送金にはなるべく一番安全な振替をお利用下さい。
◇御註文の際は郵税をお忘れなく爲替でお送金の節は必ず書留郵便に願ひます。
◇切手代用は拾錢以下の郵便切手で一割增の事。その他は一切お受け致しません。

伊藤式家庭ストーブ

◇外觀、構造共に從來の如く單に外來品の直譯的でなく、使用材料に至るまで全く發明者伊藤氏の創意に出でた世界最初の輕銀製ストーブはこれ！
◇完全燃燒による燃料の經濟、人體に最も恐るべき一酸化炭素を極度に消滅し、煉炭を使用しては煉炭特有の惡臭を除去する事が出來、火勢の調節も保燃時の伸縮も皆自在に適溫と適濕とほのかな火光の快感とは、期せずして一家の和樂となりませう
◆本年度特價　九圓八十錢（荷造費三十錢）
外網　二圓（荷造費三十錢）
◆特別希望の向には、排氣筒の用意も出來ました。輕銀製長サ五尺五寸まで伸縮自在、荷造費共三圓十錢。
◇カタログをお請求下さい。　運賃全部先拂



古書賣買のお取次

主として地方在住の愛讀者諸氏の御便宜を計る目的で代理部の中に「古書案内係」を特設してありますから、どうぞ御遠慮なくどしどし御用命下さい。
古本御購入のお取次はもとより、御賣却希望の古本古文書、和本、錦繪等價格不明の御不用品の評價、賣却のお取次を致します。お問合せだけで御返事致しかねる樣な種類のものならば、一應御送附下されば早速市內一流の專門家に囑して正確迅速に評價して、お返事を差上げます。

規定

A、御紹介には往復端書又は返信料を添附して下さい。
B、御註文はなるべく振替で、前金御送附を願ひます。
C、送品は着金後一週間位と御承知下さい。但古本の事ですから、御紹介後着金までの間に現品の移動があつた時には、再び探し出す爲に相當の時日を要する場合があります。隨つて價格等も時には變動する場合が生ずる事も豫め御承知をきを願ひます。
D、評價御希望の書籍は、書名、著者、發行年月日、發行所、汚損の程度等詳細にお書添へを願ひます。但古文書、錦繪等の如きは、現品を拜見の上ならでは評價致し兼ねる場合がありますからその旨お含みおき下さい。返送の費用は實費を申受けます。
E、御紹介の宛名は「中央公論社代理部古書案内係」と明記して下さい。

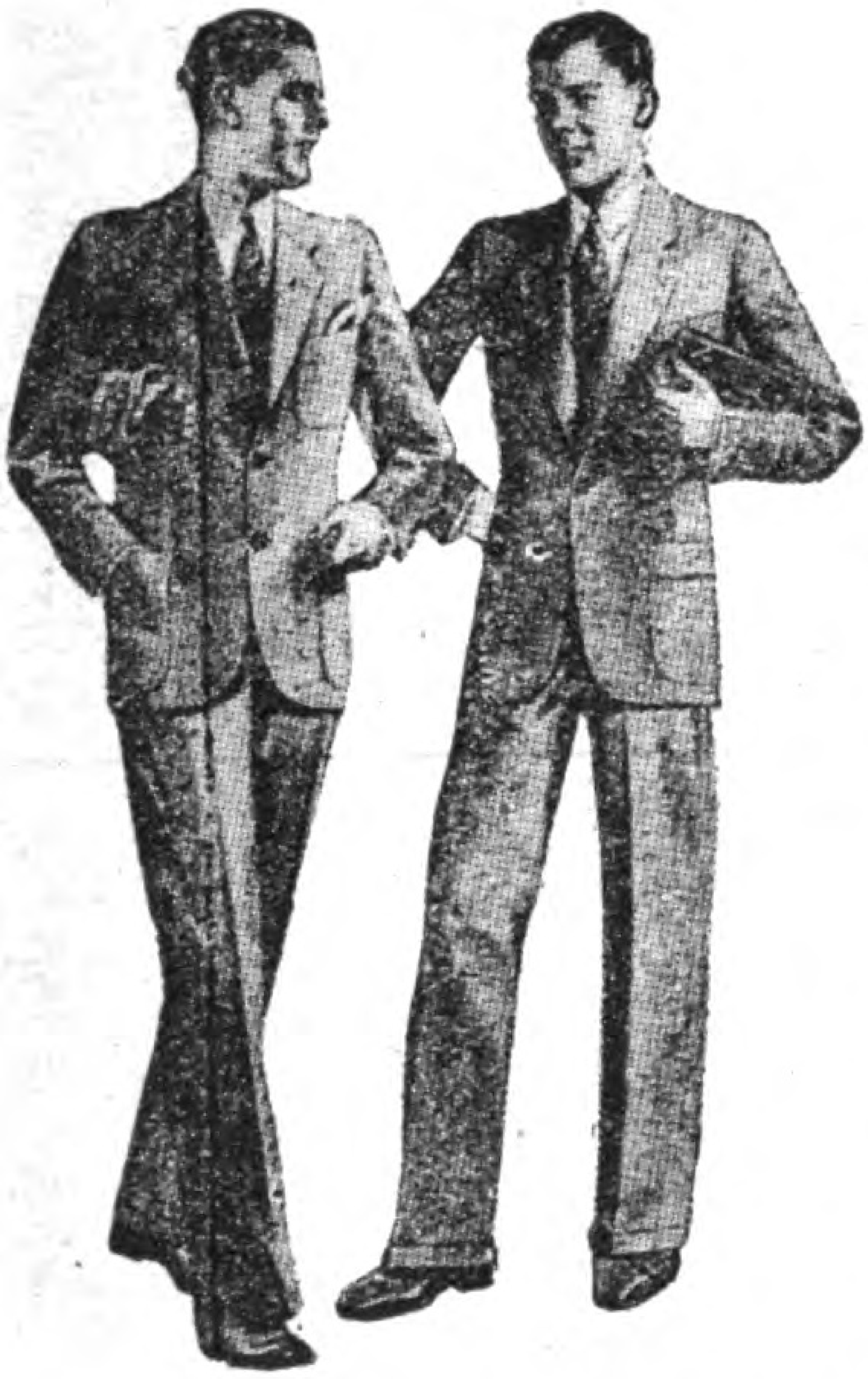
昭和五年新春の御新調は

◇新春の晴着のお支度は出來ましたか？只今代理部は大繁忙を極めてをりますから、お急ぎの御注文はお早く願ひます。

◇年末は諸注文殺到致しますので、年内にお仕立希望の御注文は十二月十八日で締切と致します。

◇型は常に紳士的な正しい流行を選び、生地の選擇にも品質本意を旨と致しますから居ながらにして東京型の洋服が得られます

◇見本請求ニハ一種毎ニ郵便切手十錢添附ノ事。



背廣服

A 三十八圓

B 四十五圓

C 五十五圓

オーバ

D 六十圓

E 七十圓



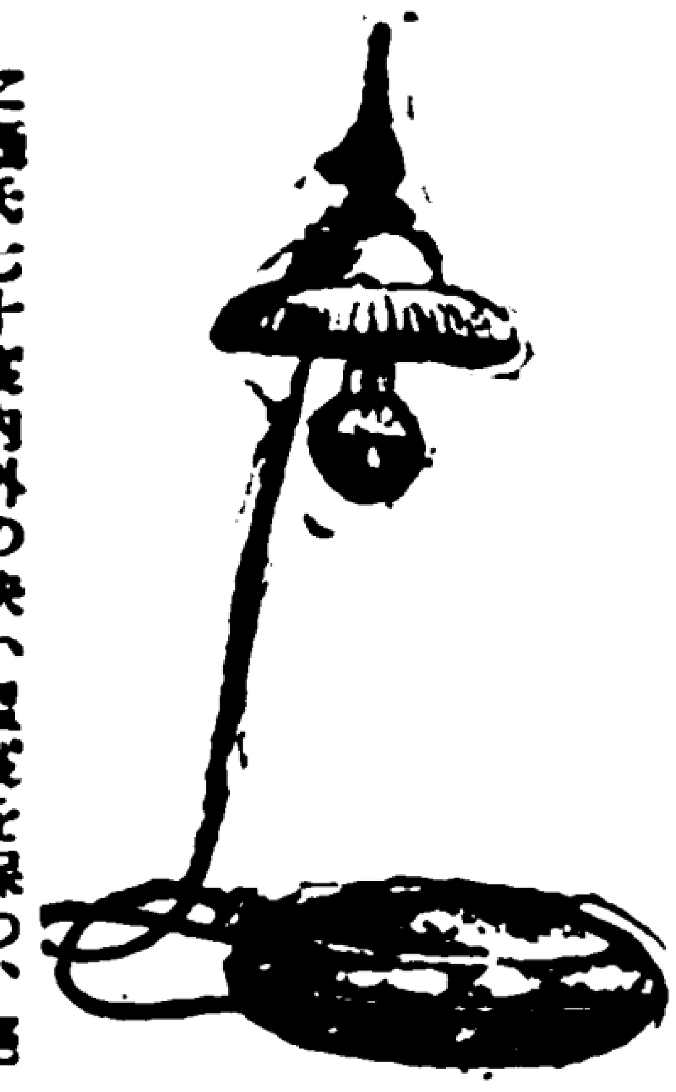
洋服の生地見本は、御承知の通り種類が多く全部取揃へることは經費もかゝり、それに伴ふ不便も少くありませんから、必ずお希望の品例へば「Aノ背廣」「Bノオーバ」と云ふ風にお指定の上、お年令をお申聞け願ひます。

代理部では、その種類のお年令向きなものをお見立てして、明確な圖入りの寸法書を添へてお送り致しますから、これによつて各部分の御寸法をお送りになれば、約二週間で居ながらにして、シツクリとお體に合つた服がお手に入る譯けでございます。

中央公論社代理部

振替東京七八四七五番

最も安全な
電氣湯たんぽ



電氣アンカや電氣フトンのやうに、發火する恐れは絶對に無く、普通の湯たんぽのやうに數時間毎に湯を取換へる手數も要らず、熱湯を用ふる危險もなく、常に攝氏七十度内外の快い温度を保つ、絶對安全、使用法簡便、堅牢な、養老に保育に、ぜひ家庭に備へねばならぬ重寶な品です。

定價(二燭用ソケット及びカバーつき)四圓二十錢
送料　東京市内十二錢　内地四十五錢
領土七十五錢

洋服カバー

防水防濕防蟲の效用を具備した紋紙製品で而も洗濯が出來布よりも丈夫です。

改正定價　大一圓　小六十錢
送料　東京市内十二錢　内地十八錢
領土四十五錢

最新艶出布

このフレッシユマン、ダスト、アブソーバーは、特殊の毛織物に機械的工程と化學的處理とを施したものでありますから、器物固有の塗色を損ずる事は決してありません。

この布は、從來の艶ふきんと異り、埃りを吸ひ取りしかも美しい艶を出す不思議な作用を有して居ります。

漆器類、殊に蒔繪の器具、ピアノ、オルガン、卓子、自動車等用途は中々廣く蓄音器のレコードを、この布で拭へばレコードの壽命を永くし、音は非常に美しくなります。

定價(金屬製容器入)　一圓
送料　東京市内十二錢　内地十八錢
領土四十五錢

スマドレ ヘヤトニック

このスマドレヘヤトニックは、米國で唯一の日本向の化粧料を出してゐるスマドレ會社の製品でニユーヨーク、ロンドン、パリー在住の日本人間に愛用されてゐるものです。

洗髪後や朝夕に數滴を毛髪の根元に振りかけて、指頭で輕くマツサージしてをけば、フケを除り拔毛を止める事は妙であとには得も云はれぬ芳香が永く殘り、使用するにつれて、毛髪は絹の樣に軟くなり、日々漆黒の美を増します。

定價 婦人用 紳士用 特大瓶各二圓五十錢
送料　東京市内十二錢　内地十八錢
領土四十五錢

スマドレ シャンプー

理想的洗髪液スマドレ、シャンプーは短時間に地肌からキレイに汚れを落すことが出來、同時にフケを除り爽かな潤のある美しい髪にする一方、ちゞれ毛や癖毛を直す事は全く不思議な程で、スマドレヘヤトニックと共に、ニユーヨーク、ロンドン、パリー等の日本人に愛用されてゐる世界特許品です。

日々忙しい社會に立つて、男子の髪を整へる事が、重要な禮儀の中に數へられる今日、僅かな時間に之を用ひて、毎もさつぱりとした髪で、自他共に氣持ち良く會談する事をおすゝめ致します。

定價　特大瓶　二圓
送料　東京市内十二錢　内地十八錢
領土四十五錢

梅と鈴蘭の香水

本社代理部特製の四季の香水の中、春の梅及夏の鈴蘭の二種は、如何にも香りのすがすがとした紳士用には最もふさはしいものです。

此の外に秋のヘリオトロープ冬のシクラメンを加へて四季何れも常に用意してありますから、お好みのまゝにお注文下さい。

定價(春、夏、秋、冬)各二圓
(四季組合せ、又ハ四個)七圓五十錢
送料　東京市内十二錢　内地十八錢
領土四十五錢

オプチサナ

獨逸藥品の偉力は世評の認める所ですが特にこのオプチサナはせきを止めるに著しく效果があります。甘くておいしいので百日ぜきの子供も好んで呑み、一週間服用すれば效目があらはれ、殊にぜんそくのせき止めには喜ばれてゐます。

倘所々から愛家の揃つた註文がありましたが、今後十個以上纏つた御註文には多少の割引をいたします。

定價　二圓　送料東京市内十二錢
内地十八錢　領土四十五錢

御注意

◇本年も、とう／＼年末となりました。

◇本誌愛讀者諸氏は皆御健全に、社會の各方面にそれ／＼御奮闘の事と存じ上げます。

◇本社代理部の現狀は、毎日全國各地方の愛讀者諸氏の御註文書が山積し、これが整理に發送に御回答に全員文字通り決死的の大活動を續けて居ります。

◇此の活動は十二月三十一日午後十時まで續けますが、年末は一層繁忙を極めますので、余りに押迫つてからの御註文は遺憾ながら來春迄お待ちを願はねばなりません。

◇御送金は振替が一番安全ですが關東地方は約四日間、中部・奥羽・近畿・中國の諸地方は五日乃至一週間、四國・九州・北海道地方は一週間乃至十日間、樺太・朝鮮・滿洲・臺灣及南洋諸島等は十日乃至二十日間位の日數を要しますから、遠い地方の方々はそれ丈日數を充分計算して一層お早く御註文を願ひます。

◇爲替の御送金は必ず書留郵便に願ひます。

中央公論社代理部

新着月報

最も權威ある批判であり推薦である

杉森孝次郎編　社會科學辭典

林　癸未夫

妥當なる批判は正確なる知識によつて基礎づけられなければならぬ。殊に現代の如く社會關係が極度に複雜化し、社會的諸勢力が入り亂れ、認識と批判と運動とが無諧調な一大雜音となつて交響してゐる時代に於ては尙更さうだ。

新に公刊された杉森孝次郎氏編輯の『社會科學辭典』は、辭典としての本來の性質上、右の如き社會的混亂を直接に正導し救治するものではないにしても、少くも妥當なる批判の基礎たるべき正確なる知識を現代人に提供するだけの效果は、多分に有つてあらうことを疑ふわけには行かぬ。

哲學者及社會思想家としての杉森氏の見識と業績とについては世旣に定評がある。そして實は此種の辭典の編輯者としては、現代の日本に望まれ得べき最適任者の一人であることに何人も異存はあるまい。だが彼は、此種の出版物に往々ありがちな「名義だけ」の編輯者では決してなかつた。彼が文字通り眞實の編輯者であつたことは、多少其間の事情を見聞してゐる私の保證し得るところだ。尤も彼は個々の執筆者の文章の內容にまでは恐らく干渉しなかつたであらう。併し執筆者の全部が直接間接彼の敎へを受け、多かれ少かれ彼の思想的感化を蒙り、殊に彼の直接指導の下に協働して此書を成したのである以上、此書は、全然とは言へないにしても、大部分に於て、杉森氏の學的責任と價値とに於て受取られてさしつかへないものだと思ふ。本書のもつ第一のメリツトは先づ其點にある。

次に本書は眞の意味の「社會科學」辭典たることによつてエセ社會科學を克服するに大なる貢獻をなし得るであらう。眞の意味に於ての社會科學は本書の擧げてゐるやうに

―社會現象を分科的に研究する諸々の科學即ち倫理學、政治學、經濟學、法律學、宗

新刊紹介

エピキユルの園（草野貞之譯）　アナトオル・フランスの隨筆諸篇を收む。廣い深い學問的敎養を持ちつつ、靜かに考へ徐ろに書いた藝術家であり、趣味の批評家である彼の風貌をよくうかがはしめて居る。（新四六判三五三頁定價二・〇〇、第一書房）

自由人の社會學（室伏高信著）　「自由人は斯く語る」「新しき時代とは何か」のうちから選びしもの、街頭の社會學の一部である。（四六判四一九頁、定價一・三〇、東京本鄕金助町二八・批評社）

現代生活考（鵜田英太郎著）　今はなき著者の戲曲集、谷崎室伏兩氏の推薦する所。（四六判六〇五頁、定價二・八〇、ロゴス書院）

美術研究（東京帝大美學談話會編）　夫々自ら專攻とする所の有益な諸論作を收む（菊大判一六九頁、定價一・〇〇、第一書房）

車塵集（佐藤春夫譯著）　支那歷朝名媛詩鈔である。裝釘は盡せりであり、譯筆は快調（菊判九三頁、定價二・五〇、武藏野書院）

東西素描大成・人物篇（安田・和田・小杉・山本編）　（菊倍判二十葉・非賣品・アトリエ社）

敎學及社會學等を總稱するものである」の に、數年來、我國の左翼論客が强いて之をマルキシズムの同義語にまで押込めたことは、何處の國の學界にも類を見ない僻事であつて、眞の社會科學者に取つては此上もない迷惑なことであつた。然るに本書は社會科學の名の下に、社會學、政治學、經濟學、法律學は固より、哲學、敎育學、社會問題、社會運動に關する語彙までも取り入れて、何が社會科學研究の對象たるべきかを明にした。

次に本書に擧げられた語彙の頗る多方面で且豐富であることも見遁してはならないが、殊に日本に關する特殊の語彙を多數挿入してあることは、本書の用意のおろそかならぬことを證するものだ。試に冒頭の「ア」の部だけを見ても「赤旗事件」、「新しき村」、「甘粕事件」があり、「セ」の部には「政治研究會」、「政治的自由獲得勞農同盟」、「全國借家人同盟」、「全國水平社」、「全國農民組合」、「全日本鐵道從業員組合」、「全日本農民組合」、「全日本無產靑年同盟」等、等がある。以て其一般を察すべきだ。

次に本書の附錄として添へてある社會科學關係の人名辭典も甚だ重寶なものだ。これだけでも約二百頁に亘つて獨立の存在價値を有するほどだが、人名の選擇も歷史的重要性に基いて純客觀的な公平を維持してゐる。例へば「カ」の部にはカウツキー、カシヤン、カッセル、カーバー、カベー、カーペンター、カメネフ、カーライル、カラハン、カリニン、カガル、カント、ガンザー等を擧げてをり、「マ」の部にはマキヤヴェリ、マクドナルド、マサリック、マーシヤル、マッチニ、マルクス、マルサス、マン（トム）等が擧げられてゐる。そして之等の人々の略歷と事業と著述とが手に應じて檢索され得ることは、一般學徒に取つて極めて便宜だと言つてよい。

之を要するに本書は當に現代日本人の切實なる要求に適應して生まれたものであると同時に、一層熱心なる要求を刺激するために生まれたものだとも言へる。いやしくも妥當なる社會批判に到達すべく正確なる社會認識を把握せんと志す人々に取つては、恐らく本書は其座右に常備されて然るべきものであらう。（四六判・定價三・五〇東京市外西巢鴨町宮仲二三九三・社會思想研究所）

マルクスのロビンソン物語

大熊信行著

有澤廣巳

若きソヴエト・ロシヤ（秋田雨雀著）　一昨年訪露七ケ月間に於ける收穫である。謙遜な理解を以てありのままの觀察を細敍せるもの、特に社會施設及藝術方面に就てくはしい。多數の挿畫は讀者に對して效果的である。（四六判三三四頁、定價一・五〇、叢文閣）

轉換期の日本（清澤洌著）　惱める日本、不安と悲觀との日本を、眞劍に、だが興味深く描く。（四六判四五四頁、定價一・八〇、千倉書房）

日支關係の心理的研究（佐田弘治郎著）（菊判九一頁、定價・五〇、大連市紀伊町九一・中日文化協會）

總てを正認する者（柳沼七郎著）　（菊版六二頁、非賣、東京府北多摩郡保谷村下保谷二一一・眞理使徒莊）

女子體操科敎科書（體育聯盟會出版部編）　體育に就いての基礎知識を得るに好當親切な書物。（四六判三四八頁、定價・七〇、東京赤坂青山南町二ノ六三・體育聯盟會出版部）

ロシヤ大革命記（ロシア問題研究所譯纂）　數十年間にわたるロシヤ革命運動の到達點であり、一九一七年十二月の勞農大革命への出發であつた一九一七年の二月革命の要領よき如實的記錄。（四六判三九〇頁、定價三・〇〇、ロシア問題研究所）

規範經濟學（關木利吉著）　人類の物質生活現象に內在する理論の究明と共に物質生活

本書は題して「マルクスのロビンソン物語」と云ひ、裝幀もまた極めて表題にふさはしいものである、だがしかし、それは決して一個の物語風の著作ではない。それどころか、著者は――短歌界の新人でもあるが――これに於ては主觀的には極めて眞摯なる一經濟學者として、『經濟學の現狀において、いまだ何人によつても試みられたことなく、今日以後に期待されなければならぬ』新學説を提唱されつゝあるのである。新學説? 即ち配分學説である。

だが、配分學説は土方博士をもつて先興者とするといふ者があるかもしれない。これがために、私は先づ、本書の著者の提唱する配分學説と土方博士のそれとが峻列さるべきことを、茲に指摘しておくことは、兩氏のためにも及び讀者のために親切であらうと信ずる。本書の著者は博士の新著「經濟學大綱」を指示して曰く、「そこでは四分法にいはゆる分配が悉く「配分」と化してゐるのではないか。これは一體何のことであるか。經濟學上の一基本觀念を指示するために久しく用ひられてゐる一つの決定的な用語が、かくも無意味に――しかり實に無意味である――かくも無雜作に一言の斷りもなく、變更された事例が他にあらうか」と。(二三〇頁) 即ち本書の著者の見解によれば、土方博士の配分學説は配分の語感が「何かしら新味を感じさせるから」か、又は「分配を配分と改稱するすばらしい獨創家」の「用法に追隨しよう」とするところから、なされた單なる名稱の變更にすぎないものなのである。(第四章配分學説史考) 然らば著者の配分學説の内容は何か。

著者の見解によれば、「配分學説は均衡説であり、そして經濟學の體系はこの均衡思想なしには形成されることをえない」(二四七頁)のである。こゝに均衡思想といふものは、所謂ゴッセンの第二法則であり、從つて主觀價値學説の基礎法則たる限界利用均等法則である。即ち、各事業部門に配分された普遍的素材のそれぞれの限界單位のうへに立つところの各利用を均等ならしむべきことである。だがこの法則においては、あらかじめ規定されてゐるべき條件として、諸事業への共通手段たる一般素材が一定分量なること、及びその素材が客觀的單位において無差別性であることが、要請される。かゝる條件を充す一般素材としては、著者の見解によれば、「人間生活の最も本原的な同時に最も普遍的な配分總量の規範方式の確定が企圖されて居る。著者によればその規範的生活方式は、生活團體の共働組合と其聯合である。(菊判九〇八頁、定價四・八〇、平凡社)

常識百話(東京日日新聞學藝部編) 曾て連日同紙にのれる小話をあつむ。「キッスの起源」「なかのりさんとは?」「原稿の珍品」「手淫者の運命」「天才の三種類」「牛は色盲」「鼻糞をほる國民」「スープの榮養價」等々二百四十一篇。(四六判二四〇頁、定價一・五〇、千倉書房)

天明俳人論(西谷勢之介著) 蕪村を中心とする天明時代の諸俳家の研究である(四六判三三六頁、定價一・六〇、交蘭社)

ヘーゲル論理學(速水敬二譯) Encyclopädie der philosophischen Wissenschaften im Grundrisse の緒論及第一部論理學の全譯である。譯者の勞を多とする(菊判二八三頁、定價二・五〇、鐵塔書院)

詩學概論(外山卯三郎著) 美學に依存せずして、直接に藝術自身の法則と自律性とによらんとする藝術學に、基礎付けられた詩學への概論的企圖である。プロレタリア詩學に顧慮なきを否むが、蓋し基礎知識を得るに便利である。(菊判二二八頁、定價二・〇〇、第一書房)

草煙心境(上田杏村著) 最もよき隨筆の一つ。著者の教養を偲ぶに便である。(四六判三九六頁、定價一・八〇、第一書房)

としての時間と精力とである」(六八頁)。就中時間である。「配分體系の最も基本的な一次的素材ともいふべきものは人間生活の全過程を制約する時間であり、人はまづその與へられた全時間を彼の諸目的のために分割しなければならない以上、その時間配分は勞働時間と自由時間との各限界單位の成果が彼に齎すところの滿足を均等ならしめるやうに按排されなければならぬ」(一四四頁)。卽ち「配分原理の擴充」である。だが併し、著者においては、時間と精力との關聯は必しも問題とはされないで、直に、第一次的配分の結果として與へられたる總勞働時間の、謂はゞ第二次的配分に移る。こゝにおいても配分原理は貫徹されねばならぬ。卽ち一勞働時間單位によつて獲得される諸財は、その限界單位において均等利用をえなければならぬ、而してまた總勞働時間はこの均等狀態が實現されるやう、諸財の生產に配分されなければならぬ。かくてこの限界利用の均等狀態の實現に相應して、「支出されたる素材(勞働時間)をもつて直に費用と槪念するにおいては、費用はこゝにおいてすでに價値の指標である」(一三七頁)。

今や著者の意圖は明かである。著者にとつては、「勞働價値說と限界利用說との對立には理論を超えた階級的反撥と意志の對抗がかくれてゐる」。「しかも我等はおのおのの體系の基礎理論であるところの勞働價値思想並びに限界利用均等思想を拔きとり來たつて、その階級的色調を帶びざる純粹の原理において兩者をつき合せ、その統合を試みようとするものである。」(一二六頁)階級的色調を帶びざる純粹の原理とは「配分原理」(第二章)である。「マルクスのロビンソン物語」(第一章)においては、「資本論」の全建築の中に埋まる奇體な柱としてこの原理の發見が企てられ、「配分原理の擴充」(第三章)においては、この原理による統合の試みとしてのマーシャルの體系が論ぜられる。要するに「本篇の筆者は經濟學における理論の非階級的性質の一面を論究することにおいて現今普通のマルキシストと志向を異にするものであり、そして配分觀念の綜合的把握は事實においてかゝる立場からのみ可能であることを自ら立證せんと欲するものである。」(二五九頁)

かゝる志向を意識すると否とに拘はらず、マルクス價値論と限界效用學說との、「その階級的色調を帶びざる純粹の原理」においての、統合を試みたものは、併しながら著者をもつて嚆矢とはしない。寡聞なる私においても尙ゲレスノフ、レーデラー等をあげうる。特にレーデラーのかゝる試みは、本書の著者のゆき方と全く近似的な諸點をもつやうにさへ思はれる。だがそれにも拘はらず、それらはいづれも過去において失敗の敎訓を我々に殘したにすぎぬ。私はこれをもつて著者の試みの將來をトしようとするものではない。だが私の率直なる言葉を許されるなら、私は、この試みに精進されつゝある現在の著者に對してよりも、この試みの失敗後の將來の著者に對して、むしろ興味とそして期待とを繫ぐものである。(同文館)

關榮吉著
文化社會學槪論

松本潤一郎

社會的文化を考察するに當つて、科學的な客觀的見地に立つて國民、階級、時代を三つの基礎範疇とし乍ら、それを敍述し、槪括的に法則化して居る、著者が客觀的觀點に據るのは、云ふまでもなく嚴正な科學を標榜するからである。重要なる結果の一つとして、イ

デオロギーに對する唯物史觀の解釋とは異つた見方を代表する。文化史を正視靜觀する。そして物的文化と精神文化の相互作用を堅く把持したのである。國民、階級、時代の三種を範疇として捕へたことは、文化が主として國民的特質、階級的特質、時代的特質を發揮するが故である。又此等の特質が文化に立證しうる結果として、文化が社會的地盤の上に生ひ立つこと、社會學的吟味に堪ふるとするのである。私は此等の著書の基礎的見解を尊ぶ。從來我國に缺けて居た所の、文化の科學的考察、就中社會學的究明に著者が名譽ある先鞭をつけたことを頌讃したいのである。

扨て、國民性とは何者ぞ、その認知は如何にして科學的に與へえられるか。文化の階級性、階級文化といふこと。「時代」の意義、時代性と時代精神との關係、反動思想の本質、過渡期と先驅者の問題、時代發展の方式。外來思想と固有文化、文化輸入の事實、傳統の魅力、征服と文化、支配の文化的意義等々。此等の諸事項、諸問題は皆叡智的な現代人に向つて正しい理解を強要するものでなくて、何であらうか。然し哲學書に於て、又倫理學の著述に於て、私達は之を徒勞に尋ね來つたのである。然し今は之を憂ふるを要しない。本書がかゝる方面の事柄に關して與ふる解答は快きまでに明晰であり、親切であり、そして滿足なものだからである。

社會學の一部門としての文化社會學の領域、方法、問題に關して本書の内容が必しも概論としての性質を全ふせざることを指摘する者があるかも知れない。又取扱が常に「社會集團」的見地に於てのみ究明を受けなかつたのも事實である。さり乍ら最近各國に於て若々しく、然し力強く踏み出された文化社會學は、未だ何處に於ても體系化しては居ないのであつて、此點について我が著者を責むるは酷である。又フランス、アメリカ流の文化社會學と趣を異にせることは、寧ろ此書の日本文化的意義を宣揚するものではなからうか。事實上著者は獨逸に於て培れたる文化社會學の傾向を批判的に受容することによつて、獨自の方針に出でたるものである。日本社會學は又實に日本文化的存在たる以上、私達は此點に於ける著者の先驅者としての勞苦を高く評價しなければならぬ。同一方向に於て、多くの攻究が著者の後に續くであらうことを期待し、祝福したい。(菊判三〇一頁、定價二・五〇、東京堂)

世界高給者物語

澤田謙

一

いかに世智辛い世のなかだとて、他人(ひと)の月給袋の底を搔き廻して、算盤(はじ)を彈かうなどとは、餘り愉快な仕事ではない。少なくとも、あまり上品な仕事ではないと思ふ。

が、また一方から考へれば、ヤレ緊縮の、減俸の、不景氣だとか、失業苦だとか、喧(やか)ましい今日この頃、誰それは何十萬圓とるとか、何某は何百萬圓なんかつて話は、聞いただけでも浮世ばなれがして、妙な氣持がしないわけでもなからう。

それに私は、別に金の話ばかりをしようといふのではない。性來、駄辯家に生れついた私のことだ。いつ何處に脫線するか、自分で見當もつかない。その積りで讀んで頂きたい。

最初は、『年俸百萬ドル也の契約書を引き裂いて、流石の黄金王モルガンの度膽(どぎも)を拔いたといふ、近頃痛快なるお話し——

二

話はユー・エス鋼鐵(スチール)會社が、カーネギー商會を合併したときのこと、その條件の一つとして、次の一項が掲げられてあつた、

『チャールス・シュワップを理事長とし、これに年俸最低百萬ドルを給すべきこと。』

他人(ひと)の收入のことだから、百萬ドルと一口に言ふが、日本の金にして約二百萬圓あまりだ。——この邊で少し算盤を彈いて見やう。

年に二百萬圓は、月にして十六萬六千六百六十六圓、一日に五千四百八十圓ばかり、一日八時間勞働とすれば、一時間の收入が六百八十五圓……といふんだから、日本の巡査(おまはり)さんが、精勤格勵、一年の間汗水たらして頂戴するほどの俸給を、當のシュワップ君は、理事長(やや日本の專務取締役にあたるであらう)の室に腰をおろして、葉卷を一本くゆらし、書類を二三枚めくつて、訪客と少々會談でも交へてゐるうちに、——時計の長針が一廻りしたら——彼の月給袋には、ちやんとそれだけの金が、毎時間ころげこまうといふのだから、實際、素晴らしいわけのものだ。

流石豪膽の聞え高かりしモルガンが、面喰つたのも無理はない。

シユワップの傳記書には、簡單にかう書いてある。やゝ意味深長だ。

『ゼー・ピー・モルガンは、何うして可いか判らなかつた。それまでの最高給記録は、十萬ドルであつた。彼は當惑してしまつた。』

現在でも、百萬ドル以上の高給者といふのは、むしろ非常な異例であらう。ドルの國アメリカですら、その高給者名簿には

北太平洋鐵道會社社長　百六十萬ドル
ユー・エス鋼鐵會社理事長　百五十萬ドル
スタンダード石油會社理事長　百四十萬ドル

などと記してある。尤も、この記事の典據は、あまり確かではないから、絶對に信用するといふわけにはゆかぬが、大體の見當にはなるであらう。

日本の高給者に至つては、私はいよ／＼以て不確だ。三井家の理事や、三菱家の重役などになると、年に三十五萬圓、住友家の理事でも二十五萬圓ぐらゐなことは聞いたが、何んなものか。

だが何れにしても、これらはすでに一種の財閥關係を形成くつてゐて、すでに純粹の給料とは言ひがたい。

ところが、シユワップの百萬ドルに至つては、全く意味がちがふ。彼は田舍で食料品店の小僧をしてゐた。そこへ偶然、カーネギー商會の總支配をしてゐたビル・ジヨーンズがやつて來た。

『旦那、貴君の工場で、使つては頂けないでせうか』

カーネギーの右腕と言はれたジヨーンズは、この少年の顏をじつと見つめてゐたが、何の見所があつたものか、シユワップに訊ねた。

『君は測量の杭が打てるかね？』

『打つことなら、何でも打てますよ』

かうしてカーネギーの鐵工場に、一日一弗の日給で雇はれたのが、抑〻シユワップの立身の始めであつた。それから後も、この有爲の青年を引立てたのは、ジヨーンズであつたらしい。

『貴君はピアノがお上手なので、それでカーネギーのお氣に入つたのだといふ噂ですが……』

と、人がシユワップに訊ねたとき、彼はあの特徴のある微笑を浮べながら答へた。

『大變な間違ひですよ。カーネギーさんに、ピアノを彈いて聞かせたことは、一度だつてありません。それはね、ビル・ジヨーンズさんが、或る日カーネギーのところへ私を引つ張つて行つて、

「ねえ、この青年は、この鐵工場のことについて、私と同じほどよく心得てゐるんです」

と、言つてからのことですよ。』

そしてこの青年は、まもなく、ジヨーンズのあとを繼いで、カーネギー商會の總支配人になつた。

『私の財産は、大部分、二人の男のおかげだ。ビル・ジヨーンズとチヤーリー・シユワップ』

と、カーネギー自身も、公言してゐる。

カーネギー商會合併前、シユワップは年俸百三十萬ドルであつた。一それは、百三十萬ドルだけ拂つても、まだ得であるほどの經營の天才を、シユワップが持つてゐたからである。

三

お約束通り、脱線した。こゝらで再び、モルガンとシユワツプの百萬ドル事件に歸らう。

　モルガンは、もとより、シユワツプの才腕の噂は知つてゐた。しかし百萬ドルは、何としても法外だと思つた。そこで、シユワツプを招んで、迷惑さうに、例の契約書を見せた。

『君、これは何うしたもんだらうね』

　するとシユワツプは、

『これですか』

と、その文面を見詰めてゐたが、何を思つたか、右の手に力を入れて、それをズタ〳〵に引裂いてしまつた。

　シユワツプは、かうして、世にも珍らしい百萬ドル契約を、破棄してしまつたのである。

『私は雇主が自分に幾ら拂ふか、そんなことは何うでもいゝ。金錢の動機によつて、私は働いてゐるのではないのだ。私は自分のしようと思ふことを信じてゐた。そしてそれの仕上がるのが樂みなのだ。だから一瞬間の躊躇もなく、その契約を破棄して、モルガン氏の心配の種を取り除いてあげたのだ。』

　シユワツプは、そのときのことを、かう説明してゐる。そして、百萬ドル契約は破棄されたけれども、理事長の椅子には、快くついた。そしてユー・エス鋼鐵會社は、旭日昇天の勢を示した。

　流石は、あの銀行王國をつくり上げたモルガンだ。シユワツプのこの才腕を見ると、默つてはゐなかつた。そして、シユワツプに對しては、破棄された契約の全額を、社債でもつて贈つた。

　しかし、人も怖れるモルガンの前で、契約書をズタ〳〵に引裂いたシユワツプの意氣には、モルガンも驚いたらしい。そのことを後にカーネギーに話すと、カーネギーは快心の微笑を浮べて言つたさうだ。

『さうだらうね。そんなことのできる男は、まア世にシユワツプ一人だらうよ。』

　そこでシユワツプは、かう言つてゐる。

『仕事の興味のためではなくて、金のためにだけ働らくといふ人は、結局、金も得られなければ、生活の興味も覺えられないやうですね』

　私も實は、シユワツプの言ふ通りだと思ふ。月給袋ばかりを當てにして働らいてゐるやうな奴に、大した仕事ができやう筈はない。

　しかしだ。それは果してサラリーマンだけの罪だらうか。

　私は妙なところで、議論をしようといふ所存は毛頭ない。が、給料のために、大勢の人を働らかせてゐるところに、現今のいはゆる資本主義的事業の陷穽があると思ふのだ。

　日本の事業界が、さつぱり萎縮して振はないのも、かうしたサラリーマン氣質が、禍してゐるのではないか。いや、事業界そのものの組立てが、すでにさうなつてゐるからではないか。

　シユワツプだつて、さうだらう。家に産なく、給料の上り方は、蝸よりものろく、それと反對に、白髮の數は日增しに増えてゆくといふのでは、さう思ひきつた啖呵も切れなかつたらう。

　シユワツプは正直な男だ。自分でチヤンと正直に告白してゐる。

『何のために働らくか？　私はそのとき、すでに費ひきれないほどの金があつた。私には子供はないし、妻は自分で自分の財産を持つてゐる。妻には金はいらない。私にも金はいらない。だから私は、仕事が面白いから、そして仕事の發展に、創造の悦びを感ずるが故に、働らくばかりなのだ。』

誰だつて、かういふシュワップの地位を羨むであらう。そしてそれが、全世界少數の異例であるのを、嘆くであらう。

四

馬鹿にシュワップのことばかり述べたてるやうだが、丁度い丶例だから序でにも少し話さう。

それは彼が、三年の後に至つて、そのユー・エス・スチールの理事長を辭職したことである。

それは、世間にはモルガンと喧嘩したためだと、傳へられてゐる。しかしシュワップ自らは、かう言つてゐる。

『私は一度だつて、モルガン氏と意見が衝突したことはなかつた。私たちは終始一貫、最も意氣投合した親友であつた。私が辭職したのは私の一生のやりかたとしてゐたところが、やり得なくなつたからだ。理事會であるとか、大株主であるとか、その他の利害關係に掣肘されて、私の才能を有用に用ひさせてくれなくなつたからだ。ピッツバークに工場を建てやうとすると、或る重要な理事者は、それはシカゴに建てなくてはならぬといふ。一つの主義に基いて、何かの着手をしやうといふ場合、株式への影響を怖れて、事をまとめやうといふやうなことは、私は好まぬ。だから私は辭職したのだ。』

シュワップがいま『鋼鐵王』などといはれてゐるのは、このとき斷然獨立してからである。

こ丶に注意すべきは、シュワップほどの偉大なる『百萬弗サラリーマン』でさへも、若し彼に事業的誠意があるならば、結局においては、會社をおん出なくてはならぬ時が來るといふことだ。

これは一面においては、事業界が安定するか、乃至は事業そのものが安定したことを示す。安定といへば人聞きがい丶が、反面からいへば沈滯だ。

この意味において、日本の産業界は、あまりに安定しすぎた。これから益々發展しようといふ活力を失つてしまつた。進んで取れば、いよ／＼金が儲かるといふときこそ、一介のサラリーマンにも、活動の原野があり、從つて立身出世の餘地もあつたが、このごろのやうに會社の重役は金庫の番人とあまりちがはなくなつてくると、さういふ高給の經營技術家は要らなくなつてしまつた。

昔のやうに、日給十錢の給仕から叩きあげて、つひに大財閥の大番頭になるなどいふことは、夢にも及ばぬことであらう。尤も、心機一轉、小さいながらも自分の事業をはじめて、それで産をなす人は別だが、その機會もずつと減つたものと思はねばならぬ。

それも無理はない。世は苅菰と亂れて、攻略すべき領土が四方にころがつてゐたときこそ、草履取る手に天下も取れたらうし、槍一筋でも功名次第では、隨分何萬石、何十萬石にありつけたらうが、徳川幕府といふ大組織が安定してしまつて、刀は鞘に槍は袋に、といふこと

になれば、天下を支配するものは、固定した大小名や格式に限られるといふのと同じわけで、多數株を握らなければ、口の利けない時代になつたのだ。

何んな馬鹿でも、大名の家に生れれば殿樣であつたやうに、資本を代表しなくては、重役室にはおさまれぬ時代になつたのだ。

シユワツプがおん出た理由も其處にあるであらうし、日本の產業界が振はなくなつた所以も、其處にあるであらう。

從つて、高給者物語は、何うしても、多少回顧的趣味に陷りやすい。

五

思へば明治以來、帝國大學だとか、慶應、早稻田、高商といふやうな、官私立の學校が、何れだけ澤山のサラリーマンを養成したことであらう。それらのサラリーマンのめざすところは、課長、局長、次官、大臣と經登つて、最後の目標が內閣總理大臣でなければ、銀行會社に入つた人たちは、頭取、社長、重役をめがけたものだ。また、それも決して夢ばかりではなかつた。

しかし、今や、一方政界の本流は政黨上りの野人どもの泥草鞋に踏み躙られ、他方實業界の方は、資本的勢力に壓倒されて、重役の椅子にありつける望みが絕えたとすると、今時、苦しい工面をして子供を大學にやる親達こそいゝ面の皮だ。いや、若し昔の通りに、立身出世の登龍門のつもりで、學問をする人があるならば、それは飛んでもない間違である。

だからこそ、頭のいゝ奴はマルクス・ボーイルに化け、あとの三分の一ばかりが、幸運にも、『金のために』サラリーマンとなり、そしてあとの三分の二が、就職難に陷つて、社會問題の釀成器となるのだ。

六

そこで、太平の世のあぶれものが、浪人となり、俠客となつたやうに、近ごろ一技一能の士は、次第に官界、實業界の本流から離れる傾向を生じて來た。

本流以外で、高給者といへばおかしいが、收入の割に多いものがあるのは、辯護士とか、醫者とか、文人とか、畫家とか——所謂『自由職業者』であらう。しかしその多くは、俸給生活者ではない。文人のなかで、年にいくらといふ高給を得てゐるのは、近ごろ國民新聞社長から、日日新聞に入つた、德富蘇峯先生くらゐなものであらうと思ふ。

菊池寬君とか、鶴見祐輔君とか、この一本の萬年筆から、何れだけの金を稼ぎ出すものか、私は稅務署でないから知らないが、恐らく大臣以上であるのは間違ひあるまい。いや、大臣以上の收入を得てゐる文人は、大衆作家のなかにでも澤山あるであらうと思ふ。

松竹が中村歌右衛門丈に、いくらの報酬を拂つてゐるのか、これも知らないが、歌右衛門が一枚加はるといふと、場代が一圓方づつくらゐ上るところを見れば、相當のものだらうといふ想像はつく。

この劇壇の俳優に對して、日本の映畫俳優の俸給は、割に貧弱なものらしい。貧弱といつても、その邊のサラリーマンが聞いたら、まさに垂涎三尺すべきもので、その筆頭は阪東妻三郎の一萬五六千圓ださうだ。次は市川百々之助の一萬六千圓、勝見庸太郎の一萬二千圓、

井上正夫、藤野秀夫、明石緑郎、尾上紋十郎、河部五郎、谷崎十郎などの一萬圓見當、林長二郎、嵐璃徳の九千圓内外、岩田祐吉、鈴木傳明の八千圓といふところださうだ。

女優では、栗島すみ子、夏川靜江、酒井米子などが大關で、八千圓だといふ。

これらは、稅務署の調べだといふから、相當のところまで突つこんだものだらう。

それに比べると、アメリカの一流映畫俳優の收入は、全然、ケタ外れらしい。尤もアメリカでは、會社直屬、年いくらの決めで、その間、無暗に映畫をつくらせるなどといふのは少なく、多くは映畫によつて、誰某を何に使ふと決め、その期間の給料をその度毎に契約するのださうで、一種の自由職業者である。

私はかういふ、契約を待つてゐる女優たちを、澤山に見た。ロスアンゼルスやホリウードの街は、かういふ人たちが、群がり散じて、街も珈琲店もデパート・メントストアも、鼻がつかへさうだ。と、言つても大して誇張ではないと感じた。

そこで、かうした人たちの年收であるが、それを物好きにも、たんねんに調べた人があつて、その切拔を實は保存してゐたんだが、何うしても見當らない。尤も今朝の東京朝日の『青鉛筆』を見ると、映畫俳優の生命保險金が出てゐた。

筆頭はジョン・バリモアの二百萬ドル。次はセシル・デ・ミルの百七十五萬ドル。これから、ノーマ・タルマッヂとバスター・キートンが各〻百二十五萬ドル。百萬ドルの人に、ギルバート・ローランド、メリー・ピックフオード、ダグラス・フエアバンクス、ウイル・ロヂアース、アル・ジョンソン、シトローハイムなどださうだ。

その邊で、大抵の見當をつけて貰はう。

七

職業野球選手の俸給は、大抵は年極で、或は二ケ年、三ケ年といふやうに契約する。映畫俳優に比べると、この方がやゝサラリーマンに近い。しかし年收は、何うも映畫俳優には及ばぬらしい。

野球選手のなかで、一番の高給者は、皆様おなじみの本壘打王ベーブ・ルースで、これは年に十四萬圓とつてゐた。

尤も、昭和元年までは十萬四千圓であつたが、いよ〳〵契約滿期と見るや、ルースは聲明書を發したものだ。

『新らしく契約する際には、自分は一ケ年二十萬圓の俸給以下では、決して應じない。』

これがその當時、一種のセンセーションを起したもので、結局、ヤンキースの持主ルパートと談判の結果、十四萬圓と決つたのだが、それにしても、外の仕事といつたら、何う贔屓目に見たつて、ホテルの守衞かポーターくらゐしかなれさうもない男が、バット一本で一ケ年十四萬圓とは、少々癪にさはるといふので、物議を釀したものである。

『一生かゝつて、癌の研究をしたとか、病理の發明をしたとかいふものが、その酬いられるところは、單に新聞に寫りの惡い小間の寫眞を載せられるくらゐが、關の山だのに、この一個の野球選手は、巨額の金をポケットにねぢ込むといふのに、何としても不合理である。誰か

に社會組織の缺陥である。』

そんな風な論説さへ、新聞紙に現はれた。

これは、祕かに無冠の帝王を以て自任してゐながら、この月末の俸給袋には、百圓ぐらゐしか入つてゐない。新聞記者諸君の鬱憤であるとのみ、簡單には形づけられないところがある。

ルースの一ケ年の收入は、おそらく五十萬圓の上に上るだらうといはれてゐる。それは一年十四萬圓の報酬のほかに、映畫會社からは十五萬圓はいり、野球の休みには方々の寄席(ボードビル)から引ッ張り凧で、その顏見せが十三萬圓。そのほか田舍廻りで四萬圓。新聞に時々寄稿するので二萬圓。それから、『ベーブ・ルース愛用』とか、このボールの品質を證明す』とかいつたやうな、名前を貸すだけで一萬圓。――といふのだ。

年に五十萬圓といへば、北米合衆國大統領の年收の二倍半に當る。

しかしベーブ・ルースが、一本のバッドで、年に五十萬圓の金を叩き出すと言つて、それを無暗に憤慨したつて、仕樣がない。――世は大衆時代となつたからだ。

いや、同じく大衆時代になつたおかげで、アメリカの新聞記者諸君は、妙なところに、活路を見出してゐるではないか。他人のことばかりは言つてはゐられない。

八

日本では、退職軍人は體操敎師となり、官吏の古手は貴族院議員になり、某前大官といはれたら市ヶ谷に行くことと、大抵相場はきまつてきたが、新聞記者の活路は一體、何處に開かれてゐるのか。

このことを、或る時、アメリカの新聞記者に聞かれて、私は當惑した。困つたときには逆襲するに限る。

『で、君の國では何うするんだい』

するとアメリカの友人は、平然として答へた。

『會社の重役になるさ』

『え、重役?――になつて、何をするんだい』

『パブリシチーの仕事さ』

パブリシチーの仕事といふのが、つまり大衆時代の生んだ一つ重要な會社事務である。

なアに、世間が何と言はうと、と、高を括つてゐた時代はいざ知らず、世のなかが大衆時代になつた以上、事業そのものも、大衆的にならざるを得ない。鐵道を經營するにしろ、自動車を賣りだすにしろ、乃至はカラー一つ賣るのでも、要領は大衆から零碎な金をとつて、その巨大なる事業は成立してゐるのだ。して見ると、

『これは大衆の人氣に投ずるだらうか』

それが事業をはじめる第一步である。いよいよ人氣に投じ得ると見込がついたら、そのつぎには、大衆の人氣を煽ることが必要だ。でからでなくては、危險(あぶな)くて手が出せない。

それがパブリシチー――つまり宣傳だ。

これがために、新聞記者の足を洗つて、大會社から隨分の高給をもらつてゐる人が、アメリカには澤山にあるやうだ。

このパブリシチーの仕事に、はじめて着目して、獨立の看板をはじ

めて出したのが、世に『宣傳王』といはれるアイヴイー・リーで、忽ちにして數百萬圓の産をなした。いまではその事務所には、數百人の人がゐて、宣傳の仕事を引受けてゐる。

リーは、個人の宣傳でも、會社の宣傳でも何でもやる。進んでは一國の宣傳までやる。フランスの政府が、アメリカで國債の大募集をやつたとき、アメリカ全土に亘り、フランス國の宣傳をやつて、その國債募集を成功せしめたものは、アイヴイー・リーであつた。

『日本といふ國は、世界一の宣傳下手な國だ。俺が一つ行つて滿鐵の宣傳でも、ウンと世界ぢうにやつてやらうか。』

かう言つて、リーは日本に來るとかいふ噂であつた。しかし到頭そのときは來なかつた。宣傳なんて、下品なことは、こちらが眞ッ平だと、まさか斷つたわけではあるまい。

九

高給者物語に、一國の大統領や、首相の俸給のことがなくては、おさまらぬ人があるだらう。

日本	首相	一萬二千圓
英國	首相	五萬圓
米國	大統領	十五萬圓
獨逸	大統領	五萬圓
佛國	大統領	十一萬圓
露國	人民委員長	二千七百圓

機密費の交際費は、勿論、これ以外だ。

これで見ると、流石にアメリカの大統領の俸給は、一番多いことになつてゐる。しかし、たつた十五萬圓の年俸のほか、五萬圓の交際費では、大統領の交際ができないのは判りきつてゐる。

それを何うするのか。

今の大統領フーヴァーのやうな金持ならば、文句はない。しかし、前の大統領クーリッヂは、大統領になつたおかげで、大部借金をつくつたらしい。

『俺はこれから故郷に歸つて、自叙傳を書く。そして借金の穴埋めをするんだ』

などと、不景氣なことを言つてゐた。まさかと思つたら、やつぱり書いて、近ごろはそれに、一日に一千册の速力で、署名してゐるといふことだ。

學究ウイルソンも、勿論、學者ではなかつた。だから、有名な『ホワイト・ハウスのお茶』に、列國の貴顯紳士淑女を招待するとき、その御馳走が、紅茶とサンドウイッチだけだつた。などといふ話も傳へられた。

日本では緊縮内閣になつてから、民政料理なんて名前まで出來た。しかしまさか内閣總理大臣の招宴が、サンドウイッチだけだつた、などといふ噂は聞かない。

首相の年俸たつた一萬二千圓——その日本では、一度でも大臣になるくらゐの政治家は、大抵は平素でも宏壯な邸宅に住み、別莊の一つや二つは持つて、高給自動車におさまつてゐやうといふんだから、そして世間もそれを當然のこととしてゐるんだから、日本といふ國も、案外うまいことのある國にちがひない。

アメリカ通信

雨棲の怪物をまたぐ

本誌特派員 在シアトル 清澤洌

1

島中兄——

二千マイルばかりの旅をして來て、鞄をそこに放り出したまゝ、この原稿を書いてゐます。忙しい中で、ものを書くことだけは、長年の經驗から相當に修練をつんで居る筈ですが、かう汽車から自動車、自動車から飛行機といふ風に、一時間何十マイルの速力で引きまはされては、考へる前に大概目がまはつてしまひます。

文明とは考へることを不可能ならしむる社會のことなり、と誰かゞいつたか云はないか知りませんが、とに角、文明といふものが騷がしくつて、忙がしいものであることだけは確實です。この前にもスピードのことを書きましたが、日本から來て一番氣になるのは何といつてもスピードと騷音でせう。米國の特長は？と聞かれゝば、まづ取敢へずこの二つをあげたいくらゐです。

百貨店に行つてエスカレーターにのると致しますか。三越あたりから得た私共の經驗では、一階から二階に行くエスカレーターは病み疲れた牛が峠でも上るやうに、緩漫に引きあげるものに決つてゐます。ところが先頃、そんな氣構えで、あるデパートの同じエスカレーターにのりますと、ヘッと思ふ間に上にあげられて、危ふく赤毛布をさらすところでした。

エレベーターが早い、自動車が早い、歩き方が早い。その上にかういふものが、入り亂れた音波を造つて雜音になるのだから、その八かましいことゝいつたらありません。さすがにアメリカ人も、騷がしいことに氣がついたか、タイプライターなどは『音無し』を大分使つて居るやうですが、そんな程度ではエンヂン・ムールの中で赤子の泣くのを止めるやうなものです。

かういふ騷々しい街の角にたつて私はタゴール翁を憶出ひしました。私が渡米する少し前に、米國に憤慨して突然豫定を變更して歸途についた印度の詩聖は、東京で、あの鈴を振るやうな聲で『有閑の哲學』を說いたのでした。米國に對しては流石に明らさまには何んにもいひま

せでしたが、その不滿の調子は座談の隻語にも現はれました。

タゴール翁が憤然として歸國したのは、移民官の態度にあつたさうですが、かりに移民官がどれだけ丁寧にしましたところが、どうして米國の文明と「有閑哲學」が調和しませうか。私はタゴール翁を横濱の埠頭に出むかへましたが、船が横濱に近づくや、翁は自分の船室を占め切つて、誰にも逢はず、私達はたゞ名刺だけをおいて歸つたのを記憶してゐます。かれは人と機械の騒音によつて、自分の冥想が破られるのを懼れたのです。

日本はタゴール翁の哲學を調和しうる最後の「文明國」でせう。日本ならばかれは安心して、あの長い衣服をきて、瞑目しながら、「有閑哲學」を講じえます。その機械の騒音は、まだかれの哲學の調子をみだすまでに騒がしくはありません。東と西——靜的文明と、動的文明との間にはさまつて、西を望みながら、日本はまだ多分に東に未練を持つてゐます。

2

タゴール翁が、どう憤慨しようが、併し米國の機械文明はドルを心棒として回轉して行つてゐます。

『諸君が私に米國の印象を求められるならば、外國の旅行者の殆んど全部が、諸君に話したと同じお話しをするの外はありません。米國でドルの力が、どんなに公然と偉力をふるつてゐるかです』

私はワシントン大學の學生に對する講演で平凡ながら話し出しました。誰も經驗あることでせうが、私達は支那人や印度人の前にたつては、無條件にかれらの美點を讃めあげることができます。併し米國人などの前に出ると、何か一つ中心のものをつかまへて、大建物をゆすぶつてやりたいやうな氣持になるものです。つまりさう無條件に感心してしまふのが癪なのです。それには最もいゝのがドルを持ち出すことで、だから御覽なさい、新世界からの旅行者で、まづドルを云ひ出さないものがありますか。

私も平凡な手だと知りながら、米人の大學生を前にしてこれを持ち出したのです。

私は日本が長らく米國を忘れてゐたと云ひました。米國によつて國を開かれ、米國の機械をとり入れ、米國のドルが日本の經濟を潤ほして居つたにも拘はらず、日本は今まで米國に頭をむけることもしなかつた。その證據には米國に關する完全な一つの著書もなかつたではないか。なぜか、日本人は米國の靈魂を、米國の思想を信ずることが出來なかつたからである。私はかう間接射擊をいたしました。

米國のものといふと一種の侮辱を以てみてゐた事、日本は各國を研究しつくして漸く米國に頭をむけて來た事、排日移民法が米國に注意をむけさせた事——かういふ事を並べたてゝ、少しは手答があるかと思ふと、同大學教授のグリッフイン氏が小さい聲で『結構だ、米國人は平手で自己滿足の額を打たれるやうなことを却つて喜ぶのです』——といふのです。これでは喧嘩になりません。

そこで矢張り私はドルを引き出しました。米國に就ておいて、移民

官に第一に聞かれたのは『君は幾ら金を持つて居るか』といふことでした。こゝで想出しましたが、米國で移民官ほど嫌な人種はありません。人の顏を見ると直ぐ

『何に來たんだい』

といふのです。普通ならこんな質問に對しては、『ウオール街の高層樓(スカイスクラッパー)にダイナマイトをしかけて、米國の資本主義をゆすぶりに來た』とでも答へてやるところですが、そんな事をいふと送還される外はありません。お役人と石地藏は、この國でも勝てないのかと、齒を食ひしばりながら四角四面に答へたのでした。

入國手續について、第一に船の一等と三等とは貴族と乞食ほどの差別的待遇を與へられます。一等船客とは何ですか。ドルを餘計拂つたこと以外に何にもありません。それから船からあがると、タッキシが澤山竝んでゐますが、それには箱の周圍に大きく、50. 75. 100 と書いてある。日本の圓タクなら流して居る間は仕方がなく札をかけてをるが、人が乘るが最後手早く隱してしまふところだが、この國では五十センツのお客が、看板をかけたまゝ堂々と驅け歩いてゐる。道の門には大きな廣告に "Dollar for Dollar's worth" とか、"Goods for real purchasing Dollar" とか、ドルをむきだした看板が立つてゐます。

邸宅區域には、家庭のフロント・ウインドーに 25cents とか 50cents とかいふ札が出てゐる。聞いてみるとそれだけ氷を配達してくれといふことだそうで、なんの事はない、これは五十センツの家庭、これは二十五センツの家庭と廣告をしてゐるやうなものです。新聞を見ると何百層のビルが立たるといふ代りに『何百萬ドルのビルヂング』で片づけて居る。

かう私だけが感じたといつては景氣が悪いから、片假名を引張つて來ました。かうした點では日本で苦勞したゞけに心得たものです。

マシユー・アーノルドが一八八六年に米國に來た。自分の娘が米國に居るので、それを見舞ひに來たのです。かれの頭を打つたのは矢張りドルの横行でした。その孫に當る五六歳の子供が五ドル紙幣を玩具として遊んでゐるのを見て「かれは like true little Yankee として紙幣を振りまはした」と書いて居ります。

私はかういつて、アメリカにドル中心の新貴族が出來て居るといひました、『どの新聞にもソサイチー・ページといふものがある。平民國の諸君の國に社交界といふものは誰が行くところなのか。誰もかれもがデモクラッシーであれば そのページを獨占しうるのは誰なのだ。ドルによる貴族社界が出來て來てゐる證據ではないか』。このドルの貴族に加へて、政治的貴族が擡頭してゐる證據として、今ワシントン府で問題になつてゐる副大統領カーチスの妹ガン夫人の席次爭ひをつけ加へました。ガン夫人の席次爭ひといふのは副大統領に夫人がないので、今までその家庭を運轉して來た副大統領の妹が、副大統領夫人の社交的權利を主張し、どんな大きな外交問題よりも朝野を惱まして居る問題なのです。

『私は米國に何がなくても、デモクラッシーだけはあると信じて來た。それだのに米國は今、諸君が排斥する舊社會の階級組織を追ひつゝあ

るではないか』

そんなことも私は云ひました。

3

島中兄——

かうして私が、私の通信の中に自分の講演の一部などを引用する潜越を敢てするのは、必らずしも大兄が、『何でも書いてくれ給へ、却つて大膽に自己を現はした方がいゝよ』と私を送つてくれたからではありません。私はかうしたことを語りながら、どこかに一種の不安を覺えて居つたことを語りたいがためなのです。

もし私の聽衆の中に眞面目な人が居つて、『貴下のいふ米國の缺點は總べて認める、私達もそれをどうかしたいと心得てゐる。併し精神文明を說く東洋にはそれがないのか。少なくともそうした方向に向つて居ることはないのか』。と聞かれたら、私は何と答へていゝかといふことでした。

こゝでまた道草をとりますが、アメリカでは講演なども、やりつ放しといふことはありません。必らず質問應答に相當な時間をとつてあります。日本なら喋べるところだけ調べて行つて、勝手なだけ話して素早く原稿を丸めて壇を下りさへすれば、大概難を脫がれるのですが、この國ではその手はきゝません。ある有名な英國の講演者で、米國の犯罪のことを話したが、聽衆の中に數十年も警察行政をやつて居つた人があつて、それに突込まれてひどい目にあつたと自白してあるのを讀みました。

米國では一人で高いところから話すといふやうな方法は殆んどなくなりました。いはゆる Group discussion で、全員がその會の一員として參加するのです。かうすれば誰が上から命令するのでも、教へるのでない、自分もその會の同じ一人だといふ安心をかれに與へます。また自分も發言の權利ある事、その會にある程度のコントリブユートができる事、そうした點から、とに角デモクラッシーを看板にして居るかれ等には、それが普通になつて來てゐます。

すでに自分がその會に參加して、その上に決定したといふことになると、かれ等はこれに束縛される義務を感じ出します。たとへ自分が反對であるか、默つて居つて發言しなかつたにしても、それは上からたゞ云ひ渡されたものと感じ方が違ひます。アメリカにおいて近頃『多數者の暴虐』といふやうな文字が見えるのは、一部をかうしたところに發してゐると思ふ。

いづれにしても米國人が多數者の裁斷に服從するといふ精神は、一寸他で想像も出來ないほどで、だから流行なども一度襲つて來ると壓倒的な力で公衆を薙ぎ倒し、例外を許さない。いづれ後便で論ずる機會はあると思ひますが、米國繁榮の一原因である產業の標準化、單純化なども、この精神があつて可能であつたと私は思ひます。

こんな質問御免の國だから『そういふお國はドルのインフルエンスから安全ですか』と聞かれたら、逆襲法でその場は切りぬけるにしても、私のは相當にあはてるやうなことがなかつたであらうか。私の顧

には一つのアネクドーツが浮んでゐました。タゴール翁を引きあひに出したから、お氣の毒ながら、も少し交際つあつていたゞきます。

4

アメリカの講演を中止してタゴール翁がアジアに引きあげるといふので、東京のある大きな新聞は無線電信でその連續講演のことを交渉しました。これが翁の容るゝところとなつて、いよ〳〵東京でそれが開かるゝことになりました。そのお禮のことも無論交渉をしてありましたが、こゝではそれが相當に多額のものであつたと承知下されば結構です。

翁が病氣であつたりして、豫定通りの講演は出來ませんでしたが、さてそのお禮の段になつて、件んの金一封を持つて行きますと、それが問題になつた。少ないといふのです。新聞社が金持なので、もつと貰ふべきだと周圍のものにいはれたためだとか、或は中間者が始めに傳へなかつたからだとか、いろ〳〵の憶測は單に憶測としてこゝでは書きますまい。たゞそれが問題になつて、タゴール翁がそれを受取らなくて大變ゴタ〳〵した事實を書けば充分です。

一方も信用ある新聞社として、そのまゝにしてをくわけにはゆきません。何回も往復して結局始めの豫定よりも大分増額し、これが渡して解決したのだそうです。それでもタゴール翁は最後まで繰り返しました。

『米國でドルのことばかり習つて來た者は駄目だ、どうも物質的で困る』

それは同翁の近くにあつて何くれとなく世話をした人に對する批評でした。……事實に間違ひがあると思つたら、お近くに交渉の中間に這入つて手を焼いた人があるからお聞き下さい。

こんな話しもある。

英國のある有名な講演家がアメリカに來てフイラデルフイア大學の主催で講演することになつた。ところがその講演料一千ドルを主催者が忘れて來たのです。『それを貰はなければ講演は出來ません。』さういつて講演を始めないのです。

主催者側は知人を晩餐に招いてをきながら料理が出來て居らない時ほど驚いて、早速これを調達し、兎に角講演會を始めたといふことです。その時の講演の題目が『憂ふべきドルの跳梁（ちようりやう）と米國の物質主義』。

ミルク一瓶に十セントの金を拂ふことを忘れないアメリカ人は、學者や哲人の『思想』には値段のないものと心得てゐます。賽の行燈じやあるまいし、そう終始忘れられてはたまらんから、その英國の先生も頑張つたものでせう。無論無理のない次第です。

かうしたエピソードはお茶呑み話しにもならない下らないものであるにしても、疑問は依然として殘ります。アメリカはドル中心だ、それは誰に聞いても肯定する事實である。だが何處の國がドル中心でないのか。この貨幣中心の資本主義經濟組織で、どこの世界がドルを無

視してい、世界になつて行きつゝあるか。……そういふ世界に反抗したソヴエート・ロシアでさへも。

5

かういふ潮流に對し、激しい戰ひを續けてゐるものが、無論アメリカにもあります。

私はシアトルで例のお札博士を訪問しました。お札博士といふのはシカゴ大學の人類學教授であり、米國でもこの方面の權威者として知られろスタール氏のことですが、七十歳を越へたので、今はワシントン湖畔で研究に從事してゐます。

日本でいへば巖寺のやうな、米國でいへば古學校のやうな家の前でベルを鳴らすと、ネクタイもかけない巨翁が出て來ました。それがスタール博士自身なのです。

『どうぞこちらへ』

と連れて行かれる方へついて行くと、隅に日本の御面や額が取散らされてあります。そこを踏みわけて通されたのが、御自分の書齋でした。

なんといふ狼藉ぶりだ！　二十疊に余る部屋にはカーペットもなければ、壁紙もない。日本綴りの書籍が部屋一杯に擴げられて、どう贔屓目に見ても、古本屋の蟲ぼし以上にはふめません。

私が腰をかけますとその近くの本の積重ねたものがバタ／＼と落ちました。拾はうとするのを急いで手を振つて

『なに、も一つのパイルが落ちたまでだ、そのまゝにしてをいて下さい。』

と平氣です。

博士はこの年まで獨身で、ほんとの書齋人です。電話などがあると五月蠅いといふのでそんなものは無論ありません。妹さんが、たまに面倒をみるとのことでしたが、この家に「女の手」が這入つてゐると感ずるのには、餘程混入つた辨證法的論理を必要とします。

『一九二七年に日本に行つた時に、私は再び日本を見舞ふまいと決心しました』

席が決まると博士は直ぐそう口をきつた。自分の耳が遠いので自然に聲が大きくなるのでせうが、私には日本人である私を叱つてゐるやうにも聞えたのでした。

『なぜとお聞きになるのですか。日本がアメリカを無反省にとり入れて、あのアメリカ化はどうですか。私はアメリカのいゝところを取り入れるなといふのではありません。なんでもかでもアメリカを見習ふことは、自から劣等的立場を認めることではないか。私は十三回日本に行つた。もう日本を見るにたへません……お客様に對して禮儀ある言葉ではないでせうが』

博士はドシンとテーブルを叩きました。かれは日本に行くと必らず日本着をきて、日本式の生活をした。

『なぜですか。日本人をして何故西洋人は宣教師でも、商人でも自國の習慣を捨てないで、日本人だけが自己を捨てねばならぬかについて考へて貰ふためなのです』

かれはアメリカの物質主義を攻撃し、特に米國がヒリッピン島をとつたことに對して、始めから強く反對して來たことを雄辯にまくしました。

『併し來年また日本に行きます』。かれは一寸聲を落していひました。『それは個人の理由で、孫を見に行くのです』。同教授が世話をした人に子供が出來て、それを見舞ひに行くので『決して再び日本に來ない』と決心したことゝ衝突はしないと笑ひました。

博士にとつては書齋と本が妻であり、子供でありますが、保險會社はこれに保險をつけないといふのです。

『無學な者どもよ、かれ等は本の價値を知らない！』

さう吐き出すやうに云ひました。

私はこの老學者に心から敬意を表しました。アメリカの人間がみんな同じ型で、ジョンの性格を解すればフランクにもチャーレーにも當て篏まるといふのが通説ですが、併しいろ〱の人種と、いろ〱の境遇の人を包括する米國に、たゞそういつていゝのでせうか。現に私は殆んど一生をあげて、かうして東洋や日本を研究してゐる學者に三人にも逢ひました。

が、敬意を表するに拘はらず、丁寧に送られて門を出ると、私は今逢つた人が、「不可避」に對して聲をあげて、見込みのない戰ひを戰つて居るやうに感ぜられて仕方がありませんでした。野に叫ぶ豫言者の聲……私は聯絡がないと知りながら、聖書の中のヨハネの風貌を想出してゐました。

6

私が國境を越えてカナダに行つたのは、アメリカに來てから一ケ月ばかり後のことでした。

カナダに行く、といふと、この地方では、直ぐそれが何を意味するかが分ります。『バンクーバーに行くんだつてネ』と、一方の目をつぶつて、米人がよくやるジエスチユアーをやります。『なにしろ米國ではうまい酒が呑めないからネ』と御丁寧につけ加へるものもあります。

土曜日になると、大概自動車がシアトルとバンクーバーを繼けてしまひます。この間が百七十マイルとかだそうですが、女の髮の毛とアルコールの念力の強いのは昔しからの通り相場です。この間の二日續きの休日などには六千臺からの自動車が國境をパッスしたそうで、途中の自動車事故で死んだものが三件もありました。

『どうも日本料理で、刺身をつゝきながら水を呑むのは可笑しなものだネ』

昨夜、あるところの宴會を想出しながら、私を自動車で連れて行つてくれたシアトルの山口正律がいふのです。大變な御馳走であつたが、官邸の催ふしではあり、左黨に對しては畫龍點睛を缺いたのは申すまでもありません。吸物や刺身をほうばりながら、米國名物のアイス・ウオーター！ばかりガブ〱呑んでゐたのを遠望して、ひそかに同情してゐたところでした。

カナダと合衆國の國境には、たゞ小さい頭の尖つた墓石のやうなも

のが立つてゐるだけです。それでも二間ばかりの間は立木が切られて、眞直ぐに見透せるやうになつてゐます。一國と他國との境界で、砲臺一つなく、しかもそれが百五十年の間、敵意をいだいた軍人が踏みこえたことのない境界線は恐らくは、これぐらゐのものでせう。私はこの種の境界線が世界中に伸びることを心から希望せざるをえませんでした。

手續きも思つたほど面倒ではなかつた。米國側から行くものは、どうせ消費を主とすることが分つてゐますから、かれ等とて「外客招致」のこつは心得てゐます。

『こゝから公然呑んでもいゝんですネ』と、私は人のよさそうな移民官にいひました。移民官は國境線に連れて行つて、指でそれを教へてくれたのです。

『えい、公然、そして合法的に……』

『そこでもし』私は聞きました。『カナダ側に酒をおいて、この一筋の線を越し、アメリカ側でゴムの管か何かで呑んだらどうなりますか』

『そこに國際的紛議が起ります』

われ等はさういつて一緒に笑つた。

7

カナダに這入ると、さすがに様子が變つてゐました。私の親友であるステッキを持つて道を歩いてゐるものが少なくなく、巡査は昔來た時のやうにヘルメットではないが、日本流に威儀をつくろつてゐます。アメリカ側では町の辻に交通巡査が立つて、『通れ』『止れ』などをやつて居るところはありません。電氣の自動裝置でストップ、ゴー[illegible]圖をして、それでゾロゾロ走つて居る。自分の生命にかゝはることだから巡査などに指揮されなくつても結構、電氣裝置の命に從ふのです。それがバンクーバーでは大きな圖體の巡査が、まだ要所々々に旗を持つて交通整理をやつてゐます。自動車の數なども、アメリカ側に比して、餘程少ないやうです。

それよりも日本に近いと感じたのは、家の周圍に生籬のあることでした。日本のやうにコンクリートを張りまはして、その上に硝子の破片をはり鼠のやうに植えて、それで說敎強盜が恐いなどゝふるへてゐるやうなことはありませんが、とに角牆だけは多くの家庭が持つて居ります。

『一體、アメリカは何故自分の庭に牆をいはないんですか。大根役者の顏みたいに境目のないのも感心しませんぜ』

と何時かニューヨークで銀行家のオット・カーン氏に聞いたことがある。米國では自分の邸宅の周圍に一切塀や境界線といふものがないのは御承知の通りです。

『それは恐らく米國開拓時代の遺物でせう。當時、もし自分の庭のまはりに塀などをこしらへたら、あいつは水臭い男だぐらゐに思つたでせう、それかあいつは氣取屋だとでも云はれたに違ひありません。或はまた何か祕密があつて、それを隱すために不必要な塀で圍ひまはすと思つたかも知れません。それからアメリカ人は庭に誇りを持つてゐて、誰からも見て貰ひたいのです。つまり舊世界の諸君と、アメリカ人との間には根本的な相違があります。諸君は隣人を排斥し、アメリ

カ人はこれを歓迎するのです。新文明にどういふ缺點があらうとも、この點だけは舊文明より寛容ですよ』

高級なる美術鑑賞家として、理解ある大富豪としてかれは無暗に米國の美點を押し賣りする人ではありません。かれはこの點だけは誇りがにそう云つたのでした。

庭園だけが開放的であつても、それから中に這入ると直ぐ極端に區劃になります。それは英國人だつてそうですが、男の肌を女に見せない習慣などはまるで迷信です。今度も私は米國西北部一帶を汽車で旅行しましたが、汽車の寝臺に寝るのに、幕を下しきつてあの低い天井の中で洋服をとるのでせう。伸びたり縮んだり、まるで蝦のやうになつて苦行するのです。

『一體誰が誰に亂暴をしようといふのか。なぜ堂々と外で洋服をぬいで、堂々とベットへ這入れないのか』

私は一人で憤慨相撲をとつたことでした。ある程度のプライヴアシーは必要ですが、あれではまるで自分で窮屈袋の中に這入つて、悶いてゐるやうなものではありませんか。女に對する男の下らない迷信と遠慮が、自分を身動きのできぬやうにしてゐるので、この兩性の間に横はる溝の影響するところは多いが、それはいづれ後で書きませう。

カナダ旅行が大分脱線しましたが、始めから脱線するつもりで行つた友人の山口君と細谷君は、講演を終つた私をつかまへて報告するのです。

『酒場とも何んとも書いてないんだ。たゞショー・ウインドーを青黒く塗つてあるだけだ。そこへ這入つても立つてゐては酒をくれない。つまり立つてゐると亂暴したりして弊害があるからだらうネ。テーブルに座ると默つて持つて來て、ビール一杯十センツ拂へばいゝんだ。』

御承知の通りカナダでは酒を政府の經營にして（その州によつて法律の内容は違ひますが）公許のところだけで酒を賣つて居るのです。土曜日だけは午後十一時まで開いてゐますが、日曜の閉店、平日の早仕舞ひは他の店と同じです。日本酒も全部政府で買入れて、許可證（パーミット）によつて賣ります。

『矢張り英國人は實際的ですよ』と、カナダ人がお隣り國の禁酒を笑つての話し。

8

島中兄——

始め一ケ月ばかり滯在する筈であつた米國の西北部に、指を屈すればもう二ケ月近く滯つてゐます。過去二回の通信が、身邊の雜感を録するにとゞまつたことについては、謹しんで讀者と編輯局の諸君の寛恕を乞はねばなりません。

併しながら私が西北部一帶を視察して歩いたのは、たゞこの地方の僑友諸君が日本からの一浪客に親切であつたからのみではありません。米國が太平洋國としてその羽翼をのすのには、この地が出發點となるべき運命を持つてゐるからなのです。西に西にと進んで來たアメリカの文化と、努力と、溢れるごとき精力と……そして帝國的野心とは、一まづこゝに休息して太平洋の浪を眺めてゐるのです。

『アメリカは何時まで、誘惑に抗して、この線を越さないで居るのか』

私はカナダと合衆國を劃く國境をまたいで、獨りでそう云ひました。御覽なさい、ゴム毬(まり)のやうに擴がつたアメリカの勢力は、もうカナダを蔽ふてゐます。今頃、カナダが「英國の自治領」だなど〻思つてゐるものがあつたら世間が笑ひます。それは「アメリカの自治領」なのです。アメリカを外にしてカナダは何をなしえますか。

カナダは歷史を英國につなぎ、本能的衝動(インパルス)を米國につなぐ兩棲の怪物です。英國といふ親を持ち、米國といふ戀人を持つて居る多感の靑年だといつてもい〻でせう。この靑年に對し、米國といふ戀人が立つて招いたらかれはどうするであらうか。しかもわれ等が忘れてならないことは、私の今踏んでゐるカナダとアメリカの國境は、そのま〻オーストラリヤやニユージーランドにも續いてゐることなのです。

太平洋といふ渺茫たる海の眞中(まんなか)に、突如として色の變つた强漢が現はれた。それが「白人國」を看板とする白分達をねらつてゐる。そういふ畫面を想像してみて下さい。それが事實であるかどうかは別の問題です。かれ等がかう考へる時に、相集つて巨人の强腕に寄らんとすることが無理といへませうか。日本が太平洋の正面に端坐する間、米國のリーダーシップの下(もと)に、白人國の協力は安全です。この點で米國は日本に感謝すべき理由を持つてゐる筈です。

オーバン市といふところで、私のために歡迎午餐會を開いてくれた時のことです。そこの市長が、『日英同盟と米國の關係は如何』と聞きましたから『日英同盟を破棄したぐらゐ君の國で儲かつたことは少なからう。英國を奪ひ、カナダをとり。その上に支那に對する政策のリーダーシップを一厘毛でとつてしまつたのだから』と云つてやりました。『おれもそう思つてゐた』といふのだから圖太(ずぶと)い話しです。

だから御覽なさい。私が今、カナダと米國の國境をまたいで、太平洋を西に望んで居ることは、すべての太平洋問題の綱を一とこにたぐつて來て、その上に乘つて居るのであることを。この綱が現狀のバランスにある間は無事ですが、私の足の下からその一筋二筋がぬけ去る時は、太平洋の波が荒くなる時であるのです。

この太平洋の謎を將來に藏するアメリカ大陸の西北部はまだ殆んど太古のま〻です。材木などは切つても切つても出ます。自然の富源が多すぎて、限られた人間の手では迚も追ひつけないのです。

『この森林、この畑、この土地、この高原に殘るところなく人力が加へられるまでは、アメリカの繁榮に躓き(つまづき)は來まい』

私はどこまでも續く原野を、羨(うらや)ましそうに見ながらそういつたことでした。

(附記) 町のホテルで原稿が書けないので、私はワシントン州ベーンブリツヂ島にある古屋氏の別莊でこれを書きました。庭には林檎や梨子が誰も拾ふものがないので落ちて積重なつてゐます。パーラーに例の煉瓦で積んだストーヴがあります。杉村楚人冠氏が『ストーヴを造つたが薪が高くてね』と、いつか惜しそうに丸い薪をくべてゐましたが、こ〻らでは梁か天井板になるやうな大きな木を無造作に切り割つて、幾らでも投げくべます。材木に値段などはありません。その燃える火を前に安樂椅子によつて、驚くべくい〻葉卷をくはへながら雜誌でも讀むのです。メリケンもこ〻らは餘り捨てたものではありません。(昭和四・一〇・一三)



ダグラス氏講演會　〔於報知講堂〕

ダグラス「信用機關の社會化を讀む」

加田哲二

一

數年來私どもは、多くの社會思想を迎へ、そしてそれを送つて來た。乍併、社會思想の一般化といふ現象位根強い要求によつて、吾々の注意をこゝに惹きつけたものはない。年の老たると、若きとを問はず、現在の日本人は何等かの意味で社會思想を要求し、またはその研究批判を欲してゐる。この現象は一の流行といふにはあまりに、その恒常性において、他の流行に比して優越してゐる。こゝに社會思想要求の社會的必然性があるものといつていゝだらう。

マルクス主義はいろ〳〵の社會思想の中で、最も歡迎せらるゝものであると同時に、最も危險視もされてゐるところのものである。それだけ、マルクス主義における理論と實踐とには、刺激を含んでゐるのである。所謂思想問題として取扱はれるものは、マルクス主義である、たゞマルクス主義のみであるやうである。マルクスの名さへ發見されるならば、どんな見すぼらしい本でも飜譯される。マルクスの名を持つ本は實に現時の日本においては玉石混合の有様で存在する。ロシヤあたりの亞流マルクス主義者の價値のない本までが、ほんもののマルクスとともに飜譯せられてゐる。偉觀(?)といへば、

甚だ偉觀である。

私はマルクスの偉大を否定しない。このことは私の日常書くものを御覽下されば直ちに明白となるのであるが、たゞマルクスの名さへ本の中に書いてあれば、どんな本でもいゝといふのでは困る。社會學者並に經濟學者としてのマルクスの偉大とその意義とを充分に把握して、そして、それをマルクス以後の社會的發展に適合し、修正することこそ、吾々の科學的努力でなければならぬ。それには、マルクスの研究とともに、それ以外の立場の社會思想の價値をも嚴密に批判することが甚だ必要である。吾々はそのために、既に死した文獻を漁り歩けとはいはぬ。現在に生きてゐる社會思想の充分なる理解を必要だといふのである。

二

世界工業會議參加のために、現に來朝中のダグラス氏の信用の社會化論の如きは、その一であるといつていゝ。今度同氏の「信用機關の社會化」が岩村忍氏によつて、邦譯されたのを機會として、ダグラス氏の社會思想に關して、簡單な一文を草するのは、我が國の人々に對して、その社會思想的視野を擴大し、自由な社會思想の涵養に資することが多いと考へたからである。

ダグラスは、社會思想や經濟學を專門に教授し研究する大學の教師や所謂る思想家ではなく造船技師である。專門化の甚だしい現代では、ダグラスの如きは、變り種の一人である。だからダグラスの所說を讀んでゐても、大學教師風の考證癖や思想家風のジヤアナリズムのないことは、氣持のよいことの一つである。またこのことが考證風のものの歡迎される日本の讀書界にはもの足らぬことにされるかも知れないが、元來考證などといふことが大した意義や價値を持たないものであると同時にそれはある意味においては、自由な思想の成長には反つて妨害になる場合が多い。この點だけでも日本の讀書界、思想界、はダグラスなどの行き方に學ぶべき多くのものを持つてゐるといつていゝのである。

三

ダグラスは、ギルド社會主義者の中に數へられる一人である。前年日本でもギルド社會主義の紹介飜譯などが盛んに行はれて、思想界の一勢力になつたことがあつた。私も當時ギルド社會主義に關する多くの文章を書いたのであつた。乍併、當時のギルド社會主義の紹介文章には、あまり多くのダグラスの名前を發見してゐない。勿論二三氏によつて、ダグラスの信用經濟學が紹介されないこともなかつたが、彼の名はその他のギルド社會主義者殊にヂ・デ・エッチ・コオルに比すると日本に知られてゐることが甚だ少ない。

これには理由がある。ダグラスの名はギルド社會主義運動の後期に表はれ始めたからである。ギルド社會主義は生產者の自由を目標として、この理想を實現すべき將來社會の構成に關する議論に始まつてゐる。それは社會學上においては、社會の構成における機能學說として、充分の價値を有するし、また國家論上へのそれの應用としての多元的國家觀として極めて尊重すべき理論を生んだ。たゞかくの如き尊重すべき理論の上に建設せらるる將來社會への現代社會の推移に關しては、コオルを始めとして多くのギルド社會主義者は

いふところが極めて少かつたのである。極めて現實的な英國の勞働者階級が充分にギルド社會主義に心を惹かれながら、その思想の全部を認容しなかつた原因の一つは、この新社會への現實的手段が明瞭にされなかつたによるものといつてゐゝだらう。

四

ダグラスはその現實的手段を明瞭に提示した。そして、その實際的並に理論的根據を示したのである。彼はこのことをギルド社會主義の機關誌「新時代(ニューエイヂ)」において行つた。その結果は、「信用力とデモクラシイ」「經濟的デモクラシイ」「生産の統制と分配」「現在の不滿と勞働黨」「ダグラス學說」並に今回邦譯された「信用機關の社會化」に現はれてゐる。これらの諸著に現はれたダグラスの學說はその特殊な信用學說であつて、著しく世界の視聽を集めつゝあるものである。

ダグラスは「信用機關の社會化」の中にいつてゐる。「改造に對する提案を常に世界の動きつゝある現實に結びつけることは、最大の價値あるものだと云ふことは、今更ら喋々を要しないのである。事實、金融組織の解剖、不滿の聚る焦點、及びその論理的救濟策等を充分に強調し、且つ充分に廣汎な範圍に於て、闡明することが出來るならば、その時こそは、在來人類を苦しめ且つ墮落せしめてゐたところの力に打ち勝つであらうところの人類史上最大の勝利への道が開かれるのであらう。」これが彼の最終の目的である。而して人類最大の關心をもつて、彼は經濟にありとしてゐる。彼はこの點において、從來の大思想家の見るところと一致してゐるのである。

然らば、現在の經濟は何處にその缺陷を有するのであるか。生産においてか。今日の社會問題は生産における缺乏ではないとダグラスはいふのである。技術的能力は既に充分に備つてゐる。然かも吾々は窮乏の内にある。それは、吾々がこの技術的能力の所産に對する充分な需要を有することがないからである。平たくいへば、吾々にその生産物を買ふべき貨幣がないからである。今日貨幣を統制してゐるものは、公私の銀行である。而して、彼等は貨幣の獨占化によつて、生産物分配の不均衡を齎らしてゐるのである。彼に從へば、「社會信用の大部分の占有は正に掠奪的行爲である。」こゝに彼の信用機關社會化の根據を有するのである。

五

生産技術によつて、莫大な資源を開發する可能性はある。「然らば、此の莫大な供給さるべき資源と、欲し乍ら、しかも需要を充足し得ぬ大衆の增加する要求との間に介在するものは果たして何であるか？　それは貨幣である。」「需要と供給との齟齬は生産能力や産業制度には何等關係がない。それは需要と供給、この中間に介在してゐる金融制度、或は切符制度に關係を有してゐるばかりだ。」

この貨幣の問題において、人は貨幣の本質を誤解してゐるのである。「貨幣問題は價値測定の問題ではない。……貨幣制度の本來の機能は貨財及び勞役の統制と嚮導とである。それは「秩序」組織であつて、「報償」組織ではないし、またさうあつてはならぬ。」然るに、現在の貨幣制度は勤勞に對する報償組織として現はれてゐる。缺陷はこゝにある。

このことは最もよく通貨獨占制の下におけ

る生産費と價格の總額との關係において現はれてゐる。生産費の中で資本家に對して損失なく減少し得るものは、勞銀と俸給である。而して生産費中勞銀と俸給とは購買力になるものであつた。從つて勞銀と俸給との總額は、價格の總額よりも少額である。從つて勞働者並に俸給生活者は、常に欲望を持つてゐるにも拘らず、それが貨幣の缺乏のために有効需要とならず、從つて、生産技術による生産物は購買力の不充分なために、徒らに倉庫の中に藏つて置かれてゐる。それは恰かも汽車を運轉して置きながら、切符の發行を制限して客を乘車せしめない愚にも均しいのである。故に信用機關を社會化して、有効需要を造り出すことによつて、社會の經濟的繁榮は期して待つべしといふのである。ダグラスはそのために生産者銀行、勞働組合銀行設立の實際案を提示したことがある。

貨幣の問題を社會問題の中心問題とした思想家は古來甚だ多い。ロバアト・オーエンの勞働券による勞働交換所、プルウドンの構成價値說による交換銀行などはその主なるものであるが、それは貨幣を價値測定の問題と見てゐる點において、ダグラスの提案と異るものがある、作併、ダグラスが信用制度に、その經濟的批判並に改造の眼を向けたのは、高度資本主義における金融資本の活働に着眼するものとして、一の卓見としなければなるまい。ギルド社會主義の研究家カアペンタアのいふやうに、ダグラスの信用經濟論がマルクスの資本論以來最も顯著なる學說であるといふ提言に對する贊否は姑らく措くとして、一の特色ある議論として吾々の研究を要する理論であるに相違ない。

私の紹介は、ダグラス理論の外形に向つてなされた傾向がある。彼の所說には、一般の經濟觀並に社會觀に對する鋭い批判のメスが振はれてある。恐らく彼のこの部分の所說は一層吾々を啓發するところがあるかも知れないが、今こゝにそれを記する餘白がない。

私はダグラスの「社會信用(ソーシャル・クレヂット)」を中心として少しく書いて見た。この書の邦譯「信用機關の社會化」は岩村忍氏の筆になるものであるが、その譯文も大體において流暢正確であるといつてよい。飜譯はこれを爲すに難くして、批評するに易い。私は譯者の勞を多とするとともに、かくの如き異色ある理論が我が經濟界の深き研究を要求する價値あるを信じて疑はないものである。

小説アラ捜し

正木不如丘

隨分たちのよくない註文をする編輯者もあるものだ。文學に現れた科學的矛盾を、遠慮なく拾ひ出して見れと云ふのだ。誰でも物を讀む時に、あらを捜してやれ、と云ふ氣分で讀む人はありはしない。もつとも近來は發賣禁止を食はせるために、讀む人があるかも知れないが、それは一人の人間としてゞなく、官服が讀んで居るのだから、例外だらう。

一寸考へると文學などには、科學的の矛盾がザラにある樣に思はれぬでもない。筆をとる人がすべての科學を專攻して居る筈がないから、時として途方もない事を書かぬとも限らない。さう思ふと私も今迄讀んだものゝ中に、さう云ふ矛盾に氣づいた事もあつた樣な氣がする。がさて今必要にせまられて、ハツキリと思ひ出せるのは、曉の星の二つ三つしかない。だから編輯者から手紙を貰つてから、鷄の日曜の日で、暇さへあれば單行本雜誌新聞片ッ端から、あら捜し專門に讀み出したが、捜すとなるとちつとも見付からず、既に二ヶ月を經過してしまつた。文藝春秋社の文筆婦人に迄頼み込んだが、目を眞赤にして來て「隨分讀みましたが、なか〱ありません。決して怠けは致しません」と悲鳴をあげた。

要するに文學は科學としても完全に近いものであると決論して、編輯者に出題の失敗である事を申し上げるしかない。

かう云ふ苦い經驗をしながら、所謂檢閲係の人々に心から同情した。筆者が經驗した樣な無駄な努力を朝から晩迄、元日から大晦日迄續けて、千冊にやつと一冊發禁を食はせれば大成功の部であらう。だから時としては苛酷だと抗議の出る樣な事もあるであらう。筆者は今度の經驗から、檢閲係の方々に滿腔の同情を寄せて、發禁に對する不服など夢更ら云ふまいと決心した。

偖、筆者は科學的の檢閲係……中央公論の任命による……

……となつて、注意をしたり、又罪再三の者には發禁を食はせる、恐しい小父さんになつたのだ。先づ大體に於て、科學的矛盾をやりさうな文人は誰だらうかと考へて見た。內務省の檢閱係の方も恐らく、平素にらめて居る筆者や雜誌があるであらう樣に、此一文の筆者も大體の見當をつけようとした。さうでなくては、仕事は一年も二年もかゝつて效果があがらない。

先づ前科のある人はないだらうか。最初に思ひ出されたのは菊池寬氏であつた。信越線の碓氷トンネンに、蒸氣汽罐車を通してしまつたのは、餘りに有名である。「陸の人魚」の事だ。これは其當時注意をうけたゝめ、菊池寬全集では一向に煙が客車に入つて來なくなつて居るが、トンネルに入る時電燈が點るとだけであつて「昔は蒸氣汽罐車だつたから煙になやまされたが、今は電氣汽罐車になつたので、案外らくだ」とは書いてないのが、どうも物足らない。

で、先づ菊池氏のものには類似のお筆先があるだらうと失禮ながら搜すのだ。どうか腹を立てないで下さい。實は菊池氏御膝下の文藝婦人の忠勤による收穫なのですから。

最近の朝日紙上の「不壞の白珠」(四月二十三日)に「東中野で電車が止まると……百人に近い人波がどつと押し出されて、その大部分は驛のすぐ傍にある踏み切りの橫木のところで止まつた。彼等は自分達の乘つて來た電車をやりすごしてからでないと線路の右へわたれないのであつた。」とあるんだ、それは間違ひで、東中野驛は東京驛から來た客は、踏み切りを通らずに線路の右へ出られる樣に出來て居る。中野驛と東中野驛とを思ひ違つて居るらしい。

翌日二十四日には、俊枝は有樂町から省線に乘つた。成田に電車で逢つた。「東京驛につくと車內はだん〳〵混むばかりで、……また二人はだまつたまゝ新宿まで行つた。」

二人は東京驛で乘換なかつたのは確かだが、どうも神田驛でも乘換をしなかつたらしい。二人ともボッとしてしまつたにしても、上野から赤羽或は大宮迄行つて來たにしては、記述が足りない。省線は循環線ならば有樂町からは東京で全部乘換だし、橫濱からのは神田で乘換をしないなら、先で乘換へて池袋を廻らなくては新宿へ行けない。

二十七日にも俊枝と成田が有樂町から東京驛で乘換せずに「萬世橋をすぎる頃成田は思ひ出した樣にはなしかけた。」

此二十三日、二十四日、二十七日の三日は確かに異例な電車運轉系統があつた事になる。これは菊池氏が省線にあまり乘つて居ないからの錯誤であるが、若し東京驛の乘換の事を正しく書いたらば、もつと俊枝と成田の心のいきさつが明らかになつたであらうと筆者は惜しい樣に思はれる。

序に受難華の一句「二人は食堂へ行く道の右側にある喫茶店、

へ這入つた……二人は笑ひながら立ち上ると食堂を出て座席(本郷座)の方へ這入つて行つた。」の喫茶店が食堂に早變りをしたり、「東京行進曲」で「まあ、メリンスのあんな洗ひざらしを着て居るわ……あんな美しい女が、あんな洗ひざらしのめいせんを着て居ることに……。」メリンスのめいせんへの早變りなどを附錄として、菊池氏から離れるが、アプト式以來菊池氏は自動車税を電車連のために拂つてやらなくてはいけませんね。

菊池氏で稍氣をよくして偖次にはと、久米正雄氏の留守をねらつて見たが、どうも無駄だつた。久米氏は注意深いのか、それとも何でも彼でも知つてるのか、顧問でもあるのか一向にない。

中村武羅夫氏は「蒼白き薔薇」で前科がある。「どう致しましてこゝに檢事の令狀があります。」と判事を無視して叱られて、單行本で判事にして居るからと思つて、檢閲の眼を光らせたが、勞多くして效がなかつた。殘念でたまらぬので、燒け氣味になつて、不如丘をやつつける氣になつた。「手を下さゞる殺人」に親分を殺して鐵道工事の事務所を襲ふ男が爆彈を事務所に投げつけて、大將になつて仲間を指揮して騷動を起したが、罪は殺人罪で片づけられて居る。不如丘の友人の判事が手紙をよこした。「手を下さゞる殺人の豫審判事の搜査法は、僕の如く明晰な頭腦の所有者である事が分つて愉快だつたが、斷罪に爆發物取締法違反と騷擾罪を忘れたので、僕は我事の如く不愉快になつた。」とあつたので、不如丘いやはやだつた。六法全書を暗記するか、顧問辯護士を一人たのんで書く事を忘れてはならない。

科學的矛盾があつてならないのは、科學的に組み立てられなくてはならぬ探偵小説がその最たるものであらう。特に探偵小説の重點となるトリックに科學的矛盾があつたならば、その一編は存在價値がない。だから若しさう云ふ科學的矛盾から組み立てられた探偵小説があつたならば、それは科學文明の賊として、發禁を食はせなくてはならない。

苟くも探偵小説を書く勇氣のある人で、科學的矛盾を敢行する樣な人はあるべきでない。だから私は探偵小説のトリックが科學的矛盾があるかと思つて搜しはしなかつた。だがかつて新潮の座談會で、探偵小説方面の御歴々の集られた時、不如丘自身の探偵小説のトリックに科學的矛盾があるが如き口吻を洩した人があつた。

「手を下さゞる殺人」は脊髓癆患者を殺すために、脊髓癆患者が視覺のコントロールがなければ、正しく歩く事の出來ぬのを應用するトリックを用ひた。脊髓癆の患者が百燭電燈やアーク燈のまばゆい程の照明の下に、半完成の鐵橋……眞中に一枚板だけ渡してある程度……を渡つて行く時、數里も離れた變電

所に居る加害者が、スキツチをきる。一分の後スキツチを入れる。その時に被害者は既に川に落ちて流れて居る。かう云ふトリツクだつた。「あゝ云ふ事があり得るのでせうか。」と座談會で云つた人があつた。醫學を知る列席者がないので、このトリツクの正しいのを云つて吳れなかつた。

醫者は脊髓癆の診察に、患者を直立させて眼をとぢさせて、グラ〳〵するのを見て、重要なロンベルグ氏の症候と云つて居る程、有名な症狀なのだ。

だから餘りに專門的の科學は探偵小說のトリツクとして使ふと損だ。

餘事をやめて、誰でもすぐに氣のつく科學的矛盾は、筆者の科學的無智の結果ではないものだ。大抵は不注意の結果であつて、隨分ユーモアに富むものがある。

林不忘氏の大岡政談に片手しかない人間が、殿樣の前へ出て、もろ手をついた事がある。これなど殿樣にはもろ手をハツタとついて物を申すのが當然なので、うつかりない手をつかせてしまつて、大方義手だらうよ、などゝ皮肉られるのだ。

これと正反對に、不如丘が手術をして膝から切斷してしまつた右足の親指の痛んで苦しむ人の絕望的な心を書いたのを讀んで、與太をかくと笑つた人があつた。笑ふ方が大與太で、醫學的無智の然らしむる所なのだ。切斷部の知覺神經が瘢痕組織に包まれるために刺戟される時には、疼痛を感ずるのは腦なのだから、はつきりない足の指が痛むのだ。だから林不忘氏のもろ手も腦の方ではついて居る感覺があるとも云へぬ事はない。一種の感覺的記述だと云つてもいゝ。

感覺で思ひ出したが、新感覺派の人々の感覺は特別なものだ。橫光利一氏が「醫者のかくものには、どうして感覺がないのだらう。」とよく筆者に云つたが、形而下學中醫學は最も非感覺的のものだからだと答へたい。所謂新感覺も科學的に餘りに矛盾があると、不感覺になる場合がある。橫光氏の「計算した女」の「でもあの人は氣の毒よ。結核で肝臟がいつでも、ぶるんぶるん慄へてゐるのよ」と來ると不感覺だ。肝臟は決して慄へる樣な位置や構造でない。肝臟はきもの漢字ならば一層くだらない。肝臟がふるへる感覺は決してあつてはならない。それは非科學的で、一度橫光君に死體解剖を見せたい。

同じ樣な非科學的な記述を國枝史郎氏が「仁俠二刀流」に用ひて居る。「空を仰げば明日は天氣、一點雲なき星月夜、とたま〳〵拋物線を描き、青く光つて飛ぶ物がある、人魂ではない、流星だ。」

此記述の拋物線は科學的に矛盾して居る。流星が地球に向つて落ちる時には拋物線の經路をとるのは科學的に正しいが地

球上の一點から流星を見れば、絕對に拋物線を描いて見える事はない。多くは直線である。曲線に見える事もあるが、拋物線にはどうしてもならない。だから拋物線など丶云ふ學術語を用ひてはいけないのだ、「拋げる樣に」ならばまだいゝが。唯流星が地球に落ちる時に當然拋物線だから、かう書いたので、目で見る線でない、と云ふのならば、物理書でない創作には不必要でせうと云ふに止まる。出來るならばこんな學術語は知つて居ても用ひない方がいゝと筆者は思ふ。

もう一つ物理學上危うい記述の一例として「赤い復讐」に「オートバイは小銃を激しく擊つやうな音をたてゝ、籠の內面を煙だらけにし螺旋狀に危險な位置を保ちながら、凄まじい快速力で走り下つて居た。そして地面に近づかうとして居た。」をあげる。これは上から下へオートバイが來るが、かう云ふ曲藝は下から上へでなくてはならない。實際此曲藝を見た人は分つて居るであらう。飛行機の宙がへりも進む方へ上つて行くのだ。籠の內面を螺旋狀に廻つて下つては科學的に大危險である。作者の云ふ「危險な位置」は上るならば實は左程危險でないのだ。

曲藝のも一つは加藤武雄氏の「饗宴」の萬千子身投げの段だ。「突然、車輪の響が轟々と響を高めた。鐵欄の交叉が彼女の眼前を掠めはじめた。暗の底に仄白く、天龍川の流が見下された。彼女の眼が鐵欄の切れ目をとらへた刹那、彼女は渾身の力を以てあのフィールドに臨んだすぐれたるジャンパーの勇氣と決斷とを以て、ひらりとその身を躍らした。」

さて汽車の速度をなるべくおそくして一時間天龍川を二十哩とすると一七七〇〇間、一分二百間、一秒三十三間となる。鐵欄と汽車との距離を近く見て一間とする。鐵欄と次の鐵欄との距離は萬千子の頭の高さに於て、なるべく廣く見て十間とする。そして萬千子が汽車からとび出して鐵欄の間からぬけ出すためには？

先づ萬千子は一秒三十三間の速度で橫に進行しながら、汽車をけとばすのだ。すくなくとも鐵欄の近いものゝはづれから二十間前の位置で、汽車からとび出さなくてはならない。然も鐵欄に直角の方向にどうも此曲藝は餘程練習しなくては成功しない。が「死體はたうたう發見されなかつた」程萬千子は曲藝師だつた。それとも萬千子は三分の一秒に一間と四尺（身長）をとぶ事の出來たジャンパーだつたのか。

次には大分下がかつて失禮だが、小便の話だ。中河與一氏が大分前に「或る時代の心持」を早稻田文學に書いた。主人公は悌子と云ふ人だ。「あたりはうす暗い夕方になつていた。歸つて來るとランプの傍に坐つて居る妻が、訴へるように自分に云つた。『おむつをかへていると又おしつこをしましたの、お顏からおべ

べからメチャ〳〵、だつて足をあげるとすぐなんですもの」

作者中河氏は最初にことわり書をして「爵子といふ名前はその時代の私の心持を子供に象徴したものです」と云つて居る。中河氏は男だから爵子は男の子だ。とすれば赤ん坊が、足をあげられて、おしつこをすれば、顔にかゝるだらう。が何と中河氏は飛んでもない事を終の方で書いてしまつたでせうか。「男の子のやうに」と出て居るのです。勿論「男の子のやうに」は小便とは關係なく終にあるのですから、爵子は女の子なのです。女の子がまさか！

で思ひ出したが、筆者が子供の頃、うちに居た女中と書生が仲が惡くて、喧嘩ばかりして居た。書生がはやり目にかゝつて眼をまつかにして居た時、女中が「小便で洗へば癒る」とからかつた。書生は本氣になつて小便をためて風呂場で裸になつて、新鮮な尿で洗眼を試むべく努力したが、口にさへ屆かなかつた。で女中に相談すると「まァあんたは、考へてもごらん、私達だつたら、そんな眞似はする氣にさへなれない。」と答へたので、大喧嘩になつた事があつた。男と女の差違だけは知つて居なくてはならない。

前田曙山氏は、妙な薬罐頭を記載した。「熱情の火」で「お浪が家へ歸つて來た時に、金貸の手代の勘兵衛が、小さい髷を振り動かして、母のお銀に何か逆へたてゝゐた。夫が借金の催促であるのは云ふ迄もない、……お浪は勘兵衛の薬罐頭を立ちながら睨めて、長火鉢の側へ坐つた。」小さい髷のある薬罐頭は今日の薬罐頭とは違つて居るが、その頃も薬罐はあつたらうから、髷があつてもさう云つたのだらうか。これは薬罐頭の古實に通じた方から教示にあづかりたい。

長谷川伸氏の「べら棒醫者」が酔つ拂つて盲にぶつかる所で「いくら名醫でも狗の眼の持合せがないから、そこで診察が出來る筈がない」とある。犬と云ふ動物の目は人間とそれ程ちがつて居ない。鼻は到底人間はかなはないが。で長谷川氏の事だから狗の字をつかつて、例の高麗狗をさして居るのかも知れないが、とにかく夜目のきくものは、ふくらうや猫の方が通り相場だ。

又も國枝史郎氏で申譯ないが、仁俠二刀流につんぼでおしやべりな女が出て來る。それを醫學的に檢討して見る。つんぼには生れ付きのものと後天性のものとがある。言葉をおぼえる年になるより前からのつんぼは當然啞になる。近來は唇話法と云つて、啞に言葉を云はせる事が出來る。これならば話をするには口を見て、意味を目で知つて、返事をしなくてはならない。仁俠二刀流のつんぼは、「お前のうちはどこだ」ときくと、「猴谷には狼が居る」と別な事を云ふつんぼだ。然も他人の言葉が決して分るのでない。だから唇話法からしやべる様になつたつん

ぼではない。

詮じつめると、生れ付きのつんぼではないのだ。言葉をおぼえてからつんぼになつたのだ。言葉をおぼえてからつんぼになると、言葉の調子が變になる。それは自分の耳のコントロールがなくなるからだ。つんぼになつた人が恐ろしく大きな聲を出すのは誰でも知つて居る。だからつんぼの言葉はすぐに變だと氣がつくものだ。二刀流でつんぼと話して居る人は餘程耳が惡いらしい。そして後になつてつんぼと知つてあきれて感服して居る。かう云ふ所を讀むと醫者はすぐに變だなアと思つて決して愉快になる程ユーモアを感じない。少くとも作者程には。

以上で見ると文學のあらは私の二ヶ月の努力を冷やかに嘲ふ程少ないものである事が分る。たまたま見つけ出しても、それは作者の一寸した不注意か、筆觸の滑りに過ぎない。むしろ筆をとる人が、どれ程緊張して書いて居るかに敬服したくなる。

今迄私はその筋の專門家が見たらば、文學はあらだらけだらうと思つて居たが、醫學を主としての私の檢閱が失敗であつた所から見ると、どう云ふ方面に於ても、文學は完全に近いものなのを思はざるを得ない。

終りにくだらぬあらさがしなどをして、禮を失した事を、文人のすべての前にお詫びをしよう。

瑞西のサナトリウム

井口孝親

一

バイロンの詩で有名なシオンの城の所在地モントローから、レマン湖畔に沿ふて汽車で南へものの廿分も下ると、エーグルといふ一小驛に着く。ここは、パリからブカレスト行の國際列車、オリエンタル・エキスプレッスの通路にあたり、一萬メートルの長さをもつて世界に誇るシムプロンのトンネルまで、行程約二時間である。

エーグルから、スゥイス特有の登山電車で、かなりの急勾配を四十分ばかり登ると、眼界が急に南にひらけて、日本の八ケ岳をおもわせる海拔四千メートルのダン・デュ・ミディが、美しいローヌ河の溪谷の上にその雄姿をあらわし初める。やがて大小幾多の病院風の建物が村の北壁を形成してゐる二四〇〇メートル級の山腹に、階段的に點綴して見える。電車がとまれば、そこはもうレーザン・ヴィラージュの停車場だ。

レーザンは骨、關節、腺、皮膚、結核等、いわゆる外科結核治療に關するローリエ博士の施設をもつて、世界的に有名な高山療養地で、我國の專門家間にも、あまねくその名を知られてゐる。位置はレマン湖の北東部に位し、海拔一二五〇乃至一五五〇メートルの間にある。北方には、トゥル・ダイ及びトゥル・メイアン（二三八〇メートル）の二大山壁が、天然の屏風のごとく聳立して、北及び東の風をさえぎり、南西は眼界ひろく、近くはシャモッセェル、モルデルの山々より、遠くはトリアンの氷河、ダン・デュ・ミディの高峯、サヴォイ・アルプスの連山にいたるまで、實に稀にみる廣大な眺めである。

さらにトゥル・ダイを二千メートルあたりまで登れば、東から西にかけて、ベルナー・オバーランド、フライブルガー・アルペン、ディアブルレェの諸峯、ヴァットレンダー・アルペン、モン・ブラン及びダン・デュ・ミディの雄偉な群峯を抱擁する自然の一大パノラマが眼前に展開する。それより道を轉じて西に進むこと一時間、クレェヴァスの斷崖にいたれば、足下に夢のごときレマン湖が、碧水を湛へて半月形に横つてゐる。はるかドイツとの國境に、魔のごとく黑く聳え立つユラ山脈に視線をさえぎられて、眼を湖畔におとせば、ロウザンヌの町が淡靄の中に隱見し、サヴォイ・アルプスが湖岸に沒するあたり、ローヌ河が白蛇のごとく東へ流れてゐる。

スゥイスには、レーザンのほかなほダヴォスアローザのごとき、著名な高山療養地がある。私はまだダヴォスを知らない。が人の話にきき、また寫眞で見たところから判斷すると、トーマス・マンの小說で有名なこの「魔法の山」は、一寸伊豆の修善寺を擴大したやう

な地形にあるらしく、その眺望の點において、到底レーザンの敵でないらしく思はれる。次にアローザは、單に高さの點よりいへばはるかにレーザンを凌駕し（一七〇〇―一八〇〇メートル）療養地としての萬般の設備も、中々よく行きとどいてをる。だがいくらヒイキ目にみても、ここもダヴォス同様、眺望の廣濶で、雄大な點ではとてもレーザンにかなわない。最近國際大學療養所建設の殆ど確定的の候補地としてレーザンの擧げられてをるのも、だから全く理由のないことではない。

高山療養所としてのレーザンの價値については、數字的に、また實驗的に、私はまだまだ多くのいふべきことをもつてをる。殊にローリエ療養所の特殊的施設、患者に課する自然療法等――現在同博士の監督下にある大小の病院は三十以上もある――我國にも大いに紹介の價値があると思ふ。だが、それらはまた他日の機會にゆづるとして、私はただちに本文の目的たる、スイス大學療養所の問題に筆をすすめるであらう。

二

レーザン・ヴィラージュの停車場をおりて南に約一丁下ると、廣い牧場の傾斜面に、玉子の黄味色をした、かなり堂々たる建物がある。入口の上高く、スイス大學療養所Sanatorium Universitaire Suisse の文字が、大きく書かれてある。

S・Uの、最初の計畫者は、一昨年まで同療養所所長で、現在は國際大學療養所建設事務幹事をやつてをる、ヴォーチェ博士である。彼は、永年レーザンに臨床醫として勤めてゐた經驗の結果、大學生のごとき知識階級者が普通の病院生活に對し、いかに大なる不滿を感じてをるかといふ事實に想到し、彼等のために大學關係者を中心とする特別療養所建設の急をさとり、先づジュネヴ、ロウザンヌ、ヌーシヤテルの三大學當局を動かして、一九一九年以降同二十二年に至るまで、熱心なる宣傳運動を繼續した結果、つひにスイス全大學は言ふに及ばず、一般輿論の大なる支持を受け、學生、講師、教授等の醵金、篤志家の寄附、聯邦政府の援助によつて、一九二二年十月一日、ヴ州レーザンに一つの療養所を建設するに至つた。これが今日のスイス大學療養所の濫觴である。

すでに、S・U建設の目的が自ら説明してをる通り、同療養所第一の特徴は、それが純粋に、スイス大學關係者のみの療養所であるといふ點にある。

人間は社會的動物である。他人との共同生活を求め、これを樂しむは、人間生れながらの本能である。あるドイツの社會學者は多數の、おそらく凡てのヨーロッパ諸國における社會なる語が（Société; Sozietät; Sozietät）(Gesellschaft等) 一様に社交的共存 (Geselligkeit) Zusammensein を言ひ現はしてをる事實を指摘してをるが、それはたしかに意味深いことである。卽ちこれを反面から言へば、人間の生活は、他人との社交的交渉の背景をもつことなくしては考へられない。普通の場合でもさうである。況んや孤獨、寂寥、失望、悲哀に苦しむ病人にあつては、この社交的共存本能への欲求は、一層強烈であるべき筈である。

問題のS・Uは、この點において、たしかにある程度まで、社會學説の實際化に成功してをるものと言へる。S・U内に生活する患者の、[illegible]

年齢を同じうし、生活様式並びに環境を同じうし、知識、思想、趣味、願望の種類乃至程度を同じうし、更に運命を同じうし、惱みを同じうする青年學生である。彼等は病室において、ガレリイにおいて、食堂において、ソラリウムにおいて、また散歩の途上において、絶えず思想及び知識の交換を行ふことができ或は苦悶を訴へ、また訴へられ、悲愁を慰めまた慰められることができる。そして斯種の社交的相互作用が、治病上如何に有效なものであるかは、わざわざ專門家の意見を徴するまでもなく、吾々素人にも容易に了解し得るところである。しかもこの點において、普通の病院ないし療養所では、到底同じ程度の好結果を望み得ない。

S・Uの大なる特徴として、第二に擧ぐべきは、學生の研學上、大學と患者との間のツヴェックメェシッヒな聯絡である。普通の讀書及び研究に堪へざる重患者はもとより問題外であるが、單に安靜保養を必要とする程度の輕患者は、つねにその所屬大學教授と適當なる聯絡をもつて、學校における殆ど同樣に、自分の勉學をつゞけて行くことができる。そして試驗期が到來すれば、彼等は一時山を下りて、それに應ずるのである。私の親しくしてをつたソルボンヌ大學の法科學生Mは、すでに三年以上山の上の療養生活をつゞけてをるが、彼は毎年一回パリに歸つて進級試驗を受け、つねに相當の成績を以てそれをパスしてをる。其他スゥイス大學生中にも、三四同樣の幸運者があつたやうであるが、全體としての成績は豫想外に良好のやうである。このことはまた患者の治病上から言つても大いに有效である。即ち彼は一方に、一時廢學を強いられ療養をつづけながらも、他方において自分の勉學を中絶せず、もし幸ひにして、來るべき試驗に成功することができれば、在學中の幸福なる健康學友におくれをとる必要がない。でこの希望が、患者の心理上に、少からず好影響を及ぼすのである。一體にレーザンの各病院では、患者に讀書其他の精神的勞作を禁止するとは反對に、むしろこれを奬勵してをる。この種の方法によつて、患者の精神に適度の興奮を與へ、その氣分を緊張せしめることは、關病上たしかに有益のやうである。殊に智的勞働者たる學生には、疲勞を感ぜざる程度において、斯種の精神的刺激を與へることは、ぜひとも必要と思はれる。

この點に關して、S・Uは、他の普通の病院に比し、大なる利益を有してをる。それは患者が大學教授、其他内外知名の士の療養所訪問によつて受ける有形無形の利益である。各大學教授は、休暇其他の機會を利用して、一日乃至數日間S・Uの客となる。彼等は、必ず病室にその子弟を歴訪して、個人的に種々の談話を交へる。そして彼等の多くは、訪問毎に一度は必ず、各自專門の講演をやることになつてをる。で患者たる學生たちは文學、哲學、法學、經濟學、醫學其他の自然科學の各部門に亘つて、種々の興味あり有益な學術講演をきくことができる。講演の場所は時によつてちがふが、臨床を許されぬ重患者並に骨關節患者等の便宜をはかり、多く一階のガレリイでやる。この目的のために、一階には各病室のガレリイ間の隔壁を取はずし、臨時に五六の病室に共通な大ガレリイをつくり得る設備をしてある。そこで或者はベッドに、或者は長椅子の上に、或者は安樂椅子におさまつて、靜かに講演を拜聽することができる。

講演がおわると、患者は各自思ひおもひの質問を發して、講演者の説明を求める。また講演會場が階下のサロンや食堂である場合、或は一階のガレリイでやる場合にしても二階の患者のためには、各室に備付けのラヂオでこれを放送することにしてある。音樂會などの場合も同様である。また面白いことは、例へば植物學の先生が來れば、外出を許された患者たちは、教授とともに近くの山に登り、野をぶらついて、植物學の實物教授を受け、或はまた醫學方面の教授の來訪があれば、階下の大ガレリイに幾個となく顯微鏡を並べて、教授の懇切な指導の下に、興味ある病菌の研究に親しむことができる。

S・U滯在中、私の接した大學教授及び知名の訪問客は、其數三十を下るまいと思はれるが、その中特に私の頭に殘つてをるのが二人ある。一人は「文明」(シヴィリザシオン)「眞夜中の懺悔」(コンフエツシオン・ドゥ・ミニュイ)等の著者で、ゴンクウル文學賞の受賞者であるフランスの詩人ジユオルジユ・デュアメルで他の一人は、チユリツヒ國立工藝學校植物學名譽教授、カール・シュレエターである。

デュアメルは元と醫者出身であるが、世界大戰中自ら親しくその慘禍を目撃して、つひに「文明呪咀者」となり、聽診器をすてて、ペンをとるに至つた人である。私のきいたのは、彼等のグループを中心としての現代フランス文學論であつたが、講演後その夫人は、彼自身の作詩中から、二三のレシテーションをやつてくれた。この夫人は、もとパリでかなり名の知られた女優だつたものとのことであるが、その聲調といひ、身振といひ、さすが手に入つたものだつた。

シュレエター教授は、全然生れながらの自然科學者である。私に高山植物に關する初歩的知識を與へてくれたのは、實にこのシュレエター教授の「アルプス逍遙者のポケット植物」といふ小さな書物であつた。教授には此外なほ數種の著書があるが、その中「アルプスの植物生活」は、專門學者間にも評判のいい、この方面における貴重な文獻である。私はこの敬愛すべき老教授に、自分のかつて採集した、百種にあまるアルプス高山植物を示し、その批判を仰ぎ、かねて學名のつけそこねたものなどの訂正を乞ふた。教授は早速快諾されて、同氏は愛用のポケットから一本の鉛筆をとりだし、學名の訂正やら、各植物の習性の圖解説明やらに、一時間以上の時を割愛された。アルプス高山植物の王として、素人間にもてはやされてゐる。エーデルワイスと同じく、菊科植物に屬するものに俗稱「猫の前脚」(Antennaria dioica Gärtner)といふ可愛い植物がある。「砂丘のエーデルワイス」と呼ばれるだけあつて、海岸の砂地から、海拔二千七八百メートル邊の高山に至るまで、一樣に生育するものであるが、これは雌雄が別々の植物にわかれてをる。さて私の標本の檢査がこの植物の個所まで來たとき、教授は急に鉛筆をとどめ、老顏に學者的な無邪氣な微笑をたたえつつ、私にこんなことを話された。人も知る通り植物學の方では、男性 männlich を現はすに♂、女性 weiblich を現はすに♀の符徴を以てする。そこで教授の同僚で、ある植物學の教授は、友人への出產通知に、生れた子供が男子ならば♂、女子ならば♀の符號を用ゐるのを常としたといふ話である。

「先方が少し位植物學の心得でもある人ならいいが、さうでもないと、何の事かさつぱりわからず、人をバカにするといつて怒り出す

かも知れぬ。」さう言つて教授は、子供らしく快活に笑はれた。其晩教授は、幻燈入りの講演をやられたが、それがまた偶然日本に關するものだつた。教授は約三十年前、日本へ植物研究旅行をされたのだ。ただその幻燈中に「日本人はどうして結婚するか」といふやうな題で、東京郊外のある掛茶屋での見合ひの場から、日比谷大神宮三々九度の盃をとりかわすまでの儀式な寫眞には、私もさすがにまゐつた。で講演のすんだ後で、私は教授に「日本の進化」について、一と通り正直なところを説明しておいた。別れにのぞみ、教授は私にその名著「アルプスの植物生活」を記念のため贈つてくれるといふ約束だつたが、そのまま遠くジャヴァ地方の研究旅行に出かけられたので、書物は未だに私の手許にとどかない。教授はすでに七十を三四越してをられるが、まだジャヴァ地方までも、學術遠征をやられるほどの元氣さである。

S・Uは、一昨年増築の結果、現在では約七八十名の患者を收容することができるやうになつたが、もともと財政上、比較的小規模の經營を餘儀なくされてゐたので、目下建設計畫中の國際大學療養所に比し、凡ての點において、その設備はまだかなり不完全である。例へば各種の學術實驗室のごときも、僅かに一つの顯微鏡室と藥局とがあるだけで、學生患者の研究には充分だとは言へない。それでも同療養所の性質上、例へば醫學生には、友人患者の咳痰、尿の檢査より、注射、患部の洗滌等、他日一人前の醫師として必要な經驗をつむ機會と便宜とが與へられてをる。圖書館には約二千部の書物があり、またS・Uの患者には、同じレーザンにあるグランドホテル圖書館(藏書數約一萬)利用の特典が與へられてをる。また、スウイス本國を初めイギリス、フランス、ドイツ、イタリー諸國からの諸種新聞雜誌は、百種以上にも及ぶが、これは當番の患者が、毎日他の郵便物と同時に、各室に配達して歩くのである。

語學の勉強といふ點から言つて、S・Uの患者にはまた大なる利益がある。病院内の公用語は、所在地レーザン同様、むろんフランス語であるが、ドイツ語は、フランス語、イタリー語と相竝んで、スウイスの母國語である上に、患者中にはスウイス・アルマンド出身の學生が多いので、數字的に言へば、ドイツ語はつねに六〇パーセント以上の患者によつて話されてをる。スウイス・ロマンドの學生のドイツ語の知識は、概して甚だ貧弱であるがその反對に、スウイス・アルマンドの學生は、かなり自由にフランス語を驅使することができる。で外國人でも佛、獨語中何れか一方が相當にできれば、S・U内では、先づ不自由を感じない。が、英語のみでは、殆ど用をなさない。私のS・Uにゐた當時の看護婦は、これもやはりスウイス・アルマンドの出身だつたが英、佛、獨、伊の諸國語を自由に話すことができた。が一般的に言つて、ホテル使用人のごとき特殊の職業に從事するものは別とし、普通のスウイス大學生のごとき、相當英語の素養あるものは、意外に少ないやうである。今一つ、これはむろんレーザンのやうな國際的療養地だから出來ることであるが、學生患者中、生活のあまり豐かでないもの、或は將來の學費の一部に充當する目的で、各自の專攻する所に從ひ語學、數學其他の學科の出教授をやつてゐるものがかなりある。一時間普通四フランで、多い者に一週七八十フランの收入

があるとのことである。

これはある意味において、斯種の大學療養所にとつて最も重要なことであるが、他の病院に比し、滯在費用の著しく少ないといふ點もまた、S・Uの一つの大なる特徴でなければならない。スヰイスの全大學關係者は、何等の差別なくS・Uを利用する特權のあること申すまでもないが、一人一日の滯在費は、瑞貨六フラン五十サンチームである。一フランは法定の標準換算率に從へば、約我が三十九錢に相當するから、六フラン五十サンチームといへば、先づ我が二圓五十錢である。この中には部屋代、會費、電燈料、煖房費用はもちろん、醫師施療費、看護料、普通の醫藥代、かんたんな藥品及び材料費等すべて包含されてをるので患者は洗濯代、通信料、其他の小遣ひ等、純個人的の費用の外は、一ケ月二百フラン足らずで、充分な療養生活を送り得るわけである。これはスヰイスの一般物價並に生活標準からいつて、非常に低廉である。それは一度營利的な他病院との比較をとれば、直ちに首肯できる。私自身の經驗によれば、レーザンにおいて（ダヴォス及びアローザ地方では更に一層多額の療養費を要する）一日十フラン以下の病院生活は、凡ての點においてかなりみぢめなものである。S・Uにおけると同樣の待遇（部屋、サーヴィス、食事等）を得んとすれば、他病院では、最低限一日十二フランを仕拂はなければならない。此點においてもS・Uは、學生患者のため、實に絶好の療養所といふべきである。

S・Uの維持費には（一）大學關係者の強制醵金（學生は一ゼメスタア＝半學年＝につき五フラン、講師及び教授は年額それぞれ一〇及び二〇フラン）（二）患者よりの收入の二財源を以てこれに充當してをるのであるがこのほかなほ、スヰイス聯邦政府より年々少額の補助金が出てをる。なほ原則としては、S・Uはスヰイス大學關係者のみを患者として收容するのであるが、病室に餘裕のある場合には、所長は創立委員會の許可を得て、外國大學關係者をも入院せしむることができる。病氣の種類別からいふと、何といつても肺患者が大多數をしめてをるが、また私たちのやうな肺病以外の患者より、單に靜養を要する程度の輕症者に至るまで、その種類は非常に多い。

私は以上で、一と通りS・Uの特徴的輪廓を述べたと思ふから、以下同療養所患者生活の一般について、數言を費したいと思ふ。

病室は日光との關係上、むろん大部分南向きであるが、北向きのそれには、比較的輕症の患者を收容してをる。南向きの病室は、大小二種類あつて、二人乃至一人の患者がそれを占領してをる。骨及び關節結核患者には、日光浴の關係上、事情の許す限り一人一室をあてがつてをる。大學職員の入院者は、普通きわめて少數であるが、彼等にはやはり、少し敬意を拂ふ意味でか、一人につき一室を與へてゐるやうである。各病室には殆ど病室と同じ大きさの廻廊がついてをる。ベッドはすべて廻轉式になつてをるので、離床不能の患者はベッドに横つたまま、看護婦の手でガレリイへ押し出される。肺患者は輕症のもの以外、絶體に日光浴を禁じられてをる。北室の患者のためには、屋上に共通の所謂ソラリウムがあつて、そこで他の患者同樣空氣及び太陽療術をやることができる。

起床に七時。一〇—一一時の間に營養上、

他人の讀書其他勉學の邪魔になるがごとき、喧騒の行爲があつてはならぬ。更に晝食後一時半より三時半に至る二時間は、所謂シイランス（沈默）の時間で、この間は各患者とも絶對の靜肅を嚴守しなければならない。が一旦シイランスの時間が了へると、病院内は俄に活氣づき、病室間の訪問が初まる。蓄音機をかける。歌をうたふ。外來者の訪問があると言つた風である。所長は毎朝一回患者全部を訪問するが、それによつて或は甲の患者に外出を許し、乙の患者にそれを禁止する。散歩時間は、朝は午前十時までと、午後は三時半——五時の間である。個々の患者の夜間外出は、特別の事情ある者のほか、絶對に許さない。夜は九時半の消燈までは、自由の時間である。

S・Uはしかし何と言つても、平地の大學ではない。學生患者の健康回復が主たる目的で、勉學は所詮副目的たるにすぎぬ。この意味から、患者をして自己の病氣を忘れて積極的に日々の生活を樂しましめ、病院生活の孤獨寂寥より生ずる精神的弛緩の危險を防ぐため、活動寫眞、音樂會、學術映畫、遠足、茶話會等、あらゆる種類の娛樂的催しが頻々と行はれる。茶話會の晩には、各自の餘興、團體遊戲、學生歌の放吟等で、思ひきつた底ぬけさわぎをやる。一體にレーザン邊で臨床醫の採用してゐる闘病法は、患者をして勇敢に病氣に對し挑戰せしめることにある。日本流の「病院」の概念から言へば、彼地でのそれは病院ではなくて「騷院」、或はむしろ學生の合宿所たるの觀がある。騷いでいい時の、彼等の騷ぎ方といつたら、實に徹底的である。S・Uにも私のゐた頃、可愛い二三の茶目大學生がをつたが、彼等は毎朝六時頃になると二三台のグラモフオンを廊下に持ち出し、一等騷がしいジヤッズ音樂か、とても景氣のいいミリタリー・マーチをたてつづけにやつて病院中を叩き起す。また七月十四日のフランス革命祭には、五六人の茶目どもが、何れも奇抜な假裝をし、手に手にバケツ、金だらいブリキ罐のやうなものをさげ、超弩級式のジャッズ音樂入りで、朝早くから他人の寢室に闖入し、病室から病室へと、一高式のストームをやつてまわる。初めての患者、殊に吾々日本流の「病院」の概念に囚はれてゐる者には、これが果してサナトリウムかと疑はれるほどだ、がまた他の一方で、凡ての患者にアルコホルと、タバコと、ダンスとを絶對に禁止して、氣持ちよいほどの嚴格さを示してをるので、彼等のバカ騷ぎもなれてみれば、至極無邪氣で愉快である。このほか復活祭、十月一日の療養所記念日、クリスマス、ジルヴェスター・アーベンド（大晦日の夜）等には、徹夜ぶつ通しで、患者が種々の趣好をこらして運動競技や、芝居其他の餘興をやる。殊に八月一日のスヰイス國祭日には、宵から花火を打ちあげて、夜中すぎまでも屋上のソラリウムでさわぎまわる。

最後に私は、大學療養所内における、男女學生關係について一言しておきたい。S・Uはむろん、女子大學生をも收容する。病院内では、男女學生間の交際は、ヨーロッパ式に極めて自由である。時々甲の彼と、乙の彼女と、普通以上に仲よくなり、二人で手をたづさえて散歩したり、庭の木陰で睦じく語り合つたりする場合にも、所長は笑つてこれを見てゐる。また他の患者たちも、日本で往々あるやうに、それをかれこれ子供らしく問題に

しない。で却つて彼及び彼女間の關係が公明に行はれ、所謂滑行運動の危險が少ないので結局大した不都合も起らぬやうである。彼等はもう、屁や韮の甘つたるい戀愛の酒に醉ひ浸るほど、無思慮でも感傷的でもない。ある程度までの男女學生間の自由な交際は、私はS・U流に大目にみて大したまちがひはないと思ふ。たゞ私は、斯種の療養所にとつて所長初め助手たる醫師の人選が、非常に肝要なことだと思ふ。彼等は醫師としてのみならず人間として立派な人物であることが、絕對に必要である。私は歸朝早々、ある雜誌で、某高原療養所内におけるある醫師と婦人患者との關係についての、所長某博士の感想錄なるものを讀んだが、あれでは到底、吾々の求むる理想的な大學療養所の誕生が望めまいと思つた。

三

順序として私はたゞ目下計畫進行中の國際大學療養所（Le Sanatorium Universitaire International）について少しく述べたいと思ふのであるが、すでに豫定の紙數が超過しさうであるから、これはまた他の機會にゆづることとし、私はここに、我國にも一日も早く斯種の大學療養所の創設せられんことを希望して、この一文を終りたいと思ふ。

世界での有名な肺病國であり、また驚くべき青年學生神經衰弱國である我國に、大學關係者のためのスゥイス式サナトリウム・ユニヴエルシテエル建設の必要あることは、私が特に指摘するまでもないことと思ふ。しかもスゥイスにおいて、すでに七年以來、斯種の療養所を實驗し、その成績は今日殆ど疑問の餘地のないほど良好なものである。

ただ問題は、建設費及び維持費に關する財政上のそれのみであるが、これとて、もしヴオーチエ博士のごとき熱心なる計畫者が出で先づ各大學當局、專門醫學者を動かし、更に新聞、雜誌、講演會等を通じて輿論の喚起につとめ、最後に政府及び一般特志家の財政的援助を得れば、比較的容易にその目的が達せられるのではないかと私は考へる。

理想としてはもちろん、日本の各地に斯種の大學療養所の建設されんことは、吾々の最も望むところであるが、先づ最初の試みとして東京を中心とするS・Uの創設を計畫するのが最も必要でもあり、また實現の可能性にも富んでゐると思ふ。（これには東京における凡ての公私立男女高等專門學校を網羅することは言ふまでもない。）

これはむろん、各專門家の愼重な研究の結果にまたねばならぬが、S・U建設の候補地としては、スゥイス邊に比し濕氣の著しく多い我國では、高山よりも、むしろ海濱の方が適當ではないかと思はれる。殊に東京附近で、高山乃至高原に候補地を求めるとなれば、最も近い所で信州邊になる。それでも療養の目的を達する上に、他所よりもはるかに條件がすぐれてゐる場合には、少し位東京からの距離が大きくとも、それは止むを得ないであらうが、さうでない限り、東京になるべく近く、且つ交通の便のよい所がS・U建設の目的から言つて特に望ましいことと考へる。この理由から私は、湘南地方をその候補地の第一として擧げたいと思ふ。

次に私は、最初の試みとしてはもちろん、國際大學療養所のごとき大規模のものを建てる必要はないと思ふが、しかしまたスゥイス

S・Uの例にかんがみ、ベッド數五十以下の小なるものをつくれば、二三年を出でずして増築の必要に迫られること、最初から明らかである。しかも増築後、收容人員の數はこれを増大し得るとしても、其他の設備において到底最初から相當大規模なるものの完全さには及ばない。で私はベッド數、一百位を標準にして我國最初の大學療養所を建設したらどうかと思ふ。

今假りにベッド數一百のものとして、果してどれほどの建設費を要するか。それはむろん專門家でない私にはわからない。が國際大學療養所の建築豫算から推して、大體の見當は吾々にもつかぬことはない。建築技師の設計書によればS・U・Iの總建坪（建坪は少しおかしいが）は四四、〇〇〇立方メートルで一立方メートルの建築費七〇フランとして總額三、〇八〇、〇〇〇フランとなる。次にS・U・Iでは、二百臺のベッドを豫見してをるので、ベッド一臺についての總費用（部屋の裝飾、食器、ランジユリー、厨具等一切）二、五〇〇フランとみて總額五〇〇、〇〇〇フランを要し、更に衛生的、醫學的、學術的の諸設備費として一〇〇、〇〇〇フランを計上してをる。そこでこの三者を合計すると三、六八〇、〇〇〇フランとなる。これだけの金があれば、とにかく二百名の患者を收容し得る堂々たる近代的サナトリウムが出來上るわけである。一般物價及び勞賃の異る我國に、この數字をそのまま直ちに適用すれば、大なる誤算に陷ることはいふまでもないが、しかしこの計算から、ベッド數一百の療養所を建てるに大凡幾何の費用を要するかは、大體算定ができると私は思ふ。今假りに、ベッド數に準じて三、六八〇、〇〇〇フランの半額とすれば一、八四〇、〇〇〇フラン、卽ち約我が七十一萬七千圓となる。（現在の國際爲替關係は、しばらく考慮外におく）しかもスウイスは、ヨーロッパ第一と言はれるほどの、一般物價生活費及び勞賃の高い國である。で私は、右の數字を基礎として、我國における大學療養所建設費を割出しても、少額に失するといふ憂は先づなからうと考へる。（尤も地震國たる我國の事情に鑑みて、耐震家屋建造の必要それに伴ふ建設費の增加を計算中に入れておく必要がある）。

四

病氣と貧乏とは、近代社會の生んだ二大私生兒である。病人及び貧乏人は、社會に向つて勇敢に、その救濟を要求する權利がある。社會は、彼等の正當なる要求に對して、無關心であつてはならない。自己の不合理性、非組織性の齎した恐るべき結果に對し、放蕩親父のやうに無責任であつてはならない。

卽ち、日本大學療養所創設の急務を說いて一般識者の注意を促す所以である。

（一九二九年八月）

―世界怪奇實話 二―

？

チャアリイは何處にゐる

牧　逸　馬

（1）

七月一日だつた。

夏の早い亞米利加の東部である。四日の獨立祭を眼の前に控へて、フィラデルフィアの町は、もう襲ひかけた炎熱の下に喘いでゐた。

人事的には、この獨立祭から亞米利加ぢう一せいに夏になるのだ。男は、言ひ合はしたやうに麥藁帽をかぶり出し、女は、一夜のうちに白い輕裝に變はる。亞米利加の生活で樂しい年中行事の一つである、言はば衣更への季節だつた。

この費府の第一流の住宅區域に、ロス氏といふ有力な實業家が、宮殿のやうに堂々たる大邸宅を構へて住んでゐる。ちやうどこの時、ロス夫人は、來らんとする夏を逃げて、早くも田舍の別莊へ避暑に行つてゐたが、この問題の一日の夕方、ロス氏が、市の中心にある自分の會社から歸つて來ると、二人の愛息に附けてある若い保姆が、玄關に立つて、主人の歸宅を待ちながら泣いてゐた。

ひどく取り亂してゐる。訊いてみると、その二人の息子が、午後から姿を消して、邸の内外どこを搜してもゐないといふのである。ふたりの男の子は、上をウオルタアと言つて七歳、弟のチャアリイは三つで、どちらもロス夫妻が眼に入れても痛くない、愛くるしい子供達だつた。兄弟仲も好く、いつも一緒に

跳ね廻つて遊んでゐた。

はじめロス氏は、保姆が責任を感じて狼狽してゐる割りに、この報せを軽く受け取つて、呑氣に聞き流した。

『なあに、子供のことだから、遊び呆けて遠つ走りをしたのだらう。迷子になつてゐるのかも知れないが、大したことはないさ。もうすこし待つてみて歸つて來なければ、警察に頼んで捜して貰はう。さうすれば、直ぐ見つかるに決まつてる。』

かう却つてロス氏が保姆を慰めるやうな口調だつた。

が、この清々しい初夏の夕ぐれこそは、じつに古今の犯罪史に比類を見ない、一つの小説的悲劇が、これから高速度に進展しやうとする、そのほんの緒に過ぎなかつたとは、當のロス氏をはじめ誰も氣が付かなかつたのだ。しかし、かうして突然費府の富豪ロス氏の家から居なくなつた、三つになる此の愛息Charlie Rossほど、そしてそれを序曲として開幕されたあの劇的場面の連續ほど、奇怪な特異性に富む事實物語は又とないであらう。

僕はいま、すべての作家的手法を排除して、その一伍一什をこゝに詳述してみたいと思ふ。

暗くなつても歸らないから、ロス氏もすこし周章て出した。ともかく、所轄署へ電話をかけて二兒の捜索を依頼すると同時に、心當りの知人の許や、近處の家へも人を遣つて聞き合はしてみた。元より七つに三つ子供である。人を訪問するわけもないし、よし假りに遊びに來たとしても、日が暮れるまでロス氏のはうへ知らせもせずに引き止めて置く家もあるまい。いはゆる御飯時だといふので、召使でも付けて返して寄こす筈だ。したがつてこの、ロス氏の個人的捜査は、はじめからあまり期待もかけなかつた通りに、全然無效に終つた。二人は何處の家へも行つてゐないのである。が、いよいよさうと判ると、ロス氏は初めて眞劍に騒ぎ出してゐた。

一方ロス氏の電話を受け取つた所轄署は、早速管内に散らばる警官に非常通牒を發してロス兄弟の影を見張らせたが、蟲のしらせとでも言はうか、署長は之だけでは何となく不安を感じて、すぐさま中央署へ通知して助力と指揮を仰いだ。これは單に、依頼人がロス氏といふビジネス界と市政の大立物なので、特に大事を取つたに過ぎなかつたのかも知れないが、この署長の措置は、大いに機宜を得たものとして、後々まで長く一般の好評を博したのだつた。中央署も、相手がロス氏とあつて直ちに活動を開始した。映畫で見るやうな、[illegible]

の警官隊が、昆棒を振り廻し、チユウヰング・ガムを嚼みながら八方へ飛んだ。私服も參加した。一瞬のうちに電話の鈴が全市の分署へ鳴り響いて、宵の口のフィラデルフィアに忽ち物々しい搜査網が繰り擴げられた。いつたい亞米利加の巡査といふと、何時もチヤアリィ・チヤツプリンにお尻を蹴られたり、怒つて追つ馳けやうとする拍子にバナナの皮を踏んで引つくり返つたりなんか、つまり、あんまりぱつとしない役目の喜劇的存在とばかり、何ういふものか概念されてゐる傾向があるが、あゝ見えても、生れつき神經の太い愛蘭人が多いせいか、いざとなると仲々眼覺ましい活躍をやるのである。ことにかういふ連絡訓練を要する偶發事件になると、瞬間の告知で整然たる行動を取り得る制度が完備してゐるのだ。それに、普段から市民に親しまれてゐるから、何か事があると、誰もかれも有要な情報と援助を與へることを惜まない。こゝらが日本あたりとは大分違ふ。それからもう一つ、これはちと大きな聲では言へないが、このロス兄弟事件の時なども、ロス氏が聞えた富豪であり、おまけに決してけちん坊ではないといふので、子供を發見した警官には、ロス氏のポケツトから多大の恩賞が出るにきまつてゐる。そこで、われこそはその幸運に預からんものと、正直なもので、數百の警官がまるで寶探しでもするやうに、この、金儲けになる福の神みたいな子供の行衞を眼の色を變へてさがしまはつた。變な話しだが、この種の金錢の授受は、亞米利加では當然の謝禮と目されてゐて、出すはうも貰ふ方も格別やましくない。こんなわけで公務に個人的利益の熱意が加はつて、そのため意外に能率が上るのかも知れないが、こゝらは、日本とは大いに違ふ。日本では、大金を出して勳章を買つたり、賣つて儲けたりする代議士や大官はあつても、個人の謝志を些少なりとも黄白の形でポケツトする警官はあるまい。また、あつては大變だ。が、これは餘談。

そのうちに時間が經つて、九時、十時、十一時――しかし、それでもまだ、警察はじめロス氏自身も、心配は心配として、この事件をそれほど運命的に重大な性質のものとは夢にも考へてゐなかつた。ウオルタアとチヤアリィは歸路を失つて迷兒になつたもの、早晩何處かの横町ででも發見されて、安全に伴れ戻されることだらう。ロス氏はかう簡單に解釋して、不安のなかにも、心の底では絶えず樂觀し切つてゐた。人間は、何によらず凡ての物ごとを、最後の最後の最後まで、淡然ながら自分にとつて有利にのみ信じてゐたい生物である。この物語は、その間のこゝろもちをよく現してゐる。

やがて、十二時。いよいよ上を下への騷動になつてゐたロス

氏邸で、このとき怪魂しく電話のベルが鳴つた。

警察からである。

『ウォルタァだけ見つかりました。八哩市外の田舍道で泣いてゐました。奇怪な話を持つてゐます。すぐにお宅へ送り届けますが、チャアリィのはうは、今のところまだ不明です。』

ウォルタァといふのは、七つになる上の兒で、弟のチャアリィは三歳。三つと言つても西洋の三つだから、日本の數へ年にすると四歳乃至五歳に當たる。ウォルタァも八つか九つのわけだが、とにかく、一緒に出た兄弟のうちウォルタァだけ發見されて、チャアリィは？ No trace of Charlie, so far！ 昂奮した聲がかう叫ぶやうに言つて、警察からの電話は切れた。

八哩市外の田舍道、奇怪な話し——ロス氏は、こゝに始めて、事件を全然別の色彩で見た。そしてその容易ならぬ豫感にはつきりと胸を衝かれた。

ウォルタァが歸つて來た。が、彼の話しは簡單だつた。午後三時頃、チャアリィと二人で家の前に遊んでゐると、小さな荷馬車で通りかゝつた二人の男が、その馬車で面白いところへ伴つて行つてやるから乘らないかと誘つたのだといふ。この年頃の男の子は、乘物といふと夢中なものだ。自家には立派な自動車があるけれど、自動車には飽きてゐる。却つてその汚い荷馬車に、拒み切れない子供らしい誘惑を感じたのだらう。幼い兄弟は無邪氣に笑ひさゞめいて、先を爭つて馬車へ這ひ上つた。馬車は走り出す。逃げるやうに速力を增す。巷の景色は、おんば日傘で育つて來た子供達に、この上なく珍しかつたに相違ない。はじめのうち、二人は手を拍つて喜んでゐたが、やがて市街を出外れて淋しい田舍路にかゝると、子供ごころに急に不安を感じたものか、ウォルタァが大聲に泣き叫び出した。すると、人の注意を惹くことを恐れたとみえて、二人の男は素早く相談のゝち馬車を停めてそこの路傍の草の上へウォルタァだけ下したのである。そして、恐怖も不安もなくにこにこ笑つてゐるチャアリィを乘せたまゝ、遠い一本道を鞭音高く馬車は消えてしまつた。兄弟はかうして別れたのだ。

事件の性質は一變した。もう、富豪の迷兒を見つけてお禮にありつかうなんかといふ呑氣なものではない。新しい命令が全市へ飛んで、警官は一せいに緊張した。あわたゞしい電話と電報が深夜の空氣をゆるがせて、即刻費府の外輪六十哩にわたつて警戒網が敷かれた。誘拐の前科者へはすべて動勢を窺ふべく刑事が附けられた。普段から白眼んでゐる市内外の惡の巣窟へは

猶豫なく警官隊が踏み込んだ。が、この、七月一日の夜中から翌二日、三日とかけて總動員で活躍した其筋の努力は、何ら報ひられなかつた。問題の馬車に乘つてゐた二人の男も、チヤアアリイも、まるで大地にでも呑まれたやうに、その片影すら見せないのである。

かうなると、ロス氏としては、警察と神樣を賴つて祈るよりほか仕方がない。そのあひだのロス氏の氣持ちは、じつに、自分の心臟を生きたまゝ食べるといふ形容の通りだつた。ゴルフで鍛へたロス氏が、一睡もしないために眼は凹み頰はこけて、まるで別人のやうになつた。彼は、一日の朝オフィスへ着て出た服のまゝ、晝夜ネクタイも取らずに吉報を待つて電話の傍に立ちつくした。しかし、それでもロス氏の頭の隅には、まだ〳〵一縷の望みが宿つてゐた。といふより、チヤアリイの無事と早晩の歸宅を無條件に信じて、彼は疑はなかつたのだ。かうはつきりと、これが誘拐者の仕業と判つてみれば、相手の眞の目的が金錢にあることは言ふまでもない。そんなら、その金さへ出し惜まない以上、何も騷ぐことはない。動ずる必要はないわけである。金で話しの付くことなら大いに御し易い。ロス氏はかう考へた。そしてそれまでは、大事な玉(スタフ)だから、先方もチヤアリイに害を加へるやうなことはあるまい。折角の子供(たま)を殺してしまつたりしては、元も子もないからである。で、今さし當つて愛子の身に危險が迫つてゐやうとは想像されないと自分に言ひ聞かせて、ロス氏は、この、安心出來ない安心に、無理にも縋らなければならなかつた。

いづれそのうちに誘拐者のはうから、何らかの方法で何とか言つて來るであらう。さうしたら、あとは身代金の額の問題と、交換の場處方法等に關する交渉だけだ。言はゞ、事は取引きになる。急報によつて避暑先から歸つて來てゐた夫人にも、ロス氏はかう慰めるやうに言つて、誘拐の第一通信をぢつと待つてゐた。

(2)

が、何時まで待つてゐても仕方がない。で、ロス氏のはうから、新聞廣告を仲介に、進んで誘拐者へ話しかけた。七月三日附けの費府發行の諸新聞はすべてこのロス氏の探人廣告を大きく掲げてゐる。言ふまでもなく廣告の形式は飽くまでも一般公衆に宛てたもので、「チヤアリイの發見、若しくはその所在を知るに役立つ報道を齎した人へは相當以上の金員を呈する」旨をわざと簡單に記すにとゞまり、犯人に警戒させないために深甚の注意を拂つてあつた。

するとこゝに一つ、困つた問題が起きた。と言ふのは、どうせこの廣告を見て、チヤアリイは私の家にゐますとか、これ〳〵のところに匿まはれゐるのを知つてゐるとか言つて出て來る者があれば、それは犯人か犯人の廻し者に決つてゐる。しかし、これではまるで私が誘拐しましたと自首して出るやうなもので、そんな馬鹿なことをするやつはあるまい。さうすると、隱れてゐる誘拐犯人に何か音を出させるためには、ロス氏としては、先づ何よりも、犯人に向つて絶對に逮捕の危險のないことを確保しなければならないのだが、警察は、その保證を與へることを拒絶した。

警察の言ひ分も、尤もである。

『成程、ロス氏は子供さへ取り返せばいゝのだらう。そのためには大金を出すことをも辭しまい。ロス氏は金がある。事實、全財産を投げ出してもいゝとまで言つてゐるが、そんなことをされては、まるで誘拐者に賞金を與へるやうなもの、この種の犯罪を奬勵するも同じで、われ〳〵の眼の下でかういふ取引きが行はれるのを、法として許すわけには往かない。金と交換に子供さへ返して寄こせば、警察は指一本觸れないなどゝいふのは持つてのほかだ。そんなことがあつては無警察狀態である。われ〳〵の存在を無視し愚弄する、これより甚だしきものはない。われ〳〵の眼の碧いうちは斷じて――』

西洋人だから眼の黑いうちと言ふところを碧いうちとやつた。とにかく敎圍いた。

じつさいその通りである。

ロス氏は、チヤアリイの身柄に傷をつけずに受取りさへすればそれでいゝ。そのためには金なんか幾らでも出す心算である。が、警察としては、勿論子供も子供だが、かうなると何よりも犯人を捕まへたい。こゝに、ロス氏側と警察と二者の目的の間に、避けられない開き(ひら)が生じた。そして、言はゞこの、事件の性質上當然の開き(ギヤツプ)こそは、實にこの事件を取り返しのつかないことに導いてしまつた眞の原因である。とかう言ふと、或る人は嗤ふだらう。決して摑まへないといふ警察の保證を付けて犯人を誘き出し、その、のこ〳〵現れたところを子供と一緒に押さへちまへばいゝぢやないか、と。これは誰しも第一に考へるところで、さううまく往けば簡單な解決である。まことに世話がない。ロス氏も、警察もこの胴手段には先刻氣が付いてゐるんだが、そんな尋常な手に乘る相手ではないのだ。殊に先方が職業的な誘拐者であつてみれば、そんな策戰は百も承知してゐて、如何に巧妙に網を伏せたところで、間違つてもそいつに引掛るやうなだらしのないことはしない。從つて實に、出一

つ向うの水を嗅ぐ鹿のやうに、其筋の動きと自分の危險に對しては、つねに異常に敏感にこれを察知し、それによつて拔け目なく行動するのだから。

ところが、大した期待も置かず出した新聞廣告に案外早速反響があつた。三日に掲載された四日のことである。誘拐者からの最初の手紙がロス邸へ郵便で配達された。なかなか面白いから先づ左に原文を掲げる。

Mr. Ross—Be not uneasy. Your son charlie will be all write. We as got him, and no power on earth can deliver him out of our hands. You will hav to pay us before you git him from us, and pay a big sum, too. If any approach is maid to his hidin plaice that is the signal for his anililation.

大變な名文である。譯す必要もあるまいが、概略を記すと、『御子息チヤアリイはおれ達と一しよにゐるから安心するがいゝ。が、地上の何んな力もこの兒を俺たちの手から取り上げることは出來ない。子供が欲しければ、その前に金を拂ふべし。それも大金である。若し何とかして子供の隱れ場處へ近づかうとすれば、直ちにそれはチヤアリイの死滅への合圖となる。』

砂糖の包み紙の裏へ走り書きしてある。發信人の住所は勿論、署名もない。が、ロス氏は、これでもうチヤアリイが歸つて來たやうに喜んで、直ぐさま、金を支拂ふことを承諾するから一層進んだ交渉に移りたい趣を、それとなく新聞廣告にして出さうとした。相手の居所が判らないから、ロス氏は新聞廣告を媒介に意思を傳へるよりほか方法がなかつたのである。するとこゝへ、警察が割り込んで來て、その手紙の返事を新聞廣告に出すことを嚴禁してしまつた。

こゝらが甚だデリケイトな問題の生ずるところである。犯人は、一日も早く子供を金に換へやうと焦つてゐる。つまり多額なる値段でチヤアリイをロス氏へ賣り返さうとしてゐる。ロス氏は、如何なる高値も辭せずにそれを買ひ戻さうとしてゐる。言はゞ、ロス氏と誘拐者はその利害において一致してゐるわけで、ロス氏さへ物質上の損をすれば、チヤアリイは安全にロス氏の手へ返る筈だつたが、警察は警察で、威信といふこともあれば、また別の觀方もある。そんなことをされては降參も同然で、まるで犯罪を助長するやうなものだ。かく言つて極力ロス氏の腰弱の態度を排撃したから、この警察の干渉が邪魔をして、子供を提げてロス氏へ接近しやうとする犯人も近づくことが出來ず、警察を出し拔いて何とかして直接犯人と交渉を進め

たいと考へ出したロス氏には、つひに四六時間それとなく密偵の看視の眼が光るに到つた。警察としては確かに止むを得ない遣り方であつたらう。しかし、ロス氏の身になつてみれば、先づ何よりもチャアリィをこつちのものにすることが第一である。この必要に應じて、何故警察は、はじめ見て見ぬ振りをし、眼をつぶつて犯人とロス氏の間に子供の身柄と金錢の授受を完了させ、然るのちに、改めて犯人の捕縛に向つて探査の歩を進めなかつたか。このはうが却つて新しく犯人の足跡を辿る意味でも好都合ではなかつたか。ちよつと考へただけでも、その金の眼じるし、用途等有力な手懸りが新たに得られる筈ではないか。何と言つても、向うが子供を押へてゐるあひだ、弱みはむこうにある。言ひなり次第になつて先づその手から子供を引き離し、それから警察として獨自の活躍に移るといふのが、この際最上の分別ではなかつたか。とにかくこの事件はちようど狂暴な野犬が何か毀れ易い貴重品をくわへて庭へ逃げてしまつた。それを、何とかしてうまくだまして取り返さうとしてゐるのと同じで、貴重品の所有主にとつては、犬なんか捕まらうと逃げやうと大した關心でない。それよりも、犬が毀さないうちに品物を取り上げてしまはなければならないから、自然に宜し、よしになんかとお世辭を使つて、交換に肉片でも見せながらそつと近寄らうとすることだ。この場合、第一の禁物は犬を怒らせたり驚かしたりすることだ。こつちには貴重品だが、犬にとつては何でもない。すでに荷厄介になつてゐて、何時氣が變つて嚙み破るかも知れないのだ。はらはらしてゐるところへ、その貴重品には比較的關係の薄い第三者が現はれて、いきなり犬を追ひ廻したとしたら何うだ？　この第三者は、犬と品物とを一しよに押さへやうとしたまでで、決して品物の安否を無視したわけではないが、結果から見て、その行爲は品物の安否を無視したことになり、所有者の恨みを買ひこそすれ、感謝されはしないであらう。犬は、驚いた拍子に、或ひは、怒りに任せて、きつとその貴重品を滅茶々々にして、おまけに逃げてしまふに相違ないからである。このロス事件の場合が丁度それだつた。まづ肉でも何でもやつて品物を離させたのち、それから犬を捕まへにかゝればよかつたのだ。警察は法規と威信にかまけて、思慮が足らなかつたと言はれてもぐうの音も出まい。

しかし、警察には確たる逮捕の見込みがついてゐるのだ。だから、任せて置いて見てゐるがいゝとばかりに、大いに腰が强かつた。かうして、いよいよロス氏と警察の間に意見の背馳し

て來ると、警察は急に積極的に出た。

突如、警察の名で新聞廣告を出して、チャアリイ・ロスの發見、竝に誘拐者の捕縛に資する重要材料の呈出者には、告知と同時に二萬五千弗を與へるといふので、これは實に、眞正面から誘拐者を相手取つた、思ひ切つた挑戰だつた。

これが不可なかつた。この一片の新聞廣告である。費府の警察がいまだに責められてゐるのは。そして、いくら責められても仕方がないのは。

素人が考へても判る。これではまるで犯人を愕かして警戒させ、狂暴なやつを一層狂暴にし、子供なんか何うでもいゝから逃げるなら今のうちに逃げろと言ふのと同じである。が、警察としてはこの態度が正しかつたのだらう。立場から言つて、ロス氏のやうに初めから折れて出ることは出來ない。子供を返して呉れ。金は言ふだけやる。しかも警察は決して干渉しない。いはゆる no question asked では、法律が許さない。これは法學者の謂ふ compounding a felony——盜品の買上げ若しくは返還賠償の條件附きで犯人を赦免すること——に該當し、近代文明國の刑法原理に悖る、立派な不法行爲だからだ。それはさうかも知れない。が、要するに、理屈は理屈だ。實際には、この警察の廣告のために、たうとうあの思ひがけない結果になつてしまつたではないか。のみならず今日に到るまで、この事件に關する限り、そして地球の存續するあひだ、費府の警察當局は頭が上がらないでゐる。

そんならば、如何にこの廣告が事件の方向を運命的に轉換するに役立つたか？——かうだ。

果して、これでびつくりした犯人は一層深く潛つたものとみえ、當分ロス氏の許へも警察へも、何らの音信がなかつた。と、七月廿四日、犯人からの第二の手紙がロス氏へ屆いた。前便と同じ手蹟で、「チャアリイが俺達の手にあるあひだ、おれ達は、亞米利加中の探偵が大騷ぎをしたつてすこしも驚きはしない。警察は、チャアリイの發見とわれ〱の首に大枚の賞金を懸けてゐる。しかし、これは、チャアリイの身にとつて實に危險なことゝは思はないか。若し警察が、チャアリイに對して、父親である資家と同じ心臟を有つてゐたら、恐らくかゝる愚は敢へてしなかつたであらう。二萬五千弗の懸賞は取りも直さず御子息チャアリイの首にかけたもの、それは、明らかにチャアリイの犧牲を前提としてゐることを御賢察ありたい。」大體こんな文面だつた。そして、それきりぱつたり通信は絕えた。

ロス夫妻の心痛が何んなに大きかつたか、それは言ふまでもなからう。センセイショナルな事件なら何でも好きな亞米利加のことである。この時は既に全國煮えくり返るやうな騷ぎで、同情は雨のやうに夫妻の上に集まつてゐた。溺れる者と同じ心持ちから、夫妻は藁をも掴みたかつたに相違ない。水兵服を着て頭を分けた、可愛いチャアリイの寫眞が、發見のよすがにもと、毎日亞米利加中の新聞に掲載されて、人の親の泪をそゝつた。寫眞は、海を渡つて、英國はじめ大陸の新聞にも「探ね人」の註とゝもに載つた。一説に、誘拐者はチャアリイを歐羅巴へ連れ渡つたらしいといふ噂があつたからだ。同じ年頃の子を持つ人々は、誰も他人事とは思はなかつた。今まであんまり構ひつけなかつた子供を急に大事にしはじめるやら、ちよつと姿が見えないと言つては大騷ぎするやら、それを裏庭で「發見」した母親が頬擦りして泣くやら、父親は、思ひ出したやうに子供を坐わらせて置いて、街上の見知らぬ人を用心しなければならない必要を汗を掻いて説明するやら、全米國で、三四歳の小兒が一躍家庭の花形に納まり、すつかり偉くなつてしまつた。とにかく、到るところで悲喜劇が醸された。

この騷動の最中、萬事實際的な亞米利加に、甚だ亞米利加らしくない、一つの神秘的な挿話が持ち上つた。或る晩、ロス夫人が夢を見たのだ。

その翌日、ロス氏邸から電話によつて、紐育警視廳――事件の捜査本部はこの時紐育警視廳に移されてゐた――から、直ちに係りの探偵長ウォウリング警部が出張して來た。

客間に對座するとすぐ、ロス夫人が言つた。

「きつとお笑ひになるだらうと思つて隨分躊躇致しましたが、あんまり氣になりますので、思ひ切つておいでを願ひました――實はわたくし、夢をみました。」

「はゝあ、夢を――。」ウォウリング氏は鳥渡奇妙な顔をしたが、流石に笑ひはしなかつた。「で、何んな夢でしたか。承りませう。」

この、悲嘆に打ちのめされてゐる夫人の手前だけでも、彼は、笑へなかつたのである。すこし逡巡したのち、夫人はその夢物語をはじめた。

「チャアリイの夢で御座います。はつきりと見ました――沼のやうな、川のやうな、とにかく水のあるところでした。蘆の間にボウトが浮かんでゐます。そのボウトの底に――。」

警部の顔を、一種恐怖に似た驚愕が走つた。

「何ですつて？　水？　ボウト？」

「えゝ。そのボウトの底に、痩せ衰へたチャアリイが、手足を縛られて倒れてゐました。わたくしを見て、ママア、ママアと細い聲で呼ひながら、何時までも泣いてゐますの。チャアリ

イ！　と呼んで駈け寄らうとしますと、自分の聲ではつとして眼が醒めました。けれど、いかにもあり〳〵とした夢で、葦の葉が風に搖れてゐたのさへおぼえてゐます——あら！　何うなさいまして？』

夫人が仰天したのも無理はない。ウォウリング警部は、皆まで聞かずに、帽子を握り締めて突つ起つてゐた。

(3)

『奥さん！』探偵長はひどく昂奮して、蒼い顏だつた。『不思議なことがあるものですねえ。全く、氣味が惡いほど不思議です。その夢は、いま私どもの持つてゐる確信を一さう裏づけるばかりです。實は、誘拐者の名は、もう私どものはうには判つてゐるのです。モスタアにダグラスといふ、有名な河の海賊ではないかと、いや、充分信ずるに足る確證が上つてゐるのですが、今のお話しで決定したやうなものです。必ずチヤアリイは、あなたの夢のとほりに、このモスタアとダグラスのボウトに乘せられて、何處かあまり遠くない、葦の生えてる川のあたりを漂つてゐるものでせう。もう大丈夫、こつちのものです。御安心下さい。』

ウォウリング氏は自信に滿ちて、いよ〳〵速刻手配すべく、勇躍してロス邸を辭した。

實際警察は、この二日前に、或る確かな筋から、モスタアとダグラスに人相の一致する二人の男が幼兒を伴れて、ボルテモア附近の海岸の入江に接續する沼澤地方をこつそりとボウトでさまよつてゐるのを見た者があるといふ、貴重な情報に接してゐたのだつた。そして、事實この時すでに、腕利きの刑事の大部隊がその方面に總動員されてゐたのだ。が、このロス夫人の夢で見込みを倍加した探偵長は、歸廳するや否、なほも手落ちのないやうに追加の警官を續々と繰り出した。ボルテモア市郊外の沼地に大々的な非常線が張り渡された。逮捕は一日、いや、一時間、いや、この一刻の勝負かも知れない——警視廳とロス氏邸は、今か今かと吉報を待ち構へて、極度に色めき立つた。

この大掛りな非常線を指揮したのは、ウォウリング氏の同僚ヘデン警部だつた。二日經つと、果してその部下の一人が、モスタアとダグラスの最近の足跡を嗅ぎつけて來た。すつかり追ひ詰められて手も足も出なくなつてゐる二人は、昨夜窮餘の一策で大膽にも繫留中の河船を襲ひ、拳銃で番人を脅迫して食糧を奪ひ去つたといふのである。そして、特別に、壜入りの牛乳を煖めさせて持つて行つたと聞いて、捜索隊はさてこそと安堵の胸を撫で下ろした。これで見ると、まだチヤアリイは生きて、彼等と一緒にゐるのだ。それに、二人の兇漢が如何に食物

ちりに困つてゐるかもよく判る。搜査隊は一さう緊張して、ちり／＼と網目を縮めて行つた。が、何分にも地形が悪い。到るところに泥沼や堰返しの淀が隠れてゐて、地理を知るモスタアとダグラスには絶好の潜み場處を與へてゐる。おまけにこつちは、應援の青年團やら好奇な野次馬やらで矢鱈に人數が多いから、ざわめくばかりでも先は逸早く物音を聞きつけて逃げてしまふ。それは實に、可成り廣い地域に亙る、必死の、そして奇妙な鬼ごつこだつたと言つてい丶。第一に、彼らは決して二晩と同じ入江に止まらない。そのため、これは後で判つたことだが、人狩りの連中は二度も三度も闇黑のなかで獲物の直ぐ傍を通りながら、すこしも氣の付かないことさへあつた。が、最後に、ひとり離れて身長程もある葦を分けてゐた一警官か、偶然、草むらの水上に隠れてゐる古いボウトを發見した。子供は、寢かされてでもゐるのか、見えなかつた。髯だらけの男がふたり、ボートの上から野獸のやうな眼をして警官を見返してゐた。夕方のことである。相互から同時に發砲してゐた。

が、音を聞いて、附近に居合はせた人々が駈けつけた時は、もう葦がボウトを呑んでしまつたあとだつた。全く、あつといふ間のことだ。一同は直ぐに、胸まで水に漬かつて追跡に移つたが、すでにボウトは、迫る夕闇と立ち昇る水靄に紛れて、影も形もなかつた。

しかし、この出來事は、すつかりモスタアとダグラスの心膽を寒からしめたものとみえる。彼らはいよいよ危險を感知して、その夜のうちに狼狽て丶陸へ上つたらしい。水遊に許り氣を取られてゐた搜査線を見事に突破して、闇黑と丶もに何處へともなく走つてしまつた。多分、チヤアリイを作れたま丶。

夜明けに、搜索隊の一部が、昨夜發見の地點から約四哩を隔てた小川の岸に、乘り棄てられた空のボウトに往き當つた。そのボウトと並んで、離れないやうに強い綵で縛つた、一隻の玩具の小舟が浮かんでゐた。玩具と言つても、木の幹を小刀(ナイフ)一本で削つて、何うやら舟の形に似せたもので、土人の細工物のやうに不器用な、小さな獨木舟だつた。兇漢の一人がチヤアリイのために骨を折つて、何日かの大騒ぎののち、やつと作り上げたものであることが判る。それを浮かべて、大喜びで遊んでゐるチヤアリイの様子が眼に見えるやうだ。一同はこの可愛い「手掛り」の拾得に、今更のやうに新しい涙の微笑を禁じ得なかつた。

自家にあつては、何んな高價な、精巧な玩具をも手にすることの出來る富家の愛子である。それが誘拐されて屋根のないボウトに棲み、風雨に晒されて、こんな物を唯一つの玩具に一人

で遊んでゐたのだ。私は徒らに感傷を弄するわけではないが、このチャァリィの舟を見た時は、子供を持つ警官はみんな眼をうるませたといふ。無理もないと思ふ。それよりも面白いのは、誘拐した惡漢が、かうして伴れ歩いてゐるうちに、このチャァリィに愛を感じ出してゐるらしい一事だ。彼らだつて人間だからすこしも不思議はないが、手の掛る子供を抱へて、男ふたりで大いに困つたことだらうと察しられる。何うせこんな連中だから家庭を持つたこともあるまいし、育兒の經驗や知識なんか、彼らからは火星ほども遠い神祕の世界だつたに相違ないが、泣き止まない時など、二人の無頼漢がさぞ顏を見合はせて當惑したらうと、その光景を想像することはちよつと人間的に愉快である。そして、そのうちの一人が、或ひは、兩人協力して、まるで父親みたいに、ボウトの中で日向ぼつこでもしながら、チャァリィのために此の玩具の舟を拵へて、「こら、チャァ公！　毀すんぢやあねえぞ」なんかと、多分の威嚴とゝもに與へたのだ。恐らくは、もう「チャァ公」になり切つてゐるであらうチャァリィが、「うんこわしやしねえや」ぐらゐの返答をしたに違ひないと心描することは、何と諸君、果して不自然であらうか。

その間も、費府のロス氏の許へは、一週ごとに脅意を強調した誘拐者の手紙が、間斷なく配達されてゐた。身代金は、五萬弗にまで競り上つてゐた。もう一日の猶豫もならない。卽座にこの金額を拂はなければ、チャァリィの眼を硫酸で燒いてしまふと言つて來た。

かうして、ロス氏夫妻の苦惱と全米の騷ぎが頂天に達した時である。ふとしたことからあれ程頑強だつたモスタアとダグラスの二人が明るみへ引き出されて、事件は、急天直下的に、ともかく表面は解決を告げたのだつた。

チャァリィが誘拐されてから五箇月餘り經過した、十二月十四日の深夜ベイ・リッヂといふところにあるヴァン・ブラント氏の家へ押し込まふとしてゐた二人組の強盜が、物音を聞いて起き出た執事（バトラア）によつて發見された。まだ這入らないで、窓硝子を切らうとしてゐる現場だつた。幸ひこの家は男手が多かつた。主人のヴァン・ブラント氏と息子と、それに運轉手や料理人の召使達が、手に手に短銃を擬して強盜に立ち向つた。巡査が驅け付けたのも、珍しく早かつた。強盜は勇敢な抵抗を開始した。廣大な芝生の庭で、小零銃戰がはじまつた。家の者は窓へ倚つて發砲し、警官隊は塀の間から挾み擊ちし、強盜は、植込みから植込みを昆蟲のやうに這つて縫ひながら、この内外の敵を相手に猛惡に應戰した。が、忽ち、彼らの一人が銃丸に當た

つて、恐しい呻き聲をあげた。續いて、もう一人の方も草に仆れた。先に遣られたはうは瀕死の重傷とみえて、唸り聲が段々細つて往く。輕傷者が聲を絞つて降參の意を表した。人々は攻擊を中止して、それでも萬一の不意打ちに備へて充分要心しながら、聲のする、方へ接近して行つた。

すこし離れて、別々に倒れてゐた。一人は、額部から貫通した彈丸にすつかり後頭部を吹き飛ばされて、桑の木の下に死んでゐた。卽死である。手の下しやうがなかつた。

他の一人も可成りの重傷らしかつたが、まだ息が通つてゐた。苦しさうにブランディを要求してゐた。何か言ひ度いことがあるとみえる。早速ブランディを取り寄せて、その口へ流し込んだ。

男は、最後の舞臺の中央を占める俳優的重要性を充分意識して、死にかゝつてゐるくせに、鳥渡氣取つて奇怪なことを言ひ出した。

『皆さん、懺悔させて下さい。私は、チヤアリイ・ロスを誘拐して世を騷がせたジヨウ・ダグラスといふ者です。相棒と二人でやつたんでさ。あの相棒、ビル・モスタアといふ――何處かそこらに倒れてるでせう？　あいつ、ひどく遣られてますか。』

この重大な告白に驚いた立會ひの或者は、生命のあるうちにと急いで訊問をはじめた。

『何でもいゝ。チヤアリイは何處にゐる？　早くそれを言へ。』

『ヴアンダビルト家の息子と思つて盜んだんでさ――。』

『盜んで何うした？　いま何處にゐる？』

『チヤア公かね。俺あ知らねえ。』

『なに、知らない？　嘘を言へ。』

『ほんとに知らねえ。チヤア公の居場處なら、モスタアの野郎が知つてる。』

そのモスタアは既に死んでゐる。愕然とした一同は、一層ダグラスを圍んで詰め寄つた。モスタアが卽死したと聞いて、瀕死のダグラスも、肘を立てゝ身を起さうとした。人々は、ダグラスの疑ひを霽らすために、モスタアの屍骸を引き擦つて來て見せなければならなかつた。すると、がつくりとなりながら、ダグラスが言つた。

『もう駄目だ――。』

『何が駄目だ。』

『もうチヤア公は見つかりつこない――おれも死ぬ間際だ。

[illegible]言はねえ[illegible]誘拐して、[illegible]

公のやつ、すつかりモスタアに馴付いちまつて、モスタアの野郎もまた、柄になく、チヤア公を自分の子供みてえに大事に可愛がつてゐましたが、そのうちに、自分ひとりのものにしやうてんで、私からも隠してしまつた。私も癪に觸つたが、大體これはモスタアの思ひ付いた仕事だし、仕方がないから胸をさすつてゐました。かういふ譯で、この頃のチヤアリイの居どころを知つてゐるのは、モスタアだけなんでさ。いまそのモスタアに死なれてみると——もう駄目だ。親元には氣の毒だが、もうチヤアリイは見つかりつこねえ——。』

紐育から急行した二人の顔を見知つてゐるウオウリング警部は、一瞥してこの二個の屍體をモスタアとダグラスと確認した。

もう駄目だ。事件は事件としては、綺麗に解決したのだ。

が、チヤアリイは何處にゐる？

モスタアの頭部を粉碎したあの運命的な一個の彈丸は、モスタアの生命と緒に、チヤアリイの所在をも彼の世へ運んでしまつた。ことによると、モスタアは、チヤアリイを愛するあまり、死んでも彼のいはゆる「チヤア公」を返さないつもりで、「養子チヤアリイ」の可愛い記憶を藏したまゝ獨占の幸福に醉つて息を引き取つたのかも知れない。しかし、ロス夫妻は諦めなかつた。殘餘の生涯と財産の全部をチヤアリイの搜索に蕩盡して、ずつと昨年に及びながら、つひに二人とも最近相次いで死んでしまつた。チヤアリイの名を死の口唇に殘したまゝ。恐らく、夫妻は死んでもまだ諦めないであらう。そして一人の兄ウオルタアは、今なほチヤアリイの歸宅を待つてゐるのだ。

チヤアリイは何處にゐる？

若しモスタアが沼澤地方の草の奥か、海岸洞窟にでもひそかに隠したものなら、餓死が漸時にチヤアリイを把握して、いま頃は、小さな白骨が粗らに散亂してゐるに過ぎまい。

しかし、一般には、このチヤアリイは生きてゐるものと信じられてゐる。生きてゐれば、今は立派な青年紳士、いや、紳士ではあるまい。きつと、若い野獸のやうな、素晴しい美丈夫の巷の無頼漢に成長してゐることであらう。日本流に數へても、四五歳と言へば、まだ殆んど何らの意識と印象を帶びない頃である。自分を中心に逆卷いたあんな大騒動の片鱗をも記憶してゐないだらうし、生家のことなぞ夢にも知るまい。勿論、名は變つてゐる。このチヤアリイと、兄のウオルタアが今對面したら？——あまりにくつきりした人生の分岐だ。相方に殘酷だ。もうかうなつては、會はないはうがいゝ。

が、それにしてもチヤアリイ、君は一體何處にゐる？

三省堂發賣

(各書店にあり!!)

昭和五年 ポケット日記

一九三十年型!

★名★刺★入★付・總革製

斷然上品で氣が利いてゐる手帳代用!!

¥.80

記入に便利だ(この日記は開けば各向合せ二頁に一週間分記入が出來る便利さ、余白も充分つけてある。)

一目で瞭然!!(だからキチンと一週間分の豫定や經過がすぐ解る。極めてビジネスライクであり、能率的だ。)

時間的正確さ(また一日分のスペースを三段に〃午前、午後、夜間〃區分してあるから規則正しい生活行進が期待される)

用紙上質紙使用・鉛筆付キ・縱四寸五分、横三寸 ポケツト型

附錄 日曜表・メートル法換算早見表・印紙稅表・所得稅表・官所錄・出納表・貸借表 等

株式會社 三省堂

本社・東京神田・振替東京三一五五五
支店・大坂南區・振替大坂八一三〇〇

芭蕉と蕪村

小宮豊隆

子規はその『俳人蕪村』の中で、『蕪村は鬼貫句選の跋にて其角、嵐雪、素堂、去來、鬼貫を五子と稱し、春泥集の序にて其角、嵐雪、素堂、鬼貫を四老と稱す。中にも蕪村は其角を推したらんと覺ゆ、「其角は俳中の李青蓮と呼れたるもの也」といひ「讀むたびにあかず覺ゆ、其角がまされる所也」ともいへり。しかも其缺點を擧げて「其集も閲するに大かた解しがたき句のみにてよきと思ふ句はまれ〳〵なり」といひ「百千の句のうちにてめでたしと聞ゆるは二十句にたらず覺ゆ」と評せり。自己が唯一の俳人と崇めたる其角の句を評して佳什二十首に上らずといふ、見るべし蕪村の眼中に古人なきを。其五子と稱し四老と稱す、固より比較的の讃辭にして、芭蕉の俳句といへども其一笑を博するに過ぎざりしならん。蕪村の眼高きこと此の如く、手腕亦之に副ふ。而して玆に俳壇の革命は成れり』と言つてゐる。勿論子規の眼中には、恐らく蕪村だけがあつて、其角や嵐雪や素堂や鬼貫や——芭蕉といへども問題にならなかつたには違ひない。また子規がその「俳壇の革命」を成し遂げる爲には、あの當時では、假令心底からさうだとは思はなかつたにしても、ともかくも「蕪村の眼中に古人な」しといふ事に、特に「芭蕉の俳句といへども其一笑を博するに過ぎ」なかつたのだといふ事にして置く必要もあつたには違ひない。然し事實は、——特に芭蕉と蕪村との關係は、子規の言ふ樣な、そんな「一笑を博するに過ぎ」

ない樣な關係ではなかつたのである。是は例へば、蕪村が自分で『芭蕉翁附合集』を選んで、その序に自分で「三日翁の句を唱へざれば、口むばらを生ずべし」と書いてゐるのを見ても、凡その見當はつく。

子規は、蕪村が其角の名前を所謂五子四老の筆頭に置いてゐる事や、「其角は俳中の李青蓮と呼れたるもの也。……」と書いてゐる事や、その他の事から、蕪村が其角を「唯一の俳人と崇め」てゐたものと推斷したのかも知れない。さうしてその其角の句に對してさへ蕪村は「百千の句のうちにてめでたしと聞ゆるは二十句にたらず覺ゆ」と言つてゐる位であるから、その外の古人は無論の事、「芭蕉の句といへども」必ずや「其一笑を博するに過ぎ」なかつたに違ひないと推斷したものであるらしい。若しさうだとすれば、子規は既にその出發點に於いて、大きな誤謬を犯してゐるのである。蕪村は決して其角を、「唯一の俳人と崇め」はしなかつた。

蕪村が其角を愛してゐた事は事實である。子規の引いた、明和六年（西暦一七六九）の『鬼貫句選』の跋では、蕪村は「五子が風韻をしらざるものには、ともに俳諧をかたるべからず。こゝに五子といふものは、其角、嵐雪、素堂、去來、鬼つら也」と書いてゐる。安永六年（一七七七）の『春泥句集』では、蕪村は「其角を尋ね嵐雪を訪ひ、素堂を倡ひ鬼貫に伴ふ。日々此四老に會して、はづかに市城名利の域を離れ、林園に遊び山水にうたげし、酒を酌で談笑し、句を得ることは專ら不用意を貴ぶ」と書いてゐる。同じ年の『新花摘』には「其角は俳中の李青蓮と呼れたるもの也。それだに百千の句のうちめでたしと聞ゆるは二十句にたらず覺ゆ。其角が句集は聞へがたき句多けれども、讀むたびにあかず覺ゆ。其角がまされるところ也。とかく句は磊落なるをよしとすべし」とある。恐らくは同じ比に書かれたものに違ひない『取句法』には、「其角之豪壯。嵐雪之高華。去來之眞率。素堂之洒落。各可法」とある。また蕪村が若い時分に、芭蕉と其角と嵐雪との肖像を一幅の紙に描いて、淡々に贊を求めたといふ話は、蕪村自らその『新花摘』に書き記してゐるところで

ある。

然し蕪村が其角を愛してゐたといふ事は、無論そのまま、蕪村が其角以外の人達を輕蔑し若しくは無視してゐたといふ事になるものではない。然もこれらの引例に就いて見ても分かる樣に、蕪村は其角を愛してゐるけれども、それと同時に嵐雪をも愛してゐる、また素堂をも愛してゐる、去來をも鬼貫をも――一口に言へば、それぞれの人をそれぞれの長所に於いて愛してゐるのである。子規は自分の論斷を有利に導く爲めか何か、「其五子と稱し四老と稱す、固より比較的の讃辭にして」と言つてゐる。子規は、五子といひ四老といふ蕪村の言葉を、蕪村の全眞實を表白する事のない、一種のお座なりの言葉として解釋しようとするものらしい。勿論解釋は人人の勝手である。然し、若し蕪村の言葉をさういふ風に解釋するとすれば、その爲め困るものは子規自身ではあつても、嵐雪や素堂や去來や鬼貫などの人人ではない筈である。なぜなら、これが蕪村の全眞實を表白したものでないとすると、五子四老の筆頭には其角の名前が擧がつてゐる以上、蕪村が其角を「唯一の俳人と崇めた」といふ子規の論斷は、既に半以上その根據を、自分で覆す事にもなるからである。

然も、其角一人だけを認めて外の人達は丸で眼中に置かなかつたといふ風に、それほど偏狹なものに蕪村を見るといふ事は、本當に蕪村を理解する所以のものではないと思ふ。既に、子規の引いた『春泥句集』の序の中でも、蕪村は「麥林支考其調賤しといへども、巧みに人情世態を盡す。されば支麥の句法に倣ふも、又工案の一筋ならざるにあらず。詩家に李杜を貴ぶに論なし、猶元白をすてざるが如くせよ」と言つてゐる。同じ樣な事がまた、その『取句法』にも記される「其調賤し」とし、是を「田舍蕉門」と名づけるのが最も適切であるとする、麥林や支考の徒からさへ、攝取すべきものは攝取しようとしてゐる蕪村である。況んや嵐雪や素堂や去來や鬼貫や、さういふ人達を、頭ごなしにこなしつける蕪村である筈がない。

勿論蕪村は「とかく句は磊落なるをよしとすべし」と言つてゐる丈に、自分の好みとしては、磊落ないい、豪壯な其角の句を

誰の句にもまして愛好した、とは言つて可いかも知れない。『新花摘』といふ名前が恐らく其角の『花摘集』から來てゐるに違ひないといふ樣な事も、その『新花摘』の中で其角の『五元集』の事を色色書いてゐるといふ樣な事も、或は蕪村の祕藏弟子の几董が何かにつけて其角の眞似をしてゐたといふ樣な事も、すべてその、蕪村の其角への特別な愛好を、證明するものであると見做して可いのかも知れない。然しその事は亦蕪村にあつては、蕪村が同時に外の人達をも愛好するといふ事と、少しも牴觸する事ではなかつた。第一蕪村は、その其角に對してさへも、自分の自由な立場を取り外してそれに溺れて了ふといふ樣な事が、決してなかつたのである。既に寶暦七年(一七五五)の『天橋立圖賛』の中で蕪村は『八僊觀百川丹青を好んで明風を慕ふ。嚢道人蕪村書圖をもてあそんで漢流に擬す。はた俳諧に遊んで、ともに蕉翁より絲ひきて、彼は蓮二に出て蓮二によらず、我は晋子にくみして晋子にならはず』と公言して憚らない。

安永三年(一七七四)の『むかしを今』の蕪村の序によれば、蕪村はその師の宋阿から『夫俳諧のみちや、かならず師の句法になづむべからず。時に變じ時に化し、忽焉として前後相かへりみざるがごとく有べし』と訓戒され『此一棒に頓悟して、やゝはいかいの自在をし』つたのださうである。宋阿は寬保二年(一七四九)蕪村二十七の年に死んでゐる。宋阿のこの訓戒が果していつ比蕪村に與へられたものであるか、今日からは精確に知る由もないが、それはさし當りの問題ではない。問題となるのは、蕪村が師の歿後二十五年を經て、尙且つその事を言ひ出し、さうしてその師に感謝しなければゐられなかつたほど、それほど深く蕪村の頭の中に刻み込まれたこの訓戒は、少くとも蕪村の二十七歲以後、蕪村の藝術的態度を規定する力として、斷えず蕪村の頭の中で活らいてゐたに違ひないといふ事である。從つて爾後の蕪村は、假令それをどの程度まで實踐に移し得たかに問題は殘るとしても、ともかくもさういふ心構への下に、凡てのものに對してゐた事だけは爭はれない。――といふ事は、卽ち蕪村の世界が、少くとも心構への上だけででも、その時以來、非常に自由なものになつてゐたといふ事を意味する。『天橋立圖賛』は、寶暦七年當時の、その自由な心構への表現である。鬼貫句

選』の跋も、『春泥句集』の序も、『取句法』の一節も、凡てその時その時の、その自由な心構への表現である。殊に『新花摘』の中の「其角は俳中の李青蓮と呼れたるもの也。それだに百千の句のうちめでたしと聞ゆるは二十句にたらず覺ゆ」に至つては、その自由が、恐らく最高度に於いて表現される。蕪村は、恐らく蕉門の誰よりも一番に愛してゐた其角に對して、敢て「百千の句のうちめでたしと聞ゆるは二十句にたらず覺ゆ」と言つてゐるからである。

然しこの事は、無論、蕪村の眼中には其角さへもなかつたといふ事を意味しない。眼中に置くといへば、其角のみならず、外のいろんな人を、蕪村は十分眼中に置いてゐるのである。眼中に置いて、其所から存分利益を受けとらうとしてゐるのである。唯蕪村は、存分利益を受けとるにしても、十分眼中に置くにしても、その爲めそれに「なづむ」事がない。囚はれる事がない。從つて蕪村は、分らない事は分からない、氣に入らない事は氣に入らないと、自由に公言する事が出來るのである。さうして是は、亡師の訓戒によつて育て上げられた、蕪村の主義であつた。

蕪村の師の宋阿は、其角に師事し嵐雪に師事した人であつた。從つて、俳諧系圖の上から言へば、蕪村は、其角と嵐雪との孫にあたる。さういふ特別な關係は、蕪村をして其角や嵐雪に、特別な感情を持たせずに置く筈がない。蕪村が假令自分の見識の上からは「唯一の俳人として崇め」なかつたとしても、人情の上から其角や嵐雪を特別扱ひにしたに違ひない事は、十分に想像される。元文四年(一七三九)に師の宋阿が選んだ其角嵐雪追善集『桃桜』に載つてゐる、蕪村の「すり鉢のみそみめぐりや寺の霜」には、言葉の綾に邪魔をされて、さういふ特別な感情が十分鮮やかに出てゐないかも知れない。然し、例へば蕪村が蕉門の人達の名前を書く際に、誰よりも先づ其角の名前を書き嵐雪の名前を書くのは、さうして其角、嵐雪と書いたあとは、何も書かないか、書くとしてもその名前の順序が時時で色色に違つて來るなどといふ様な事は、多少藝術上の評價も交つてゐるのかも知れないが、然し恐らく主として、この特別な感情の現はれとして見るべき

ものではないか。少くとも、誰よりも先に其角、嵐雪と出る、この順序は、無條件では、蕪村の彼等に對する評價の表白と見做す事は、出來ない筈のものである。

然も、さういふ人情の問題になるとすれば、蕪村は、孫として其角や嵐雪に對して特別な感情を持つであらうと同じ樣に、曾孫として芭蕉に對しても亦、特別な感情を持つだに違ひないと想像する事は、極めて自然である。殊に相手は、其角や嵐雪を子飼の時分から手塩にかけた、芭蕉である。のみならずその芭蕉は、天下を席捲した蕉門の開祖として、今尚赫奕たる日輪の如くに、俳壇に君臨してゐるのである。蕪村をよつぽどの拗ね者か何かに仕立て上げない限り、この芭蕉に蕪村が何の感情も懷かないでゐたらうと、誰が想像し得るか。

事實また蕪村は芭蕉に對して、特別な感情を持つてゐたのである。その事は既に擧げた、蕪村が若い時分、芭蕉と其角と嵐雪との肖像を一幅の絹に畫いて、淡々に贊を請うたといふ、唯一つの事實によつても、最も明瞭に證明され得る事である。『天橋立圖贊』にも、蕪村は「はた俳諧に遊んで、ともに蕉翁より絲ひきて……我は晉子にくみして晉子にならはず」と書いてゐる。蕪村は又、芭蕉の肖像を幾つもかいてゐる。その書簡によれば、蕪村は我我の知つてゐる『奥の細道』の畫卷以外、まだ幾つかの『奥の細道』をかいてゐる樣である。殊に蕪村は、芭蕉の名前を出す時には、芭蕉とは書かずに、殆んど必ず蕉翁と書く。是はいかにも孫若しくは曾孫がその祖父若しくは曾祖父を呼ぶに相應はしい稱呼である。この稱呼の中には、芭蕉に對する蕪村の、特別な愛情と特別な敬意とが含まれてゐる。――是が若し假に芭蕉に對する當時一般（芭蕉への感激に充ちた俳人の一團の）の稱呼であつたとしても、それは、蕪村がそれらの人人とその感情を同じくしたといふ丈で、芭蕉に對する特別な愛情と特別な敬意とが、蕪村にはなかつたのだといふ事にはならない筈である。

子規は其角や嵐雪の名前が出て來る所に、芭蕉の名前があまり出て來る事がない爲に、芭蕉は蕪村から無視されてゐたのだと思つたものかも知れない。然し、もしさうだとしても、單にそれだけの理由で蕪村が芭蕉を無視したらうと思ふのは、思ふ者の非常識である。なぜなら、さういふ名前と一緒にするには堪えない位、蕪村が芭蕉を特別扱ひにしてゐたといふ事も、十分想像出來る事だからである。事實は然し、蕪村の書いたものには、屢其角や嵐雪の名前と一緒に、芭蕉の名前が出て來る。のみならず、其角や嵐雪の名前が出て來ない所にも、屢芭蕉の名前は出て來る。さうしてその名前は、凡ての場合、必ず特別な愛情と特別な敬意とをもつて取り扱はれてゐるのである。

然もその愛情と敬意とには、無論系圖の上から來る子孫の愛情と敬意とも交つてゐるには違ひないが、そればかりではなく、其所には寧ろ、大きな足跡を殘して行つた先輩の藝術家に對する後輩の藝術家の、正しい、言はば男づくの愛情と敬意とが動いてゐるのである。是は例へば、蕪村が芭蕉の名前を出して、何事かを書いてゐる文章を、一つ二つでも瞥見した事のある人には、すぐに氣のついてゐる筈の事である。――子規の言ふ樣に、若し蕪村が誰かを「唯一の俳人と崇めた」とすれば、それは子規の言ふ樣に其角ではなくて、實は芭蕉であつた。其角に對しては蕪村は或は以つて相角逐するに足る位は思つた事もあるかも知れない。然し芭蕉に對して蕪村は、常に、その竟に及び難きを嘆じてゐるのである。

頴原退藏君の『蕪村全集』(私がこの一篇に引用する蕪村の文章乃至發句其他は、凡てこの『蕪村全集』によるものである、その他蕪村の傳記方面の材料に於いても、私はこの『蕪村全集』附錄の「與謝蕪村傳」に負ふ所が多い。一々それを書き出さないのは、この雜誌の性質上、煩はしさを避けたい爲めであるに外ならない)に採錄された蕪村の遺草に、「歲末辯」と名づけられた文章がある。是は「名利の街にはしり貪欲の海におぼれて、かぎりある身をくるしむ。わきてくれゆくとしの夜のありさまなどは、いふべくもあらずいとうたてきに、人の門たゝきありきて、ことごとしくのゝしり、あし

をそらにしての、しりもてゆくなど、あさましきわざなれ。さとておろかなる身は、いかにして塵區をのがれん。としくれぬ笠著てわらじはきながら、片隅によりて此句を沈吟し侍れば、心もすみわたりて、かゝる身にしあらばといと貴く、我ための摩訶止觀ともいふべし。蕉翁去て蕉翁なし。とし又去や又來るや」とあつて、最後に「芭蕉去てそのゝちいまだ年くれず」といふ發句を据えてゐるものであるが、制作年代も不明なら、その遺草の所在も不明で、穎原君は人の手寫したものによつて掲げたのだから、多少の誤寫もあるかも知れないとさへも言つてゐる、甚だ心細い材料である。然しこの發句は「笠著てわらぢはきながら」といふ前書をつけて、几董の『蕪村句集』に採錄されてゐる發句である。又この文章に現はれた、人生に對する考へ方や乃至は芭蕉の「年くれぬ」の句に對する解釋のし方などには、いかにも蕪村らしい所を感じせさるものがある。特に「芭蕉去てそのゝちいまだ年くれず」といふ句を最後に置く文章として、この文章はいかにも相應しい内容を持つてゐる。從つて私は、誤寫も脱落もありさうに思はれるにも拘はらず、是を蕪村によつて書かれたものとして、さうして蕪村の芭蕉に對する感情を表白するものとして、まづこの『歳末辯』を持つて來る事にしたいと思ふ。若し是が蕪村の作でなかつたとしても、是だけのものが書ける爲めには、その作者は、芭蕉に對する蕪村の感情によつぽどよく通じた人でなければならないと信じるからである。

蕪村は、人人が年の暮だといふので、錢勘定に夢中になつて、血眼になつて驅けあるいてゐるのを、ひどくあさましいものに眺めてゐる。さうして出來るものならば、かういふ名利貪欲の塵の巷から、脱離したいものだと思つてゐる。然し事實は蕪村は心淺陋にして、どうしてもこの塵の世から、ぬけ出てしまふ事が出來ないのである。それが蕪村を悲しくする。そのとき芭蕉の「年くれぬ笠著て草鞋はきながら」の句を沈吟して見ると、人は血眼になつて喚き合ひ罵り合つてゐるのに、芭蕉は一笠一筇の身輕な姿で、その年の暮を旅で送つてゐるのである。塵寰を捨て風雅に身を任せた、自由で閑らかな芭蕉の世界は、息苦しいせせこましい眼前の世界から、蕪村を救拔して、蕪村の前に翛乎たる極樂淨土を開展する。

蕪村は「心もすみわたりて」「いと」ありがたいと思ふ。然し、不圖我に復つて見れば、自分の眼前は、さつきの通りに、錢勘定に血眼になつてざわめきあるく、人通りである。自分も亦錢勘定に拘泥しなければならない身の上である。芭蕉は「年くれぬ」と言つたけれども、自分にはいつまでも、年がくれない。いつまでたつても自分にとつて、人生は年の暮である。名利と貪欲とに齷齪する年の暮である。曆の上では、年が暮れても、又曆の上では、新らしい年が來ても、自分は――ひいては凡ての人は、心の上では、いつまでたつても年が暮れないのである。――

是は、風雅の道に身を委ねながら、その風雅の道に徹底して生きる事が出來ないと意識してゐる者が、その風雅の道に徹底して生き得た大先達に對する、最も偉大なる讃辭でなくて何であらう。蕪村は、芭蕉が到達し得た境地の故に、芭蕉を尊敬し、自分は到底その器でないとする意識の故に、自分を卑下し、然もその境地に憧がれざるを得ざる內面の衝迫の故に、一層その芭蕉を渴仰するのである。

先に引用した安永三年（一七七四）の『芭蕉附合集』の序には「はいかいの織句をまなばんには、まづ蕉翁の句を暗記し、付三句のはこびをかうがへしるべし。三日翁の句を唱へざれば、口むばらを生ずべし。……」とある。是も亦芭蕉の藝術に對する、蕪村の最大級の讃辭である。然し此所には「はいかいの織句」とある。從つて是は、芭蕉の連句のみに對する蕪村の讃辭であつて、芭蕉の藝術の全部に對する讃辭であるかどうかは分からないと言ふ者がないとも限らない。同じ安永三年の『むかしを今』の序で蕪村は、先に引用した、自分の師の宋阿に對する感謝を述べたあとで、すぐそれに續いて「されば今我門にしめすところは、阿叟の磊落なる語勢にならはず、もはら蕉翁のさびしほりをしたひ、いにしへにかへさんことをおもふ」と言つてゐる。さびしをりは不易流行とともに、芭蕉の藝術を貫ぬく二大原理である。蕪村はその芭蕉のさびしをりを慕ひ、それによつて俳諧を、芭蕉のいにしへにかへさうと意圖してゐるのである。是は必ず、芭蕉

の藝術全般に對する讚辭であつて、單にそれが芭蕉の連句のみに限られてゐるのでない事は明白である。

安永五年（一七七五）の『左比志遠理』の序では蕪村は、「いでやはいかいの道千々にわかれて、ともしびくらきしづがをがせの、わくべくもあらず。浪風あらきつりのいとの、うけえられぬことのみ多かる。そが中にばせをの翁のの玉ひけむ、ことばは俚俗にちかきも、こゝろは向上の一路に遊ぶべしとぞ。これや一貫のをしへにして、千古の確言なるをや。しかはあれど、さびしをりてふことをさとりしらざれば、何をつくり出すことかたくなんありとて、此の一條はのべたまひけるにや。まことに蕉門の蘊奥は此ふみにとゞまりて、他にもとむべきことはあらじかし。世人さびといふはさびしきをいひ、しをりとは一句のなよらかなるをいふとのみこゝろうるは、ひがことにや侍ん。言をもて說うることかたし。意をもてさとすべきことにこそ。されば其玄妙を了解したるども、むかひかたらんには、老のまさにいたるをもしらず、のちの世の一大事をもわするゝばかり、うれしきわざになん侍れ。……」と言つてゐる。此所のさびしをりに關する蕪村の言說は不得要領である。また蕪村はさびしをりに關する去來の言說から影響されてゐる樣に見える。然し芭蕉のさびしをりは事實簡潔に道破しにくいものであつて、直弟子達の記述でさへ多くは要領を得ないのだから、何もひとり蕪村の要領を得ない事を咎めるには當らない。唯此所で我々は、さびしをりに就てはそんな譯の分からない事を言つてはゐるもの、それでも尙此所に蕪村の、芭蕉に對する渴仰の念がいかにも躍如と現はれてゐる事に、注意して置けば可いのである。

安永五年は京の一乘寺村の金福寺內に、蕪村の發起で、芭蕉庵が再興された年である。いつごろどういふ緣故で金福寺內に芭蕉が住んでゐたかといふ事は、蕪村にも分からなかつた。然し古くから土地の人はその寺の裏の小高い丘を芭蕉庵とよびなれてゐる事ではあるし、金福寺の住職で昔芭蕉の句にひどく感動した大德もあつたといふ事ではあるし、現住の住職は「うき我をさびしがらせよ閑古鳥」の句を芭蕉は此所で作つたのだとさへ主張するのだから、別にその根據とすべきものは何一つないけれども、「たゞかゝる勝地にかゝるたうとき名ののこりたるを、あいなくうちすてをかんこと、罪さ

へおそろしく侍れば、やがて同志の人々をかたらひ、かたのごとくの一草屋を再興して、ほとゝぎす待卯月のはじめ、をじか啼長月のすゑ、かならず此寺に會して、翁の高風を仰ぐことと」したのが、その芭蕉庵再興の由來なのださうである。

蕪村はこの事を具にその『洛東芭蕉庵再興記』の中に書いてゐる。是は或は、自分達の勢力を示す爲めの、對外的な意味も這入つてゐるのかも知れないが、然しその根本には、やつぱり芭蕉に對する蕪村の渴仰がある事を、十分に豫想させるものである。殊にその『洛東芭蕉庵再興記』の冒頭の數十行は、可也な程度まで芭蕉の『幻住庵記』を眞似て居り、中ごろ芭蕉の旅を敍述するくだりに至つては、芭蕉の句を裁ち入れる事殆んど十に達してゐる。假令それらの事が故意になされたものであるとしても、是はいかに蕪村が平生芭蕉の文章や發句に親しんでゐたかを、明白に我々に物語るものでなければならない。

安永六年（一七七七）若しくはそれを去る事遠からざる年代に書かれたものらしく推測される「取句法」は、蕪村が自から書いて自分の部屋の壁に額にして掛けてゐたものであるさうである。それにはまづ、前に擧げた樣に、「其角之豪壯。嵐雪之高華。去來之眞卒。素堂之洒落。各可法。麥林支考雖句格賤陋各爲一家。亦有可取者。」とあつて、次いで「包括諸家者蕉翁也。而其角嵐雪伯仲蕉翁者居半。麥林支考之徒十一而已。」とあり、次いで「世有稱蕉門者。特不知蕉翁之風韻。其所吐句倫所論不脫支麥之俗習。稱之伊勢流或美濃流可也。豈得目蕉門乎。人號曰田舍蕉門。知言哉。」、とあり、次いで「意匠體也。而於則用也。雖而於則調聲意匠俗者不足取。……」とある。又「知俳諧之大道無他。嘯月賞花使遊心於塵寰外。常友蕉翁其嵐之流亞。專以脫俗氣爲最。」とも書いてある。是は一方から言へば、支考や麥林の流を吸む美濃派や伊勢派に對する、蕪村自身の、芭蕉の正統を嗣いでゐるといふ意識から來る、矜持を、可也の誇らしさをもつて提示する――その意味では、寧ろ蕪村の弱點を暴露する傾向を持つてゐるものではあるが、然し此所には、又一方から言へば、芭蕉の俳諧に對する、若しくは芭蕉流の俳諧に對する、蕪村の考へ方が、可也精

しく又はつきりと出てゐる。その意味で是は又、貴重な資料の一たるを失はない。

蕪村は此所で、其角を豪壯と批評する、嵐雪を高華と批評する、去來は眞卒であり、素堂は洒落である。みなそれぐの方面に、その持ち前を發揮してゐるとする。然も芭蕉は、蕪村によれば、それらの諸家を包括する者なのである。豪壯に於いては或は其角は芭蕉と相拮抗し得るかも知れない。高華に於いては或は嵐雪は亦芭蕉と相拮抗し得るかも知れない、眞卒に於いて去來は、洒落に於いて素堂は、亦それぐ芭蕉と相拮抗し得るものであらう。然し芭蕉の偉大な所は、一つの方面だけに得たる所があるといふ點にあるのではなくて、あらゆる方面に得たる所を持つてゐるといふ點にある。「諸家を包括する」といふ點にある。——それが當つてゐるかゐないかは別問題である。唯蕪村は、さう考へて、其角や嵐雪やその他の人達を尊敬し、然も亦さう考へて、それらの人達よりももう一段高い所に立つてゐる者として、芭蕉を尊敬したのである。

殊に蕪村によれば、俳諧の大道とは、月に嘯き花を賞し、心を塵寰の外に遊ばしめ、常に蕉翁其嵐之流弧を友とし、専ら俗氣を脱するといふ點にある。然も「西行の和歌における、宗祇の連歌における、雪舟の繪における、利休が茶に於ける、其貫通する物は一なり。しかも風雅におけるもの、造化にしたがひて四時を友とす。見る處花にあらずといふ事なし。おもふ所月にあらずといふ事なし。像花にあらざる時は夷狄にひとし。心花にあらざる時は鳥獸に類。夷狄を出、鳥獸を離れて、造化にしたがひ、造化にかへれとなり」と説いてゐるものは、元祿元年（一六八八）の芭蕉の『笈の小文』の冒頭である。蕪村は、芭蕉によつて開拓された俳諧の大道の上を、芭蕉に違はざらん事を維れ怖れて、まつしぐらに進んで行かうとしてゐる者の樣に見える。かの五子といひ四老といふのも、この大道を背て芭蕉に導かれてあるいた先輩として、換言すれば、彼等が芭蕉の道を芭蕉に導かれて（鬼貫は例外である）あるいたから、それだから彼等は、蕪村の尊敬を贏ち得た者である樣にも見える。

蕪村には「金福寺芭蕉翁墓」と前書した「我も死して碑に邊せむ枯尾花」といふ句がある。是は几董の『から檜葉』にも出て居り、又その『蕪村句集』にも採錄されてゐるけれども、その制作年代は分からない。然し、蕪村が「芭蕉庵再興記」を書いた時までは、金福寺に芭蕉の碑はなかつた。随つてこの句は少くとも、安永五年（一七七六）の五月以前のものではない。もつとも几董の『から檜葉』によると、「遺骨は金福寺なる芭蕉庵の牆外にとりおさめ、かたの如き卵塔をたて」とあるのみで、其所に芭蕉の墓が立つてゐるとも碑が立つてゐるとも、それらしいものは少しも出て來ない。從つて前書の「墓」も句の「碑」も、實際にはなく、唯その金福寺の裏の小高い丘の一部分を、さういふ名前で呼んだのではないかといふ疑問が起らないでもないが、然し霞夫あての六月十三日の蕪村の書簡によれば、「此度洛東一乘寺村と申所に、金福寺と申禪寺有之候。……右の地へこのたび一草室を再興いたし候。もちろん石碑も建申候」とあり、二月廿一日佛心子あての書簡によれば、「蕉翁碑銘石摺一枚相下申候。是はとく出來いたし候而洛東に石碑を建申候。則右の碑正面に打碑いたし候ものにて候。……」とある以上、前書の「墓」や發句の「碑」は、この碑の事をさすに違ひないと思はれる。もつともさういふ碑が金福寺にあつたにしろなかつたにしろ、友人門下のものが、その句にまかせて、現在遺骨をその金福寺の芭蕉庵の側に葬つたのだから、それが此所で作られ、若くは此所の事を頭の中に置いて作られた句である事は、疑ふ餘地がない。蕪村は、自分が主催して再興した、當時から言へばひどく邊鄙であつたに違ひない、一乘寺村の金福寺内の芭蕉庵の側に、自分が死んだら埋めて貰ひたいと希望する程、それほど芭蕉の名にさへ、憧がれを持つてゐたのであつた。几董は『から檜葉』の中で「かたの如き卵塔をたて、永く蕉翁の遺魂に仕へ奉らしむ」と書いてゐる。「遺魂に仕へ奉らしむ」は恐らく几董が、自分の感情を適切に表現しながら、尚且つ亡師の感情を最も適切に表現したものである。「我も死して碑に邊せむ枯尾花」といふ句の中には、まつたく芭蕉の亡き魂に「仕へ奉」るといふ樣な感情が動いてゐるのである。

天明五年（一七八五）に出來た同じ几董の「新雜談集」には、蕪村の「木曾路ゆきていざとしよらむ秋ひとり」といふ句に就いて、蕪村と几董との間に取り交はされた會話と、それに關聯して起つた一つの小さな事件とが、書き記されてゐる。几董が此句を「一句のからびたるさまは、老杜が粉骨をさぐり、西行の山家に分入し、芭蕉翁の口質ならんと申せしかば、先師も、しかおもへりなど打ゑまれしが、滅後予に與へよとて、此句の下にみづからの像を書き置れし也」といふのが、それである。この句に興味があるとかないとかいふ事は、今問題ではない。又この句の内容が淺いとか淺くないとかいふ事も、亦今の問題ではない。問題になるのは、蕪村がかういふ句を作つて、それを几董が「芭蕉翁の口質」だと言つて褒めて、蕪村がそれを嘉納したといふ事である。蕪村はその句の下に自畫像をかいて、それを自分が死んだら形見に几董にやつてくれと家の者に言つたほど、几董の言葉を、知己の言として喜んだといふ事である。是は又、蕪村が芭蕉を、神の如くにも敬つてゐたといふ事の、一つの證據になるものではないか。

池田種東氏の所藏に、誰かの歌仙に、蕪村が點をして、尚評語を加へたものがあるのださうである。穎原君の「蕪村全集」に記す所によれば、その蕪村の點印には、青肉を用ひたものに「春盡鳥啼」と「路傍槿」との二種があり、朱肉を用ひたものに、小さな魚を三匹竝べたもの一種、以上三種があるといふ。是は是までに言はれてゐる通り、凡て芭蕉の發句から――「行春や鳥啼魚の目は泪」と「道のべの木槿は馬にくはれけり」とから來てゐるものである。藤井乙男博士の「江戸文學研究」によれば、同博士の所見にかかる、蕪村が評點を加へた句卷には、青肉朱肉と別別になつてはゐるが、同じく「路傍槿」と「春盡鳥啼」との二種が、點印として用ひられてゐるのださうである。勿論蕪村はまだ外にも違つた點印を持つてゐたものに違ひない。然し今日まで殘存してゐる二つの資料に見える點印が、二つとも同じ點印を持つてゐるといふ事は、いかに蕪村がこの點印を愛用してゐたかを想像させるに、十分なものではないだらうか。よし又さういふ想像は餘りに放恣にすぎるものであるとしても、少くともそれは、蕪村がさういふ點印を作り且つ用ゐる事によつて、言はば出

來る丈芭蕉に充實して生きようとした證據になり得るものであるといふ事は、恐らく爭ふ事が出來ない。換言すれば、蕪村はかうして、行住座臥にも、芭蕉とともに生活してゐる事の、意識を持つてゐたかつたのである。

芭蕉とともに生活する事を歡びとする蕪村の態度は、その發句や連句に於いても、可也顯著に現はれる。後の和歌の作者が『源氏物語』にリファーして歌をよむ事を歡びとした樣に、又貞門から談林へかけての俳諧の作者が、謠曲にリファーして句を作る事を歡びとした樣に、否、蕪村はそれよりももつと深刻な意味で、芭蕉にリファーしながら句を作る事に歡びを見出してゐる樣である。是は既に「我も死して碑に邊せん枯尾花」の句を見ても、その凡その見當はつく筈である。もつともこの句は「幻住庵に曉臺が旅寐せしを訪ひて　丸盆の椎にむかしの音聞む」の句と同じ樣に、その句の作られた場所が、言はば芭蕉にリファーする必要のある場所だから、苟も當時發句の一つでもひねらうとするほどの者は、いやでも芭蕉の句にリファーしなければならなかつたのだといふ人もあるかも知れない。さういふ人は同じ樣に、例へば「浪花遊行寺にてばせを忌をいとなみける二柳庵に　簑笠の衣鉢つたへて時雨哉」の句や、「洛東ばせを庵にて　冬ちかし時雨の雲もこゝよりぞ」の句や、「芭蕉忌　時雨おとなくて苔にむかしをしのぶ哉」の句に對しても同じ樣な事を言ふであらう。それならば外に、もつと獨立して芭蕉にリファーした句が、いくらでもある。

例へば「しぐるゝや我も古人の夜に似たる」といふ句の如きが、それである。「世にふるはくるしきものを槇の家にやすくも過ぐる初時雨哉」といふ二條院讃岐の歌から、「世にふるは更に時雨のやどり哉」といふ宗祇の句が生れ、その宗祇の句を踏まへて、「世にふるは更に宗祇のやどり哉」といふ芭蕉の句が生れた。この句は、それ若しくはそれらのものを背景にして、更に蕪村によつて奏でられた、他の一つのヴリエーションである。然も此所には尚それらのものの外に、「霜寒き

旅寐に蚊屋を著せ申」といふ如行の發句につけた、「古人かやうの夜の木がらし」といふ芭蕉の脇のモーティヴが、可也な程度にはつきり響き出てゐる事も亦、決して見逃すわけには行かない。――又例へば「いざ雪見容(カタチツクリ)す蓑と笠」といふ蕪村の句は、「ためつけて雪見にまかる紙衣かな」といふ芭蕉の句からイデーを得て、同じ芭蕉の「いざさらば雪見にころぶ所まで」の句からその表現を借りて來た樣な句である。――又例へば「凩や何に世わたる家五軒　蕪村」は、「何食うて小家は秋の柳蔭　芭蕉」の、拙劣な摸寫だといふ人があつても、恐らく誰も蕪村の爲に辯を費す者はゐないであらう。「家五軒」とまづく刻んだのは、或は「あけぼのや白魚しろき事一寸　芭蕉」などから來てゐるのかも知れない。――又例へば「齒齦(アラハ)に筆の氷を噛(ム)夜哉　蕪村」は、「芭蕉野分して盥に雨を聞く夜哉」といふ句や「氷苦く偃鼠が咽をうるほせり」といふ句に現はれた、芭蕉の『虚栗』調を追ふものであるに外ならない。蕪村には好んで『虚栗』調を追つた時代があつたのである。

秋の句に就いて言へば、例へば「憂我にきぬたうて今は又止みね　蕪村」は、「砧うつて我にきかせよや坊が妻　芭蕉」の、一面では蕪村流のパラフレーズであり、又一面では蕪村流の展開である。然もその句の中には「うき我を淋しがらせよ閑古鳥　芭蕉」の句が、私かにその影を落してゐる。「憂我に」といふ五文字も、或は「うき我を」の五文字から、直接に來てゐるのかも知れない。――又例へば「秋の空昨日や鶴を放ちたる　蕪村」の中の空想は、「梅白し昨日や鶴を盜まれし　芭蕉」の中の空想から、その重なる示唆を受けとつてゐるに違ひない。殊にその十二字に至つては、語法までも酷似する。然も蕪村が愛讀した筈の『冬の日』の中には、「鶴見るまどの月かすかなり　野水」「かぜ吹ぬ秋の日瓶に酒なき日　芭蕉」といふ、附句さへも存在してゐるのである。――又例へば「夕がらす秋のあはれを告にけり　蕪村」は、「枯枝に烏とまりけり秋の暮　芭蕉」から、道具立を減らして、その代りに音の要素を、動的なものを挿入しようと試みたものではないか。――又例へば「まづ二つ瓦ふくもの野分哉　蕪村」の上の十二字は、恐らく「山櫻瓦葺くもの先二つ　芭蕉」の下の十二字から、直接に來たものであらう。もつとも芭蕉のこの十二字は長嘯子の「山家の記」の中の「瓦葺く

「もの二つ」といふ句から來てゐると言はれてゐる。從つて是は、あながち芭蕉から來てゐるとのみは、言つてしまへないのかも知れない。然し「先二つ」とした、この先の所有權は芭蕉にある筈である。然も蕪村は、勿論意味は違へて遣つてゐるけれども、然しともかくもそのまゞに重大な意味は持たせてゐるのである。

夏の句では、まづ「古井戸や蚊に飛魚の音闇し　蕪村」がある。この「音闇し」といふ感じ方並に表現のし方には、可也近代的な感覺があつて、印象を鮮明にする效果を持つてゐる。然し是は恐らく芭蕉の「海暮れて鴨の聲ほのかに白し」の換骨脫胎である。然もこの句を作る時の蕪村の頭の中には、芭蕉の古池の句も亦、一緒になつて動きはしなかつたかといふ樣な事を想像させる樣なものが、何かこの句の中にはある。是は或は「古井戸や」といふ五文字に、何となく拵へ物らしく感じられる、サムシングが含まつてゐるせゐであるのかも知れない。——又例へば「有と見へて扇の裏繪おぼつかな　蕪村」である。この下の五文字は恐らく芭蕉の、「螢見や船頭醉ておぼつかな」の下の五文字から來てゐるものに違ひない。蕪村は、まだ外にも「茶の花や白にも黃にもおぼつかな」といふ樣に、この下の五文字を用ひる事に可也興味を寄せてゐた事を示してゐる。——又例へば「さみだれや大河を前に家二軒　蕪村」である。是は蕪村の雄渾な描寫能力を提示するものとして、可也評判の高い句ではあるが、然し私は是を芭蕉の「五月雨をあつめて早し最上川」の句から生れて來た、蕪村の空想の句ではないかと思つてゐる。この事には、恐らく異論も出るであらう。然し私が是を空想の句ではないかと想像する所以は、主としてその七文字の「大河を前に」にある。私はこの大河に、殆んど何の實感的なものをも感じる事が出來ないのである。前にといふ言葉にも餘裕がある。また「家二軒」といふ、その二軒と刻んだ所にも、何となく帳面づらを合せた樣なものを感じる。從つて私は、あながち芭蕉の最上川の句と限る必要はないかも知れないけれどもともかく蕪村が芭蕉の最上川の句を味ひながら、南畫の構圖を工夫した、さうして最後に出來上がつたのがこの構圖である、とさへも私は想像して見たくなるのである。是は、芭蕉の句の中には猛烈なエネルギーが渦卷いてゐるのに對して、

蕪村の句の中には、著しくエネルギーが動いてゐないといふ事が、芭蕉の最上川の句を遠くへ置いて、それに二軒の家を配置したに過ぎない、といふ感じを起させるものらしい。――又例へば「ゆくすゑはあくたにふれる扇かな　蕪村」である。是は「行末は誰肌ふれむ紅の花　芭蕉」と同じ空想の動かし方を示してゐる。勿論この句は、眞正に芭蕉の句として登録されるためには、今少しく點検を必要とするものを持つてゐるのであるが、然し是は既に支考の『西華集』に、芭蕉の句として載せられてゐるものである。蕪村がこれを芭蕉の句として受け入れるに、何の不合理も不都合もない。さうして蕪村は、紅の花を見ながら、好奇と危惧と同情とを持つてその未來の運命を想像した芭蕉の顰みに傚らつて、恐らくは美しい新しい扇の一生の運命を、此所では寧ろ憐憫を持つて想像するのである。「ゆくすゑは」といひ、「あくたにふれる」といふ、句作りから既に、芭蕉の句に答へる様な句作りである。

春の句では「桃の花ちるや任口去てのち　蕪村」といふのがある。是は無論芭蕉が伏見の任口上人に會つて作つた、「我衣にふしみの桃の雫せよ」から來てゐるものである。蕪村には同じく任口上人をよんだ「任口に白き團(うちは)をまゐらせん」といふ句もある。是も勿論是を作る蕪村の頭の中では、芭蕉の桃の句が十分に動いてゐるのである。――第二に、例へば「草臥て物乞ふ宿や朧月　蕪村」は「草臥て宿かる比や藤の花　芭蕉」の、器用な、然し魂を遺却した、換寫である。――第三に、例へば「春のくれ筑紫の人とわかれけり　蕪村」と「春惜む宿やあふみの置火燵　蕪村」とは、「行春を近江の人とおしみける　芭蕉」を二つに分けて作つた句である。「住つかぬ旅の心や置火燵　芭蕉」も、後の句には多少は活らき掛けてゐるのかも知れない。――第三に、例へば「春雨や小磯の小貝ぬるゝほど　蕪村」は、その形態に於いて「初雪や水仙の葉のたはむほど　芭蕉」の影響を受けてゐる、さうしてそのイデーに於いて「小萩ちれますほの小貝小盃」の影響を受けてゐる。恐らくこの句は、これらの句から觸發されたものに違ひない。――第四に、例へば「椿落て昨日の雨をこぼしけり　蕪村」は、「路

さまに水こぼしけり花椿　芭蕉」から刹那的な集中的な要素を取り去つて、その代りにある時間的經過とそれに伴ふ天候の變化とを示唆しようとしたものである。然しそれらのものを示唆する役目を勤めるとしては、七文字の「昨日の雨を」が少少非力である。讀者の方で十分積極的に合作するのでなければ、作者の現はさうとした事は、現はれては來ない。——是はほんの、手當り次第、思ひつき次第の引例である。然しかういふ方法で芭蕉の句と蕪村の句との關係を點檢して、段段細かな所へ這入つて行けば、例へば「稻妻にさとらぬ人の貴さよ」其他で芭蕉が屢用ひてゐる「貴さよ」といふ語法が、蕪村に流れ込んで「かしこさよ」や「嬉しさよ」や「ゆかしさよ」や「貧しさよ」などとなつて動いてゐるといふ様な事を掘り出して行けば、恐らくその關係は、もつと廣く、もつと深いものとして現はれて來るに違ひない。然し此所では今その餘裕もなし、またそれは此所ではそれほど必要な事でもない。私は唯此所で概括的に、句作の上ででも、いかに蕪村が芭蕉に負ふ所が多いかの、一端を示せば足りるのである。

一方から言へば、二人の作者が人間である以上、然もその二人の作者が殆んど同じ樣な社會狀態の下に住み殆んど同じ樣な過去の精神文化を背景とする以上、殊にその表現機關とするものが僅に十七字に限られた最短詩形の發句である以上、二人の句が何等かの點で共通するものを持つのは、寧ろ當然の事である、それを必ず一人から一人への影響ときめてしまうのは、反つてきめる者の獨斷に過ぎない、もしそれをしも影響と言ひ得るならば、蕪村は芭蕉のみならず、其角、嵐雪、去來、素堂、鬼貫は無論の事、宗因や西鶴や高政や、其他一切の過去人から影響を受けてゐるとも言はれ得なければならない、といふ樣な說も成り立たなくはない樣である。然しその影響は恐らく人が生きてゐる以上、誰でも受けてゐる筈の影響であつて、然もこの場合には、外の人も受けてゐる影響と相殺して、零と見立る事の出來る影響である。從つて私が此所で試みた芭蕉の句と蕪村の句との關係の點檢は、さういふ意味での影響を超えた影響を見ようとする所から出發

する。その爲めの引例が若し適切でなかつたならば、その引例は潔く撤回しても構はない。それは引例が適切でないといふ丈であつて、その爲めに私の推論が動搖するには、蕪村が作句の上で芭蕉から受けてゐる影響は、餘りに大きいのである。私はその引例を、もつと適切な多くの外の引例によつて、恐らく幾度でも補充する事が出來るであらう。

然し、蕪村が作句の上で、芭蕉の影響を多大に受けてゐるといふ事は、蕪村が作句の上で、芭蕉の眞似ばかりして暮らしてゐたといふ事を意味しない。是は今更言ふまでもない事である。蕪村には、蕪村特有の世界がある。いくら蕪村が芭蕉を崇拜し芭蕉から多大な影響を受けてゐるからと言つて、蕪村が、假令無意識にでも、その自分に特有な世界を展開させ得る事がなかつたならば、當時にも後世にも、蕪村は恐らく蕪村としての存在を主張する事が出來なかつたに違ひない。第三者から言へば、自分自身に特有な世界を展開させる事も出來ない樣な者ならば、それがいくら誰かを崇拜しいくら誰かから影響を受けたとしたところで、その崇拜やその影響は、到底とり上げて問題にするに値ひしない、崇拜であり影響である筈である。從つて此所で私の問題にしようとする所も、さういふ芭蕉の奴隷としての蕪村を證明する所にあるのではなくて、それほど芭蕉を崇拜しそれほど芭蕉から多大の影響を受けた蕪村が、芭蕉のどういふ所を崇拜し、芭蕉のどういふ影響を受け、さうして竟にどんな自分特有の世界を展開させて行き得たかといふ點にあるのである。

天明二年（一七八二）卽ち蕪村が死ぬ前の年の『花鳥篇』の中で蕪村は、其角の『焦尾琴』に載つてゐる「一休會裏になき物」の一節を引いて、「右の文は其角が焦尾琴に有て、俳諧の一枚起請ともいふべし。さはおのれがこゝろざし曉闇にして、寂しをりをもはらせんよりは、此曉に何をつくり出さな人こそこゝろにくけれ。かの伏波將軍が老莊といへるぞ、よろづの道にわたりて、致を一にすべし。古市河栢延、今の中なら臣子などは、よくその道理をわきまへしりて、とし〲

に優伎のはなやかなるは、まことに堪能の業と云べし」と書いてゐる。この「おのれがこゝろざし嗟隨にして、寂しをりをもはらせんよりは、壯麗に句をつくり出さむ人こそこゝろにくけれ」といふ言葉は、重大である。この言葉の中には、まづ、芭蕉によつて說かれたさびしをりの說に對する十分な尊敬の念が現はれてゐる。然しそのさびしをりは結構には違ひないが、然し「こゝろざし嗟隨」なるものには、それは到底及び難い境地である、といふ言はば諦めの心が、次にはある。從つて「こゝろざし嗟隨」なるものにとつては、今更さびしをりに心を潛めるよりも、そんな志は捨ててしまつて、華やかに派手に句を作らうと心がけるべきであるといふ事が、最後に宣言される。是は結局蕪村の、芭蕉への崇拜と、自分の個性の認識と、芭蕉の踏んだ道と自分の踏む道とのはつきりした境目の意識とを、鮮やかに公言したものである。

勿論この意識が、その死ぬ前年になつて、初めて突如として、蕪村に現はれたものだとは、私は思はない。寧ろ是は、是迄の間に幾度もさういふ心持が動き、特に無意識のうちには、旣に遠い過去から、芭蕉に離れて動いてゐたのが、此時分になつて特にはつきりと意識され、若くはその意識が、段段充實して、丁度果實が熟して落ちる樣に、自然と外に押し出されたものであるに過ぎない、と見るのが正當である。それを示唆するものは、安永六年（一七七七）の『新花摘』の中の「とかく句は磊落なるをよしとすべし」といふ、蕪村の言葉である。無論此所で蕪村は別に、さびしをりが良いとも惡いとも言つてはゐない。蕪村が此所で說いてゐるのは、其角の句の批評である。然し、それだけに――蕪村が外のものを頭の中に置いて物を言つてゐるのでない丈に、この言葉は、素直に蕪村の本心を吐露してゐるものと見做して可いであらう。蕪村は其角の句に卽して物を言ひながら、恐らく不用意の間に、「とかく句は磊落なるをよしとすべし」――なんと言つても磊落な句が一番可いと、自分の性に合つた句の好みを告白してしまつたのに違ひない。

蕪村は安永三年（一七七四）の『むかしを今』の序で、「阿叟の磊落なる語勢にならはず、もはら蕉翁のさびしをりをし

たひ、いにしへにかへさんことをおもふ」と言つてゐる。此所では、「花鳥篇」で壯麗と對立して用ひられたさびしをりは磊落の對立として用ひられる。然もそのさびしをりは、「花鳥篇」の場合とは反對に、芭蕉の俳諧の根本義として、然も誰もがそれに向つてもつぱら努力しなければならないものとして、高高と掲揚される。安永五年（一七七六）の「左比志遠理」の序に於いても同樣である。無論前にも言つた樣に、此所に示された蕪村のさびしをりに對する言説は極めて不得要領ではあるけれども、然もさびしをりなる名によつて象徴されてゐる芭蕉の俳諧に對する蕪村の渇仰は、此所でもまだ少しもその動搖を示してはゐないのである。蕪村は「そが中にもばせを翁のの玉ひけむ、ことばは俚俗にちかきも、こゝろは向上の一路に遊ぶべしとぞ。これや一貫のをしへにして、千古の確言なるをや」と言ひ、「しかはあれどさびしをりてふことをさとりしらざれば、句をつくり出すことかたくなんありとて、此一條はのべたまひけるにや。まことに蕉門の滋奥は此ふみにとゞまりて、他にもとむべきことはあらじかし」とも言つてゐる。『取句法』にあつても同樣である。「世有下稱二蕉門一者上。特不レ知二蕉翁之風韻一。其所レ吐句、倘所レ論不レ脱二支麥之俗習一。稱二之伊勢流或美濃流一可也。豈得レ曰二蕉門一乎。人號曰二田舍蕉門一知言哉」と言ひ、「知二俳諧之大道一無レ他。嘯月賞花使レ遊二心於塵寰外一常友二蕉翁其嵐之流亞一。專以レ脱二俗氣一爲最」と言つてゐるのは、卽ち是を證明する。安永六年（一七七六）の『春泥句集』の序に於いても同樣である。蕪村は此所でもまた「俳諧は俗語を用て俗を離るゝを尙ぶ、俗を離れて俗を用ゆ、離俗の法最かたし」と言ひ、「其角を尋ね嵐雪を訪ひ、素堂を倡ひ鬼貫に伴ふ。日々此四老に會してはづかに市城名利の域を離れ、林園に遊び山水にうたげし、酒を酌で談笑し、句を得ることは專ら不用意を貴ぶ」と言つてゐる。これらのものは、凡て、言はば芭蕉の精神に浸かつてゐて言はれた樣な言葉であるに外ならない。

然も「春泥句集」の序が、「于時安永丁酉冬十二月七日」といふ日附を持つて居り、「新花摘」の中の此角に關する記事が、同じ年の四月二十五日の條から五月二日の條に亙つて書かれてゐるといふ事は、我我の注意を要する點である。卽ち蕪村

は、一方では「とかく句は磊落なるをよしとすべし」といふ様な、芭蕉と離れた様な事も言つてゐるけれども、他方では然もさういふ事を言つた半歳の後では、「俳諧は俗語を用て俗を離るゝを尙ぶ、俗を離れて俗を用ゆ」といふ様な、若くは「日々此四老に會してはづかに市城名利の域を離れ、林園に遊び山水にうたげし、……句を得ることは專ら不用意を貴ぶ」といふ様な、いかにも芭蕉とともに道をあるいてゐる様な事を言つてゐるのである。

是は全然私の想像に過ぎないものではあるが、蕪村は芭蕉のさびしをりを、「ことばは俚俗にちかきも、こゝろは向上の一路に遊ぶべし」とか、「俗語を用て俗を離るゝを尙ぶ、俗を離れて俗を用ゆ」とか、「市城名利の域を離れ、林園に遊び山水にうたげ」するとか、さういふものと、假令全然同じものではないまでも、可也それに似寄つたものとして理會してゐたのではないか。それをその後『去來抄』(『去來抄』が蕪村の友人曉臺の「安永三甲午十月」の序を持つて京の井筒屋から出板されたのは「安永四年乙未三月」の事である)の中のさびしをりに對する去來の、ひどく要領を得た様で、實は要領を得る事の難い解釋を讀んだ爲めに、一時はさびしをりといふものが反つて譯の分からないものになつてしまつたのではないか。――少くともさうでも想像して見るのでなければ、その去來のさびしをりの解釋を中心にして編纂された一音法師の『左比志遠理』が安永五年に出板された時に、蕪村の書いた序文が、あゝまで不得要領に終り得る理由が、私には呑み込めないのである。又その前後に蕪村がさびしをりに就いて物を言ふ際に、いかにも分り切つた事の様に、あゝまで何の疑ひもなく物を言ひ得る理由が、私には呑み込めないのである。

何日の比の事だか分からないが、蕪村が二見形の文臺にそへて門人の路景に遺したといふ添書がある。それにはまづ自分が自筆でその文臺の表に書いたといふ「波紋を寫し雙石を摸し、便面に梅或は松を畫くを法とす。今こと〴〵く其繁を省き疎を尙ぶ。又是蕉門の一變」といふ句を記し、「便面は扇のこと也」「雙石は二見の石也」と二行に注を加へたあとで

蕪村は「蕉門の流行ますます〵さびしをりを尙ぶ。是則畫家に云ふ、繁を省き疎を尙ぶものと軌を一にす」と書いてゐる。是は或意味ではさびの解釋にはなるかも知れないが、到底しをりの解釋にはなるものではない。然も蕪村は、そんな事には頓着なしに、斷々乎として自分の信ずる所を書いてゐるのである。從つて、去來のさびしをりに對する解釋が蕪村のさびしをりに對する解釋の上に與へた惡影響に關する私の臆說は、單なる臆說であるに過ぎないとしても、ともかく蕪村が芭蕉のさびしをりを、少くとも彼自身の腹の中では、華やかなもの、煩はしいもの、俗なもの、人間臭いものの反對で、地味な、簡素な、高尙な、人間離れのした世界として解釋してゐたらうといふ事は、どうも疑ひがない樣である。第一、さう推測するのでなければ、蕪村がさびしをりを壯麗や磊落と對立させて考へる、その考へ方からが分からなくなる。

此所で先に引用した「芭蕉去てその、ちいまだ年くれず」の句をその終結とする『歲末辯』の內容を、もう一度點檢する必要が生じて來る。『歲末辯』で蕪村は、人々が罵り喚きながら掛乞ひをしてあるく光景を、ひどく淺ましいものにながめたあとで、「さとておろかなる身は、いかにして塵區をのがれん」と嘆じるのである。さうして芭蕉の「年くれぬ笠著て草鞋はきながら」の句に向ふのである。さうすると假に「心もすみわたりて」ありがたく尊く思はれるけれども、然もありがたく尊く思つてゐる自分を不圖省みると、自分はやつぱり元の「塵區をのがれ」得ない自分に過ぎないのである。そこで「芭蕉去てそののちいまだ年くれず」といふ句が生れるのである。

然もこの心持は亦、さびしをりによつて代表されてゐる芭蕉の俳諧に對する、蕪村の心持を、そのまま表現するものではないか。蕪村はさびしをりの世界に住む事が「心もすみわたりて」ありがたく尊い事に思はれる、さうしてさういふ世界に徹底的に這入り切りたいと思ふ。またある時はさういふ世界に這入り切つたといふ樣な心持になる事もある。然し不圖その時自らを省みると、自分はやつぱり元の、[illegible]を忘れる事の出來ない儘の自分である。それが蕪村を悲しくする。

さういふ經驗が幾度も繰り返される時、どうかすると蕪村は、いつそ思ひ切つて、さびしをりの世界など理想とする事をやめてしまはうかといふ樣な氣にさへもなる。——蕪村は『花鳥篇』の中の『檜笠辭』で、「さくら見せうぞひの木笠と、よしの、旅にいそがれし風流はしたはず。家にのみありてうき世のわざにくるしみ、そのことはとやせまし、この事はかくやあらんなど、かねておもひはかりしことどももえはたさず、ついには煙霞花鳥に辜負するためしは、多く世のありさまなれど、今更我のみおろかなるやうにて、人に相見んおもてもあらぬこゝちす」と書いて、最後に「花ちりて身の下やみやひの木笠」といふ句を添えてゐる。蕪村は、芭蕉の風流は慕はないと強い事を言つては見るけれども、然も「家にのみありてうき世のわざにくるしみ」それを超越して生きる事の出來ない自分を發見すると、「今更我のみおろかなるやうにて、人に相見んおもてもあらぬこゝち」がするのである。

一體芭蕉の言つた「見る處花にあらずといふ事なし。おもふ所月にあらずといふ事なし。……」といふ言葉は、單に「煙霞花鳥に辜負」しない生活をするといふ意味ではなく、例へばどんなに「家にのみありてうき世のわざにくるし」んでゐる者でも、その「うき世のわざにくるし」まされず、それを尙月を見また花を見ると同じ樣な心持で見て行き得る、さういふ物に役せられない、自由な、然も情味の豐かな世界の獲得を目的として精進する事を敎へるものである筈である。然し蕪村はそれを割に外面的にとつて、風流とは、生活に追はれない餘裕をつくつて、暢氣に「煙霞花鳥」に浮かれてあく事であるといふ風に解釋してゐるらしく見える。「年くれぬ笠著て草鞋はきながら」の句の解釋のし方でもさうである。蕪村は、この句の奧に搖らいでゐる芭蕉の、寧ろ悲劇的(トラーギツシユ)な魂を感じないで、表に見える何氣なさだけをしか——悠悠自適してゐるかの如き相だけをしか、注意してゐない樣に見える。是は、芭蕉の藝術が芭蕉の生活とともにあり、蕪村の藝術が蕪村の生活を離れてあるといふ、藝術に對する二人の根本的な態度の相違から來るものであるのかも知れない。然し

是は恐らく芭蕉の藝術を理會し若しくは芭蕉の藝術から影響を受けとるに、最も適當な態度ではなかつた。芭蕉から言へば、風雅は、俳諧は、人の内にある。人は自分の内を清める事によつてその俳諧を清める事が出來るのである。蕪村から言へば、風雅は、俳諧は、寧ろ人の外にある。人の内が清まつてゐなくても、清いものを受とる事が出來さへすれば、其所に俳諧は成立つのである。然しさういふ外の立場からは、風雅は「日々此四老に會して、はづかに市城名利の域を離れ林園に遊び山水にうたげし、酒を酌で談笑」する以外に、是といふ風雅はあり得ない。從つて蕪村にとつて、錢勘定は、職業は、妻子は、日日の生きる爲めの生活は、凡て風雅の敵である。――その立場から芭蕉を見たら、芭蕉は、一人身で日日生きる爲めの生活がなくて、暢氣で、自由で、いかにも風雅に徹底し風雅に充滿して活きてゐた樣に見える筈である。若し蕪村が、もう少し芭蕉の藝術から、芭蕉の内を覗き込む事に力めてゐたならば、蕪村はもつと芭蕉に親しみ、もつと芭蕉の心持の暗い方面に觸れ、從つては自分の生活の上や自分や藝術の上に、もつと違つた芭蕉の影響を受け入れる事が出來たでもあらう。然し蕪村には、芭蕉のその、風雅に充ちた方面だけしか映らなかつたのである。然も芭蕉のその方面が著しく映れば映るほど、蕪村は、風雅の敵に惱まされる自分を、著しく慘めなものに見出されない譯には行かなかつたのである。

さうは言つても蕪村は無論、自分の藝術に對する自信は持ち續けてゐたには違ひなかつた。然し自分と芭蕉との隔りを意識すればするほど、蕪村は苦しまない譯には行かなかつた。芭蕉の導きに從つてさびしをりを追ひ續けるか、さびしをりを追ひ續けて斷えず芭蕉と自分との距離の意識に苦しむよりは、思ひきつてそのさびしをりに離れて、自分が今までに得た所のもので滿足して自分に安らかな道をあるく事にするか、蕪村はこの二つのあれかこれかの間に立つて苦しんだ。さうして最後に到達した結論が――おのれがこゝろざし隨所にして、寂しをりをもはなれせんよりは、壯麗に何をつくり出さむ人こそこゝろにくけれ――である。さびしをりに離れて、派手な、賑やかな、人間臭い世界の中で樂しまうといふ氣分で

ある。

さうして蕪村が最後に一所にならうとした世界は、言はば、師の宋阿を通して蕪村がかなりその血を受けついでゐる筈の、其角の世界だつたのである。

然し勿論この事は蕪村が、芭蕉に對する渴仰を捨てたといふ事を意味するものではない。自分の境遇や資性から考へ、到底芭蕉にはついて行けないといふ事を悟つて、蕪村は唯その芭蕉軌道から外れようとしたのみである。その意味では是は寧ろ、餘りに芭蕉を渴仰しすぎたせゐであるとも言へる。芭蕉は餘りに高すぎるから、其角を伴侶としようといふのである。蕪村がさびしをりに離れる樣な事を言ひながら、事實は芭蕉からは離れてゐない事は、同じ『花鳥篇』の中の『檜笠辭』ででも知れる。また蕪村が死病の床に就いてゐて、ある晩伽の者に「かうやうの病に觸つゝも、好る道のわりなくて、句案にわたらんとするに、歩は枯野をかけ廻るなどいへる妙境、及べしとも覺えず。されば蕉翁の豪傑なる事、今はた感に堪ざるは」と言つたといふ事は、几董がその『から檜葉』に於いて、我我に報告するところである。

【附記。終りの蕪村が芭蕉から離れる所は、もう少し精緻に議論を進める必要がある。然し時間の餘裕が、私にそれを許さない。それは、最後に觸れる筈で割愛した、蕪村によつて開拓された蕪村特有の世界の記述とともに、他日の機會を待つ事にしたいと思ふ。】

編輯者雜記

×

第二次共産黨檢擧の記事解禁があつて、ちよつと世人の耳目を聳立たしめたかと思ふと、それも束の間、新聞は一日で筆を納めて瀆職事件ほどにもなし。厭いたのか、慣れたのか、それとも斯くて共産黨絶滅せられたとでも云ふのか。

×

頭株がロシアからフンダンに金をとつて遊興の費に宛てゝゐるなど、世間から同情されぬ所以でもあらうが、事實とすれば何にも知らずに命懸けで働いてゐる麾下の純情無垢の青年こそ氣の毒だ。

×

本號の『人間としての共産黨巨頭』に甚大な興味のつながるゝものあるだらう。

×

共産黨といへば、誰しも是非聽きたいと思ふのは大山氏の言説である。本誌もそのつもりで一時快諾まで得たのだが、同氏の事情でそれが得られなかつたことを讀者と共に殘念に思ふ。その事情――それが尙更聽きたかつたのだが……。

×

減俸問題も新聞で水をさゝれて、たわいなく消えてしまつた。それはどつちでもいゝやうなものゝ、見逃してはならないのは、官吏の團體的反對運動だ。それも是非は別問題として、それが四五年前までは絶對に見られない圖であつたことだけは確かだ。時勢はこゝまで進んでゐる。『官吏と團結』を提供した所以だ。

×

減俸問題といへば、何だつて新聞があんな一齊に反對したのだらう。政府のやり方もへまだつたが、新聞記者も氣が早い。もつと冷靜に考慮してもよかつた問題だ。それを慌てて引込めた政府も政府だが、ここに民政黨内閣の長所も短所も暴露されてゐる。

×

前號の小林多喜二氏の「不在地主」はバカに評判だつた。今度の黒島傳治氏のものもいゝものだ。殊に細田民樹氏の「黒の死刑女囚」は時節柄特に熱讀せらるべきものだと思ふ。

×

二木保幾氏の卷頭論文はマルクスの資本論に對して眞正面から取組んだものだ。其の學者的良心の健實、意氣の磅礴なる、蓋し不振なりし本年度學界に於ける壓卷である。論陣は本稿を中核として張らるゝに至るであらう。

×

高橋氏の財産調べは海外にまで知られて益々高評だ。新しき眼を以て見られたこの的確な精叙のために當面の各財閥及大藏省内に多大なセンセイションを起して居るのみならず、學界其他の評判が大したものだ。本稿では兎角の噂あつた金融資本王安田王國を俎上にのせた。心ある新人は必讀すべきである。

×

其他「太平洋問題の中核」「大阪カフエ彈壓史」等々本誌が眞劍な努力の跡ならぬはない、云ひかへれば見逃してはならぬもののばかりだ。論より證據實物を御覽あれ。

×

本社の出版事業はお蔭で豫期以上の好成績だ。處女出版の「西部戰線異狀なし」はすばらしく賣れた。未だ註文が殺到してゐる。本社の出版は賣れることに相場がきまつたやうだ。同時に絶對的に良いものだといふ事は相場をきめなくてはいけない。

×

新出版は着々計畫されてゐる。大規模な計畫もやがて發表されるだらう。諸君を驚かせると同時に喜ばせるやうなものが。

×

「新版大東京案内」は編輯に手間どつて、豫告よりおくれたが、今月の廿五日に配本する。是非讀んで貰ひたい。地方人への親切な新東京案内たるの役目は無論果してゐるつもりだが、ザラにある案内記とは違ふ。復興なれる東京を、藝術的見地から、經濟的見地から、その他あらゆる見地から檢討し盡して茲に大東京を縮寫したもので、その意味ではユニークな存在だと信ずる。寧ろ東京人にとつての缺くべからざる東京案内であらう。

×

斯くの如くにして、吾々はこの昭和四年を送り、斯くの如くにして新たなる昭和五年の新春を迎へようとしてゐる。惠まれたる中央公論社よ、來年こそ活躍の本舞臺に入るべき歳だ。妹篇「婦人公論」は十五周年を迎へていよ〳〵「婦人公論」時代の實現に邁進する。中央公論、婦人公論、並に新設出版部、いづれも氣を揃へて日本讀書界に濶歩するであらう。

×

本誌新年號並に新年以後の計畫については今は何も言はない。飽くまでも中央公論誌獨自の立場に在つて、更に更に新興階級的進出を續けるであらう。新人拔擢を心懸けてならなかつた懸賞募集も更に機を見て效果的に具現せしむるであらう。餘は新年號の本誌内容によつて吾々の抱負と意氣との尋常一樣でない事を實證せられたいと思ふ。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

新長篇連載小説豫告

大陸……谷讓次

文壇の沈衰を傳へられること久しい。新興文學未だ全く成らずして、既成文壇早く已に老いたるの觀がある。このところ舊文壇の古城にあつて堂々の氣を吐いてゐるものは、たゞ僅かに、我國唯一の老大家島崎藤村氏の長篇「夜明け前」あるのみである。

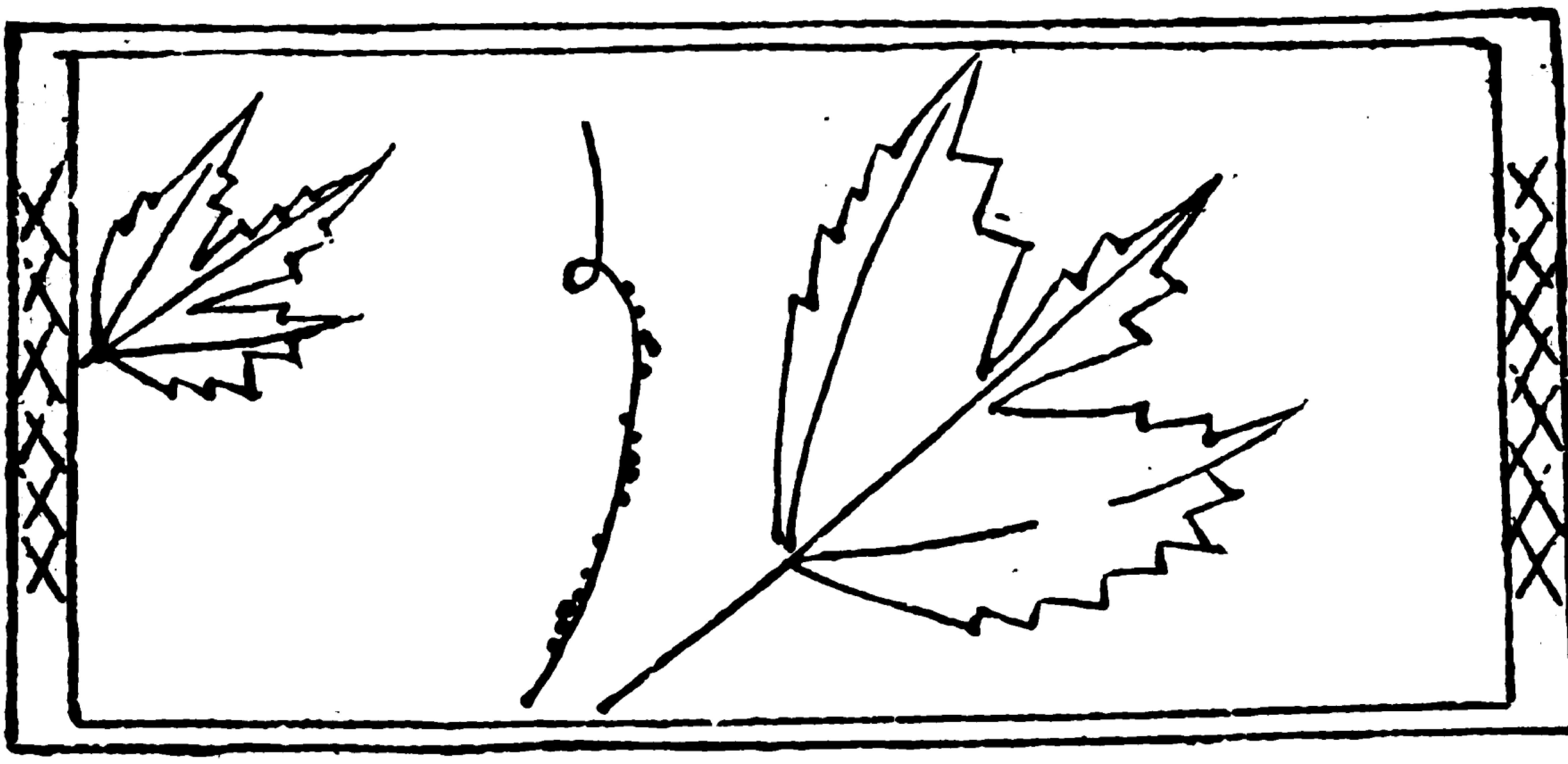
「夜明け前」は今後なほ數年に亙つて本誌に掲出せらるゝ筈で、完結の上は明治大正昭和を通じての一大大作として後世文學史を飾るであらうことは、今更言ふまでもないことであるが、一方にさういふ文壇の重鎭を掲出する傍ら、本誌は他の一方において、文壇の奇道を行つて彗星の如く輝いてゐる奇才谷讓次氏を起して、新春以後、毎月、一ヶ年に亙つてその縱横の才幹を揮はしめたいと思ふ。

氏の文學的評價は今なほXである。が、その文學的才能に至つては古今獨歩である。天下何人と雖もその筆力を認めざる者はない。而も昨春以來歐洲大陸を漫遊して得たところの見聞を、今度は渾然たる一大長篇小説に織込まうといふのである。題して「大陸」といふ。容易に企て及ぶべからざる大作であるは云ふを俟たない。無論藝術的ではあるが、既成文壇のそれではない。無論大衆的ではあるが、大衆文壇のそれでは決してない。そこに本誌の覺悟と意圖の存するあるを認められるであらう。

作者の言葉

僕は今度「大陸」といふ一つの大きな創作を書いてみやうと思ふ。

日本では、とかく一部が全部になりたがる傾向が強い。そのため、色んなものが雜然と立ち竝ぶ大陸的な壯觀は到底望めないのかも知れないが、創作なるものに、斯くなければならないといふ一定の型はない筈である。「大陸」は、全く自由な僕の創作だ。これによつて僕は、社會事象を通して觀た、歐羅巴なる此の世紀の主生物を、これから一年に亙つて、凡ゆる非藝術的角度から、勇敢にまで無風流に處置してみたいと思ふ。



黒の死刑女囚

一九二五年代の犠牲者に關する小説

細田民樹

同志K・Yは——と頭字(イニシアル)を並べただけでも、この手記を讀めば、彼が誰であるか、解る人は多いいと思ふが——一昨年の秋頃まで、××地方裁判所の判事をしてゐた。だが、長い判官生活の間に、彼の言葉に從へば『被告人が僕の思想を變へてしまつた』で、たま〳〵或る被告人達に、同情と理解を持ち過ぎた結果、所謂『怪文書』事件なるものを惹き起し、K・Yは囂々たる輿論の的となつた。それは無論、反政府側のブルジョア政黨の策動だつたが、この策動がまんまと圖に當つて、世間の問題となると、策士共は『涙を流して』祝杯を擧げたくらゐだ。(ブルジョア政黨が、神聖な司法權を、政爭の道具に使ふのは、少しも珍しいことではない。)そこでK・Yは、いゝ加減いやになつてゐたこの商賣から、あつさり引責辭職といふ奴をやり、間もなく、無產階級の爲に、貧乏な辯護士となつた。今では運動の實際的な事情にも精

通して、しきりに階級闘爭に活躍してゐる。左の一篇は、當時一世を震撼させた議會××事件の、女主人公に關するもので、K・Yの手記中、僅かな一部分にしか過ぎない。しかし、恐らくこの事件の如きは、彼の十年に亙る長い在官中、最も惱ましい仕事の一ツだつたに違ひない。

僕が高井蕗子を取調べ始めたのは、震災直後の十月末であつた。大杉夫妻と宗一少年が、あのどさくさ紛れに惨殺されてから、二十日も經たないうちに、高井蕗子の大事件が起つたので、當局の狼狽は滑稽なくらゐだつた。當局の檢擧を逸早く臭ぎつけた××新聞さへ、ほんの三行も書くことを許されなかつた。僕は、だから、高井夫妻が死刑を宣告せられるまで、震災の秋からまる二年半、この夫婦と親しく交際したわけだ。但し、××地方裁判所と×××刑務所に於てのみ・・・・・・・。

忘れもしない、――あの大地震で、汚い白壁が生々しく八裂きにせられたまゝの豫審室へ、藍地に白の矢絣銘仙の袷を着た蕗子が、何故か少し微笑しながら――後で解つたのだが、彼女は悲しみをさへ、笑顔でなければ表はせないといふ、悲惨な表情の一タイプだつた、――靜かに這入つて來た。間もなく、僕と對き合つて腰を掛けたその顏、暑い留置と警視廳や檢事の訊問で、眼の縁はかつきり隈どるくらゐ疲勞してゐたが、彼女の瞳は不斷の興奮で、暗く深く輝いてゐた。大がらな、ちよつと難の無い美しい顏に、しかし瞳は嵐・・・・・・さうだ、狂ひすさぶ嵐の苦悶が、きれの長い彼女の眼から、僕の胸にどッと吹き寄せて來た。僕は一眼彼女を正視した瞬間、長い間の職業的な經驗から、この『大罪人』も、決して幸福な生ひ立ちを持つてゐないと直覺した。

僕は書記立會の上で、型のやうな調書を取る前、蕗子にその犯罪の性質を話し、僕の質問に對しては、なるべく正直に

率直に答へてくれるやうに言つた。十分覺悟してゐる彼女は、唯默つて聞いてゐたが、俄かに『無論』といふ朗かな微笑を見せた。柔かな薄黑い下唇に被さるやうな微笑が、それが、まだ處女のやうにあどけなく、羨ましかつた。

僕はまづ、氏名年齡、職業、住所などを靜かに訊き始めた。

『氏名は高井蕗子。年は戸籍面では二十二ですけど、本當は二十です。』

『でも、あなたの戸籍謄本に依ると、明治三十八年三月十五日生れとあるがね。』

『さうかも知れませんわ。だつて、自分の生まれた日を知つてる人があるでせうか！』

彼女は大膽にも、そんなことを言つて笑つた。僕を侮蔑するやうなその口調に、書記は彼女へ鋭い一瞥を投げた。僕はその時、豐かな筍のやうな少女に見える彼女が、なか〳〵肚を据ゑてゐると思つた。

『族稱は無論平民です。職業は××業。』

『住所は。』

『東京府豐多摩郡杉並町高圓寺六百三十番地佐谷豐方。本籍は長野縣更級郡川柳村大字川西、番地は知りません。出生地は神奈川縣橫濱市青木町幸ケ谷、番地は知りません。』

『刑罰を受けたことがありますか。』

『あります。』

『あなたは佐谷豐の妻か。』

『さうです。でも入籍してません。』

『あなたはいつ佐谷と一緒になつたか。』

『昨年の正月から。』

「政治社會問題に對するあなたの思想は。」

「私の思想を一言に言へば、虚無主義です。」

「佐谷の主義思想は。」

「佐谷の思想も私の思想と同じです。」

「あなたは黒星社に加入してゐるか。」

「今年の三月中、私と佐谷とが相談して黒星社を組織しました。」

「どうして、黒星社を組織することになつたのですか。」

「黒星社といふのですから、××の徒の親睦を計る爲に組織したのです。」

「××の徒とは。」

「あらゆる權力に對して叛逆する、虚無主義者や無政府主義を抱いてゐるものの集りです。」

「あなたは、マルクスやエンゲルスを讀んだことがあるか。」

「あります。唯少しばかりです。」

「マルクスなどは、立派に權力といふものを認めてゐるではないか。」

「共產主義者と私達とは違ひます。」

「黒星社の仲間は。」

「私達夫婦を始め、李完讚、崔宗鎭、徐北星、鄭成達、小村亘、石山春代、佐伯金子、張祭漢、胡宗睦、野方山三、栗原佐市等十五六名が、黒星社の同人です。」

「黒星社の目的は。」

『××の徒が寄り集まつて氣焔を擧げ、そのとばつちりを持つて行くのです。同志の中の氣の合つたものが、自由に直接行動に出るのです。まア、貴方がた御役人を騒がせることですわ。ホツホツホ……。』

蕗子は僕の顔をじつと正面に視たまゝ、一度も横向きさへせず、尾を引くやうなひとり笑ひをして言つた。話のうちに、彼女はしけ／＼と目瞬きをし、目瞬きをすればするほど、一層際だつて、彼女の顎骨が見えて來た。そして人並眼だつその顎には、一種の狂信者にのみ見るやうな頑な挺子があつた。彼女はかなり呼吸器を害してゐるせゐか、僕の訊問の間に、丁度捕へられた魚のやうに、喘ぎながら空氣を吸つた。僕には何故か、彼女が母親の手を離れた乳兒のやうに可憐に見えた。子守の居ない赤坊が、危險な川端へ、一生懸命汗を出して這つて行く。蕗子は見張りのない川に落ちた赤坊なのだ。彼女達の仕掛けた爆彈で、人命の幾つかを殺傷した以上、恐らく彼女が死刑を免れることはあり得ないのだ。

『だが、あなたはどうして、虚無主義の思想を抱くやうになつたか。』

『私の家庭と環境と、それに依つて社會から受けた壓迫と、これが私を多分虚無主義者にしたのでせう。私には生れ落ちるとから、本當の家庭といふものがなかつたのです。家族關係から言ひますと、私を生んだといふ父は山路孝一といつて、只今四十七歳ぐらゐになり、靜岡で新聞ごろをしてゐるといふ話です。母は高井さのといつて、當年四十六七でせう。私は今母が何處で何をしてゐるか知りません。私の兄弟は今十六ぐらゐになる山路養三が一人です。養三は父の許で養はれてゐる筈です。尚種違ひの妹濱子といふ者がゐる筈ですが、私は濱子がどうしてゐるか知りません。

私にはこのやうに、ちやんと兩親もあり兄弟もありながら、私は兩親から早く捨てられ、兄弟はてんでに離散しちまつて、私は家庭の味といふものを知りません。無籍者で生まれたといふので、社會制度の缺陷から、私は長い間非常な社會的壓迫を受けました。私は兩親の存在とその愛を否定し、社會を呪はずにはゐられなかつたのです。詳しい事情を申上げたら、私の經歷となり、長くなりますが、一ツ聞いて頂きませうか。

物心の付いたのは、私の四ッの時でした。當時父は横濱市に住んで巡査とかを勤めてをりました。父は細いことによく氣の付く、几帳面な子煩惱でした。で、父は私を肩車に乘せて、汽船の見える波止場に連れて行つてくれたり、私の草履を自分で編んでくれたりしましたが、母の性格は父と全く反對で、いつもだらしなく妙に無頓着でした。そんなことが原因だつたのでせう、その頃父は若い女を連れ込んで來たので、それからは父と母が始終喧嘩をしまして、父はその都度女の肩を持つて、母を毆つたり蹴つたりしました。幼いながらも私は、母の上に覆ひ被さつて、母を庇ひながら幾度も泣いたことがあります。かうして兩親の心持が、互に慌んで來るに從つて、父は遊廓へ入り浸るやうになりました。私はしばしば母に手を引かれて、父を遊廓に迎へに行きましたが、父は寢卷のまゝ起きて來て、母を廓の外に突き出したり、酷く毆つたりしました。たま／＼父が夜更けた町を、大聲で歌つて歸つたあとで、母が父の着物を疊み付けながら私に、「こんなに袂の中に菓子の袋や蜜柑の皮があるのに、近頃お前には、何一つ買つて來てくれない。」と言つたことを記憶してをります。

私の六歳の春でしたか。弟養三が生まれました。次いで同じ年の暮頃、母の妹であり私の叔母に當る高井しげが、病氣療養の爲、私方に來て同居してをりました。母は內職の爲に外へ出勝ちでしたが、父は母の留守になると、私にお小使ひをくれて、よく戶外に遊びに出しました。その頃父は、この叔母と關係してゐたのです。私は好奇心に驅られて、その醜い姿を襖越しに隙見した事もありました。

私の七歳の夏頃、父は職を辭して、氷店を始めましたが、子供が居ては店の邪魔になるといふので、二軒の家を構へ、一軒には父とその叔母とが同棲し、一軒の方に母と私達姉弟を住まはせ、體よく私達を追ひ出しました。その頃の或る日でした。私は母に連れられて父方に行きました。母は父に向つて、家には米が一粒も無く、子供の私達にさへ、夕飯を食はせることの出來ない事實を訴へたのです。その時父は、酒飲み友達と花札を引いてをりましたが、母の訴へを聞くと、い

きなり立ち上り、母を縁の外に突き落して、鬼のやうな顔をして毆りかゝりました。で、私達は空腹を抱へながら、暮れた夜道を自宅に歸りかけました。暫くすると父は、背後から私達を追つて來て、母に向ひ、この野郎他人の前で、米の無いことなんか言つて、俺に恥を搔かせたから、すつかり縁喜が惡くなつて、勝負に敗けてしまつたと言つて、非常な權幕で下駄を脫ぎ、無茶苦茶に母を毆りつけました。母はその時、私や弟を抱へて、その場に泣き崩れました。その後間もなく、父は店を仕舞つて、叔母と一緒に私方に戻つてまゐりました。この叔母は、何かにつけて、母のことを父に告口し父はそれを聞くと、母を虐め離別すると言つて、私達親子三人を戸外に突き出したこともあります。

するど程なく、叔母は國元の田舍に歸ると言ひ出しましたので、母はそれを眞に受け、叔母の爲に荷造りをし、國の祖母などにも傳言を賴みながら、叔母を停車場まで見送りました。母は叔母が全く國元へ歸つたものと思つてゐたのです。だがその數日の後、ふと、父が居なくなりました。何日經つても父は歸りませんので、私達親子三人はその日の生活に困つてしまひ、毎日心當りを訪ね、父の行方を根氣よく探して歩きました。ところが或る日のこと、崖の下の狹い露地の奥に、偶然叔母の着物の干してあるのをみつけました。そこに父と叔母とは間借りして、同棲してゐたのです。かうして私達は、やつとのことで父の隱家を探し當て、母は父に歸宅するやう賴みましたが、父は母を道に連れ出して、母の髮を摑み引倒して毆る蹴る、私と弟とが悲鳴をあげてゐますと、通りかゝつた巡査が、その場を靜めてくれました。その時から父と叔母とは、再び姿を隱したのです。幼い頃の私に、これほど判然印象に殘るくらゐ、父は酷く母を虐めた上に私達親子三人を捨ててしまつたのです。私は到底父の愛なんか信じることが出來ません。父に捨てられた私達は、いよ〳〵生活が苦しくなりましたので、家を疊んで間借りをし、母は晝間紡績工場に通ひ、夜は内職をしました。私は留守居をして弟の守をしました。母が夜業の爲遲く歸る時など、弟が母の乳房を慕つて泣き叫びますので、私も貰ひ泣きをし、泣き疲れて二人が寐てしまつたこともありました。

でも、これだけでしたら、私は母の愛を決して疑ふやうなことはなかつたと思ひます。ところが、母はそんな生活を三月もしたかしないうちに、中條といふ男と同棲するやうになりました。そして母は、以前父が私に仕向けたやうに、何かと使ひを拵へては私を戸外に追ひ出し、中條と醜い姿をしてゐたことも度々でした。繼父に當るこの中條も、思ひきり私を虐待しました。その頃私の實父の住所が解りましたので、私の弟を實父に引渡すことになりましたが、私は弟養三との別れを惜んで、そのあとを追ひましたところ、中條はそれを怒つて、その晩私に猿轡を嵌め、私の手足を麻繩で縛つて、裏の材木置場に私を夜明けまで吊り下げました。或る時は中條が、私の學校に差出す月謝袋から、そつと現金を拔き出しておき、學校の先生から、私がその金を使ひ込んだものと思はれるやうに、仕組んだこともあつたのです。母はさうして私が中條から虐められてゐることをよく知りながら、私を庇はうともせず、却て中條と氣を合はせて、私に辛く當るやうにさへなつたのです。私は事實兩親の間に生まれてゐながら、無籍者であるといふので、學齡に達しても、小學校に入學することが出來ませんでした。で、私は母に賴み賴んで、附近の小學校に行つてもらひ、私も母と一緒に校長に嘆願して、やつと通學するやうになりました。ところが、母は間もなく中條と別れ、その頃沖仲背をしてゐた小村といふ、母よりも七八ッ年下の男を家に引つ張り込みました。

この小村は珍しい怠け者で、殆んど毎日仕事を休んで、家に寢て遊んでました。すると母も小村を眞似て、工場を退きましたので、生活は益々苦しくなり、家財道具を賣り拂つてしまつた後は、臺所の床板を外して、薪に代へたこともありました。そして母は、暗くなつてから、淋しい森の向うまで、私を御飯代りの燒芋を買ひにやりました。私が出たあとで、母は小村と醜い眞似をしてゐました。私はそれを見た時、子供ながらも淺間しいやら腹が立つやらで、そつとひとり泣いたことも度々ありました。間もなく母から、私が豫て欲しがつてゐた赤い椿の花の簪を買つてもらひ、何だか大きな家に連れて行かれました。母と先方との話の模樣を聞きますと、そこは人間賣買の仲買人の家だつたのです。子供心にも

私は慄然とその空氣を感じました。母は私を女郎屋に賣らうとして、その交渉をしてゐたのです。先方では、私を三島に送るといふと、母はもつと近い所にしてくれといふやうなことを言ひました……。」

蕗子の暗く澄んだ眼は、さつきから煙のやうに曇つて來たが、ついに堪へきれなくなつて、二三度激しく屢叩くことに依り、涙を追ひのけようとした。その努力にも拘らず、涙は眼尻で重い滴となつてしまつた。彼女は僕と立會書記の手前、銘仙の袂で眼をちよつとこすりながら下を向いたが、そのまゝ暫く顔を上げ得なかつた。僕は彼女が死刑の宣告を受けるまで、二十何回彼女を取調べねばならなかつたが、蕗子は他の如何なる重大な取調べの場合でも、かうして自分の生ひ立ちを語つた時ほど、一種の苦い情感と熱とをその顔に表したことは、かつて一度も無かつた。それは女性に通有な「訴へることの快感」でもなく、微塵も僕の同情を求める爲ではなかつた。稀に聞く彼女の悲慘な生ひ立ちが、今日の彼女を如何に體驗づけたか、彼女はひたすら今日の結論へ歸納する爲に、凡てを語るのであつた。自分の生ひ立ちに對する彼女の「批判」には、幾多の誤謬のあることを、僕は後で知つたが、彼女のかうした生ひ立が、哀れむべき、しかし鋼鐵のやうな信念へ彼女を導いた事實は否認出來ない。僕はいつも職責を放れ、蕗子との間を水平な個人關係に置いて、僕の信ずる思想的な立場へまで、彼女の思想を發展させようと試みた。そして終局に於て、彼女は僕と共鳴したと信じてゐる。しかしその思想的轉換は、蕗子の死と共に逝つてしまつた。彼女は死の直前まで、遂に彼女の思想を曲げなかつたのだ。それほどまでしつかりと、狂信に近い彼女の思想を孕んだ第一歩は、確かにかうした彼女の暗黒な生ひ立ちに始まつてゐる。蕗子の生ひ立ちには、割引きなく、今日に至つた十分の必然性が感じられるのだ。

七歳の時三島の女郎屋に賣られかけた彼女は、人買人の都合で沙汰止みとなり、いよ／＼生活に詰つて、母の郷里長野縣に歸り、彼女は叔父の家に養はれ、母はまた他に縁づいた。彼女はかうして完全に父母から捨てられてしまつた。九歳の正月、蕗子は朝鮮に住む父方の叔母に、子守奉公として引取られることになつた。しかしその時、彼女を迎へに來た父

方の祖母が、無籍者では引き取れないといふので、母方の祖父母の五女といふことに入籍して、法律的にも全く兩親の關係は絶えてしまつた。朝鮮に於けるこの少女の七年間の生活は、一層みじめなものであつた。「下駄の鼻緒を切つたといふので、零下何度の冬の夜、食事を與へずに、戸外に何時間も立たせられた。」孫であり姪である筈の彼女は、幼年奴隷として、叔母の家で長い間こんな虐使に堪へねばならなかつた。十六になつた蕗子は、この叔母の家から「不用になつて」郷里長野縣に突き返された。彼女が郷里に歸つたと聞いて、そこへひよつこり訪ねて來たのは、かつて彼女や母を虐待して捨てた實父であつた。實父は蕗子の叔父であり、戸籍上の兄である一僧侶と、その寺の財産を目的に結婚を強要すべく現れたのだ。蕗子はその叔父と、否應なく婚約を結ばれてしまつて、實父の住所靜岡に連れて行かれ、そこの裁縫學校に入れられた。一年で卒業して郷里に歸ると、もと／＼彼女と結婚の意志の無かつた叔父は、別に愛人があり、唯蕗子の處女を奪つただけで、彼女がお轉婆であるから寺には向かないといふ口實で、彼女の實父に破談を申し送つた。實父はその通りを信じ、早速長野に來て、「腹の癒えるまで」彼女を打擲した。

『私はかつては母に賣られかけ、再び父に賣られ、叔父に捨てられ、住むに家なく、大正九年五月、十七の時、古梱一ツ抱へて單獨上京して苦學を始めました。上京後半月ほどは、下谷に洋服商をしてゐる、母方の大伯父の家にをりましたが、あゝいふ母の子であるといふので、大伯父も好感を持つてくれないことがすぐ解りましたので、間もなく下谷上野町の日々新聞賣捌店元田といふ家に這入つて、夕刊賣りを始めました。その店にゐる間、私は午前中は正則英語學校男子部一年に、午後は研數學館代數初等科に通ひ、夕方四時から夜の十二時半まで、上野三橋に立つて、夕刊賣りをしました。夜更けて元田方に歸ると、そこの米を磨ぎ、他の賣子の食ひ荒した勝手の始末をして、毎夜午前一時過ぎに床に就きました。

ところが、この店の主人には、他に妾があり、その爲本妻と子供とが虐待せられて別居してゐました。その家庭の内幕

が、私自身の幼い時の家庭を、そつくり移したほどよく似てゐましたので、それから受ける内的な苦痛と、一ツはあまり激しい勞働が、みす〳〵身體をこわしますので、私は三ヶ月ほどして、その店を出ました。そして湯島新花町に間借りをして、粉石鹼の夜店を出して稼ぎました。それで學資を得ようとしましたが、なか〳〵商賣にならず、已むを得ず勉强の時間を條件に、淺草聖天の砂糖屋に奉公し、續いて、その後本郷の肴町にゐた社會主義者堀木正次方に同居して、印刷の活字拾ひをして苦闘を續けました。その間實父と一二度會ひましたが、私が堺利彦の著書や社會主義の雜誌を讀んでゐるので、父はだん〳〵私を恐れる模樣でした。

大正十一年始め頃、私は正則英語學校の友人を通して、無政府主義者の佐谷豐と相知り、同人と同棲しようとしましたので、私は兩親に對してそのことを宣告しました。すると實父は、私が佐谷と同棲してから、私に宛てた手紙で、苟くも大政大臣藤原何とか卿の第何百何十代やらの後裔に生まれた私が、無政府主義者と同棲することは、光輝ある山路家の家系を汚すものだ、今日限り勘當すると言つて來ました。しかし、私を幼さい時から虐げ盡した父は、あの數々の亂行で、藤原何とか卿の名譽を果して汚さなかつたでせうか。父は昔、私にくれた土產の菓子を女郎の口にさへ運びました。父は昔義妹と駈落ちする時、貧乏のどん底に捨てた私達二人の子供のことを、本當に考へたでせうか。子供の愛よりも義妹への肉慾が强かつたのです。親としての扶養の愛も義務も感ぜず、犬ころのやうに完全に捨て去つた私に對して、父は十三年の後、突然子に對する所有權親として現れ、唯單に父權だけを復活させて、寺の財產を目當てに、私の意にもない結婚を、獨斷で取り極めたではありませんか。例へ、他人に猫の子一匹やるにしても、先方が本當に欲しがつてゐるか、三味線胴に賣るつもりではないか、先方には惡太郎がゐて猫を虐める心配はないか、くらゐなことを考へるのが人情です。それに私は、父に對して唯所有慾の對象でしかなかつたのです。かういふ私には孝行なんていふことは、實感として少しも理解出來ません。私達の親子關係は、全く强者弱者の對立する關係以外のものではなかつたのです。そこに親子の道德とい

ふやうなものがあるでせうか。つまり強い者は、自分の行動の自由を擁護しながら、弱い者に服從を强ひるのです。こ關係を弱者から言へば、强者への屈從の約束です。そしてこの約束こそ世間の所謂道德です。かういふ道德が各時代を支配し、各社會を構成してをります。さうして支配者は、いつもこの道德を、より長く保つことを計畫してゐます。それにこの支配者の道德は、客觀的に法律といふもので擁護せられてゐるのです。事實私が存在してゐながら、無籍者であるといふ理由で、私の存在といふ現實を認めないのが法律であります。而も無籍者の責めは私にあるのではなく、親の怠慢と不誠意にありながら、その痛い矢を子が受けねばならぬとは、何といふ社會制度の缺陷でせう。法律は現實的な自然の事實を否認して、私を親の兄弟などとごまかして入籍させるほど疎構なものです。社會は責めなき幼い者を鞭打つほどに慘酷です。そこで私は、社會を呪ひ、自然を呪ひ、人間を呪ひ、出來る限りの破壞をやつて、自分をも破壞して死なうと思ふやうになりました。私が親族關係を中心として、今日のやうな思想を抱くやうになつた一端(たん)は、今まで申上げた通りであります。』

　蕗子はかなり鼻にかゝる抑揚(アクセント)の尠ない中音(テノル)で、決して流暢(りうちやう)とは言へぬ拮据な口調で、暗い生涯の發端を話し終ると、何處か氣の輕くなつた眼付をして、給仕のさつき置いて行つた冷たい茶を喫(の)んだ。僕は無論「調書」には書き取らせなかつたが、彼女の悲劇的な發端に、强く心を打たれながらも、こんな風に言はずにはゐられなかつた。

『なるほど、あなたの苦しい生ひ立ちについて、色々な場合と長い年月を想像すると、私にもその苦痛の實感が解るやうな氣がします。あなたの話はその意味で、非常に私の心を打つ。しかしそれほどの理性を育てて來たあなたが、唯自分のみの體驗に執して、濃い主觀だけで押すのはどうかと思ふ。事實あなたの兩親のやうな親もあらうが、また世間には、子の愛の爲には、喜んで犧牲とまでなる親もある。そのことが、あなたには客觀的に理解出來る筈だ。物事は凡ての點から、出來るだけ廣く、さま〴〵に考へた上で見なければ、本當のことは見えないものです。あなたは强者の都合のよい道

德に、弱者は服從するだけだといふが、弱者必ずしも、永久に弱者ではない。あなたのやうに、これまで物質的精神的に虐げられたものが、これから强者になる道は立派に開けて來るのだ。呪ひや破壞は、決してあなたの眞の復讐の道ではないと思ふ。この頃だん〱盛になる無產者の階級鬪爭など、まさしくその道を開くものではないか。』

『さうです。共產主義者は無產者獨裁の世界を戰ひ取つて、おのれの權力で、ブルヂョア階級を服從させようとするのです。そこに政治のある限り、依然として權力があり支配があります。私は個人の絕對的な自由を主張しますので、さうした權力を認めないのです。その證據に權力を破壞するのです。』

『さういふ物の言ひ方は、單に言葉のあやに過ぎないと思ふ。あなたが人間である以上、動物に對して、たとへば蠅や蚤に對して、あなたの權力を行使するではないか。あなたも私も日常の生活で、意識するとしないに拘らず、どんなに權力に支配せられてゐるか解らない。もし電氣の權力に從はなかつたら、たちどころに燒け死なねばならないし、蒸汽の權力に從はなかつたら、目的地に行くことも出來ない。このことは、たとへ理想的な社會が來ても變りはしない。あなた方は權力とか强權とか言ふと、頭から蛇蝎視するが、そこはよく、現實について考へ直して見なければならない。いつたいあなたは、上京後、どういふ思想團體に接近したのか。』

『私が始めて上京して、上野三橋で夕刊賣りをしてます頃、私に思想的な刺戟を與へてくれた三ッのものがありました。それは紋付を着て角帽を被つた佛教濟世軍と、タンバリンを持ち太鼓を叩くクリスト教救世軍と、もう一ッは、血を吐くやうな悲鳴を擧げる長髮の社會主義者の一團でありました。これらの團體は、私が夕刊を賣つてる傍で、よく宣傳演說をやりましたので、私はそれを立ち聞きしてゐるうちに、まづ救世軍に接しました。每夜三橋に來てキリストの道を說く救世軍の兵士に……或ひは士官だつたかも知れません……松田といふ若い男がありました。松田は私の生活振りに同情して、眞面目に私の爲に計つてくれました。私が元田新聞店を出て粉石鹼の夜店を出すやうになつたのも、湯島新花町に間

借りをすることが出來たのも、みんなこの男の世話になつたのです。或る時松田が「私は貴方に隣人の愛以上なものを感じ、いくら抑へても性愛になつてしまふ。私の信仰のぐらつくのが恐ろしいから、今日限り貴方と會はぬ。」と言ひました。しかし、松田に對して少しもそんな感情を持つてゐない私は、さうですか。それはお邪魔いたしました。いろ〳〵有難うございました。」と言つて別れました。私はその頃キリスト教にかなり接近したのですが、キリストが愛を說きながら、この男のやうに、私に對する僞りのない愛の實行をさへ阻まれるといふのは、何といふキリスト教の矛盾であらう、彼等は自分で作り上げた神といふ名前に縛られて、信仰の奴隷になつてゐる。人間は生地のまゝで愛もあり美もある筈なのに、それをかうして阻まねばならぬキリスト教は、虛僞の塊だと思ひまして、このこと以來クリスチヤンと別れました。その頃三橋でこつそり社會主義の宣傳演說をやつてゐる仲間は、本郷肴町の主義者堀木正次の一派だと解りましたので、私はまづその宣傳を聞き、貧しい財布をはたいて堀木の著書や雜誌を買つて讀み、かなり心を動かされましたので、たうとう堀木方に同居するやうに賴みに行きました。私は彼の理論の實行生活を見ようとして、同居を求めたのであります。しかし、こゝでも私の期待は裏切られました。彼は雜誌を出し、印刷所を經營してゐましたので、私は無論活字拾ひを條件として、同居したのでありますが、間もなく堀木が富豪の息子であることを知りました。堀木には元田舍藝者だつた內緣の妻があり、私生兒がありました。そしてその私生兒に、父たる堀木は、自分のことを兄さんと呼ばせてゐました。私が或る時その理由を、堀木の妹に訊ねましたら、こんな風な妻子のあることを世間で知られたら、社會主義者としての堀木の、出世の邪魔になるからだと言ひました。で、私にもこのことは祕密にしてくれと賴みました。

　而も堀木の所謂同志達は、寒い部屋で熱心に活字拾ひをしてゐるにも拘らず、堀木自身は二階の炬燵に寢そべつて、たまに校正するだけでしたが、唯それだけの仕事でも、忙しさうな不平顏でしてゐました。その家庭も彼の似而非主義者的な內幕と少しも違ひませんでした。彼の內緣の妻今津安子は、自分の身邊は光つた指環などで、いつもきちんと整へてゐるま

したが、子供は寒中でも、いつも水洟の出るやうな薄着をさせ、少しも主義者らしくない、にやけた青年と、何とか彼とかよく出歩いてゐました。或る時彼女の話を聞くと、主義に關する演說の爲、演壇に立つたなら「要するに現在の社會を破壞するにある」とさへ叫べば、必ず立會警官が中止を命じ、翌日の新聞には、今津安子が激越な演說をした爲、演說會は解散になつたといふ記事が載る、と申しました。それで私はかさね〴〵、主義者の賣名振りに愛想をつかしました。彼女はその頃、お米の拂ひに窮し、私の衣類を無斷で質に入れて、流してしまひました。私はその着物を惜むのではありませんが、冬に迫つて、私に必要な衣類であることを彼女はよく知りながら、少しも責任を感じてゐないこと、自分の都合の爲に、謂はば盜棒のやうなことをしておいて、私の防寒のことなんか、少しも意にかけない彼女を哀れみました。しかもこれが女流社會主義者として、堂々と演壇に立つ人なのですもの。呆れるではありませんか。」

「なるほど、あなたは收監せられてるから、世間のことは解らないが、堀木正次と言へば、最近恐喝罪で捕まつたダラ幹の一人だ。あの男は、以前から札付きのダラ幹で、反動右翼團體と「將來を誓つた」くらゐの人物だ。無論彼の發行してゐた雜誌からが、少しも本當の社會主義を宣傳してはゐなかつた。あなたが燃えるやうな初心な氣持で、主義の實踐を學ぶ爲、あんな男の所に飛び込んだのは、よく〳〵運が惡かつたのだ。一堀木正次の行動で、あなたから社會主義がそんなに非難せられるのは、主義の方で御免だと言ふだらう。」

僕は皮肉ではなく、彼女の狹い獨斷を反省させて見るやうに、そんなことを言ひ、續いて彼女のテロリズムが今の時代に全く誤つてゐる點を、色々の觀方から說明した。しかし、蕗子は容易に僕の理論は受け容れなかつた。

「いえ、お役人が何と仰やつても、私は私の主義思想の間違ひを、發見することは出來ません。一口に申せば私の思想、これに基く私の運動は生物の絶滅運動なのです。

親の愛といふ美名のもとに、私を蹂躙した兩親の權力、博愛の名に隱れて私を虐げた××社會の權力、私はこれがたま

らなく癪にさわります。地上に於ける、生きとして生けるものの凡ての間に、絶えず行はれる生きんが爲の闘爭、生きが爲の殺し合ひ、この社會的事實を見まして、私は地上の眞理は唯一つ、生物界に於ける弱肉強食、これが根本の法則であることを信じたのです。既に生の闘爭と優勝劣敗弱肉強食の眞理を認める以上、私にはどうしても理想主義者——クロポトキンもマルクスもラッサールも含めて——の仲間入りをして、無權力無支配の社會を建設するといふやうな、幸福な考へ方は出來ないのです。ですから、生物がこの地上から影をひそめぬ限り、以上の關係から權力は永久に終息しないで、權力者は公々然と、自分の權力の保持の爲に、弱者を虐げるのです。かうして私の過去が虐げられて來たのですから、私は權力を否定し強權に叛逆して、自分は元より人類の絶滅を期するこの運動を謀つて來たのです。それ故、私はいづれ××を投じて、自分の最後を遂げる意志でありましたが、その結果日本に××が起きようと起きまいと、少しも私の知つたことではなく、私はひたすら、自分の氣持さへ濟めば、それで滿足するのです。いづれにせよ、形を變へた新しい權力社會を建設するお手傳ひなんか、全く御免かふむりたいのです。」

粗末な漆塗りの机を挿んで、僕の正面にやゝ屈み腰に掛けた蕗子は、僕が彼女の理論の誤謬を指摘すればするほど、煙のやうに大きな一皮眼を瞠り、大きな兩手を親指だけ殘して、帶の間に突つ込みながら——彼女の手は、幼さい時からの酷使で、女の手として必要以上に大きかつた——確かな、強い口調で、またしても彼女の狂信に溺れ込んだ。その聲は常に何事かを僕に約束するやうに……………。

僕は「人類の絶滅運動」なんて、それが如何に馬鹿げた空想であり、彼女の眞理が如何に眼隠しをせられた馬車馬の眞理であるかを、蕗子にむかつて諄々と説いた。しかし僕はふと、僕の思想を押しつけたならば、彼女が却て眞實を語ることを忌避しはしないかと氣付いた。まだこの重大事件の、事實の取調べの少しも進まないうちに、彼女に事實を忌避せられてはならなかつた。僕はまだこんな職責をも全然忘れていゝほど、自由の身ではなかつたのだ。××××××。

だが、僕は路子の話を聞きながら、當時十七の、田舎から出たばかりの暗い少女が、苦學獨立をめざして、夕刊の呼賣りをしながら、キリスト敎や社會主義に、熱心に道を求めた小さな眞劍さを、描いて見ずにはゐられなかつた。而もこの少女の教師は路傍の無智な救世軍兵士であつたり、ゑたいの知れない主義ごろであつた。少女は彼等に、ものの一部を見ないで、全部を見ようと焦燥つた。いや、夙くから虐げられ盡したこの少女には、既に自分のものさしが出來てゐて、凡てをその尺度で計らうとしたのだ。彼女の悲慘な生ひ立ちは、彼女から、豊かに社會を觀るべき眼を奪ひ、その代り、彼女の實感にのみ即した鋭い錐を與へたのだ。で、彼女にとつては、一救世軍兵士が直ちにキリストでなければならなかつた。墮落した主義ごろは直ちにマルクスでなければならなかつた。もし彼女が田舎から出て來た當時、一通りものの解つたプロレタリヤの鬪士にでも接しることが出來たならば、——その頃はまだプロレタリヤ出の鬪士も尠なかつたが、——路子は決して今日のやうな誤謬には陷つてゐなかつただらう。東京に出て來た田舎娘が、淺草あたりでよく誘拐せられるやうに、僕には、上京した路子が、少しも本筋の人々に觸れることが出來ず、日陰の泥道で自分をいよ〳〵固めてしまつたその徑路が、それとしてよく解る氣がした。田舎新聞の雜報記者をさへ、その地方に行けば、ひとかどの文學者として尊敬してゐる少女達もある。それと同じ筆法で、路子は東京で怪しい社會主義者に接し、そしてそれを主義の眞髓として批判してゐたのだ。そのことの愚かしさは言ふまでもないが、唯彼女がさうした不幸な道しか與へられなかつたことを、僕は不愍にも思ひ、いじらしく感じて、如何にも同情を禁じ得ないのだ。

回を重ねて、高井路子を訊問するに從つて、僕は彼女が夫の佐谷と共に極めて矯激な計畫を立ててゐた事實を知り、日本の法律では、到底彼女の死刑は免れないと思つた。犯罪を構成した彼女の思想と行動が、法規上明かに死刑を決定する

ことが解ると、僕は彼女に對する自分の態度に就いて、傷ましい混迷を感ぜずにはゐられなかつた。始めのうち僕は、しばしば自分の「職責」を度外視して、彼女の思想の幼稚で古くて低調なことを批判し、もつと合理的な明るい考へ方に自覺させようと努力した。すると蕗子も、僕の思想を信じる氣にはならないが「あなたの思想」として理解は出來ると言ひ、「私のやうなものは或る機會から、一變した思想を持つやうになるかも知れませんが、今の所は今の考へを變へる氣にはなれません。佐谷もその氣性からして、到底官憲と妥協しないと信じます。」とも言つた。僕が彼女に說いたことは、およそ「官憲と妥協する」思想とは、まるで反對のものだつたが、僕が職權を持つてゐるといふことで、一徹な彼女は容易に僕を理解しようとしなかつた。だが、彼女の明確な陳述から、次第に死刑の可能性が濃くなつて來ると、僕は彼女に對して、積極的な說得を差し控へるやうになつた。いづれにしても死刑に極まつてゐる彼女なら、現在彼女が信じてゐる思想のままで死なせてやるのが、せめて彼女に「安息」を與へることではないか。如何に蕗子に狂信力があるとしても、思想として少しも體系の無い幼稚な彼女の考へは、もし僕が執拗にマルクス主義を說得すれば、必ず動搖するに違ひない。死を眼前にしたこの哀れな殉教者に、最後の動搖を與へて苦しめることが、果して何の役に立たう。たとへ、彼女が僕の說に「改心」したとしても、依然として彼女を待つてゐるものは死刑ではないか。いや、もつと悪いことは、如何に彼女が「改心」したにしても、國法は決して彼女を縊り殺すことを容赦しないのだ。さういふ性質の犯罪なのだ。もし僕が蕗子を說得して、彼女の思想を「轉換」させ、その結果この大罪人を死刑から免れしめたならば、僕もまた死刑に値する大罪人として、國法が決定するだらう。それほど磐石のやうに强い極刑が、壓倒的に待ちかまへてゐる彼女に向つて、徒らに思想的な動搖を與へることは、可憐な彼女を苦しめる以外の何ものにも値しないのであつた。

或る時彼女は言つた。

「私の上に科せられる刑罰は、私が强權に背を向けた時から、既に最重刑を覺悟してゐたのです。いえ、最重刑が見合せ

られてゐたのです。私のやつたことが、やらうとしたことが、あなた方の勝手に作り上げた法律とかいふものの、第何條とやらに該らうと該るまいと、そんなことぢやないんですわ。私は唯やりたいことを勝手にやつたらいゝんですわ。私の刑罰なんて、私が捕らへられた時から、ちやんと極まつてゐるぢやありませんか。それにも拘らず、かうして何度も何度も呼び出してお調べになるのは、全く御苦勞と申し上げていゝのかお氣の毒と申上げていゝのか、お役目がら本當に同情に堪へませんわ。私に最重刑を科す口實は、立派に存在してるのですから、それほどの御遠慮も入るまいと存じますがね。』

この蕗子の言葉は、全く事實を言ひ表してゐる。僕はよく彼女を調べてゐる時、どうせ死ぬ者に對して何の爲の訊問であらう、何の爲の御苦勞だらうと、みづからの空虚な感慨に陷ることが度々あつた。

で、僕は書記に書き取らせた蕗子の『訊問調書』を、彼女に讀んで聞かせ、その拇印を取る時が何より辛かつた。僕などの眼から見れば、謂はばわかげのいたりで思ひ詰めたやうな、馬鹿げきつた向見ずな危い藝當、それを洗ひざらひ得々と述べたてると、一方ではそれが大罪の烙印のやうな證據となつて、調書に書き取られて行く。而もそれを讀み聞かせると、蕗子は今の申立てを「相違なく」是認して、しつかりと拇印を押すのだ。僕はかうして、刻々或るものへと決定せられて行く彼女の姿を顧みて、調書を讀みながら、しば〳〵涙が出るのであつた。と、さすがに彼女も、自分の慘酷に虐げられた生ひ立ちを書いた調書には、自分がしみ〴〵と哀れになるらしく、中途で僕に、調書を讀むのを止めてくれと、泣き伏せつたこともあつた。

蕗子は爆彈の入手について、同志との破綻などを、こんな風に話した。

『私は目的遂行までのいろ〳〵の便利から、新橋の無政府主義者谷崎おでん屋の店を手傳つたことがあります。日比谷の議會開會中、目的を果すつもりで、その頃おでん屋に來た政治ごろから、委しく議會の內部の模樣を聞き、また××の書いた「帝國議會」といふ本から、議會の圖面を二枚剝ぎ取つて所持してをりました。佐谷も私と同棲する以前から、そんな

ことを計畫してゐたさうです。私と佐谷とは同棲に際して、互に以前の祕密を告白し合ひました。ですから、私と佐谷の間に祕密はありません。佐谷に宛てて來た手紙は私が、私宛の手紙は佐谷が開封して讀むくらゐでした。

そこで私達は、目的遂行まで官憲を欺瞞する爲と、一つは廣告に依つて資金を調達する爲に、極めて溫健な形式的な雜誌「黑曜星」を發行してゐたのです。私達夫妻が、張榮漢を知つたのは、この雜誌の第三號の編輯會議の時でした。彼と交際してゐるうちに、その人物が割合にしつかりしてゐるやうに見えましたので、大正十二年五月頃、私と佐谷とよく〳〵相談の上、張榮漢に上海から××を手に入れて來てくれるやう頼んだのであります。しかし、私達がそれを頼んだのは、張一人ではありません。まづその準備行動として、昨年三月中、支那にゐる同志金田大市に宛て、暗號手紙を送つたことがありました。」

「その手帳に書いてある暗號はどういふ風に譯すか。」

『Aは東京、Bは大阪、Cは京都です。AAは上海、BBは廣東、CCは京城です。イロハ、は凡て數字を意味します。イは8を、ロは11を、ハは13を、ニ、ホは同じく13を表すことになつてゐます。尙全國的なことにはCを加へ、支那のことにSを、朝鮮のことにはRを加へます。金田に宛てた手紙は佐谷が認めましたから、私はその內容の詳しいことは知りませんが、その封書の宛名は私が書きました。差出人の名前は、李某と支那人の女の名前を書きました。で封筒も殊更、女の使ふやうな桃色の日本封筒を用ゐました。同じ依賴の手紙は三度出しましたが、私は他に一枚その封筒を書きくづしたのです。今度私達が檢擧せられた時、警視廳の×××共は、その殘りの封筒には氣付かずに、私達を咬へて行きました。で、その封筒はまだ、私の机の硯箱の下に殘つてる筈です。名宛先の金田は、その手紙を受け取つてから、それを、上海の宋某に渡す手筈であつたのです。當時佐谷は、その手紙を自分の上衣のポケットに置き忘れ、私の家の壁に掛けておきました。すると、勞友會の土本秋人が遊びに來て、そのポケットから手紙を取り出しました。その手紙には數字など書き連

ね、女の封筒に這入つてゐるので、土本はてつきり、佐谷の情婦から來た手紙と思つたのですか、私に向いて、高井さん、佐谷君はこんな手紙を持つてるから、用心なさいと申しましたので、私は內心非常に驚いたのですが、全く情婦の手紙のやうに裝ひ、さうですか、まア見せて下さいつて、それを土本から奪ひ取つて、さも憤慨したやうに破つてしまつたこともあります。

話は前に戻りますが、昨年一月勞友會員木暮三造が、その頃朝鮮京城にゐた無政府主義者張榮漢を、私達に紹介すると言つてゐましたが、そのうち張榮漢から、私達宛に手紙が來ました。その內容は主に思想的な立場を書いたものでしたが、隨分理解の屆いた手紙なので、私と佐谷とは張をかなり尊敬しました。すると昨年の四月二十日に張が、入學してゐた朝鮮の學校を退學して來たと言つて、私達の編輯會議へ顏を出しました。その時始めて張を知つて、交際し始めたのですが、さきほど申しましたやうに、張はかなり理解ある上に、人物もなか〱しつかりしてゐましたので、私達は目的遂行のことを始終話し合ひ、その機會を狙つてゐました。その頃佐谷は自分で上海へ出かけて、××を取つて來ようかと言ひましたが、佐谷自身では、すぐ官憲に看破られる虞れがあり、いつそ私が取りに行かうと言ひますと、女は尙人の眼に立つといふので、私達は誰かこのことを賴むに適はしい、しつかりした人を物色してゐました。しかし、私の家に出入りする同志の中には、これほどの祕密を賴むに足りる人物は一人もゐなかつたのです。その矢先へ張を發見したものですから、私達夫婦は非常に喜んだわけです。張ならば大丈夫だらうと私が言ひますと、佐谷もそれを肯定しました。

その後二月も經つた頃、佐谷が私に、上海行のことを張に賴んだら、秋までには必ず入手して歸るが、その費用が千圓はかゝると言つたと申しました。

で、私はその時始めて、佐谷がいよ〱張に賴んだ次第を知つたのです。だが、だん〱張と往復して、彼の樣子を見るのに、どうも賣名的な所や、賴りない性質がちら〱見えますので、これでは發覺の虞れがありはしないかと、私は懸

念したのです。それで佐谷と相談の上、張に對する依頼は、ひとまづ斷ることに決しました。しかし、それを斷るにも、張の感情を害しては、わけなく發覺の危險がありますので、私と佐谷とはその策戰に苦心しました。ところが、佐谷は御存じの通りの無口な人ですから、いつか私の不在中に、極めてへたに斷つてしまつたのです。すると張は、佐谷が眞實そんな意志も無くしてそれを依頼し、メンタルテストでも受けて愚弄せられたやうに誤解したのです。その結果、私の家で催した黒星社の例會の際、張が佐谷に斬りつけるといふやうな騒ぎが起つたのです。思へばそれが、私達の檢擧せられた原因になつたわけです。」

蕗子はそのことが、まるで現實に起つたことではなかつたやうに、夢の中の悔恨でも語るやうな、靜かに曇つた聲で言つた。すると割りに厚い彼女の上唇が、蠟燭の焔のやうに微かに搖れた。彼女は涙を怺えようと早く早く瞬いた。しかし、それは遂に怺えきれずに流れ出した。こんな風に、彼女はひとりで何かに感動して來ると、丁度背後から誰かが彼女の膝を突きでもしたやうに、椅子の上に腰を下した。だが、いつまでもそこに工合のいゝ位置を見出し得ないやうに、彼女は椅子の上で尻を動かし、眼を袖で覆ふのであつた。勝氣な彼女は何故か、このことを語りかけて、暫くの間絶望的に泣いた。彼女の思ひもまた涙のやうに辛く苦いに違ひなかつた。

『黒星社の例會の騒ぎをお話しする前に、佐谷と張との心理的な破綻を申し上げねばなりません。張は佐谷から、上海行の重大な使命を斷られてから、事毎に佐谷に反感を持つやうになり、さきに上海行を依頼した時は、明かにそれを引き受けながら、一旦斷られたとなると、さういふことを依頼した佐谷や私の思想にさへ、非難の眼を向けるやうになりました。かういふ矢先へ、今度の發覺の原因となつた石山春代が表れたのであります。そも〳〵石山春代は、私が谷崎おでん屋から、正則英語學校に通學してゐた頃、同學校に通學してゐた女生徒の一人だつたのです。私は一昨年の夏頃まで、石山と手紙の往復をしてゐましたが、その後はふつつり緣が切れてゐたのです。佐谷と同棲してから、私は石山の話をし

て、彼女は文學方面から無政府主義に這入つた、しつかりした女だから、會つて見ては、と言ひますと、佐谷もそのうち會つて見ようと言つてをりました。すると丁度昨年の五月頃、石山が突然私達の不在中に訪ねて來まして、置き手紙をして歸りました。そんなことから、私は再び石山と往復するやうになりました。そのうち彼女も私達の黒星社に加入することになりましたが、彼女は同志の中でも、特に張栄漢とよく氣が合ふやうでした。いつか二人の間には、確かに戀愛關係が成立したやうに、私達には見えて來ました。張は佐谷から上海行の使命を斷られてからは、黒星社の同人でありながら、別に朝鮮の同志を糾合して、雜誌「人參」を計畫しました。石山春代がその計畫を佐谷に話しましたが、雜誌の目標が判然しないのと、あまりに文學的で、運動の實際方面に役立たないといふ理由から、佐谷は石山に向つて、張の計畫に參じることを警戒したのでした。その時は、石山もまだ張に對して積極的ではなかつたと見えて、佐谷の警告に快く同意しました。私は石山がなか〳〵しつかりしてゐると見ましたので、佐谷に、私達の秘密計畫のことを彼女に話さうかと相談しますと、佐谷は、張に斷つた同じ事實を、張と親交のある石山には、言はない方がいゝと言つたくらゐです。だから私は、捕まつた石山が、佐谷と私のこの計畫について、直接佐谷から聞いたと言つて陳述してゐるやうなことは、佐谷自身、彼女に決して言はなかつたと思ひます。石山は張との戀愛關係が進むに從つて、だん〳〵張の言ふことを信じ、張と共に私達に對する誤解を深めて行つたものと思はれます。

さて私達の家の黒星社の第五次例會は、昨年の七月十七日の夜でありましたが、その前の晩に、尾久の同友會の臨時總會が催されたのです。張は色々の誤解から、佐谷に喧嘩を吹きかける爲、短刀を懷中にして、佐谷の出席を待つたのですけれど、生憎そちらの總會の通知狀が、私方に延着したので、私も佐谷も出席することが出來なかつたのです。それで、その翌日の夜、張と石山は他の同志をかたらつて、すつかり前晩と同じ覺悟で、私方の例會にやつて來たのでした。

例會ですから、大した議題もなくすら〳〵と二時間くらゐのうちに無事に終りました。すると張は、會の終るのを待ち

かまへてゐたやうに、佐谷に向いて、「君に少し忠告することがある」と急に蒼ざめた顏で、改まつて言ひ出しました。君は卑怯だ、野心家だ。君は難局に當ることを自分で巧みに避け、僕達の生命を傀儡に使はうとするのだと言ひました。また石山春代は佐谷に向いて、あなたは張のことを、よく氣の變る男だと言つたが、氣の變つたのは張でなくて、あなただらうと皮肉を言ひ、私に向いては、私が若い朝鮮の同志を、まるで書生のやうに使ふと申しました。そのあと、二三の同志が何か言つた時、背の高い張は、大きな聲で佐谷に、君は××の入手方を僕に頼んでおきながら、今では恐ろしくなつて、自分が尻込みしたくせに、却て僕を頼むに足りないやうに吹聽した卑怯者だと言ひながら、ひらりと私達に背を向けて、短刀を拔かうとする氣勢を見せました。すると石山が「まだ早い！」と、いきなり立つて行つて、張の手を押さへました。佐谷は少しも騷がず、じつとしてましたが、その顏には非常に困つた表情が見えました。佐谷は、張が激してこれほどの祕密を多數の面前で言ひましたので、確かに弱つたのです。佐谷は落ちついて、他の話に反らすやうに、「あ、そのことかね、それはあとで二人で相談に行かう。」といふやうな、全く違つた話のやうにみんなの前をごまかして、張の口をすぐ押さへました。と、さすがに張も、同志的な良心が働いたのですか、その話はそれきりにしました。しかし彼は話を變へて、佐谷の關係してゐる勞働組合と、李大洋の勞働組合の誤解が、佐谷の輕蔑から生じたことを言つて、張は今の胸が納まらないやうに、今度は本當に短刀を拔き、二階の疊を二尺ばかり切りました。この騷ぎは午前一時頃のことでしたから、私は近所の迷惑が氣の毒になりまして、思はず大きな聲を上げ、「喧嘩をしに來たのなら、そこの代々木の原に行きなさい！」と申しました。私は組合の誤解のことよりも、今し方張がみんなの前で、口輕く上海行の重大な祕密を漏らしかけた態度に、肚を立ててゐましたので、つい激して叫んだのでありますが、あとですぐ、他の若い同志や石山春代が、何か勘づきはしなかつたかと、みんなの顏を見渡しました。私と佐谷とは、豫てから、私達の計畫が發覺したら、どちらか一人でその責めを負つて置き、殘りの一人が飽くまで同じ計畫を實行しようと約束してゐました。それで佐谷と相談の

上、張や石山に對して、私は××入手のことは全然預り知らない風を裝つてゐたのです。それにも拘らず、私の激昂した一言がその場にゐた若い同志達に、とにかく彼等の知らない祕密を私が持つてゐるやう、推測させたかも知れなかつたのです。私は思ひがけない失敗をしたやうな心持で後悔しました。しかしその夜は、張達の憤慨も、佐谷の思想的な立場の説明でやゝ納まりまして、私と石山は私方の女關二疊の間に、栗木佐谷等が階下四疊半に、張達が二階に泊りました。一ツは電車も何も無くなつたので泊つたのです。翌朝私はわざ〳〵石山を原宿驛に送つて見ましたが、石山の口振りでは、私がこの計畫に關係してることを氣付かない樣子でしたから、私もほツと安心しました。私は彼女を見送る際、なるべく石山が××のことを言ひ出さないやうに話を避けてゐましたが、彼女は神宮橋の近所に來た時私に向つて、「張はね、上海から××を持つて來るやうに、佐谷さんから頼まれたをり、僕はこの秋決行して死ぬ氣持はないと言つて、佐谷さんに斷つたんですつて。」と、そんなことを言ひ出しました。石山の肚では、私が××の計畫に關係してゐない、從つて私がそんな計畫を知らないと思つて、ひそかに告口するつもりで、私にさう言つたやうでした。で、私も「あら、さう」と如何にも意外のやうに、そのことは、さう言つて話を變へようとしましたが、石山はおつかけおつかけ、佐谷が、張と石山の計畫した雜誌の邪魔をして、ふたりの間を裂かうとしたとか、また石山が思想上行き詰つて自殺しようと思ふと佐谷に話したら、佐谷は彼女に、どうせ死ぬなら、僕もこの秋死なうと思つてるから、もつと有意義に死んではどうかと、氣を引くやうなことを言つておきながら、張に一度頼んだ××入手のことを取消すくらゐだから、佐谷にはこの秋決行する氣はないのだとか、佐谷は人種的な偏見で張をいつも侮辱してるとか、さん〴〵佐谷をこきおろしました。で私は石山に、あなたが本當に佐谷を理解する氣があるなら、佐谷がそんな男で無いことを知るだらうと答へました。黑星社の例會の夜は、ざつとこんな樣子でしたが、あれほど張の肩を持ち、張に心醉してゐた石山が、黑星社の他の若い同志と、戀愛的な醜行があつたとは信じられません。石山には唯、佐谷に對する張の反感に共鳴して、張から聞いてゐる重大な祕密計畫を他に漏らすかも

知れない、さういふ虞れはありましたが、一方張も一度關係しかけた計畫ですから、石山春代は愛人の爲に十分警戒して口外しないだらうといふ自信もありました。さういふ矢先、朝鮮の同志の張の友人××丸の船員鄭成達が、突然三個の××を持つて上陸したのです。私達はやゝ發覺の虞れを豫感してゐましたので、丁度議會の開會せられるを幸、急いで事を決行したのであります。」

僕が高井露子から、こんな陳述を聞いた夕方、——それは三月始めの雨の日であつた——露子を付添ひの看守に渡して×××刑務所に歸してから、調室を出て食堂に行くと、五六人の同僚が暖爐をかこんで、一枚の號外に、好奇的なしかし冷たい視線を投げてゐた。號外は大きな見出しで「關東關西を跨にかけた戰慄すべき××事件」と題し、獰猛な無政府主義者五人組の、恐るべき陰謀發覺を書いてゐた。

「いよ〳〵記事を解禁したんですね。」

僕は暖爐の向うにゐるこの事件の係り判事Rの顏を見た。

「えゝ、世間もこれには、文字通り戰慄するでせう。」

二三日髮剃りを當てないRの口は大きく開いて、ちよつと得意さうに微笑んだ。

去年の七月の暑い夜、谷中の共同便所に何者か××を投げて、世間を騷がせたと思ふ間もなく、それから十日ばかりして今度は青山墓地を×破したものがあり、さらに九月三日は本富士署の小使部屋に××を仕掛けた事件となり、同じ六日には代々木の軍事參議官F大將の邸に包送の××を送つて×裂させ、その二日後には引續き銀座尾張町の電車線路に、××が仕掛けてあつた。僅か短時日の間に起つたこの未曾有な恐怖は、それでなくとも震災で痛んだ市民の心を震撼させ

た。五人のテロリストが捕まつてから、それはみんな彼等の計畫だつたことが解つた。而もその××は、郊外の小さな長屋で彼等自身、夜な夜な製造したもので、その效力試驗の爲に墓地や便所に仕掛けたのであつた。

『F大將邸に屆いた小包は油紙包みでしてね、大將の令孃Y大尉夫人が、奥の六疊の間に持つて行つて紐を解き始めたんです。すると、へんな臭ひがして、中から意外にも白煙が立ち昇る、夫人がびつくりして廊下に駈け出し、臺所に來た時、轟然大音響で爆裂し、危く火事になるところだつたのですよ。小包の中を結へた紐は、紐と見せかけた導火線で、それを解くとすぐ發火するやうに、實に巧妙に仕掛けてあつたのです。何しろ學問のある連中ですから、××についても一通り研究して作つたんですね。』

R判事がさう言ふと、ひとしきりその號外を中心に、いろ〳〵の話が花咲いた。

『ねえ、Y君、震災後續々と起る不祥事件はどうです。虎の門事件、朴烈事件、二重橋事件、天滿署爆破事件、又この五人の大がかりな爆彈事件、それにあなたの審理中の議會事件など、數へ立てると十指を屈するぢやありませんか。而もそれが殆んどみなテロの活動ですね。この狀態はまだ〳〵續きますぜ。』

『いや、もうかれこれ終りでせう。』と、僕は判事Rに答へた。R判事は僕の思想傾向が、彼のそれよりも全く反對であることを、日頃から察してゐたので、今彼の竝べ立てた事件に、何か僕の責任でも問ふやうな口調だつた。『震災後の急激な大資本主義の發達は、對蹠的に無產者の組合運動、政治運動を盛んにしてゐます。つまり社會運動も現實的な實行時代に這入つたのですね。かうなると、空想的な無政府主義者や虛無主義者は、根本的な自覺から改宗でもしない限り、自滅の外はないんですね。しかし血氣に逸るテロの連中は、そこまでリアルに社會を見直す頭を持たないですよ。だから、頻々と起つた不祥事は、みんな彼等の「空想の破產」です。壁に頭を打つつける狂人共です。彼等は爆彈と共に淸算されつゝあるのですね。實踐的な社會運動が、空想主義者を塡ノ浦に追ひ詰めてゐるのです。ですから彼等は頻々と孤獨な事件を起し

て、自滅を急いでゐるわけです。私の取り調べてゐる高井蕗子なども、かうした「無智な戰士」に過ぎません。考へると、かはいさうな時代的犧牲者ですよ。」

『高井蕗子も死刑は免れないのでせう。刑務所では評判がいゝやうですね。』と一番若いN判事が言つた。

『えゝ、謹嚴で正確で、反則など一度も無いと言つて、係りの老看守も感心してゐます。獄中では同志の洗濯ものをしてやつて、みんなから有難がられてますよ。便所や部屋の掃除など、まめ〱しく働いてます。非常に潔癖で掃除好きの女ですね。同志と言つても、彼女の仲間ばかりでなく、コンミユニストのサルマタまで、洗つてやつてるといふ話です。』

『それに蕗子が美人と來てるから、刑務所のうけは佳いゝわけですな。佐谷との夫婦仲も、實に睦じかつたさうぢやありませんか。亭主と同じ刑務所にゐるんだから、少しは會はせておやんなさい。さうでもしなきやア、Yさん、あんまり罪ですよ。ハッハッハ。』

『それを思ふと、餘計に蕗子の取調べが苦しくなるんです。二人ともギロチンなら、せめて同じ場所で死にたいでせうね。昔はさういふ所刑もしたんだが……。』

僕はN判事にさう言ひながら、佐谷と蕗子が始めて同棲した時、間貸しをした菓子屋の内儀さんの話を思ひ出した。證人として召ばれた内儀さんは言つた。「蕗子さんの亭主思ひには、いつも感心しました。夜更けの雪の降る中を、遠い停車場まで迎へに行つて、二時間も三時間も待つてることが、度々ありました。蕗子さんは、子供の時分朝鮮の伯母さんの家に行つてる頃、そこが辛くて、何度鐵道自殺を思ひ立つたか知れないと、口癖のやうに言つてゐました。」

僕は蕗子の夫をも取調べてゐるが、彼女は佐谷よりも、より眞摯であり、より驀進的だ。佐谷が散文的で、突發的で狂人じみてゐるに反し、蕗子の陳述は終始一貫、自分の信念を追つて行く。彼女の澄んだ眼が、底暗く輝き始めると、彼女は理路整然と極めて過激な陳述をするのだ。僕は何ものも恐れないその陳述を、屢々不思議に思ひながら、それが彼女の

月例的な生理的異狀に基くものではないかと、長い時日の間には、僕も氣をつけて觀察し、彼女にもそれをしば〳〵訊いたが、彼女はいつも、肉體的な變化から、陳述がまち〳〵になるほど、自分の考へにすきは無いのだと答へた。僕はかつて、死の待つてゐる彼女の安息の爲に、たとへ誤つたイデイオロギーでも、現在彼女の信じてゐるまゝを信じさせて、死へ送るのが、彼女の幸福ではないかと考へたこともあつた。それ故に、彼女の信念を打ち壞すやうな積極的な說明は、思ひ止まつたこともあつた。しかし、僕もまた彼女と大差ない激情家であつた。彼女が誤まつたイデオロギーを突つ張つて來ると、僕はその馬鹿々々しさに我慢がならず、マルキシズムの立場から、遂に彼女と激論を戰はすやうなことがあつた。彼女の信念を唯物辨證法の秤に懸けずにはゐられなかつた。そんな場合、僕は立會の書記に、調書を書き取る筆をおかせ、長い時間「職責」を離れて、彼女をつい、追窮してゐた。

『……………よろしい。ぢやア君のやうな無政府主義者は、今の共產主義者とさへ鬪爭を辭さないといふのだな。君に言はせれば共產主義もまた、多數の少數に對する專制に過ぎないと言ふんだらう。さうだ。大きにその通りだ。だが、よく考へて見たまへ、多數は少數に對して、自己の欲望を課する何等の權力を有してゐないだらうかね。もしこれが眞實であるならば、君達はどんな道德的原理で、あんなにまでブルジョアジーに反抗したんだらう？　なるほど學者達も言ふやうに、この二ツの思想は、究極の目的において一致してゐるに違ひない。だからもし君達が、將來の社會組織は、生產の諸關係に依る不可抗的な限界のうちにおいてのみ、權力を許すだらうといふやうな意味で、權力を否定するならば、僕も異議は無い筈だ。しかし、君達は權力を必然的ならしめる凡ての現實に對して全く盲目的で、唯權力といふ言葉に對してだけ、激情的なんだからお話にならない。見たまへ、權力の最も必要な例は、大洋航路の船だ。すは暴風雨だ難破だといふ時に、乘客の全生命は、船員の意志に、船長の意志に、絕對的に服從するではないか。××！　××くらゐ權力の維持を要するものはない。巴里コンミユンだつて、あれにもつと權力があつたなら、僅か二ケ月くらゐでブルジョアに政權を横取

りされはしなかつたんだ。後世の××家は、寧ろ巴里コンミユンに權力の無かつたことこそ嘆いてゐるではないか。それに君達は××の名に隱れて、反動の原因となる役割を演じ、最高道徳の名に於て、最も不道徳な行爲を是認し、個人の自由を標榜して、周圍の凡ての權利を蹂躙する。これが現に、君達のやつて來たことではないか。現にかうして捕らへられた原因ではないか。もし或る狂人が、彼が欲するといふ理由で、彼の好むに任せて多くの人々を殺害したならば、個人の大多數の集合である社會は、氣紛れからではなく、その義務として、彼を正氣付けることに努めねばならない。これこそ社會の存在する爲の缺くべからざる條件なのだ。だから、僕がこれまで、色んな方面から君に忠告するやうな理由で、君は君のやうな考へを持つことを、罷めることは出來ないか。いや、その考へを發展させ、轉換させることは出來ないか。』

『え、、………私のやうな者は、或る機會から一變した思想を持つやうになるかも知れませんが、』と彼女は、あの煙のやうな大きな眼に深い喘ぎを表した。彼女を說得しようとする僕の誠意と熱心には感情的に動かされても、彼女の理性は、僕を容れることが出來ないのだ。さうした苦痛の中にも、彼女は強い口調で、少しも僕に同意しない言葉を投げつけた。『しかし、今のところは、今の考へを變へる氣にはなれません。佐谷もその氣性からして、到底官憲と妥協しないと信じます。私は先日刑務所で、山田憲の信仰のことにつき、眞田幸丸の著「信に生きた人」を讀んで感じました。山田憲は國法を犯して、鈴木某を殺したのですが、人を殺すことを禁じてゐる國家が、山田憲を死刑にして、同じ犯罪を繰り返してゐます。私達が石山と張を輕信した結果、かうして捕らはれの身となつたことは、如何にも私達の落度でしたけれど、私がこのやうな考へを持つやうになりましたのは、私の親と國家社會とが、現在のこんな私を作つたからであります。

私はどんな刑を受けるか大抵知つてゐますが、それは私の親と國家とが、私に分け與へたものを刑として、私が受けるだけのことです。私は今といふ時に於ける第一の慾望を滿すことを以て、自分の生きる眞の人生の意義であると思つてをります。それ故、現在の私の反逆的慾望より以上に、私を引きつける何ものかがあつたなら、私はいつでもこの慾望に從

ひます。」

彼女は最後に、僕に對して氣の毒になつたやうに、言葉の上で、僕を多少受け容れる形式を取つたが、それはどこまでも彼女の感情のあやであつた。僕は涙で忠告し、彼女は涙で僕の忠告を依然拒むのであつた。

かうして訊問の回數が重なつて行くほど、僕と蕗子は劍尖に火花を散らし合ふやうな苦痛を感じずにゐられなかつた。僕の好意が、彼女に反影すればするほど、彼女は感情で動かされてはならぬと思ふのか、一層その狂信に執して、僕の説得を彈き返した。

「何度も訊くやうだが、君は女としての身體の都合上興奮して、前回のやうな矯激な申立てをしたのぢやないか。」

「いえ、そんな馬鹿なことはありません。」

「ぢやア、君の家系に精神病者がありましたか。」

「精神病者はありませんが、私の母方の祖父は癲癇が持病で、一昨々年癲癇を起して死にました。では、私の申上げることが、精神病患者の譫言だと仰やるのですか。お役人のさういふ御推量には、唯々恐れ入るの外はございませんね。」

蕗子はさう言つて、僕の好意を一笑に付したこともあつた。

虛無主義者の蕗子が、水と油のやうなマルキシスト團體の義勇團の朝宗睦と提携したことについて、僕が彼女の思想的立場の曖昧を難じると、彼女はたちどころに明快な卽答を與へた。

「既に檢擧せられた義勇團は、朝鮮の××を期する祕密團體であり、朝宗睦が共産主義者であることは仰せの通りです。しかし、共産主義者は「手段」として民族の××運動を是認してゐますから、朝宗睦は義勇團に這入つてゐたのです。それと同じやうに、私達は虛無主義者ですけれど、義勇團が權力に叛逆して、××を使用することに共鳴してゐるので、互に利用する意味で提携したのでした。義勇團の使用する××は、殺人用、建設物破壞用等幾通りもありますが、私達は主に

殺人用の分を、義勇團から分けてもらふことになつてをりました。』

『佐谷は大正十一年一月頃、朝宗睦と××入手のことを相談したと陳述してゐるが、君はそれを知つてゐましたか。』

『存じません。私は今が初耳です。大正十一年一月と言へば、私と佐谷の同棲以前のことですから、私の知る筈がありません。』

『佐谷は君に對し、朝宗睦との關係を話したことはないか。』

『一度も聞いてゐません。佐谷は日頃、道を歩く時にも、××のことを考へ込んでゐて、途中にどんな店があつたか、どんなものに出合つたか、まるで氣付かぬくらゐだと言ひますから、恐らく朝宗睦にもその頃そんな相談をしたことがあるのでせう。××使用に對する佐谷のこんな熱心と私の熱心には、少しの違ひもありません。』

『だが君には、君の考へに對する僕の批判がよく解つてゐる筈だ。僕は何も君を國粹黨に改めさせようといふのでもなし、また君に對して××××を振り廻したこともない。もし僕が、そんな忠告をするならば、君が憤つくのも當然だと思ふ。しかし、僕は、君自身の今抱いてる思想を、そのまゝ發展させてくれと言つてゐるのだ。君の爲に、いや君だけではない、君のやうな被壓迫階級にある多數の人々の爲に、君の禍を變じて福としてやる氣はないか。君が幼さい時から、苦勞の限りを盡して、折角これまで漕ぎつけて來た體驗が、現在君の抱いてゐるやうな、單に個人的な矯激な思想に終るとすれば、君は唯社會の反動化を助成したやうな結果になるではないか。僕はまたしても、君に轉換を勸めずにはゐられないよ。』

『御忠告は、いつも有難いと思つてをります。しかし私は今更改めねばならぬやうなことを、斷じてしてをりません。なるほど私の思想や行動計畫は、他人の迷惑になるから惡いとも言へませうが、でも同時にそれは私を利するものなのです。自分の爲に計ることは、決して惡では無く、却てそれは人間の本性であり、生きることの條件であります。もし自分の爲

に計ることが惡であるならば、その責任は人間自體にあり、「生きること」にあります。私にとつて自分を利することは卽ち善であり、自分を不利にすることのみが惡なのです。

しかし私は、善なりと信ずる故に、あんな計畫を行つて來たのではありません。したいからして來たに過ぎないのです。他人が惡なりと、どのやうに非難しようとも、自分の道を枉げ得ないと同時に、お役人が善なりとして、如何にあなたの思想で煽てて下さつても、自分が轉換したくなければ、これは致方ありません。私は今後も、したいことをして行きます。そのしたいことが何であるか、無論今から豫定は出來ませんが、とにかく私の生命が地上にあらん限りは、「今」といふ時に於ける最も「したいこと」から「したいこと」を追つて、行動することは確かです。ですから官憲は、かういふ私を生かしてはおけないわけなのです。』

蕗子がかうした陳述をして幾日か經つたあと、僕が彼女の夫佐谷の取調べの爲に、×××刑務所に出張すると、蕗子を受持つ老看守が二階の事務所に、突然私を探しに來た。

『高井蕗子が、是非今日御面會したいと申してをりますが。』

『え、どんな用件で。』

その日は蕗子を調べる豫定にもなつてゐないし、また曾て、彼女から進んで、僕に面會を求めたことはなかつたので、僕はすべての注意を老看守の顏に集めながら訊いた。

『はい、何でも、前回の調書を至急訂正してもらひたいと言つてをりますが。』

『さうかね。それぢやア、すぐに合はう。』

僕はかなり興奮して、老看守が少し驚いたくらゐ、思はず聲に力が這入つた。蕗子はいくらか僕の思想を受け容れたのかも知れない。彼女が現在の暗い狂想を、少しでも明るい合理的な考へに轉換するならば、如何に大罪を犯したとは言へ、

まだうら若い女性である彼女は、或ひは萬一死刑を免れるかも知れないのだ。さういふ期待を持つて、僕は急いで彼女に合つた。

だが、彼女は言つた。

『この前私は、帝國議會を××して、ブルジョア議員共を、何匹か××××たと申し上げて、御注意を受けましたが、なるほど、その何匹といふ言葉は、如何にも汚い醜い言葉であると氣付きました。既に私の國家觀を申上げ、議會に對する私達の計畫を申上げた以上、殊更殺傷した議員に、敬語を用ゐる必要もありませんが、また殊更罵倒する必要もありません。罵倒は却て私の立場を醜くするものであると思ひました。で、この前の調書に、××を投げた對象が、議員何匹であつたといふあの陋ろしい言葉を訂正したいと思ひまして、かうして判事さんに面會を求めた次第です。』

『何だ!』と僕は怒るやうに叫んだ。用語を氣にするのは、如何にも女らしいが、折角來て見れば僕の期待に反して、彼女はやはり自分の思想に根强く執して、寸毫も改めようとはしてゐないのだ。『僕はね。君に面會を求められたので、勇んで來たんだ。君の自覺を豫期してね。でも、やはり君は、唯用語を訂正するだけですか!』

『さうです。それだけです。わざ〳〵お呼び立てして濟みませんでした……。』

僕はじつと彼女の顔を見たまゝ、何も言ひ出す言葉が無かつた。蕗子も默つたまゝ、僕の同情を退ける努力を續けてゐた。それは如何にも脊椎骨まで痛むやうな苦い、悲しい顔だつた。しかし、その努力にも拘はらず、彼女の頰を生きもののやうな一滴の蟲が匍つた。

『ね、蕗子さん。』と僕は遂に言はざるを得なかつた。『これまで長い間の、あなたの申立てを綜合すると、あなたの所信は、或ひは刑法百二十九條の殺人罪、刑法二百六十條の建造物損壞罪、それに爆發物取締罰則の第一條などに該るかのやうに思はれるが、これまでの申立てに相違はないかね。いや、訂正する箇所はないかね。用語だけの訂正でなく、もつと

もつと根本的に訂正することはないかね。』

『いゝえ、斷じて訂正することはありません。私の上に覆ひ被さる最重刑は、私が强權に背中を向けた瞬間から、既に決定してゐたのです。今更、法律の第何條に該らうと、そんなことは不思議でも何でもないのです。あなた方の勝手にこしらへた法律は、勝手に使へばいゝのです。あなた方は、私に最重刑を科する口實を、長いことかゝつて求めて來たに過ぎないのです。私にはこの肉體が死ぬか生きるかは、少しも問題ぢやありません。私のこの身體は、强權に復讐する爲にのみ、生きる意義を認め得るのです。』

『もし、さうなつた場合、辯護士について、何か希望がありますか。』

『いゝえ、ありません。自分の確固とした意志を持つてしたことについて、他人から辯護してもらふ餘地も必要もありません。私は芝居がゝりの愁嘆場など、大きらひですから、辯護士は一切御斷りします。』

　路子はきつぱりとさう言つた。彼女は重い思慮を要すべき時でも、一種の狂熱的な陶醉から、夏の蟲のやうに身輕に火の中に飛び込まうとした。

『まア、君、辯護士のことは、』と路子係りの老看守は、周圍の同情をすつかり汲み干してしまつたほどに、それほど頑張つてゐる彼女を、僕の前では、まだ辛抱强く扱つて見るやうに、窒しく空氣を切るやうな手付で宥めながら『今そんなに判事さんに斷らなくても、あとでゆつくり熟考する方がよくはないかね。』

『さうだ。それはまだ先のことだから、よく考へて見たまへな。』と、僕も老看守に言葉を合はせたが、僕は自分の言葉の重みを意識すると、彼女の顔を見るわけには行かなかつた。

『もう、そろ／＼判事さんに、最後の御挨拶をする時ですわね。まだ、お眼にかゝれるでせうか。』

　路子は下唇だけで微笑しながら――彼女は悲しいことに限つて、頬笑まずに言ふことを知らなかつた――濕つた大きな

眼で、僕の顔に鋭く注意した。
『いゝや、まだ〳〵お眼にかゝつて、論戰はするがね。』
僕は賑かな顔で笑つたつもりだつた。しかし、その笑ひは、少しも自分に響かなかつた。
『では、また、お眼にかゝります。』
彼女は、やはり笑ひながら、老看守に連れられて、獨房へ歸つて行つた。凡てのことが、何處に彼女を導きつゝあるか、自身十分それを豫知してゐるやうな、粗野な笑ひを彼女は殘しながら。
僕は、麻の葉模様の單衣銘仙を着た彼女の後姿を見送りながら、右の少し下がつた彼女のいかり肩に、丁度何か大きい重いものを負つてゐるやうな感じを見た。その僞に、彼女自身が大きく重いやうな感覺を感じた。それは時代の荷物を分け合つて負つてるといふよりも、彼女自身の孤獨な重い重い荷物のやうな…………。
さうだ。彼女が發展しない限り、時代はもう、彼女のやうな古い思想家を、置き去りにして進むより外に仕方がないのだ。

その夏の終り頃、佐谷と彼女は周圍の豫想通り(元より本人同志も覺悟してゐた)やはり死刑の宣告を受けた。
死刑を宣告せられるずつと前、蕗子は僕に二度手紙をくれた。
一通にはかう書いてゐた。

お役人さん——今日は。

考へて見たら、私の調書はまだ言ひ足りない點がありました。締め切つてもらつては困ります。大急ぎで來て下さい。但しその節は、私に對して決して同情などせぬといふ、自信と約束とを御携帶なさるべきこと。

私宛の書信は、速くお廻し下さい。

調書に取つてもらふことは、ちよつとなのですから、なるべく早くお出で下さい。

待つてゐます。

さよなら。お大事に。

×××監獄獨房で

この手紙を見て、僕は例の通り駈けつけたが、彼女の用件といふのは「議員何匹」といふ以前の訂正に反し、非常に激烈な文句の書き入れだつたが、ここにそれを發表は出來ない。

次の時の一通には、こんなことを書いてゐた。

今朝の六時過ぎ。朝食前の仕事に、二三日前差入れられた或るロシヤ作家の論文集を開いて見たら、ふとこんな文句が眼についたのをキツカケに、あなたに說教する。

「生きることを欲する人間に、生きることを欲しないやうに說教することは滑稽である。人生が直接の滿足を與へる人間に向つて、彼には生きることが極めて不愉快であらうと語ることは誠に滑稽である。と同樣に——」云々。

で、私はあなたに言ひます。

生きることを欲しない人間に、生きることを欲するやうに說教することは滑稽である。人生が直接の滿足を與へない人間に向つて、彼には生きることが、極めて愉快であらうと語ることは、誠に誠に滑稽である。――生きることそれ自身には、何の價値もない。生きることを喜び得る人によつて、始めて價値が生ずる。人間に關する凡ては、個人に出發してゐるが、中にも生死の問題は、より多く個人的色彩を帶びてゐる。

生きたい人間が、單に「生きること」を目標として、生きたくない人間を「生きること」にまで引きずる事は、滑稽であり笑止であり、有りがた迷惑である。それは自己の淺薄さを、現實への盲目さを、廣告するものである。

或る一人の人間がある。苦痛に歪められた現實を捨てて、寧ろ喜びを持つて闇に出ようとしてゐる時、彼を引き戻して、その苦痛を堪へ忍ばしむる、如何なる權利を吾々は持つてゐるだらうか？　してまた、引き戻された爲に、苦しみつゝ、悶えつゝ歩いて行くことを餘儀なくせられた彼に對して、吾々は如何なる義務を負ふことが出來るか？

判事さん！　あなたは不徹底で困る。二年半もつき合ひながら、どうして私がそんなに解らないのですか。あなたが本當のマルキシストならば、こんな御商賣はしてゐられない筈です。私にあなたの思想を說くなら、まづ現在の職をお捨てになつてからのことです。マルキシズムは「生きたい」人々の道です。私は死ぬ道を求めて來たのです。あなたの解らないのには、うんざりしてしまふ。この中の私の氣持や言葉を、よく考へて見た上でいらつしやい。

私の書信を早く廻して下さい。「不許」の書物など早く先方へ返して下さい。

六月二十一日朝

高井ふき

Y判事さま

だが、——

これは宣告前の手紙であつた。蕗子が長い間の未決から、いよ〳〵完全に死刑囚となつた後まで、彼女は相變らず、こんな勇ましい「死への進軍喇叭」のみ吹き續けたらうか。いや、決してさうではない。彼女が自分の死刑執行に立會ふやう、僕に催促して來た時、僕は四十日ばかり病臥してゐた。それで、僕の立ち會へないことが解ると、——たとへ病臥してゐなくても、僕は彼女の所謂「きれいな往生」を眼のあたり見る氣にはなれなかつたが——蕗子は僕に最後の手紙をくれた。手紙と言つても、伊東屋の草色の原稿紙に、思ひのまゝを感想風に書き散らしたものであつた。

御病氣で、絞首臺下に於ける私の『招宴』にお越し下さらないのは遺憾です。

長い間、我がまゝなお手數をかけましたが、いよ〳〵出發が近づいて來ました。お別れに當り一言お禮を申上げます。

何卒、あなたの『生』をお大切に。

私は來る日も來る日もあまり退屈なものですから、多くもない同志の友達や、佐谷に、氣の向くまゝを書いて送つてゐます。あなたにも書きます。また氣が向けば書きますが、いつ看守が、最後の扉を開けに來るかも知れませんから、また書けますかどうか？　この頃は、朝早くコツ〳〵と靴の音がすると、來たな、と思ひ、思はず身構へをしますが、看守は私のうちの前を素通りしてしまひます。その時は、まアよかつたと思ひます。かうして首の座が極まつてしまへば、强いてあせる氣もしません。敎誨師は、私が落ちついてゐると感心してゐます。まんざらお世辭でもなささうです。大抵な死刑囚が、「まだ早いうち」から、氣持のあせるものださうです。

近頃の感想を、同志の友達へと同じく、あなたにもお裾分けします。

第一、チレッたいほど心が呑氣で、死といふものが、どんなものか解りません。呑氣だといふと、さも大悟徹底したやうに聞えて、法螺を吹くなと言はれさうですから、ぽかんとしてるとでも改めませう。ぽかんとしてしまつて、何が何やら解らないと言ふ方が確からしいです。

かうしてゐると、佐谷がふらりとやつて來て、もう一度あの代々木の原を一緒に歩けさうな氣がします。しかし、本當は永久に出來ないのだ。たしかに出來ないのです。だが、どうしてもさうは思へません。

これまで面會に來てくれた人には、私はいつも「もう一度來てくれるでせう。」と訊いた。そして、「是非來て下さい。」と賴んだ。最後の別れを述べる氣には、どうしてもなれないからでした。しかし、これから來る人には、それを言はなければならないのが憂鬱です。管々しい別れの言葉なんか、私には言へさうもないんです。

父に虐げられ、母に虐げられ、伯母の奴隷となつた子供時代に、唯私を慰めたものは古ぼけた子供雜誌でした。子供時代に讀んだ色々の雜誌を、いつか一度見たいといふのが、私の多年の希望でしたが、たうとうそれも煙となりました。

この頃は他と全く交渉がない爲でせうか、一ツも嘘を言はずにゐられます。しかし、嘘の根源を――自分の虛榮心や高慢心や利己心を、決して滅じたわけではありません。

人が見たら、蟲ケラのやうな生活だと思ふかも知れない。だが私は、二十四年の自分の一生の間に、今日此頃ほど、安らかな靜かな有意義な生活をしたことはない。私は貴い生活をしてゐると思ひます。だから、殊更早く死に近づかうとしないのかも知れない。これは未練でなくて、本當です。

しかし、死後のことを思ふと淋しくなるのは事實です。それも二年後三年後十年後頃までは大して淋しくは思はない。それは自分の知つた人が、その間まだ生きてゐると思ふからでせう。そしてその間は、今の世の中と大して變つたこと

もないと思ふ爲でせう。自分の知つてゐる世の中の存在してゐることが、幾らか安心の種になるのです。だが何十年後、何百年後のことを思ふと淋しくなりますね。自分と全然關係のない、自分の全然知らない世の中が實現するでせう。自分の知つてゐる人は皆(生きたい連中でも)死んで了ふでせう。さう思ふと大變淋しくなりますよ。

人は果して完全に誓ひを守ることが出來るか。私にはそれは出來ない。しかし私は誓つた――誓つたも同様なことをした。出來ないことを出來ると信じた自分の罪は大きい。が私は、人は完全に誓ひを守れないものだと思つてゐる。だから他人が誓ひを破つても、失望もせねば憎みもしない。

しかし、私達の運動には、この誓ひを守る事が大切だつた。それだのに、私はそれを破つた。二重の罪を私は犯したのだ。けれども私は今でも疑つてゐる。――人は果して誓ひを守ることが出來ようか? 人は誓ふことが出來るだらうか? と。

昔或る結社の人達は、指環の中に毒藥を仕込んでおいて、萬一の時は、それで自殺して果てる覺悟でゐたといふ。私達もこれくらゐな用意と覺悟は必要だつたと、今になつてつくづく思ひます。誓ひを固守し得るだけの力を持たなかつた私は、死を以て永久にそれを守るべきであつた。それが私には出來なかつた。おめおめと生き殘つて、私の爲に、多くの友が禍にかゝるのを看過した。これ一つが、私には最も恥しい罪である。

人間は如何なる境遇にも耐へ得るものです。私の生ひ立ちがそれでした。私は外にゐる時、もし現在のやうな境遇になつたら、如何に苦しいかを想像して戰慄しましたが、いよいよ實際に打ッつかつて見ると、苦しいことは殆んど無いです。時とすると、死ぬといふことが嬉しくさへなります。これは今まで知らうとしても、知り得なかつた不思議な感じです。大言を吐くのではありませんが、古人の『死を見ること歸するが如し』と言つた言葉は、はつきり私に肯ける氣が

します。だが、最後の幕に行つて、どんなに狼狽するか、苦悶するか、今の私なら、無いつもりですが、どうも危いものです。しかし、その時はまた、その時の覺悟が出來るでせう。

と言つたからとて、私は決して死を好んではゐません。死に惚れてはゐないのです。いえ、明かに死を敵視してゐます。それでゐて死に一切を任せようとしてゐる。これは一箇の矛盾です。そしてこの矛盾は、首を縊られるまで續くのでせう。それが生あるものの事實です。私の不純が今尚消えないのは、そこに原因してゐるのでせう。

死を敵死する。たしかにさうです。蔑視でも冷笑でもない。又、全然恐怖などではありません。死を憎んでゐる。それならば死に何ものも任せぬがよいのです。死なぬ限りは救はれないとか、死が嬉しいとか、つまらぬ嘘は言はぬがよいのです。そして思ひ切り憎めばいゝのです。その間におのづから開ける道がありさうです。

憎んでゐながら、これに任せようとする。それが間違ひの元です。嘘の元です。悩みの元です。不潔の元です。恥辱の元です。私は矛盾に苦しみながらも、もつと、死を貴び、死に親しまないといけません。それでなければ、今まで築きあげて來た自分の生命を、見る影もない無價値なものにしてしまふでせう。

宣告を受けた後は、獄吏も打つて變つて私に寛大にしてゐます。これまで『不許』の書籍も『特別のはからひ』で許してゐます。教誨師も、どうせ宗教など信じない私には、說教らしいことも申しません。教誨師は自分の說教よりも、私の讀んでゐる非宗教的な書籍が、却て私に安心を與へることが解つてゐるのかも知れません。あなたに頂いたプレハノフの『無政府主義と社會主義』エンゲルスの『フォイエルバッハ論』を讀みました。殊に後者は非常に面白いと思ひました。

私は昨日フォイエルバッハを讀みながら、ふと、本の頁をめくる私の爪を見ました。爪の色を見て、自分がムザムザこのまゝ殺されてしまふのが、――自殺でなく――殘念な氣がしました。同時に自分の若い日の終りの來たことが、限り

なく淋しくなりました。私の爪の色は、まるで櫻の花瓣のやうな美しさを持つてゐます。ギユッと指で押すと、血が傍に寄つて、爪そのもの、白さがすき透るやうになります。その時の爪の色は死人の顔を見るやうな白さです。指を離すと、赤い血がスウッとにじむやうに寄つて來て、爪は元通りの色にかへります。私はこの色を見ると、本當に、自分の綺麗な血汐が若い生命を代表してゐると思ひ、この薄紅色の血汐が、いとほしくなりました。この若い血はまだ殘つてゐる。力も殘つてゐる。それだのに私は死なねばならないのか。あの獄吏や裁判官の手に死なねばならないのか。私は、フオイエルバツハを讀みながら、もし私を野に放てば、あなたの再三の御忠告のやうに、マルキシストとなるかも知れないと思ひました。しかし、間もなく殺されることが解つてゐるから、そんなことを感じたのかも知れません。やがて死ぬ私には、アナもボルも同じやうに、むなしきものとなるのです。

今日は午後珍しく驟雨がやつて來ました。恐らくこの夏の最後の驟雨でせう。獨房の前の杉の樹で、雀がバサバサ騒いでゐました、雨で奴さん弱つてゐるのか知らん、早く家へ歸ればいゝのにと思つて見てゐますと、雀は降る雨を浴びて盛んに翼をバサバサやつたり、嘴で背中や胸や尾などこすつてゐます。それで解つたのですが、雨で弱つてゐるのでなく、大喜びで身體を洗つてゐるのです。顔に似ないお洒落な奴さんですが、綺麗好きな所は賴母しいです。

、暫くして地面に水溜りが出來ました。すると一羽の雀が、パツと飛んで來て、その中にボチヤンと飛び込み、羽ばたきしながら水浴を始めました。雀の行水は始めて見ました。砂浴をしてゐるのは、二三度見たことがありますが、水浴をやるものとは思ひませんでした。實に可愛い、恰好をして湯を使つてゐるのです。餘程、奴さんお洒落と見えます。湯から上ると、この小さな田舎紳士は、ブルッと體を振はせて水を拂ひ、チユッ、チユッと舌打ち鳴らしながら、飛び去つて行きました…………。

おや、隨分くだらないことを長々と書きました。御病氣の所へ、相變らずの亂筆で、さぞ御迷惑だつたでせう。私の出發も存外早い氣がしますので、これが最後かと思ひます。早く御全快の上あなたのよき道をお進みなさいませ。

九月十七日

×××監獄死刑囚

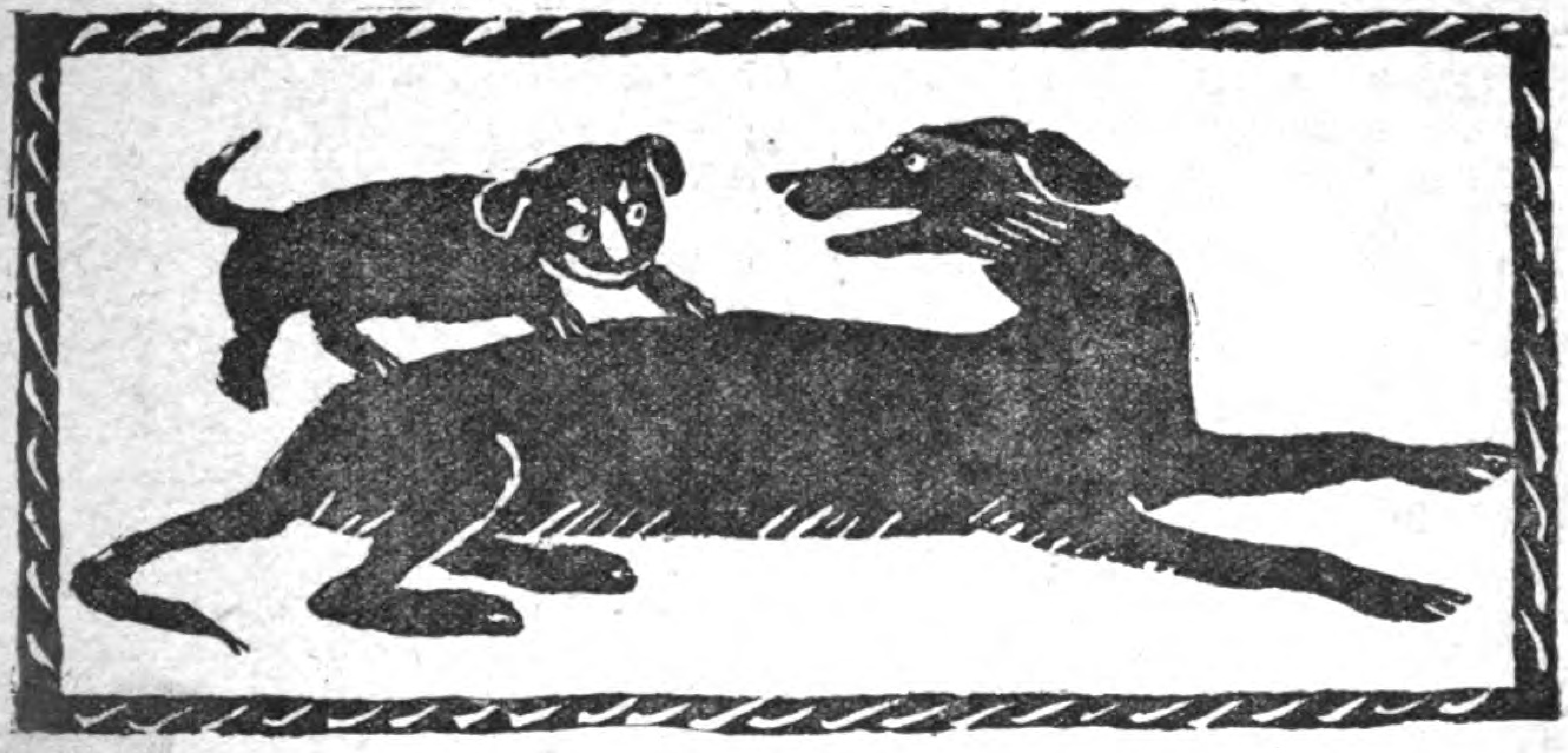
高井路子

Y(ワイ)判事さま

しかし、意外にも、高井夫妻の死刑執行は、或る特別の事情で、宣告後七八日のうちに許されることになつた。無論本人達も全く豫期しないことだつた。で、彼女はT(ティー)縣のU(ユー)監獄に、無期徒刑囚として送られた。しかし、間もなく、路子は看守のすきを見て縊死を遂げた。彼女の書き殘した縊死の理由は、やはり『强權の否定』だつた。如何にも彼女らしい。やり方であつた。

(をはり、一九二九・一〇)

作者註――冒頭に一九二五年代と書いたのは、日本の社會主義運動史上、テロリストの最も活動した時代を、作者が假りに名附けたまでだ。



街の斧博士（續編）

十一谷義三郎

1

月の出しほの空が仄明るかつた。

豆の花のなかに白い道がつゞく。

斧氏は、紫の斑の散つた蛇洋杖を振つて、晩餐にやつたキユラソオ・スペシアルの唾を豆畑のなかへ飛ばして、につとわらつた。

彼は、をんなのことを考へてゐるのだ。彼女は若い――彼女は眞白だ――彼女は、細君より重くて……手がある。

ふと、ゆくてに、鳥打を被たひよろ長い人影がぽつりと現れて、すたすたと近づいて來た。

野布袋の釣竿をかついで、濕たれた黑羅紗の外套を襯衣の上へ、ぢかに着て、しなびた腰を、ほのあかるい空へ浮かして——近所で、ふるくから、内科と産婦人科をやつてる縄岡氏だつた。

「今晩は。」と斧氏が、幅のある聲のなかで云つた。

縄岡氏は、いきなりピストルを突きつけられたやうに、シロ眼をさみしく光らせて、ひよいと立ちどまつた。

斧氏と、ほとんど同年輩の醫學士だが、商賣は、畑ちがひの斧氏にすつかり食はれるし——繰り返すまでもなく、斧氏は、内科ことに呼吸器が專門だつた筈だ——子は、つぎつぎと小さいのが、ウンとあるして、年よりも、ぐつと老けてゐた。

以前に、町の醫師會の寄り合ひなどで、いくどか顏を合せたことはあるが、その都度いつも、まるで眼のさきに蜘蛛の巣がかぶさつてゐるやうな表情をして、碌すつぽ口もきかなかつた。

「あゝ、斧………。」と、硬ばつた微笑をうかべる。

「おたのしみ、ですな。」

「いや…………。」

「獲物は?」

「駄目、です。これッぱかり、いちんち一杯で………。」

「青鱚?」

「えゝ、まあ…………。」

「ほう…………。」

「………これからでさあ。」と、嗄がれた聲で云つて、ほそい顎を、滿月へ、怒つたやうに反らした。

英吉利ものらしい、時代のついた鳥打の下に、ゴマ鹽の髮の毛がはみだして、光澤の無い膚のあひだから、安煙草のニコチンに染まつたうそさむい齒ならびが覗いてゐる。

「おたのしみ、ですか？」と、澁々その齒をとほして、神氣の淡いこゑで訊く。

斧氏は、返事のかはりに、低い滿月へ、嫋々とわらつた。その間に

「失禮。」

と云つて、繩岡氏は、ぷいと月と彼とへ脊を向けた——で、その、竿をかついだ肩の痩せたうしろ姿が、なにか敗者の象徴のやうに、とぼとぼと、街路の灯の方へ、遠退いていつた。

斧氏は、女を培ふと云つた感じの、ふつくらとまるまつた指さきで、流行の、折返しの大きい海狸中折帽のへりをちよいと抑へて、輕い食後菓を嚥下するやうな氣持ちで、それを見送つた…………

豆の花が、甘い微風に搖れる。

彼は、ふりかへつて、大きな月にむかつてあるきだした。

幾人かの若い婦人患者らの顏が、月光をたゝへた彼の羊眼のさきにをどる。

それが、みんないちやうに、媚態と含羞を粧つてみせて、彼にうつたえるのだ——これまで、繩岡氏などなどに診てもらつてゐたが…………と。

彼は、町の人氣を滿喫して、腮や腰に、たぷたぷと脂肪がたるんでゐた。もうどんなに同業者らが、苦しんだり、反感を示したりしたところで、それは、彼の、その脂肪層に、檸檬水ほどのこそばゆさを注入するに過ぎなかつた…………

彼は、歩きながら、太陽へ向つてするやうに、滿月へ深呼吸をした。

それから、また、ふと立ちどまつて、片手を内ぶところへ突つこんで、紙入れの位置を直した。

紙幣束を呑んでふくれてるそいつが、ミゾオチを鈍壓して、くるしかつたのだ。

それは、むろん、今夜これから、女を弄びにいつて、綺麗に使つてしまふ金だつた。

それは、ほんの數行の説明に盡きるが、ほとんどナンセンスに近い筋道を持つ金だつた。

——からだ。

ときをり彼は、これとマアクした町の富有の患者連に、佛蘭西藥の處方箋を書いてあたへる。

彼は、そのとき、あの「皺伸ばしの注射」を、そつと相手の心臓へ提議するときのやうな、しつこく患者の心理に食ひいつた眼差を、ぢつと据ゑて、例の女性的なバスで、きつとかう獨り言のやうに云ふ。

「……すこし高いかも知れませんが。」

もちろん、もうすつかり彼にまゐつてる患者で、一も二もない。ぢきに、町の名のある藥局に人を走らせる——無い。

で、すぐに東京へ使ひをだす。そこにも無い。

どこの藥局でも、むろん、獨逸藥ばかりを扱つてゐて、この處方は、てんで見當もつかないのだ。

で、當然、その處方箋が、奇術師の斧氏の手へ、もう一遍舞ひもどつて來る。

「どうぞ、お手數でも、先生の方で、とり寄せていたゞきたいのです、いくらかゝりましても、そんなことは……」

斧氏が、そこで、例の、町にたつた三人しかない「博士の切り札」を、ちよいとだして、日本の藥局の無智さ加減を慨嘆して、結局それを引き受ける。

さうして、早速、佛蘭西へ打電して、その藥がとゞく——だけの時日が、經つた時分に、その、佛蘭西の製藥會社の新藥の見本が、斧氏の藥棚からとり出されて、患者の手へわたされるのだ。

もつとも、場合に依つては、實際に、取り寄せねば間に合はないこともある。

どのみち、しかし、一番大事な、藥相場は、斧氏の頭ひとつから、彈き出されるのだ。

つまり、斧氏の指頭には、女を操る魔術と、藥瓶を、そのまゝ金塊にしてしまふ魔術と、ふたつの奇蹟的な力が、潜んでをつたのだ。

町一番の大地主が、ある一ケ月、斧氏へ納めた金が――大部分、この佛蘭西新藥の藥價で――四千圓にのぼつた、と、その道の、傳說になつてゐる。

もうこゝまで來ると、これは、患者と醫者との關係を脫して、信者と偶像の域へ這入つてゐると云ふべきだ。

だから、一面に、斧氏の臨床の良さが、いよいよ、素晴しい效果をあげていつたし、また、それに連れて「豚の飼馬槽みたいな賽錢箱に」金貨を投げこむ者が、殖えていつたのだ。

まつたく、あの、始終斧氏の片手の、なま溫い掌のなかに首をすくめて、そこに滲みだすアブラを舐めてゐる洋杖の蛇が、斧氏の、陰性に艶んだ眸をあふぎ見て、こんな風な質問をしなかつたのが、不思議なくらいだ。

――わたしは、メフイストの姪の蛇ですが、先生、先生は、まだ、御自分の心臟の神性が、恐くおなりではありませんか？

•

兎に角、斧氏は、血管を、キユラソオが流れてゐるやうな氣持ちで、滿月の豆畑をぬけて、しばらく……やがて、町の、三四流どこの、甘酸つぱいをんならのゐる一廓にあらはれる。

東京なら、その頃の麻布の十番と云つたところで、好景氣の風が吹くと、既述のドツク市の菜ッ葉服が舞ひこんで、一週間ゐつゞけの大盡記錄を殘したりする――線香は、五圓で十本――唄は、せいぜい、大島、安木、枯れすゝき、鴨緑江く

づしなどなど……

闇い小路が、歪な家なみの間を、雁木なりに通じてゐて、ときどき、猛烈に、排泄物を排泄するやうに、流行唄の怒號がきこえるとおもふとぽつりとまた沈默の穴があく、その底の、露骨な體臭のよどんでるなかへ、蛇洋杖といつしよに、斧博士の、あの、脂肪のたるんだ、薩摩タイプの女のやうなからだつきをした姿が、消えてゆく――

で、例の、佛蘭西新藥の札束が、此處で、綺麗に人肉になつてしまふ。

いつたい、あんな斧氏で、(作者は、本誌七月號所載前篇で、かう説明した――斧氏は、もうかれこれ五十だが、黒い柔い髪が、まだたつぷりあつて、膚の變に若い鼻や腮に、みづみづと肉がのつてゐる。姿態も、何處か女性的で、それも、あの上下から壓搾されるのを、ちよいと反動的に踏ん張つたと云つた薩摩の女の體つきを聯想させる。いちばん、それに、忘れられないのが、羊眼とか云ふ、眼がしらが太くて、次第細にぐつと反り下がつて、媚々と笑つてる二皮眼と、幅びろの、イキのいいカイゼル髭だ。話し聲は、どんな場合にも、ねつとりとしたバスで、それと一緒に、あの眼で、縁なしの金眼鏡の奥から、ぢつと相手へほゝゑみかける――その聲にも、眼差にも、妙に社交的な陰影が潜まつてゐて、それが、コツを窺つて「皺伸ばしの射注」を提議したりするのだ)――どこまでも陰性で、酒がどんなにまわつても、揚々と馬鹿になることが出來ない。唄は、だいち、眼つきや髭に合はんし、もし間違つて、うたふことでもあると、むろん調子ッ外れで……」

つまり、この雁木小路の斧氏は、羊眼も、カイゼル髭も、脂肪過多な皮膚も、みんな、ねつとりと濕つて、なにか、大々と汗をかいた、溫血動物の牝の生殖器と云つた感じだ。

だから、その道で、ちつとでもハリのある女は、そばに坐つてさへ、ちりけもとが寒くなると云つて寄りつかない。斧氏の方でも、そんなのは、性格的に、ニガ手で――で、甘んじて自由になつたのは、べつに特定の彼女があつたわけでなく、次から次へ、たゞもう彼の札ビラの切りつぷりに打ちこんだ、手の多い女や、痴鈍な、肥大した、白い女などだつた。

斧氏は、滿月の闇い横町の、ある一軒へあがつて、今夜の彼女を買つた——

朝——

彼は、診察室の廻轉椅子に、ゆつたりと据わつて、血色の好い頰を微笑んで、あとから、あとからと、そのまへに現れるセンチメンタルに美裝した患者らの、手を握つて、脈を診てをつた。

2

スタートの正しい性慾は、眼の開いた河だ。それを誤まつたのは、原つぱの火だ。

青年期の斧氏から、雁木小路時代の彼まで、そちらの方面をありのまゝ跡づけると、さしづめ——博士の身邊に躍る淫蕩の影坊子——とでも題した三流新聞の、三面のつゞきものが出來あがるが、その最初と最後——のひとつまへを、ほんのゴシップ程度にひろつてみる。

——色硝子の石油ランプをともして、腕首に貝ボタンのかゝつた襯衣を着てゐた高等學校の學生時代。

彼は、親友の家に下宿してゐた。成績は平凡、性格は、その時分から、ハッキリと陰性だつた。

彼は、ランプを消して、寢息の青臭くこもつた、女中部屋へ×ひ込んだ。

親友が、ランプを掲げて、踏みこんで來て、絶交を宣言した。

彼は、あくる朝、柳行李をまとめて、その家を出た。婢（をんな）も、その日に、追ひ出された。

それつきり、彼は、彼らしく、その女を、見むきもしなかつた。

絶交は、「最後」までつゞいた——

それから、大學――某市立病院――傳染病研究所――馬尼刺時代と、至るところ、例の陰性な、性慾火事な、揉み消したり、反方向いたりして、雁木小路時代へ來る。

――雁木小路および同じ程度の場所での忍び遊びは、先づそれとして、そのほかに、海員病院では、灰縞の看護服を着た女らが、始終、頬をひそひそ寄せあつて、彼の姿へ、私笑を洩らした。

弁診療所では、しつきりなく、看護婦たちの顔が替つた。

彼女らは、それぞれ、威嚇したり愁訴したりした揚句、けつきよくあの、日本藥局法にない佛蘭西新藥の、札束を握らされて、それで涙を蔽ひながら出ていつた。――

それから、弁氏が、ある料理屋で見つけだした、まだウブな、妾B――

彼女は、診療所から、もつと南寄りの、もつと人氣の稀薄なあたりの、雨や風の沁みとほる小家で、母親とふたり、氣紛れな彼の蛇洋杖を待つてゐた。

妾のAは、雁木小路をひと洗ひした程度の新開地のそんな――顔が拙くて、陽氣一方で、半としほど、他人の二階に置いてゐたが、これは、自分から、三味線を抱いて離れていつた……

最後に――

弁診療所には、「手術室」と呼ばれてる、×のかゝる部屋が一つあつた。

それは、部屋そのものが、女身の神祕を蔽ふ役めをしてるほかには、べつにこれと云つて、普通の診察室以上の設備のある部屋ではなかつた。

患者のA子は、「血管硬化症」といふ病名で、診察ごとに、××××××××、彼のあの、魔術的な兩手の掌で、×から×へ摩擦療法を受けた。

患者のB子は、「下腹部冷却症」!?で、此處で親しく、坐藥療法を施こされた。

C子D子……と、處女も、非處女も、此處ではみんな、彼女らの偶像の、舌と手の動くまゝになつた。

此處で——作者は、いつとうぴたりと來る說明として、もう一度、前篇に引用した歐外譯「ファウスト」中の言葉を繰り返したいが、伏字にされたからよす。

兎に角、この部屋は、そんなに一番大事な羞恥心に、巧妙な眼隱しを施す部屋だつた。……」

そんな風で、斧氏の身邊には、絕えず、彼らしい好色沙汰がけむつてゐた。

だが町は、斧氏の性慾より、もつと盲目だつた。

それを、うすうす感づいてゐるのは、ほとんどあの繩岡氏、繩岡B氏、繩岡C氏などなどの同業者だけで、その彼等も口を緘んで傍觀してゐるよりほかに仕様がなかつた。

彼等は町を見た。彼等は、自分をふり返つた。さうして彼等は、斧氏へ、白眼をむけて、獨白した。

——あいつは猶太人(ジウ)だ!

しかし、そんな獨白が、町へ木魂する筈もない。

——ちよくで、親切で、偉い、町の博士(せんせい)! それが、大きな、町の聲だつた。

——このまゝで、もう一二年もすれば、きつと東京へ乘りだして、日本一の病院長になるだらう。

そんな、英雄崇拜的な嘆聲さへ、その、町の呼び聲の底に、涌いてゐた。

「自信さへあれあ、町は、ひとりでに、向うから隨いて來る。自信だ、自信だ!」

さう、斧氏は、カイゼル髭のなかの、厚い脣のあひだで、得々と私語しながら、人生の三稜塔の、天邊へ近づいた。

だが、彼は、その瞬間に、きわめて通俗な眞理を、見逃した。
自分の立ち場が、高くなればなるだけ、それだけ、狹く、あぶなくなつて來てるといふことを。
「最後」が來た——
この括弧は、むろん、斧氏の、あの「原ッぱの火」だけを意味する。

3

患者の一人に、町で指折りの實業家の娘があつた。
美しいと云ふより、淨らかな彼女で、すんなりと伸びた手の指の爪半月にまで、靜物の輝かしさがこもつてゐた。町の高等女學校の四年級に通つてゐるのだが、封建貴族の美點をあつめて小規模にしたやうな、珍らしい家庭の雰圍氣を呼吸して來た所爲か、たましひは、まだ、大容な眠りをねむつてをつた。
組で一番快活な、ごしつぷ・もんがあが、ある時、みんなをまわりに集めて、ひそひそと、呼吸のはづむのを抑へながら、こんな内容のごしつぷを報導した。
——彼女らより、一級下のある寄宿生に、このごろ、住所がきのない、女名前の手紙がたびたび來る。はじめは、誰も、べつに氣にしなかつたが、段々とその度數がひどくなるので、同室の友達が、氣を揉んで、とうとう、その文がらを盜んで、受持ちの先生のところへ持つていつた。そのみちみち、恐々そつと披いて讀んで見ると、頬ッ片が、かつかつと火照つて、息のつまりさうなことが書いてある。で、それから毎日、先生にさう云はれて、わくわくしながら、そつと注意してると、晝間は、ちつとも變つたことがないが、夜になると、ときをり獨り暗いところへいつて啜り泣いてることもあるし、また、一度消した灯りを、もう一遍とぼして、色刷りの書簡箋をひろげて、溜息をつきながら、例の文句らしいのを

思案してることもある。

そんなことが、いく日かつゞいた揚句、ある日、ふと彼女の机のうへに、切手まで貼つて、出すばかりになつてる手紙が置き忘れてあるのを見つけて、それを一散に、先生のところへとゞけた。

と、それが、結局、彼女が、彼女自身へ書いたラヴ・レターであることがわかつた――と云ふのだ。

「どお？」と、ごしつぷ・もんがあが、彈力のある聲を張りあげて、みんなを見廻した。

「素敵！」とAが、胸を張つて、みづみづした顔を、なかぞらへあげた。

Bは默つて、いまにも死にさうな溜息を洩らした。

Cは、ぽつと紅らんだ頬の膚へ、きゆつと指さきを食ひこませて、ほゝえんだ。

Dは、濕んだ眼に、ひどく瞑想的な表情をたゝへて、まだ、そのまゝぢつとしてゐた。

Eは、ぴよんと跳ねあがつて、舞踏體操の身振りを始めた。

Fは、娘の、問題の娘の、しなやかな肩を抱きしめて、上氣した頬を、頬へ、擦りつけた。

だが――娘は、眞白な顔面に、みんなの亢奮を反射した、むしろおどけない笑ひを、うかべて、大容に、みなを見てゐるだけだつた。

二三年まへ、彼女が、はじめて、彼女の「新月」を見たとき――

床のなかから、心持ち蒼ざめた顔をあげて、心配さうに、彼女の母さまに訊いた。

「肺結核ぢやないでせうか？」

ある喀血した女の話が、ふとその前の晩あたりの、食卓で出たのだ。

それですつかり安心したと云つた風に、微笑みかへして、彼女は、うつとりと眠つた。

「いゝえ。」と夫人が、少し紅く、ほゝゑんだ。

彼女が、「肺尖加答兒」と云ふ診斷で、學校を休んで、月に二度づゝ、斧氏の、あの「手術室」へ通つて來た。

彼女の大容さは、まつたく、昔の貴族のそれだつた。

——ある溫泉宿の、風呂番が、こんな觀察を下してゐる。

湯治の若い女客を流しに這入つて、彼女のポオズを見ると、たいていその身分の見當がつく。どうかする時、ひどく手足を硬くして含羞んだり、ふてふてしく無恥なのは、きまりきつた客だが、育ちも、粹しも、飛びきり好いひとびとは大容をきわめたもので、わるく恥らつたりしないで、ぼうとした無恥無羞と云つた態度だ——

兎に角、彼女は、たとへば、白濁したミルクのなかへ、ぽつりと落ちた血のやうに、斧氏の心を牽いた。

——ぢきに、例の「腹部を溫める治療」がはじまつた。

いちど、彼女は、「×××」の××の上で、「心神喪失狀態」に陥ちた——この術語は刑法の一七八に出てゐる。

刑法——だが、偶像に法律は無かつた。

意識のもどつた彼女は、やつぱり淨らかな眸をしてをつた。

それが、治療のはじめで、それから、月に一回づゝ、五度ほど、おなじ××の上で、「坐藥療法」が行はれた。

彼女は、いつも大容だつた。彼女の眸には、無知の美しさが、靜に宿つてゐた。

その、五度めの診療をやつた翌日、斧氏は、町一番のホテルのサロンで、彼女の母親に逢つて、あの陰性のバスを、いつさうねばらせながら、こんなことを云つた。

「お孃さんには、もし許婚でも、おありなさいませんか？　どうも、どうも、御妊娠のやうで……」

夫人は、眞蒼に亢奮して、斧氏の、あの、いつも眼尻の媚々した羊眼を見かへして、ハツキリと答へた。

「許婚なぞ、ございません。妊娠！？　それは、間違ひございませんか？　先生！　宅では、學校を休ませましてからこちら、先生のところへ、あげるよりほか、滅多に外へも出しません。それに、そんな風には、育てゝ無い筈でございます」

「いや、いや、あゝ、わたしの診違へかもしれません。もし出來た……いや、腫物、かもしれません。三四日中におあがつて、も一度よく診て見ませう。」

彼は、夫人の視線を避けつゝ、倉皇とホテルを出た。さうして、その、二月の、青味わたつた空を、落ちつきなく見あげて、溜息を洩らした。

彼は、あの、色硝子のランプを掲げて、ずかずかとあんなところへ來て、その場で絶交を宣言した親友を想ひだす。いまさきの、夫人が、やはり、そ云つた來かただ。

それは、まつたく性に合はない……

自信！と、さう叫ぶやうに、彼は、蛇洋杖を握りしめた。

それから、なか二日おいて、彼は、彼女の家へ出かけた。

「どうも、やはり、」と、大人を見て云つた――「腫物です。こいつを、散らさないと……」

で、持つていつた×××××を、しかるべくして、翌々日、また來ると云つて戻つた。

あくる日――

縄岡B氏が、立合ひ醫の某々氏らといつしよに、彼女の家に招かれて、愼重に、彼女を檢診した。

その結果、彼女の腫物が、もう、三月（みつき）になつてゐること、その腫物に、慌て丶、古風な散らし藥をあてがつた斧氏の意圖が、明瞭にされた。

で、斧氏が、完全に、彼のピラミツトから轉落する時が來た。

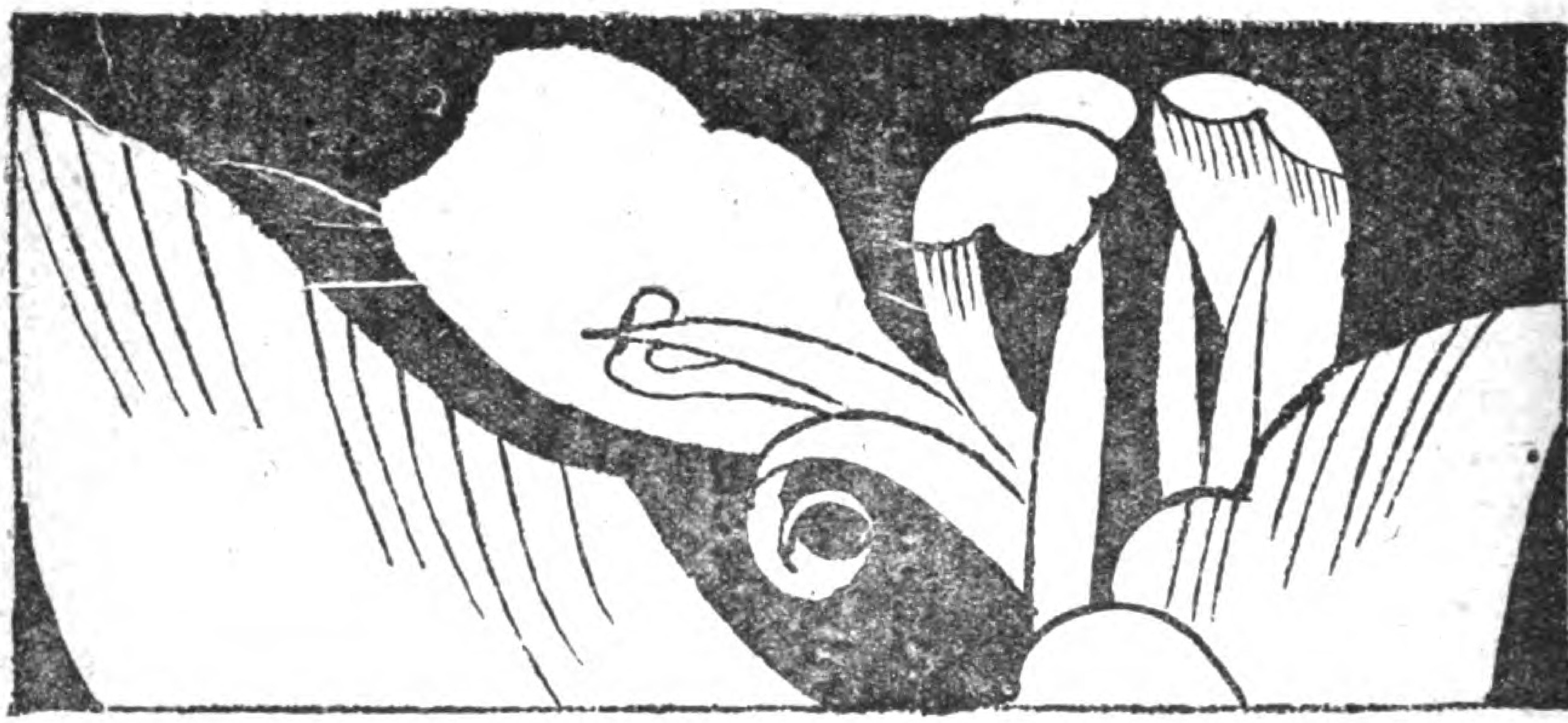
娘の父が、彼女と、家の名譽とを犧牲にして、斧氏を葬らうと決心したのだ。

さうして、この父の聲は、たちまち、町はもちろん、社會全體にわたつて、反響の渦卷をひき起した。

――斧氏が、斧診療所から、町の刑務所へ移つたのは、ほんの間もなくのことだつた。

で、それから先の斧氏は、たいてい判つてゐる――未決が既決になつて――控訴して――結局、服役して――も一度社會へ出たら……もう一遍、町か、街の呼び聲が、聽きたくなるだらう。さうして、もう一度、あのカイゼル髭を揚げて、人生のピラミツドを渇仰するだらう――よしそれが、ふたゝび英雄主義のカリケチュアとし終らうとも――そんな性格の斧氏だ。

娘の腫物は、當然、「母胎の安全の爲に」、葬られてしまつた。



海の第十一工場

黑島傳治

一

滿潮時には、工場は海に浮いた。

三ツ又の避雷針が尖つてゐる高い煙突がさかさまに水に映つて、波の動搖に應じて、ぬる〳〵とのへりを打つ。

その埋立地の工場は、三方にコンクリートの墻壁をめぐらしてゐた。墻壁は、監獄の墻壁のやうだ。がつしりと陰欝に聳えてゐた。——それも、影が海に映つて、波にちらちらと碎けた。

三方の門を閉すと、そこは、村とは全然交渉が遮斷されるやうになつてゐた。デモンストレーションや、勢ひよくばら撒かられるビラや、飢餓のうめきから、そこ

は全然絶縁されて、別の世界を作つてゐた。糧食も、原料も、人間も、發動機船が海から持ちこんだ。

そこは組合の手が伸びることに對して、病的な神經過敏症を誇つてゐた。

薄い、しつとりした朝霧を、發動機船が、けたゝましい爆音で破りながら棧橋へやつて行く。

牛田は、對岸の本部から、腹がペコ／＼になつて眼がさめて、それを見た。

發動機船の甲板には、勞働者が、蟻のやうにいつぱいたかつてゐた。それが、すぐ手が屆きさうなところに見える。海に浮いてゐる第十一工場へ通つてゐる者達だ。

牛田は空腹から、胃嚢が疼いた。そして、口の中が苦い味がした。部屋には、垢によごれた男の臭ひと、醬油くさい、いきれがこもつてゐる。ピケットに疲れ切つた連中が破れ蒲團にはたかり合つて、疊いつぱいにぐつたり眠入つてゐた。

牛田は握り飯のある飯櫃の方へにじりよつた。

「それや、ゆふべ、動員から戻つた者が食つちやつたよ。」

飯櫃をのぞきこんだ氣配に感づいた沖は、向うをむいたまゝ、蚤に喰はれたあとを快よげにごし／＼搔いてゐた。

「さうか。茶は、あるかしらん？」

「あるだらう。」

牛田は、琺瑯引きの藥鑵を取つて、ぢかに口に持つて行つた。茶は、茶の味がせずに、錆びくさかつた。彼は、それを、藥鑵が空になるまで、指で蓋をおさえてごく／＼のどを鳴らした。

罷業開始と同時に、十二ある工場のうち、十一までが完全に息の根をとめてしまつた。たゞ一ツ、最も大きい、最も完全な最新式の設備を有する第十一工場だけが作業をつゞけてゐた。はじめは、通勤する者が陸を歩いてやつて來た。牛田らは、そいつを途中に待ちかまへて喰ひ止めた。爭議團に引つぱりこんだ。來ない奴は、毆りつけ、追つぱらつた。する

と會社は、舟で、隣村の波止場からこつちの棧橋へ「安全」にのせてきて、晩には、又、舟で送りかへしだしたのだ。波止場には、用心棒の暴力團がついてゐた。急に醸造工に早變りした百姓や、漁夫も舟に乘つてきた。それらは、農閑期に臨時に傭はれると、素人だといふんで一人前以下、「〇・七」か、「〇・六」しか賃銀が貰へなかつた。それが今は、一人前以上、二割から三割五分の割増しを貰つてゐる。

　さきの船が棧橋に横づけになると、百姓どもは蟻のやうに、歩み板を傳つて這ひおりた。暴力團も、女工も、事務員もその他あるだけの職工を船にのせて、一人でも多く勞働者がゐるやうに、こちらへ、示威的に見せつけてゐる。それは、分りきつてゐた。

「何だい、あんだけ居つたつて、正味働く人間は、八十人有れやせん。」

　こつちでは、冷笑した。一人々々働ける身體の恰好をしてゐる者を遠目に數えると、六十五人しかない。

「なあに、八十人も居るもんか、――たつたあれつぽちで、諸味をまぜるんが、せい、いつぱいだよ。」

「うむ、うむ、さうだ。」

　が、こつちが過勞に弱つて來るに從つて、勞働者の數はふえて來だした。八十人が百人になり、百人が百二十人になつた。二三日前から二艘の發動機船がまわされだした。

　百姓は、彼等が撒いたビラにも、戸別訪問にもテンデ應じもしなければ、耳も貸さなかつた。ビラはいきなり尻ふきになつた。朝から晩まで休むひまなしに働いて、而も、地子と肥料代を稼ぐのがやつとで、直接金を握つたためしがない百姓は、一日稼いで二圓あまり貰へる醤油屋仕事が有難くて仕樣がないのだ。

「晝出て來る幽靈といふやつはないもんかな。」

　蚤に喰はれた手や脚や、背などを、なほごし〳〵搔きつゞけてゐる沖が云つた。

「どうだか？」

「こんな具合ぢや、幽靈にでも出て來て貰はにや、勝味はないや。」

「誰だ、誰だ？」東京から應援に來てゐる町田がひよいと頸を擡げた。「そんな神秘主義者みたいなことを云つてゐるんは誰れだい！」

沖は、剽輕に頸をすくめた。

「なんだ、きいてたんか。ぢや、云ふぢやなかつたよ。」

そして、半田を見て笑つた。

第十一工場は、會社が組合を破壞する目的で、計畫的に大規模に建築したのだ。ほかの工場が全部火をつけて燒き拂はれても、十一工場だけあれば、會社はビクともしない。さういふ工場だつた。勞働者はすべて、その計畫で「危險思想を持つとらん」校長が保證をつけた健實な百姓の息子ばかりを傭入れた。その十一工場の基礎工事中に、朝鮮人の池雲（ちうん）が××めにされてしまつた。いかにも鮮人らしい眉と鼻を持つた若者だつたが、日本語は一寸區別がつかん程うまい男だつた。それが、コンクリートの××化石のやうに××まつてゐた。池雲は、樋から流れ下つて來るドロ〳〵のコンクリートに足を辷らして溺れた。溺れながら、むちやくちやに脚を踏んばり、泳ぐやうに兩手で空氣をかいた。が、脚は、ます〳〵深く沼地のやうなコンクリートにずりこんだ。請負師がセメントの割合を胡魔化したコンクリートは、一度足を辷らしこむと、底なし沼のやうに、どこまでも、するするとずりこまずにはゐないのだ。

二三歩ばた〳〵するうちに、池雲は、腹から乳まではまつてしまつた。助けに行くと、その者も溺れなけやならなかつた。池雲は、顚狂な朝鮮語で、（突嗟の場合、いくら日本語がうまくても、日本語は出ないものらしかつた。）昔、埴輪以前の殉死に生埋めにされた、從者のやうに、[illegible]によごれた口をいつぱいに[illegible]、わめき[illegible]手と目を、[illegible]

三にあがきもがく。が、全力を打ちこんでゐるのに、身體の位置は殆んど動かなかつた。ます／＼セメントに自由を奪はれて行くばかりだつた。

そこにゐた者は、思はず、自分の四肢が剛ばつて動かなくなつたやうに感じた。一人が突嗟に、セメントが流れて來る樋を外さうとした。

「こらッ！　一升のセメントだつて只ぢやねえんだぞ！」池雲と痴情沙汰を持つてゐる現場監督が光つた眼を投げつけた。

上へ上へ突きあげやうとあせつてゐる頭が、あせれば、あせる程、底の方へずりこんでたうとう×××なつてしまつた。それは、ホンの一分三十秒ばかりの出來事だつた。そこに立つてゐた者は、池雲がなほ、コンクリートの中で必死にもがいてゐると感じた。

××××、第十一工場は建つてゐた。

丑の刻が來ると、池雲のわめきが、毎晩、コンクリートにこだまして無氣味なひゞきを傳へて來る。それで、十一工場の寄宿舍には、誰れも泊り手がなかつた。泊つた者は、亡靈に襲はれて、四肢がかたく剛ばつてしまふといふのだ。一年あまり經つたあとから、坊主や巫女を呼んできて、御祈禱をした。

が、亡靈は、御祈禱なんかで承知しなかつた。晩になると勞働者を工場から追つぱらつた。——さういふ話だ。沖は、その亡靈が、晝間も出てきて、裏切者どもを、十一工場から追つぱらつて呉れることないもんか、と、考へてゐた。

それは、有り得ることぢやなかつた。爭議の助太刀に亡靈など出て來る筈ぢやない。町田は、俺等の力で勝たにやならんと考へてゐた。それ以外、協調會へ調停を頼んだり、亡靈の力でけりがついたりするのは、唾棄すべきことだ。しかし、沖や半田は、どつちにしても、醬油屋で働かなけや食つて行く道がないつぶしのきかん勞働者だつた。ほかの者もみなさうだ。彼等は、どんなきつかけからでもいゝ、早く解決がつくことを切望してゐた。折角こしらへた組合がぶッつぶされ

るよりは、その方がよつぽどいゝ。が、やりこめられるのを恐れて、それを口に出さなかつた。

二

村の平かな部分には、隅から隅まで、すゝ黒い屋根の醤油倉が、黒箱を並べたやうに、並んでゐる。幾本も、幾本もの煙突が、棒杭のやうに立つてゐる。そこから煙が上らなかつた。一ケ月も一ケ月半もまぜない諸味が、ぶつ〳〵沸く。その工場と工場の間に、「五平」の家が挾まれてゐた。握り飯はそこで炊いた。

竈が足りなかつた。茅葺きの家の前に、土の火床を作り、二ツの釜を並べて露天で飯を炊いた。雨が降りだすと、栗の立木から立木に二本の竿を渡し、その上に、はづした戸板をのせて屋根の代りにした。一日々々、十三俵の米俵がからッぽになつてしまつた。それでも、みんなに、握り飯が二ツづゝ行き渡らなかつた。

腹がへつてたまらない連中は、番にあたつた者が、分配された握り飯を箱でかついで運んで來るのを待たずに、炊事場へ出かけて行つた。そこで「おこげ」や「湯のこ」を貰つて腹を滿した。頬冠りをした老人も、若い者も、傳令の少年も、のどをぐッ〳〵とならしながら湯のこをのんだ。彼等には、握り飯が一ッでもよけいに食へることが幸福だつた。それで得をしたやうな快よい氣持になつた。握飯を盗まれた炊事係は、あとから、數を數へ直してまご〳〵した。

半田も腹がへると炊事場へやつて來た。町田は、彼について來た。ひもじげな、がつ〴〵の子供をつれて、女房や、娘が手傳ひに來てゐた。一人が茶碗で飯の量をはかつて、握る者の手に渡すと、それに鹽をつけてかたく握りしめる。ベチヤクチヤ喋るたびに唇からとび出す唾液は、飯粒と一緒にかたく握りしめられた。頬に洟をなすくりつけた子供が傍から指をくわへて、ほしげに立つて見てゐる。――町田は、そんな光景を珍らしがつた。

五平は、薪に、板切れや、落葉を拾つて來た。倒れた工場の柵を盗んで來て鉈でこつぱに叩き割つた。「一本松」のものな

んぞ、なんでも取れるだけ取つて來て使つてやれ、五平はそんな氣だつた。町田は、さういふことにも同感した。

「あの立つてるやつも引き倒して薪にしたれい！」町田は云つた。「かまふもんか。」

實がはぢけたあとの栗の毬が竈の下でちら／＼燃えてゐた。

町田は、醬油屋男の不潔と、汚れた醬油くさい中で生きて行く無感覺さに興味を持つた。忍耐強さ、物をチビリ／＼出來るだけ細く長く使つて行く習癖、それも面白かつた。彼は、そんなこた知らなかつた。知らないことが面白かつた。彼は、無意識のうちに、さういふ空氣の中へ這入つて行かうと努力してゐた。よごれたボロ／＼の服で、不潔や粗食に平然として、勞働者と一緒にやつて行くことが、なんとなく、輝やかしく、愉快だつた。

子供時代から、醬油漬になつて育つてきた五平は、町田に、親しみにくげな、かたい顏をしてゐた。

「あの、㊤の手拭をかむつてる娘はどこの子だね？」

「なにだ？」

五平は、薪割りをやめて腰を伸し、娘を一瞥した。それは、握り飯を握つてゐる娘の二人だつた。と、彼は、不服げに、むッつり默りこんでしまつた。

町田は、上り框のさきにつき立つて握り飯を食つてゐる半田のところへやつて來た。娘がすぐにそこに坐つてゐるので半田の耳もとへ口を持つて來て、小聲にきいた。

「どこの子だね。――なか／＼美人ぢやないか。」

「あれが、そら、樽屋の仁右衛門の娘だよ。」

「美人だね。」

娘には、彼女の噂をしたことが分つたらしかつた。わざとこちらを見ない顏つきでそれが分つた。半田は、無遠慮に視

線を流しかけてゐる町田の肘を突ッついた。

それは、さう美しい娘ではなかつた。鼻が高い、形の整つた娘だが、營養不良だつた。親爺の職業の樽の臭ひが、娘の體臭にまでしみこんでゐるやうだ。彼女は、自分の家から、「五平」に來てねとまりしてゐた。

罷業が始まると、威勢をあげるために、すべての者が、隊伍を組んで異常な亢奮にかられながら工場を引きあけて來た。煙を吐かない靜まりかへつた煙突を見ると、彼等は、自分の×を感じた。俺達が働かなけや、煙一ツ出すことも、樽一挺動かすことも出來やしないんだ。それを彼等は、自分の眼のさきに見た。體内で熱い血潮が躍るやうな氣がした。しかし家では、女房が親爺に裏切りをすゝめた。女は、自分に來る飢餓の心配をした。子供に食はせる飯がなくなつて、空腹からぐずり出す、その心配をした。そればかりぢやない。白粉と、紅を買ふ小遣錢がなくなることを心配した。

新聞には、ほかの爭議にもよくあるやうに、女房を離縁してまで戰ふ、といふ、悲壯な記事がのせられた。しかし、彼等は、裏切をすゝめられても、女房や子供を振り捨てる譯にや行かなかつた。十五六歳から、女房がほしいと思ひつめて、而も、女房を養ふだけの賃銀が取れんのと、輕蔑され勝ちな醬油男の地位のため、幾年も幾年も、晩にねると、想像をたくましくするばかりで、貰ふことが出來なかつた。十年も、十五年も苦勞をして、僅かづゝ金をため、やつと貰へた女房だ。子供だつて、爭議團員が放り捨てた子供を、誰れが拾つて養つて吳れるか！　どつちへ行つてもいゝことはなかつたが、仁右衛門には、女房だけぢやなかつた。彼には海へも山へも持つて行つて捨てる、捨て場がない爺さんと、婆さんがついてゐた。それがストライキに反對した。婆さんは、きん〳〵身に突きさゝる聲で、爭議を始めた幹部を糞の粕に罵つた。産んで育てた親を干し殺すんかと、がなりちらした。仁右衛門はおろ〳〵した。その婆さんをやりこめて、一言のぐうの音も出さなくさしたのが娘だつた。

「なか〳〵えらい娘だね。」

あとで、そのことを知ると、町田は感心した。「あんなにおとなしげな顔をしとつて、勇敢な奴だね。」
「演說だつて出來るんだぞ。——一寸うまいんだ。」
「さうか、さうだらう。——僕はさうかしら一寸見て、ほれこんでしまつたよ。」
「どこが、そんなに美人だい？」
「どこがつて！——どこからも美人ぢやないか。俺れや、あんな勞働者の娘が好きなんだ。」
半田は、爭議が、——たいていの爭議が男女の戀の取持ちをすることを知つてゐた。だが、娘は、既に、山口といふ男を好いてゐる。彼はそれを知つてゐた。だがそれは、町田には内所にしといた。戀は、またどんないたづらをやらかすかもしれないものだ。

三

晩になると、發動機船は、五目飯や、饂飩の御馳走で氣嫌を取つた百姓を、隣村の波止場まで送り屆けて、棧橋へ引きかへしてきた。そこで、錨をおろして夢をむさぼつた。
委員の氷室は、本部の薄暗い電燈の下で、攻撃の打合せをした。百姓を追つぱらふには、池雲の亡魂を賴みにするよりも、乘せて來る船を叩き沈めてしまふ方が最も手取り早い、確實な方法だ。穩健主義を自慢にしてゐる氷室も、これぢや駄目だと氣づいたらしかつた。
勇氣のある者は、自分から申出ることになつた。
大して危險のある仕事ぢやなかつた。それだけに、誰れも彼れも手を擧げた。
星が、キラ〱瞬いてゐる、暗いまゝに澄みきつた晩だつた。村の背後の國栗山から流れおりて來る風に、秋の音が囁

いてゐた。半田は着物が潮にぬれてもいゝ準備をした。鑿も、槌もねぢまわしも揃つた。

「よしか。」

「うむ、いゝ、いゝ。」

櫂を握つて、傳馬を岸から突きはなさうとしてゐると、町田が一緒に行くために、石ころの波止場をおはてゝ、走つて來た。

「君は、艪もよう押さんぢやないか。」もと船に乘つてゐた山口がぶつきら棒に突つぱなした。

「艪ぐらゐ押せるよ。押せるよ。」

「あんまり數が多いと邪魔ンなるばつかしだ。――傳馬がひつくりかへる。」

町田は、それを聞かずに、傳馬をドキンと搖がして、艫からとびこんだ。

「こらッ！　ちき生！」

小波が、舷側で、パチャ〱囁く以外、魚がはねる音一ツしなかつた。灯を消してしまつた發動機船が、鯨のやうに棧橋の沖に横たはつてゐる。それが、闇をすかしてボンヤリ見えた。

艪べそが乾いて、艪がギイ〱鳴つた。が、潮をかけると、靜かになつた。傳馬は、船に近づいて行つた。

町田は、興奮のために、わく〱した。彼は本當を云ふと、艪が押せなかつた。こんな小さい傳馬に乘つたのは生れて始めてだ。舟が搖れるたびに、足をさらはれさうになりながら、彼は素人らしいそ振りを見せまいと努力した。

「ひよつと、暴力團が出て來たら、俺れや柔道の手で、海ン中へ投げこんでやるよ。二人だつて、三人だつて……」

「大けな聲を出しちやいかん！」

山口が叱りつけた。

陸からトラックの爆音が、冷たい空氣を破つてひゞいてきた。村の灯は、一ツも殘らずすつかり消されて、沖からはまつ暗だつた。暗闇の中を、トラックは、ピケットに立つてゐる爭議團員をさらひにやつて來る。

「また、誰れかゞ引つぱつて行かれるぞ。」半田は艪を押しながら呟いた。「無理やりに工場に監禁するんだ。」

五六人も一緒にゐると、トラックは、知らん顔をして通りすぎてしまふ。が、一人ツきりであるのを見つけると、急にストップして、箱の上から暴漢がひらりと飛びおりて來る。そして、無二無三に、左右の手頸を摑んで、車の上に引きずり上げるのだ。箱の板金で、向うずねが、すりむけたつて、血が流れたつてかまやしなかつた。來なけれや×を貰ふ、といふ見幕だ。

陸の家並の向うで、悲鳴がした。「やられたツ！」と叫んだやうな氣がした。

「又、やつて居るぞ。」

「これだから、守勢一方で、おとなしくしとれや、しとるだけ、こつちがしめられるばつかしだ。」

彼等は傳馬に搖れながら囁いた。町田は、冷たさと興奮から、肩と腕がぶる／＼顫へて努力しても止めることが出來なかつた。

「ひかえ！　ひかえ！」

舳に立つてゐる一人が、聲に力を入れて低く囁いた。

發動機船の横ッ腹に傳馬がドシンとぶつかりさうになつたのだ。半田は、艪を引く方に力を入れた。傳馬は、發動機船とすれすれに丘へ廻つて、荷揚口の下へ横づけになつた。

舟方は眠入つてゐるらしかつた。高い工場に遮ぎられて、そこへは風も流れ落ちて來なかつた。山口は、せい伸びをして、手すりの鐵の棒を摑むと、機械體操のやうに、身輕るくする／＼と、船に這ひ上つた。そして、甲板から傳馬を振り

かへつて、何か合圖をした。町田には何が何だか分らなかつた。――彼は反感のやうなものを感じた。が、ほかの者は、合點の行つたうなづき方をした。

半田は早速、×と×を取つて發動機船の×××に×をあけた。×は、水に沈んでゐる赤ペンキから五寸ほど下に向つて×ちこまれた。

×で、×の柄頭を叩く音が、七百石くらゐの船全體にコツ〳〵ひゞき渡る。そのたびに町田はびく〳〵した。今にも、舟方と暴力團が起きて來さうな氣がした。半田は、しつかり舷側を掴まえてゐるやうに、ほかの者を叱り乍ら、かまはずに大きく振り上げた×に力をこめた。

雜音が絶えた夜の海の上を、×の音だけが遠くまでコツ〳〵ひゞいた。それは、海岸から村の中ほどにまで達するやうに感じられた。町田は、暴力團の出現を待ちかまへてゐた。出て來たくらゐにや、俺の力を皆に見せてやるんだ。半田は何囘も何囘も×をコツコツやつた。まだ×が十分あき切らないうちに、發動機の燒き玉をはづしに乘りこんでゐた山口が突然、甲板をドシンと鳴らしてとび出て來た。

「よし、よし。逃げろ、逃げろ！」

船頭が起きて、舵を握つて出て來たのだ。山口は、機械室へ這入りしなに、眠入つてゐる艫の樣子を伺つた。ランプが消されてそこはまッ暗だつた。しかし寢息の具合で、船頭が、かなりよく眠入つてゐることが感じられた。山口は、會社が組合員の働いてゐる船に荷物をよこさなくなるまで運送船に乘つてゐた。で、船の中の勝手は手に取るやうに、なんでものみこんでゐた。會社は、組合をぶつ潰す手始めに、船から荷物を取り上げて、組合員を失業さしたのだ。山口は、眞暗の中を手でさぐり〳〵發動機のところへしのびよつた。外でコツ〳〵やつてゐるのが、その機械室にまでひゞいて來る

――もつと靜かにやれい！　彼は、ひや〳〵するよりも、外にゐる奴等の無頓着さに、いら〳〵した。自分一人は、なるべく

く物音を立てんやうにと心がけながら、冷かに、ねぢまわしに力を入れた。艫の部屋で寝息がやんで、咳拂ひがした。

彼は、甲板にとび出た。しかし、そこから傳馬へとびこむ譯にや行かなかつた。小さい傳馬には、すきがない程、黒い影がいつぱいになつてゐるのだ。が、まご〱してゐる譯にや行かなかつた。彼は、いきなり、甲板から海の中へドブンと飛びこんだ。潮のしぶきが四方に散つた。町田はハツとした。が、すぐ、畜生！　と思つた。次の瞬間には、山口の頭は、水面に浮び出た。

「逃げろ！　逃げろ！」

半田は、もう少しだ、もう少しだ！　と頑張つた。が、ほかの者があはてゝ舷側を突きはなしてしまつた。

工場の陰をはなれると、山から流れおりて來る風が感じられた。いつのまにか汗ばんでゐる肌が、ひや〱した。彼等の背後には、罵りわめく船頭の聲が、海から工場の家並の方へひゞいてゐた。

山口は、ずぶぬれになつて手を取つて貰つて、傳馬に這ひ上つた。「うまくやつちやつた。うまくやつちやつた！」彼は亢奮して一人で繰りかへしてゐた。

けれども、あくる朝になつて、半田は、いつもの爆音で眠りを破られた。バツバツバババと靜寂を破つて發動機がひゞいて來る。

「や、や、やつぱし駄目だ。」彼は、びつくりしてはねおきた。「動いとる。やつぱし動いとる！」

「そんなこたない筈だぞ。どうしたつてそんなこたない筈だぞ。」山口は、眼をこすり〱不思議がつた。「俺れや×××をはづして來たんだ。あいつがなけれや、どうしたつて、機械が動かん筈なんだ。」

半田は、十二分ぢやないにしても、仕事は大丈夫成功したと思つてゐた。それで安心して眠つた。何しろ懸命にやつたことだ。それがうまく行つてゐないとは、失敗を大仰に叫びでもして心の空虚を胡魔化さんけれや、ゐたたまらない氣が

した。あたりまへにしてゐたんでは平氣でゐられなかつた。

霧を通してよく見ると、××の船は、死んだ鯨のやうに、水船になつて、背の一部を水面に浮べながら、ぢつとしてゐた。

動いてゐるのは別の船だ。

船は、一ッ×××でも、又、別の船があつた。それが×××でも、又、もう一ッ別の船があつた。恐らく「植松」は、船が一ッもなくなれば、また直して百姓をのせて來るだらう。

彼等が執拗な「植松」に叩きつけられるのは、今に始まつたことぢやなかつた。

半田は、頭蓋骨が四角になつて平つたい、だから、水を入れた茶碗を頭のてつぺんにのつけて走つたりするのに丁度いい植松の旦那を子供の時からよく知つてゐた。朝は、必ず、誰れも起きないさきに、工場の隅々まで見廻つて來る癖があつた。どの工場では繩を粗末にしてゐる。どこの道には大豆が二十粒ほどこぼしてあつた。そんな細かいことを克明に見屆けて來てやかましく云つた。で、皆なから恐がられてゐた。

その頭の大きい旦那のために畠を失ひ、田を失ひ、祖父から受けついだ家も屋敷も失つてしまつた百姓が四人や五人ではきかなかつた。

昔は、村の誰れも彼れもが、「植松」の歡心を買はうとペコペコしてゐた。

半田は、幼年時代に、どれだけ「植松」の坊つちやんのやうになりたいと熱望したかしれない。洋服を着て、町の學校へ行きたい。毎日毎日、とびまわつて遊びたい！　と。

だが今は、學校へ行けなかつたことを誇りに思つてゐた。

諸味をまぜながら唄ふ、單調で物悲しげな唄、樽屋が輪をしめる木槌のひゞき、[illegible]を蒸す麹の臭ひ、幼年時代にそれ

らの記憶が、まだ、半田の腦底にまざ〳〵と殘つてゐる。村の者は、希望のない、卑屈で陰慘な生活をしてゐた。父親は朝、夜があけるとすぐから、晩は暗くなるまで働き通して、なほ一家の者を食はすことが出來なかつた。そこで旦那の眼をぬすんで手早くお櫃から飯をすくひ出して手拭にくるんで持つて歸つた。それを母も姉も祖母も、最後の麥粒の一ツまで、がつがつ拾ひ食つた。

醬油倉の敷地になつてゐない空地は、田か畠だつた。醬油屋へ稼ぎに行けない女や老人がそれを耕した。そこは、醬油倉の蔭になつて日あたりが惡く、鹽氣がさし、麥も米も丈が伸びず、葉がよれ〳〵になつて、半作しか取れなかつた。大豆は毒のある煤煙をおびて全然育たなくなつてゐた。

それでも百姓は、祖先から受け繼いだ僅かな土地を失ふまいと沈みかけたボロ船にかぢりつくやうにかぢりついてゐた。しかし、工場がふえるに從つて、土地は、百姓の執着を無慘に踏みにじつて、その下敷きとなつた。

百姓は、醬油屋と同じやうに金持ちにならうと思つた。そして働いた。ヨボ〳〵の老人や子供も畠のおひを打ちに出た。

「植松」が名前を會社に書き直して、增資すると、ついでに百姓も株を持つことをすゝめられた。

彼等は、五株か七株を持つて、自分も醬油屋の仲間入りが出來たやうに喜んだ。拂込みの金を作るのに田や畠を抵當に書きこんで。

彼等は株券を盜まれんやうに、古疊の下にかくしておいた。そして昨日と同じやうに、來る日も來る日もボロ着物で働き働いた。「植松」は金を貸して置けば、そいつが放つておいても、ひとりでに稼いで吳れる。——百姓は、株に配當がつくのをたのしみに考へつくだけの手段を盡して、何回かの拂込を切りぬけた。

一株五十圓が全額拂込になつた。その次は配當だ。

だが、その次はどうなつたか？——盜まれんやうにかくしてあつた株券は、知らんまに、田や畠と一緒に取り上げら

れることになつてゐた。

「これやいかん！」彼等はすつかりかんにされてしまつた。「あゝ、惜しいことをした！」

それでも彼等は、「植松」に反抗する、すべを知らなかつた。

勞働者團結せよ！　奮起せよ！　それは、彼等にとつて猫に小判だつた。

だが、今は、×××ことはない。

醬油屋男は、――下つぱの奴ほど、ツン〳〵して「植松」に頭を下げなかつた。彼等は取られたものを奪ひかへすことを考へてゐた。半田は飯を懐に取つて歸らなけやならなかつた父親のためだけにでも、叩きつけられてぢつと忍んでゐる譯にや行かない氣がした。

四

十日、十三日、こんなビラが、電柱や、壁や、圍ひ板に、ベタ〳〵貼りさがされた。

「諸君！　諸君が、爭議團幹部に提出したる誓約書、――若し裏切りたる場合は、罰金として金五百圓也辨償可仕候也――なる一札は、法律的に全然無效です。諸君は絶對に自由です。五百圓の罰金を取るなど、いふことは、問題になりません。萬が一にも、そんなことを云ひ出せば、會社で引き受けて裁判手續をしてあげます。諸君は絶對に自由です。諸君は、諸君の自由意志によつて行動せらるべし！」

誓約書の內容が會社に知れる筈がなかつた。それが知れてゐる。スパイが這入つてゐやしないか、問題になり出した。

誰がスパイか？

ほゞ、目星はついた。しかし、斷定するのは危險だつた。

山口は、組合が出來た當初から、伯父や從兄と喧嘩ばかりやつて來た。

「植松」から、副支配人とか杜氏とか、そんな地位を與へられたのに名譽を感じて、從兄も伯父も「植松」の方についてゐる。山口は、親戚ぢゆうから、よつてかゝつてボロクソにこきおろされてきた。

「畜生！　なんと云はれたつてやめるもんか！」

彼は、泣き出したい孤獨や、よるべなさと戰ひながら、「植松」への牙をといできた。

「なんと云はれたつてやめるもんか！」

親戚は、彼には、鬼齒のやうなものだつた。邪魔になつて、邪魔になつて仕樣がない。が、引きぬくのはなか〳〵痛かつた。

母親はとつくに死んでなかつた。白髮を染めて殘つてゐる親爺は、親戚から云ひ含められても、すぐそれで息子にあたる性質ぢやなかつた。が、「主義者」の息子が呉れるものは、銅貨一枚さへ受取らなかつた。それで、息子の主義に絕對反對を表明した。年、一割二分五厘の配當がつく二十株の株券は、息子よりも大事がつてしまつてあつた。

親爺は、山口が組合へ行くのをごつ〳〵云つた。

「不用ごろめが、一寸なんぞしたら、すぐ船を休みくさつて！」彼は、棒切れを投げつけるやうに叱つた。

「俺らが死んだつて、この株券は、われにや、やれやせん。村へ寄附するか、得二郎にやるかするんぢや。」

「そんなもんはいらん。」

「阿呆めが！　馬鹿野郞！」親爺は呶なりちらした。「阿呆めが！　そんなことをぬかせ！　そんなことを云ふ精神がいかん！」

しかし、死んだあとで見ると、株券は息子にやるやうに、ちやんと名前を書きかへてあつた。山口は、それを卽座に賣

り拂つた。これは、つひ二ヶ月ばかり前のことだ。

從兄の得二郎は、第八工場の杜氏だつた。罷工が始つて工場の職工がゐなくなると、本社の工場課へ詰め切つてゐた。山口は、必要な時にだけ從兄を利用した。ところが、從兄も必要な時にだけ山口を利用した。それ以外には、道で出會しても會釋一ツしなかつた。

山口は、誰れがスパイか、それをさぐるつもりで得二郎に會つてみた。

「喧嘩を賣つたんはお前等ぢやないか。」

得二郎は、始終、會社が受身でやむを得ずやつたと云ひ廻すのに努力した。山口は、すぐ、「植松」からの命令によるのだと見てとつた。「だが、一度買つて出た限り、トコトンまでやるんが男だ。――勝つか、負けるか、死ぬか、生きるか。」

得二郎は、組合を叩きつぶさずにおかん「植松」の意氣込を暗示した。まるで、泥棒のくせに、威たけ高になつてゐる調子だ。

「やるがえゝ、なんぼでもやるがえゝ。しかし、傘もこの機會をのがしやせんだらうからな。」山口は笑つて見せた。

傘は㊤に對する競爭會社だ。それがストライキを機會に市場から㊤を驅逐しようとするのは、誰れでも想像し得るところだつた。

彼は、得二郎と喧嘩をしたり、口ぎたなく罵り合つたりするのが癖になつてゐた。相手によつて、そいつの顏を見ると喧嘩を吹きかけずにゐられない、むづ〳〵するものを感じる奴があるもんだが、彼と、得二郎は、お互ひにそれだつた。

それが、馴れこになつてゐた。

「お主等は、最初、十三ヶ條の要求條項を出しとつて、そいつを二た月もせんうちに、七ヶ條に割引しようと云ふとるさうちやないか。もう二た月もすれや、又、五ッ六ッ割引する氣かい。」

山口は、ぎくッとしたが、問題にしなかつた。

「ヶ條をへらすつて、誰れが……」と、彼は云ひかけた。

が、得二郎は遮ぎつた。從兄は、我がままな、相手を呆けの皮にした調子を聲にひゞかした。

「それや分つとる。ヶ條はへらしても、重要な要求は讓步せん――それや分つとる。（再び山口はギクッとした。云ひ方までが、いつか幹事會で打合はしたこと、そのまゝだからだ。）だが、お主等は、爭議をおつぱじめて、却つて、取れるものさへ取らずにしまつたんだぞ。つひ、四年前までは、一年に六十圓しか貰へなんだが、今は、一と月に四十圓も取れるやうになつとるぢやないか、それを……」

「誰れから讓步するなんてきいたい？」

得二郎は、さう驚くなよ、こんなこた、もうとつくに知りぬいとるんだ、といふ態度を見せた。

「ほんまに、誰れから讓步するなんてきいたい？」

得二郎は得意げに笑つた。

氷室が新地の藝妓に通つてゐることや、半田の憤慨癖や、學生上りの物好きな町田、別品の妻君の氣嫌を損じないやうにびく〳〵してゐる家原、眞劍に物事を考へてゐる五本の意見がいつも容れられない幹事會、……得二郎は、こんな爭議團内部のいきさつをべら〳〵喋り出した。

「お前のことだつて、お前よれや、俺の方がよう知つとるんだぞ。」彼は、にや〳〵笑つて、山口をいらいらささうとした。

「お前がなんぼえらさうに云ふたつて、お前の方は、こつちの從業員を切崩すどころか、あつちや、こつちやにダラけ切つて崩れかけとるんだ。」そこで得二郎は急に態度をかへて、「さうだらう？」と、輕蔑するやうにペコッと頸をすくめた。

山口は、誰れがスパイだかさぐるのはどうでもいゝ、意地にでも得二郎の言葉を一ッ一ッやりこめたくなつた。組合の惡口に對して、義務としてでも、反駁する必要があつた。が得二郎は遮ぎつた。山口は、のどもとまで言葉がこみ上げて來た。得二郎は從弟が、ものを云ひたげな身振をするのを見ると、すぐうは手に出て押さへつけた。

「裏切つた奴等がなんだい。あいつらは、石についとつた砂が風でころげ落ちたやうなもんぢやないか。」山口は、それを云はうと用意した。

が、それさえ、何故か、肉體的疲勞が加はつて元氣に云ふことが出來なかつた。それにつけて、彼は、ものを云ふのは口さきぢやない。背後に控えてゐる實力だと、そんなことを考へた。彼は、このまゝ、ぢつとしとれば、爭議團はしめられてしまふ氣がした。×××もなんでもいゝ、×××なけや駄目だと思つた。

彼は、話を半ばにして外へ出た。不愉快で仕樣がなかつた。「きつとあいつがスパイだ。」彼は心でそのスパイに目星をつけた。それは有能視されてゐる幹部の一人だつた。「きつとあいつだ。でなけれや、こつちの内幕をあゝなにもかも得二郎が知つとる筈がない！」

吹きながら、彼は、諸味をまぜる櫂の音がコボン／＼とひゞいて來る諸味倉の間を本部の方へ歩いた。

五

樽詰部の前に、洗はれた樽の群の絶壁が聳えてゐた。「かゞみ」を叩く込み槌が引つきりなしに濁音を立て、響く。大桶（コガ）の呑口からは生揚（キアゲ）の醤油がすさまじい勢ひで迸る。木栓を打たれた㊤印の九升樽は一列に蓆の上をころがつて行つた。第十一工場の職工達はその中で作業をつゞけた。そして夜業に這入つた。

火入れ釜は、朝ッからの酷使に堪え切れなくつて、呻り出してゐた。

杜氏は、やう／＼しつかり締ることになりだした百姓の「樽からげ」競爭を、能率增進に利用した。

からげ繩は、むやみにたぐられて、一挺の樽を中心に、電燈のかげで、蛇のやうにうねうねとうねを打つた。

遠くでタンクの諸味が醱酵氣にガバ／＼涌きかへる。トロッコは、レッテルを張つた樽を滿載して棧橋へ、利根のやうなコンクリートに車輪をこだましつゝ、全速力を出した。

池雲の亡靈は引つこんでしまつた。會社は全に對抗するため、逆立ちしても注文に應じ切る必要があつた。秋は、醬油の書き入れ時だ。夜業に特別割増しをつけた。寄宿舍に泊ることになる者には賞金を出した。

ほかの工場では、男衆は、工場の男部屋に雜居させられてゐた。五十疊の男部屋には百五十人が雜居した。疊一枚に三人の割だ。布團は綿が切れ、脂肪でぬる〳〵してゐた。枕は木枕だ。飯もお菜もまるで豚のやうだつた。安價に飼つておかれた。「植松」はそれを當然と思つてゐた。けれどもそれが、×××には、もつけの幸ひだつた。一ツの部屋に大勢がかたまつてゐるおかげで、彼等は本能的に團結することを覺えてしまつた。一つの思想も、一つの感情も、見るまに、××に燃え擴がつて行つた。それで、「豚ども」が手におへなくなつてしまつたのだ。

「植松」はそのことを考へた。そこで、新しい第十一工場には、男衆を雜居させないことにした。校長の保證つきばかりを傭入れた。そして、すべてを、バラ〳〵に通勤さした。

しかし、船が襲撃されだすと、男衆を村へかへすのが危險になつて來た。勞働者を團結させない、うまい方法だつた通勤制度が、今は、却つて、男衆を引こぬかれる心配になつてきた。そこで寄宿舍に泊ることになる者には賞金を出した。

池雲の話は、喋ることさえ、絕對禁止にした。

搾り槽から、諸味にふくらんだ袋が、かさだかくはみ出てゐた。仕上部の大桶は、整列した軍艦のやうだ。巡査上りの警戒係は、樫の棒を杖にしてのそ〳〵大桶のうしろを影のやうに通りすぎた。

「明日か、あさつてが、どうもあぶない。奴等は亂暴をやり出しさうですぞ。」彼は、杜氏の肩を引つぱつて囁いた。「皆に氣をつけさしといて下さい。」

「奴等になにが出來るもんですか。」

「もしもの場合に電話線が切斷されやせんですかなあ。」

裏切者は、支配人の云ふがまゝに、一日十六時間の勞働をした。——「今、稼ぎためとかにや、爭議がすんだら十六時

間も稼がれやせんのだ。」（！）袋をなでる指の先は、××が磨滅して血がにじみ出た。立ちづめの脚は棒になつた。晝間はまださうでもない。が、薄暗い電燈がちらつきだしてから、終業までが、晝間以上に長い。彼等は十時半の鐘を待ち焦れた。寄宿舍の他人の垢でつめたい布團の中で取る睡眠は、とても、筋肉の疲勞を恢復するどころぢやなかつた。「袋はぎ」が立つたまゝ居眠りをした。桃桶を使つてゐる少年は、眼がかすんで、諸味を移す袋の的を外した。そこら中が諸味の泥濘となつた。

若し彼等が、こんな過激な勞働をしなかつたら！――規定の八時間だけしか働かなかつたら！――その足らずは誰れが働くか？　うめいてゐる爭議團だ。爭議團が×つのだ。會社は×れて出なけやならなくなるのだ。

彼等は自分一人の利益を守つて爭議團に尻を向けた。今は、自己の安定と利益を守りつゞけるために、どこまでも支配人の云ふがまゝに十六時間でも十七時間でも働きつゞけなけやならなくなつた。一歩、讓歩し始めると、勞働者は、鼻の先に重い石を吊るされた牛のやうに、勝手に動けなくなるもんだ。しよつちゆう頭を下げてまわらなけやならない。

事務所から十時の時計がひゞいて來た。最後のひゞきがちいんと鼓膜に殘つた。その時、閉された北側の門にあたつてすさまじい××が起つた。彼等は、ハッとして棒立ちになつた。

つゞいて、遠い闇の中に火花が散つた。第二、第三の××と、積重ねた古樽が崩れ落る音響が連續した。

「爭議團だ！」

誰れかゞ遠くで叫びながら逃げて來た。

醬油袋や、叺や、桶が飛んだ。彼等は仕事を放り出して、反對側の室屋からの出口へ押しよせた。命がけの爭議團は、裏切つた彼等への怨恨晴しにやつて來たのだ。咄嗟に考へた。樽詰部からも、搾り場からも、諸味倉からも、職工が諸味だらけの顔をして南口へ殺倒した。㊤印の樽の絶壁は崩壊した。無數の空樽は、うごめく彼等の頭上をはねまわつた。

「騷ぐな、騷ぐな！」

彼等の群は、室屋からの出口へ突きあたつた。ところがそこは、警戒係に遮斷されてゐた。人間の奔流は、そこで堰き止められて、左右へ雪崩れだした。扉の外には、××を摑んだ、腕ッ節の强げな男が控えてゐた。いつのまに用意したのか、××××の警戒係は、席の下から、棍棒や、××や、××を引き出して來た。皆に一つ宛持たすためだ。

職工達は、それを見ると、××で躍りかゝられる冷たさを感じた。

山口は、高い墻壁を乘り起して、裏切者に撒いてやるビラを持ちこんだ。

彼は、繩梯子に石をつけて墻壁に打ちかけた。そして、それを傳つてよぢ登つた。電流の來てゐる針金が張られてゐるやしないか、墻壁の上にしやがんで彼はたしかめた。

眼の下に、それぞれ、繩梯子を懸命に放り上げる、ほかの者の姿が、闇の中にうごめいた。幹事會できめた以外の者までが來てゐる。石は、そこでも、ここでも、コンクリートの墻壁にはねかへされて、鋭い音を立て、うしろへとびかへつた。落ちた石を又下から放り上げる。山口は、これぢやすぐ發覺すると思つた。が、もつとこつそりやれ、と聲を出す譯にゃ行かなかつた。聲を出せば、なほ、より早く發覺するだらう。

はげしい亢奮が、下に動く彼等の動作に現れてゐた。彼等は、のるか、そるかの覺悟をしてやつて來た。おとなしくしてゐれば植松から〆られるばかりだ。「植松」には多くの味方が、丁度狼の一族のやうに、一匹が吠えると、皆ながごら〱押しよせて來る。網の目をめぐらしてゐる。山口は、それを、たび〱の經驗で知つてゐた。彼等の味方は、たゞ彼等だけだ。しかし彼等は、屠殺場の豚のやうに、唸いて、脚で宙を蹴るだけで〆られたくなかつた。狼の頭を一ッでもどやしつけてやりたかつた。

山口は、墻壁に手をついて、そこから內側へ、なるべく身輕るくと心がけながら、飛びおりた。

それでも、土の上に着くと、全身の體重が、頭の芯にずきんと來た。彼のあとから、すぐ横へ老人がころげ落ちた。老人は石炭粕を敷いた墻壁の下で蟬の拔け殼のやうに丸くなつた。山口は、自分も飛びおりた瞬間、丸くなつたやうな氣が一寸した。

「大丈夫かい？」

彼は、老人の方へ手をやつた。

老人は、唾を呑みこんで、丸くなつた背を伸した。それは仁右衞門だ。

「お互ひに今夜限りかも知れんて。」捨てるに捨て場がない爺さんと婆さんを持つてゐる仁右衞門は呟いて立上つた。「氣をつけてやらんことにや。」

山口は、あの娘の親爺までが、覺悟をきめてゐるのを感じて筋肉が引きしまる氣がした。昔の、懐へ飯をぬすんで來なければ、老いた親や幼い子供達に食はすことが出來ない陰慘な時代へ押しかへされるか。そいつを突き破るか。

彼は、今夜こそ、どうしたつて、うまくやらなけやならんと思つた。そのためなら、彼自身は×んだつていゝ。

裏切者は、波が一度引くと、暫らく勢ひづく用意をして、それから再びはげしくもれ上つて來る、その波のやうに押しかへして來た。こちらからも、負けない數の人間が、向うの群集の正面に狂亂しつゝなだれかゝつた。町田が先頭に立つてこぶ〳〵の×を×りまわした。波と波は、樽詰部の前の空地でぶつかり合つた。山口も仁右衞門も群衆と群衆に押しつぶされさうになりながら、渦巻く勢ひに、足が宙に浮き上つてしまつた。六尺や、柄や、棍棒が×つた。崩れ殘つてゐる樽の絶壁は、亂舞する人の頭上に顚覆した。惡罵と、悲鳴と咆哮の中に、群衆は、手と云はず、顔と云はず、胸と云はず、どこもかもを引つ掻き合つた。格鬪する頭から頭に、空樽が高い音を立てゝとびまわつた。山口はビラを撒くところぢやなかつた。

ビラを撒いたところで、群衆にそれを拾つて讀む餘裕はない。彼は、皆を止めやうとした。が、止めるどころぢやなか

つた。彼のびんたは、頭がねぢれる程、したゝかに何者かにガンとやられた。懐と脇の下にかさばつてゐる四角のビラは邪魔になつた。彼はそれを何度かに鷲掴みにして、うごめく群集の頭をめがけて投げつけた。バシ〳〵のザラ紙は、群衆の頭上でパッと散亂してひら〳〵とびまわつた。

ふと、彼は、突嗟に左へ押しころばされさうになつた。「糞ッ！」踏み堪えて押した方に視線をやつた。と、×××を振りかざしてやつて來る壯漢が暗い電燈のかげに見えた。人々はうしろへ身を引いた。道があいた。町田がふいに横からとび出て、その壯漢にとびついた。

「あぶないッ！」

山口はうしろから叫んだ。が、町田の耳には何も這入らなかつた。彼は、壯漢にからみつくと、團子になつて、人の肩と肩との間に、横倒しに倒れた。群衆は、その二人をめがけて、むさんこに四方から押しよせた。樽や、桶や、礫が兩方から風を切つて集中した。湯氣が立つてゐる頭の上で、ぶつかり合つた桶が、かゞみのある樽に負けて、ばらばらにくづれた。

山口は、汗と諸味の臭ひで犇めく渦に押されて、樽詰部の中へ押しつけられた。彼等は、裏切者どもに壓迫された。大桶と大桶の狹間で人間と人間がもみ合つた。天井からぶら下つてゐる電球は、笠と共に、長い竹の棒で叩き割られた。

そこは、まツ暗になつた。

そのとき、山口は、匂ひ高い生揚がプンと鼻に來たと思ふと、同時に、何か、はけしく横なでに來るものに突きとばされた。

「呑口がとんだぞ！」

彼は、ひよいと氣づいた。――大桶の下腹部からポンプのやうに迸る醤油にねらはれてづぶぬれになつてゐるのだ。濃厚な醤油が全身からしたゝつた。足もとは、見る〳〵醤油の×が溢れた。

隨分が這入つて眼がはしりだした。思はず手の甲で拭くと、そこにも醬油がついてゐたと見えて、なほ、ひどくぴり〳〵した。暫らくばしく〳〵やつてゐる眼に、向うの搾り場の五十燭光を遮ぎつて、半田や氷室の應援隊が、やつて來るのが映つた。

町田は、自分の前が、輝やかしい活氣に滿ちてゐる氣がしだした。彼は、自分が何をしてゐるか、殆んどそれを感じなかつた。たゞ、卑怯らしく皆からおくれないやうに！　それだけが頭に閃めいた。

割つた竹が足にひつかゝつて、上半身だけ前にのめりさうになる樽工場から、細長い漆喰の廊下をぬけて、彼は室屋の前へ來た。裾が、汗と醬油でべと〳〵脚に吸ひついた。彼は尻をからげた。廊下に、蜘蛛の巢がついた薄暗い十燭の電燈が屋根裏からぶらさがつてゐた。その下で、誰れかゞ彼に、はねとばされた。それは「來て吳れッ！」と叫んだ。彼は、すぐそこを馳せぬけた。

室屋の前には、一群の惡漢が何か身がまへてゐた。

恐ろしい叫びと××がひゞいて來る。仲間は、漆喰ひの廊下と、樽詰部の前の廣場からひた押しに押してゐた。××は室屋からひゞく××だ。

町田は、右手の闇の中に、二ッに折つた蓆を楯にして、少し腰をかゞめて何か叫んでゐる半田の蒼白い顏を見つけた。

「氣をつけろ！　あぶない、あぶない！」彼が追ひつくと半田はかう叫んだ。

「何だ。こんな時におぢ〳〵して居れるかい！」

町田は思つた。そしてわざと身を反らして室屋の方へ突き進んだ。××が連續した。それがどつかの樽にあたつて、ぶすく〳〵いゝ　くれを打拔く氣配がした。半田は、ほかの者と一緒に町田のあとにつゞいた。室屋の前の人のかたまりは、濃い闇と煙のかげで動搖した。町田は、奪ひ取つた六尺を素早く振り立て、馳せだした。が、ころがつてゐる四斗樽の手前で、

急に石にでもつまづいたもの、やうに全身から力を失つて横にばたりと倒れた。半田は、神經が通つてゐない、丸太が倒れるやうな倒れ方だと思つた。あとにつゞいてゐる者達は、町田がうなるのを聞いたが、その手足が、再びはね起きようと努力しないのを見た。××が××を打ちぬいたのだ。

半田は蹲んで町田を抱き上げた。

「どうした、どうした？」

彼は呼んでみた。返事はなかつた。

「どうした、どうした？　おい！」

彼は、町田の手と脚がぴり／＼×へてゐるのに氣づいた。眼も、頸も力がなかつた。×はだらりと垂れた。

「どうした、どうした　おい！」

傍を走りすぎる者達の中から生揚くさいぬれ鼠の山口が何か叫んだ。

「やられたんだ！」半田は答へた。

山口は、町田の顔の方へ蹲みかけた。が、ふと崩れだした暴漢の群が眼に這入ると、せわしげに、そのあとを追ひかけた。しかし、三四歩も行かないうちに、彼も、樽のところで「呀ッ」とひつくりかへつた。

半田は、血でべと／＼に染つた手を山口の方へ持つて行つた。彼は、山口も町田も、仁右衛門の娘が好きだつたことを思ひ出した。

「どこもかも美人ぢやないか、俺れや、あんな勞働者の臭ひがする娘が好きなんだ！」

ふと、それを思ひ出した。

六

かうして彼等は、命がけだつた。
どんなことをしても××を××して見せる。さういふ意氣込だつた。彼等は、有るだけの力も根も使ひつくした。
しかし、「植松」の方に持つてゐる力は、もつと〳〵彼等よりは強かつた。「×××の尻尾」や、×のやうな靴にゲートルを卷いた一群がやつて來た。
そして、彼等は、ペシヤンコに××××されてしまつた。

七

二ケ年が經過した。
煤煙に縺れ合つて、騷然たる樽屋の木槌のひゞきが引つきりなしに空へ立ち上つた。荷揚の掛聲がひゞく。發動機の爆音、トロツコの轟きなどが連續する。
すゝ黑い屋根の醬油倉は、そのすゝ黑さを一層黑くしてゐた。それは一日でも休めば損のやうに、毎日々々大豆の蒸せる湯氣を吐く。火を入れる醬油の臭ひをまき散らす。人家は、山の麓と、段々になつた丘の傾斜地へ追ひやられてゐた。
半田は刑務所を出て、村へかへり、そこのバラツク建ての一つに住んでゐた。煤煙が、風に吹きつけられてそのバラツクへやつて來る。
「植松」の四角の頭は、周圍が二三寸も大きくなつたやうに見えた。もう六十歲を過ぎてゐるだらう。
しかし、元氣は、若い時分とちつとも異らなかつた。工場を見廻る癖は、雨が降つても火が降つてもやめられなかつた。
專門の說教坊主が工場に這入つてゐた。毎月一回づゝ、浪花節と活動寫眞をやつた。見に來た者には、折詰をやつた。㊤印を染めぬいた手拭を只で呉れてやつた。
塵が積ると富士山のやうになる。同樣に、百萬圓も一錢銅貨を一枚づゝ集めたものである。浪花節語りは、それに節を

つけて呻つた。

金の成る木——そんな映畫が白い幕に映つた。おとぎ話のやうに、桃か林檎になつた果實が黄金でゝもあるのかと思ふと、さうぢやなかつた。「辛抱強き(木)」「小言を云はなき(木)」「働きずき(木)」そんな木に金がなるといふのだ。

しかし、工場の仕事はひどく苦るしくなつてゐた。男衆は失業しなくつてよかつた。爭議に加はつた者のやうに、麥飯一粒さへなくなつて村を立退かなくつてもよかつた。刑務所に這入らなくつてもよかつた。

しかし、工場では、作業分量かふやされた。一日十六石の諸味取りが二十石に、古樽胴洗ひ千五百本が二千本に。

そして暮しは昔に逆戻りした。女房や子供が石炭の燃し粕の中から、灰と塵埃に鼻の孔を黒くしてコークスを拾つて來なければ、焚きものがなかつた。割増しは、半田や、仁右衛門や、氷室などが警察へ引つぱつて行かれると共に徹廢されてしまつた。暫らくすると「しろと」「くろと」の區別がついた。五ケ年以上工場で働いた者でなければ「くろと」ぢやないことになつた。すると、「くろと」の部類に這入る者は、全勞働者の四分ノ一にも足りなかつた。「しろと」の百姓上りや漁夫上りは、昔の、「〇・七」に賃銀を引下げられてしまつた。これや、一杯×はされた！

始めて彼等は、背骨をどやされて、ゴクツとした。

「阿呆喰つた。すつかり旦那のうまけな口車にだまされとつた！」

彼等は、足を踏んで口惜しがつた。

「こんなに二割も三割も賃を下げるんなら、あの時、×××に肩を持つて一緒に×××××をやつたるんぢやつた！　馬鹿々々しい！」

半田は、物悲しげな淋しい顏で、廢墟でも見るやうに、傾斜地のバラックから、村を見おろしてゐた。彼には口がなかつた。以前、一緒に働いた者達は、殆んど殘つてゐなかつた。音信も絶えた。どこでどうしてゐるか、それさえ分らなか

つた。食ふものもなかつた。しかし彼は村を去りたくなかつた。どこまでも踏みとゞまつてゐたかつた。

彼の目の下には、巨大な工場が增築されてゐた。十一工場は、それと較べると、古くすゝけて小さくなつたやうだ。

海岸には新しい埋立地があつた。東側の丘は、そのために、半分掘りこがされ背中から眞二ッにずさりと切取られてゐた。

半身の丘と、新しい赭土の埋立地は、村の感じをすつかり新開地のやうにかへてしまつた。垢に染つた黄色い着物の女房や子供の群が、そこの捨てられた石炭粕にたかつて、かきさがし、つゝいて何か手籠へ拾ひこんでゐるのだ。それらは石炭粕を捨てる荷車がやつて來ると、直ちに方々から雀のやうに集つて來た。そして喇つたりわめいたり、コークスを奪ひあつたりした。毎日、それがつゞいた。一時、散つたかと思ふと、又荷車がやつて來る。すると、又、彼等はどつからか雀のやうに集つて來た。

稙松は、「ならず者」どもが刑を云ひ渡された時、雅量を見せるつもりで氣の毒げな顏をした。なるべく輕くしてやりたい、そんなことも云つた。——しかし、「ならず者」が村を去つて行くと胸がすつとした。くつろいだ。それで、再び、自分の意のまゝに何でも出來るやうになつた。一人も文句を云ふ奴はなくなつてしまつたのだ。

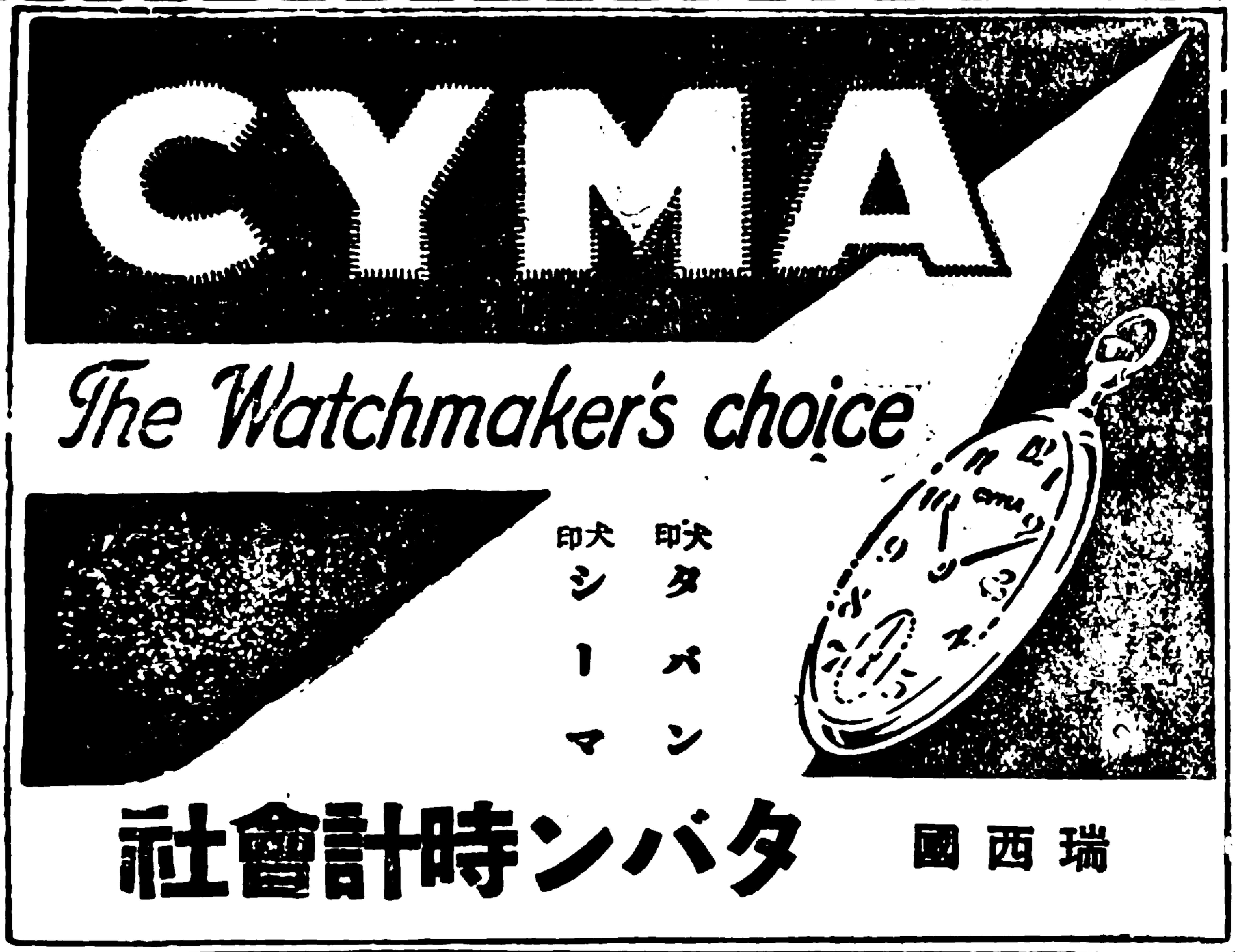
ある朝、彼は、工場を見廻つた。男衆が石炭がまだ燃え切らないうちに、窗から掻き出して、わざとコークスばかりを拵へてゐるのを埋立地で發見した。

見る〳〵彼の顏面の筋肉は引き締つて來た。眼が險はしくなつた。右の手に握つてゐる櫻の杖で石炭粕をはねかへし、つゝきだした。彼は、男衆どもが自分の眼を胡魔化さうとしてゐると取つた。そして、ひどく、自分の誇りを踏みにじられた。

「おい、誰れが、これを拾ふてもえいと云ふた？」

太い、はゞのある聲で、彼は、ここでごそ〳〵してゐる女房を呶鳴りつけた。

「皆な、誰れでも拾ひよるんで……」女房は、たぢ〳〵した。
「誰れが拾ふてもえいと云ふたんだ？」
「かうして皆が拾ひよるからにや、お上から許しがあつたんでがせう。」ほかの女房が云つた。
「うそ云へ！　貴樣ら、親爺とぐるになつてガラばかし拵へとるんだ。さうぢやらう。」
「いゝえ。」
「うそ云へ！　わしをだまさうとしたつて、この眼はだまされやせんぞ。ぐるになつて石炭をごま化しとるんぢやらう。」
女房達は、一つところにかたまつて評定を始めだした。彼女等には、おびえた表情もなかつた。驚いた表情もなかつた。むしろ、反抗的な毒々しい表情が現れてゐた。籠に拾ひこんだガラを、埋立地へ、腹立たしげに放り出す者もあつた。「わしをだまさうとした、だつて、——へへ、こつちをだました人は旦那ぢやねえか！」そんな聲が彼女達の中からもれてきた。
それからまもなく騷動が持上つた。
彼等は、焚きものにコークスを拾はさないといふのは我慢した。しかし、親爺と女房が共謀してコークスばかしを拵へてゐるといふのには、我慢がならなかつた。まるで彼等を泥棒扱ひにしてゐるとしか取りやうがないぢやないか！
彼等は、旦那から油を搾つてやらねばならんと、いきまきだした。
「また、ストライキをやらうつてんだな。——なんとかならんか。なんとか、うまくならんかな。」些細なことから思ひかけぬ騷動が持上つたのにびつくりした植松は、身内がぞつとして、重いものがのしかゝつて來たやうに腕がぶる〳〵顫へだした。
「なんとかならんか。なんとか、うまくならんかな。——何べん叩きつけたつて、こりることを知らんひつこい奴等だなア！」
彼の顫へは、次第に、肩から脚の方にまで擴がつた。



定價	送料
一冊 八十錢	參錢
六冊 四圓八十錢	送料共
十二冊 九圓六十錢	同

毎月一回一日發行

△但し前表は普通號のみの定價にて年四回發行の特別號は定價送料共不同に付其の都度別に申受けます

△外國行送料は普通號一冊に付十六錢申受けます

△御購讀は前金にて可成振替貯金を御利用下さい　郵券代用は一割増の事

△集金郵便で誌代取立希望の方は其旨御通知願ます

廣告料

△御照會次第詳細御回答申上ます

昭和四年十一月十八日印刷
昭和四年十二月一日發行　（禁轉載）

編輯兼發行人　島中雄作
印刷人　竹内喜太郎　東京市牛込區榎町七番地
印刷所　日清印刷株式會社

東京市丸ノ内ビルヂング五八八區
中央公論社
電話丸ノ内 二〇二〇六 二七五七 番
振替東京三四番
同　長野三二〇五番


内面艶消
新マツダ
もちよく明るく
電氣がお徳
新マツダ
瓦斯入電球

GHUO KORON (*The Central Review.*)
By The Chuo Koron Sha Publishing Co, Published Monthly
Terms of Subscription : Annual subscription yen 12.48, Single copy 80 sen including postage. Entered at The Post Office at Los Angeles, Cal. U.S.A. as second-class mail matter.

